

二宮遺跡

一般国道179号線(津山市二宮地区)改良
事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告

1978. 9

岡山県教育委員会
文化課

二宮遺跡

序

岡山県北の美作地方においては、中国縦貫自動車道路建設、開通を契機として各種の関連整備開発事業が続出し、これに伴う埋蔵文化財の発掘調査件数も当初（昭和44年）の約5～6倍の数値をしめし、年々増加の傾向にあります。

遺跡の所在する津山市は、東西に流れる吉井川の清流を中心とし南北を山にかこまれて、豊かな緑と自然をふんだんにもった城下町であり、とりわけ二宮地区内には昭和51年3月に国の史跡指定を受けた美作国最大規模を有する前方後円墳美和山1号墳（胴塚）を中心とする美和山古墳群が知られております。

今回の調査はこの古墳群南側を中心に実施いたしましたが、その結果、新たに多くの知見を加えることができ、美和山4号墳の存在を明らかにし、墓域がさらに南に広がることを確認いたしました。

その成果は、かならずしも充分に意を尽しきれませんでしたが、今後の研究、文化財の保護と活用の一助になれば幸いと存じます。

なお、現地調査の実施、報告書の作成にあたっては土地所有者の方々をはじめ、文化財保護対策委員会、津山地方振興局建設・用地課、学識経験者各位、津山市教育委員会、津山市開発公社、ならびに多くの方々のご協力と指導を得ることができましたことに対して深く感謝いたします。

昭和53年9月

岡山県教育委員会

教育長 佐藤 章一

例　　言

- 本書は、一般国道179号線改良事業に伴い岡山県教育委員会が実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査報告である。二宮遺跡は津山市二宮、山西・桜町に所在する。
- 調査は国道179号線調査委員会が担当し、第1次調査を昭和50年12月1日～昭和50年12月27日にかけて葛原克人・栗野克己、第2次調査を昭和51年4月1日～昭和53年4月8日にかけて、高畠知功・二宮治夫が実施した。
- 二宮遺跡埋蔵文化財保護対策委員会の設置については、昭和42年5月岡山県考古学研究者の会からの申し入れに基づいて、対策委員に下記の諸先生をご委嘱し、調査にあたっては対策委員各位の助言を受けて実施した。記して謝意を表したい。

津山みのり学園 植月 杜介（昭和50年12月～）
岡山大学教授 近藤 義郎（昭和50年12月～）
鏡野中学校教諭 角南 勝弘（昭和50年12月～）
院庄小学校教諭 土居 徹（昭和50年12月～）
津山高等学校教諭 宗森 英之（昭和50年12月～）
(アイウエオ順)

- 報告書の作成は昭和53年4月1日～昭和53年9月30日まで岡山県文化課分室（岡山市西古松265）にて行つた。主に調査を担当した高畠知功・二宮治夫が行い、第1章、第4章第1節～第6節、第5章第1節～3節、6章を高畠、第2章、第4章第7節、第5章第2・3節を二宮、第3章を葛原克人が執筆分担した。遺構・遺物の実測、製図は分担に準拠し担当者が行った。なお、遺構・遺物の実測、製図に奥 和之、小田垣孝佳、島崎東、立石盛詞、浜本早苗・土器の復元整理は瀬戸文子、坪井和江、日笠月子・写真撮影は鈴木重信・原稿の浄書は近藤友子、塙見康代の援助を得た。実測図、写真等、また、出土遺物は文化課分室にて保管している。なお、C14測定については日本アイソトープ協会、並びに京都産業大学山田治氏の御厚意によるものである。
- 報告書に用いる時代区分は一般的な政治区分に準拠し、それを補うために文化史区分と世紀を併用した。
- 遺跡の位置図は、建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の25000分の1地形図を複製したものである。
(承認番号昭53中復、第198号)周辺遺跡図は岡山県教育委員会による岡山県遺跡地図に準拠する。
- 本書に用いたレベル高はすべて海拔高であり、方位は第1図を除きすべて磁北である。
- 昭和50、51、52年度の調査実施体制を下記にあげる。

一般国道179号線に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、岡山県文化課、津山教育事務所が任を負い、担当調査員は調査終了（昭和53年3月）までは津山教育事務所兼務として調査にあたり、その後は兼務を解かれて、同53年9月まで岡山県西古松文化課分室において報告書の作成に従事した。

昭和50年度		昭和51年度	
文化課		文化課	
課長	小林 孝男	課長	小林 孝男
参考事	西口 秀俊	参考事	西口 秀俊
文化主幹	水田 稔	主幹	水田 稔
主任	光吉 勝彦	文化財二係長	光吉 勝彦
文化財保護主査	葛原 克人	津山教育事務所	
文化財保護主事	栗野 克己	所長	菱川 豪
津山教育事務所		次長	吉田 賢吾
所長	菱川 豪	庶務係長	田中 篤周（事務取扱）
次長	吉田 賢吾	主任	大山 行正

主幹	田中篤周	主事	山本政昭
主任	大山行正	文化財保護主事	高畠知功(文化課本務)
主事	山本政昭	主事	二宮治夫(文化課本務)

昭和52年度

文化課

津山教育事務所

課長	飛田真澄	所長	佐々木敏文
課長補佐	塙見篤	次長	光嶋尚之
主幹	小川佳彦	庶務係長	森本直(事務取扱)
文化財二係長	光吉勝彦	主任	大山行正
文化財保護主事	正岡陸夫	主事	山本政昭
		文化財保護主事	高畠知功(文化課本務)
		主事	二宮治夫(文化課本務)

9. 発掘調査を実施するについては、津山市教育委員会、津山市開発公社、津山地方振興局建設、用地課の諸機関に協力、援助を受け、また発掘調査に同意され便宜を与えられた地権者の方々に感謝いたします。なお、現地での発掘調査に携わった作業員の方々にも記して謝意を表します。

<作業員名>

池亮一 池田康広 江原秀国 江原良貴 小田垣孝佳 鍵本始二 金島脩吉 金谷泰人 柚木守 黒崎寿
 小林隆行 高橋一郎 高山和市 立石盛詞 富樫治 中島俊郎 中山彰 中山邦男 早瀬啓也 福井亮
 福田博雅 牧寛一郎 松本年晴 松本光伸 光永真一 宗安頼伸 脇山好彰 内田秀子 内田文子
 片山克子 片山須恵子 神橋豊子 黒田恒子 後藤貞子 瀬戸文子 高橋衣子 高橋清子 高山喜美恵
 高山深雪 土井喜美子 土井智枝子 橋本琴枝 橋本真砂子 原口シゲノ 日笠月子 牧清子

国道バイパス道路文化財調査委員会則

(設置)

第1条 国道179号バイパス道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施するため、国道179号バイパス道路文化財調査委員会（以下「委員会」という）を設置する。

(目的)

第2条 委員会は国道179号バイパス道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施し、建設工事計画の基礎資料の提供と文化財記録保存を行うことを目的とする。

(事業)

第3条 委員会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

- 1) 国道179号バイパス道路建設用地内の埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 2) その他目的を達成するために必要な事業。

(組織)

第4条 委員会の委員は掲げる者のうちから委員長が委嘱する。

- 1) 学識経験者。
- 2) 関係行政機関職員。

(委員長)

第5条 委員会には委員長及び副委員長を置く。

- 1) 委員長 1名
- 2) 副委員長 1名
- 3) 委員長は岡山県教育庁文化課長をもってあてる。副委員長は委員のうちから委員長が委嘱する。
- 4) 委員長は委員会を代表し、会務を常理する。
- 5) 副委員長は委員長を補佐し、委員長に事故ある時はその職務を代行する。

(任期)

第6条 委員の任期は調査が完了するまでとする。
ただし、それぞれの機関等の代表たる委員は、その職務にあたる期間に限るものとする。

(会議)

第7条 委員会は委員長が、招集する。
2 委員会は次の事項について審議する。
1) 会則の制定及び改廃に関する事項。
2) 調査に関する事項。
3) その他重要な事項。

(事務局)

第8条 委員会の事務を処理するため岡山県津山教育事務所に事務局を置く。
2) 事務局長は委員長が委嘱する。

(監査)

第9条 委員会に会計監査を実施するため監事を置き、その監事は委員長が委嘱する。

(補足)

第10条 この会則に定めるものゝほか委員会の運営に関する必要な事項は委員長が定める。

(附則)

第11条 この会則は、昭和50年12月1日から実施する。

国道179号線（二宮地区）文化財調査委員会

役名	氏名	所嘱
委員長	小林 孝男	県教育庁文化課長
副委員長	菱川 豪	津山教育事務所長
委員	土居 徹	岡山県遺跡保護調査団
	宗森 英之	"
	西口 秀俊	県教育庁文化課参事
	葛原 克人	" 文化財保護主事
	栗野 克己	" "
事務局長	吉田 賢吾	津山教育事務所次長
	田中 篤周	" 主幹
	大山 行正	" 主任
監事	河本 峰雄	津山振興局建設部参事
"	光吉 勝彦	県教育庁文化課主任

総 目 次

第1章 調査の経過.....	18
第2章 歴史・地理的環境.....	19
第3章 第1次調査の概要（昭和50年度）.....	22
第4章 第2次調査の概要（昭和51年度）.....	25
第1節 蔵屋敷地区.....	34
第2節 荒神元地区.....	37
第3節 宮峪地区.....	66
第4節 東宮峪地区.....	71
第5節 岡の山地区.....	78
第6節 寺前地区.....	156
第7節 西宮峪地区.....	158
第5章 第2次調査の概要（昭和52年度）.....	172
第1節 寺東地区.....	172
第2節 岡東地区.....	175
第3節 天王地区.....	233
第6章 まとめ.....	257

表 目 次

表-1 発掘調査工程表（作成：高畠）.....	18
表-2 周辺遺跡対照表（作成：高畠）.....	21
表-3 遺構一覧表（作成：高畠）.....	28
表-4 荒神元C・宮峪地区建物計測値一覧表（作成：高畠）.....	62
表-5 荒神元C・宮峪地区各柱穴出土遺物一覧表（作成：高畠）.....	69
表-6 岡の山A地区袋状ピット計測値一覧表（作成：二宮）.....	109
表-7 岡の山B地区建物計測値一覧表（作成：高畠）.....	135
表-8 近世土壤墓一覧表（作成：高畠）.....	144
表-9 各地区出土土錐計測値一覧表（作成：二宮）.....	170
表-10 岡東地区建物計測値一覧表（作成：高畠）.....	231

図 目 次

第1図 二宮遺跡の周辺遺跡図（作成：高畠）.....	20
第2図 岡の山B地区南北トレンチ土層断面（実測：葛原・製図：浜本）.....	23
第3図 天王D地区第2トレンチ土層断面（実測：葛原・製図：浜本）.....	24
第4図 天王D地区出土石製鎧帶（実測・製図：高畠）.....	24
第5図 二宮遺跡周辺地形図（作成：高畠・製図：浜本）.....	26
第6図 二宮遺跡調査前・後の比較図（作成：高畠）.....	27
第7図 蔵屋敷・荒神元・宮峪地区遺構分布図（実測・製図：高畠）.....	33
第8図 №7・228建物（実測・製図：高畠）.....	34
第9図 №229柱穴列（実測・製図：高畠）.....	34
第10図 蔵屋敷地区出土遺物（実測・製図：高畠）.....	35

第11図	蔵屋敷地区出土遺物（実測・製図：高畠）	36
第12図	No.1 溝出土遺物（実測・製図：高畠）	39
第13図	No.2 溝出土遺物（実測・製図：高畠）	39
第14図	No.3 土壙（実測・製図：高畠）	40
第15図	No.4 井戸（実測・製図：高畠）	41
第16図	No.4 井戸出土遺物（実測・製図：高畠）	42
第17図	No.5 井戸（実測・製図：高畠）	44
第18図	No.5 井戸出土遺物（実測・製図：高畠）	46
第19図	No.6 柱穴列（実測・製図：高畠）	47
第20図	No.6 柱穴出土遺物（実測・製図：高畠）	47
第21図	荒神元A地区出土遺物（実測・製図：高畠）	48
第22図	荒神元B地区全体図（実測・製図：高畠）	49
第23図	No.9 土壙（実測・製図：高畠）	50
第24図	No.11 袋状ピット（実測・製図：高畠）	51
第25図	No.12 土壙墓（実測・製図：高畠）	52
第26図	No.12 土壙出土遺物（実測・製図：高畠）	52
第27図	No.13 土壙（実測・製図：高畠）	53
第28図	No.16 土壙（実測・製図：高畠）	53
第29図	No.14 祠土台（実測・製図：高畠）	54
第30図	No.17 土壙（実測・製図：高畠）	45
第31図	No.18 鳥居（実測・製図：高畠）	55
第32図	No.230 住居址（実測・製図：高畠）	55
第33図	荒神元B地区出土遺物（実測・製図：高畠）	57
第34図	荒神元B地区出土遺物（実測・製図：高畠）	58
第35図	荒神元B地区出土遺物（実測・製図：高畠）	59
第36図	荒神元B地区出土遺物（実測・製図：高畠）	61
第37図	荒神元C地区22線土層断面（実測・製図：高畠）	63
第38図	No.19 建物（実測・製図：高畠）	63
第39図	No.20 建物（実測・製図：高畠）	63
第40図	No.21 建物（実測・製図：高畠）	64
第41図	No.24 建物（実測・製図：高畠）	64
第42図	No.22（実測・製図：高畠）	64
第43図	No.25 土壙（実測・製図：高畠）	64
第44図	No.23 建物（実測・製図：高畠）	65
第45図	No.26 建物（実測・製図：高畠）	66
第46図	No.27 建物（実測・製図：高畠）	66
第47図	No.28 建物（実測・製図：高畠）	67
第48図	No.231 柱穴列（実測・製図：高畠）	67
第49図	宮峪地区出土遺物（実測・製図：高畠）	67
第50図	荒神元C地区・宮峪地区遺物出土柱穴（実測・製図：高畠）	68
第51図	No.22 建物・No.24 建物の関連図（実測・製図：高畠）	69
第52図	東宮峪地区トレンチ図（実測・製図：高畠）	71
第53図	東宮峪A地区土層断面（実測・製図：高畠）	72
第54図	東宮峪B・C・D・E地区土層断面（実測・製図：高畠）	73

第55図 東宮船地区トレンチ断面（実測・製図：高畠）	73
第56図 東宮船A地区トレンチ出土遺物（実測・製図：高畠）	74
第57図 東宮船B地区トレンチ出土遺物（実測・製図：高畠）	75
第58図 東宮船C地区トレンチ出土遺物（実測・製図：高畠）	75
第59図 東宮船C地区トレンチ出土遺物（実測・製図：高畠）	76
第60図 東宮船D地区トレンチ出土遺物（実測・製図：高畠）	76
第61図 東宮船E地区トレンチ出土遺物（実測・製図：高畠）	77
第62図 岡の山地区遺構分布図（作成：高畠）	79
第63図 岡の山A・北地区北土層断面（実測・製図：高畠）	80
第64図 岡の山A・A北地区袋状ピット配置図（実測・製図：二宮）	81
第65図 №29袋状ピット（実測・製図：二宮）	82
第66図 №29袋状ピット出土遺物（実測・製図：二宮）	83
第67図 №29袋状ピット出土遺物（実測・製図：二宮）	84
第68図 №30袋状ピット（実測：高畠・二宮・製図：二宮）	85
第69図 №31袋状ピット（実測・製図：二宮）	85
第70図 №32袋状ピット（実測：高畠・製図：二宮）	86
第71図 №33袋状ピット（実測・製図：二宮）	86
第72図 №30・31・32・33・34袋状ピット出土遺物（実測・製図：二宮・高畠）	87
第73図 №34袋状ピット（実測・製図：二宮）	88
第74図 №35袋状ピット（実測・製図：二宮）	89
第75図 №35袋状ピット出土遺物（実測・製図：二宮）	90
第76図 №42袋状ピット（実測・製図：二宮）	91
第77図 №42袋状ピット出土遺物（実測・製図：二宮）	92
第78図 №42・45袋状ピット出土遺物（実測・製図：二宮）	93
第79図 №45袋状ピット（実測：高畠・製図：二宮）	94
第80図 №217袋状ピット（実測・製図：二宮）	94
第81図 №218袋状ピット（実測・製図：二宮）	95
第82図 №219袋状ピット（実測・製図：二宮）	95
第83図 №217・218・219・222・223袋状ピット出土遺物（実測・製図：二宮）	96
第84図 №220袋状ピット（実測・製図：二宮）	97
第85図 №217・219・220袋状ピット出土遺物（実測・製図：二宮）	98
第86図 №221袋状ピット（実測・製図：高畠）	101
第87図 №223袋状ピット（実測・製図：高畠）	101
第88図 №222袋状ピット（実測・製図：高畠）	102
第89図 №222袋状ピット出土遺物（実測・製図：高畠）	102
第90図 №225地下式横穴（実測・製図：二宮）	103
第91図 №224住居址（実測・製図：二宮）	104
第92図 №232住居址（実測・製図：二宮）	105
第93図 №227土壤（実測・製図：二宮）	106
第94図 №224・232住居址出土遺物（実測・製図：二宮）	108
第95図 №37住居址（実測・製図：高畠）	110
第96図 №37住居址出土遺物（実測・製図：高畠）	111
第97図 №37住居址上面埴輪円筒棺（実測・製図：高畠）	112
第98図 №37住居址上面埴輪円筒棺（実測・製図：高畠）	113

第99図	N _a 38土壙（実測・製図：高畑）	114
第100図	岡の丘B地区周溝内出土遺物（実測・製図：高畑）	114
第101図	N _a 40耳塚関連遺構（実測・製図：高畑）	115
第102図	N _a 41古墳周溝（実測：高畑・二宮・製図：高畑）	116
第103図	N _a 41古墳出土遺物（実測・製図：二宮）	117
第104図	N _a 41古墳推定復元図（作成：高畑）	118
第105図	N _a 39建物（実測：高畑・二宮・製図：高畑）	119
第106図	N _a 66建物（実測・製図：高畑）	119
第107図	N _a 43柱穴列（実測・製図：高畑）	119
第108図	N _a 39建物出土遺物（実測・製図：二宮）	119
第109図	N _a 46建物（実測・製図：高畑）	120
第110図	N _a 68建物（実測・製図：高畑）	121
第111図	N _a 47建物（実測・製図：高畑）	122
第112図	N _a 69建物（実測・製図：高畑）	122
第113図	N _a 49建物（実測・製図：高畑）	123
第114図	N _a 79建物（実測・製図：高畑）	124
第115図	N _a 48・49建物（実測・製図：高畑）	124
第116図	N _a 48・49建物付近柱穴出土遺物（実測・製図：高畑）	124
第117図	N _a 51土壙（実測・製図：高畑）	125
第118図	N _a 51土壙出土遺物（実測・製図：高畑）	125
第119図	N _a 78土壙（実測・製図：高畑）	126
第120図	N _a 233 土壙（実測・製図：高畑）	126
第121図	N _a 55地下式横穴（実測・製図：高畑）	127
第122図	N _a 55地下式横穴出土遺物（実測・製図：高畑）	128
第123図	N _a 234 土壙（実測・製図：高畑）	128
第124図	N _a 54土壙（実測・製図：高畑）	129
第125図	N _a 54土壙出土遺物（実測・製図：高畑）	130
第126図	N _a 57土壙（実測・製図：高畑）	130
第127図	N _a 58建物（実測・製図：高畑）	131
第128図	N _a 64建物（実測・製図：高畑）	132
第129図	N _a 63建物（実測・製図：高畑）	132
第130図	N _a 59建物（実測・製図：高畑）	133
第131図	岡の丘D地区柱穴内出土遺物（実測・製図：高畑）	133
第132図	N _a 50井戸（実測・製図：二宮）	134
第133図	N _a 70建物（実測・製図：高畑）	136
第134図	N _a 56建物（実測・製図：高畑）	136
第135図	N _a 61土壙（実測・製図：二宮）	137
第136図	B地区近世土壙墓（1～18）（実測・製図：高畑）	139
第137図	B地区近世土壙墓（19～36）（実測・製図：高畑）	140
第138図	B・C地区近世土壙墓（43～52）（実測・製図：高畑）	141
第139図	C・E地区近世土壙墓（54～67）（実測・製図：高畑）	142
第140図	D・E地区近世土壙墓（68～81）（実測・製図：高畑）	146
第141図	N _a 53土壙（実測：小田垣・製図：高畑）	146
第142図	岡の丘D地区造成土内出土遺物（実測・製図：高畑）	147

第143図	岡の山B・C・D地区近世墓出土遺物（no 4・25・37・41・43・66・111）（実測・製図：高畠）	148
第144図	岡の山B・C地区no45・46・47・74近世墓出土遺物（実測・製図：高畠）	149
第145図	岡の山C・D・E地区近世墓出土遺物（実測・製図：高畠）	150
第146図	岡の山建物全体図（作成：高畠）	152
第147図	岡の山溝と建物（成作：高畠）	154
第148図	寺前B地区出土遺物（実測・製図：高畠）	156
第149図	寺前B地区出土遺物（実測・製図：高畠）	156
第150図	寺前C地区東グリッド出土遺物（実測・製図：二宮）	157
第151図	西宮峪・天王A・B地区遺構分布図（実測：二宮・製図：浜本）	159
第152図	西宮峪地区出土遺物（実測・製図：二宮）	160
第153図	西宮峪地区出土遺物（実測・製図：二宮）	161
第154図	西宮峪地区出土遺物（実測・製図：二宮）	162
第155図	西宮峪地区出土遺物（実測・製図：二宮）	163
第156図	西宮峪C地区出土遺物（実測・製図：二宮）	164
第157図	西宮峪B地区出土遺物（実測・製図：二宮）	165
第158図	西宮峪B・C地区出土遺物（実測・製図：二宮）	166
第159図	西宮峪C地区7層出土遺物（実測・製図：二宮）	167
第160図	西宮峪・荒神元・東宮峪・岡の山・寺前地区出土土錐（実測：二宮・浜本・製図：二宮）	168
第161図	西宮峪地区出土遺物（実測・製図：二宮）	169
第162図	西宮峪A・B・C地区出土遺物（実測・製図：二宮）	171
第163図	寺東B地区遺構分布図（実測・製図：高畠）	172
第164図	No80土壙（実測・製図：高畠）	173
第165図	No80土壙出土遺物（実測・製図：高畠）	174
第166図	岡東調査前・後地形図（実測：高畠、二宮・製図：高畠）	176
第167図	岡東地区遺構分布図（作成：高畠）	177・178
第168図	岡東B・C地区出土遺物（実測・製図：高畠）	179
第169図	岡東B地区No94ピット・柱穴出土遺物（実測・製図：高畠）	180
第170図	岡東B・C地区出土遺物（実測・製図：高畠）	118
第171図	No82住居址（実測・製図：高畠）	182
第172図	No82住居址内ピット（実測・製図：高畠）	183
第173図	No82住居址出土遺物（実測・製図：高畠）	184
第174図	No82住居址出土遺物（実測・製図：高畠）	185
第175図	No83住居址（実測・製図：高畠）	186
第176図	No83E溝出土遺物（実測・製図：高畠）	187
第177図	No83住居址出土遺物（実測・製図：高畠）	187
第178図	No83住居址出土遺物（実測・製図：高畠）	188
第179図	No83住居址出土遺物（実測・製図：高畠）	189
第180図	No83住居址内袋状ピット3（実測・製図：高畠）	190
第181図	No83住居址袋状ピット3出土遺物（実測・製図：高畠）	191
第182図	No90土壙（実測・製図：高畠）	192
第183図	No96土壙（実測・製図：高畠）	193
第184図	No127土壙（実測・製図：高畠）	193
第185図	No127配石土壙出土遺物（実測・製図：高畠）	194
第186図	No108土壙出土遺物（実測・製図：高畠）	194

第187図	No 100 袋状ピット（実測・製図：高畠）	195
第188図	No 100 袋状ピット出土遺物（実測・製図：高畠）	195
第189図	No 100 袋状ピット出土遺物（実測・製図：高畠）	196
第190図	No 100 袋状ピット出土遺物（実測・製図：高畠）	197
第191図	No 101 袋状ピット（実測・製図：高畠）	200
第192図	No 101 袋状ピット出土遺物（実測・製図：高畠）	200
第193図	No 101 袋状ピット出土遺物（実測・製図：高畠）	200
第194図	No 91建物（実測・製図：高畠）	201
第195図	No 92建物（実測・製図：高畠）	201
第196図	No 99建物（実測・製図：高畠）	201
第197図	No 97建物（実測・製図：高畠）	201
第198図	No 94建物（実測・製図：高畠）	202
第199図	No 95建物（実測・製図：高畠）	202
第200図	No 105・106・107 遺構（実測・製図：高畠）	203
第201図	No 107 柱穴列出土遺物（実測・製図：高畠）	203
第202図	No 121・102柱穴列（実測・製図：高畠）	204
第203図	No 85住居址（実測・製図：二宮）	205
第204図	No 88住居址・No 89溝（実測・製図：二宮）	205
第205図	岡東地区以東出土遺物（実測・製図：二宮）	206
第206図	No 109 住居址（実測・製図：二宮）	207
第207図	No 110 住居址（実測・製図：二宮）	207
第208図	岡東地区出土遺物（実測・製図：二宮）	208
第209図	No 111 土壙（実測・製図：二宮）	211
第210図	No 112・113住居址（実測・製図：二宮）	211
第211図	No 114 住居址（実測・製図：二宮）	212
第212図	No 117 住居址（実測・製図：二宮）	213
第213図	No 117 西端・土壙（実測・製図：二宮）	213
第214図	No 119 住居址（実測・製図：二宮）	214
第215図	No 119 住居址出土遺物（実測・製図：二宮）	215
第216図	No 122 住居址（実測・製図：二宮）	216
第217図	No 123 住居址（実測・製図：二宮）	216
第218図	No 124 住居址（実測・製図：二宮）	217
第219図	No 124 鍛冶炉 2（実測・製図：二宮）	218
第220図	No 124 鍛冶炉 1（実測・製図：二宮）	218
第221図	No 124鍛冶炉 1・No 124住居址出土遺物（実測・製図：二宮）	220
第222図	No 125 住居址（実測・製図：二宮）	221
第223図	No 122・123・124・125住居址出土遺物（実測・製図：二宮）	223
第224図	No 84建物（実測・製図：二宮）	224
第225図	No 128 柱穴列（実測・製図：二宮）	224
第226図	No 129 建物（実測・製図：高畠）	225
第227図	No 129 出土遺物（実測・製図：高畠）	225
第228図	No 133 古道（実測・製図：高畠）	226
第229図	No 133 古道出土遺物（実測・製図：高畠）	227
第230図	No 134 遺構（実測・製図：高畠）	228

第231図	No.134 住居址出土遺物（実測・製図：高畑）	229
第232図	No.138 土壙及び出土遺物（実測・製図：高畑）	230
第233図	No.139 溝状土壙（実測・製図：高畑）	230
第234図	天王地区遺構分布図（実測：高畑・二宮・製図：浜本）	232
第235図	No.151・152土壙墓（実測・製図：二宮）	233
第236図	No.146 土壙墓（実測・製図：二宮）	234
第237図	No.149 土壙墓（実測・製図：二宮）	234
第238図	天王C地区北東端（実測・製図：二宮）	235
第239図	天王C北地区出土遺物（実測・製図：二宮）	236
第240図	天王C北地区出土遺物（実測・製図：二宮）	237
第241図	No.153 土壙墓（実測・製図：二宮）	238
第242図	No.154 土壙墓（実測・製図：二宮）	238
第243図	No.155 土壙墓（実測・製図：二宮）	238
第244図	No.157 土壙墓（実測・製図：二宮）	238
第245図	No.156 土壙墓（実測・製図：二宮）	238
第246図	No.162 土壙墓（実測・製図：二宮）	238
第247図	No.164 土壙墓（実測・製図：二宮）	239
第248図	No.166 土壙墓（実測・製図：二宮）	239
第249図	No.168 建物（実測・製図：二宮）	240
第250図	No.167 建物（実測・製図：二宮）	240
第251図	No.169 建物（実測・製図：二宮）	240
第252図	No.170 土壙（実測・製図：高畑）	241
第253図	No.171 土壙（実測・製図：高畑）	241
第254図	No.170 土壙出土遺物（実測・製図：島崎）	242
第255図	No.170・171・172土壙下層出土遺物（実測・製図：島崎）	243
第256図	No.171 土壙出土遺物（実測・製図：島崎）	244
第257図	No.174 土壙（実測・製図：高畑）	245
第258図	No.175 土壙（実測・製図：高畑）	245
第259図	No.170・175土壙出土遺物（実測・製図：島崎）	246
第260図	No.175 土壙出土遺物（実測・製図：島崎）	247
第261図	No.175 土壙出土遺物（実測・製図：島崎）	248
第262図	No.188・189土壙（実測・製図：高畑）	249
第263図	No.190 土壙（実測・製図：高畑）	249
第264図	No.176 土壙（実測・製図：高畑）	250
第265図	No.206・178・177 土壙（実測・製図：高畑）	250
第266図	天王C地区出土遺物（実測・製図：島崎）	251
第267図	No.191・192土壙（実測・製図：高畑）	252
第268図	No.194・195土壙（実測・製図：高畑）	253
第269図	No.196・197土壙（実測・製図：高畑）	253
第270図	No.202・203・204柱穴列（実測・製図：高畑）	254
第271図	No.207No.209土壙墓（実測・製図：高畑）	254
第272図	No.210No.215近世土壙墓（実測・製図：高畑）	255
第273図	No.214 土壙墓出土遺物（実測・製図：島崎）	255
第274図	小原家宅地図（製図：高畑）	256

図版目次

- 図版1 1 津山市西部・二宮遺跡周辺航空写真（東より）
図版2 1 二宮遺跡（岡の山、寺前、岡東地区）航空写真（南南東より）（片山太郎氏提供）
2 二宮遺跡全景（南より）（片山太郎氏）
図版3 1 二宮遺跡全景（西より）（片山太郎氏）
2 二宮遺跡（東より）（片山太郎氏）
図版4 1 東宮峪、宮峪、荒神元、西宮峪、天王地区全景（岡の山地区より西を望む）
図版5 1 東宮峪、岡の山地区遠景（南西より）
2 東宮峪、宮峪、荒神元、西宮峪、天王地区遠景（東より）
図版6 1 藏屋敷、荒神元A地区全景（東より）
2 藏屋敷、荒神元A地区№2溝（東より）
図版7 1 荒神元A地区№4井戸検出状況（南東より）
2 荒神元A地区№4井戸掘上げ（東より）
図版8 1 荒神元A地区№5井戸上面（北西より）
図版9 1 荒神元A地区№5井戸石組（南西より）
2 荒神元A地区№5井戸掘り方（南南西より）
図版10 1 荒神元B地区調査前全景（東より）
2 荒神元B地区掘り上げ全景（西より）
図版11 1 荒神元B地区西側土層断面（南南西より）
2 荒神元B地区東側土層断面（南東より）
3 荒神元B地区北側土層断面（西南西より）
図版12 荒神元B地区出土遺構
1 №9土壙（南より）
2 №10土壙（北より）
3 №11袋状ピット（西より）
4 №12土壙墓（南より）
5 №13土壙（北より）
6 №14土壙（西より）
7 №16土壙（南より）
8 №17土壙（南より）
図版13 1 荒神元B地区№12土壙墓（東より）
2 荒神元B地区№12土壙墓出土遺物（東より）
図版14 1 荒神元B地区№18鳥居（西より）
2 荒神元B地区軟質地山掘開（西より）
図版15 1 荒神元C地区土層断面（南南東より）
2 荒神元C地区トレンチ（北より）
図版16 1 荒神元C地区柱穴検出状況（東より）
2 荒神元C地区建物全景（東より）
図版17 1 荒神元C地区建物全景（北西より）
2 宮峪地区掘り下げ全景（北より）
図版18 1 東宮峪A地区トレンチ
2 東宮峪A地区土層断面

- 図版19 1 岡の丸A地区袋状ピット全景（西南西より）
2 岡の丸A地区袋状ピット全景（南より）
- 図版20 1 岡の丸A地区袋状ピット（西より）
2 岡の丸A地区No.29袋状ピット（西より）
- 図版21 1 岡の丸A地区No.30袋状ピット（西より）
2 岡の丸A地区No.31袋状ピット（南西より）
- 図版22 1 岡の丸A地区No.32袋状ピット（南より）
2 岡の丸A地区No.32袋状ピット遺物（北より）
- 図版23 1 岡の丸A地区No.33袋状ピット（南より）
2 岡の丸A地区No.34袋状ピット（西より）
- 図版24 1 岡の丸A地区No.35袋状ピット断面（南より）
2 岡の丸A地区No.35袋状ピット（南より）
- 図版25 1 岡の丸A地区No.42袋状ピット（西より）
2 岡の丸A地区No.42袋状ピット（西より）
- 図版26 1 岡の丸A地区No.42袋状ピット遺物出土状況（より西）
2 岡の丸A地区No.45袋状ピット土層断面（西より）
- 図版27 1 岡の丸A地区No.145住居址（北北東より）
2 岡の丸A地区No.36土塙（東より）
- 図版28 1 岡の丸A北地区袋状ピット土層断面（北北西より）
2 岡の丸A北地区No.217・218・219袋状ピット、No.224住居址・土塙（北北西より）
- 図版29 1 岡の丸A北地区No.217袋状ピット、遺物出土状況（北北西上より）
2 岡の丸A北地区No.219袋状ピット（西より）
- 図版30 1 岡の丸A北地区No.219袋状ピット剥去（西より）
2 岡の丸A北地区No.219袋状ピット掘り下げ（西より）
- 図版31 1 岡の丸A北地区No.220袋状ピット剝離山除去（南南西より）
2 岡の丸A北地区No.220袋状ピット遺物出土状況
- 図版32 1 岡の丸A北地区No.220袋状ピット剝離土地山除去後（南南西より）
2 岡の丸A北地区No.220袋状ピット遺物出土状況
- 図版33 1 岡の丸A北地区No.220袋状ピット全掘（南南西より）
2 岡の丸A北地区No.223袋状ピット遺物出土状況（北東より）
- 図版34 1 岡の丸A北地区No.225地下式横穴（南南西より）
2 岡の丸A北地区No.225地下式横穴近景（南南西より）
- 図版35 1 岡の丸A北地区全景（南南西より）
2 岡の丸A北地区、北西部及び北壁土層断面（南南西より）
- 図版36 1 岡の丸B地区削り出し全景（北より）
2 岡の丸B・C地区削り出し全景（東より）
- 図版37 1 岡の丸C・D・E地区削り出し全景（北西より）
2 岡の丸C・D・E地区削り出し全景（東北東より）
- 図版38 1 岡の丸B・C地区近世墓検出状況（北東より）
2 岡の丸B地区近世墓検出状況（南より）
- 図版39 1 岡の丸B地区No.37住居址（北より）
2 岡の丸B地区埴輪棺出土状況（西より）
- 図版40 1 岡の丸B地区No.37住居址炭化材（西より）
2 岡の丸B地区No.37住居址完掘（東より）

図版41 岡の^レB 地区№37住居址

- 1 北東柱痕（北西より）
- 2 炭化材組合せ（北より）
- 3 遺物出土状況（西より）
- 4 中央ピット土壙（西より）
- 5 南東柱痕（北より）
- 6 南東柱痕・石（南より）
- 7 袋状ピット内炭化材（東より）
- 8 袋状ピット（南より）

図版42 1 岡の^レB 地区№40耳塚関連遺構（南東より）

- 2 岡の^レB 地区№40遺構（南西より）

図版43 1 岡の^レB 地区№41古墳（北東より）

- 2 岡の^レB 地区№41古墳周溝（北より）

図版44 1 岡の^レC・D・E 地区建物全景（西より）

- 2 岡の^レC・E 地区建物全景（北西より）

図版45 1 岡の^レC 地区№51土壙（東より）

- 2 岡の^レC 地区№78土壙（南より）

図版46 1 岡の^レC 地区№53石組土壙（東より）

- 2 岡の^レC 地区№53石組土壙（東より）

図版47 1 岡の^レD 地区№54土壙（南より）

- 2 岡の^レD 地区№55地下式横穴（北東より）

図版48 1 岡の^レD 地区完掘全景（西より）

- 2 岡の^レD 地区№59建物（南より）

図版49 1 岡の^レE 地区削り出し全景（北西より）

- 2 岡の^レE 地区完掘全景（西北より）

図版50 1 岡の^レD 地区№50井戸（東より）

- 2 岡の^レE 地区№50井戸完掘（東より）

図版51 1 岡の^レD 地区№57土壙（南より）

- 2 岡の^レE 地区№61土壙（西南西より）

図版52 1 岡の^レB 地区№4 近世墓

- 2 岡の^レB 地区№11近世墓

- 3 岡の^レB 地区№13近世墓

- 4 岡の^レB 地区№14近世墓

- 5 岡の^レB 地区№18近世墓

- 6 岡の^レB 地区№20～21近世墓

- 7 岡の^レB 地区№22～23近世墓

- 8 岡の^レB 地区№24近世墓

図版53 1 岡の^レB 地区№31近世墓

- 2 岡の^レB 地区№38近世墓

- 3 岡の^レD 地区№43近世墓

- 4 岡の^レE 地区№49近世墓

- 5 岡の^レB 地区№44近世墓

- 6 岡の^レD 地区№45近世墓

- 7 岡の^レE 地区№46近世墓

- 8 岡の山E地区no47・48近世墓
- 図版54 1 岡の山E地区no50近世墓
 2 岡の山E地区no52近世墓
 3 岡の山E地区no58・59・60近世墓
 4 岡の山C地区no74近世墓
 5 岡の山E地区no77近世墓
 6 岡の山E地区no70近世墓
 7 岡の山E地区no66・67近世墓
 8 岡の山C地区no68近世墓
- 図版55 1 寺前B地区南北トレンチ遺物出土状況（北より）
 2 寺前C地区グリッド（南より）
- 図版56 1 西宮峪C地区境界土層断面（南より）
 2 西宮峪B・C地区グリッド土壌（東より）
- 図版57 1 西宮峪A地区グリッド1（左上）2（北より）
 2 西宮峪B地区グリッド3（北より）
- 図版58 1 西宮峪B地区グリッド4（南より）
 2 西宮峪B地区グリッド5（南より）
- 図版59 1 西宮峪地区全景（西より）
 2 西宮峪C地区境界土層断面（南より）
- 図版60 1 寺東B地区調査前全景（北より）
 2 寺東B地区完掘状況（北東より）
- 図版61 1 寺東B地区No.80土壤（北より）
 2 寺東B地区No.80土壤遺物出土状況（東より）
- 図版62 1 岡東地区調査前全景（西より）
- 図版63 1 岡東地区調査前全景（東より）
 2 岡東B地区削り出し全景（北東より）
- 図版64 1 岡東地区No.82住居址（東北東より）
 2 岡東地区No.82住居址（東北東より）
- 図版65 岡東B地区No.82住居址
 1 Pit 2（南より）
 2 Pit 7（北東より）
 3 Pit 10（南より）
 4 Pit 15（東より）
- 図版66 1 岡東B地区No.83住居址検出状況（南東より）
 2 岡東B地区No.83住居址完掘状況（南東より）
- 図版67 1 岡東B地区No.83住居址（南より）
 2 岡東B地区No.83住居址（東より）
- 図版68 1 岡東B地区No.83住居址南北土層断面（西より）
 2 岡東B地区No.83住居址遺物出土状況（西南西より）
- 図版69 1 岡東B地区No.83住居址袋状ピット14（東より）
 2 岡東B地区No.83住居址袋状ピット10土層断面（西より）
- 図版70 1 岡東B地区No.83住居址袋状ピット3土層断面（南より）
 2 岡東B地区No.83住居址袋状ピット3完掘状況（南より）
- 図版71 1 岡東B地区No.91・92・94・95建物（東より）

- 2 岡東B地区№94・95・96・97建物（西南西より）
- 図版72 1 岡東B地区№96土壙（北西より）
2 岡東B地区№127配石土壙（南より）
- 図版73 1 岡東B地区№100袋状ピット（南より）
2 岡東B地区№101袋状ピット（南南東より）
- 図版74 1 岡東B地区№88・89・柱穴列（南より）
2 岡東B地区№85（上）・86（下）（南西より）
- 図版75 1 岡東B地区№8・89全景（南より）
2 岡東B地区№8・89柱穴列（南より）
- 図版76 1 岡東C地区№112住居址（上）・113住居址（右）・114土壙（下）（南南西より）
2 岡東B地区№109溝（上の中央）・110住居址（中央）・111土壙（上の右）（南より）
- 図版77 1 岡東B地区№110住居址（南西より）
2 岡東C地区№117住居址（南より）
- 図版78 1 岡東C地区№114土壙西側土層断面（東より）
2 岡東C地区№112住居址・113住居址・114土壙（上より）（南南西より）
- 図版79 1 岡東C地区№119住居址土層断面（西側）（東より）
2 岡東C地区№119住居址土器出土状況
- 図版80 1 岡東C地区全景（南東より）
2 岡東C・D地区全景（東より）
- 図版81 1 岡東C地区№122土壙全景（南より）
2 岡東C地区№124鍛冶炉・119住居址（左より）（南より）
- 図版82 1 岡東C地区№124鍛冶炉出土遺物（南東より）
2 岡東C地区№124鍛冶炉全景（南東より）
- 図版83 1 岡東C地区№124鍛冶炉—1（南西より）
2 岡東C地区№124鍛冶炉—1（右上）・2（中央）
- 図版84 1 岡東C地区№124鍛冶炉中心（南東より）
2 岡東C地区№124鍛冶炉・床石
- 図版85 1 岡東C地区№124鍛冶炉—1（右）・2（右）（南より）
2 岡東C地区№124鍛冶炉・床石（北東より）
- 図版86 1 岡東C地区№124鍛冶炉・床石（西より）
2 岡東C地区№124鍛冶炉—2
- 図版87 1 岡東C地区№124南側境界土層断面（北東より）
2 岡東D地区№125住居址（南より）
- 図版88 1 岡東D地区№125住居址遺物出土状況
2 岡東D地区№125住居址遺物出土状況
- 図版89 1 岡東D地区№125住居址遺物出土状況
2 岡東D地区№125住居址全景（南より）
- 図版90 1 岡東C・D地区№119住居址（右）・125住居址（左）・124鍛冶炉（上部中央）（東より）
2 岡東D・C・B地区（左より）（東より）
- 図版91 1 岡東B地区№129建物（南西より）
2 岡東B地区№133道状遺構完掘状況（西より）
- 図版92 1 岡東C地区№133道状遺構（西より）
2 岡東C地区№139土壙（東より）
- 図版93 1 岡東C地区№133道状遺構横断面（東北東より）

- 2 岡東C地区№133 道状遺構砂利敷（南東より）
- 図版94 1 岡東C地区№134遺構（南南西より）
2 岡東C地区№134 遺構完掘状況（南南西より）
- 図版95 1 岡東B・C・E地区調査前全景（東より）
2 岡東E地区№140住居址（南より）
- 図版96 1 岡東E地区（公園跡）柱穴（西より）
2 岡東E地区造成土状況（北東より）
- 図版97 1 天王C地区完掘全景（西より）
- 図版98 1 天王C地区南東部遺構（北西より）
2 天王C地区南西部遺構（北より）
- 図版99 1 天王C地区№171・172・173土壙（北より）
2 天王C地区№174土壙（西より）
- 図版100 1 天王C地区№175井戸状土壙（西より）
2 天王C地区№194・195土壙（北東より）
- 図版101 1 天王C地区№207・208・209土壙墓（西より）
2 天王C地区№212・213・214・215土壙墓（南より）
- 図版102 1 天王C地区№213土壙墓（東より）
2 天王C地区№214土壙墓（南より）
- 図版103 1 天王B地区全景（西より）
2 天王B地区全景（南より）
- 図版104 1 天王B地区№146土壙（南より）
2 天王B地区№148土壙（北より）
- 図版105 1 天王B地区№151土壙（西より）
2 天王C地区北№154土壙墓（北より）
- 図版106 1 天王C地区北№162土壙墓（北より）
2 天王C地区北№156土壙墓（東より）
- 図版107 1 天王C地区北№156土壙墓（南より）
2 天王C地区北№156（石組）土壙墓（東より）
- 図版108 1 天王C地区北№157土壙墓（南西より）
2 天王C地区北№165土壙（南より）
- 図版109 1 天王C地区北東端土層断面（南より）
2 天王C地区北東端全景（東より）
- 図版110 1 天王C地区北全景（東より）
2 天王C地区北全景（西より）
- 図版111 1 蔵屋敷地区出土備前焼（表）
2 蔵屋敷地区出土備前焼（裏）
- 図版112 1 荒神元・荒神元地区出土遺物
2 荒神元A地区№4井戸出土遺物
- 図版113 1 荒神元A地区№5井戸出土遺物
- 図版114 1 荒神元B・C地区出土遺物
- 図版115 東宮船地区トレンチ出土遺物
1 Bトレンチ
2 Cトレンチ
3 Dトレンチ

4 E トレンチ

- 図版116 1 岡の山A地区№29袋状ピット出土遺物
- 図版117 1 岡の山A地区№29・30・31袋状ピット出土遺物
- 図版118 1 岡の山A地区№29・32・33袋状ピット出土遺物
- 図版119 1 岡の山A地区№35袋状ピット出土遺物
- 図版120 1 岡の山A地区№42袋状ピット出土遺物
- 図版121 1 岡の山A地区№42袋状ピット出土遺物
- 図版122 1 岡の山A北地区№42・217・218袋状ピット出土遺物
- 図版123 1 岡の山A北地区№219・220・222袋状ピット出土遺物
- 図版124 岡の山B地区出土遺物
1 №37住居址上面埴輪円筒棺
2 墓輪表面
3 墓輪裏面
- 図版125 1 岡の山地区近世墓出土遺物
- 図版126 1 岡の山地区近世墓・井戸・造成土内出土遺物
- 図版127 1 岡の山地区近世墓・井戸・造成土内出土遺物（表面）
2 岡の山地区近世墓・井戸・造成土内出土遺物（裏面）
- 図版128 1 №41（美和山4号古墳）周溝内出土遺物
2 岡の山・寺前出土遺物
- 図版129 1 寺前地区№21・29・224・232・89出土遺物
- 図版130 1 西宮峪地区№119出土遺物
- 図版131 1 西宮峪地区出土遺物
- 図版132 1 寺東B地区№80土壤出土遺物
2 岡の山C地区№116柱穴列出土遺物
- 図版133 1 岡東地区出土遺物
2 岡東地区出土遺物
- 図版134 1 岡東B地区№82住居址出土遺物
2 岡東B地区№82住居址出土遺物
- 図版135 1 岡東B地区№82・83住居址出土遺物
- 図版136 1 岡東B地区№100袋状ピット出土遺物
- 図版137 1 岡東C・D地区№110・119・122住居址出土遺物
- 図版138 1 岡東地区出土遺物
- 図版139 1 岡東地区№120・124・125出土遺物
- 図版140 1 岡東B・天王C北地区№151・161出土遺物
- 図版141 1 天王C地区南土壤出土遺物
- 図版142 1 天王C南地区№175土壤出土遺物
- 図版143 1 各地区出土の土錐
2 各地区出土の土錐
- 図版144 1 各地区出土遺物

第1章 調査の経過

一般国道179号線の改良事業（二宮地区内）は昭和50年度の岡山県起業の一環として計画、実施されたものである。

この地区には、美作国最大の前方後円墳胴塚を中心とする美和山古墳群が存在し、路線は古墳群南端に位置する耳塚周溝部分をも含む状況を呈しており、周溝部分については範囲を確認し、現状保存のための設計について配慮を願う要望を行った。そして岡の山、天王両地区の第1次確認調査を昭和50年12月に行い、引き続き昭和51年4月より53年4月までの合計25ヶ月間（実動475日）を費して第2次調査が実施された。調査対象地は路線センター杭N38～N75までの総延長740m、道路幅25～30m、面積にして約20000m²（公園・宅地・未買収地等を含める）が求められた（第6図）。発掘調査は用地買収の終了している部分より着手し、昭和51年度は谷部を中心に確認調査を行い、蔵屋敷、荒神元、宮峪、東宮峪、岡の山、寺前、西宮峪、天王A・B地区の順序で8地区約6000m²を実施し、寺東、岡東、天王C、岡の山A北地区の4地区約5300m²の調査を昭和52年度に実施した。調査期間全工程は調査員2名、作業員1箇月平均19日の実動を行い、1日平均14.3人の出席によりなされたものである。兩年度とも4月は条件整備が順調に進まず、用地未買収、巾杭の有無、路線内作付け、農業用水路の確保、立木の伐材等の問題を残した状態で実動が開始された。52年度予定地である紫竹川、ヒヨウタン田両地区は、最後まで用地買収が進展せず、調査を実施しない地区も出てきた。なかでも、岡の山A北地区のように突然、寺東A地区の市営住宅代替地として候補にあがり、急拠発掘調査を実施せざるを得なくなった場所もある。

このような現状に対応する各関係機関の多大な努力がはらわれたにもかかわらず、調査自体の進行に手間取り、継ぎはぎの状態で調査地区的発掘を実施せざるを得ない状況が各地区でみられた。これは、最も初步的な誤りから起因したものであり、用地買収の完了する以前の発掘調査体制、地権者と

51年度		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
地区		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
西宮船	A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
荒神元	A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
寺前	A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
くらやしき	A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
東宮船	A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	C	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
岡のれい	A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
天王	A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
52年度		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4
地区		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
西宮船	A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	C	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	D	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
寺前	A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
岡のれい北	A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

発掘調査工程表（表-1）

各関係機関による協議、伝達の欠如等があげられるのではなかろうか。

第2章 地理的・歴史的環境

本遺跡は付近の字名を取り二宮遺跡と呼称して発掘調査を行った。遺跡は津山盆地の中央で現津山市街地の西に位置している。遺跡の所在する津山市は中国山地に源を發して東西に流れる吉井川を中心とした、美作地方の主要交通路の一つであった。本流は苦田郡鏡野地域で支流の香々美川と合流し、肥沃な沖積地を形成している。南流した吉井川は本遺跡西方の低地おも形成し、遺跡西端（A丘陵）に当たり、東流している久米川、さらには遺跡東端を南流する紫竹川、下流の皿川と合流し市街地を抜け再び南下する。

本遺跡の北東には海拔 308 m の神楽尾山塊の南辺部には第三紀丘陵がめぐっている。低丘陵の谷は深く、一般的に樹枝状に侵食を受け、谷頭まで耕作が進んでいる。さらに、本遺跡丘陵の北側には中国縦貫自動車道路が走り大きく変貌している。

二宮遺跡の所在する丘陵は大きく分けて4つの丘陵部からなり立っている。丘陵は南北に延びるもので、南は吉井川によって、北は田畠盆地、東は市街地、西は吉井川を中心とする水田地帯にかこまれている。さらに本遺跡の立地するC丘陵上には、美作国最大規模で昭和51年3月に国指定を受けた全長 90 m をはかる前方後円墳胴塚を含む美和山古墳群、南に高野神社が眼下に吉井川流域の低地と交通の要衝をしめる位置に立地している。同丘陵北の津山市田邑平尾には径約30mの古墳、西方には史跡、院庄館址が知られている。また南方（吉井川以南）には東を佐良山、西を嵯峨山にはばまれ、北流する皿川によって沖積地が形成されている。この沖積地をはさむ東西の尾根上には総数 168 基にものぼる後期古墳が存在している。これは典型的な群集墳の姿を示している。また、数基の横穴式石室からは、地域的な特性を示す陶棺の出土が報告されている。

二宮遺跡はこのように津山盆地の中心地域に位置し、周辺には数多くの遺跡が知られ、原始時代から最適の集落立地の場所となっていたのである。

このような盆地の形成に重要な役割をしたものは吉井川である。中世にいたっては鉄道の発達する以前の交通の要として利用されていた。交通機関は高瀬舟を利用した河川交通経済の発展があり、物資集散によって発達した港町が形成されていく。津山市（城下町）も吉井川の上流で特に繁栄をきわめた港町である。

<参考文献>

近藤義郎『佐良山古墳群の研究』 津山市 1952年。

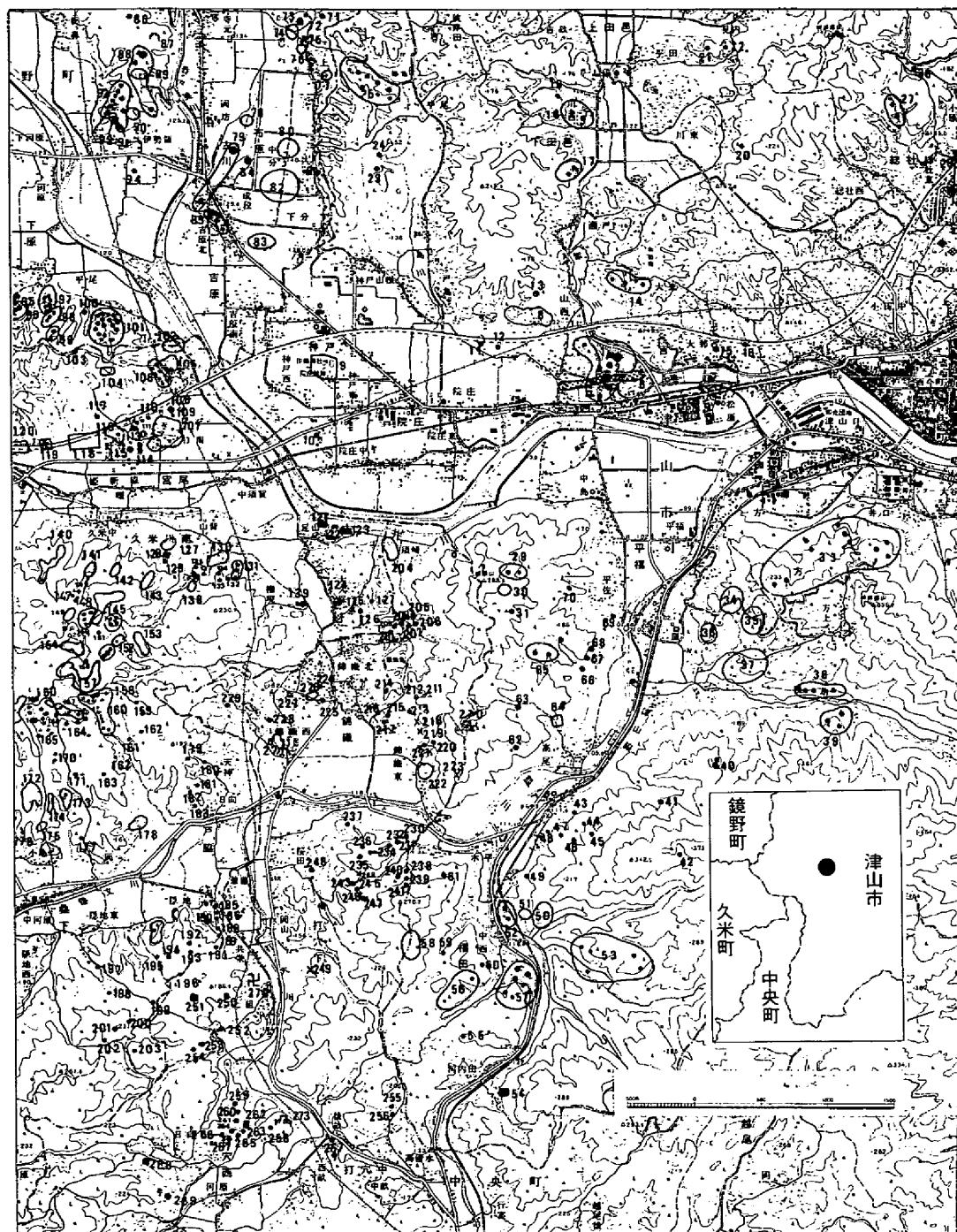
今井堯「原始社会から古代国家への成立」津山市史第I巻、原始・古代。1972年3月。

竹久順一「津山の概観」津山市史第I巻、原始・古代。1972年3月。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（6）1973年3月。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（17）1977年2月。

二宮遺跡



第1図 二宮遺跡の周辺遺跡図 (1/50000)

二宮遺跡

周辺遺跡対照表(表一2)

1 美和山1号古墳(洞塚)	2 美和山2号古墳(蛇塚)	3 美和山3号古墳(耳塚)	4 4号古墳
5 5号墳	6 二宮遺跡	7 高野神社	8 山西散布地
9 院の庄館跡	10院の庄城跡	11戸島丸山古墳	12山西西古墳
13戸島高塚古墳	14中津奥古墳群	15松原A遺跡	16松原B遺跡
17菊成古墳群	18西畠古墳群	19川西古墳群	20稻荷山古墳群
21場口高下A遺跡	22場口高下B遺跡	23戸島遺跡	24戸島B遺跡
25丸山古墳群	26下道南古墳	27下妙谷古墳群	28美作国府址
29中堂古墳群	30三つ塚古墳群	31火の釜古墳群	32後山古墳
33一方北古墳群	34門の山古墳群	35煙硝庫古墳群	36寺山古墳群
37寺池東古墳群	38かき谷A古墳群	39かき谷B古墳群	40皿山古墳群
41中曾根古墳群	42比久尼塚古墳	43丸山古墳群	44御笠美下古墳群
45三つ塚古墳群	46御笠美古墳	47大塚上古墳	48御笠美下大塚古墳
49中宮古墳群	50剣戸古墳群	51――	52丸山古墳群
53小屋谷古墳群	54滝の元古墳	55高清水古墳	56奥山田古墳群
57若林古墳群	58三つ塚古墳群	59奥の谷古墳群	60うのめ古墳群
61岡の山古墳群	62西の岡古墳群	63城成古墳	64高尾廃寺跡
65中山田古墳群	66弁慶岩古墳	67正京茶畠古墳	68桑山南古墳群
69桑山古墳群	70祇園缺古墳群	71下山古墳群	72茶臼山北塚
73茶臼山古墳	74布原上住居跡	75下山神社	76鴨塚1号墳
77布原上散布地	78大開遺跡	79成段1号墳	80御船住居跡
81布原古墳	82六番丁場住居跡	83九番丁場住居跡	84成段極楽散布地
85吉原1号墳	86寺元古墳	87古川城址	88古川1号墳
89伊勢領山遺跡	90伊勢領墓地散布地	91伊勢領古墳	92宗枝1号墳
93宮の谷散布地	94五反田散布地	95下原31号墳(観音山)	96下原32号墳(才の屹)
97下原1号墳	98下原8号墳	99下原25号墳	100下原11号墳
101下原12号墳	102赤岩1号墳	103登船2号墳	104金長池東北住居址
105鎧塚散布地	106鎧塚古墳	107八幡神社遺跡	108諏訪1号墳
109諏訪2号墳	110大日地下式横穴	111大日古墳3号墳	112大日古墳2号墳
113大日古墳1号墳	114久米丸山	115久米丸山2号墳	116野辺1号墳
118宮尾遺跡	119久米磨寺	120領家遺跡	121足山3号墳
122足山2号墳	123足山1号墳	124大久保貯藏穴その1	125大久保貯藏穴その2
126大久保第2号墳	127大久保第1号墳	128山背大日1号墳	129山背大日2号墳
130山背(住2号)	131山背(住1号)	132山背古墳第1号墳	133山背古墳第9号墳
134山背古墳第5号墳	135山背古墳第8号墳	136山背古墳第7号墳	137山背古墳第6号墳
175瓢箪山裏住居址	177瓢箪山古墳1号墳	178こぶしか鼻	179日向4号墳(かづら山)
180日向5号墳	181日向3号墳	182日向2号墳(雨乞塚)	183日向1号墳(荒神谷)
184――	185戸脇3号墳	186戸脇1号墳	187戸脇4号墳
188戸脇5号墳	189戸脇11号墳(年寛)	190戸脇2号墳	191戸脇12号墳(年寛)
192戸脇10号墳(奥)	193戸脇9号墳	194戸脇13号墳	195戸脇7号墳
196戸脇8号墳(森林)	197十日1号墳	198十日3号墳	199十日2号墳
200十日5号墳	201十日4号墳	202十日6号墳	203十日7号墳
204――	205方の谷2号墳	206方の谷3号墳	207方の谷4号墳
208方の谷5号墳	209方の谷6号墳	210方の谷7号墳	211うるしざこ古墳
212うるしざこ古墳	213うるしざこ古墳	214後谷古墳	215小麦尾古墳
216小麦尾古墳	217小麦尾古墳	218小麦尾古墳	219松が崎古墳
220小坂古墳	221小坂古墳	222小坂古墳	223小坂古墳
224高塚	225塚山	226塚山	227神社横古墳
228神社横古墳	229山部古墳	230召出山古墳	231召出山古墳
232召出山古墳	233召出山古墳	234召出山古墳	225召出山古墳
236召出山古墳	237召出山古墳	238大平古墳	239大平古墳
240大平古墳	241大平古墳	242大平古墳	243大平古墳
244大平古墳	245大平古墳	246大平古墳	247大平古墳
248赤堀古墳	249――	250兼藤古墳	251兼藤古墳
252塚の前古墳	253焼寺古墳	254焼寺古墳	255乳塚古墳
256乳塚古墳	257堂の上古墳	258時尾古墳	259鬼山古墳
260鬼山古墳	261カタ割塚	262鬼山古墳	263カタ割塚
264カタ割塚	266長者面古墳	267長者面古墳	268白雲山普光寺跡
269――	270興禪寺跡	271立満告跡	272大円寺跡
273鬼山城跡			

第3章 第1次調査の概要（昭和50年度）

国道179号線バイパス道路の建設に伴い、事前に、遺跡との競合関係を調整するための基礎資料を提供するよう、津山地方振興局建設部より岡山県教育庁文化課に対して要請がなされた。これをうけて県文化課は、前章において記述したとおりの構成で「国道179号バイパス道路文化財調査委員会」を設置し、事務局を岡山県津山教育事務所に置いて、いわば第一次予察調査を実施することになった。現場は、主として県文化課文化財保護主事葛原克人があたり、地形測量は同課主事竹田勝の手によって作図された。その期間は、昭和50年12月1日から約一個月間におよび、調査対象地は、津山市二宮字天王と同市二宮字岡の丸との二地点にわたっている。以下、地点別に、遺跡の立地、トレンチ調査の所見、出土遺物、の順にしたがい概述して貢をふさぎたい。

天王地点

津山市二宮字天王に所在する天王調査区は、対象面積600m²で、発掘面積は約180m²である。

北には、比高約20～30mの低丘陵がほぼ東西方向に横たわり、すぐに民家が密集している。調査対象地はその緩斜面端部の一段低いテラス状台地の畑地で、そのさらに南側には、吉井川の旧河道の一本が北西方向から南東方向へ湾曲して走流していたことを示す幅50m以上のベルト状低湿地が連なり、低い水田の南対岸には中洲の字名をとどめる場所もみられる。調査地と旧河道を思わせる水田との比高はおよそ2mばかりである。今回の発掘調査は、緩斜面と旧河道との中間地帯に形成されている幅約20mの平坦地において須恵器片等の遺物若干を採集したため、この一帯にあるいは古代集落址がのこっていたかどうかを把握する目的をもって、トレンチ調査を試みることとした。トレンチの幅は2mに統一し、地形に照らして任意に基線をもうけ、ほぼ東西方向に約27m、それと直交する南北に約18mのものを設定し、0.4～1.8m程度掘り下げて、遺物の包含状況及び遺構の存在の有無など、主として土壤構造的確な確察に意を注いだことはいうまでもない。

前記の試掘溝は、東南方向のものを第1トレンチ、南北方向のそれを第2トレンチと呼称することとしたので、次にその結果を上層から順次記すことにしよう。

第1トレンチ第1層は、灰黒色の柔らかい土で現況畠地の耕土で、平均10cmの厚さを示している。第2層は、厚さ4～6cmの黄褐色床土層である。第3層は、約20cmの厚さをもつ灰褐色の無遺物層である。第4層は、厚さ8cmばかりの茶褐色礫混入層で一時期の人為的な整地層と考えてよいが、遺構は検出されていない。この層は西12m付近でとざされ、ここには、旧畦畔を想定させるブロック状高まりがあり、以西の同一レベルには灰白色の旧水田耕作土が認められる。したがって、12m付近を境として土地利用における旧状が相違していたものと判断しうる。第5層は、暗茶褐色の包含層でこの層から時期を異にする遺物が採集された。第6層は暗茶褐色の礫混入層で遺物は皆無である。第7層は黒色粘質土層で美作地方一円にひろがるいわゆる黒ボク層でこの層及びこの下層から遺構は検出されていない。

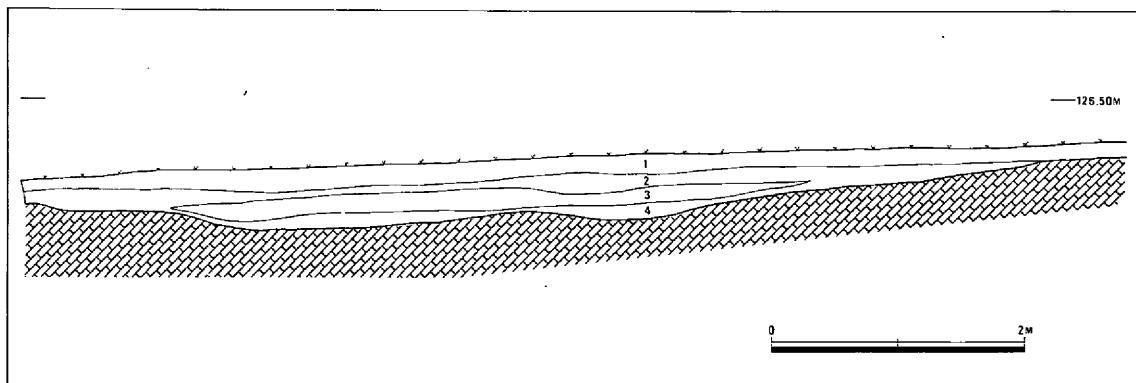
二宮遺跡

第2トレンチ、第1トレンチと基本的な層序関係は付合するが、各層は北が高く南へ傾斜する傾向を示し、下層ほど傾斜変換点が早い。つまり、第4層は10~11m付近で、第6層は7mラインから急に南へ落ち込んでいる。ふつう住居址が形成される平坦面は認められず、長期間、緩傾斜地であったことを物語っている。(第3図参照)。第5層は、暗灰褐色の遺物包含層で、4.4m付近を頭部とし徐々に傾斜して厚さを増す。ことに7m付近で後述する「石帶」の出土をみたので付記しておきたい。第5層の下位には、無遺物層の灰黒色土及び黒色粘土が堆積していて、そのさらに下位に、黄色土の中に大小の礫を混入したいわゆる第3紀層の地山層がみられる。そして、トレンチ南半の土壤構造としては、第4層の上面に一条の旧水田層が看取でき、時期決定の決め手を欠くが、比較的新しい水田址と思われる。

遺物

遺物は、すべて第5層で採集されたが、時代的にかなり幅があり、この層自体プライマリーなものでなく2次的な堆積層といってよい。

- 1 須恵器杯 ごく少数ながら高台付身がある。高台の高さや張りが弱く、8世紀代のものと考えられる。
- 2 須恵器杯 底部に糸切りを残すもので、かなり多量に検出されている。11世紀頃のものであろうか。
- 3 須恵器甕 内面に青海波文をとどめているが、その原体はかなり大きい。いずれも小片で器形を想定することはできない。
- 4 石 帯 椎円形の長軸に平行する一辺のみを直線的に切断・加工した形で、黒色を呈している。長径3.2cm、短径2.2cmを測り、裏面には2孔1対の小孔が3ヶ所穿たれている。県下では、久米郡久米町久米磨寺、勝田郡勝央町平遺跡などで同形同大のものが出土している。



第2図 岡の丸B地区南北トレンチ土層断面 ($\frac{1}{50}$)

岡の丸地点

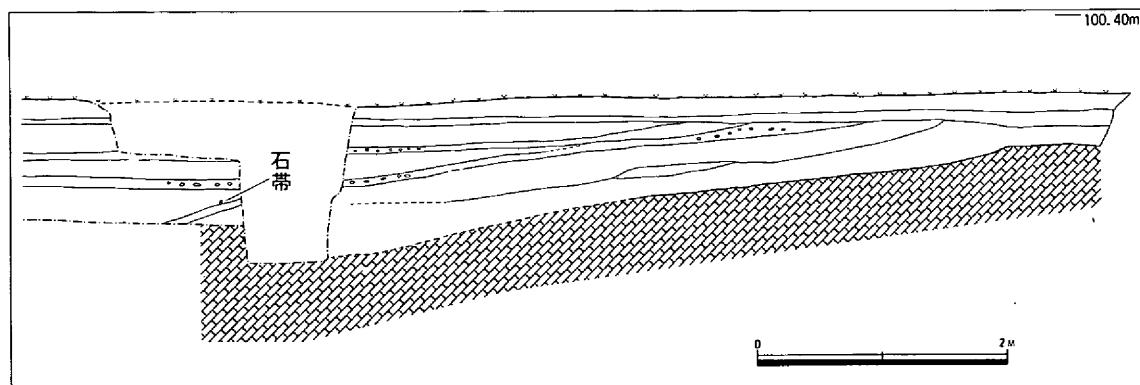
いっぽう、津山市二宮岡の丸の対象面積は、約900m²で、うち約100m²を発掘調査した。ことは、美作で最大の前方後円墳、全長90mを測る美和山1号墳をふくみ、他の円墳2基とともに(今回の調査で

二 宮 遺 跡

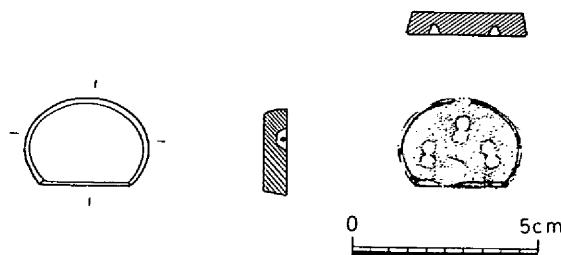
さらにもう 1 基確認) 一群を構成する、通称、美和山古墳群に近接している。本古墳群の性格については河本清氏の論考にゆずるが、美和山古墳群のそれぞれは、第 1 号墳、第 2 号墳、第 3 号墳の呼称のほか、胴塚、蛇塚、耳塚ともいわれる(註 1)。その最南部にある第 3 号墳つまり耳塚の墳端がどの位置にあるかによって、路線の計画決定が左右されるため、今回は周溝の所在をトレンチ調査で確かめるとともに、あわせて周辺台地一帯に各時期の各種の遺構がどのように遺存しているかを見極める目的で実施した。トレンチは、南北方向に 3 本、東西方向へ 1 本を設定し、南北方向の、中央のものを第 1 、西側のそれを第 2 、東側の小試掘溝を第 3 、東西のものを第 4 トレンチと呼称することとした。

問題は第 1 トレンチで、その北端にゆるやかな窪地が認められる点である。それは、耳塚の周溝と早急に断定しがたいあり方を示しているが、ほぼ南北にのびる尾根線上の南半については、古墳築成時に一定の造成工事を行ったようである。第 3 トレンチの北端、用地外にも、南方から北側へ落ち込む肩部を検出したが、第 1 トレンチにみられるそれと直接的に結びついて、耳塚の周溝肩部を形成するとは、位置関係からしてとうてい考えられない。しかしながら、たとえ周溝と断定できないにしても、古墳造営時の、関連造成面であることに違いないと思われるから、その取り扱いについては慎重を期すべきであろう。

その他、各トレンチにおいても、弥生または土師器を伴う住居址、土器棺、土壙墓、ピットなど各種の遺構が確認された。これらの確かな検出と掘りあげ等については、次年度以降の本格調査にゆだねることとした。



第3図 天王D地区第2トレンチ土層断面 ($\frac{1}{60}$)



第4図 天王D地区出土石製鎧帶 ($\frac{1}{2}$)

第4章 第2次調査の概要

調査地区の概要

調査地区は東流する吉井川に向かい、北より南方に高さを減じながら延びる4本の丘陵と、それらに挟まれた3本の谷を延長740m、巾20~35mで区画する道路部分21000m²である。

これらを字名により西端A丘陵を天王地区、さらに東の谷を西宮峪地区、次のB丘陵を藏屋敷・荒神元・宮峪地区、さらに東の谷を東宮峪地区、美和山古墳群の存在するC丘陵を岡の屹・寺前地区、東の谷を寺前地区、東端D丘陵を寺東、岡東、紫竹川・ヒョウタン田地区の12地区に分ける。そして、遺構は4本の丘陵部分を中心に検出されており、西宮峪地区の深い谷部においても柱穴・溝等がみられる。東宮峪・寺前両地区の深い谷部のトレンチ・グリッド調査では、湧水・土崩れ等により遺構の確認は不可能であり、中世を主体とした包含層を確認するにとどまった。

おおまかに全体をながめると、遺構は弥生時代中期後半、後期、古墳時代前半、後半の「集落」の一端を覗かせる住居址、袋状ピット、建物、鍛冶炉、溝、土壙等、古墳時代前半の墓として埴輪円筒棺、盛土墳等がみられる。

中世では、建物と溝の配置が一定のまとまりを見せる館址と考えられるものがあり、他に井戸・地下式横穴墳がみられる。これらには重複・拡張関係が存在する。調査区内で最も多く面積を占める遺構である。

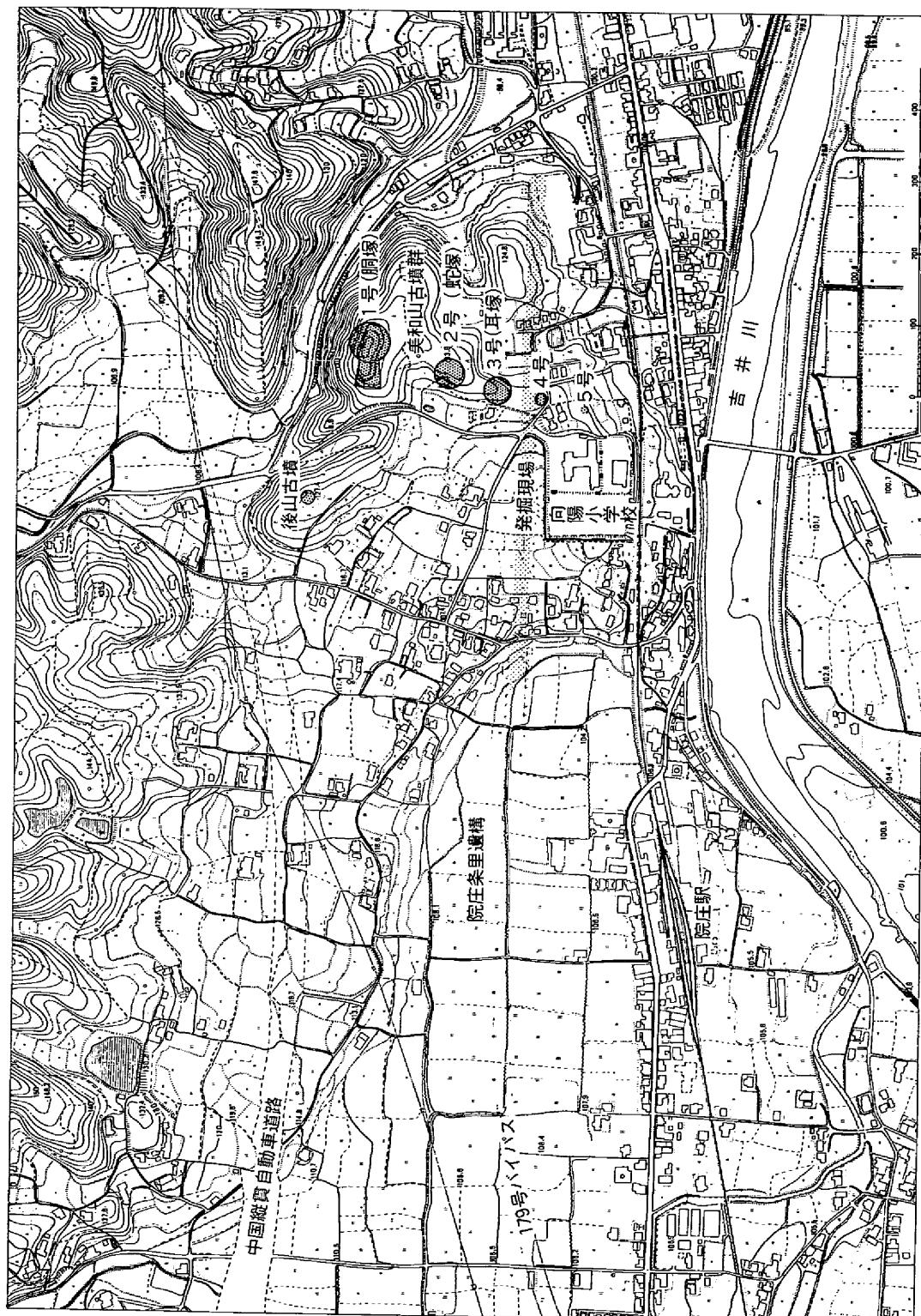
近世では、墓地・建物・井戸・鳥居址・祠址・土壙等がみられ、とくに墓地として利用されたスペースが大である。

遺物は前記した遺構に伴うものが大半をしめる。中期後半の遺物は、美作地方において丘陵部に集落形態が出現するのに合致するものである。岡の屹A地区に検出された袋状ピット16基中には、津山市河辺天神原式（註2）よりも新しい要素を持ち、山陰地方の鳥取県秋里遺跡（註3）の土器に類似するものが160個体以上出土している。そして、これらが耳塚の南南西に存在することも興味がもたれる。それらの土器より若干先出的な遺物をもつ住居址を切って、埴輪円筒棺が耳塚と4号墳間に出土している。

岡東D地区では6世紀末~7世紀初頭と考えられる鍛冶炉4基にともない周辺より多量のカナクソが検出されており、時期を同じくする住居址も存在する。各地区にみられる掘立柱建物は奈良末~平安期、鎌倉・室町時代、とくに中世のものが中心になると考えられ、高台付杯・勝田焼・備前焼・青磁（宋・明）等の破片が柱穴内より検出されている。なかでも勝田焼と思われる破片が多く出土している。

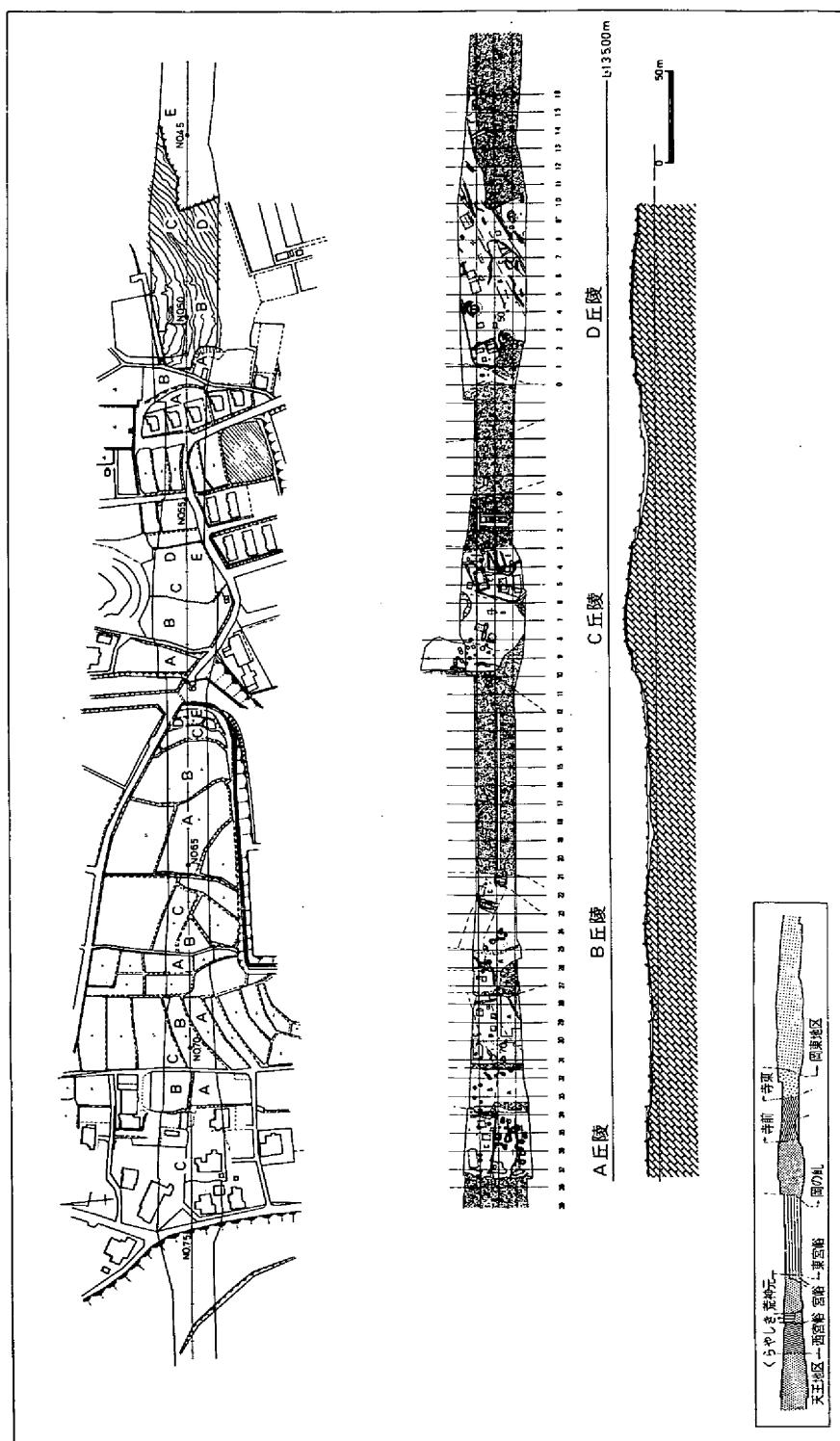
近世にあっては、土壙墓内外、土壙内一括投棄等の陶磁器が多量に出土しており、建物内土壙と土壙墓内出土の土器が近似している例がある。同時期の居住地と墓地が検出された。

二宮遺跡



第5図 二宮遺跡周辺地形図 (600)

二宮遺跡



第6図 二宮遺跡調査前・後の比較図 (4000)

二宮遺跡

遺構一覧表(表-3)

遺構番号	種類	地区	図番号	図版番号	時期	備考
1	溝	荒神元A地区	第12図			新 捣鉢(備前焼)
2	溝	荒神元A地区	第13図	6-2		古 白磁、須恵器片、スリバチ 配石間より小皿、No.1溝によりカット
3	土壙	荒神元A地区	第14図			土器片
4	井戸	荒神元A地区	第15図	7-1 7-2		須恵器(勝田焼)
5	井戸	荒神元A地区	第17図	8-1 9-1・2		鉢 カメ、ツボ片、石臼、砂中より土器片 石組間からはイブツ無し
6	柱穴列	荒神元A地区	第19図			須恵器碗、西端ピット内勝田焼
7	建物	蔵屋敷地区	第8図	6-2		柱穴底に台石をもつ
8	土壙	荒神元B地区				最も新しいもののゴミ、硬い土
9	土壙	荒神元B地区	第23図	12-1		地表よりカットして造られている
10	土壙	荒神元B地区	第24図	12-2		軟い土(パサパサ)
11	袋状ピット	荒神元B地区	第24図	12-3		土器小片
12	土壙墓	荒神元B地区	第25図	12-4 13-1・2		擂鉢
13	土壙	荒神元B地区	第27図	12-5		灯明皿
14	祠	荒神元B地区	第29図	12-6		「荒神社」
15	溝	荒神元B地区				糸切り土器(皿)
16	土壙	荒神元B地区	第28図	12-7		埋土中に小石3ヶ、上面より皿
17	土壙	荒神元B地区	第30図	12-8		サヌカイト片
18	鳥居	荒神元B地区	第31図	14-1		瓦出土、灯明皿
19	建物	荒神元C地区	第38図	16 17-1		3×1間 Pit 2、8遺物出土
20	建物	荒神元C地区	第39図	16 17-1		4×1間 Pit 6、7遺物出土 石がめだつ
21	建物	荒神元C地区	第40図	16 17-1		2×1間 Pit 9遺物出土
22	建物	荒神元C地区	第42図	16 17-1		2×2間(濃い柱痕)
23	建物	荒神元C地区	第44図	16 17-1		1×4間 Pit 1、4遺物出土
24	建物	荒神元C地区	第41図	16 17-1		3×2間 Pit 13遺物出土 14遺物出土
25	土壙	荒神元C地区	第43図	16 17-1		二段掘
26	建物	宮崎地区	第45図	17-2		3×2間
27	建物	宮崎地区	第46図	17-2		2×2間
28	建物	宮崎地区	第47図	17-2		不規則
29	袋状ピット1	岡の山A地区	第65図	20-1 20-2		遺物多量に出土
30	袋状ピット2	岡の山A地区	第68図	21-1		
31	袋状ピット3	岡の山A地区	第69図	21-2		
32	袋状ピット4	岡の山A地区	第70図	22-1 22-2		
33	袋状ピット5	岡の山A地区	第71図	23-1		
34	袋状ピット6	岡の山A地区	第73図	23-2		
35	袋状ピット7	岡の山A地区	第74図	24-1 24-2		比較的原状をとどめる。
36	土壙	岡の山A地区		27-2		
37	住居址	岡の山B地区	第95図	39-1 40-1 2 41-1~8		火災を受けている
38	長い土壙(溝)	岡の山B地区	第99図			No.37住居址の覆土より硬質、土器片、ハニワを含む、No.39建物により切り込まれている
39	建物	岡の山B地区	第105図			柱穴の浅いもの(ベタ柱)
40	耳塚周溝	岡の山B地区	第101図	42-1 42-2		堆積土中層より奈良時代 須恵器
41	古墳周溝	岡の山B地区	第102図	43-1 43-2		配石中および下位よりハニワ片出土
42	袋状ピット8	岡の山B地区	第76図	25-1 25-2 26-1		現代使用の道下より出土 上部構造をよく残すものである
43	柱穴列	岡の山B地区	第107図			No.37住居址西側に並ぶ
44	土壙	岡の山B地区				不明土壙
45	袋状ピット9	岡の山B地区	第79図	26-2		木根が入りこみ擁括あり
46	建物	岡の山C地区	第109図			礎石(台本を有する) 2×5間 両端部柱穴石を有さない
47	建物	岡の山C地区	第111図			柱穴内に石が目立つ 2×3間 No.46とほぼ同一棟方向
48	建物	岡の山C地区	第115図			No.49建物の縁か?
49	建物	岡の山C地区	第113図			地表より70cm下に柱穴上面検出
50	井戸	岡の山C地区	第132図	50-1 50-2		つい最近までこの井戸について知っている人が存在した

二宮遺跡

遺構番号	種類	地区	図版番号	時期	備考
51	土壙	岡の山C地区	第117図	45-1 45-2	土師器皿3~4枚出土
52	土壙	岡の山D地区			北側より南側に段が存在する
53	溝	岡の山D地区	第130図		No.59建物に伴う。雨落溝か?
54	土壙	岡の山D地区	第124図	47-1	同規模の穴が3つ並び、計画的な掘り方
55	横穴	岡の山D地区	第121図	47-2	堅坑より横穴を設けている、閉塞石あり
56	建物	岡の山D地区	第134図		柱穴内に硬質の砂土がつまっている
57	土壙	岡の山D地区	第126図	51-1	人頭大河原石が底部にみられる 耕作土より75cm下にて上端検出
58	建物	岡の山D地区	第127図		近世墓に柱穴を掘削されている
59	建物	岡の山D地区	第130図	48-2	ペタ柱建物
60	溝	岡の山D地区			変形プランを有する
61	土壙	岡の山E地区	第135図	51-2	石組み土壙
62	土壙	岡の山D地区			焼土面、炭、土器片
63	建物	岡の山D地区	第129図		No.60溝のプランに類似する構造
64	建物	岡の山D地区	第128図		3×2間以上の規模を有する
65	溝	岡の山E地区			L字区画をもつ、No.50によって破壊されている
66	建物	岡の山B地区	第106図		No.67溝区画外に存在する、2×2間
67	C区画・溝	岡の山C地区			最も規模の大きい区画溝
68	建物	岡の山C地区	第110図		5×2間No.64建物等により切られている
69	建物	岡の山C地区	第112図		最終削出しにより検出建物
70	建物	岡の山E地区	第133図		柱穴内に硬質砂土がつまっている
71	柱穴列	岡の山E地区	—		No.56と重複
72	溝 (C区画内側)	岡の山C地区			No.67溝の内側にあり、1段階古い時期のものである
73	溝 (C区画内側)	岡の山C地区			南北溝
74	土壙	岡の山E地区			浅く東に延びる可能性がある
75	溝	岡の山D地区			No.58・63・64等の建物を含む
76	溝	岡の山C地区			道状のもの
77	建物	岡の山B地区			不規則な柱穴
78	土壙	岡の山C地区	第119図	45-2	No.47建物が切ってつくられている
79	建物	岡の山C地区	第114図		3×2間
80	土壙	寺東B地区	第164図	61-1 61-2	破壊された場所にはよく残存する。土壙内遺物
81	柱穴列	寺東B地区			B地区周縁に並ぶ
82	住居址	岡東B地区	第171図	64-1・2 65-1・4	13軒の重複、切り合いからなる。袋状ピットを屋内に有する、火災
83	住居址	岡東B地区	第175図	66-1・2 69-1・2 67-1・2 70-1・2 68-1・2	切り合い重複がみられ袋状ピットを屋内に有する 火災
84	建物	岡東B地区	第224図		3×2間
85	住居址	岡東B地区	第203図	74-2	
86	住居址	岡東B地区		74-2	
87	溝	岡東B地区			
88	住居址	岡東B地区	第204図	74-1 75-1・2	
89	溝状遺構	岡東B地区	第204図	74-1 75-1・2	No.88を切る、奈良末~平安時代
90	土壙	岡東B地区	第182図	72-1	円形ピット中心に小柱穴を有する
91	建物	岡東B地区	第194図	71-1	若干疑問
92	建物	岡東B地区	第195図	71-1	2×1間 深い柱穴
93	住居址	岡東B地区			住居址の壁体溝のみ残存する
94	建物	岡東B地区	第198図	71-1 71-2	3×1間No.95建物と重複する
95	建物	岡東B地区	第199図	71-1 71-2	2×2間No.92建物と同一棟方向をとる
96	土壙	岡東B地区	第183図	71-2 72-1	No.90土壙に類似(土壙中央に小ピットを有する)
97	建物	岡東B地区	第197図	71-2	2×2間の深い柱穴を有する
98	段状遺構	岡東B地区			
99	建物	岡東B地区	第196図		2×1間比較的大形の掘り方を有する
100	袋状ピット	岡東B地区	第187図	73-1	屋外に単独で存在する

二宮遺跡

遺構番号	種類	地区	図番号	図版番号	時期備考
101	袋状ピット	岡東B地区	第191図	73—2	削平を受けており底部のみ残す
102	柱穴列	岡東B地区	第202図		2間大形掘り方を有する
103	溝	岡東B地区			欠
104	柱穴例	岡東B地区			欠
105	段状遺構	岡東C地区	第200図		段の下部変換点に浅い溝をもつ
106	柱穴例	岡東C地区	第200図		円方形の掘り方が重複する
107	柱穴列	岡東C地区	第200図		柱穴内に須恵器、土師器片、カナクソ等を持つ
108	土壙	岡東B地区	第186図		削平を受けており、土器が半欠損している
109	住居址	岡東B地区	第206図	76—2	N _o 88住居址を持って造っている
110	住居址	岡東B地区	第207図	76—2 77—1	柱穴4本を持つ、長頸壺、石鏃
111	土壙	岡東B地区	第209図	76—2	風例木痕
112	住居址	岡東C地区	第210図	78—2 76—1	方形プラン、須恵器、土師器、カナクソ等を持つ
113	住居址	岡東C地区	第210図	76—1 78—2	サヌカイト片
114	住居址	岡東C地区	第211図	76—1 78—1・2	須恵器、カナクソ、奈良～平安時代
115	溝	岡東C地区			須恵器
116	溝	岡東C地区			須恵器、カナクソ
117	住居址	岡東C地区	第212図	77—2	石をもつ土壙と切りあう
118	住居址	岡東C地区			須恵器、土錘
119	住居址	岡東C地区	第214図	79—1・2 81—2 90—1	重複が著しい、弥生時代中期後半～後期後半
120	建物	岡東C地区			1×1間 勝田焼椀
121	柱穴列	岡東B地区	第202図		用地外に北側の桁が存在する可能性あり 砥石
122	住居址	岡東C地区	第216図	81—1	
123	住居址	岡東D地区	第217図	81—1 90—1 82—2	
124	住居址	岡東D地区	第218図	81—2 84—1・2 89—1 81—1・2 85—1・2 90 83—1・2 86—1・2 —1	鍛冶炉4基を持つ 6世紀後半の須恵器杯身片出土
125	住居址	岡東D地区	第222図	87—2 89—1・2 88—1・2 90—1	弥生時代中期後半～後期後半
126	袋状ピット	岡東D地区			
127	集石土壤	岡東C地区	第184図	72—2	
128	柱穴列	岡東D地区	第225図		
129	建物	岡東B地区	第226図	91—1	
130	住居址	岡東B地区			土錘出土
131	段状遺構	岡東B地区			土師器皿
132	土壙	岡東B地区			黒色土（黒ボク）充満
133	古道	岡東C地区	第228図	91—2 93—1・2 92—1	石敷き、須恵器、土師器、カナクソ等を持つ
134	遺構	岡東C地区	第230図	94—1・2	不形プランにてN _o 134に類似
135	住居址	岡東C地区			壁体のみで溝なし、
136	溝	岡東B地区			
137	溝	岡東B地区			
138	土壙	岡東C地区	第232図		
139	溝状遺構	岡東C地区	第233図	92—2	周辺柱穴に弥生時代後期前半の土器片
140	住居址	岡東E地区		95—2	用地外にのびる
141	建物	岡東B地区		75—2	
142	集石	岡東B地区			
143	住居址	岡東B地区			
144	溝	岡東B地区			
145	住居址	岡の丘A地区		27—1	
146	土壙	天王B地区	第236図	104—1	
147	土壙	天王B地区			
148	土壙	天王B地区		104—2	
149	土壙	天王B地区	第237図		
150	土壙	天王B地区			

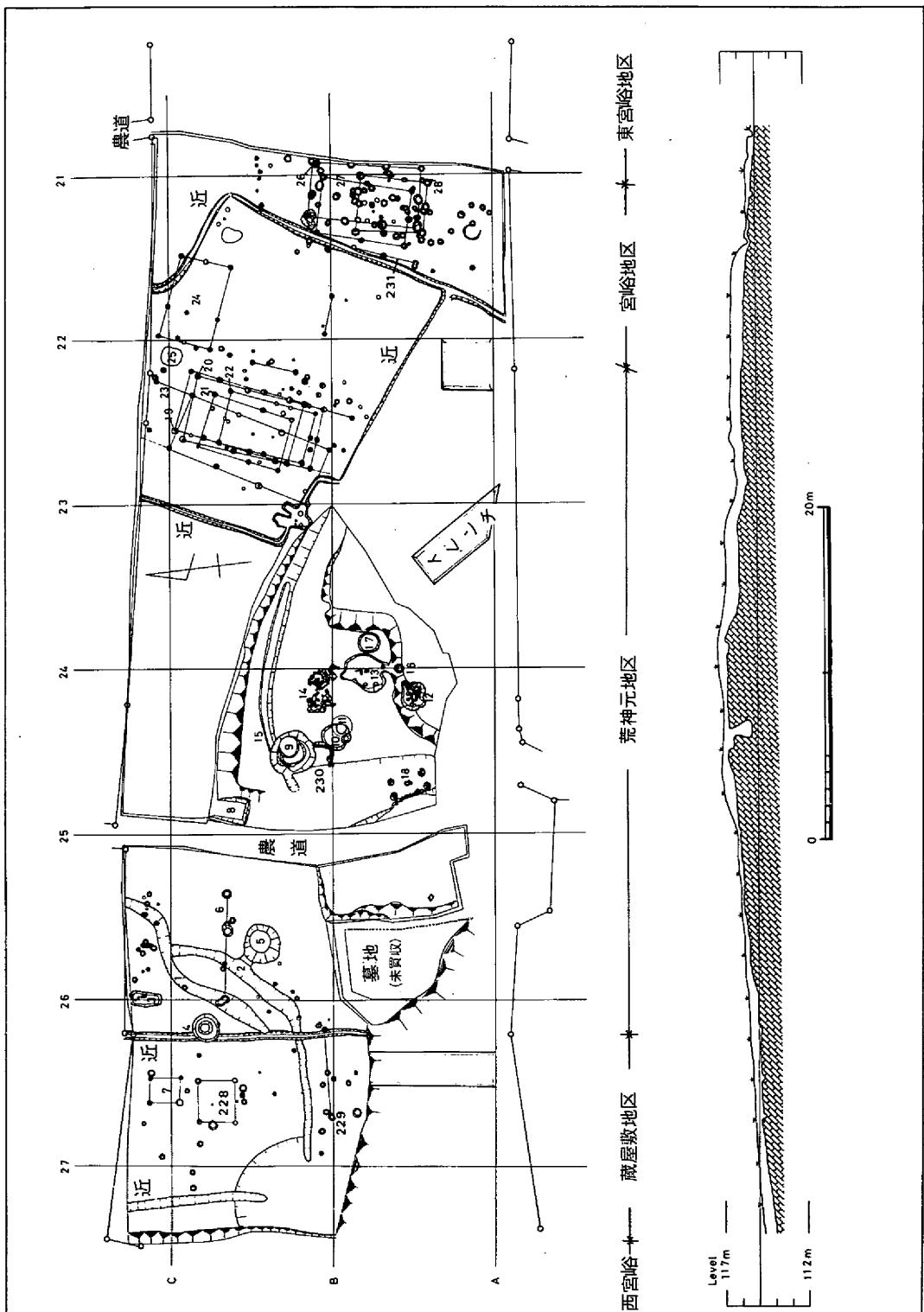
二宮遺跡

遺構番号	種類	地区	図番号	図版番号	時期	備考
151	土壙	天王B地区	第235図	105-1		
152	土壙	天王B地区				
153	土壙墓	天王C地区北	第241図			
154	土壙墓	天王C地区北	第242図	105-2		
155	土壙墓	天王C地区北	第243図			
156	土壙墓	天王C地区北	第245図	106-2 107-1・2		
157	土壙墓	天王C地区北	第244図	108-1		
158	土壙	天王C地区北				
159	土壙墓	天王C地区北				
160	土壙	天王C地区北				
161	土壙	天王C地区北				
162	土壙墓	天王C地区北	第246図	106-1		
163	—					
164	土壙墓	天王C地区北	第247図			
165	土壙	天王C地区北		108-2		
166	土壙墓	天王C地区北	第248図			
167	建物	天王C地区北	第250図			
168	建物	天王C地区北	第249図			
169	建物	天王C地区北	第251図			
170	土壙	天王C地区南				
171	土壙	天王C地区南	第252図	99-1	3~4回の拡張	
172	土壙	天王C地区南	第253図	99-1	竹が出土	
173	土壙	天王C地区南		99-1		
174	土壙	天王C地区南	第257図	99-2	舟形の大型土壙	
175	土壙	天王C地区南	第258図	100-1	井戸状痕跡をもつ 瓦	
176	土壙	天王C地区南	第264図			
177	土壙	天王C地区南	第265図			
178	土壙(円形)	天王C地区南	第265図			
179	土壙	天王C地区南				
180	井戸	天王C地区南			調査前まで使用	
181	土壙	天王C地区				
182	土壙	天王C地区				
183	土壙	天王C地区				
184	長方形土壙	天王C地区			志茂酒場銘のある「とっくり」出土	
185	溝	天王C地区			No189により切られている	
186	土壙	天王C地区				
187	土壙	天王C地区				
188	土壙	天王C地区	第262図			
189	長方形土壙	天王C地区	第262図			
190	土壙	天王C地区	第263図			
191	土壙	天王C地区	第267図			
192	土壙	天王C地区	第267図		井戸状遺構、瓦	
193	—					
194	土壙	天王C地区	第268図	100-2		
195	土壙	天王C地区	第268図	100-2		
196	土壙	天王C地区	第269図			
197	土壙	天王C地区	第269図		No196土壙と同一遺物をもつ	
198	土壙	天王C地区			灯明皿	
199	土壙	天王C地区			近代のもの	
200	礎石(4)	天王C地区				

二 宮 遺 跡

遺構番号	種類	地区	図番号	図版番号	時期備考
201	土 壤	天王C 地区			
202	柱穴列	天王C 地区	第270図		
203	柱穴列	天王C 地区	第270図		中世Na203、204柱穴列と切り合う
204	柱穴列	天王C 地区	第270図		
205	土 壤	天王C 地区南			
206	土 壤	天王C 地区南	第265図		
207	近世墓	天王C 地区南	第271図	101—1	
208	近世墓	天王C 地区南	第271図	101—1	
209	近世墓	天王C 地区南	第271図	101—1	
210	近世墓	天王C 地区南	第272図		
211	近世墓	天王C 地区南	第272図		銭、歯等出土
212	近世墓	天王C 地区南	第272図	101—2	人骨片
213	近世墓	天王C 地区南	第272図	101—2 102—1	人骨片
214	近世墓	天王C 地区南	第272図	101—2 102—2	キセル、銭、人骨片
215	近世墓	天王C 地区南	第272図	101—2	
216	—				
217	袋状ピット10	岡の山A 地区北	第 80図	28—2 29—1	
218	袋状ピット11	岡の山A 地区北	第 81図	28—2	
219	袋状ピット12	岡の山A 地区北	第 82図	28—2 30—1・2 29—2	
220	袋状ピット13	岡の山A 地区北	第 84図	31—・12 33—1 32—・12	
221	袋状ピット14	岡の山A 地区北	第 86図		
222	袋状ピット15	岡の山A 地区北	第 88図		
223	袋状ピット16	岡の山A 地区北	第 87図	33—2	
224	住居址	岡の山A 地区北	第 91図	28—2	
225	地下式横穴	岡の山A 地区北	第 90図	34—1 34—2	非常に小型である、人骨を入れた例が他県ではみられる
226	溝状構	岡の山A 地区北			
227	土 壤	岡の山A 地区北	第 93図		
228	建 物	蔵屋敷地区	第 8 図	6 — 2	
229	柱穴列	蔵屋敷地区	第 9 図		
230	住居址	荒神元B 地区	第 32図		
231	柱穴列	宮崎地区	第 48図		
232	住居址	岡の山A 地区			
233	土 壤	岡の山C 地区	第120図		しまった土がつまっている
234	土 壤	岡の山D 地区	第123図		底部に十字の溝をもつ土壤

二 遺 跡



第7図 藏屋敷・荒神元・宮峪地区遺構分布図 ($\frac{1}{400}$)

三官遺跡

第1節 藏屋數地區

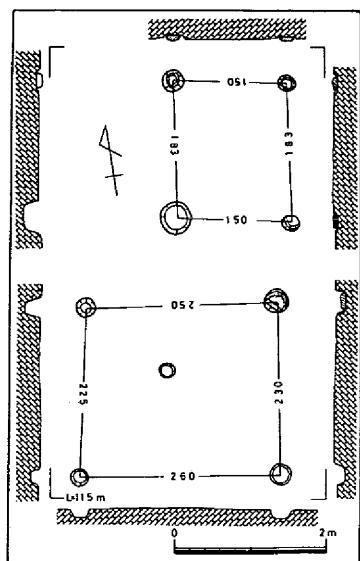
1. 蔵屋敷地区の概要（第7図、図版6）

二宮遺跡B丘陵西端部178.6m^a (15m × 11.9m) がそれにあたり、海拔約115m付近の平坦地に位置する。遺構は黄褐色地山面（第三紀層）より掘り込まれており、水田下約20～30cmにて検出することができる。検出時においては古代より中世・近世・近代にかけての小土器片が混在して出土し、継続して後世の攪乱が及んでいることがうかがえる。

蔵屋敷地区より西宮崎地区に向かう谷肩口部では、深さ約80cmの黒色土堆積が傾斜にそってみられ、層中より備前焼の壺・甕・鉢等が出土している。

遺構は蔵屋敷平坦部で中世と考えられる小型建物2棟、住穴列1が存在し、他に荒神元A地区より

西宮峪地区の谷へ延びる№5井戸の排水溝が存在する。小字名の蔵屋敷は水田幅13mでさらに北方山側に約13mまで及ぶ。



第8図 No. 7・228建物 ($\frac{1}{100}$)

2. 蔵屋敷地区の遺構・遺物

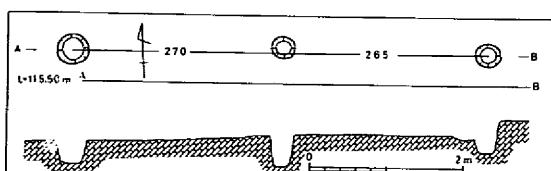
No. 7 建物（第8図、図版6-2）

南北方向に棟をもつ 1×1 間の小規

方向が約163cm、梁方向が150cmを測り、南西隅の柱穴を除く他の3柱穴内に台石を有する特徴を持っている。柱穴直径は20~30cm、深さ約10cmを測る、台石には河原石の板状のものを使用し平坦部を利用している。なお、柱穴内には遺物は検出されなかった。

No.228 建物(第8図、図版6-2)

No.7 建物南側約1mにあり、棟を東西にもつ1×1間の小規模建物である。柱間は桁方向250~260cm、梁方向225~230mを測り、北東隅の柱穴内に台石を有するものである。柱穴直径は20~30cm、深さ15~25cmを測る。柱穴内には遺物は検出されなかつた。

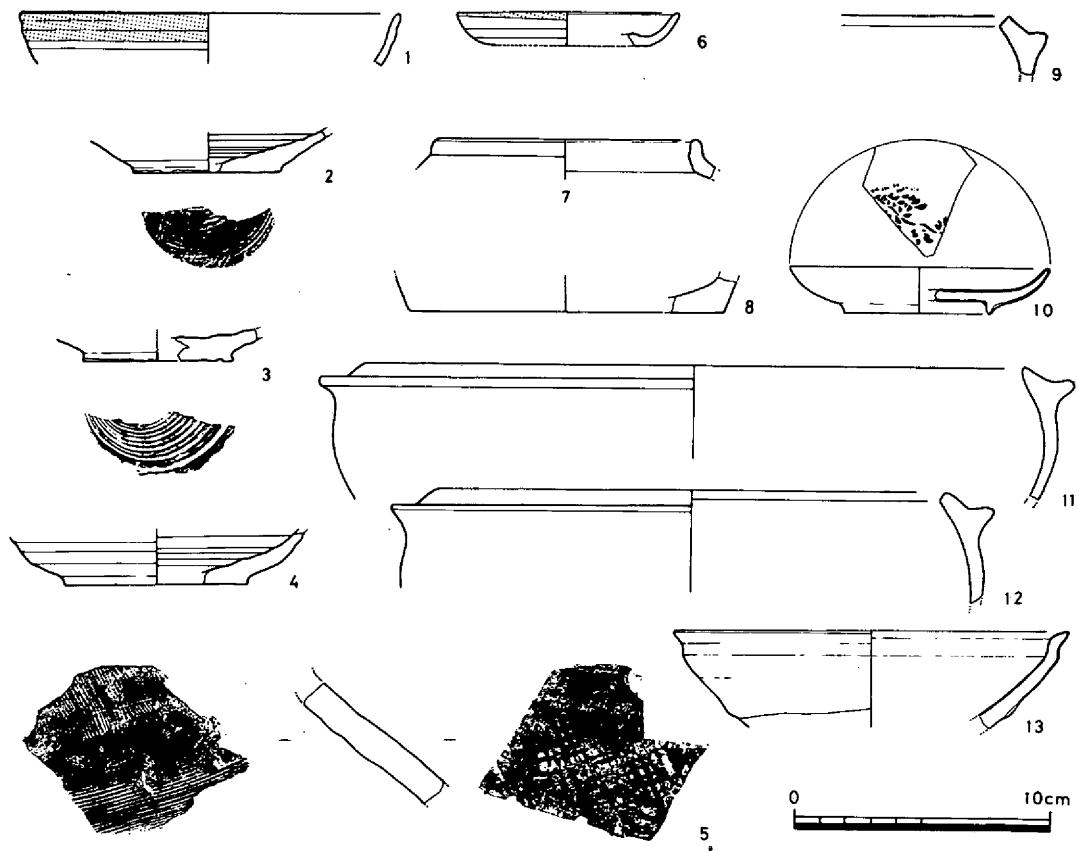


第9図 No.229柱穴列 ($\frac{1}{100}$)

No.229 柱穴列（第9図）

南端部分にあり、そこより南側は水田造成時に約1mの削平を受けている。そのため東西に長軸方向をもつと考えられる建物の可能性もうかがえる。柱間は265~270cmを、柱穴直径約30~40cm、深さ30~45cmを測る。前記のものと同

二宮遺跡



第10図 蔵屋敷地区出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

様に遺物は検出されなかった。

遺構に伴わない遺物（第10図・11図、図版111）

表土剝ぎの時点、及び谷肩部黒色土中より出土したものであり、大半が小片である。

須恵器・瓦質土器・陶磁器（第10図、図版112—1）

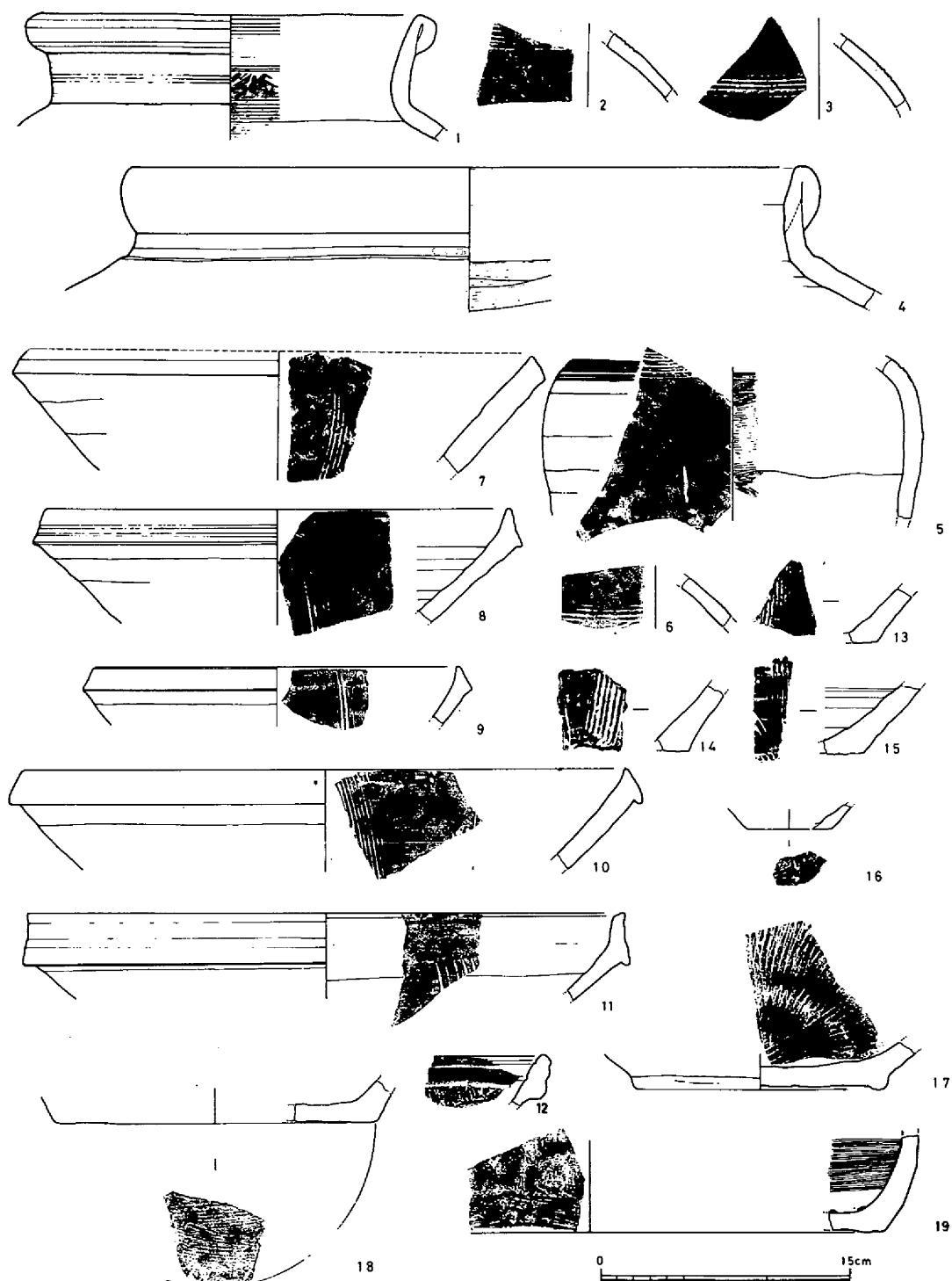
1～6は勝田郡勝央町を中心分布する窯跡出土品にみられ、従来勝田焼と称されているものと考えられる。1～4は楕円形土器であり、薄くシャープに仕上げられたもので体部内外面にロクロびきの凸凹が顕著であり、口縁端外面下位に2cm巾の縁黒がみられる。底部は糸切り離しが行われている。

5は器外面に格子叩き目、内面には櫛（刷毛）状工具による鮮明なナデが縦横に施されている。勝田焼の大型品には一般的に観察できるものである。7・8・9も須恵質の土器であるが勝田焼か否か不明である。

10は伊万里系のものと考えられ、内外面に釉薬がみられ磁胎は白色を呈する。見込み部分に萩、あるいは薦と思われる草花文の染付が施されている。

11・12は瓦質の鍔付鉢である。内面にこまかいヨコナデ、外表面は指頭圧痕及びナデが施され、また

二宮遺跡



第11図 蔵屋敷地区出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

二 宮 遺 跡

12の外面鶴下位にはススの付着がみられる。13は器内外面に淡緑色の釉薬が施され、全体にこまかい貫入がみられる。外面下位は無釉である。

備前焼（第11図、図版111）

1～6は壺形、及び甕形の土器である。これらの口縁は端部を外に折り返し玉縁を作り出し、肩部には6～9条の櫛描平行沈線が施されている。胎土中に白色小砂粒を含み若干荒く、色調赤茶褐色のものが多い。器壁は焼成色がサンドイッチ状にみられ、さらに斜位方向に縞状の粘土紐積み重ね痕跡が観察できる。

須恵器にみられるような均一したヨコナデは多くみられず、外面は横、斜位の荒い刷毛状工具によるナデが施されている。

7～17は擂鉢の口縁部、及び底部である。口縁では端部の拡張の無いものから、上下に拡張するもの、拡張した立上がりに凹線をもつもの等がみられる。内面の卸し目は8条より全面におよぶものまでがあり、下位を中心著しく磨滅しており長年の使用を物語っている。外面では端部屈曲部より下位約2.5cmのところに重ね焼き痕跡をとどめており、それを境に上部が赤茶色に発色し、下部は若干淡い赤灰色に焼成変化している。9は他のものと同様に使用痕、重ね焼きがみられるが内外面暗灰色の瓦質土器である。

底部では内面下端が櫛状工具による卸し目描きの出発点となっており、卸し目には細筋と太筋の櫛巾の相違がみられる。底部は薄く作られており、外面では凹凸状をなすものが目立ち、焼成も灰色に近い。体部はそこより約50°～60°の角度をもって立上がるものが多い。鉢も壺、甕同様に器壁内の焼成色がサンドイッチ状にみられるものもあり、さらに斜位方向に縞状の粘土紐の積み重ね痕跡が観察できる。17は櫛描きが全面におよんでおり、外面底にも削り出しの高台が付くものであり、12と同一の整形が行われている。16は底径5cmを測り色調赤茶色の小壺片である。底部は糸切り痕跡がみられるが、内面の剝落は著しい。

18・19は壺、あるいは甕の底部と考えられるが、備前焼とは異なる感じのものである。18の底部は薄い造りで仕上げられているが、外底面は刷毛状工具によってナデ調整が行われている。19は上底にかけて外面には縦刷毛ナデ後、底部より体部にかけて1.5cmの幅で刷毛状工具による横位の力強いナデが行われている。外面には釉が付着し、焼成は非常に良いものである。

3. 小 結

台石をもつ2棟の建物と柱穴列の時期決定は両者とも遺物を有さないという点において不明であるが、検出された量的に多い勝田焼、備前焼等からある程度の推定が可能である。まず、ここでは勝田焼以前の遺物は検出されておらず、勝田焼がこの地に入った時点以後に遺構は限定される。平安時代後半～末のB丘陵西斜面は削平を受けており、平坦部が造成され生活の場として利用されていたと考えられる。さらに鎌倉時代後半より室町時代全般、とくに前半を中心に利用されていたのではなかろうか。

しかし、この地区は荒神元A地区との関連抜きではのべることが不可能であるため、後述にゆずることにする。

第2節 荒神元地区

1. 荒神元地区の概要（第7図、図版10）

二宮遺跡B丘陵中央部831.8m² (23m × 36.1m) がそれにあたり、海拔115～117.5m間の平坦部に位置する。地形の高低差にしたがって西側の海拔115mを中心とする部分を荒神元A地区、さらに東側の海拔115.5mを中心とする丘陵の背尾部分を荒神元B地区、その北側の海拔116mを中心とする平坦部分をC地区の3地区に分ける。

B地区南側は高さ約1.5の削平を受け丘陵部分を残さず水田・畑地化しており、トレンチ・グリッド調査結果においても遺構・遺物は検出することができなかった。このことは荒神元B地区北側、及び荒神元C地区西側にも同様のことが言える。荒神元A地区の南側では墓地（地権者多数）の一部未買収部分を残す。

（1）荒神元A地区

西宮峪地区と同様の立地を示し、西宮峪地区と荒神元B地区に挟まれた平坦地に位置する。遺構・遺物の検出・出土状況は蔵屋敷地区とほとんど同様である。蔵屋敷、荒神元Aの両地区はほぼ同時期に削平が行われたと考えられ、共通の目的意識でもって平坦面が造成されているようである。

遺構は古代末～中世と考えられる柱穴列1、井戸2、排水溝2、土壙1、他に柱穴が北側に集中して存在する。

（2）荒神元B地区

二宮遺跡B丘陵の状況を比較的よくとどめる高まり(150m²)が、明治42年に高野神社に合祀されるまでの二宮村「荒神社」敷地跡であり、これが荒神元B地区にあたる。合祀後は放置されていたようであり雑木が繁茂し、最近までゴミ捨て場として利用されており、後かたづけに手間取る。表土剥ぎの時点では中央より南南東部分の凹地において新旧の混在した備前焼、荒神社周辺からも灯明皿・小皿が多量に出土している。遺構は弥生時代～古墳時代と考えられる袋状ピット1、住居址1、中世土壙墓1、近世鳥居址1、荒神社基壇1、時期不明土壙6、溝1が存在する。他に荒神元A・B間を南北に走る農道は山西の部落と町を結ぶ主要道、及び参道として使われていたと考えられる。

（3）荒神元C地区

荒神元B丘陵東側の斜面にあたる部分であるが、新しい時期に削平を受けた場所と、中世に建物を造るために削平造成部分との二箇所からなる。両者とも水田として利用されていた場所であるが、最近（調査前）に宅地用の造成が行われ水田床土上面約50cmに盛土がみられる、表土剥ぎ段階の遺物は皆無に等しい状態である。

遺構は中世と考えられる建物6棟、土壙1、なかでも「L」字形を構成する二棟の建物が存在する。これらは宮峪地区の建物の並びとも何らかの形で関連するものと思われる。

二宮遺跡

2. 荒神元地区の遺構・遺物

(1) 荒神元A地区

No. 1 溝

北東より南西方向に傾斜にそって蛇行して走る。長さ12m、幅約70cm、深さ約10~25cmを測る溝である。No. 2 溝を切って作られており、蔵屋敷地区に入る時点で端部で削平消滅している。溝内には黒色土が堆積しており、須恵器杯・備前焼播鉢が出土している。

遺物(第12図)

1は器内外面とも磨滅が著しく円滑化し表面観察は困難である。磨滅具合等より相当の距離を移動したものと考えられる。

2は口径24.5cmを測り、大型白色砂粒を含む焼成不良の備前焼播鉢片である。屈曲部下位約1cmの所に重ね焼き痕跡をとどめており、それを境に上部が淡褐色、下部が褐色、内面が暗褐色の焼成である。口縁端部より内面2cm下位まで太筋の卸し目が描かれている。

No. 2 溝(第13図、図版6-2)

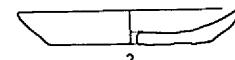
No. 1 溝と同じく北より南方向に傾斜にそって進み、約9mの所で西に向きを変えて蔵屋敷地区に入り大きな溜りに至る。No. 1 とほぼ同規模の溝である。No. 5 井戸の排水施設をなす関連遺構としてとらえることが可能であり、溝内の配石、及び溝方向等からNo. 229 柱列等も同時期の所産である可能性が充分考えられる。

溝内堆積土中より須恵器碗、白磁碗、配石中より土師器皿、備前焼播鉢等が出土している。

遺物(第13図)



第12図 No. 1溝出土遺物 ($\frac{1}{3}$ ・ $\frac{1}{4}$)



第13図 No. 2溝出土遺物 ($\frac{1}{3}$ ・ $\frac{1}{4}$)

二宮遺跡

1は生焼けにて淡灰白色を呈する勝田焼の碗である。ロクロびきの凹凸が内外面に顕著にみられ、底部は太筋の糸切り痕が残る。底部の糸切り離しの時点に粘土がめくれ、細い不安定な帯となっている。

2は口径9cm、器高1.3cm、底形6.2cmを測り、色調淡褐色を呈する土師器平底の小皿である。器内外面の剝落が著しく調整については観察不可能である。

3は削り出し高台部分のみを残す明代の白磁碗である。釉薬は畠付部、高台内を除いて全面に薄くみられる。見込み部分に起伏の少ない菊花16弁のモチーフが施され、磁胎は白色にて混入物はみられない。

4は口径31cmを測り、大型白色砂粒を含む備前焼播鉢である。口縁部は上下に拡張がみられ、屈曲部下位1.1cmに重ね焼き痕跡をとどめる。その痕跡を境に下部が暗青灰色、上部が赤茶褐色、内面が暗灰色の焼成である。口縁端より約2.5cm下位内面に細筋の8条1単位と思われる卸し目が櫛状工具によって描かれている。

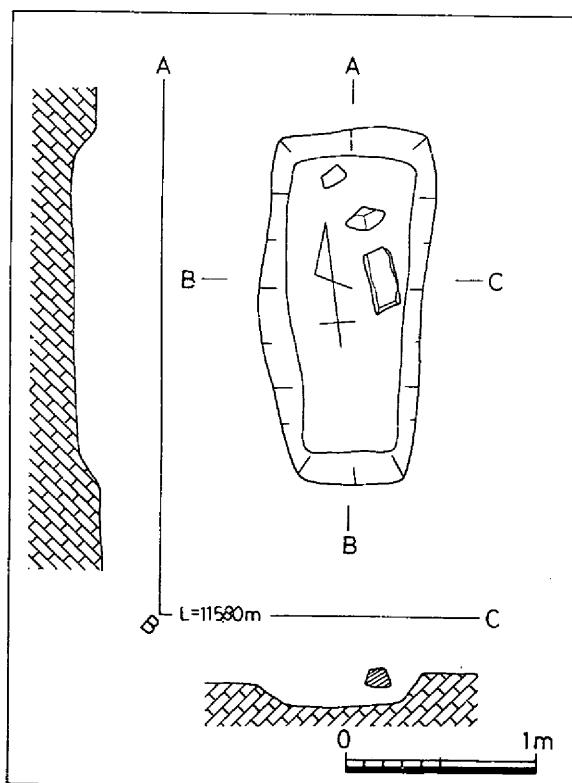
No.3 土壙（第14図）

主軸を南北方向にとり、上端186cm×88cm×15cm、下端156cm×64cmの規模を有する長方形の土壙である。北側より南側に向かって巾狭くなってしまっており、（床面は南側が若干高いようである。）土壙内には覆土に混在して約30cmを大とする角礫3個、小皿を中心とする土師器小片、須恵器小片（勝田焼）等が出土しており、少なくとも平安末より以後の流れ込み堆積か埋土と考えられる。

No.4 井戸（第15図、図版7）

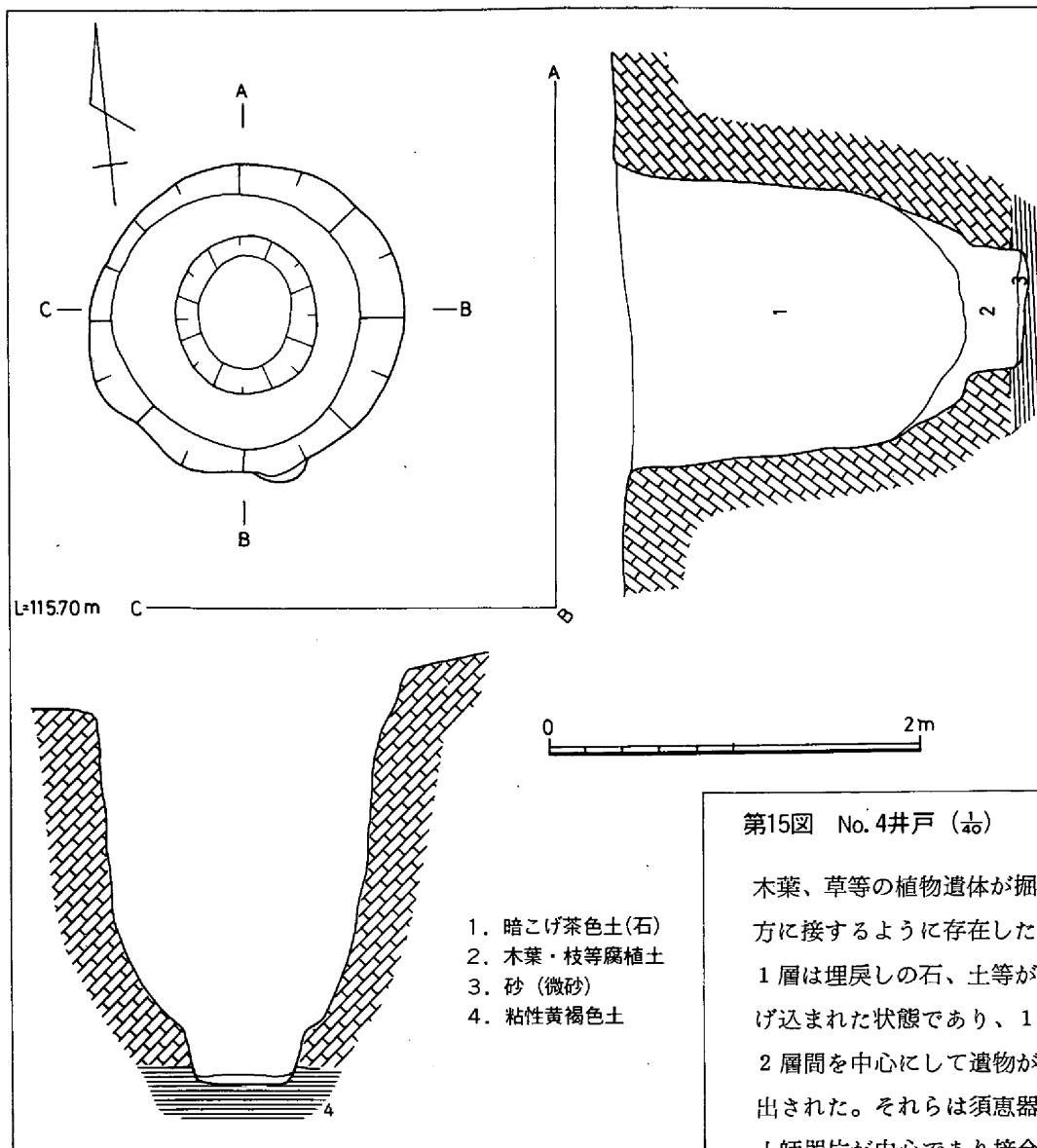
東端部分を現代の水田用水路により削平を受けているが、比較的残りの良い状態であった。井戸掘り方は岩（第三紀層）を掘り下げ210cm下にてそれを掘り抜いており、その下層の粘土をさらに10cm掘り下げたところを井戸底としている。上端径175cm×170cm、深さ220cmを測る素掘りの井戸である。上端面より約130cmまでをほぼ垂直に、そこよりさらに55cmまでを丸みをもって掘り下げ、さらに段によって変換点を設け、そこより垂直に35cm下げるという3段階に変化をもって作られている。

底部では厚さ約5cmの砂層がみられ、そこより約30cm上まで自然堆積をした小枝、



第14図 No.3 土壙 (1/40)

二宮遺跡



第15図 No. 4井戸 (1/40)

木葉、草等の植物遺体が掘り方に対し接するように存在した。1層は埋戻しの石、土等が投げ込まれた状態であり、1・2層間を中心にして遺物が検出された。それらは須恵器、土師器片が中心であり接合に

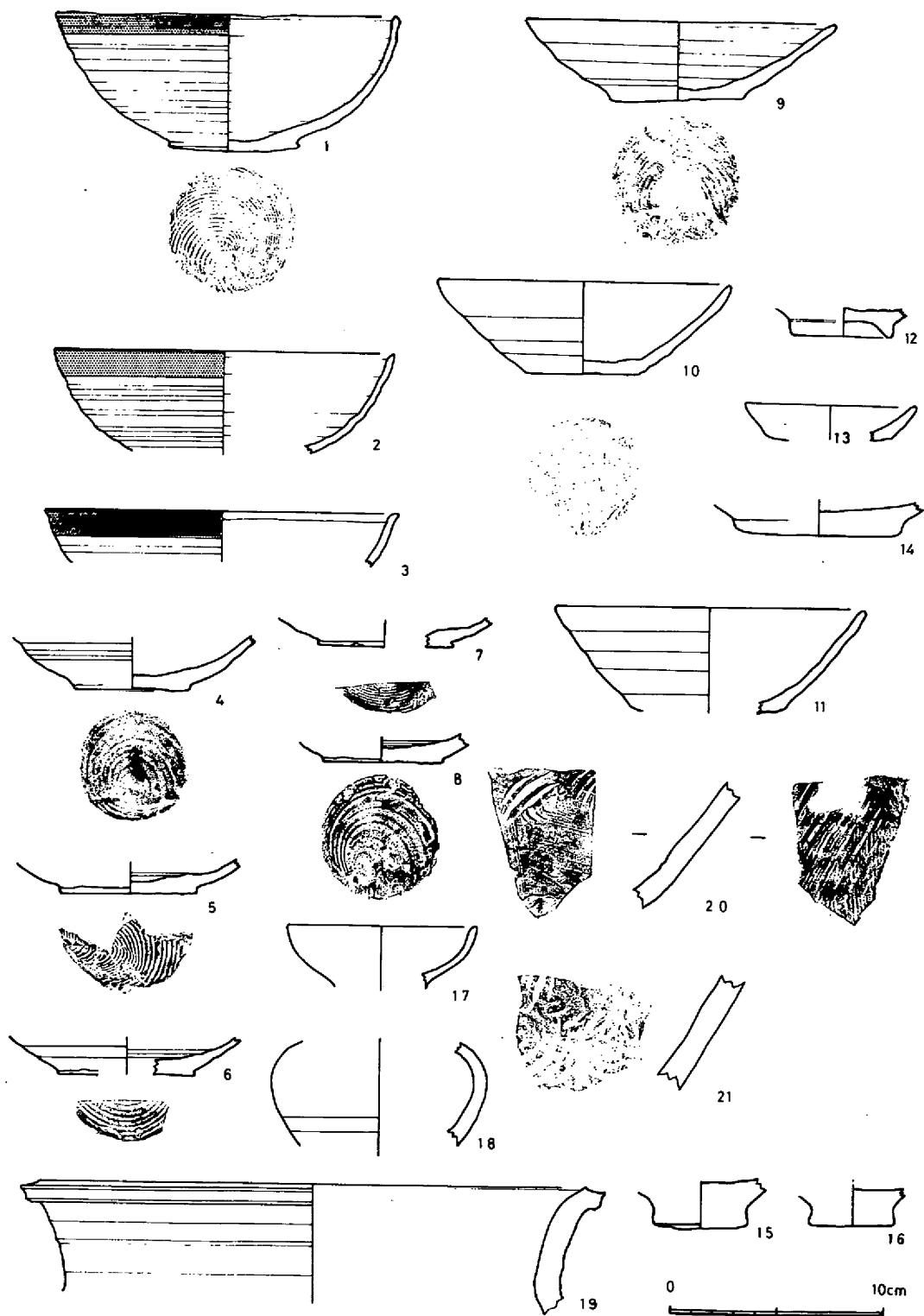
より完形に近くなるものも混在する。山田治氏による^C14測定にて、松の小枝より930±30年が得られている。

遺物 (16図、図版112—2)

遺物は第2層の有機土内からのものが中心をしめ、1・2・3・4・9・10・11・16・17・21等がそれにあたり、他の遺物も若干上層のものであり、時期的に大差のあるものではないと思われる。

1は口径15.8cm、器高6.2cm、底径6.1cmを測る色調淡暗灰色を呈する勝田焼の椀である。体部上半に焼成時の歪があらわれ口縁部が橢円形に変化している。口縁端部は丸みをもっておさめられており、そこより外面1cm下までに重ね焼きを示す縁黒がみられる。体部はロクロびきの凹凸が内外面に

二宮遺跡



第16図 No.4井戸出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡

頗著であり、底部は太筋の糸切り痕を残す。ロクロの回転は左回りである。

2～8は同器種の碗であるが、色調にはそれぞれ差が認められ、2、3、6、7は青灰色系統であり、4、5は灰白色系統のものである。とくに4は焼成良好のものが多いなかにあって吸水性の強い感じを受けるものである。底部糸切り痕は太筋がみられ、土器は右回りの回転を示すものが多い。

9は口径14.5cm、器高3.6cm、底径6.47cmを測る色調暗黄褐色の土師器碗である。器内外面はヨコナデにより仕上げられており、外面に間隔の廣いロクロびきの稜線をもつ、底部には太筋の糸切り痕がみられ、土器は右回りの回転を示している。須恵器の碗にくらべて重量感があり、シャープさに欠けるものである。

10、11も形態、焼成、胎土が9に酷似する土師器の碗である。10は体部より口縁部に向かうところに内湾がみられる。ロクロ回転も同様右回りである。

12～16は土師器碗、小皿の小破片である。器内外面の剥落が進んでおり、整形の観察は困難である。かろうじて5点とも糸切り底が確認できる程度である。

17、18、は須恵器の小型品である。精製された粘土がつかわれており、焼成・胎土とも良好である。色調、胎土等より同一個体ではないようである。

19、20、21は須恵器の大型品である。

19は口径25cmを測る色調暗青灰色の大甕口縁部である。頸部内外面はヨコナデ調整がなされており、口縁端部に鋭い稜線に押まれた平坦面を有する。胎土は精製された粘土が使用されており白色小砂粒を含む。外面自然釉、内面にゴマ秀げ状の白い点が密集する。

20は外面に太目の櫛状工具による交錯したナデが施され、内面には青海波文を消した縦横のごく細の刷毛ナデがみられる。胎土中には白色小砂粒を含まず、色調暗褐色を呈する特異の胎土である。

21は外面に施された横位の叩き目上に細目の櫛状工具による縦ナデを行い、叩き目を消しており、内面は全面に青海波文がみられる。

胎土はやはり精製された粘土がつかわれており、硬質にしまった焼きである。

No. 5 井戸 (17図、図版8—1・9)

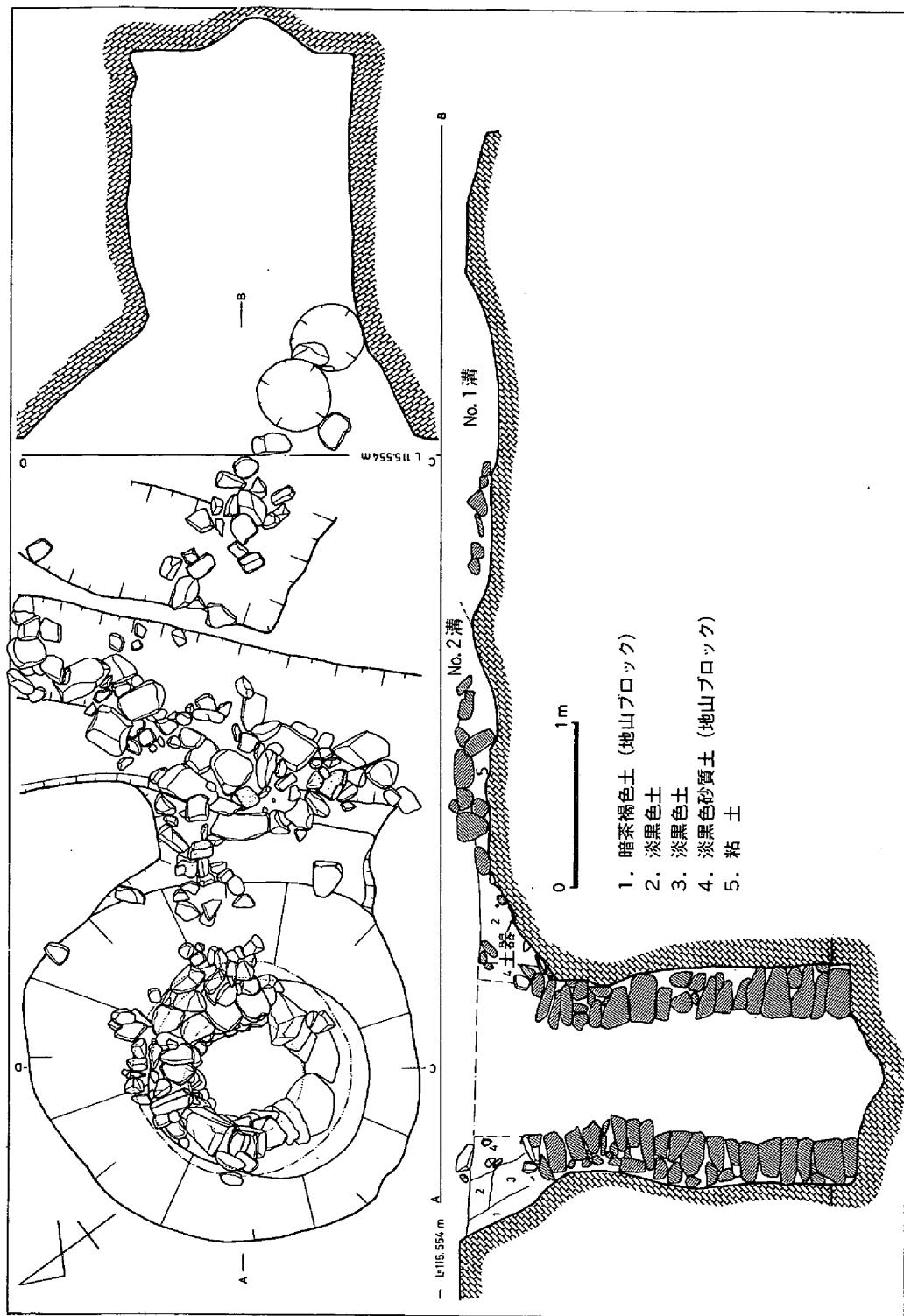
No.5 井戸は本来No.2溝と共に存していたものと考えられ、溝は排水の機能を有し、溝中の配石等は水汲み、及び作業場であった可能性が強い。

上端径240cm、屈曲部径120cm、下端径130cm、深さ257cmを測る掘り方を設定し、その内に主に河原石を使用して約19段の石積み200cm、内径約70cmを測る石組み井戸である。

掘り方は上端より約60cmまで45°～60°の傾斜をもって下降し、そこより垂直壁を約30cm設け底部に向かって広がり気味(袋状)に掘削している。底に近づくにつれ壁面を垂直に立て、井戸底は根石を設定した面より約20cm下がり凹部を形成している。

石組みは主に河原石の小口面を利用して積み上げられている。地山面に根石16石を菊花弁状に配して、そこより約60cm積み重ねられた石は地山垂直壁掘り方に接着面をもつものが多く、ときには掘り方壁を整形し、凹を設けて小口面をうめ込み非常に強固に積まれている。袋状の部分は小さい長石状

二宮遺跡



第17図 No. 5井戸 ($\frac{1}{40}$)

二 宮 遺 跡

の河原石を使用しており、筒部に移る場所にて再び大石（一人で運搬可能）を用いて石積みのまとめを行っている。そこより上部は小型の石が使用されている。

井戸底は№4井戸にみられた窓食土、ゴミ類はみられず、「井戸がえ」後に石・土等でもって埋戻しがなされている。上面がプランでも井戸内に小石・砂黄褐色土が充満しており、その外にそれらを含まない暗黒色土がドーナツ状にみられた。

これは従来の井戸枠埋土を移動せず、井戸中のみを埋め戻し放棄した状態であると考えられる。

遺物（第18図、図版113）

遺物は井戸の放棄された時点で埋土に混入したと考えられる1・3・4・5・6・7と掘り方に密着して出土した2とに分けることができる。

1は口径27.8cmを測り色調青灰色を呈する須恵器甕の口縁部である。器内外面はヨコナデにより調整され、口縁端部外面下に隆線を有する焼成の良好なものである。

2は底径16.2cmを測り色調青灰色を呈する甕、あるいは壺の底部である。底部より2cm上位には横位の荒い刷毛ナデが一巡し、器外面に自然釉がみられる。内面はゴマ秀げ状の白い点が密集しており、器壁は比較的薄く断面に縞状の細い線がみられ、胎土中に大型の白色砂粒を含む。

3は口径28.4cm、残存高9cmを測る備前焼の擂鉢である。口縁の上部に拡張がみられ、外面屈曲部下位2cmに重ね焼き痕跡をとどめる。そこを境にして上部は赤茶褐色、下部は淡褐色を呈しており、内面では褐色に焼成された部分が長年の使用により褐色が失なわれ、断面中にサンドウィッヂ状にみられる青灰色が表出している。内面の卸し目は10条1単位の櫛状工具というよりは刷毛状工具の荒いもので描かれており、1単位幅3.64cmを測る。胎土中に0.5cm×1cmの大型砂粒を含むが焼成は良好である。

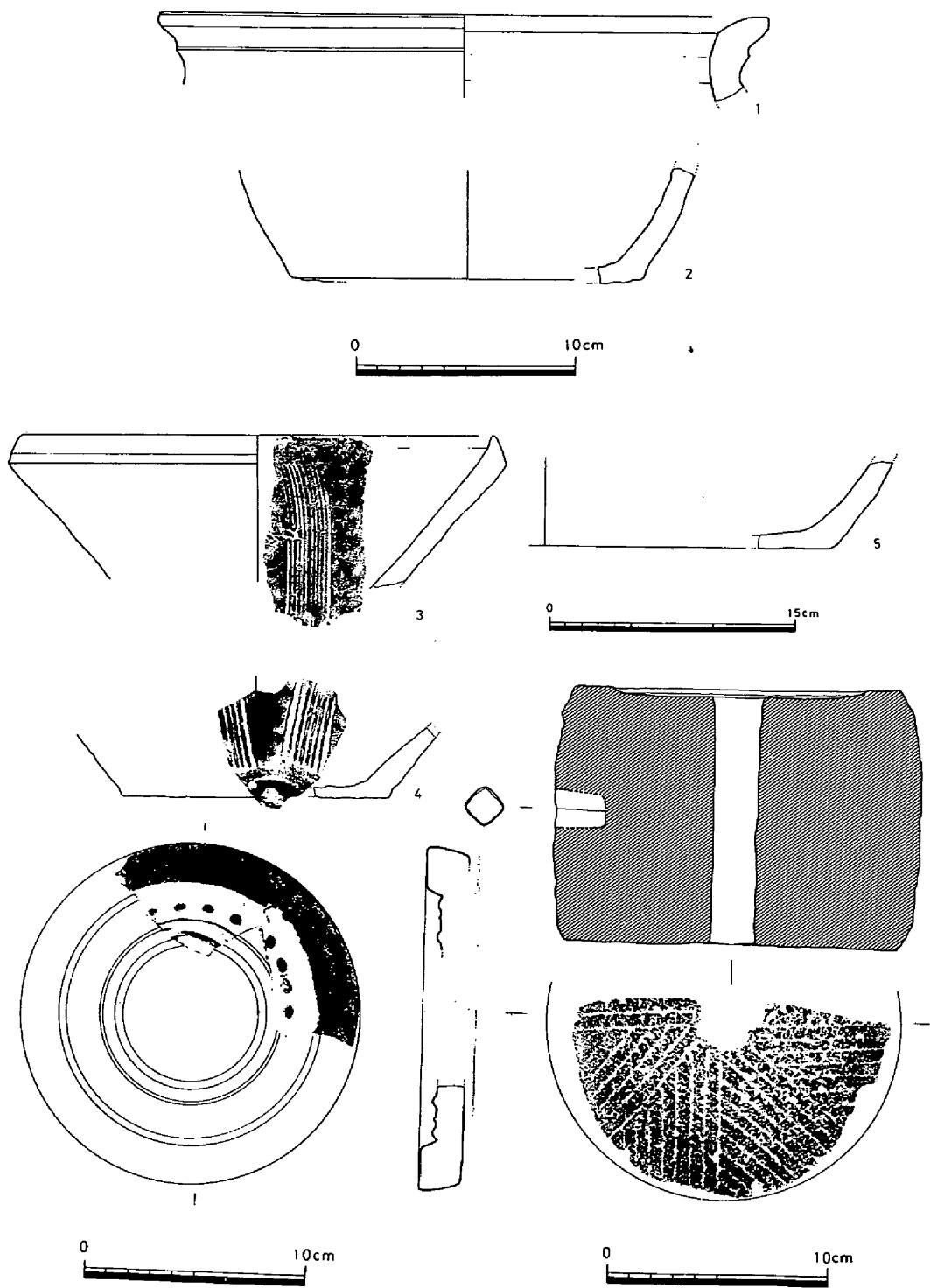
4は底径16cmを測る備前焼の擂鉢底である。体部は器壁の薄い底部より45°～50°の角度でもって立ちあがり、内外面にヨコナデが施されている。内面の卸し目は7条1単位の太目のものがみられ、1単位幅2.85cmを測る。外面は赤茶色に発色している。底は若干凹凸がみられ灰色を呈する。

5は底径35cmを測る大型の須恵器片である。体部は器壁の薄い底部より約45°の角度でもって立ちあがる。器外面は縦の荒い刷毛ナデが行われ、底部より上位3.5cm間に力強い横位のナデが一巡し、縦刷毛ナデの搔き消しが行われている。内面には横・斜位の刷毛を中心とするナデが全面に行われている。

6は直径約15cm、文様区径6cmをはかり、瓦当部のみを残す軒丸瓦である。連珠文は径0.7cmと小粒で8個が現存するが、26個程度に復元することができる。色調は淡黒色を呈する。

7は直径約16.7cm、高さ11.8cmを測る石臼の上部である。上皿部径約12cm、深さ0.5cmをはかり、その中心に径2.2cmの円孔が下部に抜けており下臼との接觸部に至る。その部分は0.2cm幅の刻線7～9本が1単位となり8分角が行われている。拓本図で理解できるように、周縁部より中心に向かう約3cmの間が非常に磨滅し環状の使用痕を残す。外面胴部中位には柄を挿入するための一辺1.8cm、深さ2.3cmの方形孔が穿かれている。残存重量は3470gをはかり、石材は砂岩質のものである。

二宮遺跡



第18図 No.5井戸出土遺物 ($\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{4}$)

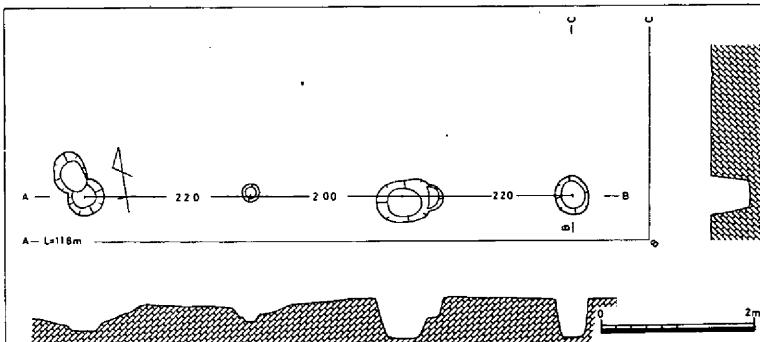
二宮遺跡

No. 6 柱穴列（第19図）

ほぼ東西に主軸方位をもつ比較的大型の柱穴列である。4本の柱穴よりなり、そのうち西端から3

本目までが重複、切り合
い関係にある。それらの
柱間は 220 cm と均一して
配されているが、各柱穴
直径は 20~50 cm と格差が
みられる。

No. 6 柱穴列は No. 1 溝に
より削平を受けており、
西端 2 本目の柱穴は No. 2
溝と関連を考慮して束柱
的なものが設けられた可



第19図 No. 6 柱穴列 ($\frac{1}{100}$)

能性がある。遺物は西端柱穴の北側柱穴底より出土しており、No. 6 柱穴列の年代決定に直接関連しうるか否かは不明である。No. 6 柱穴列自身は目隠し塀の機能を有している可能性もある。

遺物（第20図、図版 144）

口径 15.3 cm、器高 5.8 cm、底径 6.45 cm をはかり、色調淡青灰色を呈する勝田焼の碗である。均一した器壁にてシャープに仕上げられており、体部内外面にロクロびきの凹凸が顕著である。口縁端部外面下に約 1.2 cm 巾の縁黒が一巡し、内面にも変則的な幅で淡い黒色がみられる。

底部は太筋の糸切り痕跡がみられ、体部より底部に移る屈曲部は丸みをもっておさめられておらず、シャープな高台を思わず作りである。土器の回転方向は右回りである。

遺構に伴わない遺物

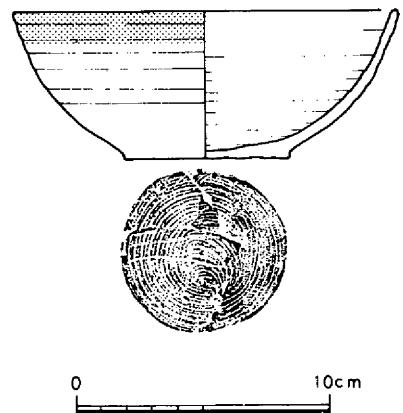
1 は糸切り後、高台の付けられた須恵器の碗である。

2 は器高 4 cm をはかる小形の鉢である。精製された粘土が使用されており、器内面淡赤色、外面黄褐色を呈する土師質のものである。器外面にスタンプによる施文が上下に施されており、上半に蕨手、下半に方形渦巻きが一巡している。

3 は径 3.5 cm、器高約 1.5 cm をはかり天井部に黄色系の釉薬が施された栓状のものである。

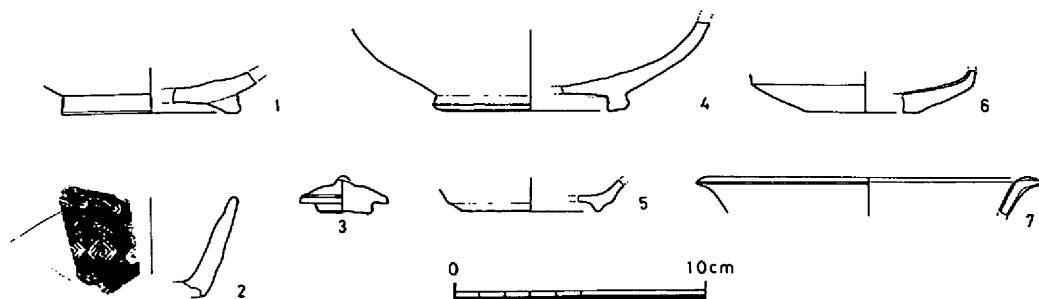
4 は疊付、高台内面を除き濃緑色系の釉薬が施されている。精製された粘土が使用されており、胎土は灰色を呈する。唐津系の焼物と思われる。

5 は白磁の小皿であり胎土、焼成とも良好のものである。伊万里系のものであろう。



第20図 No. 6 柱穴出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡



第21図 荒神元A地区出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

6は器外面は細いクロロピキの痕跡がみられ、底部は糸切り底をもつ鉢形の土器である。器内面は厚く釉薬が施されており、見込み外側より底に向かって青、緑、白の彩色が環状にあり、貫入がみられる。

7は口径約13.8cm、残存高1.5cmをはかる青磁碗である。口縁部までのびた体部は「L」字状に外側に折れ曲がり、その周辺には淡青緑色の釉薬が厚くみられる。胎土は混入物のみられない均一のしまったものである。

1・6・7を除く他は近世のものと思われる

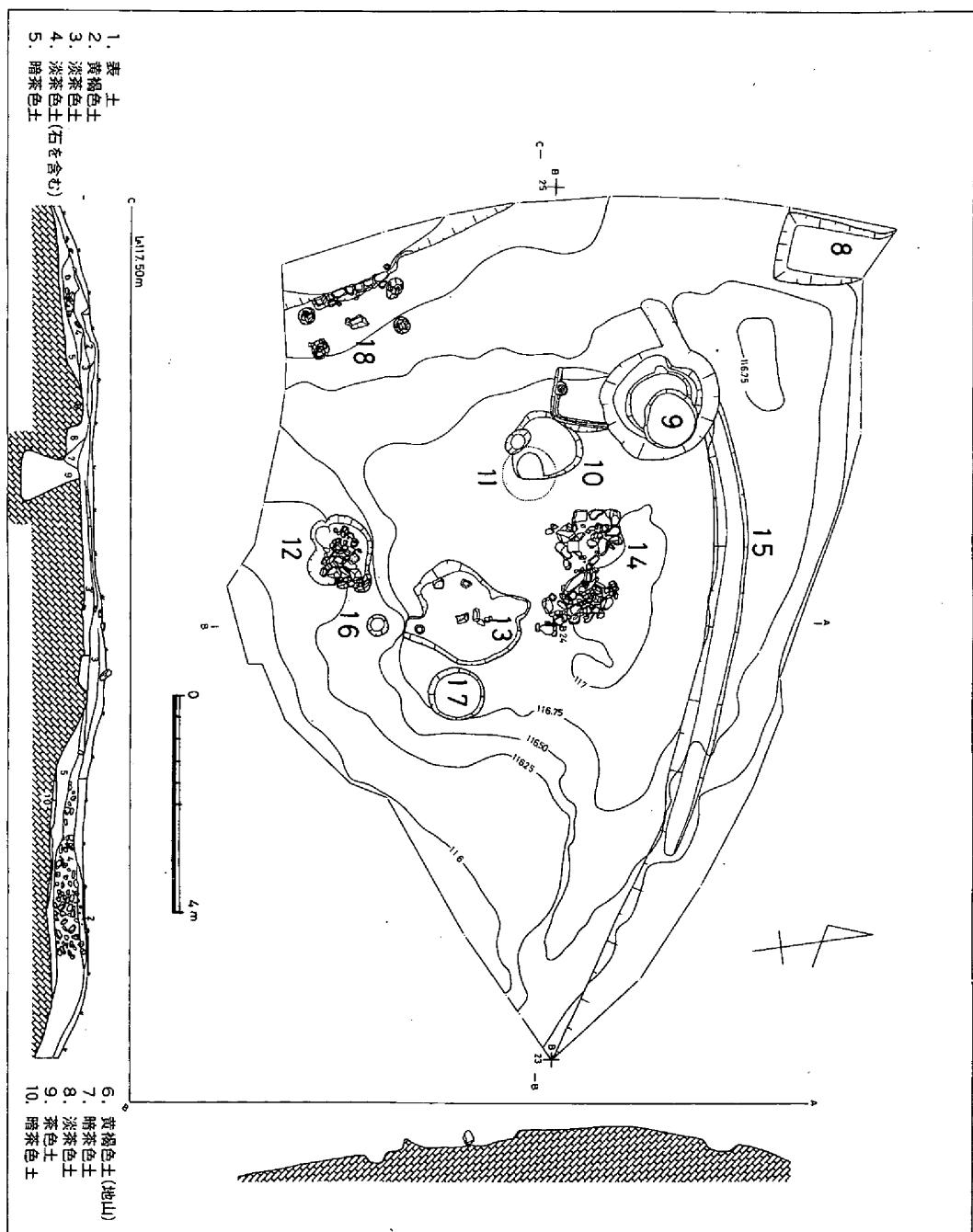
3. 小 結

蔵屋敷地区、荒神元A地区は前述したように、ほぼ同一時期と思われる時点で二宮遺跡B丘陵西側が削平を受け、造成面が造り出されている。その造成は調査地区内にとどまらず、周辺地形等より考えて西宮峪の浅い谷筋に並行して南北幅約85~90m、東西幅約25mの長方形平坦部約2000m²に及んでいると思われる。そして、その南端に近い部分が今回の調査区であり、遺構は造成地平坦面に存在するわけである。

出土した遺物等からは、移動したと考えられる磨滅の激しい奈良期の杯身を除いて、他は平安時代後半以後のものであり、中でも室町時代の備前焼が比重を占める。次いで勝田焼、近世陶器、明代の青・白磁が混在する。

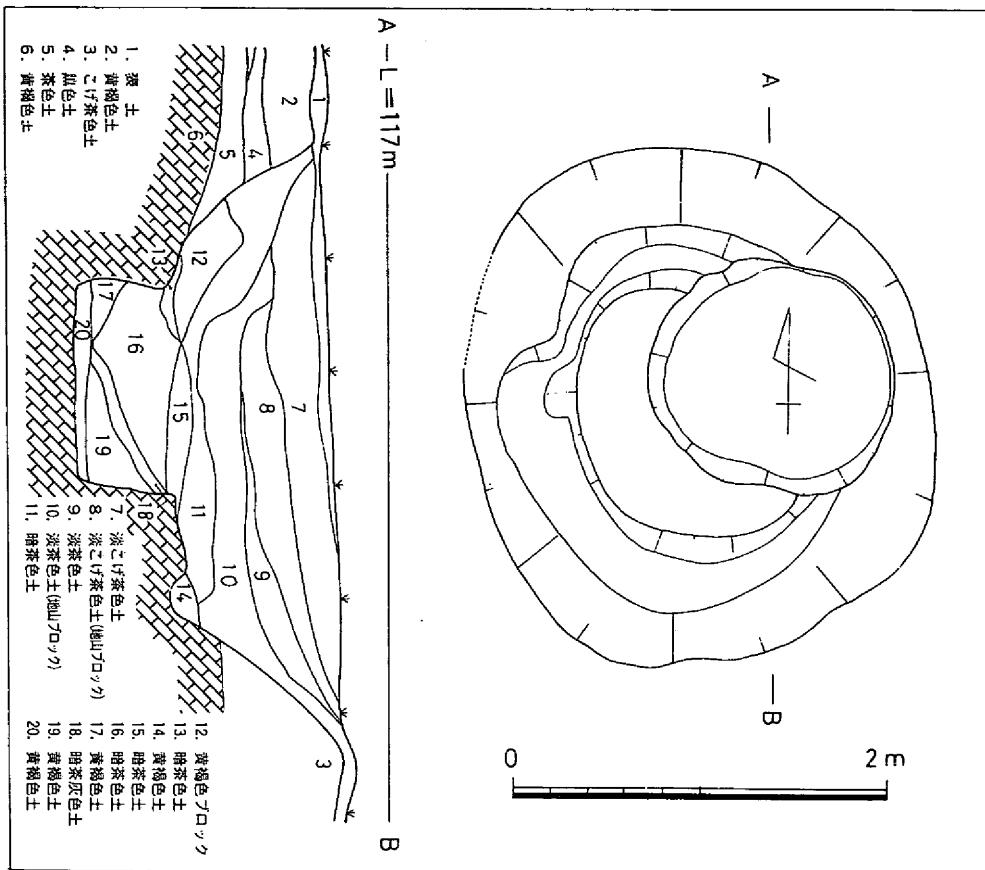
遺構では勝田焼きを多く出土した、平安後半と考えられる井戸4戸が存在し、その後に備前焼、瓦、石臼等を出土した室町時代前半と考えられるNo.5井戸が作られている。建物・柱穴列等も主軸の方向、各遺構の配置、切り合いのあまりみられない点等から比較的まとまりを見せてている。すなわち、蔵屋敷・荒神元両地区は平安時代後半に削平、使用が開始され、室町時代にも継続されて使用されたものと考えられる。さらに北側にのびる調査区外に同様の遺構が検出される可能性が充分考えられる。

跡遺団 11



第22図 荒神元B地区全体図 ($\frac{1}{160}$)

二宮遺跡



第23図 No. 9 土壙 ($\frac{1}{40}$)

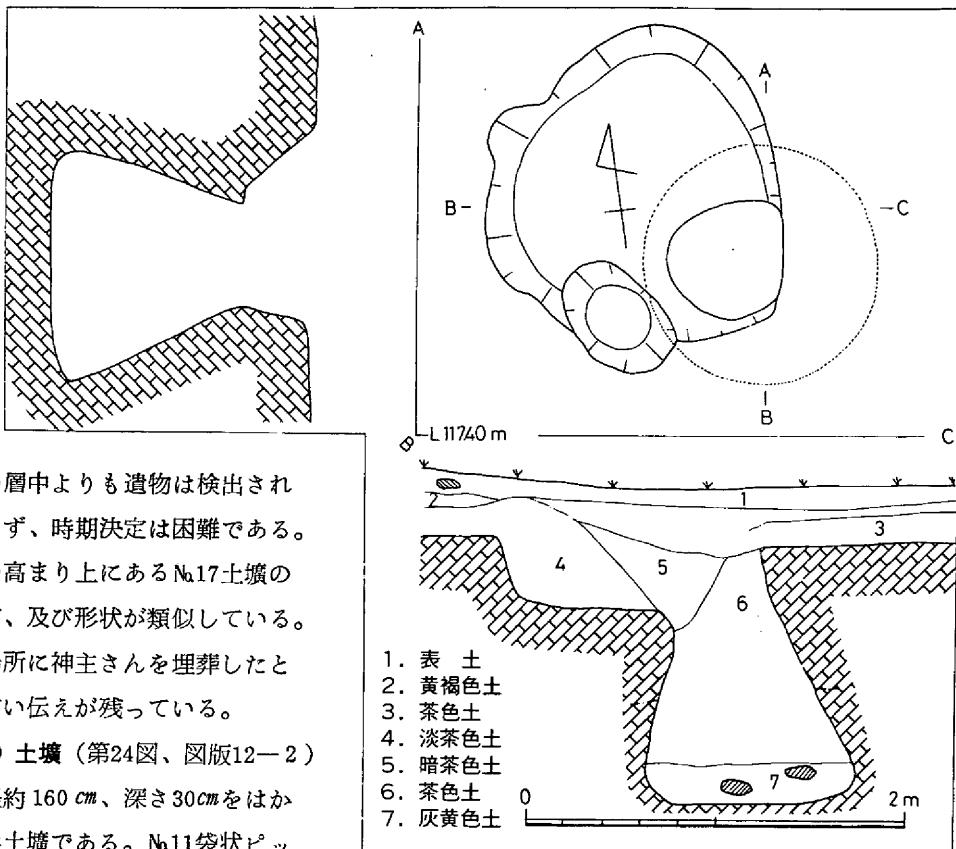
(1) 荒神元B地区

北から南に延びる舌状の丘陵部を東西南北面より切断がおこなわれており、独立の高まりとして存在している。少し北に寄った尾根筋最高部にNo.14荒神社を中心に11遺構が作られている。

No. 9 土壙 (第23図、図版12-1)

直径約250cm、深さ約160cmをはかる二段掘りの土壙である。No.230住居址の含土、及び比較的新しいと考えられる黄褐色地山土を利用した盛土上面より掘り込まれている。上端より約60°の角度で約80cm掘り下げ、そこに幅25cm、深さ5cmの周溝を設け一段目の土壙としている。そこより直径約80cm、深さ50cmの土壙が中心を東に移して掘り込まれている。底部は約5cmの厚さで黄褐色地山土を敷いた状態であり、そこより表土を除く上部の12層は多少なりとも「U」字状の断面を呈しており、中心部分が陥没した状況である。埋土は黄褐色地山土、及び茶色系のパサパサした土が利用され、交互に使用された部分がみられる。二段目の土壙上縁及び、内部にみられる15・16土層は硬質にて暗茶色を呈する。

二宮遺跡



第24図 No.11袋状ピット (1/20)

どの層中よりも遺物は検出され
ておらず、時期決定は困難である。
同一の高まり上にあるNo.17土壙の
掘り方、及び形状が類似している。
この場所に神主さんを埋葬したと
いう言い伝えが残っている。

No.10 土壙 (第24図、図版12-2)

直径約160cm、深さ30cmをはかる
円形土壙である。No.11袋状ピット
の上部西側半分を破壊して作っ
ており、土壙内には粒子の細かい
パサパサの淡茶色がみられるが、遺物は何ら発見できなかった。

No.11 袋状ピット (第24図、図版12-3)

残存上部径約60cm、底部110cm、深さ135cmをはかる袋状ピットである。No.10土壙により切られており、上部は淡茶色土がみられ下層にゆくにしたがって黄褐色ブロックの混土が多くなる。底部より約10cm上層にて河原石が集中しており、それらの間隙より図示できないほどの小土器片が出土している。時期決定には好資料とはいえないが、胎土のみの観察では岡の山A地区袋状ピットのものより若干、古い要素をもっていると思われる。

No.12 土壙墓 (第25図、図版12-4・13)

尾根筋に直交して主軸をほぼ東西にもつ二段掘りの隅丸方形を呈する土壙墓である。長軸約170cm、短軸150cm、深さ75cmを計測しうるが、南側上部約半分が削平を受けており、完存の状態ではない。土壙底には木棺痕跡がみとめられ、幅8~10cm、深さ約5cmの「L」字溝を組み合わせた状態を呈している。西側の小口面が東側小口面より約8cm幅広につくられており、床面は東に向かって約10cm下降している。内法84cm×51cmをはかり、ほぼその範囲を中心に入れ混ぜて約60石が積み重なっている。そ

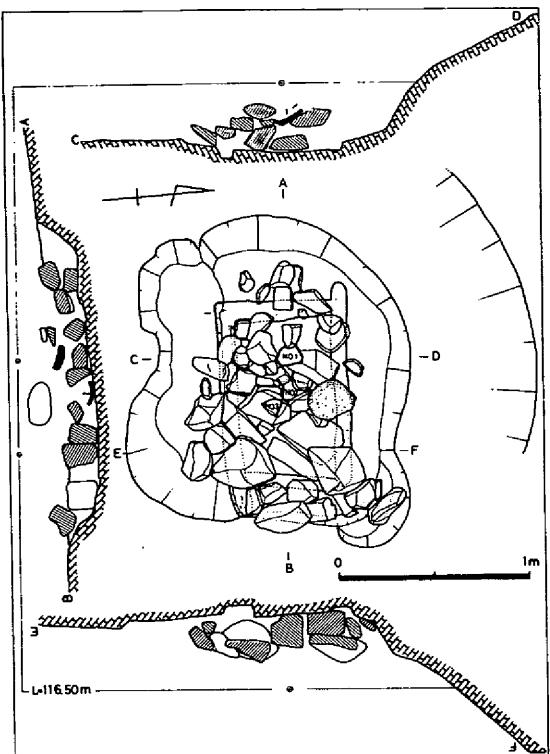
二宮遺跡

れらの大きいもので $30\text{cm} \times 30\text{cm}$ 、小さいもので $5\text{cm} \times 5\text{cm}$ の河原石、角礫が淡茶色土と混存しており、その石の下位、及び上位より同一個体の備前焼擂鉢片が出土している。これらの石材は木棺上部を被覆していたものと考えられる。

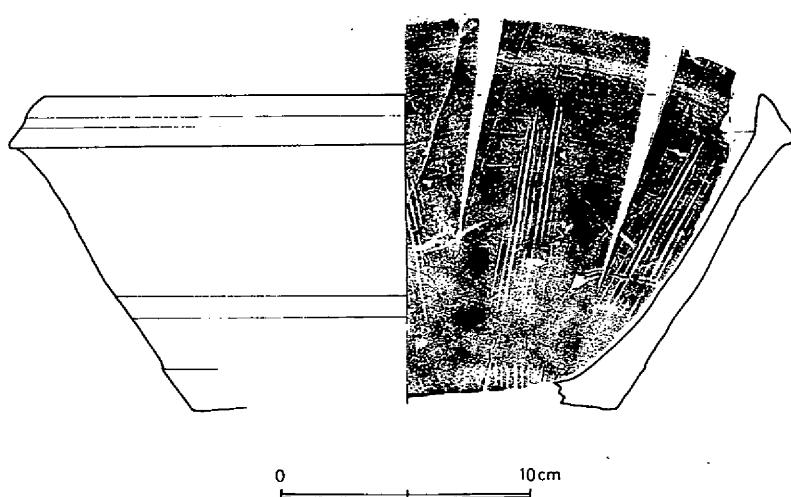
遺物（26図）（図版144）

備前焼の擂鉢半個体分が被覆石材上下より計3片に分離して出土しており、そのうちの2片は木棺痕跡中央底部に密着して上向きに置かれている。

口径 28.5cm 、最大径 31.3cm 、器高約 12.4cm 、底径 16.8cm をはかり、口縁部が上下に拡張する擂鉢である。口縁部屈曲部下位 4.5cm に重ね焼き痕跡をとどめ、そこを境に上部が茶褐色、下部が暗灰褐色、内面赤茶色を呈する。内面下位 $\frac{1}{2}$ は使用痕のため従来の色がきえ青灰色の地が表出し、卸し目は円滑になっている。器内外面は回転の遅いと考えられるヨコナデが施されており、内面はヨコナデ後9条を1単位とする卸し目が放射状に12本描かれている。底部は若干の

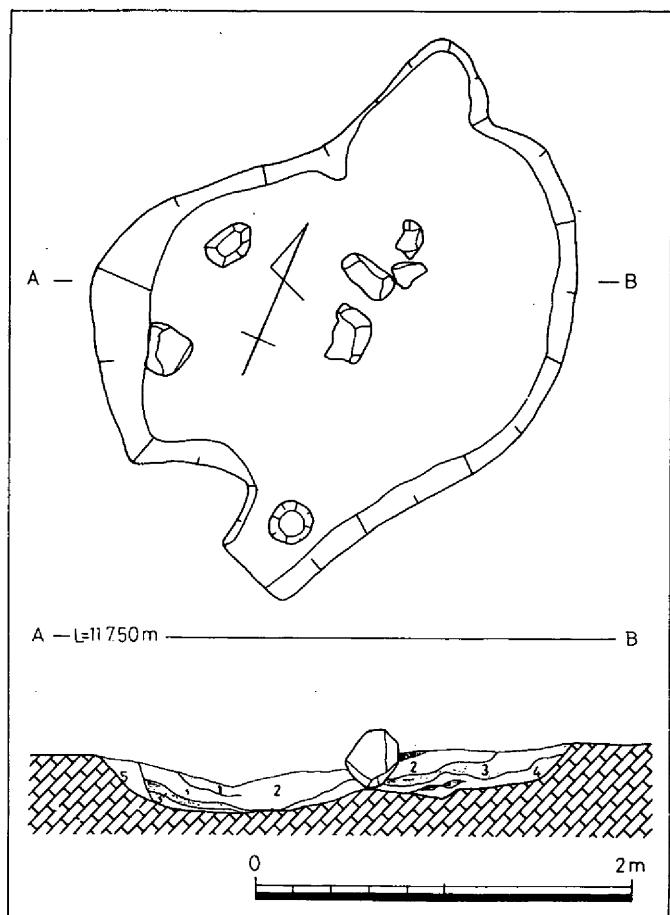


第25図 No.12 土壙墓 ($\frac{1}{40}$)



第26図 No.12 土壙出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡



第27図 No.13 土壙 ($\frac{1}{40}$)

上げ底にて他の擂鉢同様に底面は凹凸がみられ、青灰色を呈する。

No.13 土壙 (第27図、図版12—5)

表土除去後に、ポンヤリした感じの黒色土を中心とするドーナツ状の不整円形を検出する。260cm × 200cm、深さ30cmをはかる不整形な土壙である。土壙内は軟質地山土に近い淡黄色土と有機土とが交互にレンズ状に堆積しており、底部は凹凸の状態である。遺物は検出されず人頭大の河原石、角礫が計6個出土している。風倒木痕跡に類似する土壙形状を呈する。

No.16 土壙 (第28図、図版12—7)

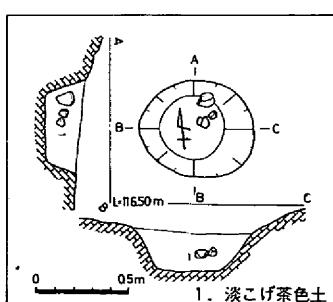
No.12土壙墓の東側に位置し、長軸60cm、短軸50cm、深さ25cmをはかる円形の土壙である。淡こげ茶色の埋土中位北側に小石が4個同一レベルにみられる。掘り方上面にてNo.14荒神社周辺にみられた小皿片が1点出土しているが、上部からの混在が考えられる。

No.14 荒神社跡 (第29図、図版12—6)

丘陵高まりの中央部分より北側高所に位置し、No.18鳥居跡と関連して明治42年9月末まで二宮村江下の「荒神社」として機能していたものである。

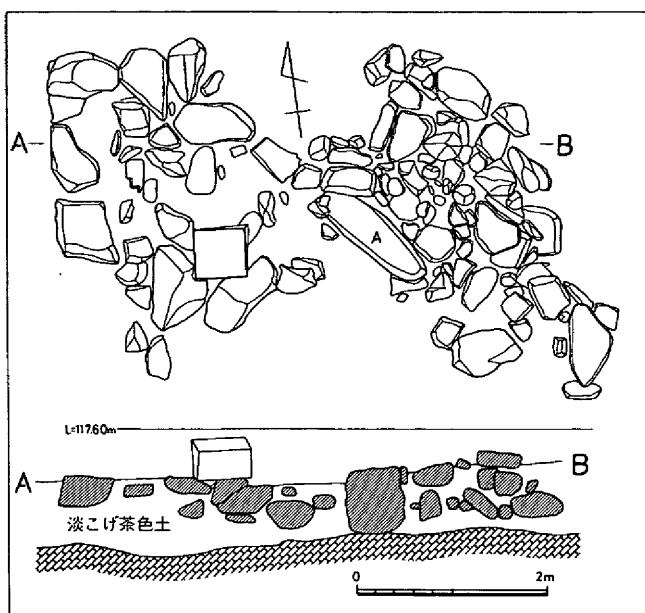
東西に3m、南北2mの範囲に河原石が集石し、西側半分に基壇と考えられるまとまりと、東半分に北西に主軸をもつ二つのまとまりが存在する。

西側基壇は30～40cmの河原石の小口、横口面を利用し、一辺約150cmの方形石組みを行っている。その中心より南によった所に一辺28cm、高さ15cmの切石が祠台石をして置かれている。基壇



第28図 No.16 土壙 ($\frac{1}{40}$)

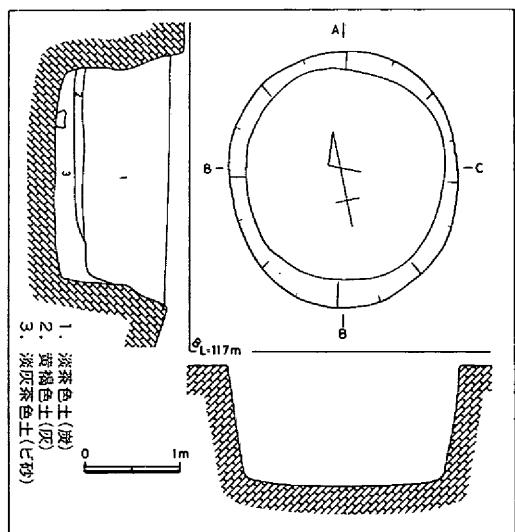
二宮遺跡



第29図 No.14祠土台 ($\frac{1}{40}$)

パサパサしたもので炭粒を所々に含む。

この埋土、土質はNo.9土壙に近似するものであり、底径・高さ等の土壙規模においても同様のことが言える。



第30図 No.17土壙 ($\frac{1}{40}$)

は地山土に接する配置でなく、地山上に10~20cm幅でみられる粒子の細かい淡こげ茶色土上に配石されている。

寛永通宝、灯明皿等を中心とする遺物は配石間、及び淡こげ茶色土上面に混在して出土している。

東側まとまりも同様の遺物がみられるが、西側に比べて少ない出土状況である。

No.17 土壙 (第30図、図版12-8)

上端径135cm×110cm、深さ70cmをはかる円形土壙である。土壙内埋土は3層からなり、下位2層の2、3は微砂、及び灰を混ぜ硬質に叩き締めた感じが強いものである。それに比べて1層は淡茶色を呈し、軟質の

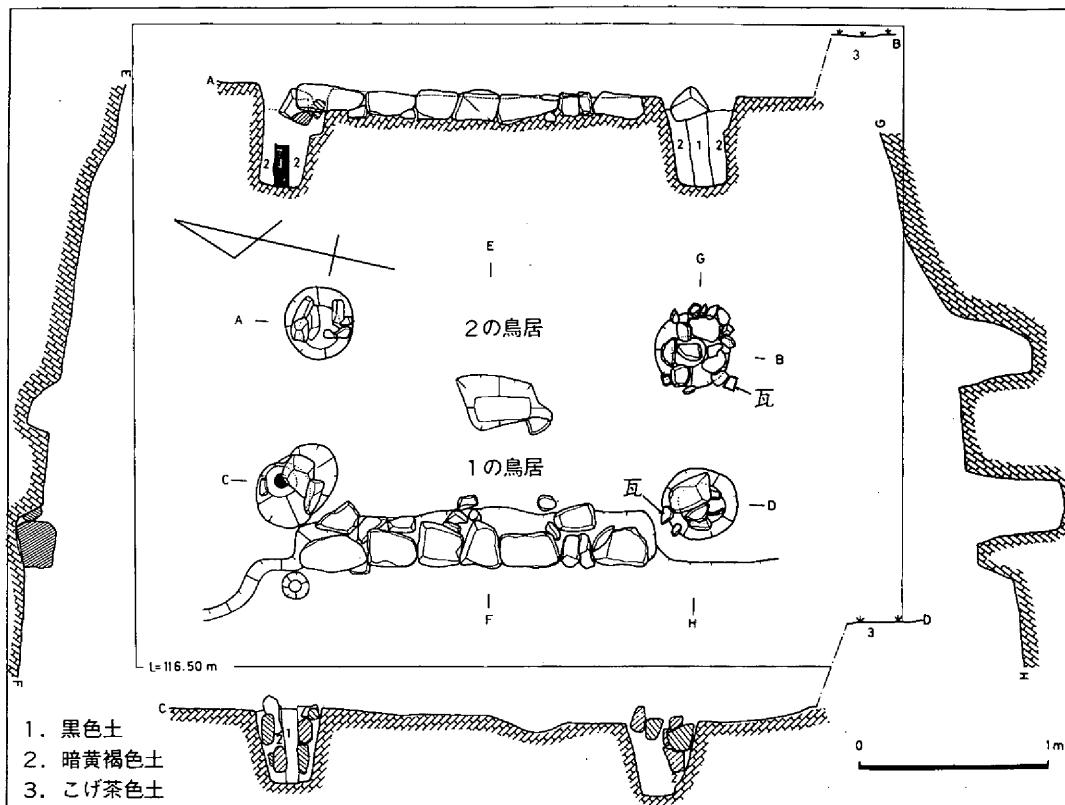
No.18 鳥居跡 (第31図、図版14-1)

本鳥居はNo.14荒神社とセットをなすものであり、柱穴4本（1の鳥居・2の鳥居）、石段1、4柱穴間に凹地1からなる。鳥居入口はN-100°-Wの方向に開き、夏の入日を正面に受ける。

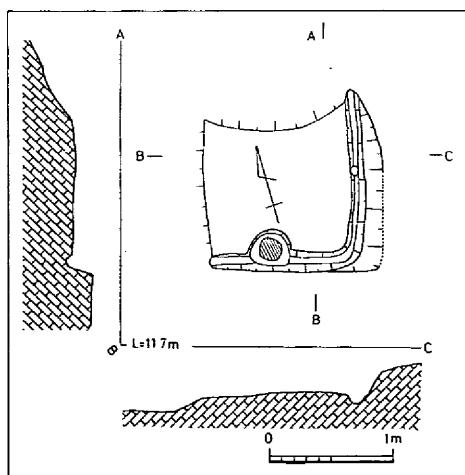
登り口の石段は河原石8石からなっており、石を設置する掘り方内に横口を正面、広口面を上に向け、水平を保つために後込めのツメ石等を行って安定させている。石段の横幅は185cm、高さ約15~20cmをはかり、北より3・4・5石目付近が他の石に比べて若干下がっている。最もよく踏み込まれた場所であろう。

第1の鳥居は石段を挟む格好で柱間距離225cmをもって立てられている。この柱穴掘り方は垂直に掘り下げられておらず、外に向かって広がり気

二宮遺跡



第31図 No.18鳥居 ($\frac{1}{40}$)



第32図 No.230住居址 ($\frac{1}{60}$)

味に掘開がなされている。柱を立てた場合に「挿み合せ」形態の鳥居が考えられる。柱穴径約40cm、深さ47.5~55cmをはかり、柱穴上部より20~25cm下に1段目の段がありツメ石がみられ、そこより柱穴径約25cmとなっている。北側柱穴内には直径8cm、長さ23cmをはかる柱根が残存していた。

第2の鳥居は東に約80cmの間隔をもって第1の鳥居と平行して立てられている。柱間距離196cmをもって立てられ、柱穴径40cm、下端径約20cm、深さ38cmをはかる。柱痕部分以外は芋状の河原石が柱にそった状態でつめ込まれており、埋土よりそれらの石の方多くみられる。

No.230 住居址 (第32図)

No.9、10土壙に挟まれた形で検出された方形の住

二宮遺跡

居址である。No.9・10土壤により破壊を受け、さらにB丘陵削平、及び諸々の地形の変化で大幅に破壊を受けており、南東隅部を約150cm×140cmを残すのみである。ここでは積極的な時期決定の資料はないが、No.11袋状ピットの関連を考えておきたい。

遺構に伴わない遺物（第33図～36図、図版112—114）

遺物の大半が荒神社南東部を中心とする凹地より出土したものであり、備前焼、唐津・伊万里系の焼物が中心である。また荒神社を中心とした周辺では土師器、陶器質の灯明皿・釘・寛永通宝等が出士している。

備前焼（第33・34図）

1～7は壺及び甕の口縁部である。1を除き3～7は玉縁状の口縁であり、外面はヨコナデが行われている。ヨコナデ後再び刷毛による横位の細かいナデがみられる。1は器外面縦刷毛ナデ後横位の刷毛ナデが部分的にみられる。胎土は暗灰褐色系が基調となっているが、1・2は青灰色、5は黄褐色を呈し他とは異なる。

8～17は擂鉢口縁及び体部である。8～13は口縁部が上下に拡張するものであり、拡張部を中心にはゴマハゲがみられる。胎土中に大形の白色砂粒を含むが、焼成は良好で硬質に仕上がっている。すべてに重ね焼きの痕跡がみとめられ、それは口縁屈曲部下位の0.7～2.3cm間に集中してみられ、とくに1.4cm付近に多いようである。外面ともヨコナデにより調整され、その後内面に7～10条の卸し目が底部より上部に向かって描かれている。その卸し目は8条を1単位として上部が左方向に曲がるものが多いが、中には13のように右方に曲がるものも存在する。土器の回転は須恵器等と比較してヨコナデ痕跡からは明瞭に把握しがたいものが多い。なかには右回りの回転を示す砂粒の動きがみられるものがある。

14～17は口縁部が垂直にほぼ均一の壁厚でもって立ち上がり、多面に2本の凹線文が施されている。これらの重ね焼き痕跡はほとんどが屈曲部分にみられる。器壁は前記のものにくらべて薄く、赤茶色に発色しており、卸し目も多数で細いカキ目となり全面におよんでいる。

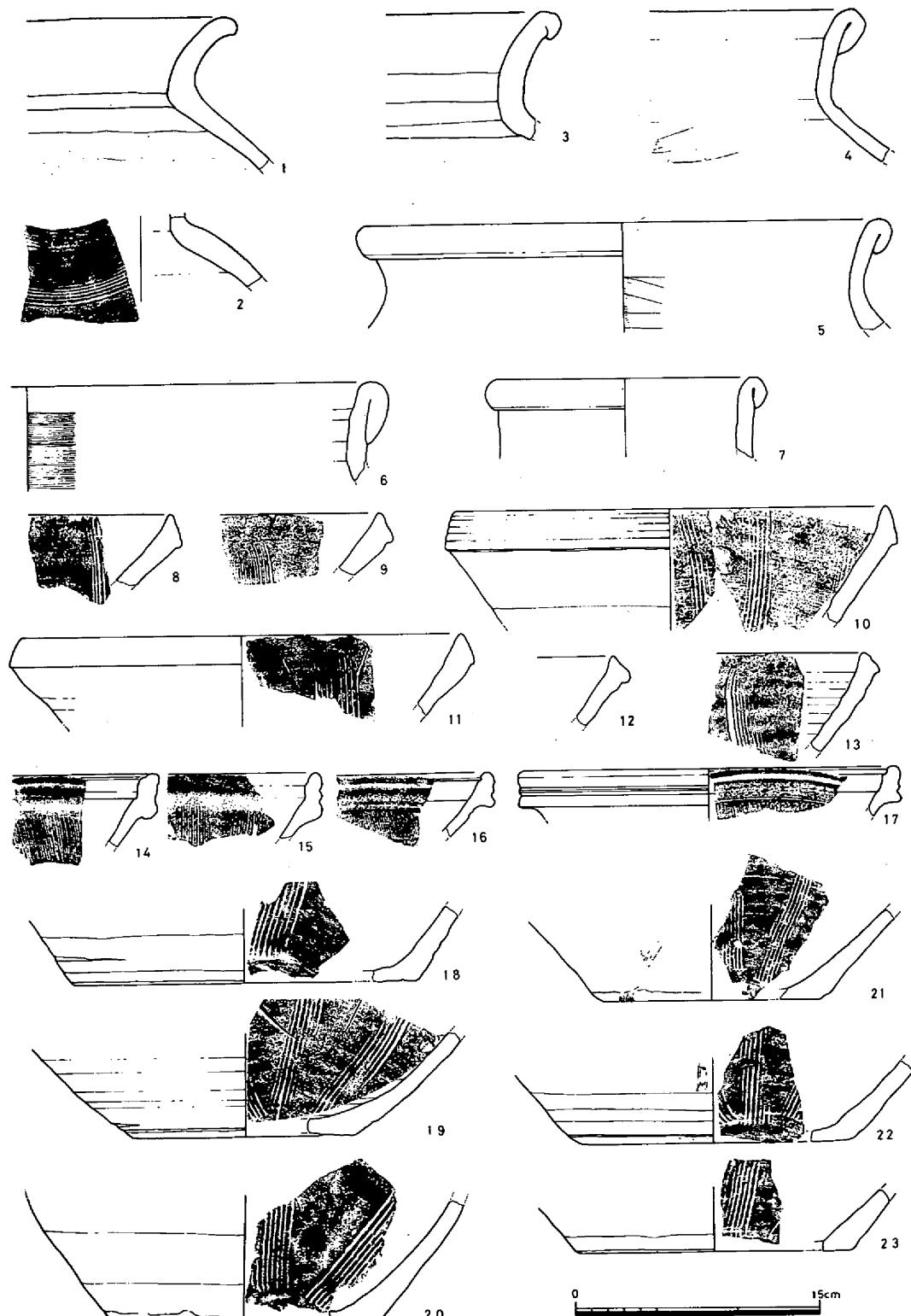
18～25は擂鉢の底部である。18～24は8～13に対応するものと考えられ、焼成・胎土等も共通する点が多い。すべて使用された痕跡をよくとどめ、内面下半を中心に円滑化しており、卸し目の消えかかっているものもみられる。卸し目は6～8条を1単位とし、なかでも7～8条のものが多いようである。23・24は器内面にゴマハゲがみられる。底部器厚は薄いところの器厚の $\frac{1}{2}$ 程度である。造り 자체も粗雑を感じられるものあり、刷毛状の不規則な擦痕、及び凹凸が周縁を中心にして全体にみられる。

20は0.7cmの円形粘土板を底部とし、その上に粘土紐を積み重ねていく製作方法をよくとどめている。このことは器壁内にみられる縞状の筋の動きによって観察することができる。

25は14～17に対応するものと考えられ、焼成・胎土等も共通する点が多い。18～24等とは色調、焼成が異なり、なかでも底部には右方向のヘラ削りが行われており、底部屈曲部がシャープに仕上げられている点等があげられる。

27～32は壺、甕の底部である。27・28・32は色調赤茶褐色のものであるが、他はそれぞれが若干異

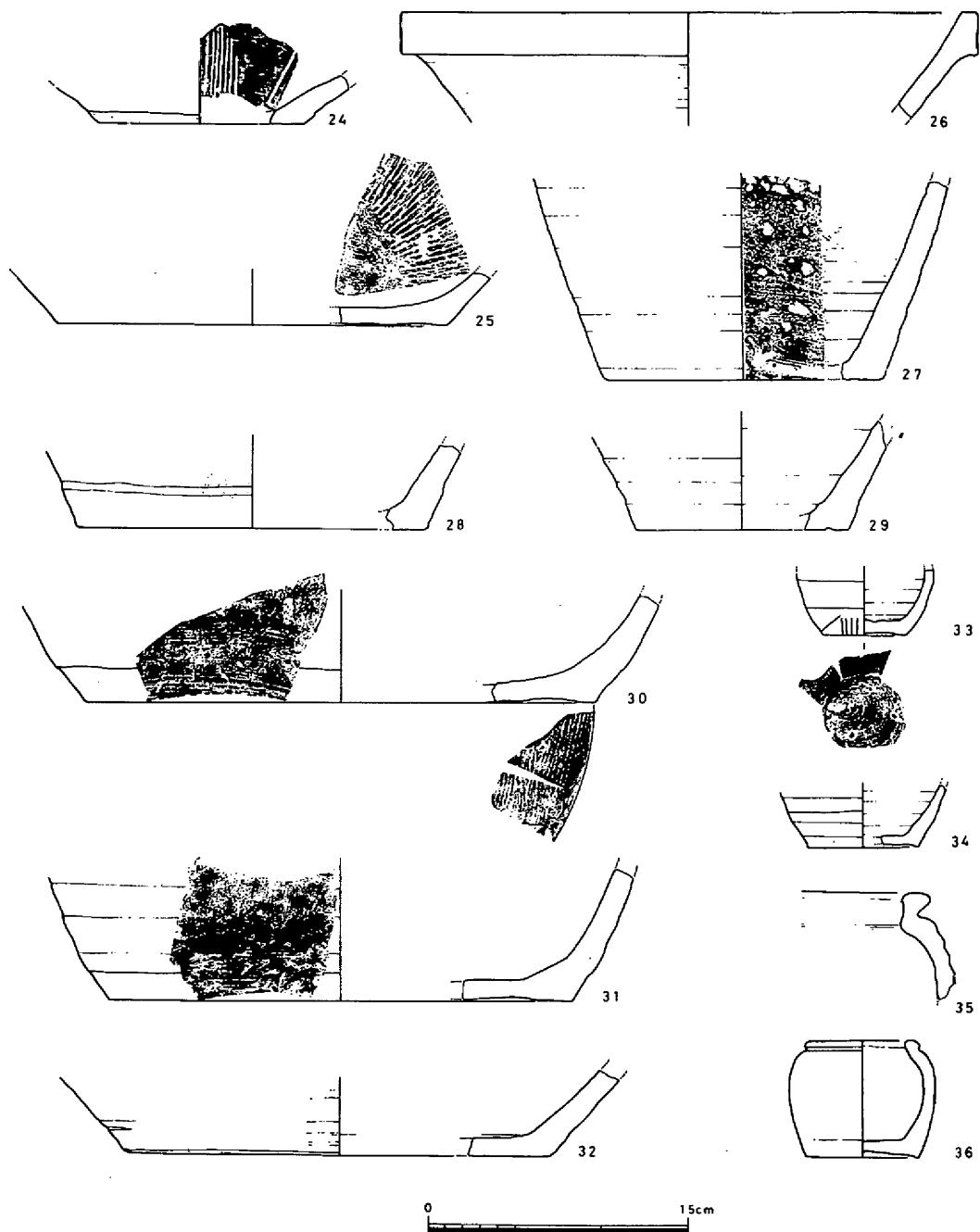
二宮遺跡



第33図 荒神元B地区出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

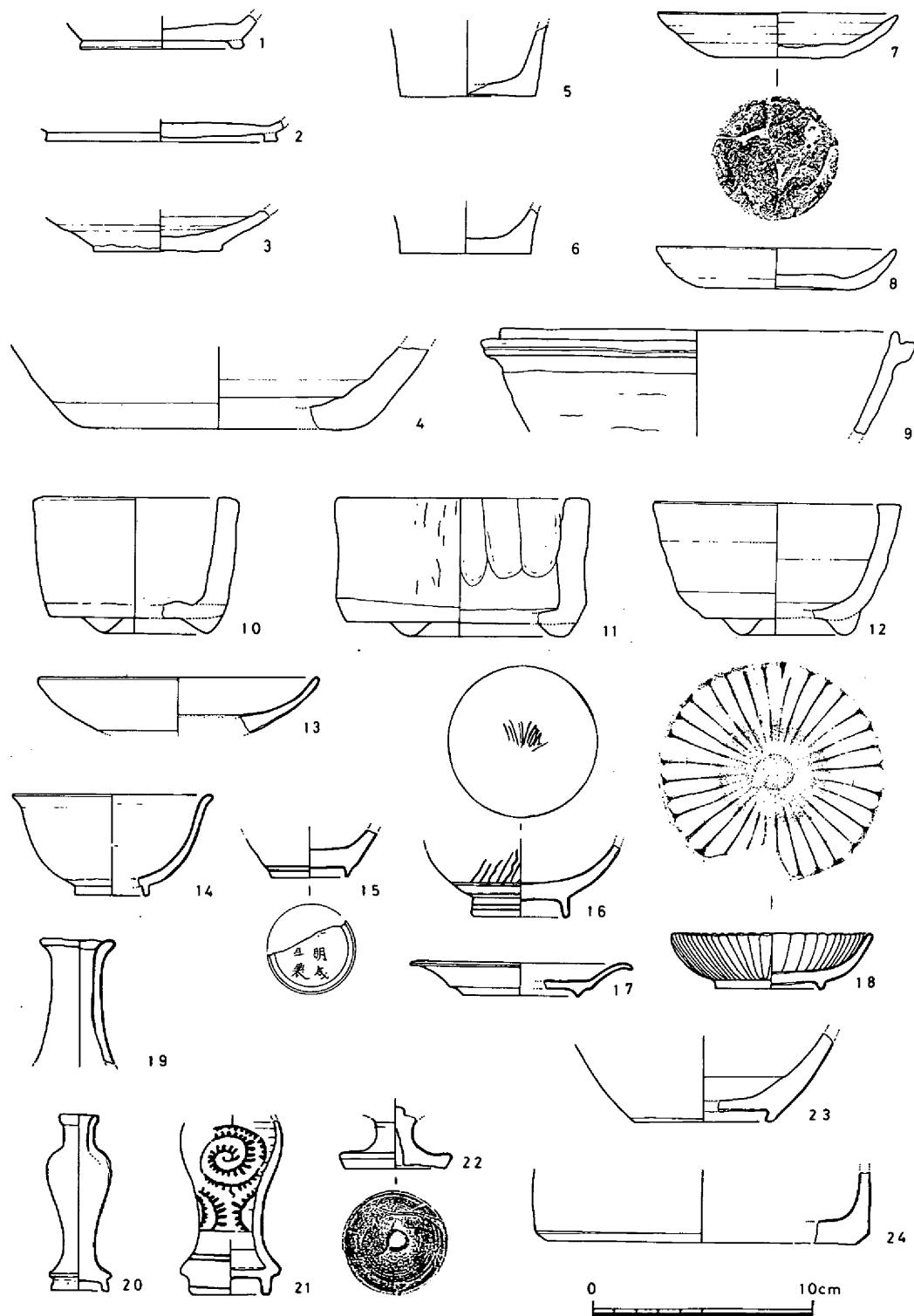
二宮遺跡

なり30、31は備前焼か否か判断しがたいものである。



第34図 荒神元B地区出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

二宮遺跡



第35図 荒神元B地区出土遺物 (1/3)

二 宮 遺 跡

29は須恵器にて無釉のものであるが、31は外面に自然釉がみられ、ナデの調整においても他と異なり、器外面縦刷毛ナデ後に幅2cmの横位の荒刷毛ナデが一巡する焼成良好のものである。

30は器内外面とも横位の荒刷毛ナデが施されており、それは外面底にまでおよんでいる。

33、34、36は小物であり赤茶褐色に発色している。これらはロクロびきの調整痕をよくとどめており、33には右回りの糸切り底がみられる。胴部下位には6本の沈線からなる傘状のヘラ描きがみられる。34も同様のスズメ口の器形になるものであろう。

須恵器・瓦質土器・陶磁器・土師器（第35・36図）

1～4は奈良～平安末期の須恵器と考えられ、1・2は付高台、3は糸切り底がみられる。4は焼成、胎土ともに良好のもので青灰色を呈し、硬質である。底部にヘラ削り、あるいはヘラ磨きの痕跡をとどめる。

5・6・7・8・10・11・12はほぼ同一の胎土、焼成にて暗黄褐色系の色調を呈する素焼の土器である。精製した粘土の使用がみとめられ、白色砂粒を多く含まない。10～12は器壁の厚い作りで底部に突起状の3足を有するものあり、火鉢・手あぶりの類であろうか。

9は暗灰色の瓦質土器である。内外面は細かいナデにより調整されており、鍔部分、及び下位全体にススが付着している。

13～21は伊万里系のものが中心をしめる磁器である。磁胎は17・18が白色、16・17・18・19が淡青色を呈しており、14・20はそれぞれ若干異なるが後者に近いものである。

13は残存部分に非常に薄釉が施されており、見込底部にあって環状に無釉の状態がある。14は小じんまりとした茶碗にて、丸みをもつ体部より外反するシャープな口縁がつく。高台、体部下位が無釉であり、他は緑灰色の釉が施され細かい貫入が全体に見られる。

15・16・21は染付である。15は高台部外面に二重の円闇文が青灰色の呉須により描かれており、高台内にも同様の呉須による「太明成田年製」の年号銘がみられる。

16は見込みに円闇文、その内に草花文が灰青色の呉須により描かれている碗である。

17は白磁の小皿であり、非常にシャープに仕上げられているものである。見込み部分に型による文字文が描かれている。瀬戸系のも釉でおおわれており、口縁端部は黄緑色が一巡している。細かい貫入が全面にみられる。

20は内面を除く全面に暗青灰色の釉薬がみられ、呉須絵は4本の円闇文と渦巻文を中心とする構図が描かれている。

22～27は唐津系の焼物と考えられるものである。色調は暗緑色系を基調としており、23・27のみが緑色、灰色混合の波状の横縞がみとめられる。胎土においても27以外は非常に粒子の細かい、硬くしまった良質の陶器の感じを呈するが、27は焼成、胎土とも若干他に比べて劣るものである。

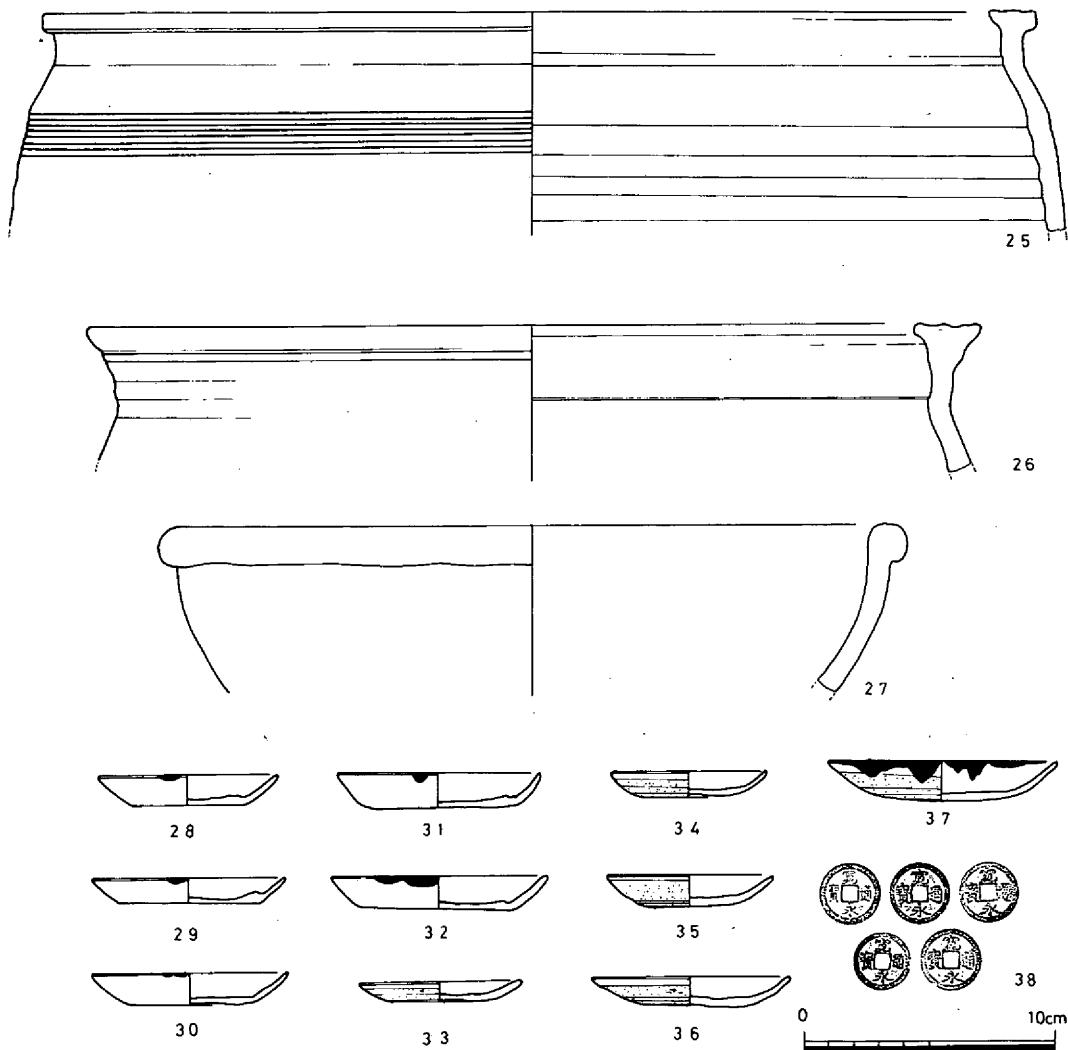
22は底部右回りの糸切りとなっており、24同様底部は無釉である。

28～32は土師器の器壁の薄い小皿であり、口唇部に灯芯のスス痕跡がみられる。

33～37は茶褐色を呈し、色調、胎土、形態においても前者と異なる陶質の小皿である。

18は口縁部の一部が欠損した白磁の小皿である。輪花形をした型物にてつくられており、全面に大

二宮遺跡



第36図 荒神元B地区出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

きい貫入がみられる。

19は外面、及び口縁部内面に青磁釉がみられる、銚子の類であろうか。内面は無釉にて、ところどころに釉の垂れをみる。

20、21は神具である。20は外面では高台部分のみが無釉にて、そこより上位は濃緑色ヨコナデ後、体・底部にかけてヘラ削りが行われている。

28～37は規格を4種類に分けることができ、6～6.2cmの小形のものから、6.5～6.75cmのもの、7.8cmを前後するもの、9.2cmを前後するものまでが存在する。器高は0.8cmより1.7cm間におさまるよう

二 宮 遺 跡

である。これらの皿は№14荒神社基壇を中心に検出されたものであり、多量に出土している。

38は寛永通宝であり、大きさが若干異なっている初鋳年は寛永13年（1636年）であり、江戸時代に代表的な貨幣である。

（3）荒神元C地区

グリッド南北23線を境にして、新しい削平を受けている西側地区と中世建物群をのせる東側地区にわかれ、その間に現代の水田溝が走る。

西側地区は東側地区の水田平坦面に合わせて、新しい時期に丘陵を削除し造田をしており、そのため丘陵部の遺構は消滅した可能性がある。東側地区南部についても同様のことが考えられる。

東側地区の基礎層序は第三紀層を遺構ベースとし、表土まで60～70cmをはかる。その間は下位より暗茶色土、暗こげ灰色（水田耕作土）、暗黄褐色土（地山土を利用しての造成）からなっている。現代の水田耕作が地表面までおよぶ個所等があり、後世の攪乱が充分考えられ、旧地表面は現存しない。

荒神元C・宮峪地区遺物計測値一覧表（表-4）

建物	規模	柱間寸法(cm)		桁行(cm)	梁行(cm)	面積(m ²)	方向	掘り方	柱痕径(cm)	柱穴深(cm)	備考
		桁	梁								
19	3×1	184～296	373～380	728～738	373～380	27.89	南北	円形	9～15	25～50	柱穴内遺物
20	4×2	185～325	180～397	804～986	180～397	29.14	南北	円形	5.5～16	14.5～45.5	柱穴内遺物 台石3
21	2×1	190～325	320～330	335～505	320～330	16.67	南北	円形	6～14	6～275	柱穴内遺物 台石3
22	2×2	240～294	150～170	528～544	314～320	17.41	南北	円形	8～14	9～27.5	
23	4×1	233～318	350～360	915～1143	350～360	41.15	南北	円形	9～18	13.5～42	柱穴内遺物
24	2×2	182～328	172～170	500～510	317～325	16.58	東西	円形	7～16	5～27	柱穴内遺物 台石1
26	3×2	217～235	155～193	671～674	348～351	23.66	南北	円形	6.5～16	12.5～36	柱穴内遺物
27	2×2	267～289	167～175	530～560	342～342	19.15	南北	円形	9～14.5	19.5～42.5	柱穴内遺物
28	2×2	120～421	148～175	295～421	308～337	14.19	南北	円形	8～20.5	13～50	

掘立柱建物

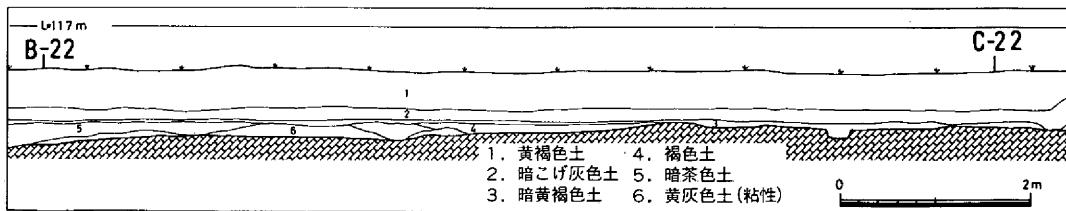
これらは14m×22m内に重複、切り合い関係をもって存在する。東西に主軸方向をもつ№24建物を北辺に、その西側に5棟（A群）東側に3棟以上（B群）が変形の「コ」の字状に構成されている。そして、「コ」の字状内の空間は建物と有機的に関連をもちながら遺構として存在したものであろう。

建物A群は№19～№23建物より構成されており、5棟が重複、切り合い関係にあり個々に存続期間が異なるようである。№19・20・22建物は№24建物と直交する形で同一主軸方向をとるが、規模がそれ異なるものである。№21・23建物は№24建物とは直交関係をとらず、前記したものよりさらに棟方向を東にふっており、建替えの意識が若干異なる可能性がある。

No.19 建物（第38図、図版16、17—1）

№19建物は桁行3間、梁行1間にて棟方向をN—23.5°—Wにとり、桁、梁の長さがほぼ2：1の比率でつくられている。柱穴径はほぼ近似し深さは南に、すなわち斜面にそって下降するにしたがって深くなり、約50cmをはかるものがある。柱間距離は等間隔ではなく3間ともそれぞれ異なり、北よ

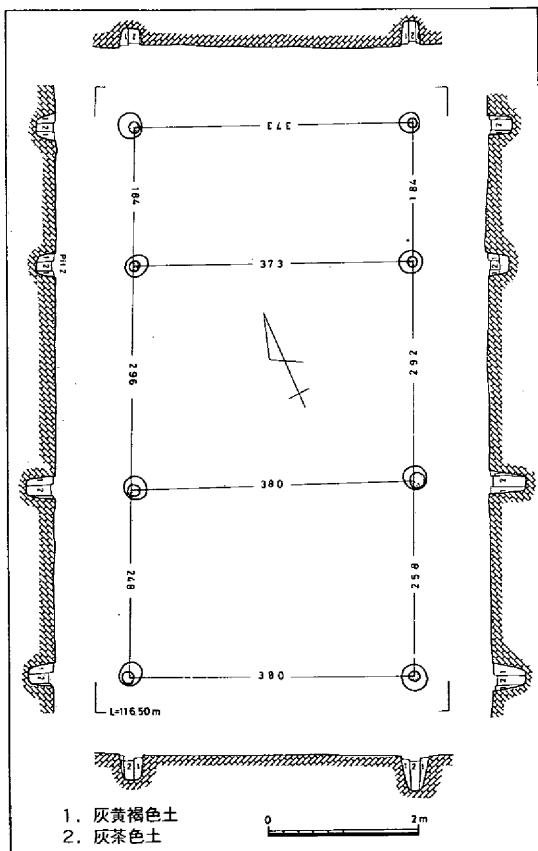
二宮 遺 跡



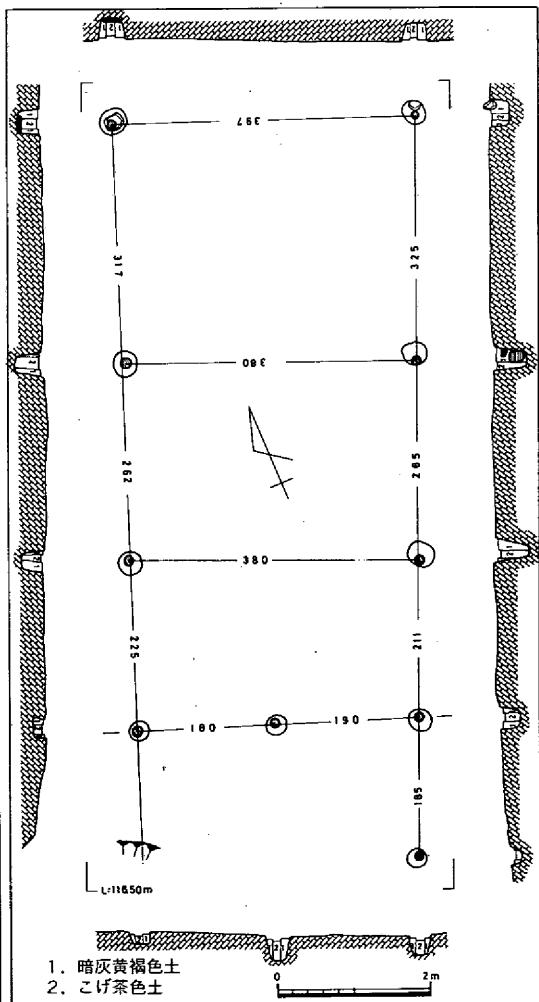
第37図 荒神元C地区22線土層断面 (1/80)

り4:2.5:3の比率となる。側柱穴は対称に配列されており、各柱穴とも9~15cmをはかる柱根の土壤化痕跡がみられる。

№20建物は桁行4間、梁行1間にて棟方向をN- 22.5° -Wにとり、桁・梁の比率が約2.5:1

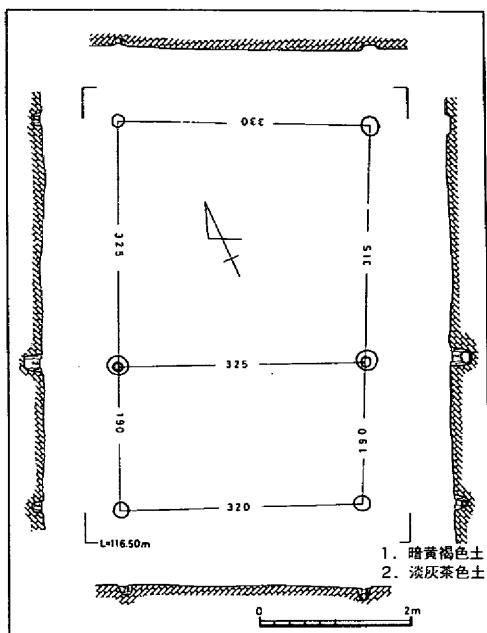


第38図 No.19 建物 ($\frac{1}{100}$)

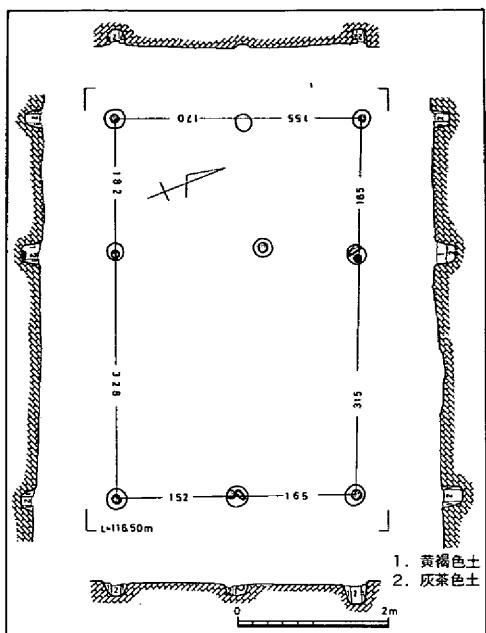


第39図 No.20 建物 ($\frac{1}{100}$)

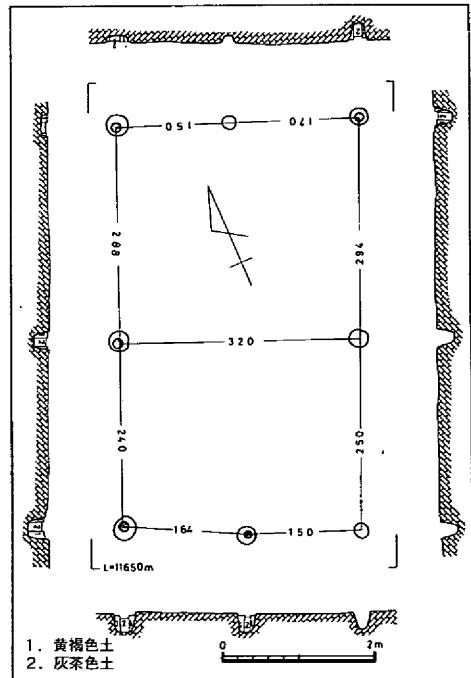
二宮 遺 跡



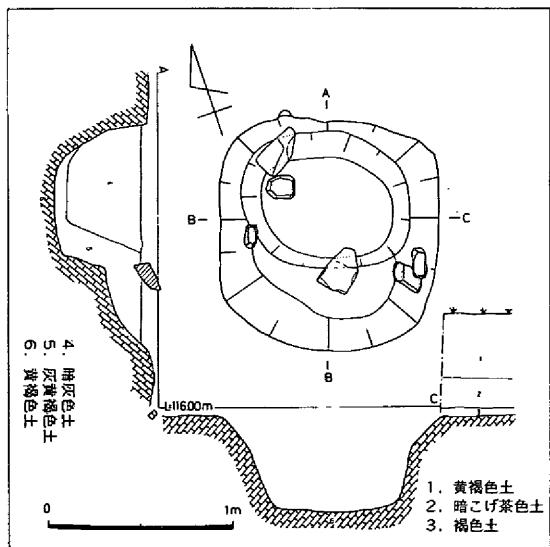
第40図 No.21 建物 ($\frac{1}{100}$)



第41図 No.24 建物 ($\frac{1}{100}$)

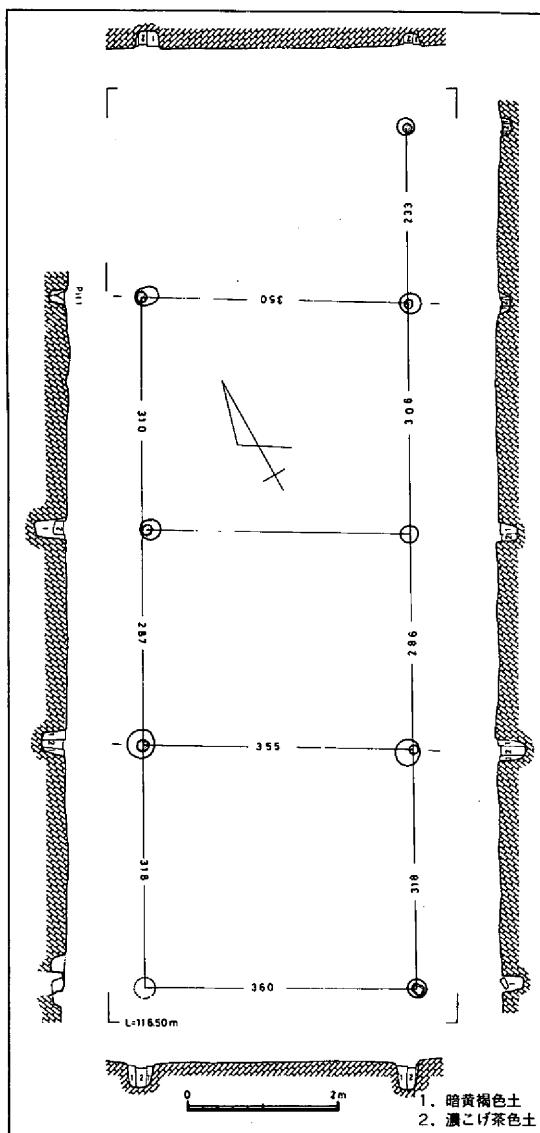


第42図 No.22 建物 ($\frac{1}{100}$)



第43図 No.25土壤 ($\frac{1}{40}$)

二宮遺跡



第44図 No.23建物 ($\frac{1}{100}$)

分柱穴を結ぶ寸の地点に間仕切りに利用されたと考えられる柱穴が存在する。これらの柱間距離は異なるが、側柱穴は対称に配列されており柱穴内に台石、及び遺物を含む。

No.25 土壙 (第43図、図版16・17-1)

上端径 $125\text{cm} \times 117\text{cm}$ 、深さ 50cm をはかる隅丸方形の土壙である。土壙内は南側上端より 25cm 下に段が設けられ、そこより $90\text{cm} \times 70\text{cm}$ 、深さ 25cm の土壙が掘り込まれている。河原石、及び角礫が計6石が上下層中より出土しており、土師質小土器片を若干含んでいる。

でつくられている。柱間距離は4間とも異なり、等間隔ではなく北より南に向かって 325cm より 185cm と狭くなっている。これは梁間についても同様のことが言える。側柱穴は対称に配列されており、No.19建物とほぼ同様の柱痕がみられ、その下位に柱穴底に接着する台石が存在する。

No.21 建物 (第40図、図版16・17-1)

No.21建物は桁行2間、梁行1間にて棟方向をN- 22.5° -Eにとり小型の建物である。柱間隔は2間とも異なっており、側柱穴は対称に配列されている。柱穴深さは $6\sim27.5\text{cm}$ をはかり、台石を有するものもあり桁行中心柱穴の深さが最も深くつくられている。南東隅柱穴内より半壊した土錐が一点出土している。

No.22 建物 (第42図、図版16・17-1)

No.22建物は桁行2間、梁行2間にて棟方向をN- 23° -Wにとり、No.21建物と規模、形状の点において類似する。柱痕径 $8\sim14\text{cm}$ 、柱穴深さ $9\sim27.5\text{cm}$ をはかり、柱穴内より裏面に刷毛目のみられる瓦質土器片を出土している。

No.23 建物 (第44図、図版16・17-1)

No.23建物は重複、切り合いの建物の中にあって、他の建物と棟方向がN- 2.5° -Eと異なり、より東にふっている。

No.24 建物 (第41図、図版16・17-1)

No.24建物は桁行2間、梁行2間にて棟方向をN- 70° -Eにとり、No.21、22建物と規模、形状の点において類似するものである。梁中間部

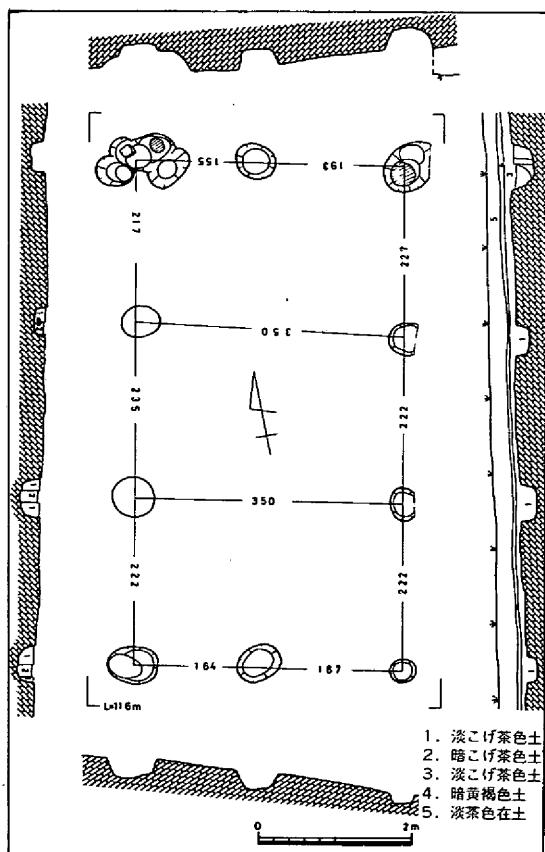
第3節 宮峪地区

1. 宮峪地区の概要（第7図）

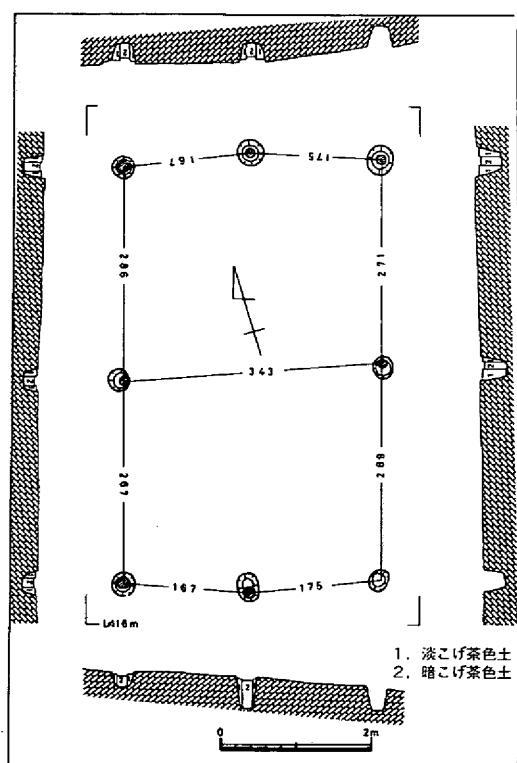
B丘陵東端に位置する畠地部分の約123m²がそれにあたる。15m×8.3mの東西に細長く南東に傾斜する部分に、建物3棟以上（B群）が切り合いの関係をもって検出されている。

荒神元C地区の建物A群に比較して、若干規模の大きい柱穴を有する。そして、これらが変形「コ」の字状の建物東端を構成するわけである。

表土剝ぎの時点において遺物はほとんど検出されておらず、若干の近世陶磁器片が出土したのみである。

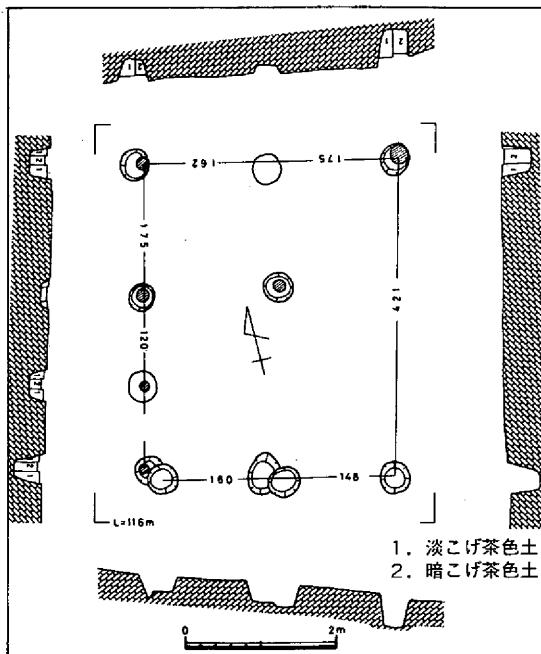


第45図 No.26建物 (1/100)

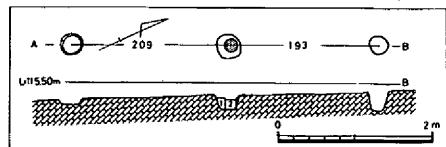


第46図 No.27建物 (1/100)

二宮 遺 跡



第47図 No.28 建物 ($\frac{1}{100}$)



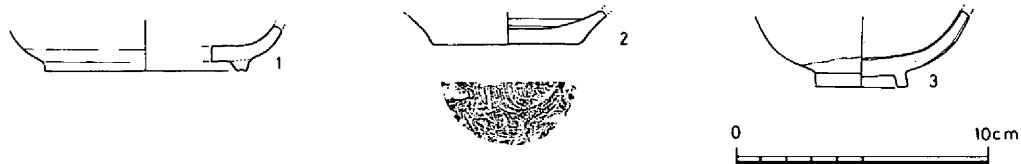
第48図 No.231 柱穴列 ($\frac{1}{100}$)

2. 宮崎地区の遺構・遺物

(1) 宮崎地区

No.26 建物（第45図、図版17—2）

№26建物は桁行3間、梁行2間にて、N—11.5°—Wの棟方位をとり桁・梁の長さが2：1の比率でつくられている。桁間、梁間はそれぞれ等間隔にあり側柱穴も対称に配列されており、しっかりしたつくりのものである。柱穴掘り方が大であるにもかかわらず、柱痕は6.5～16cmと前述したもの



第49図 宮峪地区出土遺物 (1/3)

のと大差はないものであるが、台石のようなものは検出することができなかった。

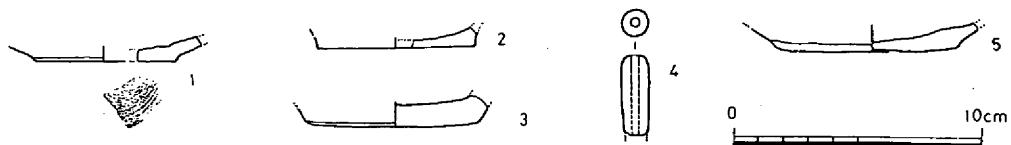
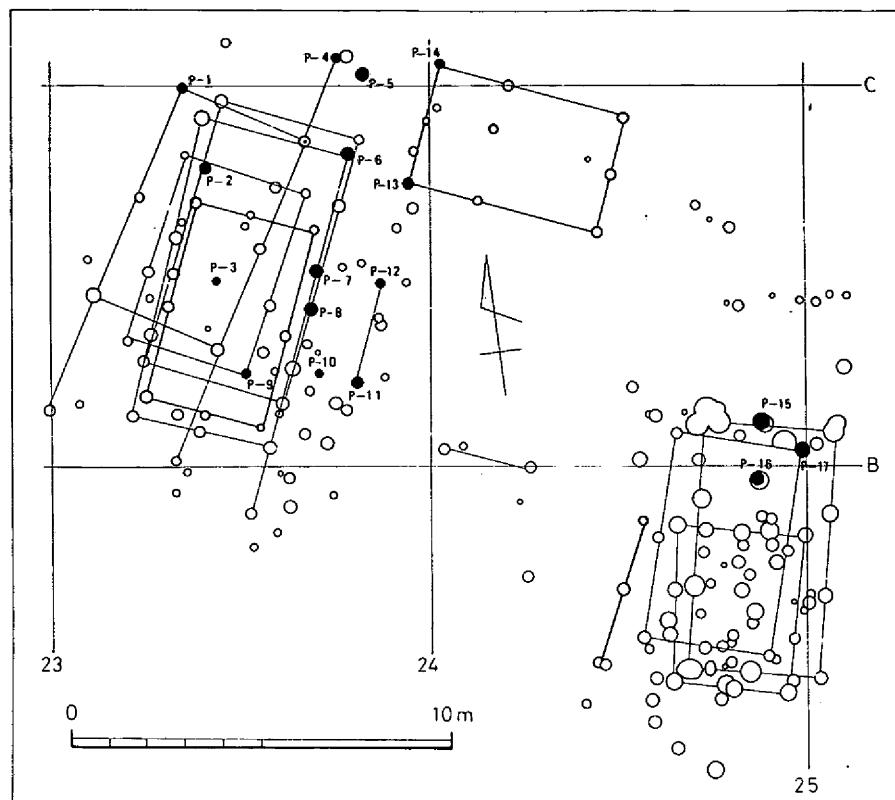
No.27 建物（第46図、図版17—2）

№27建物は桁行2間、梁行2間にて棟方位をN—16°—Wにとり、梁の中間柱穴が若干外に張り出す形態をとるものである。柱穴は東、及び南側傾斜面に向かうにしたがって深くなつており、その深さ19.5～42.5cm、柱痕径9～14.5cmをはかる。面積は約19.2cm²をはかり№21・22・24建物に類似をしている。

No.28 建物（第47図、図版17—2）

№28建物は桁行2間、梁行2間にて棟方位をN-14.5°-Wにとり、若干変形の柱穴配置である№27建物等と同様に斜面方向に柱穴が深くなっているものである。

二宮遺跡



第50図 荒神元C地区・宮崎地区出土遺物柱穴 ($\frac{1}{200} \cdot \frac{1}{3}$)

No.231 柱穴列 (第48図)

柱穴間距離 193~209 cmをはかる 2 間ものである。この主軸はNo.21建物と同一方向を示す。

各柱穴内出土遺物 (第49図)

「コ」の字状配置建物を中心にして総数17柱穴内より出土している。

北辺のNo.24建物 P-13・14、A群ではNo.21建物を除き、No.19建物 P-2・8、No.20建物 P-6・7、No.21建物 P-9、No.23建物 P-1・4、その他 pit 3・5・10・11・12より出土している。B群ではNo.28建物を除き、No.26建物のP-15、No.27建物のP-17より出土している。

遺物は剥落が著しいうえ小片に限られており、器種、器形が復元可能なものが少なく、個々の建物の時期決定については不充分な状況である。土師器10片、瓦質土器3片、須恵器4片、土錐1点、鉄製

二 宮 遺 跡

荒神元C・宮峪地区各柱穴出土 遺物一覧表（表一5）

柱穴	建物	遺 物・備 考
1	No.23	瓦質土器、裏面刷毛ナデ
2	No.19	土師器、釘状の鉄器
3	—	土師器、瓦質土器（羽釜）
4	No.23	土師器、炭
5	—	焼土塊
6	No.20	土師器、杯底部、精製粘土
7	No.20	土師器、杯底部
8	No.19	須恵器、勝田焼、土師器
9	No.21	土師器、土錐
10	—	—
11	—	土師器、カナクソ
12	—	土師器、杯底部、精製粘土
13	No.24	須恵器、勝田焼
14	No.24	瓦質土器、外面スス付着、精製粘土
15	No.26	土師器（粗製）須恵器高台付杯
16	—	土師器
17	No.27	土師器、須恵器

品1点、カナクソ1点、焼土塊1点の計21点が数えられる。

これらは平安末～鎌倉後代にかけてのものが中心になると考へられるが、No.26建物出土の須恵器は焼成・胎土ともに良好にて仕上げられ、付高台が行われている、奈良末～平安時代の様相を呈する。他の須恵器は平安末期と考えられる荒神元A地区No.4井戸出土のものに類似をしており、勝田焼の特徴を示すものが含まれている。

4. 小 結

ここでは蔵屋敷、荒神元、宮峪地区を関連してのべる。

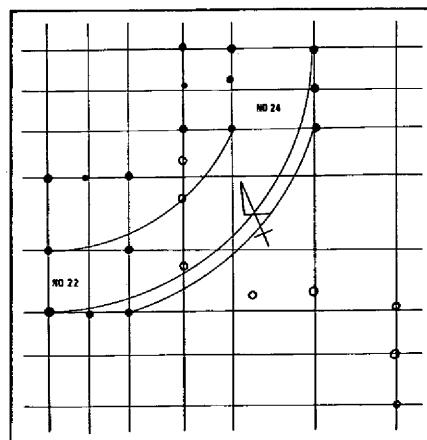
まず、これらの地区をのせる二宮遺跡B丘陵は、かつて海拔約117.50m、巾約70mをはかり、美和山山塊より南に延びる自然地形を有していたと考えられる。しかし、現在は須佐之男命を祭神とする荒神社の存在した荒神元B地区一部分のみをとどめ、周辺は後世に削平を受けて大きく変化している。その変化は古代末～中世の宅地造成によるものと、近世、近代の開田理由によるものが考えられる。

かろうじて残っている荒神元B地区には確定的ではないが、弥生時代末～古墳時代初頭と考えられる袋状ピット、住居址が検出されており、蔵屋敷、荒神元A・C、宮峪地区にはそれらの時期の遺構は皆無である。このことは古代末、中近世・近代の諸々の事情による削平のために、古い遺構が消滅してしまった可能性は充分に考えられそうである。

ここでは、その宅地造成が古代末に宮峪、荒神元A・C、蔵屋敷地区に及び、なかでも宮峪地区が他に比べて、若干早い時期に造成が行われ拡張が行われたと考えておきたい。

A群の建物構成はNo.22建物とNo.24建物が「L」字区画を有しており、計画設計の考へられるものである。それはNo.22建物西側桁行を北方に、さらにNo.24建物の北側桁行を西方に延長した交点が各桁行の2倍の数値10.5m(35尺)となる。

この点より10.5mを半径として弧を描くと、No.22建物南西柱穴とNo.24建物北東柱穴が同半径内に入るるものである。この二棟は面積でも約17m²の同数値を示しており、柱穴内より平安時代後半と考えられる糸切り底を有する勝田焼の破片が出土している。個々の柱穴間では全然切り合いがみられず、他の建物との切り合い新旧関係はつかめない。し



第51図 No.22・No.24建物の関連図

二 宮 遺 跡

かし、棟方向をほぼ同一にとり、同場所を踏襲している点等からは比較的長期にわたり同目的をもって継続していたものと考えられる。

建物B群はA群とは若干棟方向を異にし、建物柱間も等間隔のものを中心に構成されているが、側柱穴はA群と同様に対称に配列されている。柱穴内出土遺物にかぎれば、№26建物出土の高台付須恵器は№24建物出土須恵器よりは古いものであり、B群の一部がA群に先行する可能性がうかがえる。この両群間には宮峪地区と荒神元地区を隔する現代の用水溝が存在する。このような溝はA群西側にも同方向に走っており、荒神元B地区の高まりにぶつかり南東に向きを変えている。そしてこの溝より西側には遺構はまったく存在せず、東側に集中している。このことは、これらの溝が建物構成時において、何らかの目的もってつくられたものが踏襲された可能性も考えられる。宮峪地区より荒神元C地区に向かい宅地の拡張が行われ、最終的に変形「コ」の字状につくられ利用されたのであろうか。

遺物では、この地区の使用時期を示す平安時代末～鎌倉時代にかけての須恵器・土師器、ついで鎌倉時代後半～室町前半にかけての備前焼が多く出土しており、龍泉窯系を含む明代の青・白磁片が若干みられる。ついで伊万里系、唐津系、備前焼等の近世・近代陶磁器が多量に出土している。なかでも、平安時代に比定される勝田焼（註4）の椀・小皿・壺・甕の類が遺構、及び耕作土中より出土しており、まとまったものとしてここでは№4井戸があげられる。

それらの中で口縁部内外面に重ね焼き痕跡をとどめ、とくに外面に一巡する黒帯がみられる、縁黒の椀形土器（第16図1～8）をとりあげて若干の考察をのべる。

この種の土器は中国縦貫自動車道路建設に伴う発掘調査（註5）において出土例が多くなり、再びクローズアップされつつある。なかでも勝田郡家址の一部と考えられている勝田郡勝央町平遺跡（註6）、「少目」の墨書き土器を出土した津山市総社美作国府址（註7）がその代表としてあげられる。美作国府では平安末～鎌倉初期に比定する三期の井戸Ⅲ・V・ピットⅡ・Ⅲ・Ⅳ等より土師器と共に伴している。

また美作国守護所と推定される院庄館跡でも整備事業計画に伴う発掘調査（註8）により出土している。

この椀形土器の法量・形態は最大径13.8～16.6cmの幅をもち、なかでも15cmを前後するものが多いようである。器高では4.8～6.1cmまでのものがあり、5.5cmを前後するものが多い。底径は5～7cmをはかり同じく5.5cmを前後するものが多い。

そして、現時点でこれらのうち中国製の陶磁器を伴うものと、陶磁器を伴わないものとにわけることが可能である。伴わない椀は最大径15cm前後で器高5.2cm以上をはかり、伴う椀は最大径15cm以上で器高5.2cm以下の傾向を示す。このことがただちに年代差を決定できるか、否かは今後に残された課題である。

ここでは口径が小さくて器高の高い椀と口径が大きくて器高の低い椀との二者が存在し、№4井戸の椀は前者に属するものである。

第4節 東宮峪地区

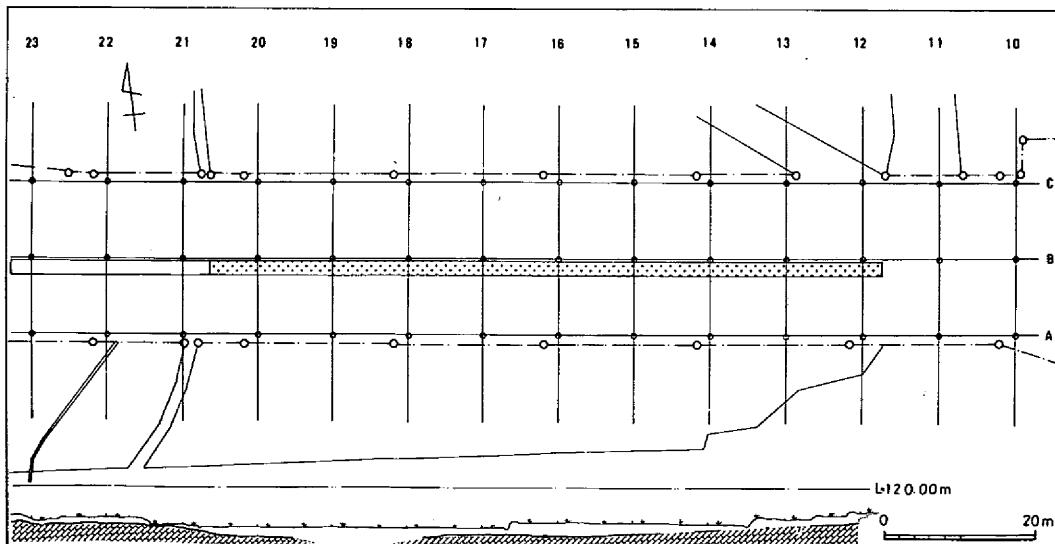
1. 東宮峪地区の概要 (第52図)

二宮遺跡B・C丘陵間に存在する幅約100mの谷部分がそれにあたる。調査前は約2200m²が水田として利用されており、その水田面は西方より東方に海拔115m、116.50m、117.50m、118.10m、118.50mの5段からなっている。そして、その高低差によって下段よりA・B・C・D・Eの5地区を設定し、路線センター南に、南北幅2m、東西幅約90mのトレンチを掘開し、確認調査を行った。その結果宮峪地区東端、岡の屹地区西端を谷肩口としてG18・19線間を谷底とする自然地形を確認した。谷底に近づくにつれて湧水が多く、どの面でも遺構は確認できず、二層の遺物包含層を検出するにとどまった。故に、この地区では遺物の採集が中心となり拡張全面調査にはいたらなかった。

2 東宮峪地区の遺構と遺物 (図版115)

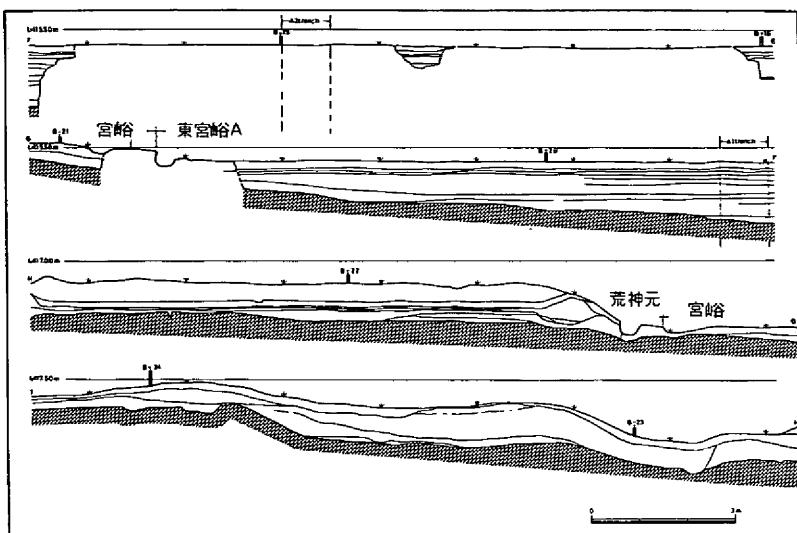
(1) 東宮峪A地区 (第56図、図版18)

38m×2mのトレンチ調査を実施し、前述の谷底を確認した部分である。A1トレンチ断面では水田耕作面より約130cm下にて宮峪地区より延長の第三紀層の地山面がみられ、そこより上位に表土まで10層が存在する。各層は灰・茶色系の土層が基調となり、水田床土とみられる部分に黄褐色系(3・6層)が、遺物を含む層は黒色系の色調を呈する。遺物は第8層上面、10層中、地山面を中心

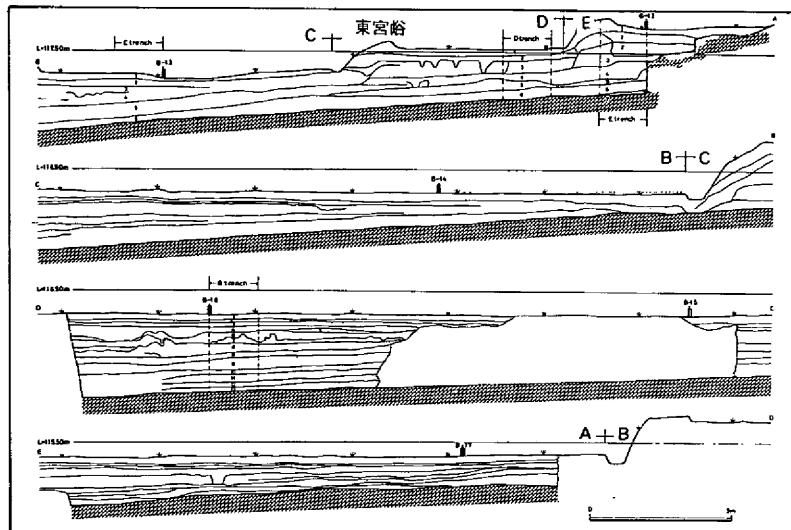


第52図 東宮峪地区トレンチ図 ($\frac{1}{1000}$)

二宮遺跡



第54図 東宮峪B・C・D・E地区土層断面 ($\frac{1}{160}$)



第53図 東宮峪A地区土層断面 ($\frac{1}{160}$)

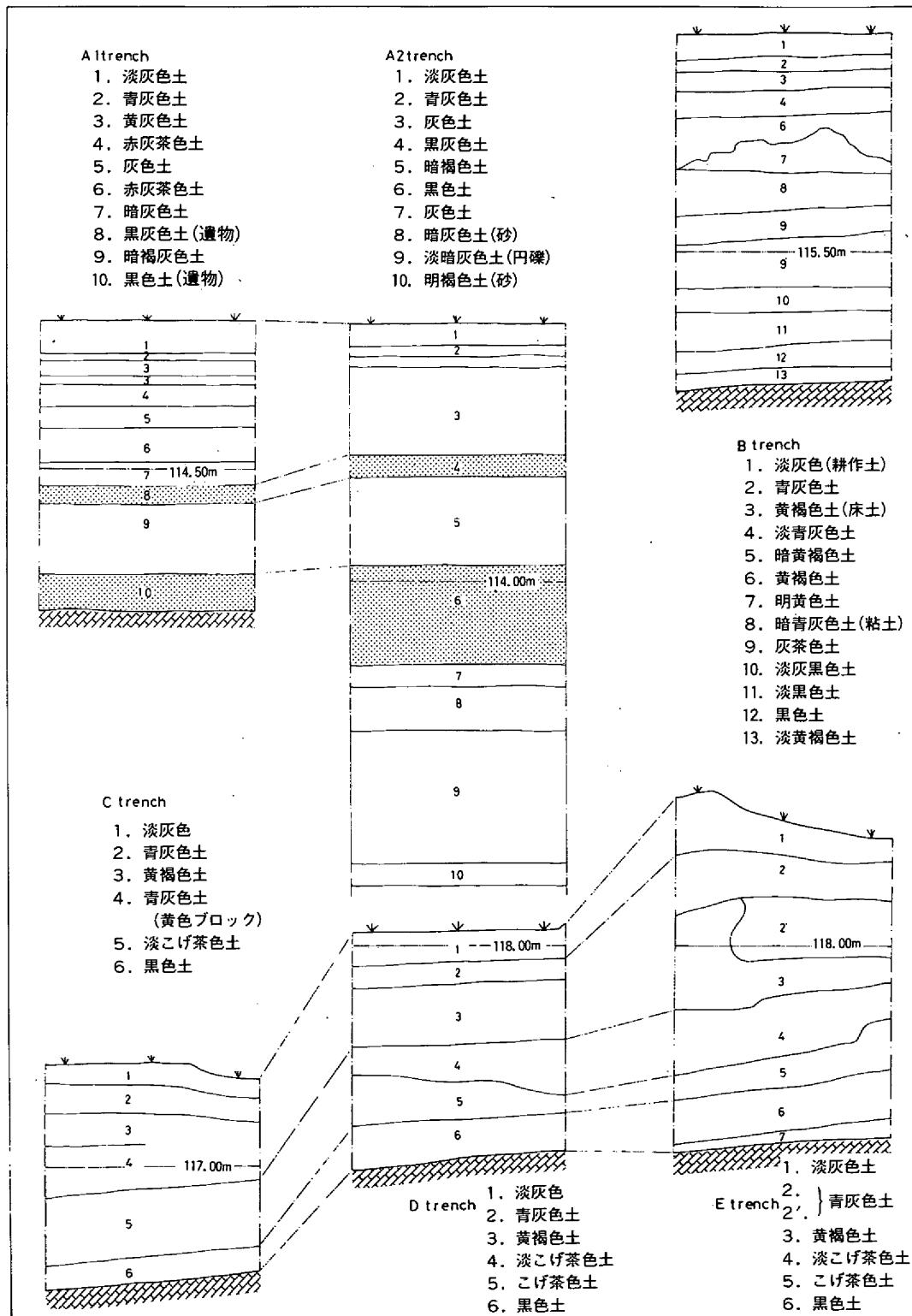
にし、奈良末～近世までの土器片が出土している。なお、8層上面高は西端地山面とほぼ同一レベルである。1・3・9・12・13・15・17は西端地面より出土、5・11が8層上面、6・8・10・14・16が表土より8層間、2・4・7が10層中より出土している。

1・2・3・4・5・7・11が須恵器、6・8・9が土師器、10が備前焼、12が白磁、13～16が伊万里系の磁器、17が陶器にわけられる。10層中に小片ではあるが、奈良時代の須恵器蓋片に墨書き痕跡をとどめるものが存在した。A2トレンチでは湧水が激しく調査途中にて壁が崩落したため実測図は作成できず、日誌の記述より簡単に述べる。

基礎層序はA1トレンチとあまり変化をしていないが、谷底に下

降するにしたがい遺物を含む層の堆積が凹状に厚くなっている。A2トレンチでは6層がA1トレンチの10層にあたり、白色の砂粒が目立ち、木質部、須恵器等の遺物を包含する。6層下は約90cm幅に砂・小礫・円礫の順序で硬質に堆積し、10層で鉄分の集積、さらに微砂に変化する約260cmの土層観察までが可能であった。

二宮遺跡



第55図 東宮峪地区トレンチ断面 ($\frac{1}{30}$)

二宮遺跡

(2) 東宮峪B地区 (第57図、図版115—1)

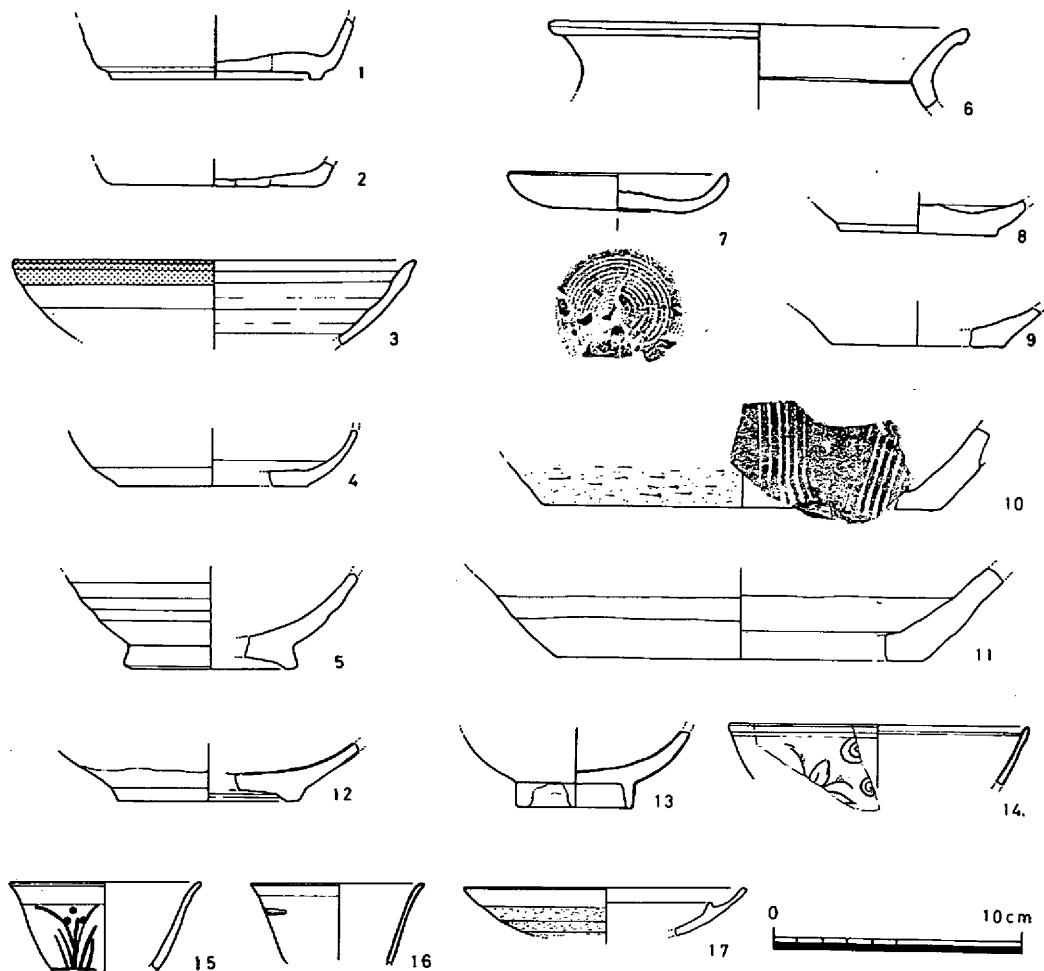
Bトレンチでは32m×2mトレンチを実施し、表土より160cm下に地山面を検出する。表土より地山までに13の間層が存在し、3・6・9層に水田床土と考えられる黄褐色を基調とする客土がみられ、とくに6・7層では黄褐色の客土が行われており層面の凹凸が激しい。

遺物は1～4までのものが11・12層より、5～8までが表土より10層間に出土している。

1が弥生式土器、2～4が須恵器、5・6が土師器、7が備前焼、8が瓦質土器である。この地区では黒色土中に弥生式土器と奈良時代の遺物が混在して出土している。

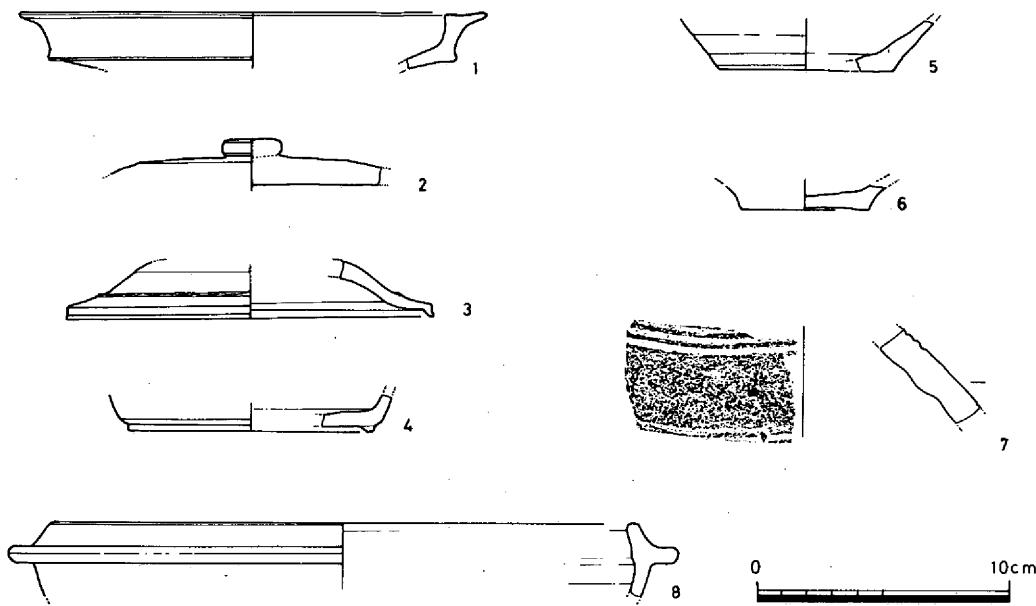
(3) 東宮峪C地区 (第58図、図版115—2)

6m×2mのトレンチを掘開し、表土より約1m下にて地山面を検出する。C・D・E地区の水田比

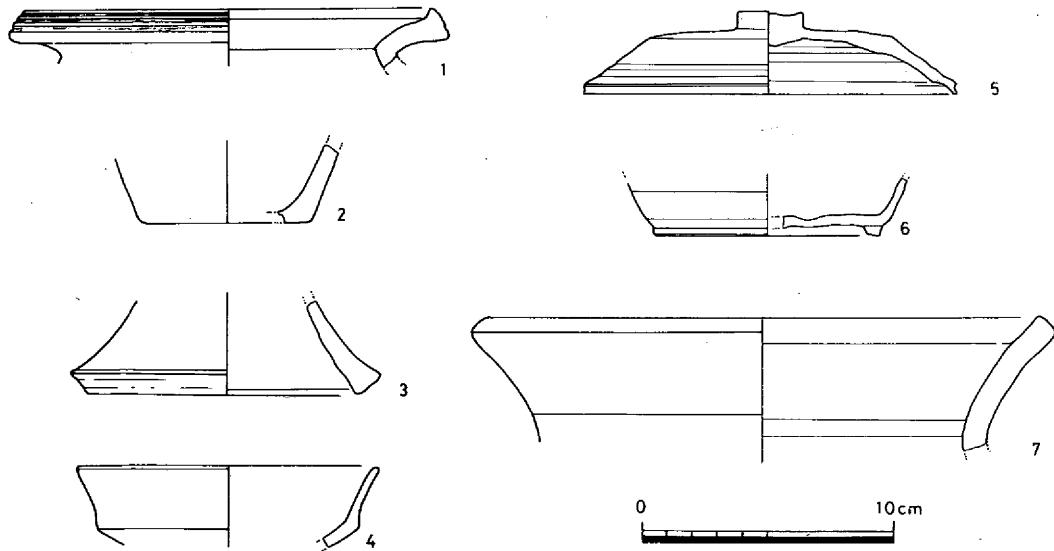


第56図 東宮峪A地区トレンチ出土遺物 (1/3)

二宮遺跡



第57図 東宮峪B地区トレンチ出土遺物 ($\frac{1}{3}$)



第58図 東宮峪C地区トレンチ出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡

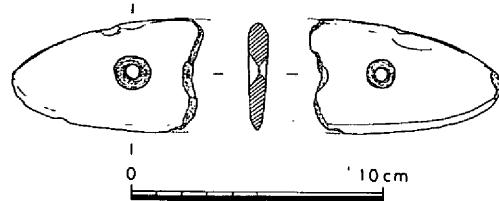
高差はあまり無く、下位の土層層序において3・4・5・6層は各トレンチ同一のものである。2層は青灰色、3層床土は黄褐色を呈し現代の水田構造そのものである。

遺物は6層を中心がみられ、2～6がそれにあたり、1・7が表土より5層間に出土したものである。1～3が弥生式土器、4が土師器、5が須恵器にわけられる。他に6層中より磨製石包丁の破片が出土している（第59図）、全長復原推定12.1cm、

幅4.54cm、厚さ1.1cmをはかり、擂鉢状に両面穿孔が行われたものである。緑色片岩系の石材が利用されている。

（4）東宮峪D地区（第60図、図版115—3）

5m×2mのトレンチを掘開し、表土より105cm



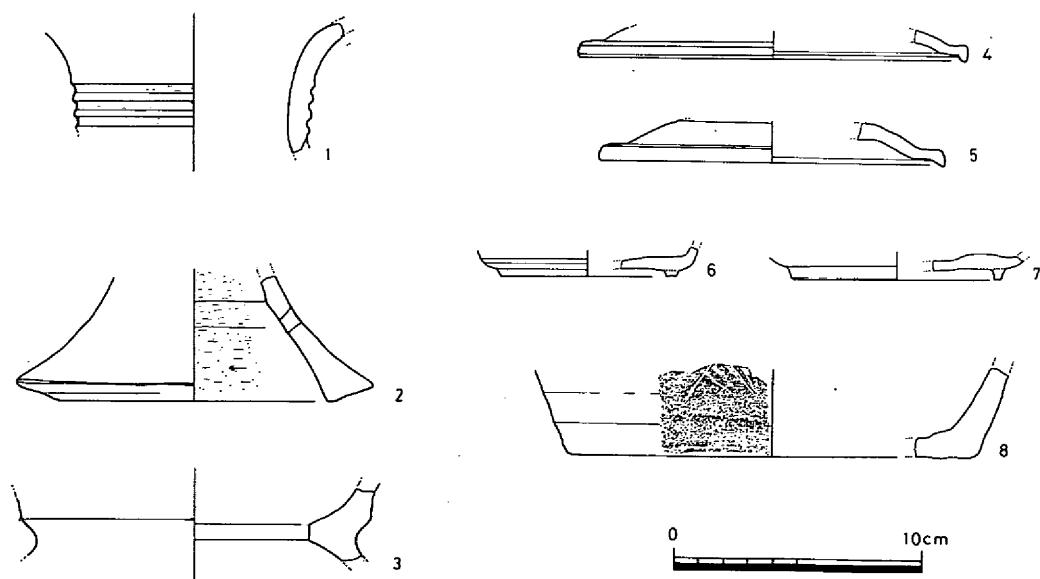
下にて地山を検出する。6層からなり2層が水田、3層が水田床土を形成している。遺物は6層を中心

に1～8までが出土しており、この地区もCトレンチ同様、弥生式土器、古墳時代初頭、奈良時代の土器が混在して出土している。1～2が弥生式土器、3が土師器、4～8が須恵器である。

（5）東宮峪E地区（第61図、図版115—4）

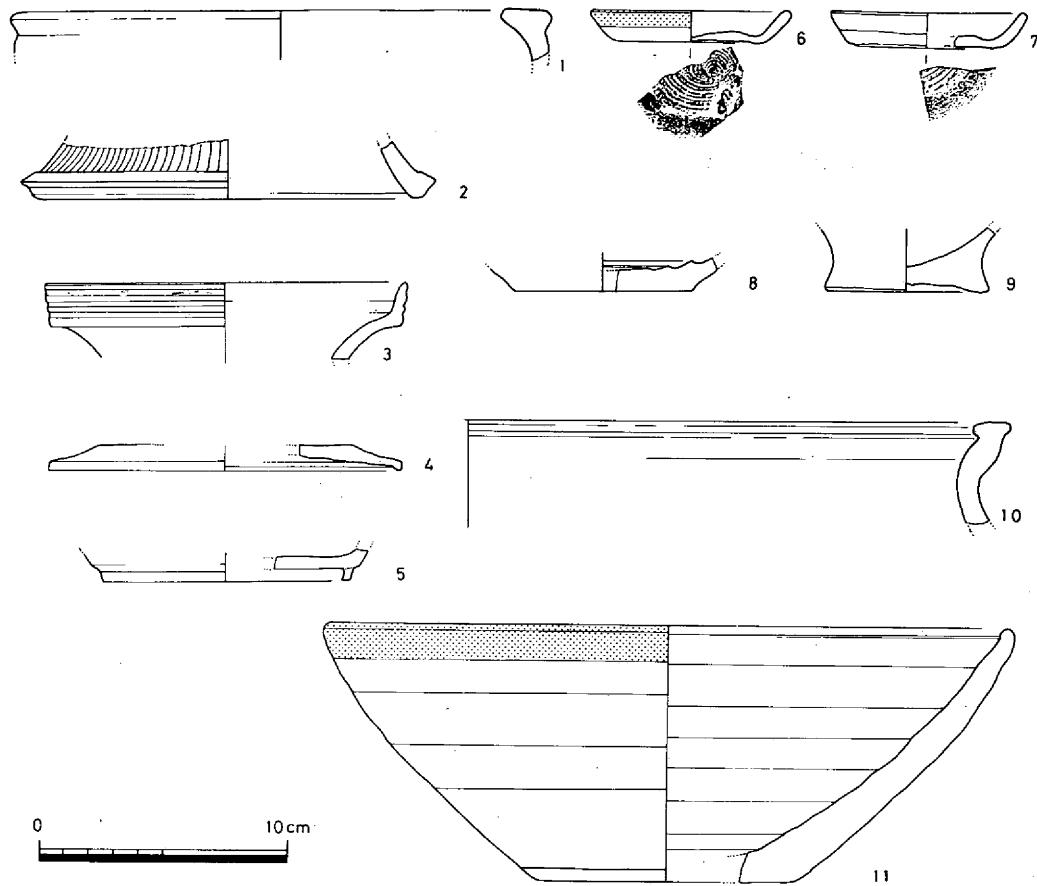
5m×2mのトレンチを掘開し、表土より140cmにて地山面を検出する。全部で8層よりなり、Dトレンチとほぼ同様の土層である。

遺物は6層を中心1～5・9・10が出土し、上層より6～8・11が出土している。1～3が弥生



第60図 東宮峪D地区トレンチ出土遺物（ $\frac{1}{3}$ ）

二宮遺跡



第61図 東宮峪E地区トレンチ出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

式土器、4～7・10・11が須恵器、8・9が土師器である。他に樹枝等の有機物が若干出土している。

3. 小結

東宮峪は美和山1号墳と2号墳間を谷頭として南に延び、高野神社西側の谷より吉井川に注ぐものである。この谷は遺物でみるとかぎり、弥生時代中期後半以前には谷の形状を有し、機能を果たしていたと考えられる。以後古墳、奈良、平安時代にかけて徐々に黒色土の堆積が進行していったものと考えられる。

遺物は弥生時代中期後半～後期前半、奈良時代後半が比較的多く検出されているが、谷肩口にあたる荒神元、宮峪、岡の峠地区ではそれらの遺構は数少ない。他の遺物は遺構と関連する形で出土している。出土品には完形品ではなく、放棄されたものが谷底に向かって移動したものと考えられ、居住地、墓地等として利用された痕跡は認められなかった。

第5節 岡の屹地区

1. 岡の屹地区の概要（第62図）

この丘陵には美作国にて最大規模を有する前方後円墳、美和山1号墳（胴塚）が存在し、南に2号墳（蛇塚）、3号墳（耳塚）、4号墳と継続する。そして、吉井川を望む丘陵最南端に高野神社が鎮座する。そして、これらをのせるC丘陵は、岡の屹B地区を丘陵尾根筋とし、西側の東宮峪、東側の寺前の谷間約100m幅で南に下降していたと考えられる。

調査は3号墳南端約10m以南より4号墳中心部までの間、約35m×70mを対象に行った地形の高低差にしたがい西側の海拔120～123.50mを中心とする斜面を岡の屹A地区、その北側を岡の屹A北地区、さらに東側の海拔約126～127m間の最高所を岡の屹B地区、東側斜面の海拔124～125.50m間をC地区、その下段北半分の海拔122.90～124m間をD地区、南半分の海拔129.90～123.50m間をE地区の5地区に分ける。

（1）岡の屹A地区

ここでは岡の屹A北地区も含めて同時に記載を行う。

美和山3号墳（耳塚）の西側50m×15mがそれにあたる。岡の屹B地区との比高差約2mをはかり、調査前まで畠地として利用されていた。この比高差は終戦後に桑畠をつくるための削平であり、從来は西に10°～15°の傾斜をもったゆるやかな斜面と考えられる。

遺構は古墳時代初頭と考えられる袋状ピット16、中世の住居址2個所、地下式横穴1、土壙4、溝1が存在する。

（2）岡の屹B地区

C丘陵の尾根筋にあたり、北端部に耳塚関連の周溝状遺構（№40）が、南端部においては新規に4号墳（№41）周溝が発見されている。その間のB—7グリッド南東約4mの位置に海拔127mの最高所があり、センターはそこより周辺に下降する、從来、畠地として利用されていた所であり、表土下10～25cmの浅いところに遺構面が存在する。C・D・E地区に比べて広範囲の面の割合には遺構が散逸的である。

遺構は弥生時代終末の住居址1、建物1、柱穴列1、溝状遺構1、近世墓約80基が存在する。

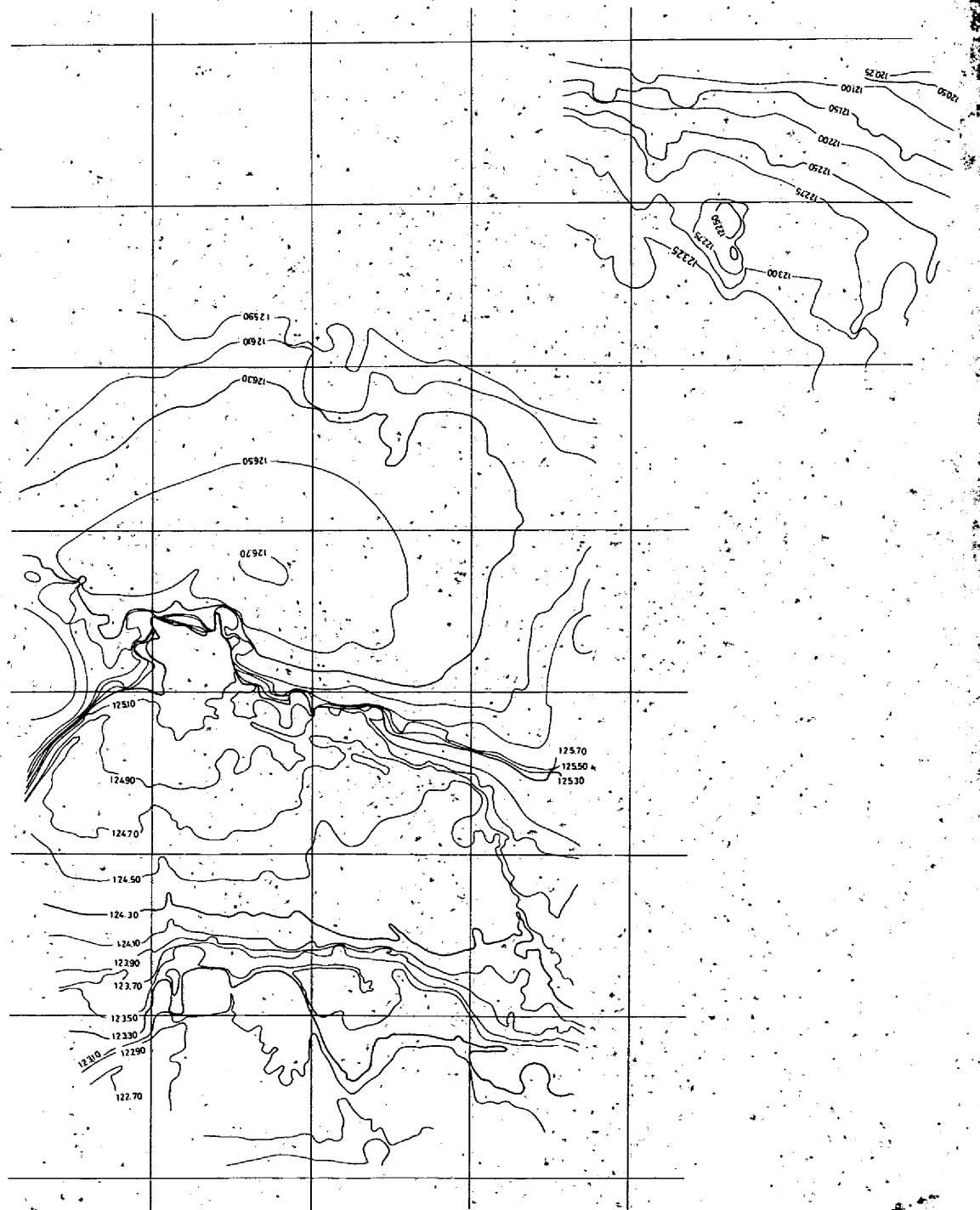
（3）岡の屹C地区

表面観察において、一段下がった面がみとめられ、その面周縁に変形「コ」の字状の溝の発見された平坦部分である。中世の時期のものが中心をしめ、その後近世において墓地として利用されている。

遺構は中世の建物6、それに伴う溝2～3、中世土壙2、近世墓約21基が存在する。

（4）岡の屹D地区

C地区よりさらに一段下がった場所にあたり、C地区同様に溝により区画されたものである。同地



二 宿 遺 跡



第62図 岩の山地区遺構分布図 ($\frac{1}{400}$)

二宮遺跡

区の遺構は耳塚方向にさらに延長するものと考えられる。中世の遺物が中心であり、溝2～3、建物4、土壙2、地下式横穴1、近世墓7が存在する。

(5) 岡の山E地区

D地区より一段下がり最も低い位置にあり直角溝が検出されている。C・D地区同様に区画の溝が認められる。

遺構は中世と考えられる建物2、柱穴列2、近世墓7が存在する。

(高畠)

2. 岡の山地区の遺構、遺物

(1) 岡の山A地区・A地区北

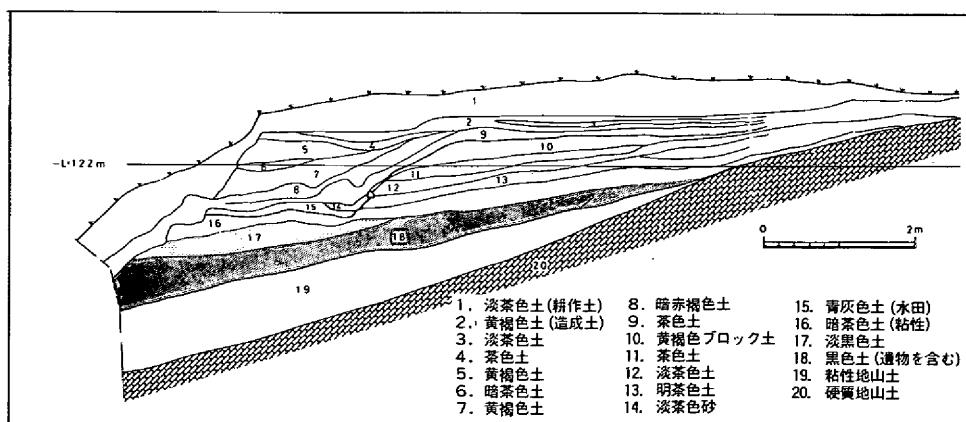
C丘陵の西側で、西に傾斜面をなしていたものであろうが、近代農耕に伴い段状に掘削がなされてA地区、A地区北の現況は畠地となり、西側ではさらに下げられ数年前まで水田として稲作が行われていた。しかし現在は雑草が生い茂っている。遺構・遺物の検出、出土状況はA地区、A地区北は共に同様である。遺構は、古墳時代前期の土器を出土する袋状ピット16基、住居址4軒、地下式横穴1、溝状遺構1、土壙4（重複）、柱穴、不明土壙である。袋状ピットはほど々一個所に集中的に存在している。

No.29袋状ピット（第65図、図版20）

床面は楕円形を呈し、最大径はわずかに上がった位置にあり、上面は広く楕円形に開口している。上部構造は削平により現在の形態となっている。断面図では東西壁は胴張りの彎曲で、南北壁は鋭い内彎を示している。遺物は東壁側に多く、いずれも床面より浮いた状態で出土している。平面図に図示されている遺物（河原石も含む）は、いずれも下層に属し、その他上層においても多量に出土している。埋土は黒色有機土で、壁の崩壊土の小ブロックの混入が観察された。遺物には、壺形土器、尖底形土器、手捏ね土器、高杯、鼓形器台、その他の破片も多量に出土している。

遺物（第66図、第67図）

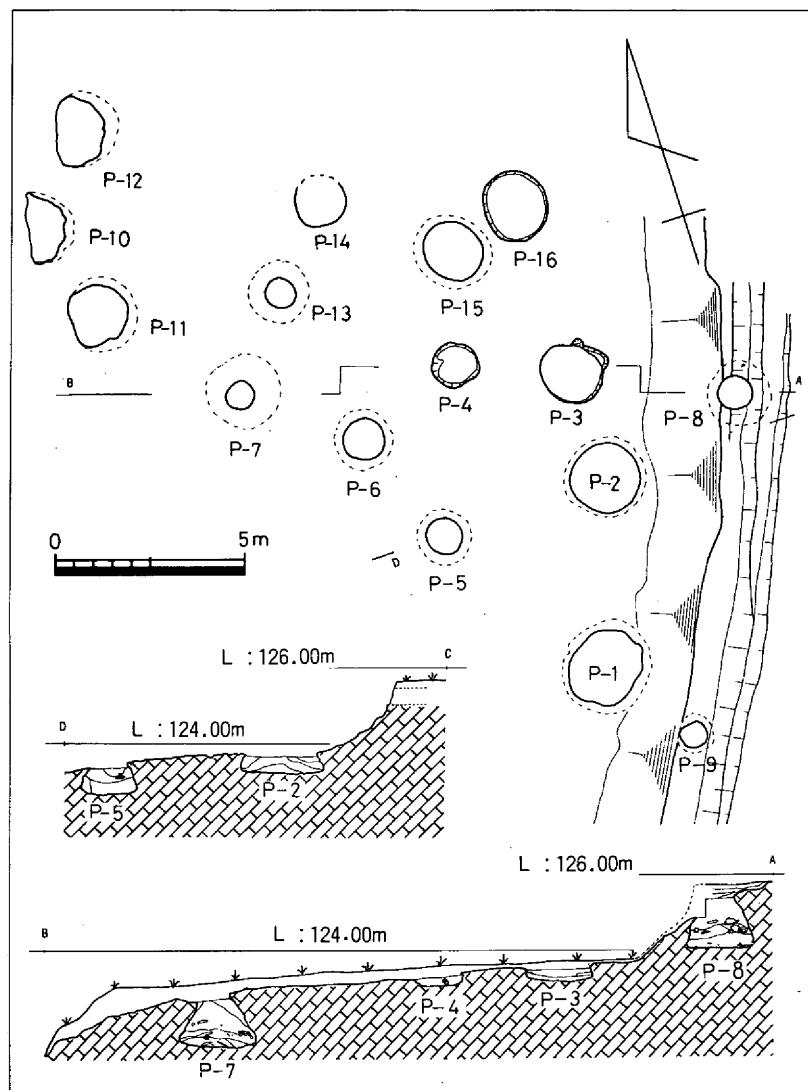
1は平底を有する壺形土器で、口縁径18.0cm、最大径28.0cm、器高は推定で31.7cmをはかるもので以



第63図 岡の山A北地区北土層断面 ($\frac{1}{100}$)

二宮遺跡

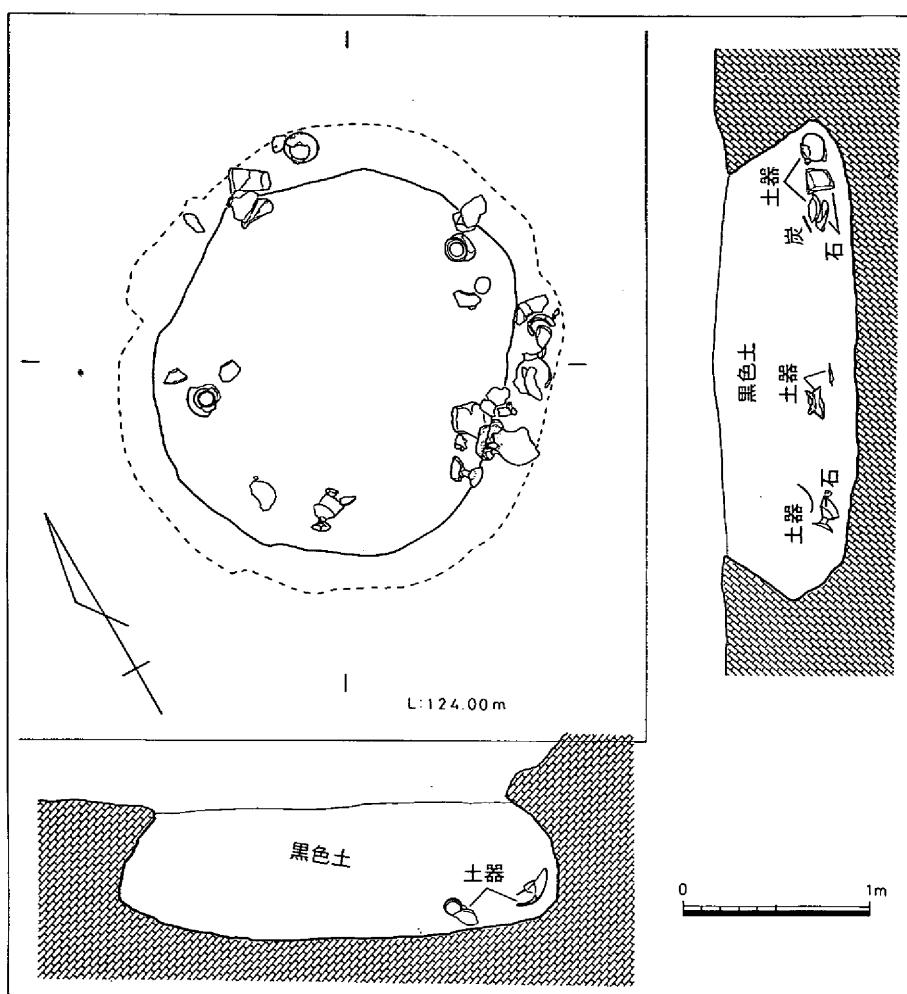
下にくらべて厚いものである。頸胴部境と肩部に近い位置には櫛による沈線が施こされ、前者は後者にくらべて浅いものである。頸部以下は刷毛によるナデ、上部はナデによる仕上げ。内面は頸部より上半はナデ、底部には指痕があり、下方よりナデ上げ、胴部はヘラ削り、色調は赤味をおびた褐色で焼成は普通。器面は部分的に剝離している箇所がみられる。二次焼成により胴部下半にはススの付着がみられる。2は丸底の壺形土器で、胴部のきを欠失し、口径14.1cm、器高13.6cmをはかり、体形はいびつで対称でない。口縁より頸部にかけての位置には2個の穴が対向し



第64図 岡の此A・A北地区袋状ピット配置図 ($\frac{1}{200}$)

つけられている。これは焼成前に開けられているものである。内外面は指によるナデ整形がなされ、口縁内外面は横ナデ、胴部外面上半は荒い刷毛、下半は普通の刷毛ナデにて仕上げられている。器表面には茶褐色の化粧土が塗られている。色調は黄茶褐色で一部に黒斑もある。焼成や不良、口縁内部及び外面の一部は風化し、もろく剝離している。44は外反気味に開く複合口縁を持ち、口縁の器内は上方に行くに従い薄くなり、端面はなでられ端部は外へやや肥厚する。胴中央部が張り出すそろばん球の体部を有し、底部は尖り気味である。肩部には縦刷毛の後、櫛描きが施こされ、下半は丁寧な斜め、縦の刷毛、頸部より上の外面は横ナデ、内面は指ナデ、下半には指痕がみられる。口径13.5cm、器高16.2cm、最大径は中程にあり16.9cmを測る。色調は赤味をおびた茶褐色で、胎土は細砂を含んでいるが良質、焼成良好。胴部には二次焼成によって黒色炭化物の付着があり、頸部より上

二宮遺跡

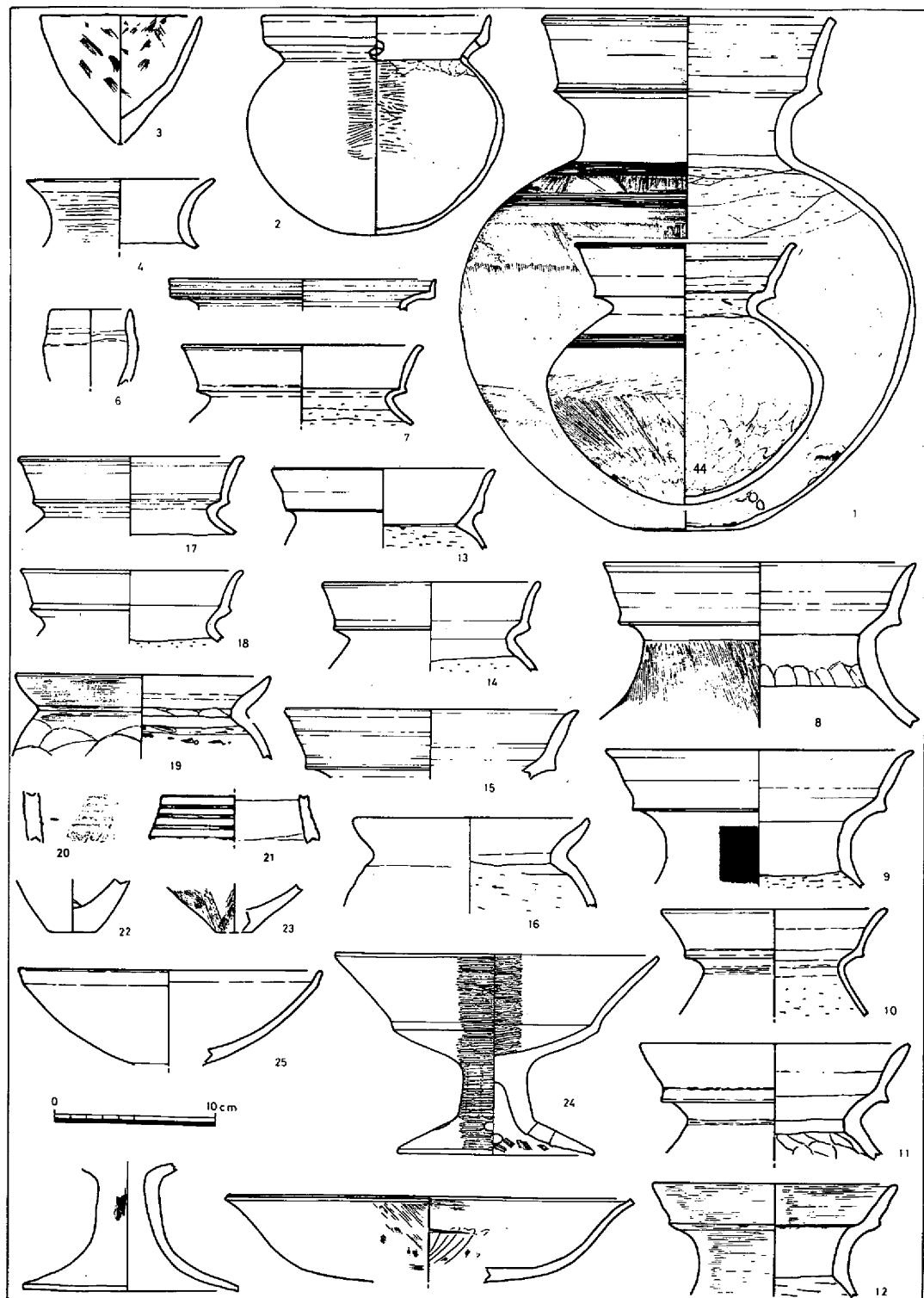


第65図 No.29 袋状ピット ($\frac{1}{20}$)

においてもみ
うけられる。
3は尖底のコ
ップ状小型壺
形土器で、口
径10cm、器高
は約8cmを測
るものであ
り、端部は先
細で終る。内
外面共に下方
より上方に向
けて指ナデに
よる仕上げが
行われてい
る。胎土は良
好で黒色で、
色調は内外面
共に赤味をお
びた暗茶褐色
をしている。
焼成良好。6
は口縁端部に
かけて先細で

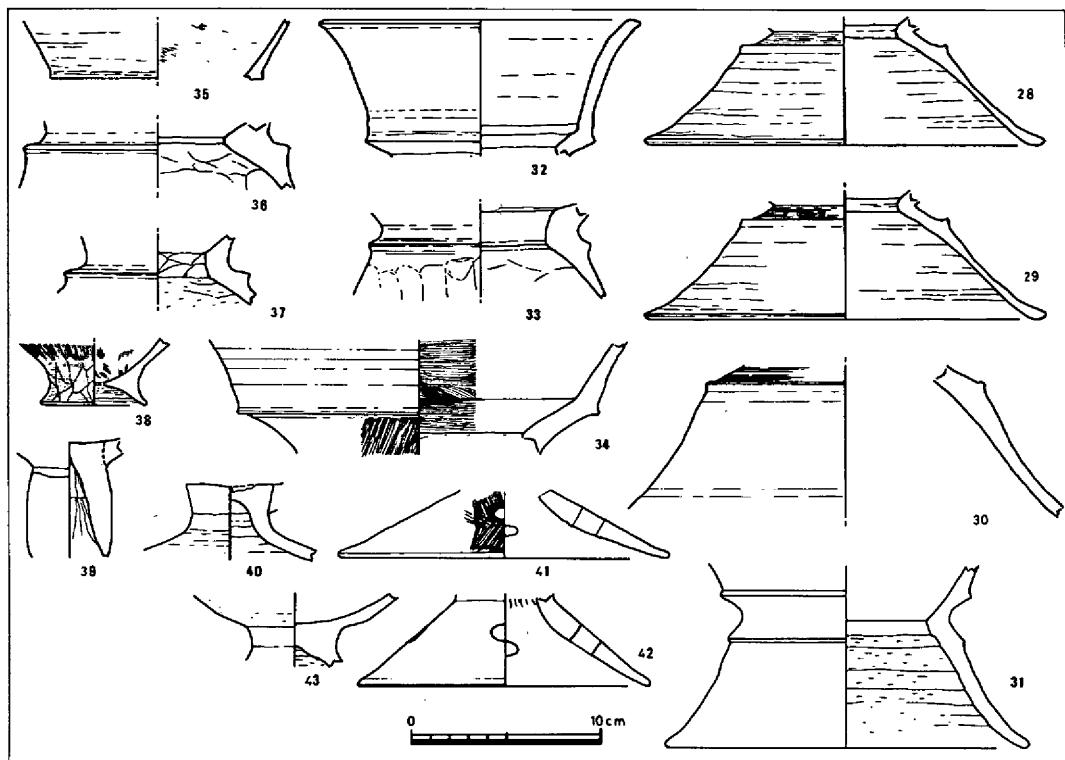
終っている小型手捏ね土器で下部を欠失するものである。内外面共に指ナデ、色調は白黄褐色、胎土は黒色で砂粒を含む、焼成は不良。24、25はNo.33袋状ピット出土（第72図25、26）と類似している。24は杯部の器肉の厚さが均一にがなっていて、整形、色調、胎土、焼成ともそれと同じである。25は口径25.1cmで第72図26にくらべて、やゝ小ぶりであり、口縁端部に一条の稜がつく。色調は赤褐色、胎土はもろく焼成不良。38は台付き椀の下部と思われ、表面下方は指で整形をしているため指痕を残している。上方は縦刷毛、底部裏面は横ナデ、内面はヘラ削りの後刷毛による整形がなされている。胎土は砂粒を含むがしっかりしている。色調は黄褐色、内部は赤褐色。焼成良好。42は高杯裾部で、器肉はかなり厚く、端部にかけて薄くなり丸味をもって終る。脚部との接合面はシボリの跡がうかがわれる、下方はナデ、表面は横ナデが行われ、丹塗りが施されている。胎土には多量の細砂を含むためもうろい。色調は黄褐色。焼成普通。39は脚部で脛の一部残っているのみで、内側はシボリ、表面は剥離して不明。色調は内面が赤味をおびた黄褐色。外表面は赤味をおびた褐色である。胎土は細砂粒が多く焼

二宮遺跡



第66図 No.29袋状ピット出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

二宮遺跡



第67図 No.29袋状ピット出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

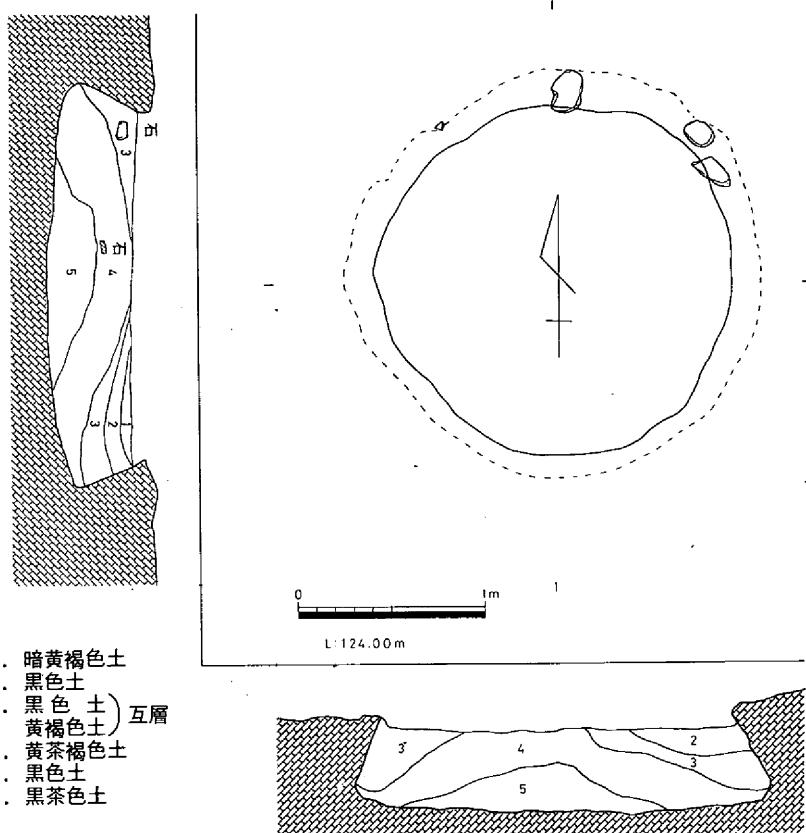
成はやゝ不良。

鼓形器台28～37はいずれも完形品ではない。31は受け部上半を欠き、内彎気味に開き、端部は鋭く外反。内面接合部は面をなしている。内面はヘラ削りが施こされ上部は二次整形としてナデによる仕上げがなされ、外面はナデによる整形。胎土には砂粒をかなり含み込んでいるが、しっかりしている。色調は黄茶褐色で焼成良好。33は接合部の器壁はかなり厚く面をなす。台部内面は荒いヘラ削り、外面は縦のヘラ、内面、外面上半は黄白色、外面下半は黄褐色。粗砂多く、焼成やや不良。34は受部片で、内面はヘラ磨き、外表面上部は横ナデ、下部はヘラ磨き、胎土は精製されたものを用いている。色調は赤味をおびた褐色。焼成良好。

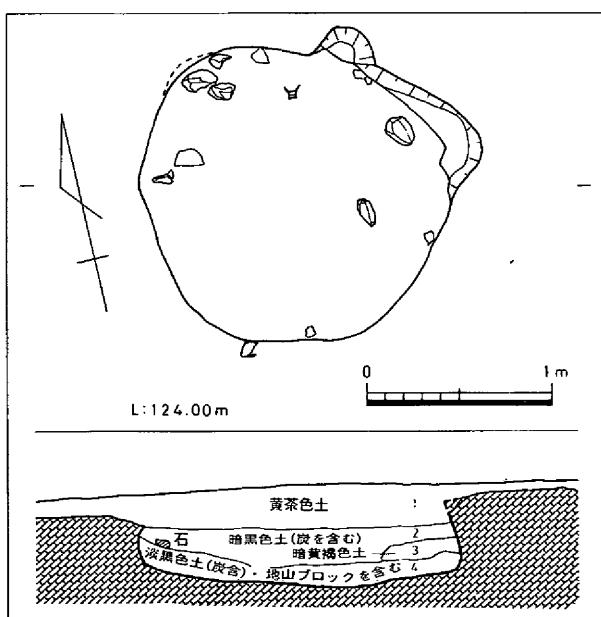
No.30 袋状ピット (第68図、図版21—1)

床面はほぼ円形を呈する。最大径は東西が 2.2 m と南北より約 5 cm 長い程度である。また埋土状態は、砂時計の砂のようにピラミット形に堆積しているのが観察された。北壁床面には 3 個の河原石が検出された。遺物は埋土中より数片出土しているが図示できたのは第72図 1 のみである。口縁端部を欠損し、頸部より上のものである。頸部には縦の荒い刷毛のあと櫛描きが施こされ、上部は指による雑な整形、内面頸部はヘラ削り上部ナデ。胎土は精製されたものに砂粒を混入して用いている。色調

二宮遺跡



第68図 No.30袋状ピット ($\frac{1}{40}$)



第69図 No.31袋状ピット ($\frac{1}{40}$)

は内外の下位は暗赤褐色、上位は赤褐色、内面には赤褐色の化粧土が塗られている。剝離面は黄褐色を呈す。焼成は良好。

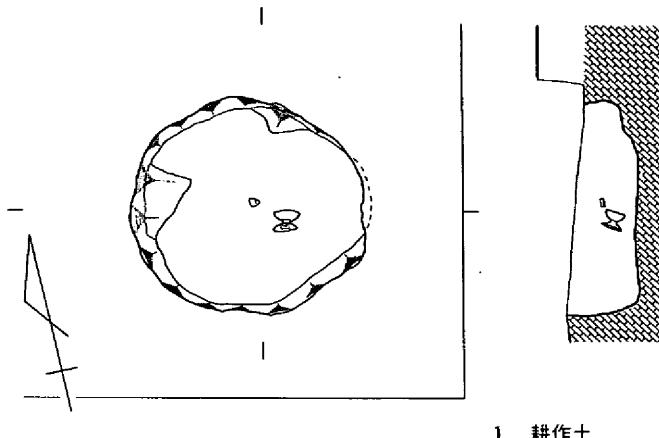
No.31袋状ピット(第69図、図版21-2)

底面及び現存の上部は不整円形を呈し、断面図では壁面は内彎して立ちあがる。埋土はほぼ水平の堆積を示している。ほとんどの遺物が2層で11と数個の石が底面での出土をみ

た。

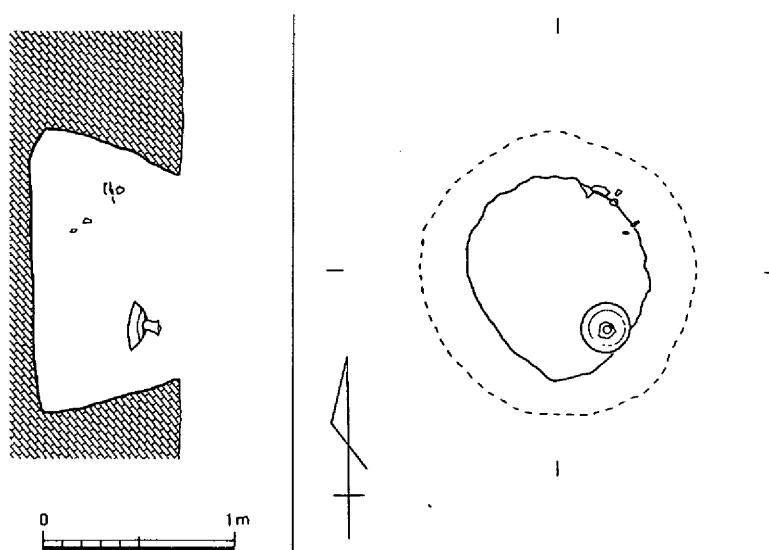
遺物は第72図、2~12などがある。図示したのは壺口縁部片2~5、と壺底部片6で高杯片7、台付き皿底部片8・9、高台付き椀底部片10・11、椀形土器12で、他に破片も出土している。2は口径29.7cmで器面はナデ仕上げ、内面頸部下はヘラ削り、色調は共に赤褐色を呈している。胎土中には若干の砂粒を含んでいるがしっかりしたもので、焼成良好。3は口径13.5cmで、口縁はかなり外彎し、頸部にかけての位置には円形の穴がうがたれている。これは焼成前のものである。また内外面には丹塗りがみられる。胎土はきめ細やかで焼成良好。4は

二宮遺跡

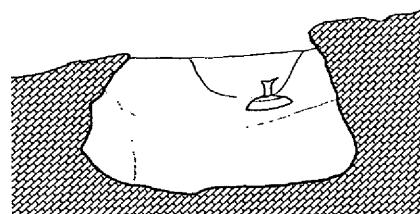


1. 耕作土

第70図 No.32袋状ピット ($\frac{1}{40}$)

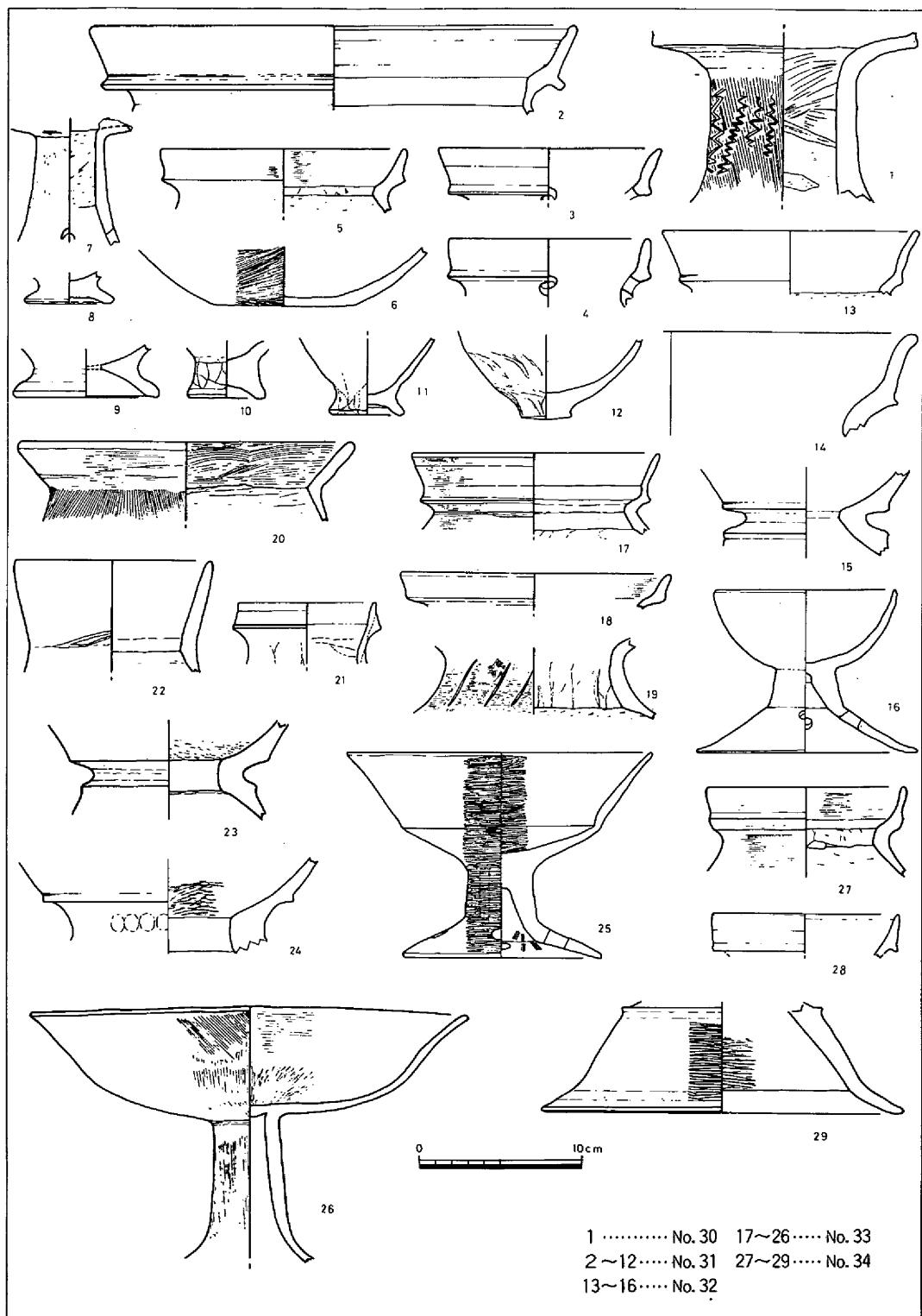


1. 黒色土
(少量の炭を含んでいる)
2. 黒色土
3. 暗茶褐色土
- 3'. 暗黄茶褐色土



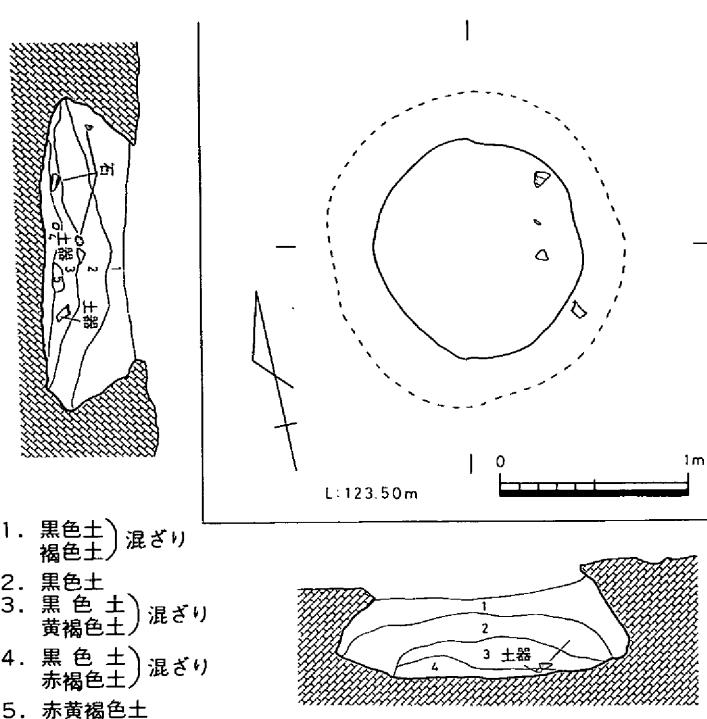
第71図 No.33袋状ピット ($\frac{1}{40}$)

二宮遺跡



第72図 No.30・31・32・33・34袋状ピット出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

二宮遺跡



第73図 No.34袋状ピット ($\frac{1}{40}$)

(底部) 黄褐色(表面、内面) また内面の一部には丹がで確認される。底部の整形は不明、胎土は砂っぽくもろく感じ、焼成普通。11は手づくね土器で非常にもろく、焼成も不良である。胎土には細やかな粘土を用いている。色調は外面は赤褐色、内面は黄褐色を呈する。裾部には指痕がみられる。12は底部がつまみ出され、やや凸んでいる。内面はヘラ磨きのあとナデ、色調は、外面暗茶褐色、内面は黒色と暗茶褐色で、胎土は砂粒を含むが硬質、焼成良好。

No.32 袋状ピット (第70図、図版22)

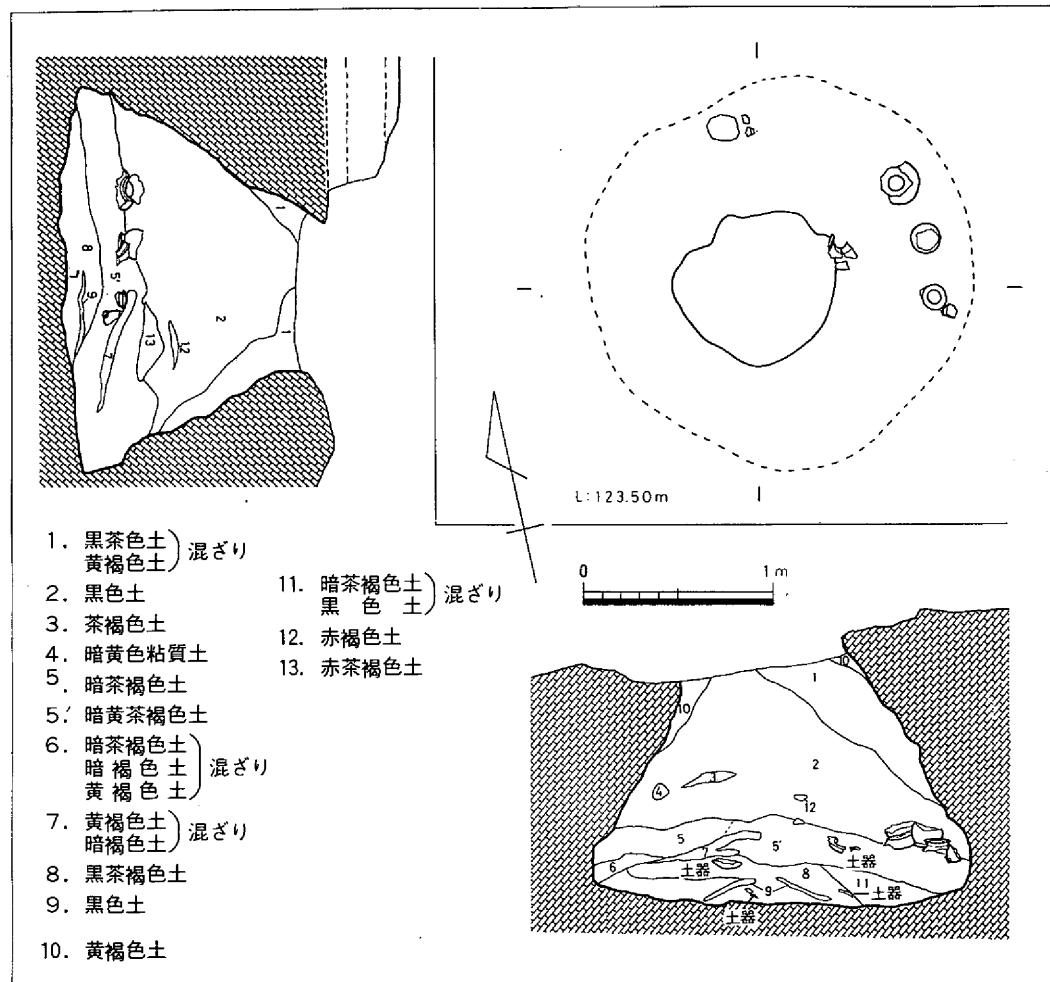
現存する形態は、上部はほど円形に近い。底部は歪な形をしている。東壁のみが内弯しているのがうかがえる。出土土器は、第72図の13~16でそのうち、16の高杯のみが完形で、底部よりやゝ上がった位置での出土である。その他はこれより上層で出土している。

No.33 袋状ピット (第71図、図版23-1)

西向き斜面の中央部分に位置する堅穴で上部はかなりカットされているものゝ、小型で浅いものであったと思われる。底面形はほど円形をなし、口縁部はやゝ南北に歪な楕円形の形態を呈している。口辺部は崩壊しているためである。壁面はいづれも内弯し、入口部はほど中央部に位置していたことが考えられる。埋土の状態は上層(2)と下層(3)に大別することができる。((3)は壁の崩壊土を含んでいる層) 遺物の出土状況は上層(2)よりとしている。さらに第71図26の高杯の裾部をすべて欠損して逆になり第71図の様に出土した。また層位の(1)は耕作時の攪乱層であり、このため裾部が欠損したものであらう。その他の遺物は壺、鼓形器台等が出土している。

口径12.2cmで口縁の立ちあがりは、3に比較してかなりゆるやかなものであり、穴の位置はほぼ同一箇所、色調は黄褐色を呈し、胎土はきめ細やか、焼成色好。6は平底の壺で器表面は底部にいたるまできめ細やかなヘラ磨き、色調黒色、黒灰色、黄褐色(とりどり) 外面、内面は灰茶褐色で、胎土は砂っぽく焼成は普通。8・9の器表面はナデ調整で8の色調は白黄色で細やかな粘土を用いている。焼成普通、9の裾端部下はヘラ削りが行われているようであり、色調は褐色

二宮遺跡



第74図 No.35 袋状ピット ($\frac{1}{40}$)

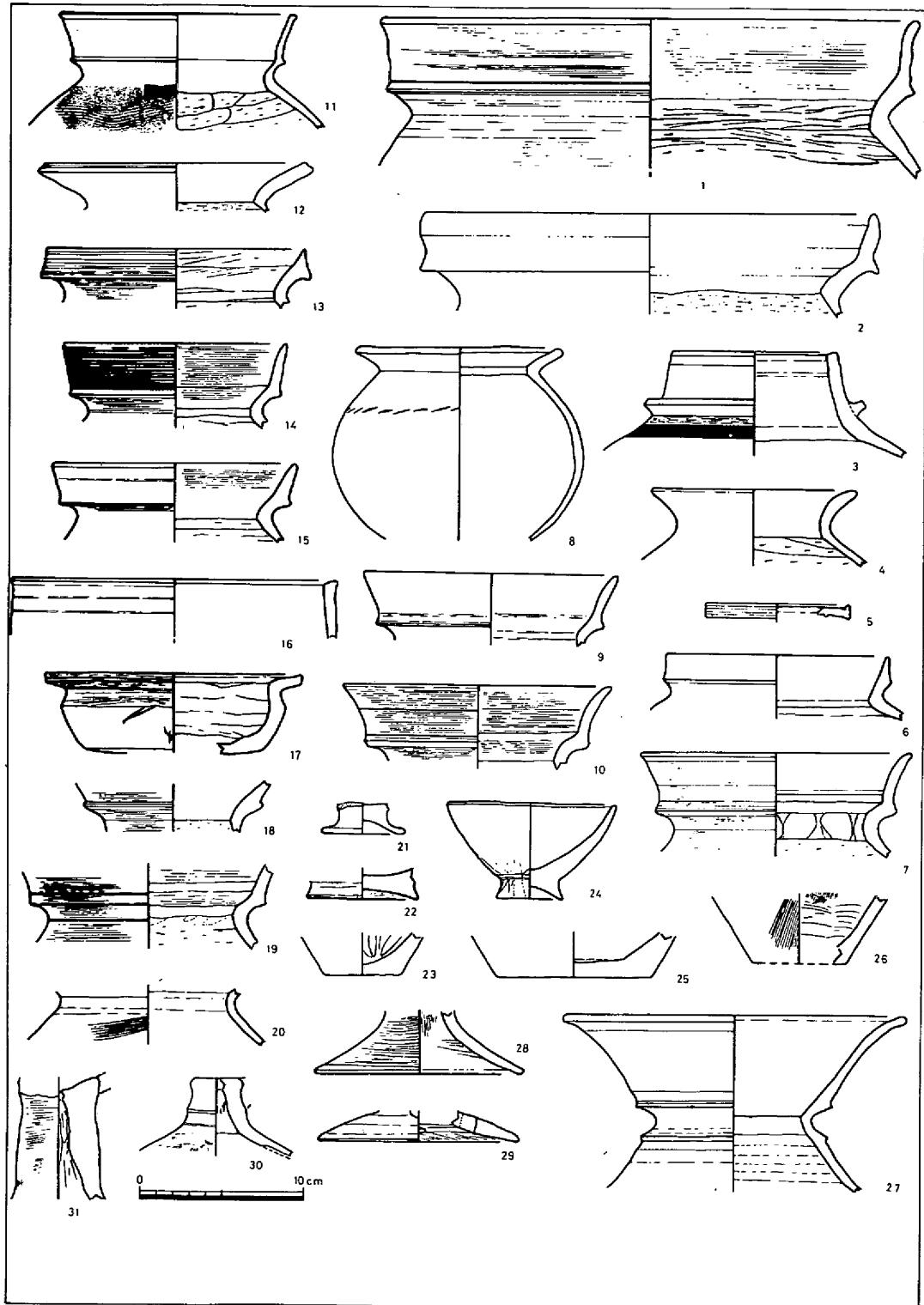
遺物 (第72図、17~26)

17~22は壺の口縁で、19は頸部である。23・24は鼓形器台片で、ある。25・26は高杯で25はNo.29出土のものに類似、口縁径18.6cm、器高12.6cmを測る。立ち上がり部分の器肉が異なっている程度である。整形も器表面全体、杯内部はヘラ磨き、脚内部は刷毛がみられる。砂っぽい土器であり、表面、杯内面には丹塗りがなされている。焼成普通。26は裾部を欠損し、口縁径27cmを測り器表面は刷毛ナデにて仕上げ、杯内面はヘラ磨きの後口縁部は横ナデ、色調は内外の大部分が赤褐色で部分的に赤褐色、黒褐色がある。胎土は多量の砂粒を含むがしっかりしている。焼成普通。23は受部と台部の間隔が縮まった鼓形器台で、内巣気味に開くが、破片であるため上部、下部は不明、受部内面はヘラ磨き、器肉は厚く台部内面はヘラ削り、台部は共に横ナデ仕上げ、やや軟質、焼成やや不良。

No.34 袋状ピット (第73図、図版23-2)

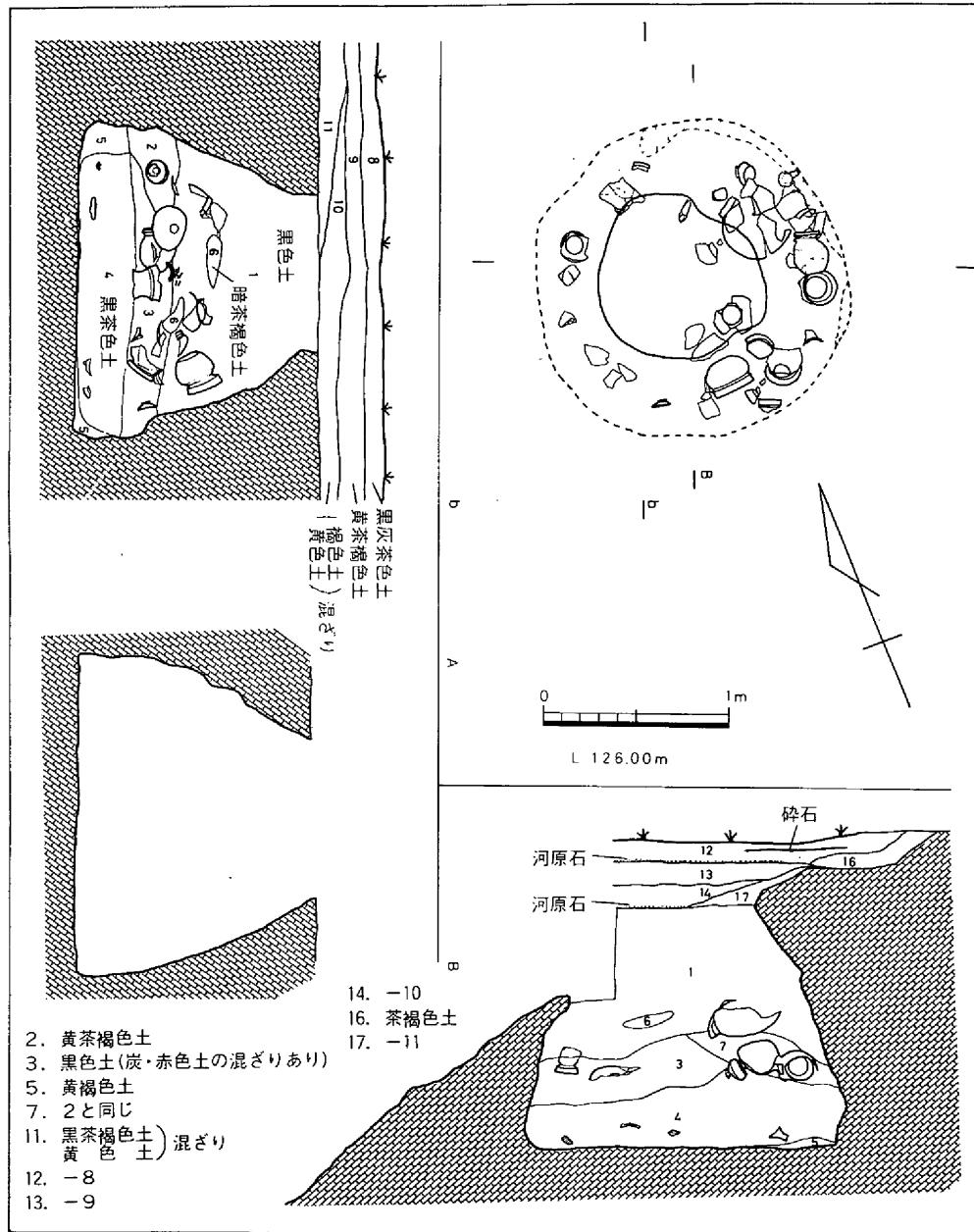
No.33の斜め下方に位置し、深さは浅いがNo.33とは同じ形態を呈し、最大径の広いものである。埋土状況が異なり出土土器は、その状況から2層の下位と3層に含み若干の破片が、4層にかかる位置

二宮遺跡



第75図 No.35 袋状ピット出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

二宮遺跡



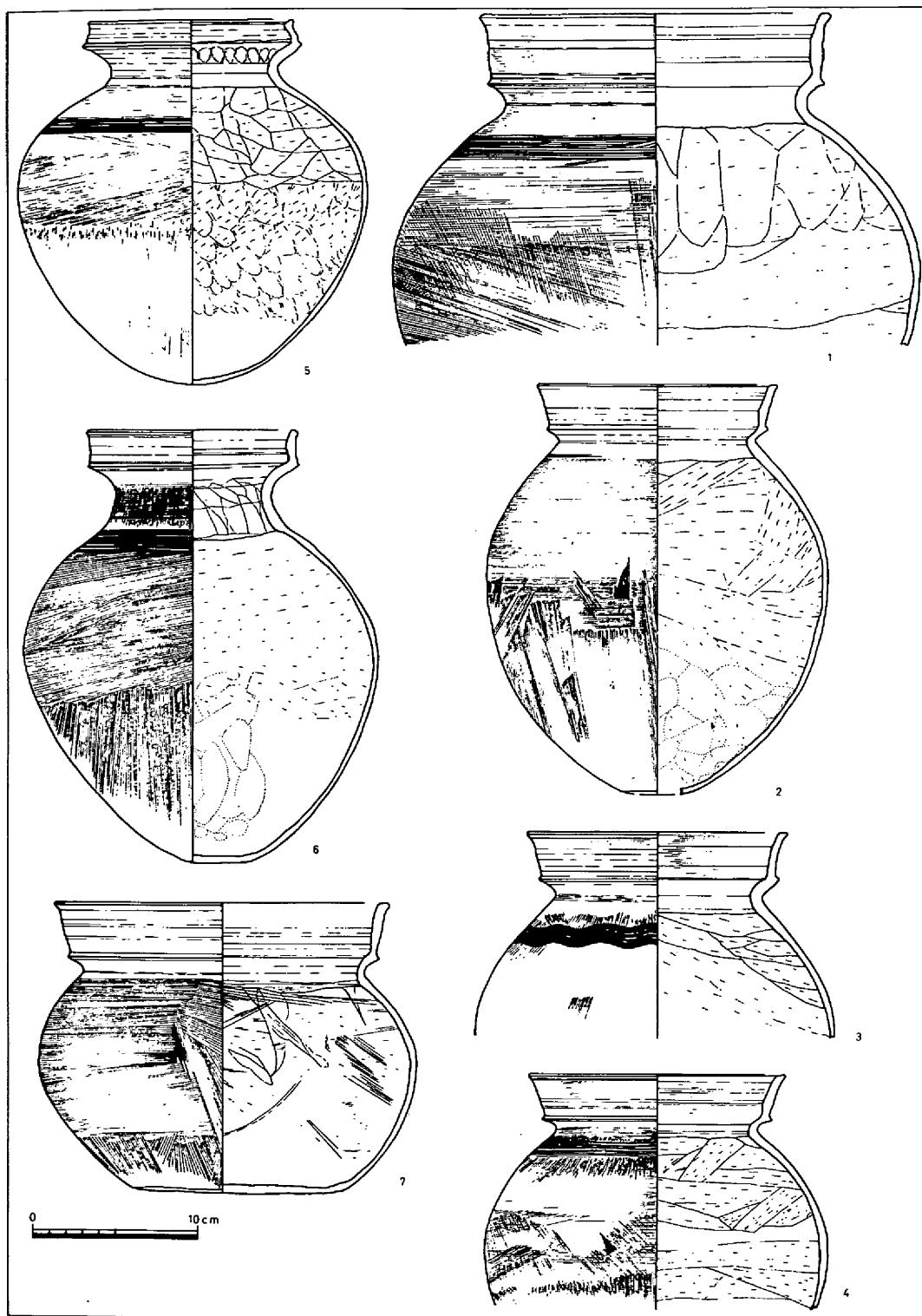
第76図 No.42袋状ピット ($\frac{1}{40}$)

において出土が認められた。遺物は、壺、鼓形器台の破片と数個の河原石を含んでいた。

遺物 (第72図27・28・29)

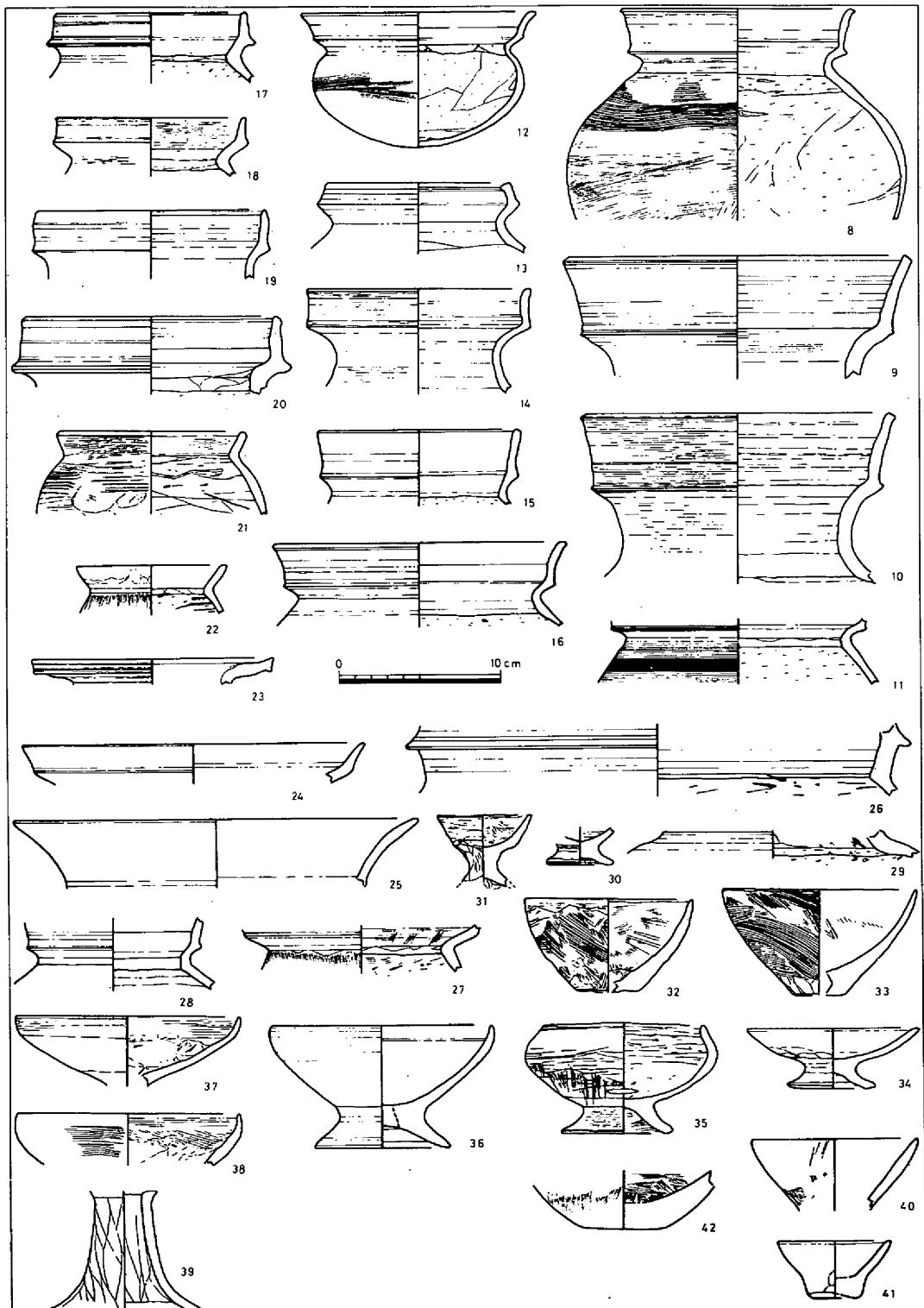
27は壺の口縁部で、端部がやゝふくらんでいる。器面は横ナデ、内面は上部ナデ、頸部には指痕が残り、以下はヘラ削り、色調は内面暗茶褐色、外面は黄褐色、胎土は砂粒を含むが良好で、焼成普通。29は鼓形器台で器内はわりと厚目である。外面は丁寧なヘラ磨き調整、内面の仕上げはヘラ状工具による横ナデ、裾部はナデにて仕上げている。色調は褐色(内)、暗褐色(外)で、胎土には砂粒を含

二宮遺跡



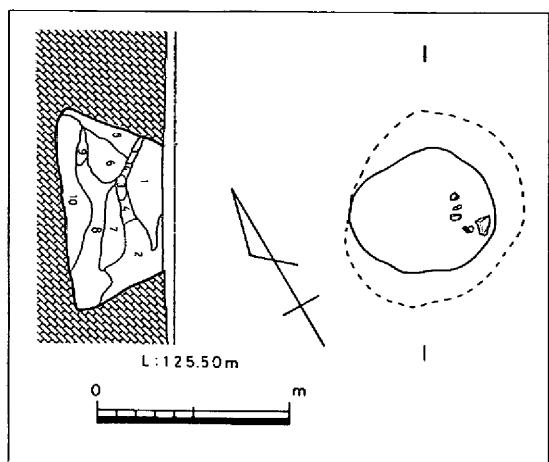
第77図 No.42 袋状ピット出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

二宮遺跡



第78図 No.42・45袋状ピット出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

二宮遺跡

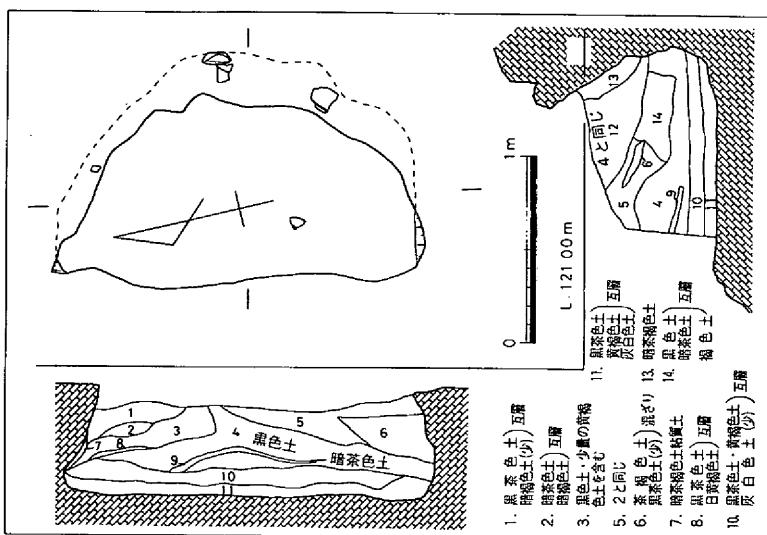


第79図 No.45袋状ピット ($\frac{1}{40}$)

んでいるが良質で、焼成普通。

No.35 袋状ピット (第74図、図版24)

路線用地の北端で西に約2mで段となり、畑地の西端に位置している。底面はいびつな円形で、口辺は検出時において橢円形を呈していたが、掘りさげの途中において崩壊のため、いびつな形態となってしまった。現状では入口部はやや西側に片寄り、内壁上部には一部分ではあるが、垂直に立ちあがる箇所がみうけられる。内壁は凹凸がかなりみられるが、これは崩壊のためであり、床面にも凹凸がみられる。プラスコ状を呈する堅穴である。埋土状況は自然堆積



第80図 No.217袋状ピット ($\frac{1}{40}$)

のようで、下部の方は平らに近く、中～下層ではブロック状に地山土の混入した層がみられ、(1)、(10)は内壁の崩壊土をかなり含んだ層である。遺物は埋土中の中層以下が主体で中央より東壁側に片寄って出土している。完形に近いものは24のみで、その他は一部(底部、裾)欠損品(8・27)か破片である。3は第85図の1と同一個体である。

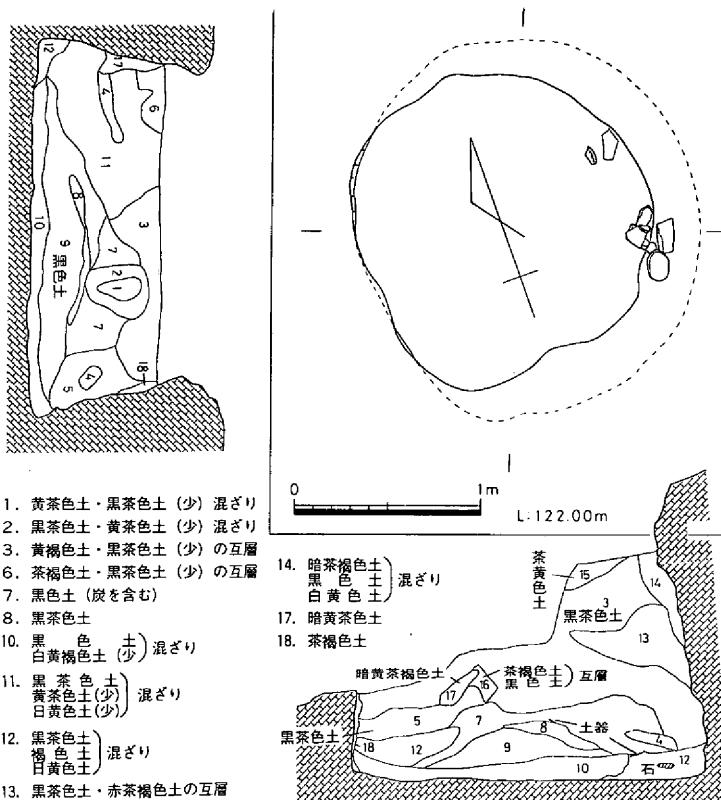
遺物(第75図)

土器の出土量は岡の堀A地区の袋状ピット群のなかで3番目に多く、その殆んどが破片で完形品は少なかった。それらは床面から約20～30cm位の位置に廃棄された状態で出土された。

壺形土器(1～15)

1は口縁が垂直に立ちあがり、端部は外彎し、内面頭部以下の整形はヘラ、それ以外の内外は横ナデ仕上げ。2は口縁の器肉は厚く、丸味を持って終り、外面端部は内傾している。内面頸部には稜を有し、上半は指整形の後ナデ、下半はヘラ削り、表面は横ナデ。4は頸部から口縁にかけて厚く丸味をおびて終り。頸部以下の器肉は薄く、口縁内面、外面には赤味をおびた黄褐色、胎土には砂粒が多く混入し、焼成不良。器表面の整形は風化をうけて不明瞭である。5は小壺の口縁部片で、口縁はた

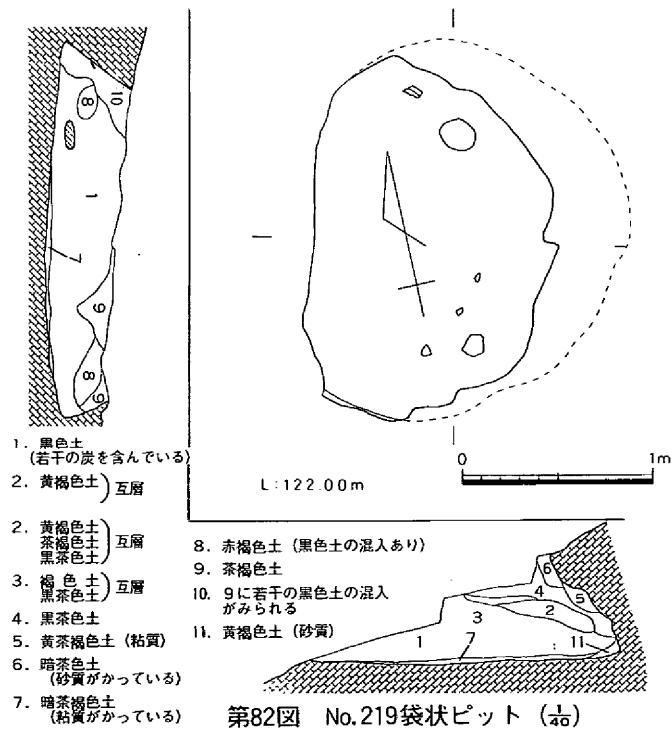
二宮 遺 跡



第81図 No.218袋状ピット ($\frac{1}{40}$)

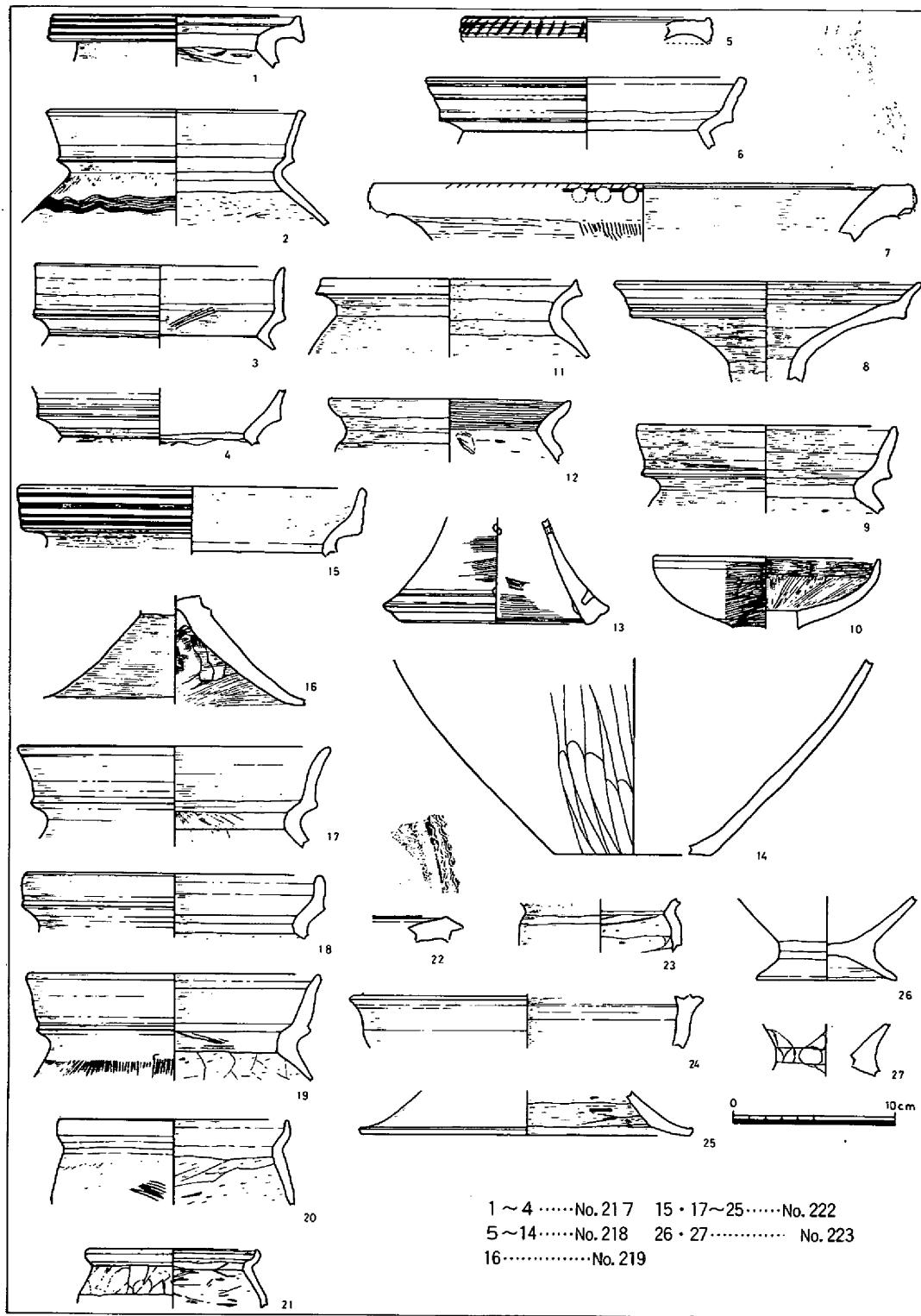
れきがり、立ち上がりは垂直、ナデによる整形である。色調は淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含んで、焼成はやや不良。8は口縁が「く」の字形を呈し、胴部下半を欠失し、体形は球状に近く、丸底であろう。胴部上半にはヘラによる刺突が行われ、七周で終っている。体部は刷毛目が残るところから、外面は刷毛と思われ、口縁は横ナデ、内面は指ナデ。色調は暗茶褐色。焼成はやや不良。胎土はもろさが目立つ。器表面には二次焼成によるスグが付着している。16は深鉢形の口縁部で内外面指による

ナデ整形、色調は暗褐色、(外面にはスス(2次焼成)付着)を呈し、胎土はもろく、焼成不良。17は浅鉢形の手づくね土器片で、口縁は強く屈曲し、口縁外面は指ナデ、内面は指整形、外面底部はヘラ削り、色調は褐色を呈し、内底は黒褐色、外底黒色、胎土は良質、焼成良好。24はコップ形の杯に短い脚部がつき、内灣気味に開き、端部で丸味をおび、器肉も薄くなつて終る。口縁部を欠くがほぼ完形に近いもので、丁寧な作り、外面は指ナデ、台部はつまみ出しによる作り、色調は外面黒茶褐色、



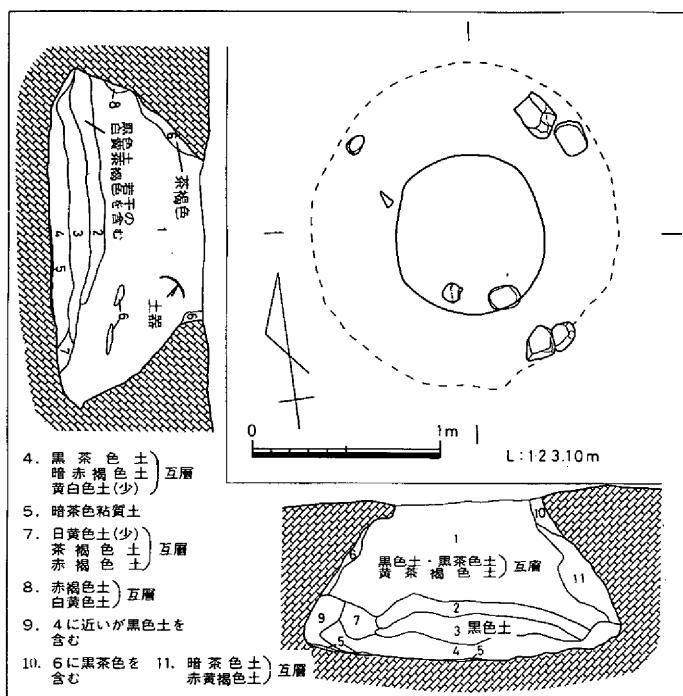
第82図 No.219袋状ピット ($\frac{1}{40}$)

二宮遺跡



第83図 No217・218・219・222・223袋状ピット出土遺物 (1/4)

二 宮 遺 跡



第84図 No.220袋状ピット ($\frac{1}{40}$)

内面は赤茶褐色、焼成良好。27は受部と台部接合部の間隔が縮まったもので、上下とも稜は鋭く受部は外反氣味に開き、端部で更に外反して終っている。上部のみと下部全てを欠失しているもので、器肉は薄くシャープな作りである。内面の受部と台部には稜を有し、下半はヘラ削り、上半はヘラ磨きの後、丁寧なナデにて仕上げがなされている。受部口縁径 21.3cm、受部高 6.2cm。色調は暗赤褐色を呈し、胎土はもろく、焼成不良。29は高杯脚部片で丁寧な作りで、ナデ仕上げ、外面(表面)には丹塗りが施こされ、色調は淡黄褐色、胎土はもろさを受け、焼成やや不良。

No.42 袋状ピット (第76図、図版25・26—1)

岡の堀B地区の北西端で墓参道の下において検出され、床面はほぼ円形を呈し、現存口縁はいびつな橿円形を呈している。(前半を40~50cm受けている。)最大径は床面にあり、1.65~1.70mを測る。入口は推定で約80cm、ほぼ中央部にある。現存の深さ1.30mを測る。フラスコ状を呈する堅穴である。遺物は中央部より東壁に片寄って出土している。それらの中で第77図5と第78図10はセットである(それらは壺が北側に倒れた状態で検出されたからである)。1土層堆積は下層は水平堆積を呈している。

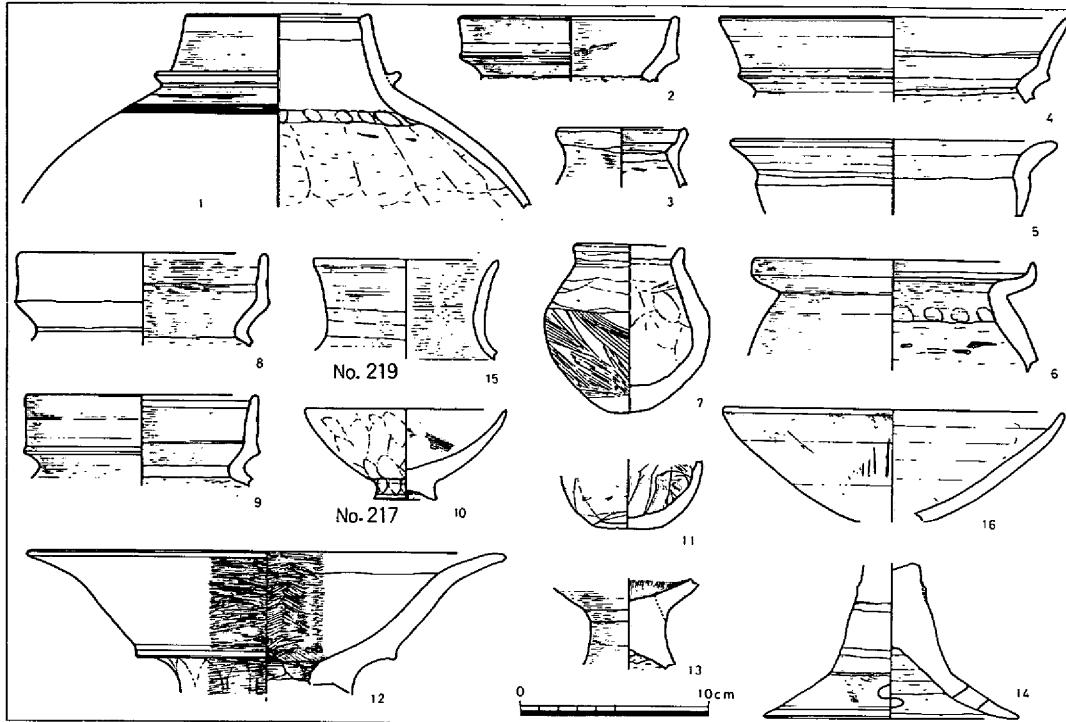
遺物 (第77図1~7、第78図8~39)

土器の出土量は袋状ピットのなかで2番目に多いが、その殆んどが破片で完形品は壺形土器5、6、7、浅鉢形土器12、台付皿34、台付碗35のわずか6個体にすぎない。(いずれも中層よりの出土で、1点第78図39が床面よりわずかに浮きあがって出土している)

壺形土器 (5・6・9)

5は頸部から外反して大きく内傾する複合口縁をもつ、端面は斜めにナデが行われ、稜をもつ。器肉はうすく、丸底である。外面肩部には櫛の横がきがあり、上位は横ナデ、胴部中位より上は斜め、下は縦の細かな刷毛ナデ。内面頸部には指頭圧痕が浅り、下位はヘラ削り、胴中位より下は指によるナデ仕上げによる調整がなされている。胎土は砂粒を含み、もろさが目立つ。色調は赤褐色を呈し、焼成は普通。二次焼成が行われ、炭化物が付着している。6は頸部より垂直に立ち上がる複合口縁で、端部はやや外反して稜をなし、器肉は頸部より上位は厚く、下位は薄く仕上げ、丸味をもつ

二宮遺跡



第85図 No.217・219・220袋状ピット出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

た平底を呈している。外面背部には櫛がき、上位は横ナデ、胴中位までは斜め、下半は縦の刷毛ナデ、内面口縁はナデ、頸部はヘラ後ナデ、胴中腹まではヘラ削り、下半は指によるナデ仕上げ調整。胎土は砂粒を含みやや軟質、焼成普通。色調は赤褐色、胴部の最大径より下半には二次焼成による炭化物の付着がみられる。10は内傾気味の頸部から斜めに外反し、立ち上がる複合口縁を有し、口縁端部には稜を持ったもので、口頸部内外は横ナデ、内面肩部以下はヘラ削りによる整形がなされている。口径19.0cm、胎土は砂粒を含み、もろさが目立つ。焼成普通。色調は赤褐色を呈している。この土器は転用され、器台の役割をし、5とセットとなるものである。

壺形土器 (1~4、7~8)

1はやや外反する複合口縁を持ち、口縁端部は更に外反する。頸部内外を横ナデ、外面肩部に櫛がき後横ナデ、胴部上半は横下半は斜めで、胴中腹部は斜め、内面頸部以下は横、斜めのヘラ削りの調整、口径21.6cm、最大胴径32.4cmを測り、胴下半を欠損している。胎土は砂粒を含むが、しっかりしている。焼成普通。色調は赤味をおびた褐色、二次焼成による炭化物の付着あり。2は口径14.8cm、器高25.0cmを測り「く」字形の頸部に外反する複合口縁を持つ、端面はなでられ、体部は卵形で、底部は丸味をもった平底を呈している。外面は胴中位までは横、下半は斜、縦の刷毛ナデ、内面の頸部より上半は横ナデ、以下は斜・横、下より上にヘラ削りがなされ、胴部の器肉を薄く仕上げている。また底部は焼成後穿孔が行われている。色調は暗褐色、胎土は砂粒を含むが、しっかりしている。焼成普通。二次焼成による炭化物の付着がみられる。3は口径16.0cmで斜めに立ち上がる複合口縁を持ち、胴部下半は欠失し、口縁部内外面を横ナデし、外面肩部には波状文が施こされ、後に斜めの刷

二宮遺跡

毛ナデ調整。内面肩部下方より横、斜めのヘラ削り。内面は赤褐色、外面黄褐色を呈し、砂粒をかなり含み軟質、焼成やや不良。体型は卵形と思われる。4は複合口縁で、端面はナデが行われ、立ち上がり部の器肉はやや厚い。外面頸部より上位は横ナデ、下位は斜、横、縦の刷毛目で、頸部には櫛目が残る。内面の頸部までは横ナデ、下半は斜、横のヘラ削り。暗赤褐色で焼成は普通、口径15.8cm、胴部下半は欠失。7は斜めに開口し、肉厚の複合口縁と扁平で広い底部に胴体部が接合する。口縁端部はやや外彎している。外面口縁より頸部は横ナデ、肩部から底部にかけては横、斜、縦方向の刷毛目。内面口縁部は横ナデ、以下を横、斜めのヘラ削り、底面は指ナデにて成形されている。胴部は薄く削られ、器肉は薄く底面は中央部に向かってやや厚くなっている。色調は内面が暗褐色、黒褐色、黒茶色を呈し、胎土はもろく軟質。焼成やや不良、外面には二次焼成による炭化物の付着がみられる。口径20.2cm、器高17.7cm、底面径12.8cm、胴部最大径22.9cm。ほぼ完存する。8はわずかに外彎する複合口縁で、端部は外側へつまみ出されてシャープな稜をもつ。外面の口縁より頸部は横ナデ、肩部には櫛状工具を用いた不規則な平行沈線、以下は横、斜めの刷毛目で仕上げ、内面は頸部までナデ、以下は横、斜めのヘラ削りによる調整、内外面の色調は赤褐色、黄褐色を呈し、胎土は良質、焼成良好。口径14.3cm、最大胴径20.6cm。12は口径14.6cm、器高8.3cmを測る小型丸底壺で「く」の字に屈曲し、外反気味に立ち上がる複合口縁である。端部はナデにより平坦で、外側は稜をもつ。胴部には櫛状工具による横、斜のナデ、その他はナデ。内面より上はナデ、胴部中程まではヘラ削り、それ以下は指ナデによる調整。胎土は砂粒多く粗雑、焼成普通。

低脚杯形土器

30はやや外反する脚部をもち、杯部内面は凹みをもつ。内外面共に指ナデにて仕上げがなされている。黄褐色を呈し、精製された粘土を用いているがやや軟質気味。焼成良好、脚部裾径4.0cm。34は先細り気味に内彎して開く椀状をなす浅い杯部に外反して開く低い脚部が接合される。全体に指ナデを行い、特に杯内部は丁寧にナデ仕上げを行っている。暗赤褐色を呈し軟質、焼成やや不良。口径10.4cm、器高3.7cm、脚部裾径5.3cm完存する。35は椀形の杯に短脚がつく。杯部は底部から内彎しながら上方にのび、中央部付近より鋭く内傾し、端部で丸味をおびて終る。内面はヘラ削りを行い、杯部外面はヘラ磨き、下半は後縦刷毛、脚部外面にはヘラ磨きの痕跡がある。脚部裾内面は指ナデによる成形、色調は赤褐色を呈し、砂粒まじりであるが緻密な胎土で硬質、焼成良好。口径9.6cm、器高6.7cm、脚部裾径6.7cm、焼成後杯部に穿孔あり、ほぼ完形にて丁寧なつくりのものである。36は椀形の杯に短脚がつく。杯部の底面は約2.6cmとあまり大きくなく、ゆるやかに内彎しながら開いていき、先細りで器肉も薄くなっている。底の器肉は厚く、外反せず裾細りとなり終る。杯内面は細かいヘラ磨き、脚部裾内面はナデ。外面は剥離のため不明。赤褐色を呈し、砂粒をほとんど含まず精製された（微砂のみ）ため軟質、焼成やや不良。復元口径13.6cm、器高7.5cm、復元脚部裾径8.4cm。31は、手捏ねによって作ったもので、杯内面は外面上半ヘラ磨き、下半には指痕。脚部裾内面はナデ、外面杯上半は暗褐色、下半は黒茶色、内面は赤褐色を呈し、きめ細やかで硬質、焼成良好。復元口縁径は5.8cmを測る。32はコップ形の杯で、底面は小さく、内彎気味に開いていき、端部は先細で終り、器肉も薄くなっている。外面は櫛、口縁並びに下部、底部がヘラ成形、内面は荒い櫛目が残り、

二宮遺跡

ナデにて仕上げ、色調は外面は黒色、内面は暗褐色、若干の砂粒まじりの胎土、焼成良好。33は、32とほぼ同じではあるが、口縁端部は32より先細で終り、底の器肉は非常に厚い。外面下部はヘラ削り、後櫛状工具による斜めのナデ、内面はナデ、色調は暗赤褐色を呈し、若干の砂粒まじりの胎土、焼成良好。

No.45 袋状ピット（第79図、図版26—2）

No.29の南上段に位置する小形の袋状ピットである。床面、口辺共に楕円形を呈している。最大径は床面にあり、北側に向かって低く下がっている。土層堆積においても不整である。南壁側は底面から鋭く内傾し、北壁側は緩く立ちあがる。現存の深さは60cmに達していないが、本来的に浅いものだったと考えられる。遺物は床面より、数点の破片が出土しているが図示できたものは第78図40・41・42である。

遺物（第78図40・41・42）

40は口径9.9cmを測り、底部欠損するもので器面には刷毛状の痕跡が残り、内面はナデ仕上げ、色調は黒色（外）、灰黒色（内）で、胎土はかなりの量の砂粒を含んでいるが良質、焼成良好。41は破片ではあるが、ほぼ口縁から底部まで計測することができ、口径6.8cm器高3.5cmを測る。外面底部には指痕らしきものがみられる。内面は指ナデの調整であろう。色調は黒茶褐色を呈している。胎土には細砂粒を含んでいるが、しっかりしたものであり、焼成は良好。42は平底の壺で器面は刷毛、内面はヘラ整形で刷毛ナデ、色調は黒茶褐色で、胎土には精製されたものに砂粒を混せて用いる。焼成良好。

No.217 袋状ピット（第80図、図版28—2・29—1）

岡の山A地区の北側で畠地の西斜面に位置しているため、上部及び西側の約半分が削り取られている。土層堆積は、下層（10・11）はほど水平堆積でそれより上層は自然堆積を呈している。南壁の一部において緩やかな内傾を示している。土器は上層から出土、数片が床面直上で出土している。いずれも破片である。

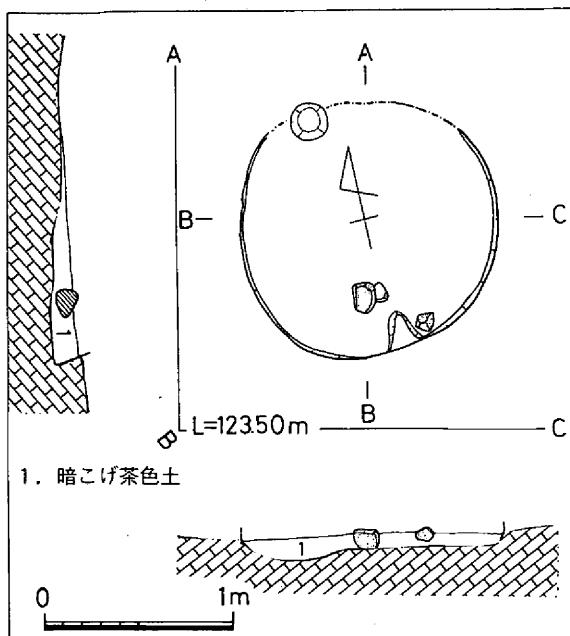
No.218 袋状ピット（第81図、図版28—2）

No.217の南側の同一面に位置している。しかし、No.217よりわずかに残りはよい。底面は1.82m、2.00mの不整円形を呈する袋状ピットである。西側壁は垂直に近く立ちあがり、その他の壁は緩やかに内傾している。ピット内の埋土は下部は水平に近く堆積し、上部にかけては自然堆積をなしているが、壁の崩壊土を混入して埋没している。出土遺物は数片と数個の河原石が床面よりわずかに浮きあがった位置での出土がみられた。土器は中間層から出土し、大多数が小破片である。

遺物（第83図5～14）

図示したものは壺口縁部片5～9、11・12と高杯10・13底部片14で、他にも細片が出土している。5は口縁部でたれさがる部分の一部を欠損しているが口径15.5cmを測るものである。口縁外辺には2本の凹線が施され、その後ヘラ先を用いての刺突がなされている。色調は茶褐色で胎土は砂粒を多く含み、もなく、焼成は普通である。7は口縁部で欠損部分もある。口縁内側には格子目文様、外側は凹線の後端部に刺突、さらに円形浮文がみられる。整形は内外共にナデ仕上げであるが、外面は荒さが目立つ。また下方には斜めの櫛目が見られる。色調茶褐色で、胎土は砂粒を含んでいるがしっかりし、

二 宮 遺 跡



第86図 No.221袋状ピット ($\frac{1}{40}$)

焼成は良好なものである。8は長頸壺の上部で口縁はかなり外彎し、口径19.0cmで口縁部1本の凹線がみられる。内外面共に内で調整され、頸部内面には絞りの痕がみられる。色調は黄褐色で胎土はわりと粒砂が多く砂っぽい。焼成は普通で下層より出土した。13は高杯の脚部で外面はナデのあと一部に刷毛目が施こされ、内面にも荒い刷毛目、色調は内が赤褐色、外は黒茶褐色で、表面は砂っぽい。焼成普通。(二宮)

No.221 袋状ピット (第86図)

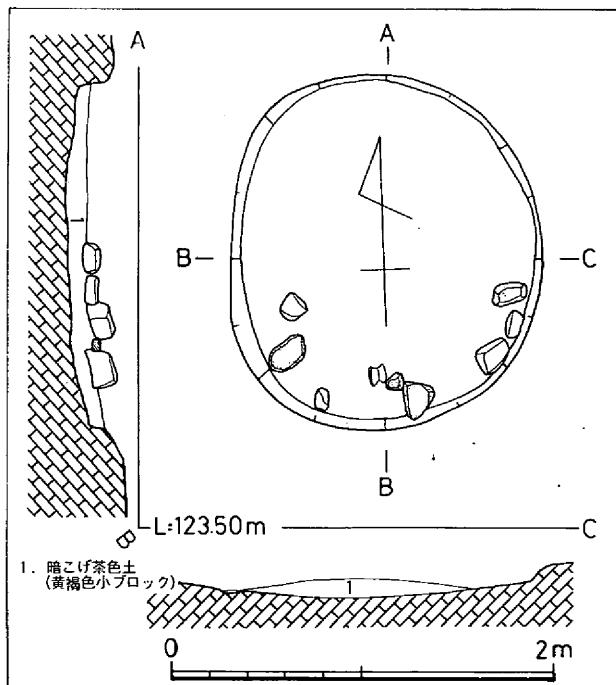
16基中の北端中央部分に位置し、底径135cm、深さ15cmをはかる小型の袋状ピットである。上部はほとんど削平により消失しており、下部を残すのみである。土壌内より遺物は検出することができなかった。

底面積はNo.33袋状ピットとほぼ同数値を示

し、底面海拔高は122.90cmをはかる。この数値はNo.33・34・42・223袋状ピット等とほぼ同じものである。

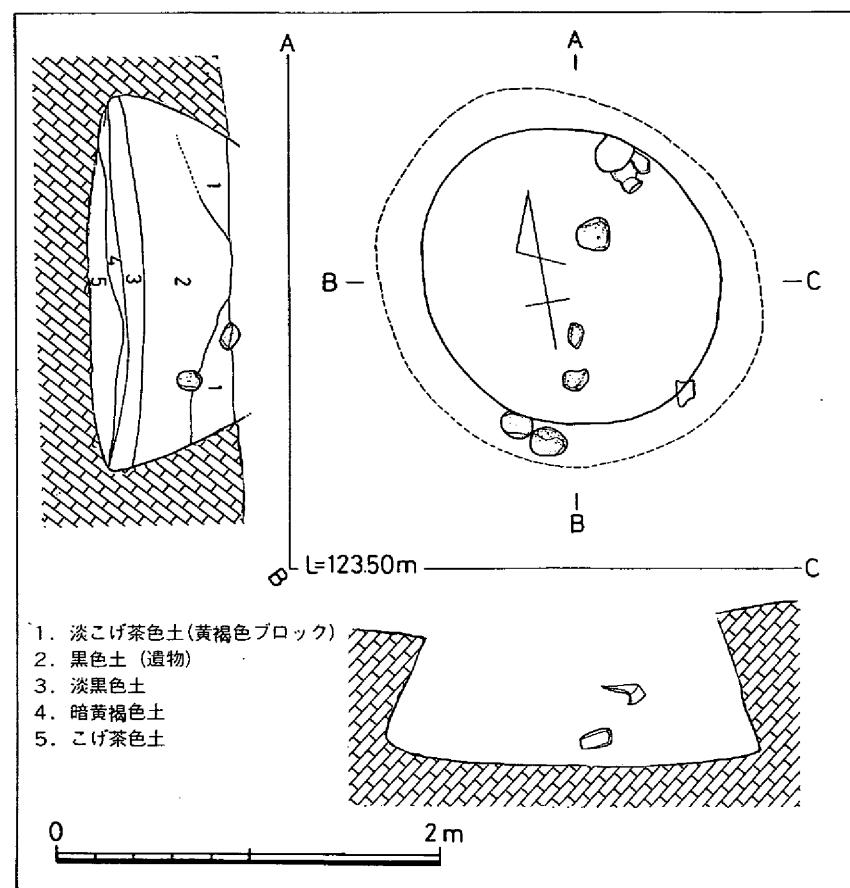
No.223 袋状ピット (第87図、図版33—2)

北端東側部分に位置し、長軸180cm、短軸155cm、深さ20cmをはかる中型の袋状ピットである。底は南北に長い楕円形を呈し、No.221袋状ピット同様に上部は削平により消失しており下部を残すのみである。遺物は台付杯が河原石に混在して出土している。底面積はNo.35・217・218・219・222袋状ピットとほぼ同数値を示し、底面海拔高123.15mをはかる。この数値はNo.33・34・42・221袋状ピット等とほぼ同じものである。併設するNo.222袋状ピットに近い形状である。



第87図 No.223袋状ピット ($\frac{1}{40}$)

二宮遺跡



第88図 No.222袋状ピット ($\frac{1}{40}$)

No.222 袋状ピット

(第88図)

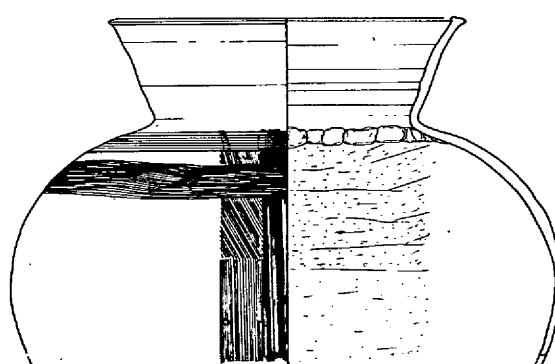
No.221・223袋状ピットに挟まれた状態で出土しており、No.223袋状ピットに近接する楕円形の土壙である。隣接する各袋状ピットより比較的の残存状況がよく、長軸210cm、短軸190cm、深さ75cmをはかる。土壙内には柔らかい土、石材に混在して土器片が出土しており、第2層に多いようである。この土器片は同一個体が2～3箇所に分散して、砂時計の砂状堆積の縁辺部にみられる。この傾向は袋状ピット全般に共通する

ものである。床面積はNo.35・217・218・219・223袋状ピットとほぼ同数値を示し、床面海拔高122.45mをはかる。この数値はNo.24・33袋状ピットと同じものである。

遺物 (第89図)

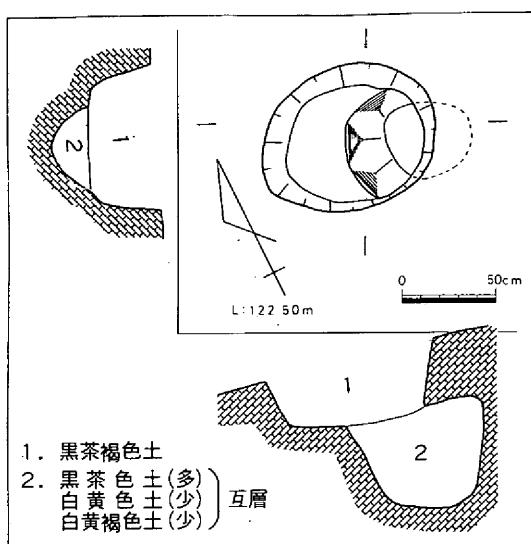
第2層中より分散して出土したものであり、接合により胴部上半が復元した。

口径17.5cm、胴部最大径28.6cm、残存高28cmをはかり、色調淡黄褐色を呈する直口壺形土器である。口縁端部内外面に小突起がつくり出され、口縁内外面にはロクロび



第89図 No.222袋状ピット出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

二 宮 遺 跡



第90図 No.225地下式横穴 ($\frac{1}{40}$)

きの凹凸が著しいヨコナデが施されている。胴部外面には、ごく細の縦位の刷毛ナデを中心にして器面が整えられている。そして、胴部上位に8~9条よりなる櫛状工具による明瞭なナデが一巡し、その下位に縦位のナデを行った同一工具によると考えられる幅1.8cmのナデが一巡する。

この土器の形状類似をしめすものに、景初三年鏡を出土した鳥取県神原神社古墳（註9）の土壙内のものが存在する。（高畠）

No.219 袋状ピット（第82図、図版28—2・29—2・30）

No.217 ピットの北東上の斜面に位置し、床面は南北で1.98mを測り、西側は削り取られ

て不明である。北・東壁側は底面からかなり鋭角に内傾（彎）し、南壁側は緩く立ちあがっている。出土遺物埋土中より壺形土器、高杯片、その他の細片と床面よりわずかに浮いて数個の破片も出土している。

遺物（第83図15—①・16—①、第85図15—②・16—②）

図示できたものは口縁部片と高杯の皿部と脚部の4点のみである。15—①はわずかに外彎する口縁で4本の沈線が施されている。口径20.6cmで内外面共にナデによる調整、淡赤褐色の化粧土がぬられている。焼成は良好である。15—②はゆるやかに外彎する口縁で、口径9.7cmを測る。内外面で共にナデによる調整がなされ、砂っぽい土器で、色調は黒茶色、焼成は良好。16—①上部と裾端部を欠損する、外面ナデ仕上げ、内面はヘラ削り後荒い刷毛目の調整、色調は赤褐色、焼成はあまりよくない。16—②口径は18cm、内面整形不明、外面刷毛を部分的に施し、縦に4本のヘラ先による傷がある。色調は黄褐色、赤褐色（内面）、黒色、白黄色（外側）とまちまちである。砂っぽく粗雑で焼成はあまり良くない。

No.220 袋状ピット（第84図、図版31・32・33—1）

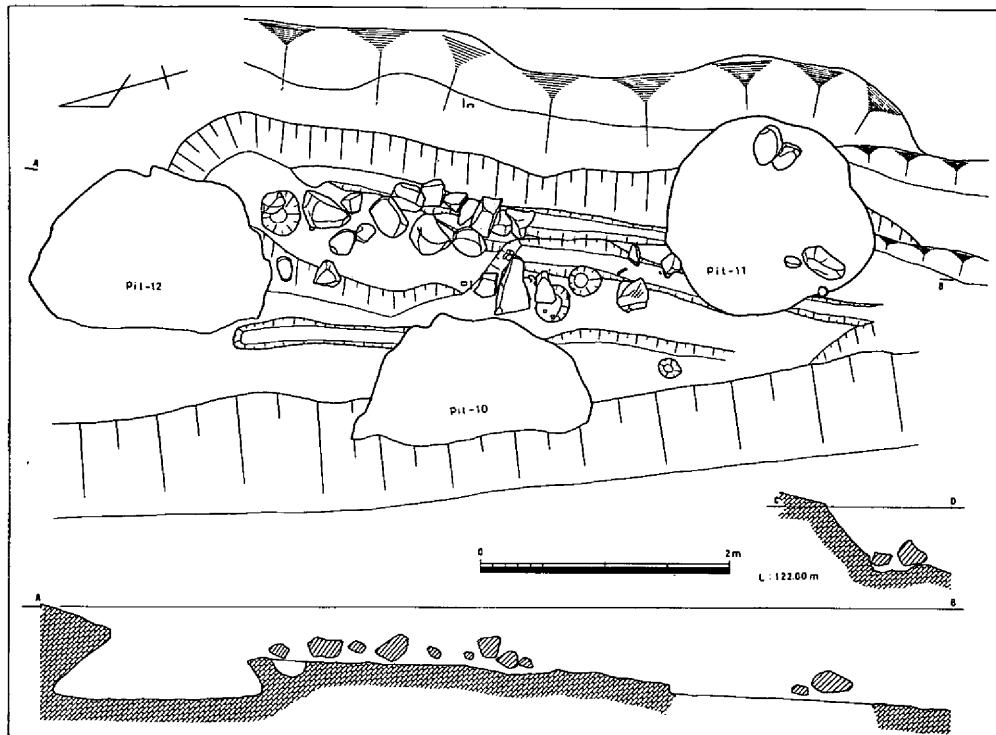
No.35の北東に位置し、口辺東西78cm、南北80cm、床面東西1.64m、南北1.70mを測り、口縁、床面共にほぼ円形を呈している。深さは1mに達していないが、本来は浅いものであったと思われる。すべての壁面は床面よりかなり鋭く内彎（傾）し、南西壁側上部で垂直に近い立ちあがりの部分がみられる。堅穴内埋土は下部3層が自然堆積をしている。南壁側をのぞいて、東壁側と西側下部には壁の崩壊土を混じえたもので埋没しているのが観察された。出土遺物は上層～中層が大部分でいずれも破片であり、床面より1点ではあるが完形の小型手捏ね土器が出土、また6個の河原石も伴っている。

遺物（第85図1~14）

土器は上層から出土し、いずれも小破片が多く、1は壺で肩部より上には7本の単位の櫛描き沈線

二宮遺跡

が施され頸部内面には指痕が残り、以下はヘラ削りで仕上げられている。頸部には貼付け凸帯がめぐらされている。頸部内面には指痕が残り、以下はヘラ削りで仕上げられている。頸部より上の内外面はナデ仕上げ。使用粘土にはかなりの砂粒を含みもろさが目立つものを用いている。(第75図3と同一遺物である)。3は小型の壺で内面の頸部以下はヘラ削りで、外面口縁内部は横ナデ。胎土には若干の細砂粒を含んでいるが硬質、色調は赤味をおびた茶褐色で焼成良好。7は口縁が外反気味で丸味を持って終る。体部はいびつで対称でなく、肩、胴部の境界には稜を持つ。外面の整形は櫛目が残り、最大径より上部は櫛の後指ナデがなされ、口縁、頸部は横ナデ、内面は指ナデ。胎土は精製された



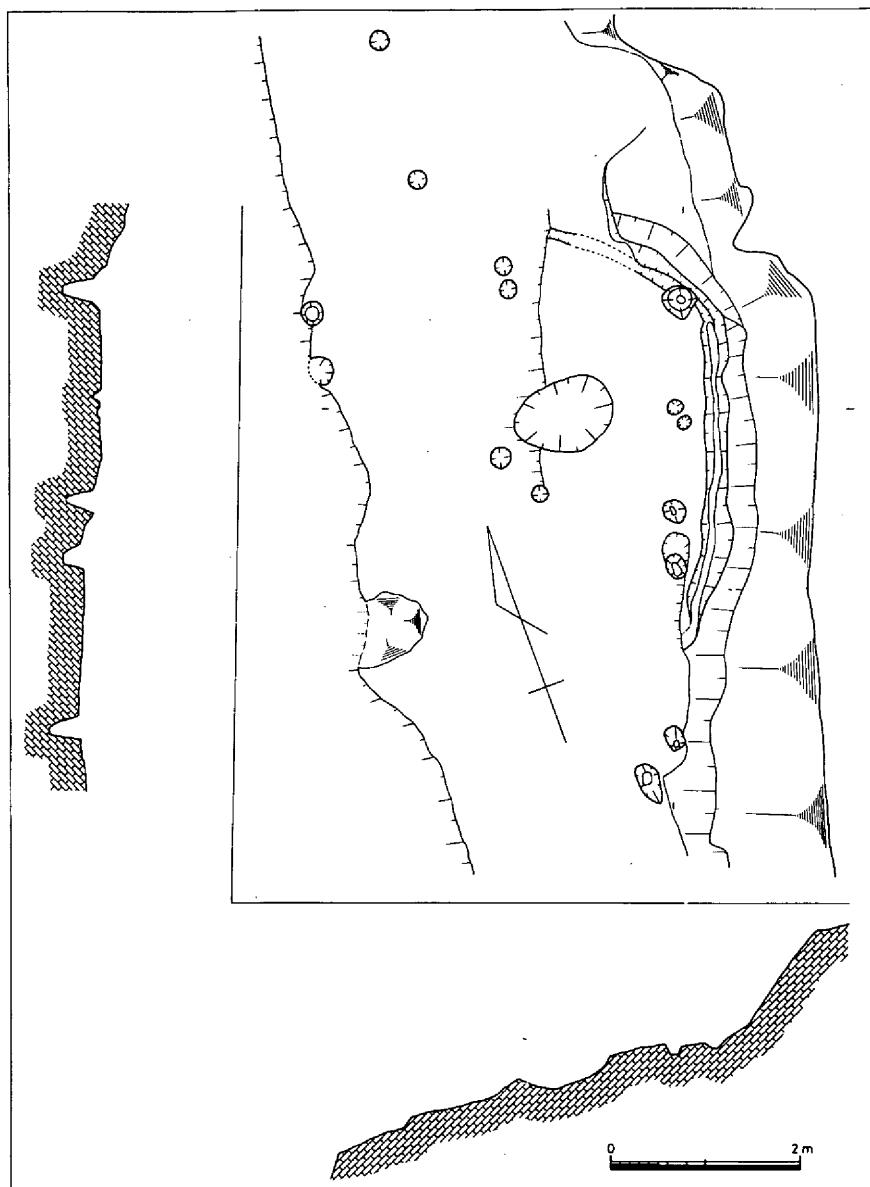
第91図 No.224 住居址 ($\frac{1}{80}$)

粘土に、若干の砂粒を含み良質である。色調は黒茶褐色で焼成良好。12は受部と台部の接合部の間隔がかなり広いものと思われ、受部はかなりの内彎を呈し、端部はさらに外反し、先細で丸味をおびて終る。接合部内外面はヘラ削り、内面接合部は面を有する。内外面は丁寧なヘラ磨きを行っている。接合部はヘラ削り後、ヘラ磨きにて仕上げられている。胎土は精製された粘土を用い、若干の砂粒の混入がみられる。色調は良好で、器表面の一部は火の回りがよく行きとどいていないことから軟質で剝離している。

No.224 住居址 (第91図、図版28—2)

A地区北側で北西に傾斜した地形に位置し、No. 217・218・219を切断する形でその上に造られている住居址である。壁体溝は3本が認められ、柱穴は数本が検出されたのみである。また、河原石、山石が床面よりやや浮いて確認された。これは、最後に投込みによるものと思われる。出土遺物は、石

二宮遺跡



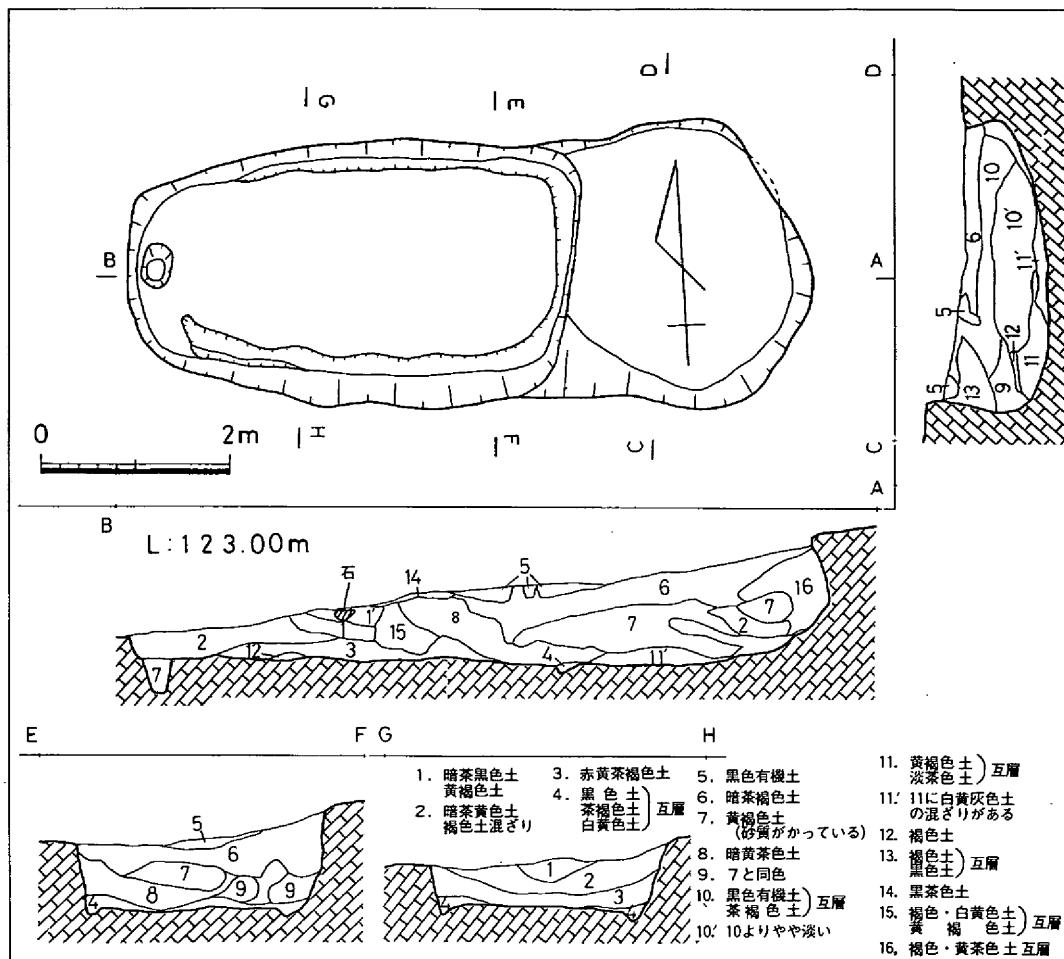
第92図 No.232 住居址 ($\frac{1}{80}$)

と同様で土師器の杯が浮いた状態で出土し、第94図10～14で、その他細片も若干含まれていた。遺物からみればNo.232住居址と同時期と思われる。

No.225 地下式横穴 (第90図、図版34)

A地区北側で北西に傾斜した地形上に位置する。平面形態は楕円形でまず楕円形土壙が掘られ、さらに斜面に対して反対方向に下部の狭く楕円形の底面を呈した横穴が掘られ、壁面の立ちあがりは、奥壁はほぼ垂直で、天井部は中央に向けて下りぎみの横穴である。横穴入口径は $42.0\text{cm} \times 56.0\text{cm}$ の楕円形、深さ 56.0cm (表面からの深さ 88.0cm) を測る。遺物は全く出土していない。

二宮遺跡



第93図 No.227土壤 ($\frac{1}{80}$)

No.226 溝状遺構

No.225の下方に位置し、住居址の壁体溝に似たものである。周囲にはピットもあるが、関連するものではない。またこの溝内においての出土遺物は全くない。

No.227土壤 (第93図)

平面形態で(1)不整隅丸長方形で床面において(2)不整多角形の土壤を切断している。(1)の床面はほぼ平坦で壁体溝が巡るが西側では検出できなかった。しかし、西側壁下には深さ28.0cmで橢円形のピットが存在した。(2)は形態からみれば、袋状ピットと類似している。埋土状態は1・2が続いた土層である。また出土遺物は埋土中より土師器片が数片検出されたのみである。

No.232 住居址 (第92図)

この住居址はA地区No.33南西で西側が削り取られて傾斜した地形に位置している。平面形態では隅丸方形に近く、一辺と北隅と南隅の一部が現存するのみである。東壁は二段掘り、北側は壁体溝の一部がほとんど消滅していた。柱穴はほど等間隔に3本が検出され、中間では2本が60cmで、これは柱

二宮遺跡

の建替えであろう。その他にピットが存在したが柱穴と考えるには不都合なものである。また卵形のピットが検出されたが、埋土層色が異なり、別のものと考えられる。さらに遺物は、壁体溝内より出土で第94図1～8に図示したもので、他に破片数点が出土しているのみである。これらの遺物から平安時代に比定されるであろう。

袋状ピットについて（第64図）

二宮遺跡岡の山A地区・A地区北を全面発掘を行い、16基の袋状ピットが検出された。分布状況にしても、同地区のほど中央部に集中している。さらに№227土壤の東側の土壤も含まれているが、これは不明瞭なものである。これらの袋状ピットは時期的には古墳時代前期のものである。なおこの地区的のものは表一6に示す形態である。またこれらの構造上において上屋を持つとは考えられない。なぜならば、形態上で大小の差はみられるものの、16基あるいは、17基のピットがほど同時代のものであるからである（遺物から推定）。

全般的に袋状ピット上部は耕地転用で、東部壁側で3mが切り取られており、上部構造を残すピットは1基も確認されなかった。№42(B地区西端検出袋状ピット)においても同様である。しかしながら、№35・№42・№220の3基の袋状ピットにおいて、頸部が垂直に立ち上がる部分を持っている三角フラスコ形を呈する袋状ピットがある。他のピットは内壁が袋状を保っているが、中には一部分で袋状を呈すか、あるいは全く袋状を呈しないものとがある。このようなピットは当初から浅いものであり、後世のカットが著しく、残存部が現状のものとなっている。従って、カット以前はこれらすべてが三角フラスコ形袋状ピットであったと推察される。

底面形態から分類して、定型・不定型に分けられる。

定型

円形 30・33・35・42・220・219 (?) · 221

楕円形 29・34・218・223

不定型

不整円形 31・222・227 (?)

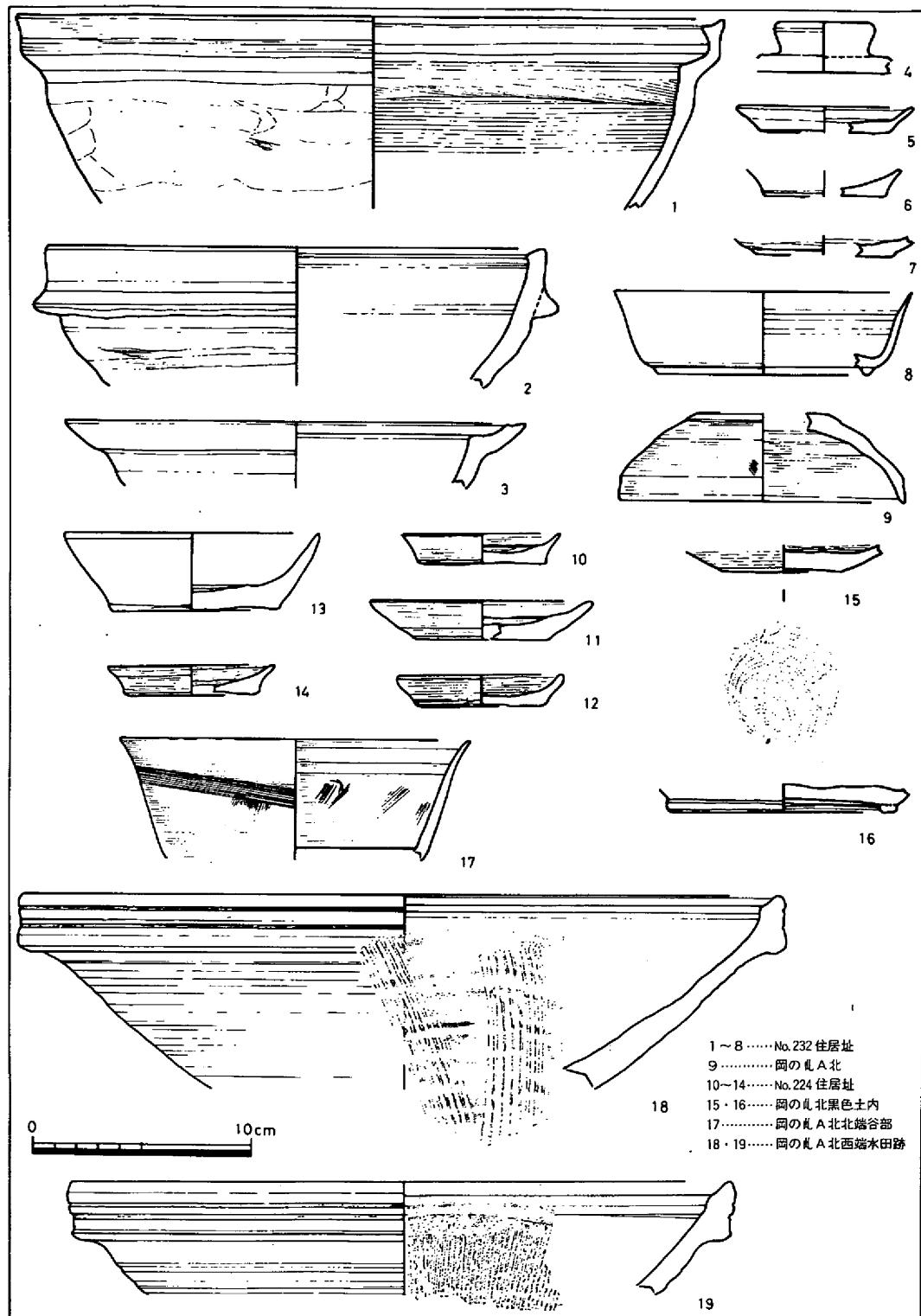
不整楕円形 45

不整多角形 32

№35は入口が若干南西に片寄っている。№42は北西側、№220と上部は不明である№33の2基はほぼ中央部に位置するものである。入口開口方向が片寄って作られているのは、意識的にピット内部を有効的に用いようとした工夫とみるのが妥当であろう。袋状ピットの規模は、大まかに大・中・小の3種類に分けられる。

規模は各ピットの削平のされ方に差がみられるため、底部径で分けてみた。（大形・中形・小形を表記）このような規模の差は、袋状ピットの時期的な差と考えるよりむしろ使用のされかたにおいての差と考えるのが妥当のようである。ピットの埋土状態についても(a)山形に中央部が高くなるもの、(b)下層がわりあい平坦なもの、(c)下層が平坦で中層において山形になるものの3種がみられた。遺物の出土状態をみれば、底部床面からの出土は極くまれである。特に№35、№42は中層が主体である。№42の場合は下層より約35cm上位の同一面において数個体が検出された（第76図）。出土状況より№42は、下層埋没後、再び用いられたものである。従ってピット群は自然堆積による埋没と考えるのが妥当と思われる。遺物の出土量は各ピットによって差はあるが、目立って多いピットは№29であ

二宮遺跡



第94図 No. 224・232 住居址出土遺物 (1/3)

二宮遺跡

った。また総個体数は200個を多少越す程度である。図示されている186個体のうち完形品は13個体で極く少量である。土器はNo.42を除いて、殆どが廃棄されたものである。

A、袋状ピットは入口部を小さくして蓋をつかい密封することを目的として、上屋構造を有する形態ではない。

No.	地区	底面・形態	底面・径 (東西)×(南北)	深さ	出土遺物(土器)	規模	備考
29	A	楕円形	230cm×248cm	70cm(中心)	第66図、67図	大型	(定型)
30	A	円形	218×215	52(〃)	第72図1	大型	(定型)
31	A	不整円形	165×154	38(〃)	第72図2~12	中型	(不定型)
32	A	不整多角形	160×100	32(〃)	第72図13~16	小型	(不定型)
33	A	円形	146×150	76(〃)	第72図17~26	小型	(定型)
34	A	楕円形	154×167	48(〃)	第72図27、28、29	中型	(定型)
35	A	円形	200×204	132(〃)	第75図	大型	(定型)
42	B	円形	165×170	126(〃)	第77図・78図8~39	中型	(定型)
45	B	不整楕円	91×103	53(〃)	第78図40、41、42	小型	(不定型)
217	A北	?	184	57(〃)	第83図1~4	不明	床面半壊(?)
218	A北	楕円形	182×200	84(〃)	第83図5~14	中型	上層に住居址(定型)
219	A北	?	198	40(〃)	第83図15、16第85図15、16	不明	床面半壊(?)上層に住居址
220	A北	円形	164×170	84(〃)	第85図1~14	中型	(定型)
221	A北	円形	137×135	13(南)		小型	北側消滅(定型)
222	A北	不整円形	200×200	73(中心)	第83図26、27第89図	中型	(不定型)
223	A北	楕円形	163×188	10(〃)	第83図17~25第89図	大型	(定型)

岡の丸A・地区袋状ピット計測値一覧表(表-6)

B、ドングリ等の貯蔵穴とは別であり、収穫物の生産・収穫・保存という大量の収穫物を保管するための貯蔵が固定化してきたものといえる。

C、この時期には高床倉庫を築造しうる技術、工具類が充実しているにもかかわらず、このような袋状ピットが存在する事は個別消費の単位としての性格を示している。時代が下るにつれて衰退していくと思われる。これは豊穴に湿気が多いことによるものである。

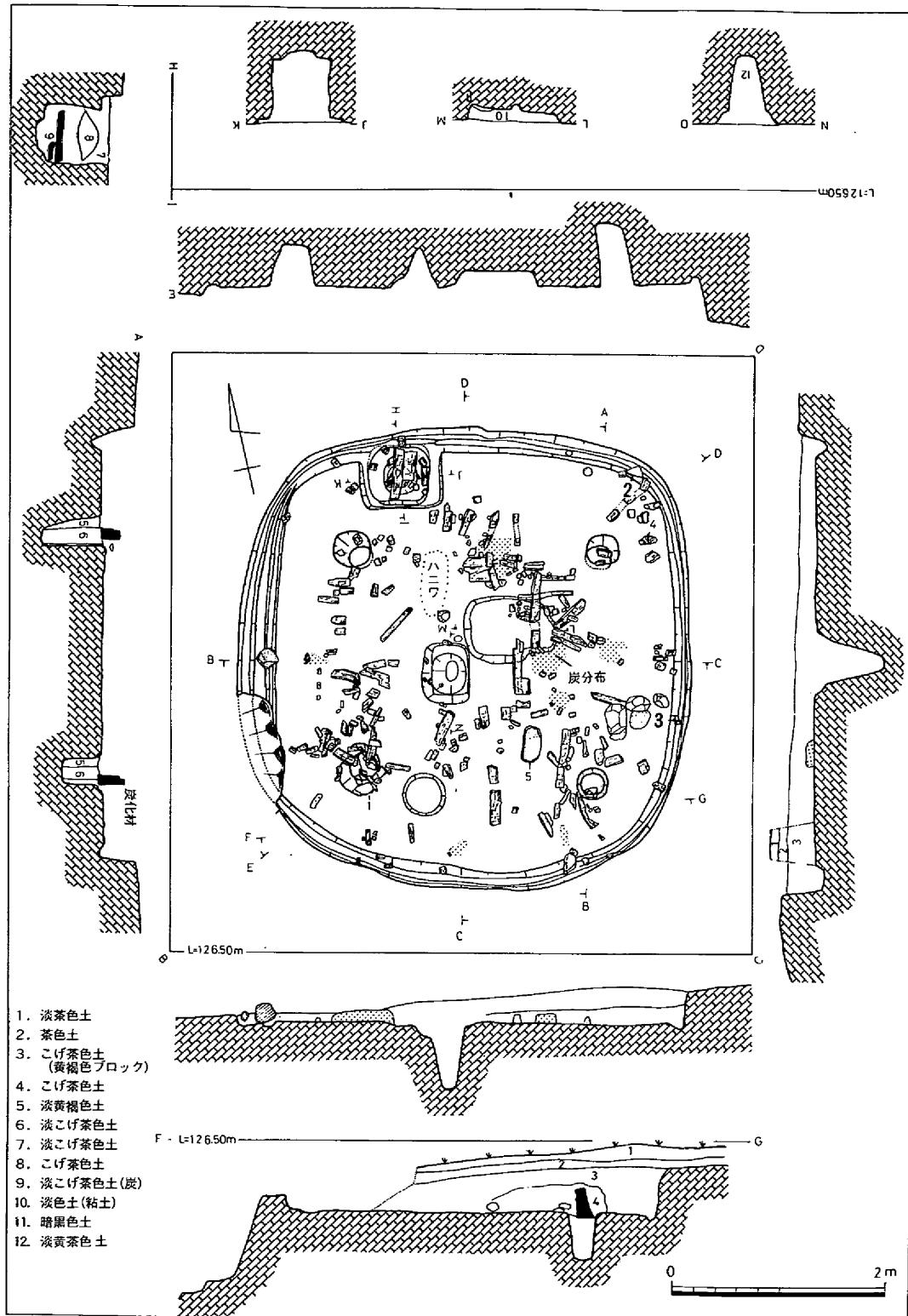
津山市大田十二社遺跡では80数基、同総社内山遺跡では2段式の袋状ピットが確認されている。さらに久米郡久米町内の三菱レジャーランド遺跡内においても同じような袋状ピットがみられる。

(二宮)

参考文献

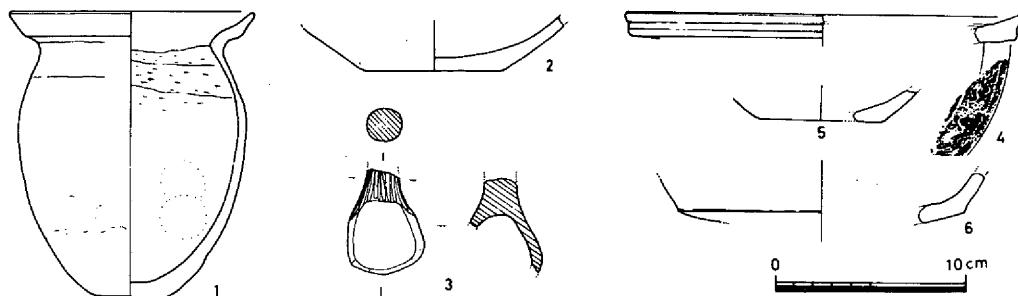
- 福岡県教育委員会「門田遺跡」『山陽新幹線埋蔵文化財調査報告第・3集』1977年
- 鳥取市教育委員会「鳥取・秋里遺跡I」「鳥取市文化財調査報告書IV」1976年3月
- 鳥取県教育委員会「青木遺跡発掘調査報告書I」「鳥取県教育委員会」1976年3月
- 鳥取県教育委員会「青木遺跡発掘調査報告書II」「鳥取県教育委員会」1976年
- 倉吉市教育委員会「鳥取県・倉吉市服部遺跡発掘調査報告・遺物篇」1974年
- 島根県教育委員会「平所遺跡1」「埋蔵文化財発掘調査報告書」昭和51年3月

二宮遺跡



第95図 No.37住居址 ($\frac{1}{60}$)

二宮遺跡



第96図 No.37住居址出土遺物 (1/4)

(1) 岡の山B地区

No.37住居址 (第95図、図版39—1・40・41—1~8)

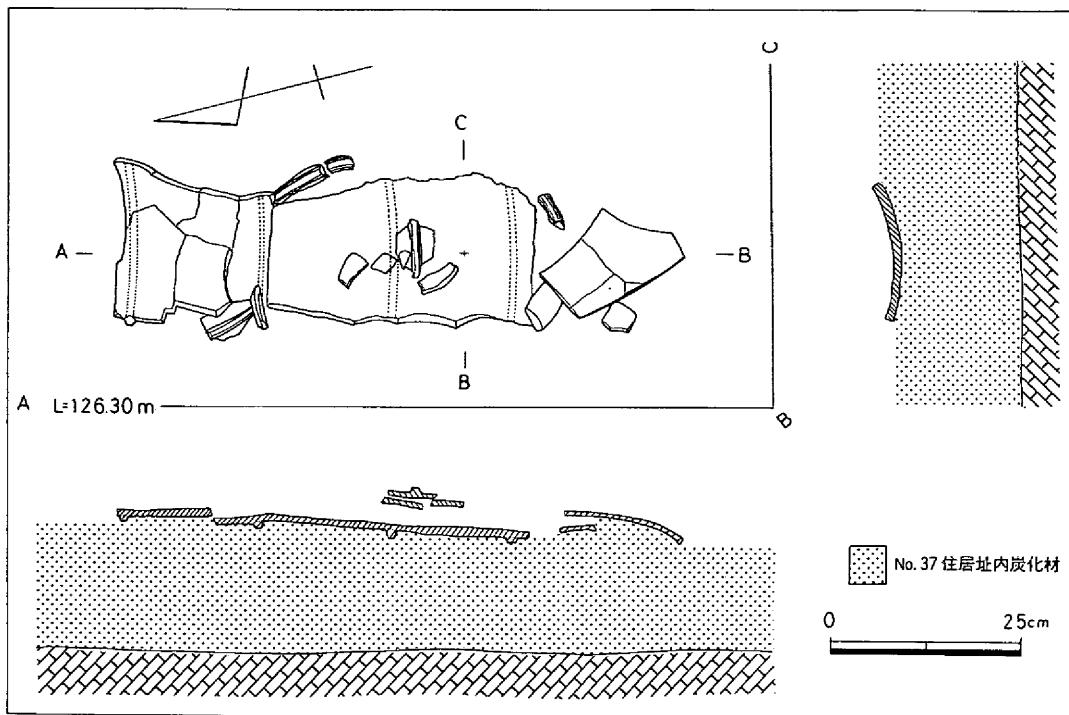
第一次調査のトレーンチにより火災を受けた状態が確認されたものである。炭化材は住居址中央に向かって集中するものが多く、その下位に梁につかわれたと考えられる横木がみられ、他に少量ではあるがカヤが散逸的に存在した。そして、この住居址は西方に傾斜する斜面部分に作られており、西壁に拡張が行われた隅丸方形の小型住居址である。一辺約390cm、床面積15.2m²をはかり、内部構造に柱穴4、壁体溝2、袋状ピット1、大・小の土壙2、がみられる。主柱穴は四本よりなりそのうち2本が炭化し、立った状態で出土しており、北辺より右回りに220cm、210cm、210cm、195cmをはかる。南東部分の柱穴を除く3柱穴は、掘り方上部より下位に向かうにしたがって住居中心方向に角度をもって掘りこまれている。中央ピットは住居址中心より少し西に配置され、北東に接して存在する粘質土のつまつた浅い土壙と中心を分けあっている。この中央ピット上端は隅丸長方形にて段を有し下位にゆくにしたがって隋円に変化しており、深さ65cmをはかる。内部は炭・灰がみられる。

袋状ピットは北壁西コーナーよりに壁体溝に沿って設けられており、中央ピット同様2段の掘り方がみられる。上端プランは75cm×65cmの長方形にて1段下がり、隅丸方形に変化し、下位に向かって広がり約70cmで底部となる。その底部中央に径30cm、深さ10cmの凹部が存在する。炭化材が袋状ピット内に主軸と直交する状態で埋没しており、蓋状の存在を推定することができる。この炭化材より1950±20年と1950±80年の測定値が得られている。遺物は主柱穴外側床面部分にみられ、北東、南西柱穴部分にかぎられていたが、1点35cm×15cmをはかる板状の河原石が中央ピットと南東柱穴間より設置された状態で出土している。他に埴輪円筒棺が住居址内覆土中より一個体分出土している。

遺物 (第96図)

1は口径13cm、器高14.9cm、底径4.1cmをはかり、暗黄褐色を呈する甕形土器である。器壁内外面の剝落が進み、器面調整については不明瞭な点が多い。口縁部は鈍い複合口縁にて器壁が厚く、肩部で薄くなり、再び底部に向かうにしたがって厚く仕上げられている。外面下半に面をもつ起状がみら

二宮遺跡



第97図 No. 37 住居址上面埴輪円筒棺 (1/10)

れ、内面は 1.5 cm 幅の粘土紐痕をとどめており、その上部に横位のヘラ削りが施されている。

2 は底部 7 cm をはかるものである。胎土中に長石、石英等の白色砂粒を多く含み外面暗黄褐色、内面暗青灰色を呈する。

3 は杓状の小型土製品である。暗褐色にて、器外面はヘラ磨きが行われており、柄は中実である。ここまで遺物が No. 37 住居址床面に伴うものである。4～6 は住居内覆土中より検出されたものである。

4 は口縁部外面に凹線、内面平坦部に櫛描波状文が施された壺の口縁部であろう。5 は 1・2 等に類似する小さい径を有する底部である。6 は高杯の杯屈曲部分にあたり外面丹塗りが施されている。他に砥石等が出土している。これら一連の土器は岡東 B 地区において出土している土器と同様のものがある。

埴輪円筒棺 (第97・98図、図版124)

No. 37 住居址より出土したものであり、中央ピット北側にて床面約 15 cm 上位より検出された。周辺には大形の炭化材が存在しておらず、炭を除去して埋め込まれた感じのするものである。掘り方は検出することができなかった。円筒棺は後世の削平により破壊され半分が失なわれており、完形の出土ではなかった。しかし、一応口縁部より脚端まで存在する一個体分が認められ、口縁部を若干、南に傾けているが水平を意識して埋められたものと考えられる。棺内遺物は何ら発見されなかった。

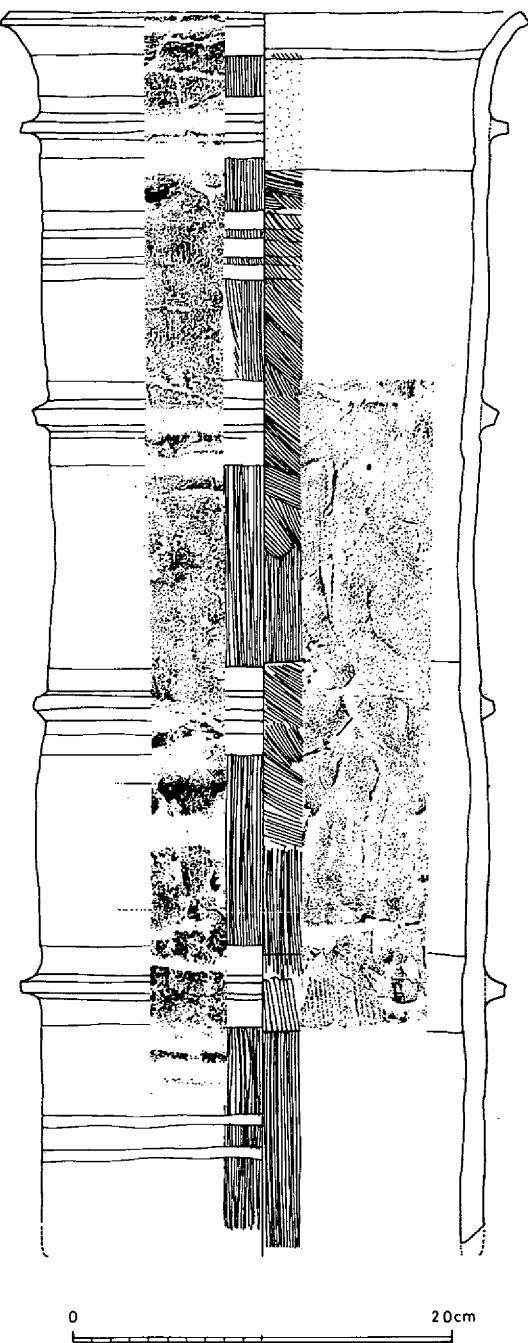
二 宮 遺 跡

埴輪

まず、破片による直径の推定復元を試みたが、各個所で直径が異なり困難をきわめたゆえ、平均値をもって実測を行ったものである。

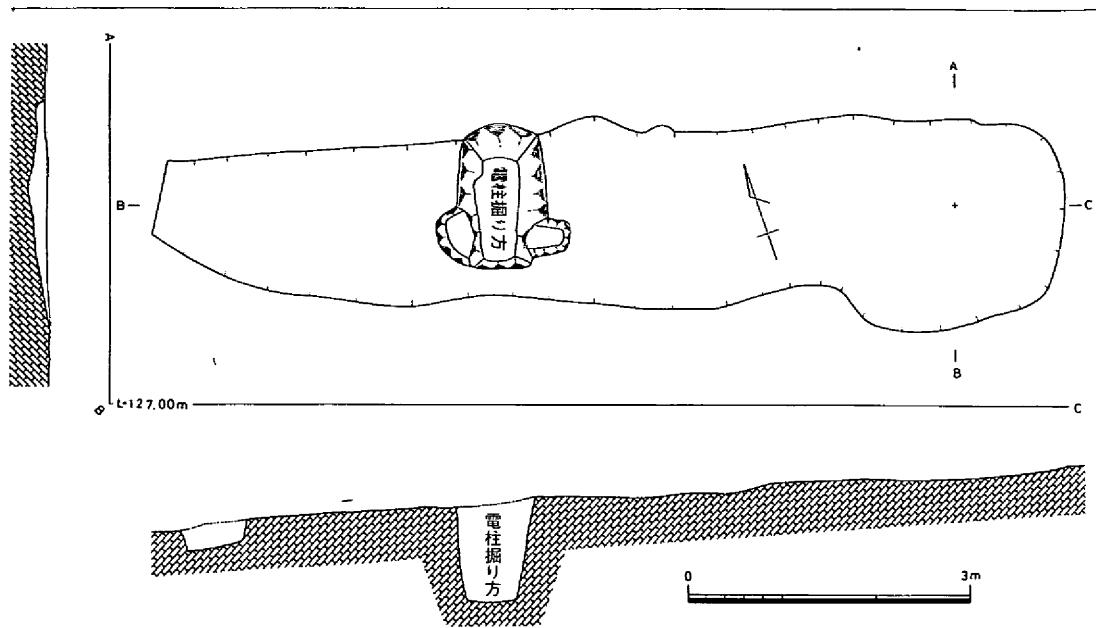
口径27cm、残存高約65cmをはかり暗黄褐色を呈する円筒埴輪である。円筒部中位が若干細く、口縁、脚部方向に広がりをもち、口縁部ではさらに外反する形態をとるものである。

内外面は刷毛状の工具による調整が施されており、外面に縦を基調とする0.1cm巾の刷毛ナデ、内面上位にも同一工具による斜位のナデ、下位では縦のナデがみられる。そして、刷毛ナデ調整後に外面15cm間隔に巾1cm前後の粘土紐4本が体部を一周するように貼り付けられ、断面四角形を呈する。ちょうど、その裏面は「タガ」とりつけ時の押へのため、刷毛ナデが指頭ナデの類によって搔き消された部分が存在する。これは上部より1・3・4段の「タガ」裏面にみられる。とりつけられた「タガ」は、それを中心に上下4.5cm巾のヨコナデ調整がみられ、口縁部もこの時点ではヨコナデが施されたものと考えられる。それらが終了した後に円・方形の切り抜きが行なわれたと考えられる。しかし、その位置を明確にしうる破片が少く、小片より推定すると第1「タガ」より約3cm下に直径6.5cm位の円孔、第3「タガ」より約3cm下に $6.7\text{cm} \times (3 + \alpha)\text{cm}$ の長方形透しが認められる。他の部分については資料を欠き不明である。脚部1段に黒斑が認められる。なお、この調整につかわれた刷毛状工具による同様のナデがNo.41古墳周溝内より



第98図 No.37 住居址上面埴輪円筒棺 (1/4)

二宮遺跡



第99図 No.38 土壙 (土壙)

出土した埴輪片にもみられる。また、2号墳（蛇塚）にて表採された円筒埴輪片はNo.37住居址含土内の円筒棺と種々の面で類似している。

No.38 溝状遺構（第99図）

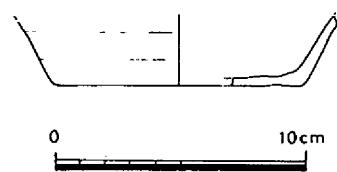
No.37住居址の北側に東西方向に主軸をもち、西に下降する溝状の土壙である。No.39建物柱穴により一部、近代では電柱を埋める大型の掘り方、および道により破壊を受けている。

長軸 980 cm、短軸 100~210m をはかり、土壙内に粘性の強い硬質の暗茶褐色土の堆積がみられた。土層中にNo.37住居址出土遺物に近い小土器片、上面より円筒棺に転用された埴輪小片が密着して出土している。

No.40 遺構（第101図、図版42）

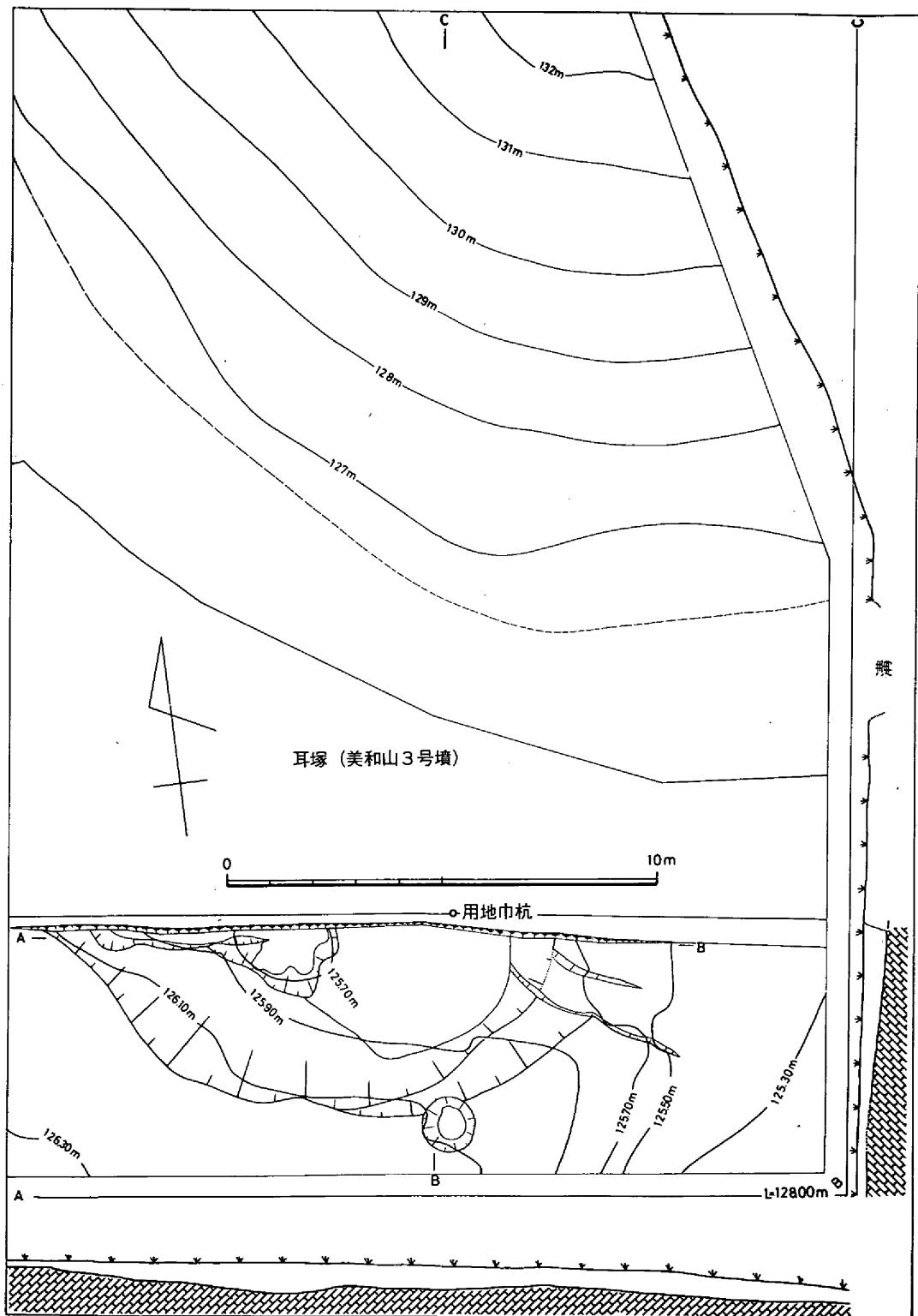
第一次調査において確認がなされ、美和山3号墳（耳塚）関連の遺構と考えられたものである。表面観察による3号墳墳端より約12mの所に弧状土壙周縁部分が検出され、表土より深さ70cm、幅460cmをはかり、土壙内は凹凸が著しい。堆積土は大きく4層に分けることができ、3層中より奈良時代の須恵器（第100図）杯身が出土している。表土剥ぎの時点でもNo.40遺構周辺に数点の奈良時代須恵器片がみられた。

ここでは3号墳の墓域（境）を示すものとしてとらえることが可能と考えられる。このことは岡の此B地区の概要でも



第100図 岡の此B地区周溝内出土遺物 (1/3)

二宮遺跡



第101図 No.40 耳塚関連遺構 ($\frac{1}{150}$)

二宮遺跡

少しふれたが、南に高さを減じながら延びるC丘陵の地形を大きく変化させ、グリットB—6付近より尾根筋上部に向かって低くなるセンターがみられ、3号墳築造時の削平の痕跡をとどめている。さらに、3号墳、2号墳、（蛇塚）の間にも帶状の凹地が存在し、現在その凹地底部が山道となり利用されている。

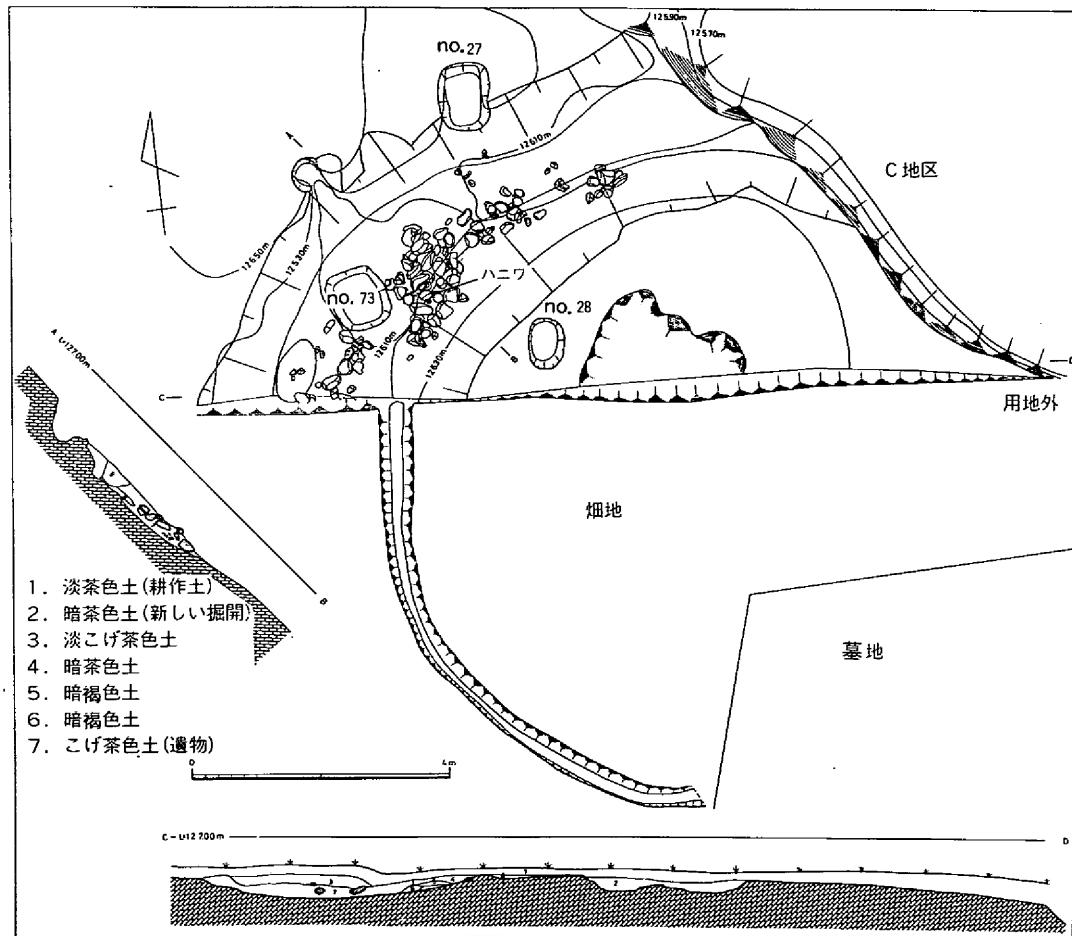
3号墳センターとほぼ同心円弧をもつと考えられる土壙周縁部分までを、3号墳墳頂よりはかると約32.5mの数値がひろえる。

遺物

掘開部分土壙内より前述の須恵器片以外は何ら発見することができなかつた。

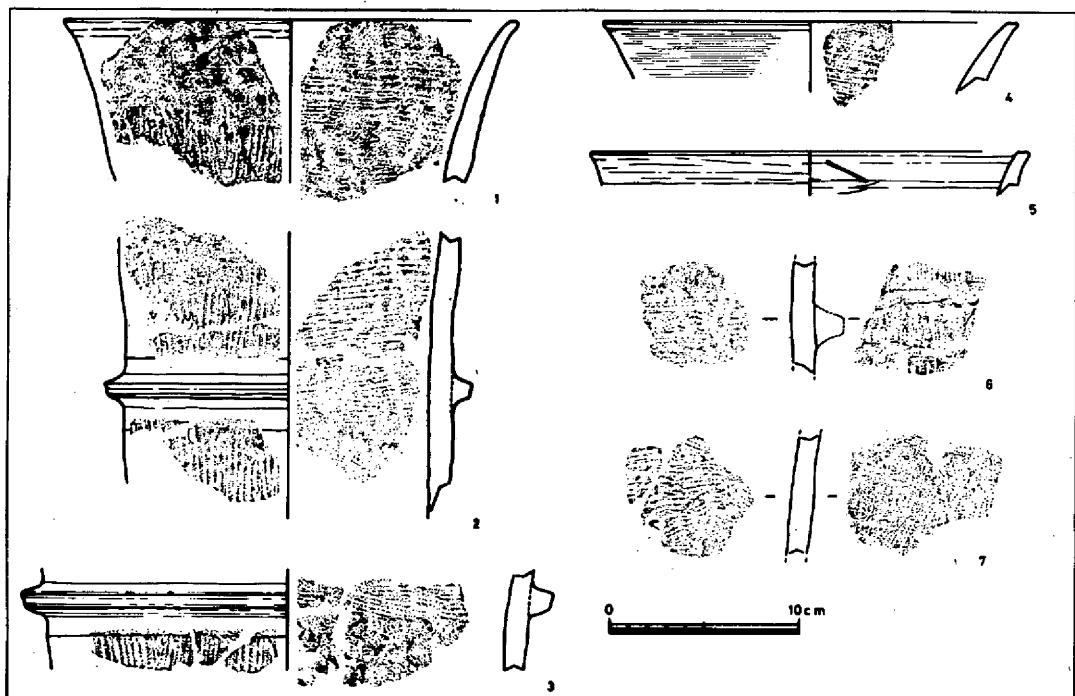
No.41遺構（第102図、図版43）

従来、確認されていなかつたもので今回の調査により新規に発見されたものである。立体的に視覚にうつたえる状態ではなく、地山平坦部まで完全に削平を受けており周溝を残すのみであった。しかし、ヤグラを組み立てて上空より望めば、かつての周溝部分が畠地の溝として弧を描いているのがよ



第102図 No.41 古墳周溝 ($\frac{1}{20}$)

二宮遺跡



第103図 No.41 古墳出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

くわかる状態であった。これを美和山4号墳と呼称する。

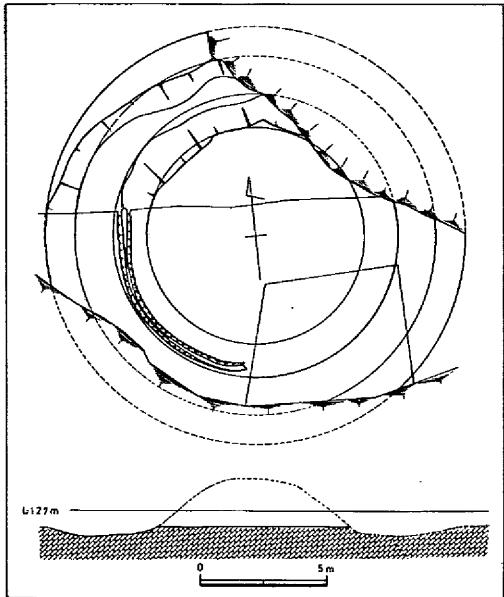
4号墳は中世の区画溝、近世の土壙墓、近代の墓地・畠地等により破壊を受けており、調査は路線内の土ブロックの周溝を掘り下げるにとどまった。周溝は幅約420cm、深さ40cmをはかり、周溝底より表土間に3層を有しており、円筒埴輪片、及び葺石（河原石）と考えられるものが、7層のこげ茶色土中を中心に出土している。それらは周溝内側傾斜部に集中し、墳丘より落下した状況を呈している。

（高畠）

埴輪（第103図、図版128—1）

いずれも小片となって検出され、復元も不可能なものである。破片から推察して、普通の円筒埴輪である。1は口径24cmを測る口縁部片である。口縁端部にかけての器肉は薄くなり、外反する形態をとるものである。端部には面を有している。内面は荒い刷毛状工具による調整が施され、内面端部は横ナデにて仕上げを行い、下位は斜位方向の荒い刷毛調整で仕上げられている。外面は縦を基調にする約1.5mm巾の荒い刷毛ナデ、上半には横位の刷目が見られ、端部は横ナデによる調整がなされている。2は体部片で、内面下位においては、指圧痕が残っている。すなわち、内面全体を指ナデの仕上げを行っている。外面は、斜位の刷毛ナデ（基調は縦刷毛）調整後体部には粘土紐が貼り付けられ、紐の断面は四角形を呈する。貼り付けられた「タガ」の上下3.8cm巾の指による横ナデ調整で仕上げがなされている。上位においては斜位の刷毛の後横ナデ仕上げ。3は体部片で2と同様の調整

二宮遺跡



第104図 No.41古墳推定復元図 (1/300)

がなされているものである。しかし、内面の刷毛は横位後斜め方向と明確にわかる調整。「タガ」についても、下部が若干ふくらむ形態をもっている。4は口縁部であり、端部に向け薄くなり、上面には浅い凹みを持っている。内面は荒い刷毛ナデ、後に端部は外面と同様に横ナデによる調整仕上げとなっている。5は口縁部片で、端部上面には浅い凹みを持っている。内外面は横ナデ調整。6は体部片で、貼付け粘土紐の剥落したもので、その部分には縦刷毛がみられ、貼り付けの上下の残存部には横ナデがみられる。内面は横位の刷毛ナデ。7は体部片で外面は縦刷毛、内面は波打った横刷毛調整。以上7点のうち5が黄色味をおびた暗灰色を呈し、須恵質に近いものである。

(二宮)

美和山4号墳(第102図、図版128—1)

美和山3号墳墓域周縁より南側約26mのところ

に存在し、周溝外縁推定直径16.5m、周溝底よりの墳高約2.3mをはかる円墳である。C丘陵尾根筋(1・2・3号墳直列)より若干、東にはずれた所に位置する。現在まで周溝を含む範囲の円形プランがよく残っており、その南側周溝部分を境にして、垂直に約150cmが削り取られ道路となっている。その道路は4号墳南端を変換点とし、周溝のカーブにそって「へ」の字形につくられている。そもそもこのカーブ自身も、ここに4号墳が存在したためこのように変化したと考えられるものであり、かつて墳丘の存在した時期に南側周溝部分のくぼみをまわるようにして古道が存在し、それを踏襲して、この道の拡張、掘り下げが、昭和30年代の時期になされたようである。

また、4号墳の存在・破壊についての記憶を有する人(70歳)はみあたらなかった。

この4号墳の存在は、従来の美和山古墳群の墓域を尾根筋にそってさらに南に延長し、No.37住居址覆土内につくられた埴輪円筒棺もその内におさめる。また、出土埴輪、葺石の有無等によっても同古墳群の系列を明確にしている。

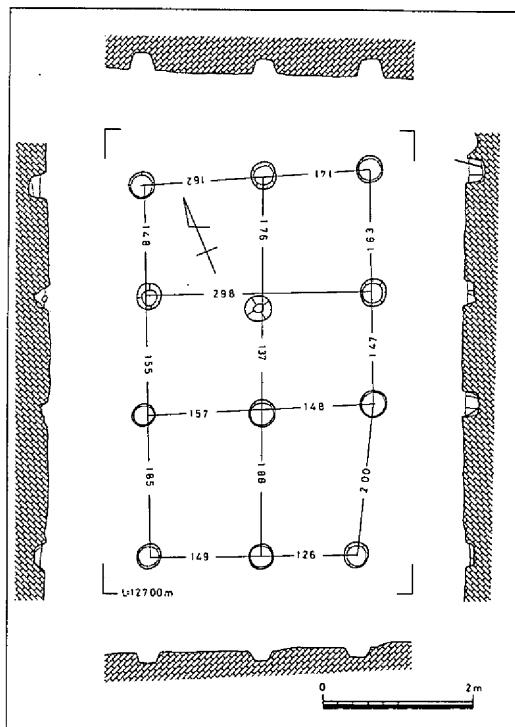
No.39建物(第105図)

桁行3間、梁行2間にて棟方向をN—20°—Wにとる「ベタ柱」の建物である。柱間距離はほぼ近似し、側柱穴は対称に配列されている。岡の山地区の他の建物とも異なり柱穴内は黒色土が埋土につかわれ、柱痕径は3~15.5cmをはかる。柱穴内より鉄器の破片が出土している。

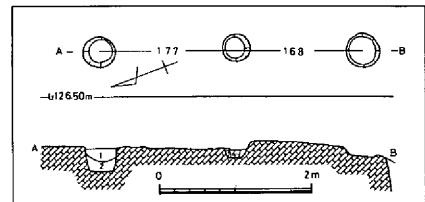
遺物(第107図、図版128)

実測可能なところで刀子状の鉄器片が出土しており、残存長7.5cm、刃部5.5cm、茎部2cmをはかり、両刃の断面を呈する。

二宮遺跡



第105図 No.39建物 ($\frac{1}{100}$)



第107図 No.43柱穴列 ($\frac{1}{100}$)

No.43 柱穴列 (第107図)

No.37住居西側に位置し、南北に主軸方向をとる3穴の並びである。柱穴内は明るい土色の埋土がみられる。本来、西側に延びて建物を構成する可能性が強いものである。

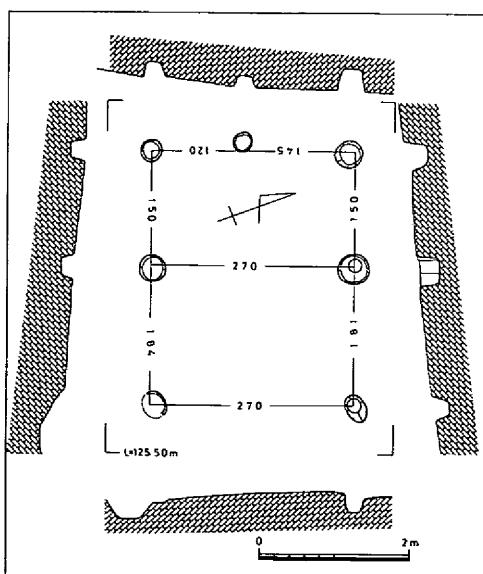
No.66 建物 (第106図)

桁行2間、梁行2間にて棟方向をN—67°—Wにとる小形の建物である。C丘陵東側斜面に位置し、No.39建物、C地区区画内建物とも若干、趣を異にする。

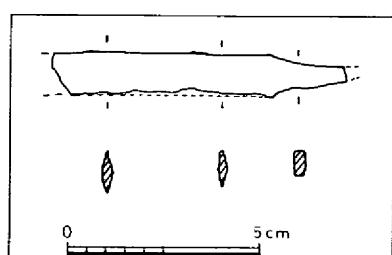
(3)岡の丸C地区

No.46建物 (第109図)

C溝区画内の東端に位置し、桁行5間、梁行2間にて棟方向をN—85°—Wにとる建物である。柱間距離はそれぞれ異なっているが、側柱穴は対称に配列されている。柱穴深さは東に下降するにしたがい深くなつており、西側部分では東柱が4本確認されている。柱穴は西側梁行を

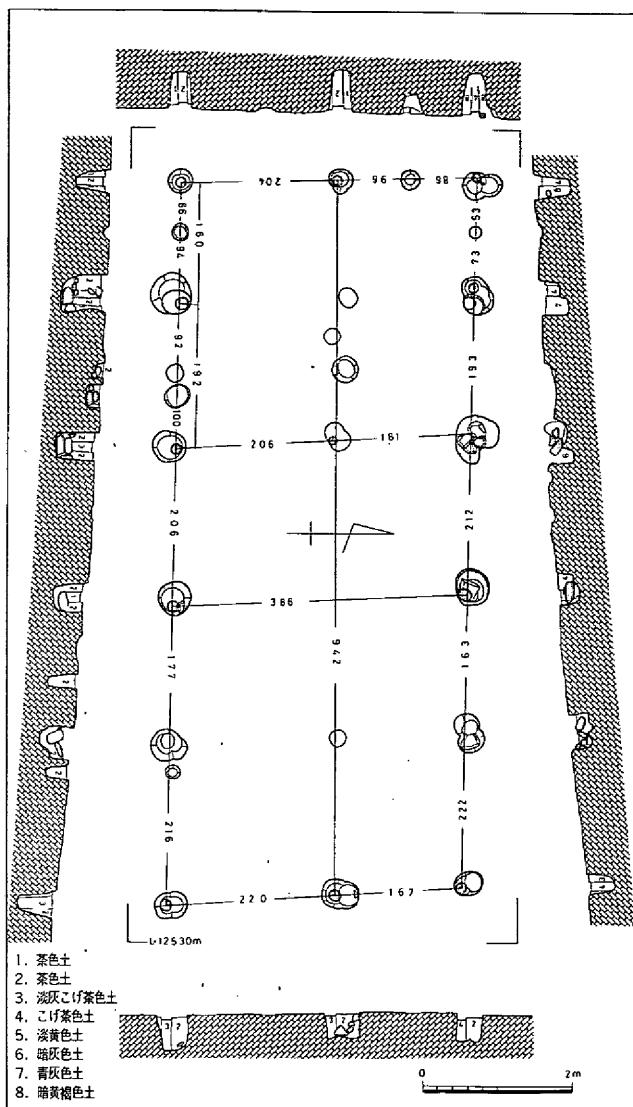


第106図 No.66建物 ($\frac{1}{100}$)



第108図 No.39建物出土遺物 ($\frac{1}{2}$)

二宮遺跡



第109図 No.46建物 ($\frac{1}{100}$)

みられた。No.46建物により切られている。

No.47 建物 (第111図)

桁行3間、梁行2間にてほぼ東西に棟方向をとり、桁・梁の比率が約1.5:1の建物である。南側桁行の2つの柱間箇所を除き、他の主柱穴間にすべて東柱を有し、柱間距離はほぼ同数値を示す。側柱穴は対称に配列されており、それらに柱痕は確認できず、柱穴内に石をつめて埋め戻しがおこなわれた痕跡をとどめている。東梁行の中央柱穴内に砾石がみられた。

除き、すべて重複・建替えが行われており、その2穴が並列関係にある。すなわち、西側柱穴は建替えの時点で、桁行が一間延長されたものと考えられる、柱穴底にはすべてではないが、柱をのせる台がみられるものが5個検出されている。それらの上には木質の土壤化した痕跡が観察される。なお柱痕は柱穴14本すべてにみられた。

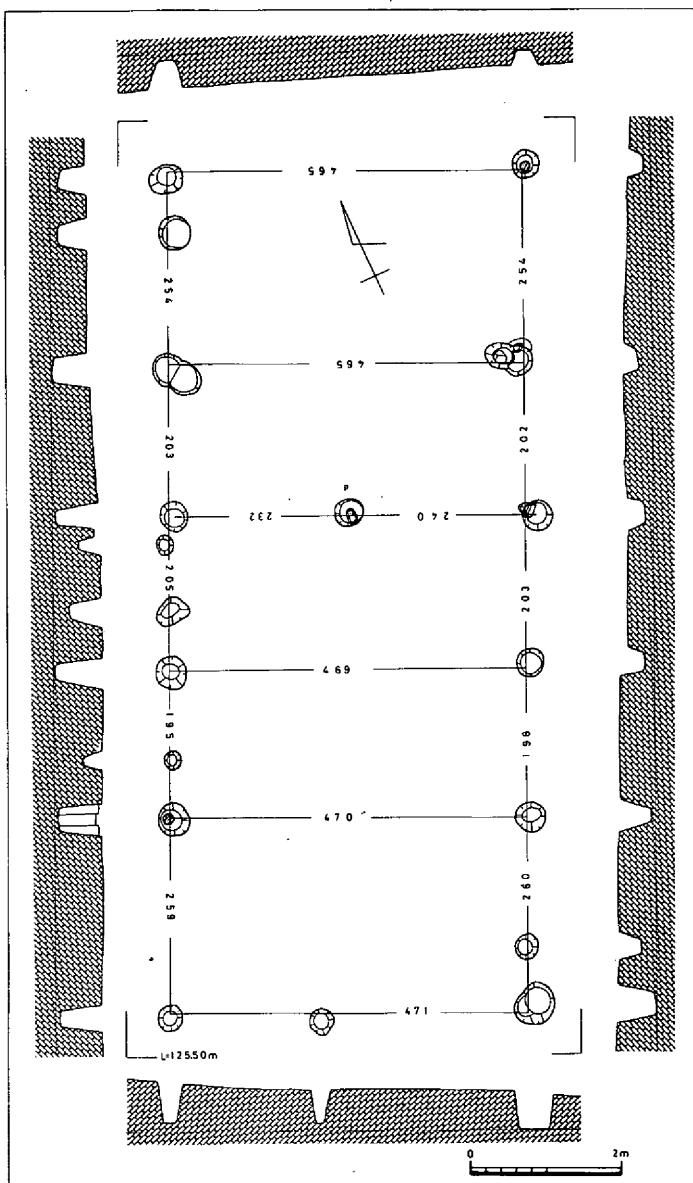
No.68建物と切り合い関係にあり、No.68建物南東柱穴がNo.46建物南側桁行の西側2本目の柱穴によって切られている。No.68建物より新しい時期のものである。

No.68 建物 (第110図)

No.68建物は桁行5間、梁行1間にて棟方向をN—24.5°—Wにとり、桁・梁の比率が約2.5:1でつくられている。柱間距離は5間とも等間ではないが、同数値の柱間が桁行の中で2箇所に使用されている。側柱穴は対称に配列されており、ほぼ同じ深さの柱穴底である。

No.68建物はC溝区画内にて中心配置を占めると考えられるNo.46・47・48建物検出後、柱穴検討の段階で確認したものであり、一部に柱痕跡が

二宮遺跡



第110図 No.68建物 ($\frac{1}{100}$)

い。柱痕径5~20cmをはかり、比較的大いものである。柱穴深さは100cm前後をはかり、底部はほぼ同じレベルにて台石は認められない。

No.79建物(第114図)

No.79建物は桁行3間、梁行2間にて棟方向を東西にとる不安定なつくりの掘立柱配置である。桁行柱間距離はほぼ同数値をしめし、側柱穴は対称に配置されている。南側桁行の柱穴径は40~45cmと

No.69建物(第112図)

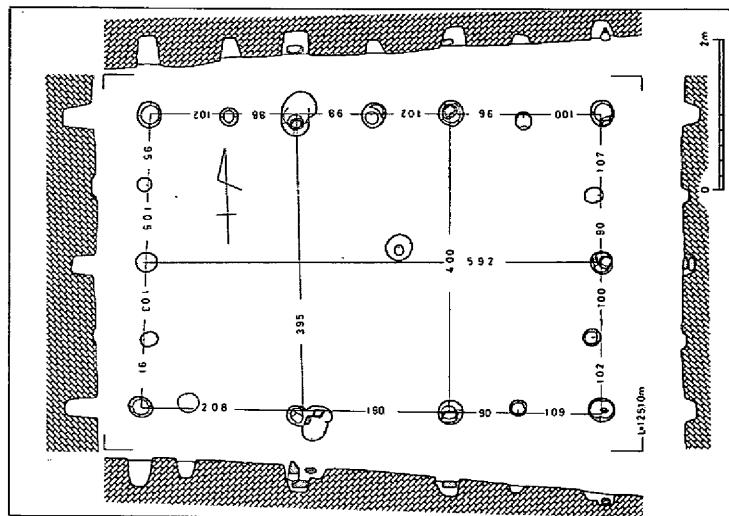
桁行3間、梁行2間には棟方向N-14°-Wをとり、梁行339~371cmの不揃いの建物である。側柱穴は対称に配置されており、柱穴径20cmをはかる大きめの掘り方である。掘り方底はほぼ同一レベルに統一されている。この建物もNo.68建物同様に中心配置を示す建物を検出後の柱穴検討時点で確認したものであり、No.47・68建物と切り合い関係となる。

No.49建物(第113図)

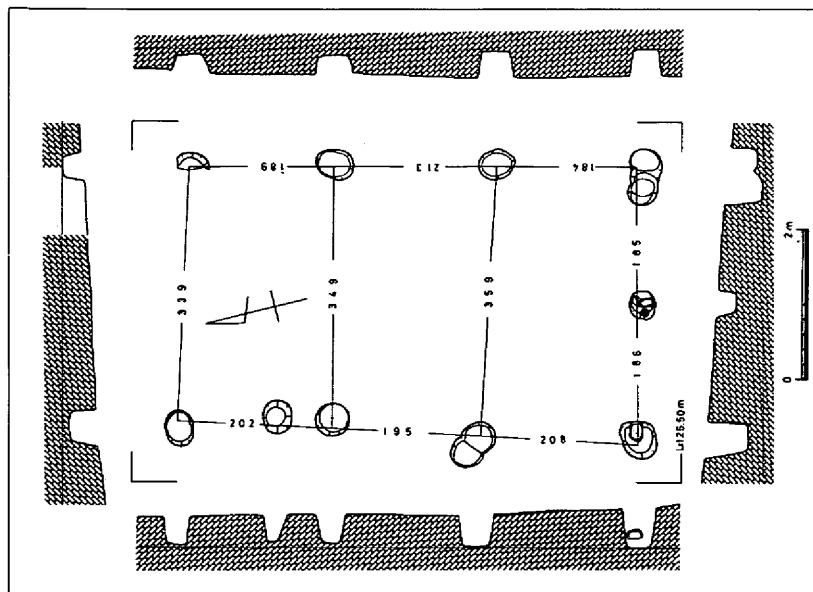
C溝区画北端部にあたり、柱穴が最も多く出土した場所である。建物構成が非常に複雑であり明確化しにくい。一応、No.48・49・79建物と呼称して調査を進め、結局No.48・49建物を同一視し、3面庇をもつNo.49建物とNo.79建物の2棟をまとめる。

No.49建物(第115図)は桁行5間、梁行1間にて棟方向をほぼ東西にもつ大型建物である。変則的ではあるが、東西を除く三面に庇、あるいは縁を併設したものである。C溝区画中最大規模ものであり、柱穴径35~40cmをはかり柱痕を残すものが多

二宮 遺 跡

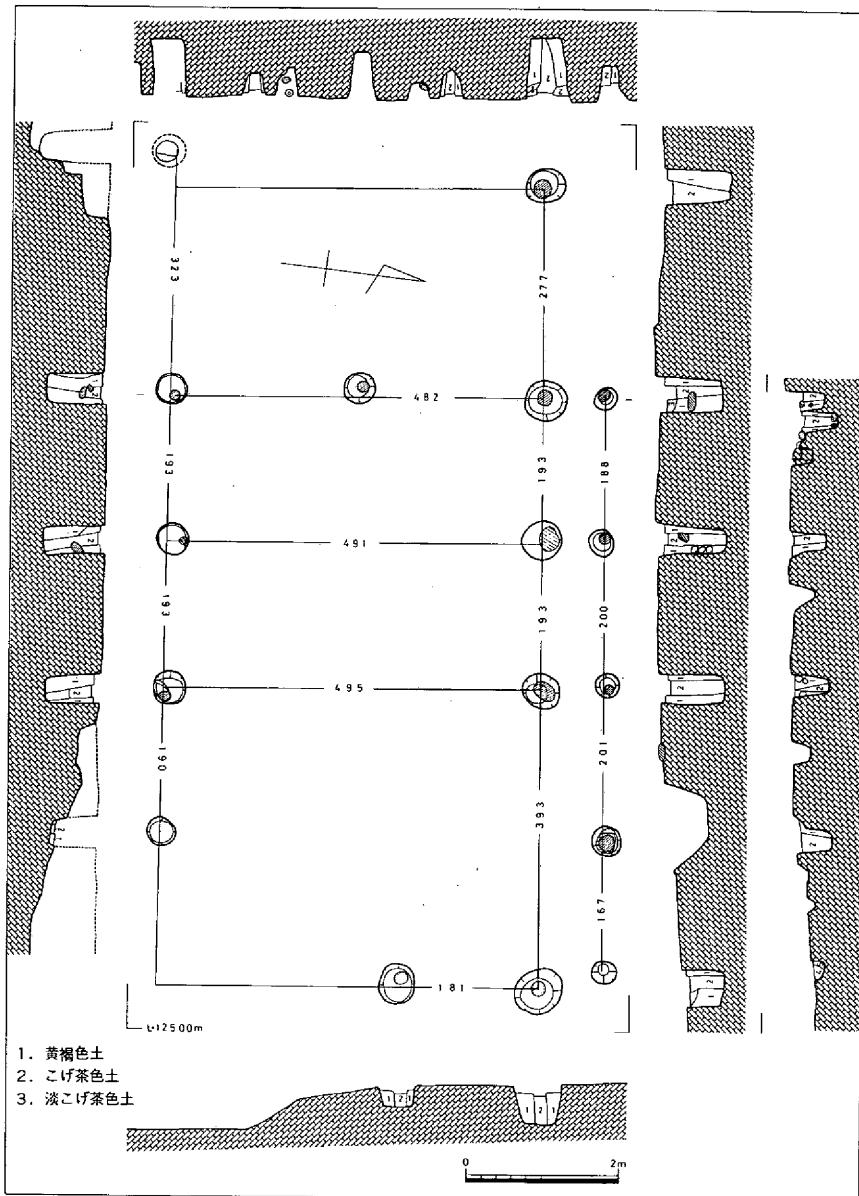


第111図 No.47建物 ($\frac{1}{100}$)



第112図 No.69建物 ($\frac{1}{100}$)

二宮遺跡



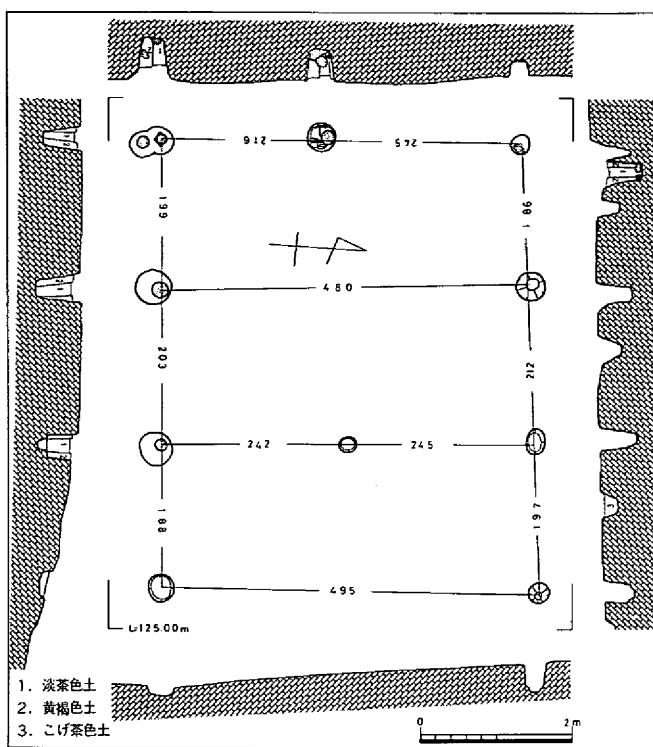
第113図 No.49建物 ($\frac{1}{100}$)

北側桁行柱穴に比較して大きく、直径6~19cmをはかる柱痕跡がみられる。柱穴の深さは14~59cmをはかり、柱穴底に台石3石が存在する。No.49建物と切り合い関係にあり、No.49建物より古いものと考えられる。

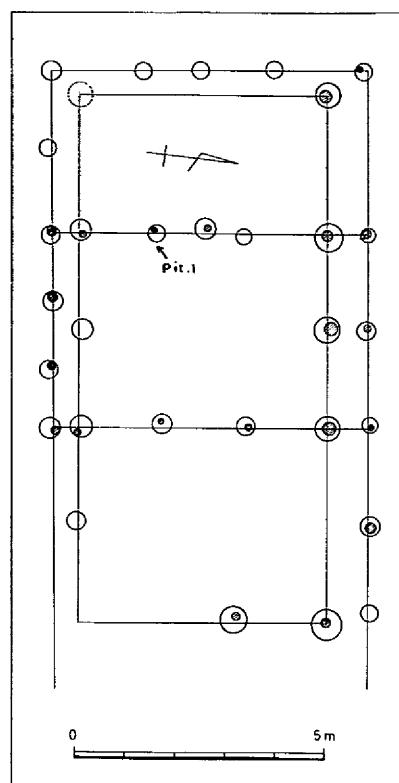
柱穴内出土遺物

C溝区画内柱穴よりの出土遺物は非常に少なく、No.46建物の半磁器小片・No.47建物の砥石・No.46建

二宮遺跡



第114図 No.79建物 ($\frac{1}{100}$)



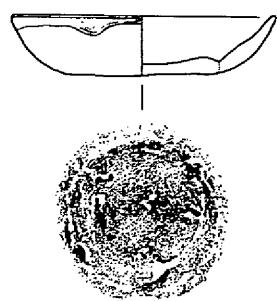
第115図 No.48・49建物 ($\frac{1}{150}$)

物プラン内柱穴 (pit 1) の土師皿 (第116図)・No.79建物染付茶碗 (第143図) の4点にかぎられる。

No. 46 建物pit 5 出土の茶碗は、柱穴掘り方中位で検出されたものである。茶碗高台部分、4 cm × 5 cmの破片である。高台外径5 cm、残存高2.5 cmをはかる半磁器の焼物である。この種の形態としては比較的小型品であり、器内外面に非常に良好な光沢がみられる。畳付部分は褐色に発色し、焼成時の土器内の接着を避ける白色小砂粒が付着している。畳付部分を除く内外面全面に約0.04 cm厚の青磁釉薬に近いものが施されており、こまかい貫入がみられる。体部下位と高台屈曲部間に吳須による円圏文が一本描かれている。胎土は良好なもので、唐津系の焼物の胎土と青磁の胎土の中間色を呈するものである。

No. 49 建物内pit 1 出土の皿は、柱穴掘り方内上位で斜位の状態で検出されたものである。

口径10.6 cm、底径約5.5 cm、器高2.4 cmをはかる完形品の土師器である。色調暗茶褐色を呈する。底部と体部をわけて製作された痕跡をとどめており、内面底部より口縁部までロクロびきのヨコナデがみられる。底部は均一した器厚ではなく、中心部分が薄くつくられており、体部は



第116図 No.48・49建物付近
柱穴出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡

厚みをもち口縁部まで内彎しながらひきあげられている。外面底は丸みをもって細筋の糸切りが施されている。口縁端部の内外面には燈明皿として利用されたと思われる油痕が巾0.7cmでみれる。

No.79建物染付茶碗もpit1と同様に柱穴掘り方の上位より検出されたものである。

口径8.5cm、残存高4.3cmをはかり、破損しているが高台付の茶碗であろう。白磁胎にて椿の花文が吳須により描かれている。まず青藍灰色にて花弁、および木葉をぼかし、こげ茶色によりそれらの輪郭を描き出し、木葉部分は暗灰色でさらに彩色が施されている。

No.51 土壙（墓）（第117図、図版45）

平面的にはNo.47建物プラン内、No.98建物東側桁行上の中間地点に位置する。

直径55cm、深さ20cmをはかり、ほぼ垂直に掘り込まれた円形土壙である。土壙内はこげ茶色を基調とする埋土がみられ、中心部分で2層が凹状になっている。約15cmを最大にして3石が土壙西側に寄り、それに上下して4個体分の土師器小皿が出土しており、そのうち2個が完形品である。これらは床面より出土したものではなく土壙内埋土中位より検出されたものである。

遺物（第118図）

口径9.15～9.3cm、底径6.3～5cm、器高1.4～1.6cmとほぼ同数値を示し、整形も同様のものである。底部・体部はわけてつくり口クロびきが行われ、器壁は全体的に均一に仕上げられている。外面

第117図 No.51 土壙 ($\frac{1}{40}$)

底部に右回りの糸切り痕跡をとどめる。口縁端部には燈明皿として使用されたスス痕跡がみられる。

これらと同形態をもつ土師器皿は荒神元B地区No.14祠の周辺で採集されている。

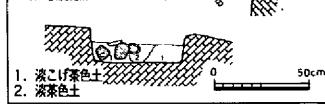
No.78 土壙（第119図、図版45—2）

No.47建物北側桁行柱穴により土壙周縁部を破損している。

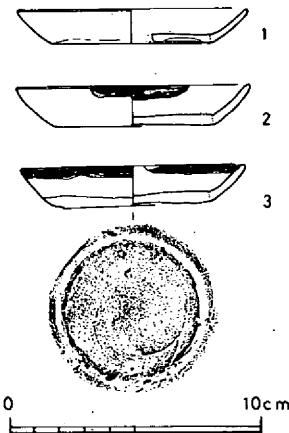
上端径約120cm、下端径90cm、深さ36cmをはかる円形土壙である。掘り方内面にそって粘土が10cm巾で下降し、底部では約7cm巾にて全面を被う状態で敷かれている。すなわち、その粘土の厚さをさしひきした直径75cm、深さ29cmの土壙が再び形成されており、それが、1・4層によって埋められている。その埋土を2本の柱穴が掘り込んでいる。土壙内よりは何ら遺物を検出することはできなかった。性明は不明であるが、No.47建物より古い時期の所産である。

No.233 土壙（第120図）

No.47建物のプラン内に検出したものであり、土壙内は地山土と見分けにくい埋土が行われていた。南北に主軸をとり、長軸185cm、短軸100cmをはかる隅丸長方形の土壙である。周辺にみられる近世墓



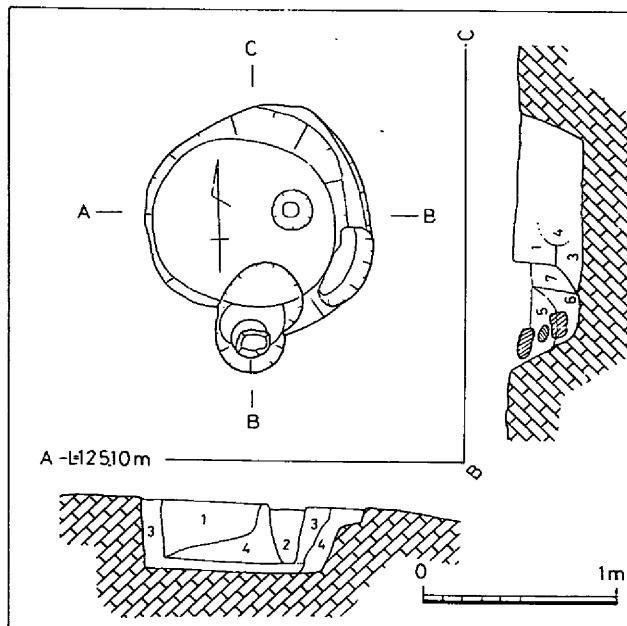
1. 淡こげ茶色土
2. 深茶色土



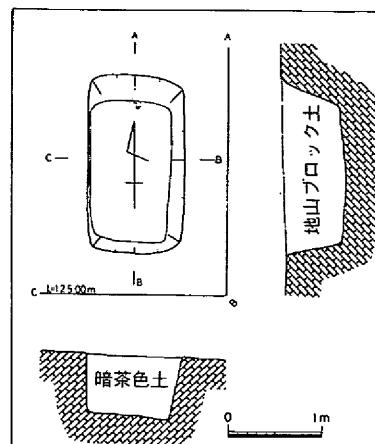
第118図 No.51 土壙出土
遺物 ($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡

とは、土色、埋土等の状態が異なるものである。



第119図 No. 78 土壙 ($\frac{1}{20}$)



第120図 No. 233 土壙 ($\frac{1}{40}$)

(4) 岡の山D地区

No.55 地下式横穴 (第121図、図版47-2)

D溝区画内の溝コーナー部分、No.64

建物梁行西側約60cmのところに位置する。

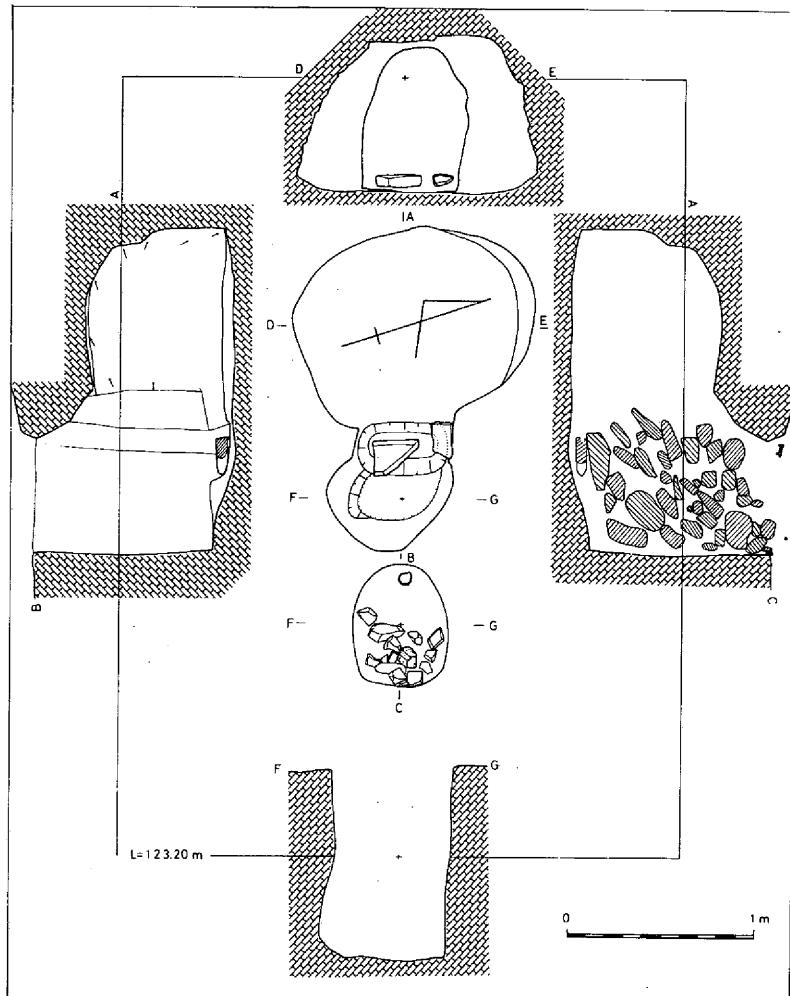
上部は上端径64cm×50cmをはかり、東西に主軸をもつ楕円形を呈するものである。そこより垂直に約100cmを掘り下げ、人間が作業可能な空間を設け、西に向かって拡張を行っている。南北130cm、東西約100cm、高さ80cmのドーム状の横穴を掘りあげている。天井部より西に向かって掘り進めた巾約1.5cmのノミ状工具の痕跡が奥壁下端までみられる。

床面プランは「T」の字状になっており、床面比高は竪穴底より横穴部分に向かう接合部が多少傾斜し、平坦部につながる。その接合部は南北に長い48cm×27cmの凹部になっており、板状の石材2個が樋石のように設置されている。上部には河原石が暗黄茶色土と混在し、掘り方上縁まで積まれ閉塞されていた。調査段階では単なる近世墓として調査にかかったが、上部東側にまとまった石は閉塞の石材であり、南側にみえなかったのは石材が横穴内に崩れ落ちた状態を呈していたためであった。しかし、横穴内は石材が多少崩れ込みをみせただけで、流土堆積も非常に少ない。遺物は横穴・竪穴の床面からは出土しておらず、閉塞石中繩目瓦一点、竪穴掘り方上縁部より著しく磨滅した高台付の碗形土器片が出土している。明代の碗の可能性を考えている。

遺物 (第122図)

1は丸瓦の破片であり、13cm×12cmが残存する。器内外面、及び破損部は著しく磨滅しており、内面の整形は不明である。外面は長辺方向に繩目が施されている。側面はヘラ削りにより2面が形成さ

二宮遺跡



第121図 No.55 地下式横穴 ($S = \frac{1}{40}$)

れている。胎土中に
は1cm弱の長石、石
英の白色砂粒を含
み、焼成は瓦質のも
のである。

2は付高台の行わ
れている碗形の土器
である。高台外径
5.38cm、内径4cm、
残存高2.6cmをはか
り、器面色調は青磁
に近く、淡乳灰色を
呈する。高台は水平
なものではなく、置
付部にまで釉薬がお
よんでいる。この釉
薬は高台内面を除い
た全面にみられるも
ので、厚さ0.05cmを
はかる。胎土は精製
されており、混りの
砂粒はみられず、淡
青灰色を呈する半磁
器に近いものと考え
られる。

No.234 土壙（第123図）

No.53溝の北側に接して存在する変形の土壙である。東西65cm、南北55cm、深さ60cmをはかり、3段の掘り方を有する。土壙内は最大で30cm×20cm、最小で15cm×15cmの河原石計7石が底部より上部までつまっており、南北の2石は中心に向かって崩れ落ちた状態をしめしている。底部は北側より南側にかけて3段を有しながら深くなっている。東西ではほぼ水平になっている。中心部分の穴に柱を立て、周囲に石材をつめた状態が考えられるが、性格は不明である。

No.54 土壙（第124図、図版47—1）

No.54土壙の存在するD地区は出土遺構の前後関係が複雑な様相を呈する場所である。とくにNo.54溝より東側とNo.52土壙南側にそれがみられる。

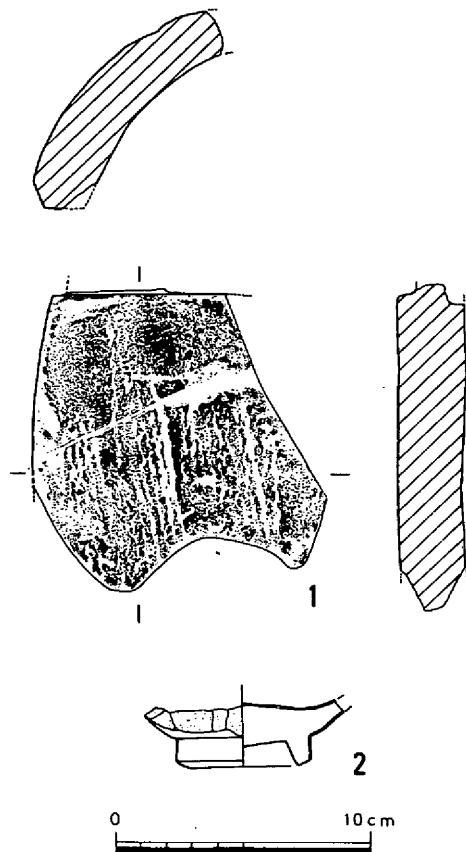
二 宮 遺 跡

基本層序は淡茶色土（耕作土）、黄褐色地山ブロック土（造成面）、淡茶色土（軟土）暗灰茶色土（造成面）、淡暗茶色土、暗褐色土の6層からなり、ほぼ水平に約100cmをはかる。その間に2回の造成と地山面を含めて3回の生活面が確認できる、いうまでもなく、現地表が畑地につかわれたのを入れると4回の生活面となる。

黄褐色地山ブロック土層は現在の電柱掘り方により切り込まれており、本土壙は暗灰茶色土上面より掘り込まれている。

No.54土壙の掘り込まれている暗灰茶色土は、厚さ約25cmをはかり、下位にみられる平坦な地山面とも約30cm掘り込んでつくられている。暗灰茶色造成土中には中世の遺物が中心に包含されており、勝田焼の壺・甕・椀・および瓦質土器片（第125図）がみられる。

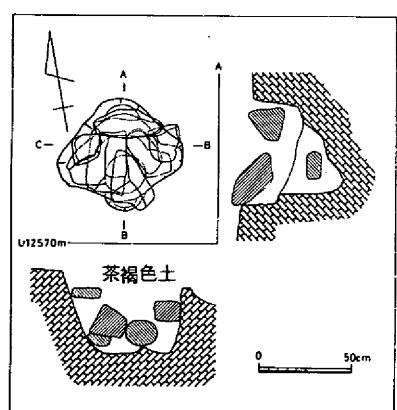
土壙は南北に主軸をもち長軸265cm、短軸95cm、深さ60cmをはかり、隅丸長方形を呈する。土壙内には底部径約45cmをはかる円形土壙が等間隔に3箇所設けられており、その間の接続部2箇所に凸部がみとめられる。形状・規模・計測値等からは計画的に同時掘開されたものと考えられ、底部もまったく同じ高さである。



第122図 No.55 地下式横穴出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

これらの土層断面は底部より上位約35cmに茶色土がみられ、その茶色土上面は北側土壙を除いて他の2土壙は凹状を呈する。ここまでは同時に埋めもどされた感がするものである。3・4・5層と6層間には炭、焼土面を含む部分が多く、とくにその現象は各土壙中心上に分布しているようである。その上部には黄褐色地山ブロック土による埋土が行われている。各土壙は北側より南に向かって随时・使用・放棄され埋められたと考えられる。最後まで使用されたと考えられる南端土壙は、6層上面に25cm×20cmを頭に3石が東に寄って検出され、須恵器片が伴出している。

No.59建物プラン内に大半が入り込むが両者の主軸方位が



第123図 No.234 土壙 ($\frac{1}{35}$)

二宮遺跡

異なるものである。

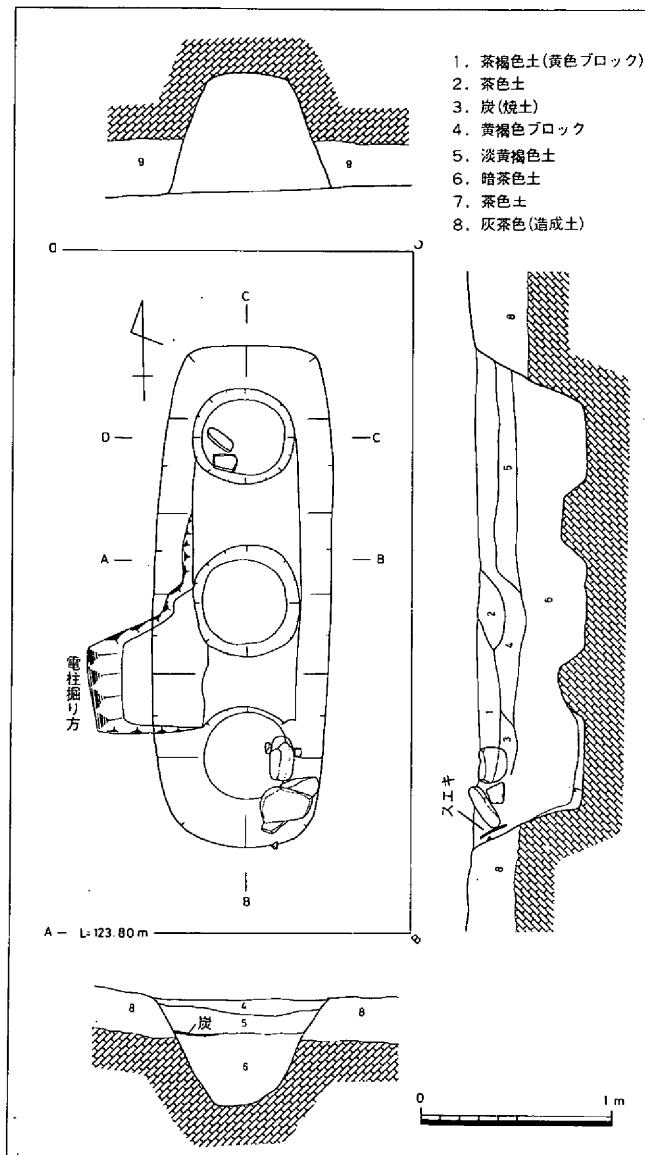
遺物(第125図)

土壙内には須恵器の甕・椀の小片が検出されただけである。ここではNo.54土壙掘り方基盤になった暗灰茶色造成土中のものをとりあげる。

1は口径15.2cm、残存高3.5cmをはかり、淡灰色を呈する勝田焼の椀である。器壁の薄いものにて、内外面はロクロびきの痕跡が顕著である。口縁端部下位1.5cmまでに重ね焼痕跡をとどめる縁黒が一巡する。

2は口径15.2cm、残存高2cmをはかり、青灰色を呈する勝田焼の椀である。口縁部外面下に深い凹線状のロクロ調整が行われており、若干前者とは異なる形態をもつものである。縁黒部分は巾が狭いが同様のものである。

3は口径27.8cm、残存高7cmをはかり、青灰色を呈する勝田焼の壺である。外面は胴部を中心に頸部より肩にうつる部分まで格子叩き目が施されていたものと思われ、格子は1cm角のこまかいものである。それに対応する内面押えの痕跡は明確でなく、搔き消しの調整が行われたと考えられる櫛状工具による縦ナデが部分的にみられる。頸部を含む上位



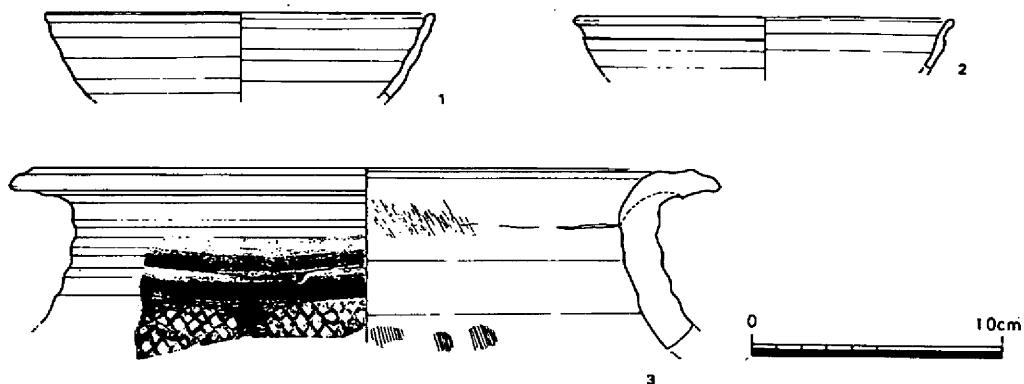
第124図 No.54 土壙 ($\frac{1}{40}$)

は、一部叩き目を消しながらロクロびきが口縁部までおよんできている。内外面は勝田焼の椀等にみられる凹凸が目立ち、とくに外面は顕著である。口縁部は丸くおさめておらず、凹状にナデを行い平坦部を作り出し、鋭い稜線を設けてそこより角度をもって下降ぎみに端部を丸くおさめている。

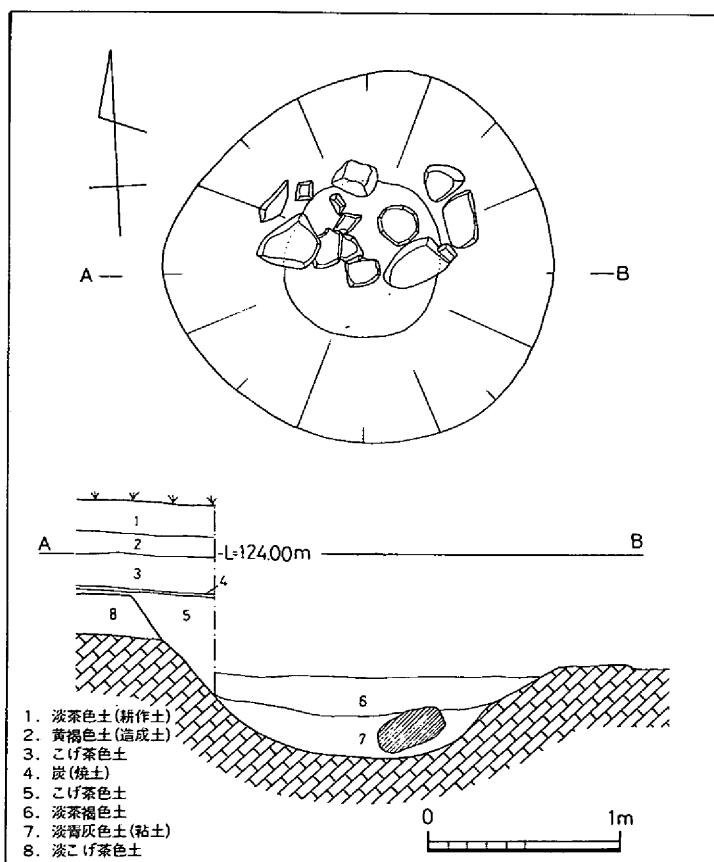
No.57 土壙(第126図、図版51-1)

No.59建物北側に位置し、直径200cm、底部85cm、深さ約85cmをはかり、岩盤に掘り込まれた円形土壙である。土壙内には人頭大の河原石が15~20個前後入っており、7層の淡青灰色粘土内におさまって

二宮遺跡



第125図 No. 54 土壌 出土遺物 ($\frac{1}{3}$)



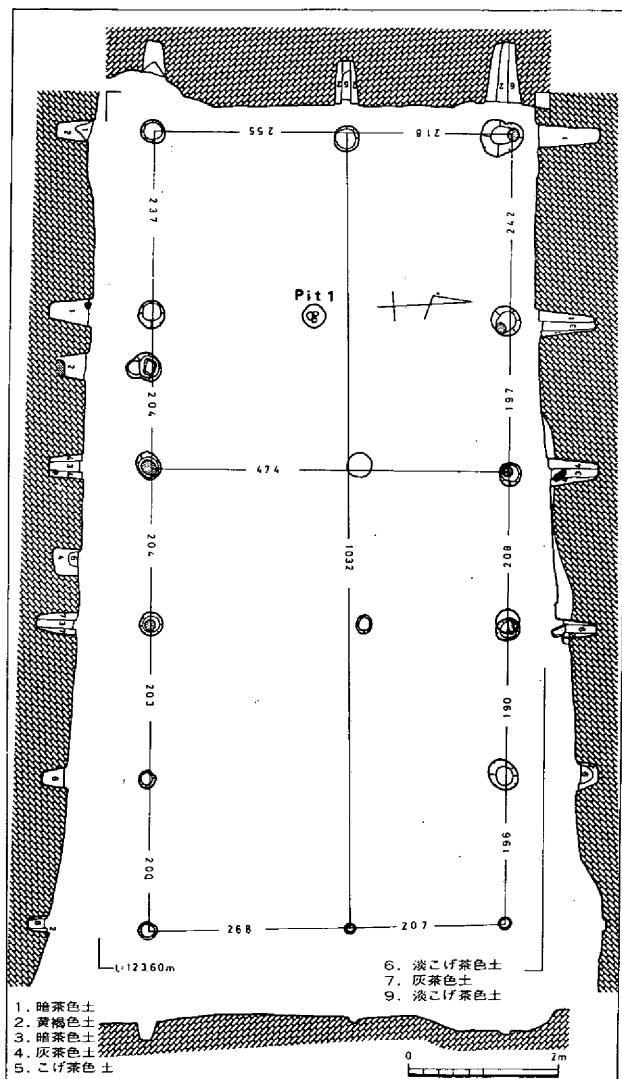
第126図 No. 57 土壌 ($\frac{1}{40}$)

いた。その上部には水平に淡茶褐色、淡茶色土がみられ、4層にあたる部分に炭・焼土が混在して出土している。この面がNo.69土壌である。そこより上部には、D地区でみられた近世陶器片等が混入した黄褐色地山土が造成されており、耕作土へと続く。土壌底より耕作土上面まで約130cmをはかる。

遺物

遺物は土壌底より須恵器片が出土している。器内外面が著しく磨滅しており、移動が考えられるが、あるいは異なる使用目的による可能性も考えられる。約8cm²の大きさで、焼成・胎土とも良好のものであり、器外面櫛状工具による荒いナデ、内面にも同工具による荒いナデ調整が施されている。

二宮遺跡



第127図 No.58建物 ($\frac{1}{100}$)

No.58 建物 (第127図)

桁行3間、梁行2間にて棟方向 N 87°—Wをとり、桁間約200cmを基調とする建物である。D・E両地区にまたがっており、北側桁行がD地区に、南側桁行がE地区に存在するものであり、E地区を画する時点で約40cmの削平を受けている。E溝区画内建物より古い時期に属するものと考えられる。これらの側柱穴は対称に配列されており、柱穴底はほぼ同じ高さである。柱痕を残すものが多い。

同一の棟方向をもつNo.53・63・64建物等と切り合い、E地区の棟方向を異なるNo.56・70建物等とも切り合い関係にあるが、土層・柱穴等による前後関係は不明である。D地区の造成土を切って、No.58建物柱穴はつくられる。

北側桁行北東端柱穴は近世土壙墓により削平を受け、辛じて柱穴底が残存している。

No.49・68・79建物等と類似する規模をもつ大型建物にて、なかでもNo.49建物とは同企画と考えられるものである。

No.63 建物 (第129図)

桁行3間、梁行2間にて棟方向をN

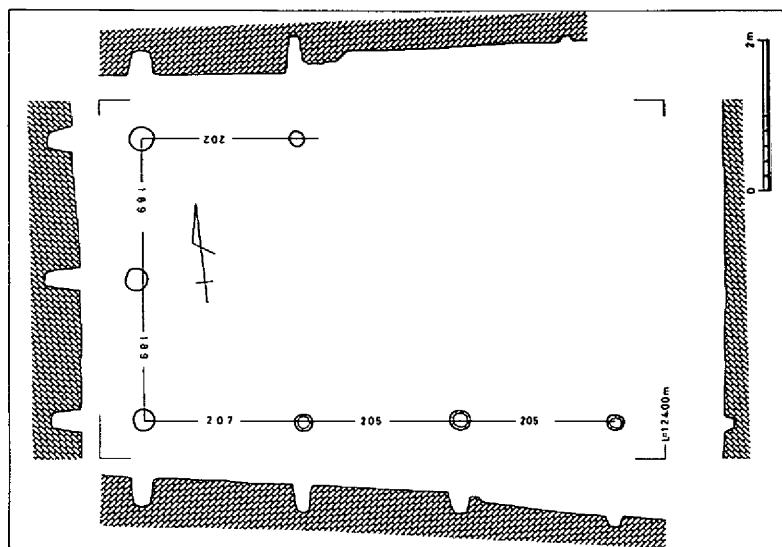
—86°—Wをとり、西側梁行が1間という変形の「ベタ柱」建物である。東側梁行は各遺構をつくる時点で削平を受けたものと考えられ、明確にはしえなかった。桁行が東に延びる可能性はある。

変形の梁行部分はD溝区画の屈曲コーナーにそって曲っており、その空間部分にNo.55地下式横穴が存在する。あたかもそのための空間のようにも考えられる。桁間は約200cmを基調とし、側柱穴は対称に配列されている。

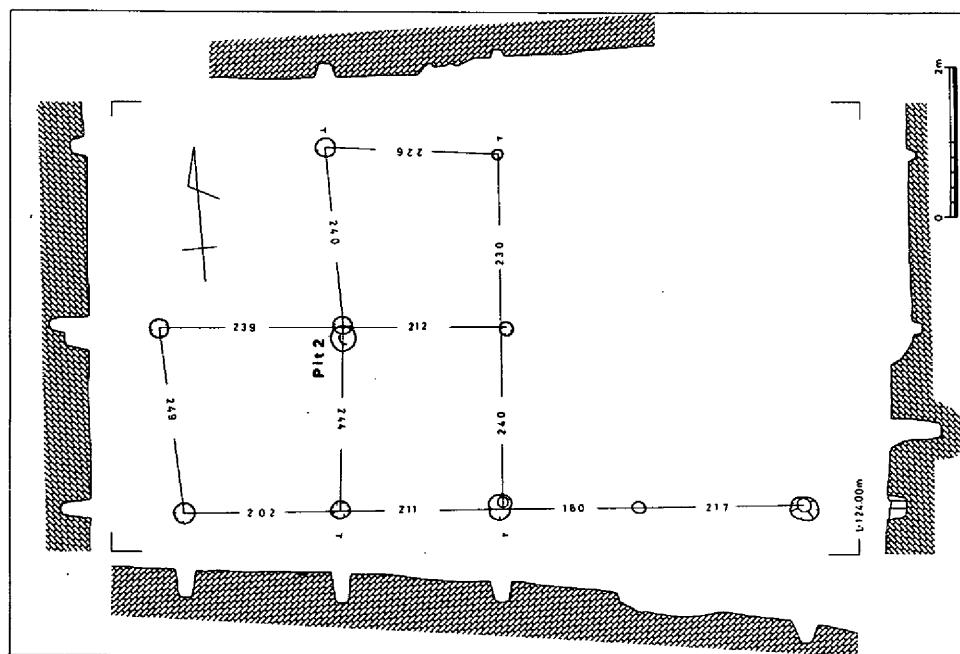
No.54土壙、No.58・59・63・64建物と切り合いになるが、やはり前後関係はあきらかではない。

遺物は直接出土していないが、棟持柱と考えられる中心筋の、西より2本目の柱を切っている柱穴内より備前焼きの鉢が出土している。

二宮遺跡

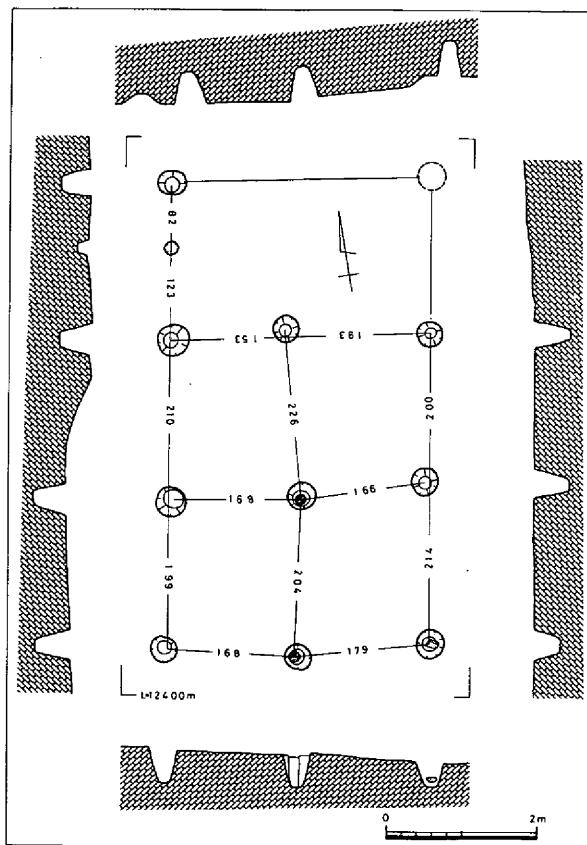


第128図 No.64建物 ($\frac{1}{100}$)



第129図 No.63建物 ($\frac{1}{100}$)

三宮遺跡



第130図 No.59 建物 ($\frac{1}{100}$)

ン内Pit 1より出土したものである。Pit 1については東側約200cmのところに位置する柱穴の規模・形態が類似しており、E溝に伴う何らかの遺構を想定することができる。Pit 2については他にまとまりそうな並びもなく、No.63建物の建替えが考えられる。

1は口径約23cm、残存高5cmをはかる
備前焼の「搗鉢」と考えられる。体部より垂直に立ち上がる口辺部は外面に3条の幅広の凹線、内面は口縁端部より約50°の角度をもって斜めに1cm位下がり、そこを変換点とし鋭い角をつくり出している。色調は内外面暗褐色を呈するが、外面口縁部は青灰色であり、口縁屈曲下位に重ね焼きの痕跡をとどめる。

No.64 建物（第128図）

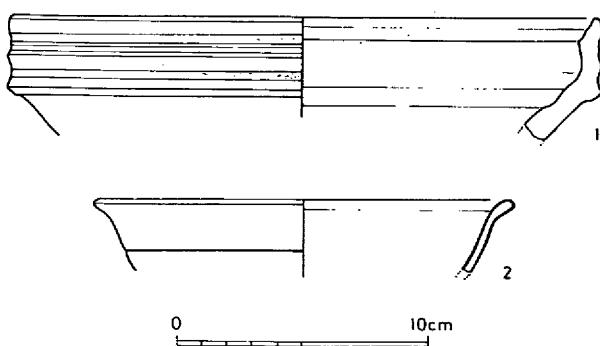
桁行2間、梁行2間にて棟方向をN—83°—Wにとる建物である。桁行北側がNa53・59建物等により削除されており、1間を残すのみである。桁柱間は約200cmを基調とし、側柱穴は対称に配列されている。Na59・63建物と切り合い関係にあるが、前後関係は不明である。Na47・59・66建物と近似する数値を示すものである。

No.59 建物（第130図、図版48—2）

桁行3間、梁行2間にて棟方向をN— 10° —Eに据る「ベタ柱」建物である。桁行柱間距離は約200cmを基調とし、側柱穴は対称に配置されている。№53溝に関連するものと考えられるが、その溝だけでも4～5本の切り合いがみられる。№57土壙と関連をもって考えられる建物である。

D地区柱穴内出土遺物（第131図）

前述したNo.63建物柱穴より新しいPit 2より1の「掻鉢」、2はNo.58建物プラ



第131図 岡の山D地区柱穴内出土遺物 (1)

二宮遺跡

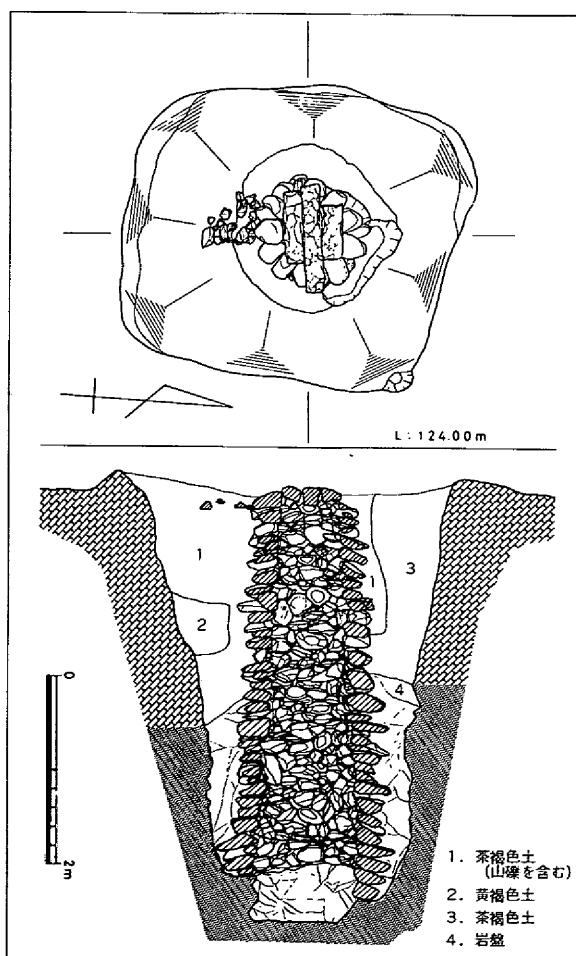
2は口径16.8cm、残存高3cmをはかる元代の青磁碗（註10）である。外面口縁端部より2cm下位に1本の沈線が一巡し、内外面に淡灰色の釉薬が0.04cm幅で施されている。胎土は青灰色を呈し、唐津系の胎土とガラス質のものとの中間を呈するようである。器内外面には貫入がみられる。（高畠）

No.50 井戸（第132図、図版50）

C地区の南側東端部に位置し、数基の近世土壙墓、さらにはD地区の方形の区画状に回っている溝、建物柱穴をも切断して作られているものである。No.50井戸の規模は上部は、東西が3.15m、南北が3.50mを測る不整隅丸方形を呈するものである。深さは、最も深い部分で4.70mを測り得た。井戸の掘り込まれている部分の地山面は南側で-2.70m、北側で-2.20mは間は比較的やわらかい土質で、以下は岩盤を掘り込み、下部においては段を有し、約1mのほど円形の凹みをつけている。深さは約50cmを測る。断面形態は、中腹部がくぼんで、上部に広がって開口し、下部にいたっては若干の

ふくらみを持っている。井戸の積石の状態は、下部が広がりを持ち、上部にいたるに従って狭ばまた状態である。いわゆる持ち送りの形態をとるものである。さらに使用されている石は、すべて河原石を用いている。この河原石については、北側用地外に存在する古墳のふき石を用いたものと思われる。なぜならば、蛇塚において葺石が用いられ、耳塚にも若干の河原石が存在するが、ほとんど消失していることによる。さらに南東側のNo.61土壙は内側（西側）に向かって「く」の字状の配石が認められ、その東側は一段高まり石の投入がみられた。このNo.61土壙は井戸に伴う遺構であるのか否かは不明。No.50の築造年代は、近世土壙墓より新しいものである。明治時代の築造と思われる。

（二宮）



第132図 No.50 井戸 (1/80)

二宮遺跡

(5) 岡の山E地区

No.56 建物 (第134図)

桁行4間、梁間2間にて棟方向をN—101°—Eにとり、桁・梁の比率が約2：1でつくられている。桁行柱間距離は約200cmを基調としているが、東梁行に向かって少しずつ幅をせばめている。梁間についても同様のことがいえ、西側梁行より東側梁行に向かってせばまっている。西側梁行柱穴を除き、すべて柱穴は重複しており台石をもつものも存在する。この傾向をもつ建物はNo.49建物にもみられ、西側桁行が1間増設されたものと考えられる。

No.70 建物 (第133図)

桁間4間、梁行2間にて棟方向をN—106°—Eにとる建物である。桁行3間は約200cmを基調としているが、西端の桁間は約255cmとおよそ40～60cmの長い間取りがなされている。東柱が西梁行、南北桁行に部分的に存在している。No.56建物と切り合い関係にあるが、前後関係は不明である。

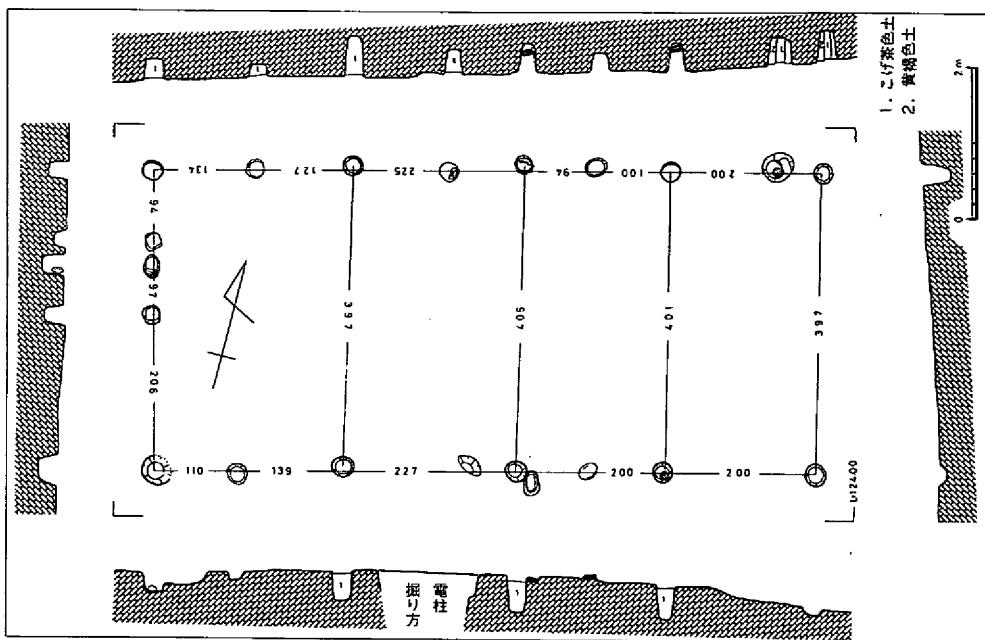
桁行の1柱間が長くなる傾向は、とくにそれも上部(比高差の高い方)が長くなるものにNo.49・57・58・70建物があげられる。

(高畠)

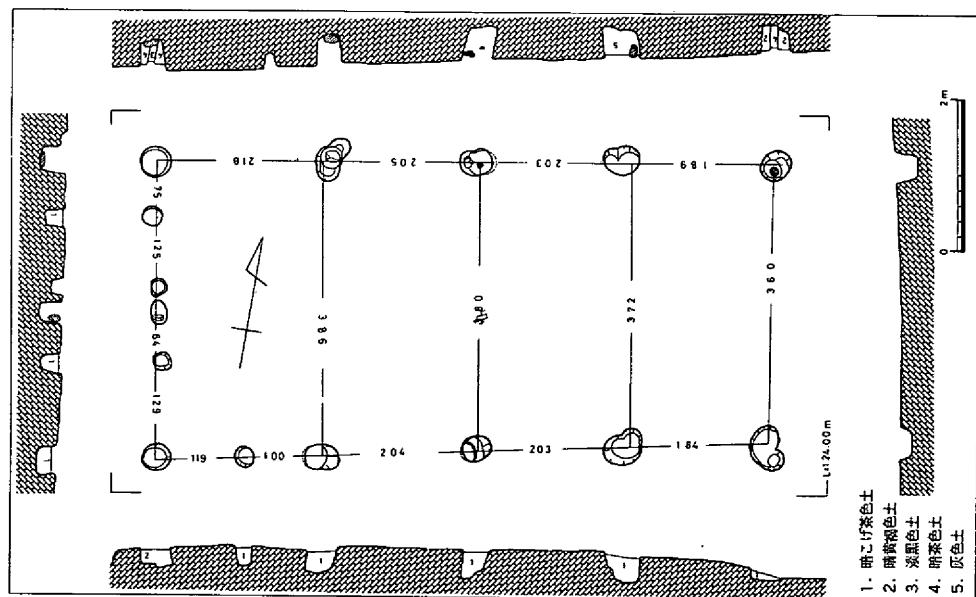
岡の山地区建物計測値一覧表 (表-7)

建物	規模	柱間寸法(cm)		桁行(cm)	梁行(cm)	面積(m ²)	方向	掘り方	柱痕径(cm)	柱穴深(cm)	備考
		桁	梁								
39	3×2	147～200	126～162	488～510	275～303	15.45	南北	円形	3～15.5	8～26	
46	5×2	53～222	86～220	916～951	286～387	36.80	東西	円形	8～15	17～61	台石?
47	3×2	88～208	90～107	586～597	394～399	23.82	東西	円形	—	4～42	台石2
49	5×1	190～393	181～495	899～1056	181～495	52.27	東西	円形	5～20	10～93	台石2
56	4×2	100～218	64～386	810～815	386～393	32.0295	東西	円形	9～10	16～45	台石3
58	5×2	190～242	207～268	1033～1048	473～475	49.78	東西	円形	6～15	5～84	東柱 台石1
59	3×2	82～214	153～193	414～614	346～347	21.31	南北	円形	9～13.5	13～49	
63	4×2	180～226	230～249	226～810	249～470	38.47	東西	円形	9.5～10	11～52	
64	3×2	202～207	189～189	202～617	378～378	23.32	東西	円形	9～135	8～49	
66	2×2	150～184	120～270	331～334	265～270	9.02	東西	円形			
68	5×2	195～260	232～471	1116～1117	471～472	52.72	南北	円形	14～15	19～64	
69	3×2	184～213	185～359	586～605	339～371	22.45	南北	円形	—	24.5～57	
70	4×2	94～227	94～405	876～880	397～405	35.64	東西	円形	8.5～12	10～54	台石1
79	3×2	186～212	216～495	590～595	461～495	29.45	東西	円形	6～19	14～59	台石3

二 宮 遺 跡



第133図 No.70 建物 ($\frac{1}{100}$)



第134図 No.56 建物 ($\frac{1}{100}$)

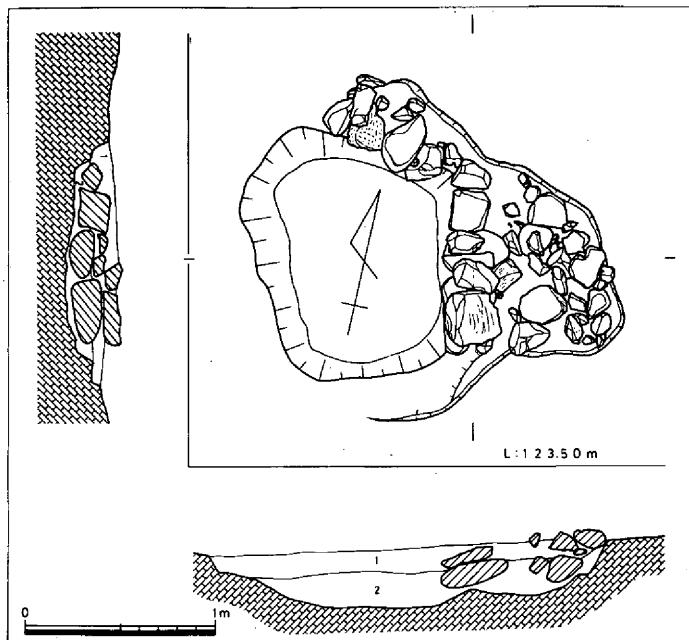
二宮遺跡

No.61 土壙 (第135図、

図版51—2)

このNo.61土壙はNo.50井戸の南東側に位置しているもので、2段の掘り方で相手とも不整形を呈しているものである。内側の土壙は方形に近い形態で、いずれも残存する深さは東側で約28cm、西側で約30cmを測り、上部構造をかなり削平によって削り取られているものと思われる土壙である。またこの土壙においては、西側の土壙を囲むように「く」の字状に河原石、小石を用いて組み上げられている。

しかし、南側と西側は消失



第135図 No.61 土壙 ($\frac{1}{20}$)

している。これは削平時において取り除かれたものと思われる。さらに東側に突出している部分には山石・河原石の入り混ざって投入された状態である。よってこの土壙は同時に掘られたものではないようと思える。また土壙底部においては相手とも暗灰色の砂層が認められた。このように方形を意識する形で石組みが行われていることは井戸を意識しているものと思われる。しかし、No.50井戸に関連するものとは思われず、No.50井戸に比べて古いものではないかと思う土壙である。

No.61土壙の埋土中において陶磁器並びに砥石等の遺物の出土がみられた。陶磁器の完形品は一点も認められず、すべてが破片、または細片である。砥石はほぼ7cm四方の立方体のものであった。しかしこの砥石にしても、最初は長方体の形をしていたものが破損したものであろう。この砥石は6面のうち1面が使用されていないのみで、他は何らか使用されている面がある。以上の遺物の以外にNo.61土壙の用途を知る遺物の出土は認められなかった。

(二宮)

3. 近世土墳墓について

ここでとりあげる土墳墓は岡の峠B・C・D・E地区出土の総数119基のものである。これらその他にも埋葬の重複、および耕作等により、まったく掘り方の消失してしまったものも存在した可能性が充分に考えられる。

しかし、このように数多くの土墳墓が存在したにもかかわらず、この地域の老人の話等には墓地としての記憶は存在していなかった。

また、用地買収時点での台帳地目には畠地と記載されており、一応、現・近代の墓ではなくそれ以前のものと推定される。現在の墓は岡の峠A・B間に存在する細道を耳塚西側にそって進めば蛇塚・胴塚間の西側にみることができる。

これらの土墳墓はB地区尾根筋に点在し、東端では切り合い関係が著しく、全体の7割が約20m×5mの範囲内に重なり合って出土し、一部寄せ墓の状態を呈している。C地区平坦面には比較的大型のものを混ぜて20基が点在し、D・E地区でも同様の傾向を示し、7基ずつが存在する。

まず、これらを形態別にみてゆくと、no4・49等の円形土墳、no5・50等の隅丸長方形土墳（小判形）、no43・66等の隅丸方形の三つに大別することができる。大小さまざまであり、大きいもので一边200cm、小さいもので一边40cm前後なものまであり、深いものはno4等のように90cmからあるものも存在する。土墳内にはno21・24・45・49のように数多くの河原石を埋土がわりに入れるものから、数個のもの、埋土だけによるもの等が存在する。しかし、それらが個々にまとまりをみせるとか、変化を有する特徴はみいだせないようである。それらの中でno41土墳墓のように石材に混在して埴輪小片がみられるものもある。このような事実は、これら近世墓に被せた石材が耳塚等の葺石を除去し、新たに使用目的を変え、近世墓に転用された可能性が考えられる。

これらの土墳墓内にみられる内部施設は木棺を中心になっていたと考えられるが、確実に痕跡をもつ土墳が少ない。しかし、なかにはno45・49・51等のように外周径約100cm、高さ50cmをはかる木棺痕跡の円形プランが存在しており、座棺による埋葬をものがたるものも存在する。

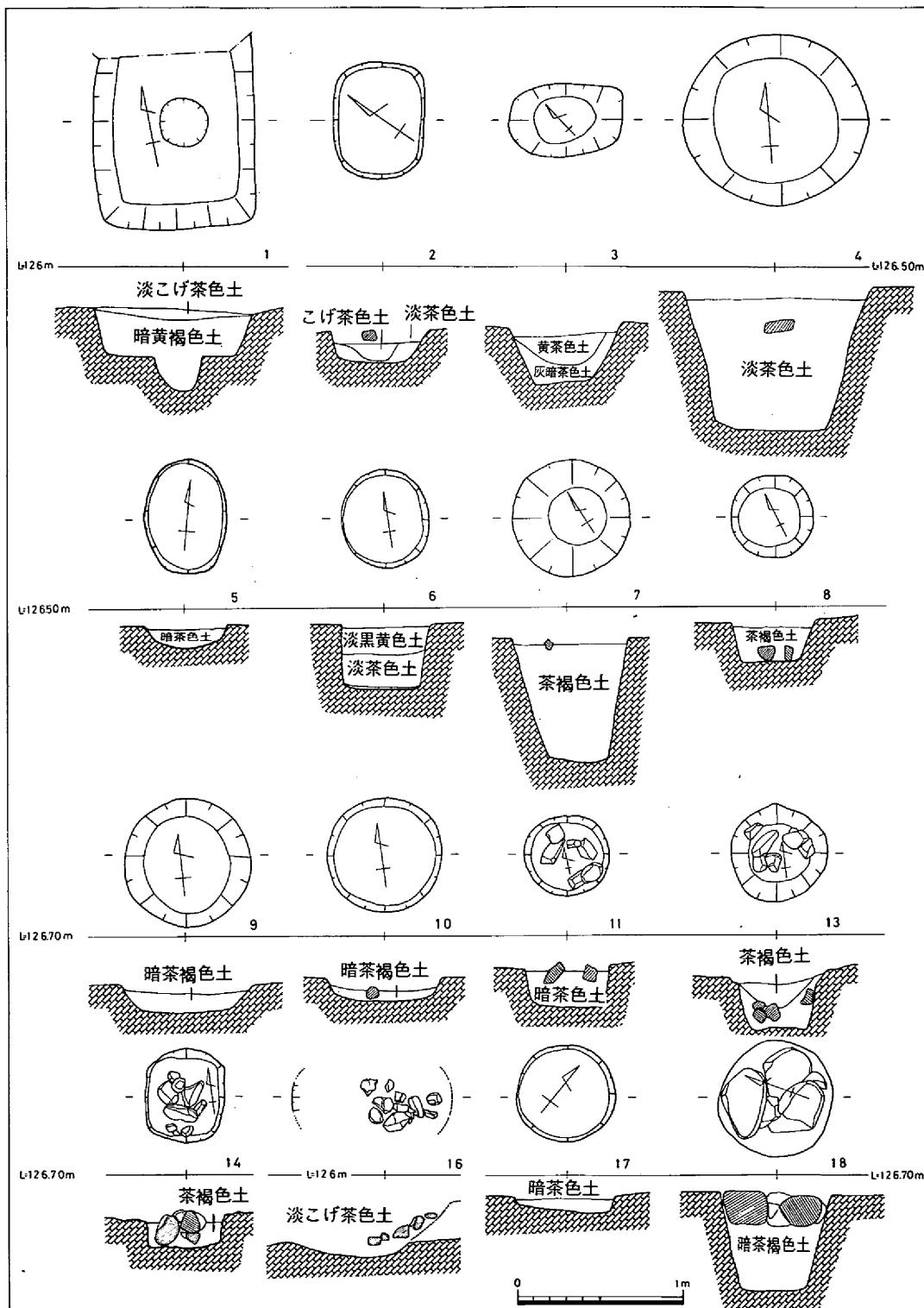
これらに伴う遺物は比較的多くみられ、表土剥ぎの時点でも多く採集している。しかし、土墳底に埋納したものは意外と少なく、no4の寛永通宝4枚、no20の輪花皿、no25の皿、no74の茶碗等と数えるほどしかなく、ほとんどが埋葬後にその上部で割られ放棄されたものが多いようである。それらは、no43、47、70等の上面でとくに多くみられた。他に各所に破片で散逸しており、no80出土の唐津焼の鉢等はNo50井戸内、およびD地区の黄褐色地山造成土中より出土したものが接合可能となった例もある。このような接合例はno41・no47・no70・B地区東端寄せ墓等にも存在した。

遺物（第143—145図、図版125—127）

遺物は土器が中心であり、伊万里・唐津系の焼物が多数出土し、他に備前焼・清水焼・美濃焼・明の青花・平瓦・丸瓦・青磁・鉄器・砥石等が出土している。古銭は背文字に「文」のみられる寛永通宝3枚、背文字のない寛永通宝1枚がno4より出土している。人骨小片がno19土墳底より出土している。

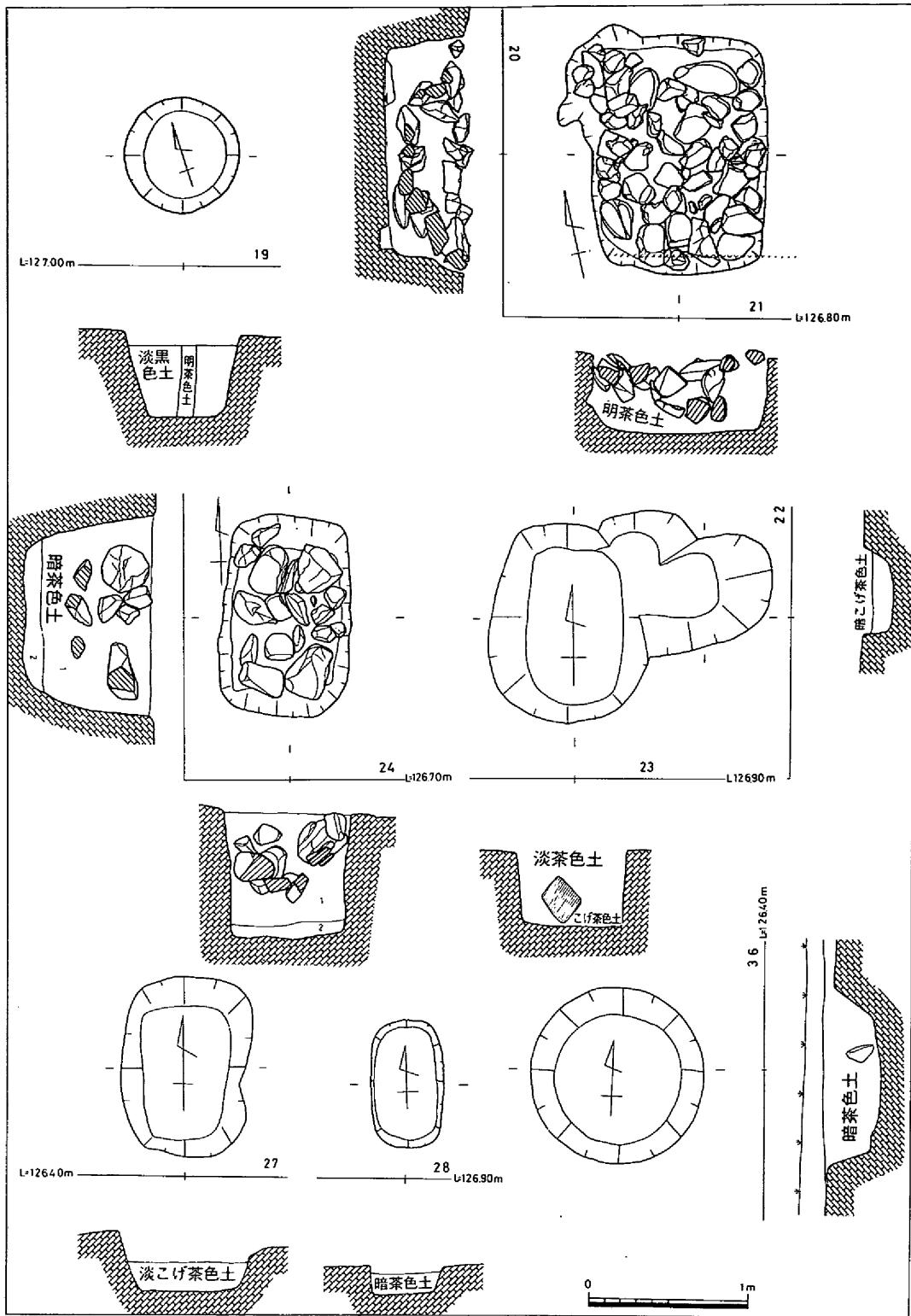
遺物を伴う土墳墓はB地区東端、C地区中央、E地区等に計30基が存在する。

二宮遺跡



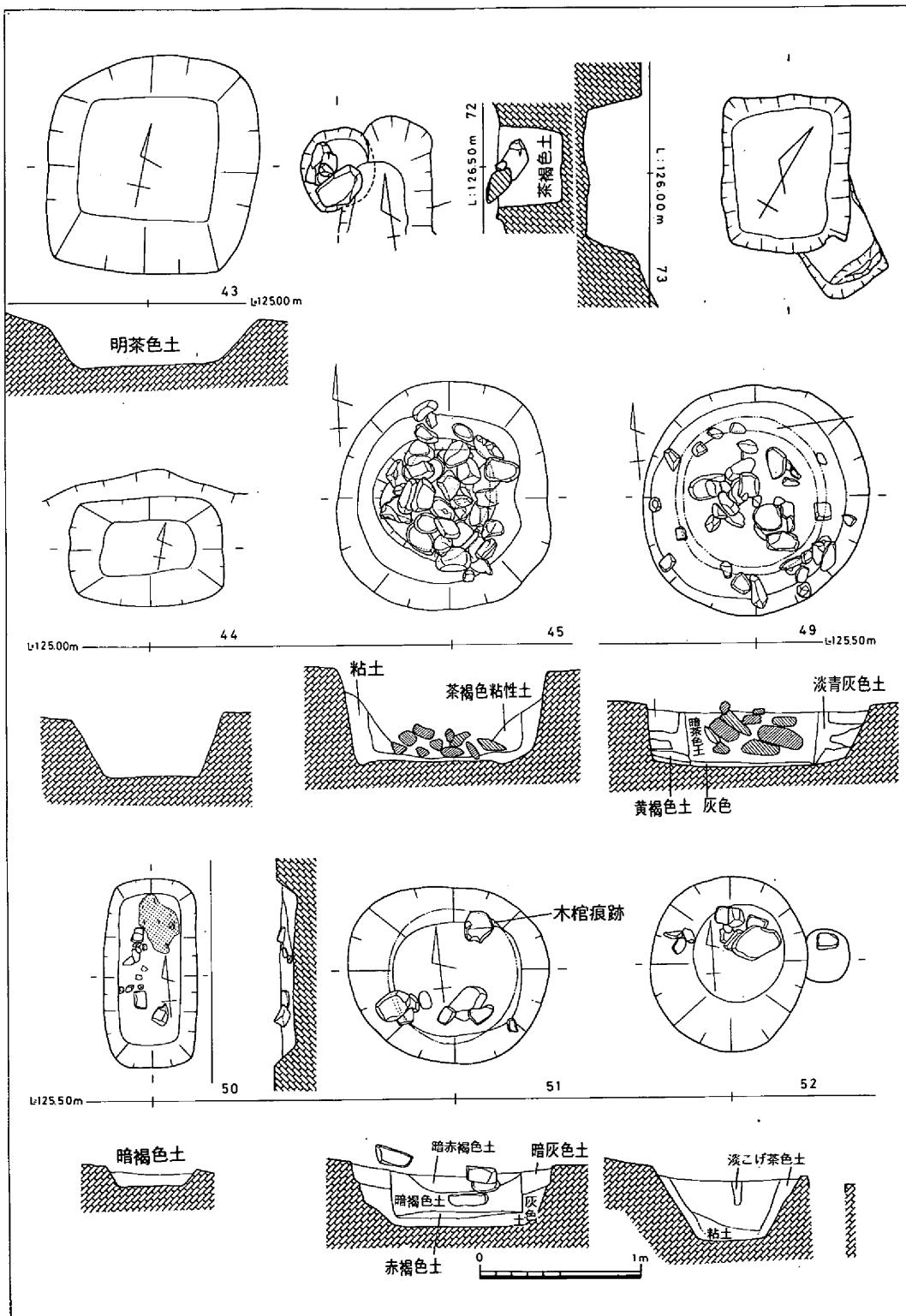
第136図 B地区近世土壙墓（1～18）(1/40)

二官遺跡



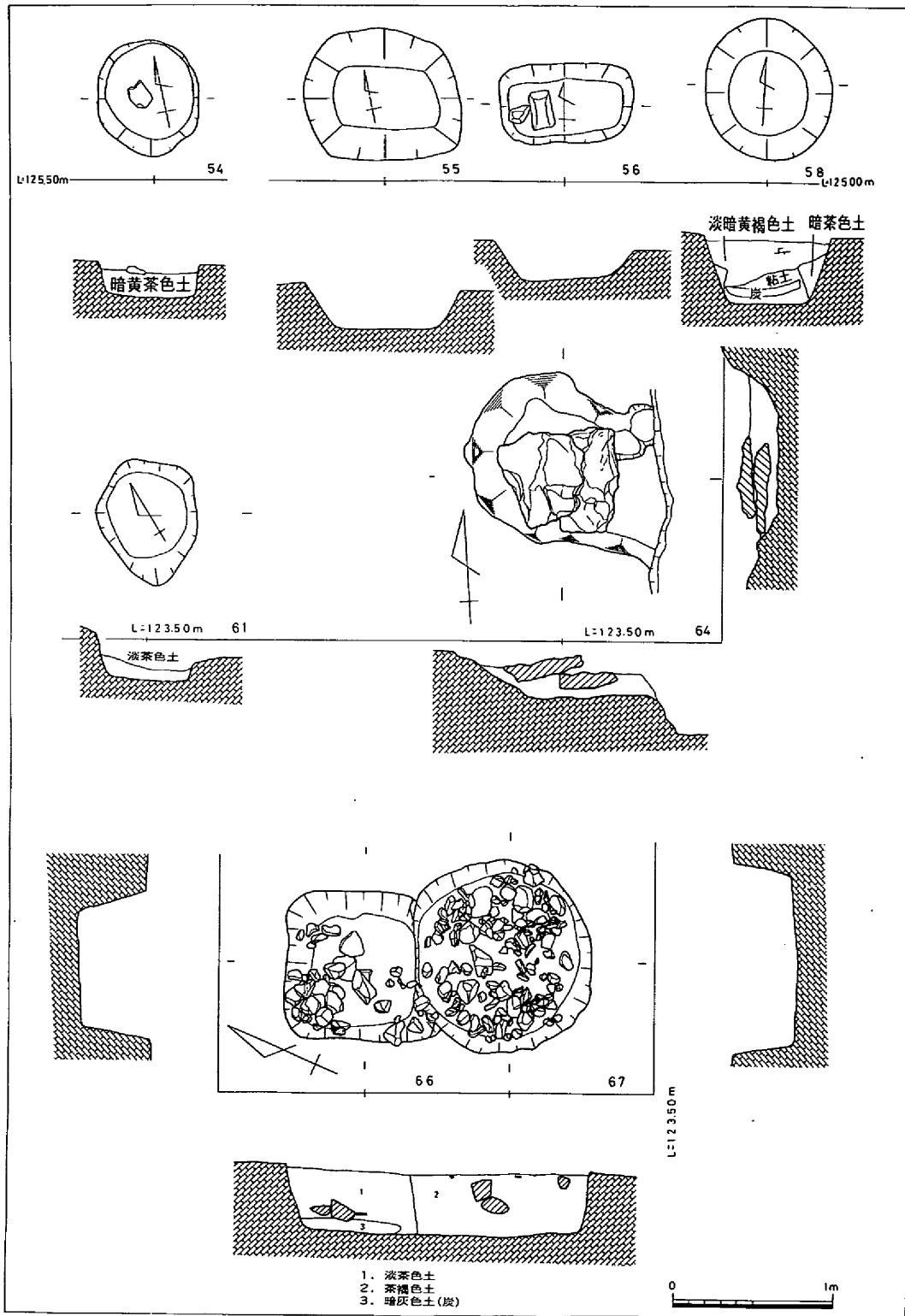
第137図 B地区近世土壤墓 (19~36) (40)

二宮遺跡



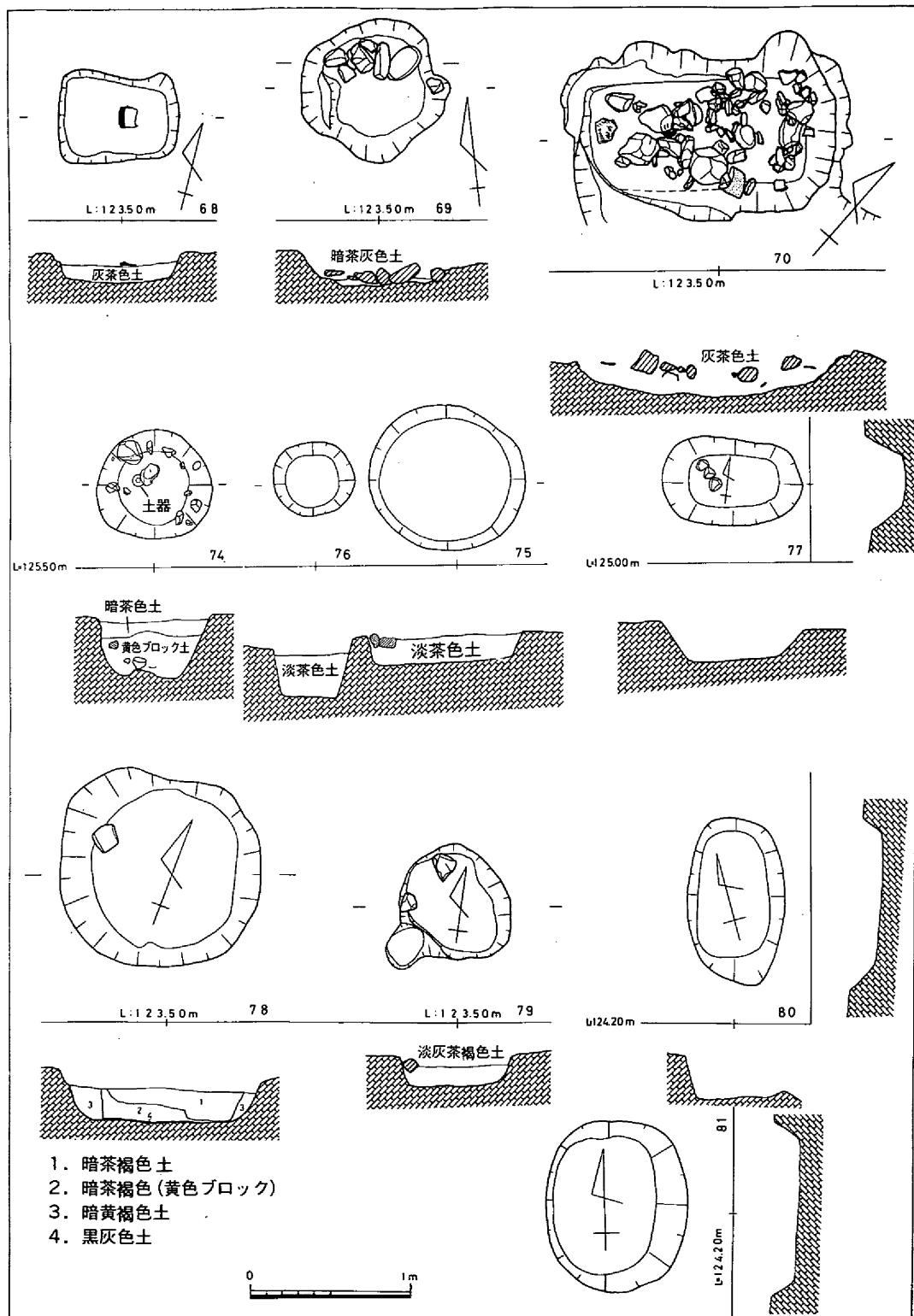
第138図 B・C地区近世土壤墓 (43~52) ($\frac{1}{40}$)

二宮遺跡



第139図 C・E地区近世土壤墓 (54~67) ($\frac{1}{40}$)

二宮遺跡



第140図 D・E 地区近世土壤墓 (68~81) ($\frac{1}{20}$)

二宮遺跡

近世土壙墓一覧（表一8）

番号	地区	規 模 (cm)	形	遺 物	石	備 考
1	B	108×100×50	長方形	—	△	中央に小土壙
2	B	72×56×20	隅丸長方形	—	△	—
3	B	46×70×36	〃	—	△	埋土は粘性の硬土、基?
4	B	106×112×86	円 形	寛永通宝(4)	△	規模の大きいものである
5	B	70×51×14	隅丸長方形	—	△	—
6	B	60×54×40	円 形	—	△	底部に有機質痕跡
7	B	72×72×74	〃	—	△	—
8	B	50×50×25	〃	—	△	—
9	B	80×78×18	〃	—	△	—
10	B	70×71×15	〃	—	△	—
11	B	49×53×24	〃	—	○	—
12	B	—	—	—	—	欠 番
13	B	60×59×32	〃	—	○	—
14	B	58×48×18	隅丸長方形	—	○	—
15	B	—	—	—	—	—
16	B	99× ×34		備前焼擂鉢	○	—
17	B	60×60×8	円 形		△	—
18	B	71×70×60	〃		○	大型の石材利用
19	B	72×71×52	〃	人骨片	△	—
20	B	108×150×50	隅丸長方形		○	—
21	B	150×109×72	〃	李朝輪花碗	○	—
22	B	74×68×18	〃		△	—
23	B	123×92×97	〃		△	—
24	B	125×79×80	〃		○	—
25	B	79×125×79	〃	平瓦片、唐津焼	○	—
26	B	55×(30+2)×-				破壊
27	B	111×77×32	〃		△	—
28	B	80×45×17	〃		△	—
36	B	108×108×30	円 形		△	—
37	B	110×85× —	隅丸長方形	丸瓦・伊万里焼・備前焼(壺)		—
38	B	160×80× —	隅丸長方形	唐津焼片・平瓦・備前焼		—
41	B	—	—	平瓦(多い)備前焼(鉢)勝田焼(椀) 伊万里焼、鉄サイ、カラツ、青磁		よせ墓
43	B	137×130×26	隅丸長方形	唐津焼・半磁器	△	—
44	B	68×95×37	隅丸長方形		△	—
45	C	141×130×56	円 形	伊万里焼	○	座棺痕跡をとどめる、
46	C	200×160× —	隅丸長方形			—
47	C	120×120× —	円 形	伊万里焼、鉄錆、網目、京焼碗か		—
48	C	120×120× —	円 形	伊万里、唐津、白磁片(新しい)		no47と切り合う
49	C	143×138×80	円 形	瓦	○	木棺痕跡

。規模の数字は縦、横、深さの順である。

。○印は石の多く入っているのをあらわし、△は2~3石を示す。

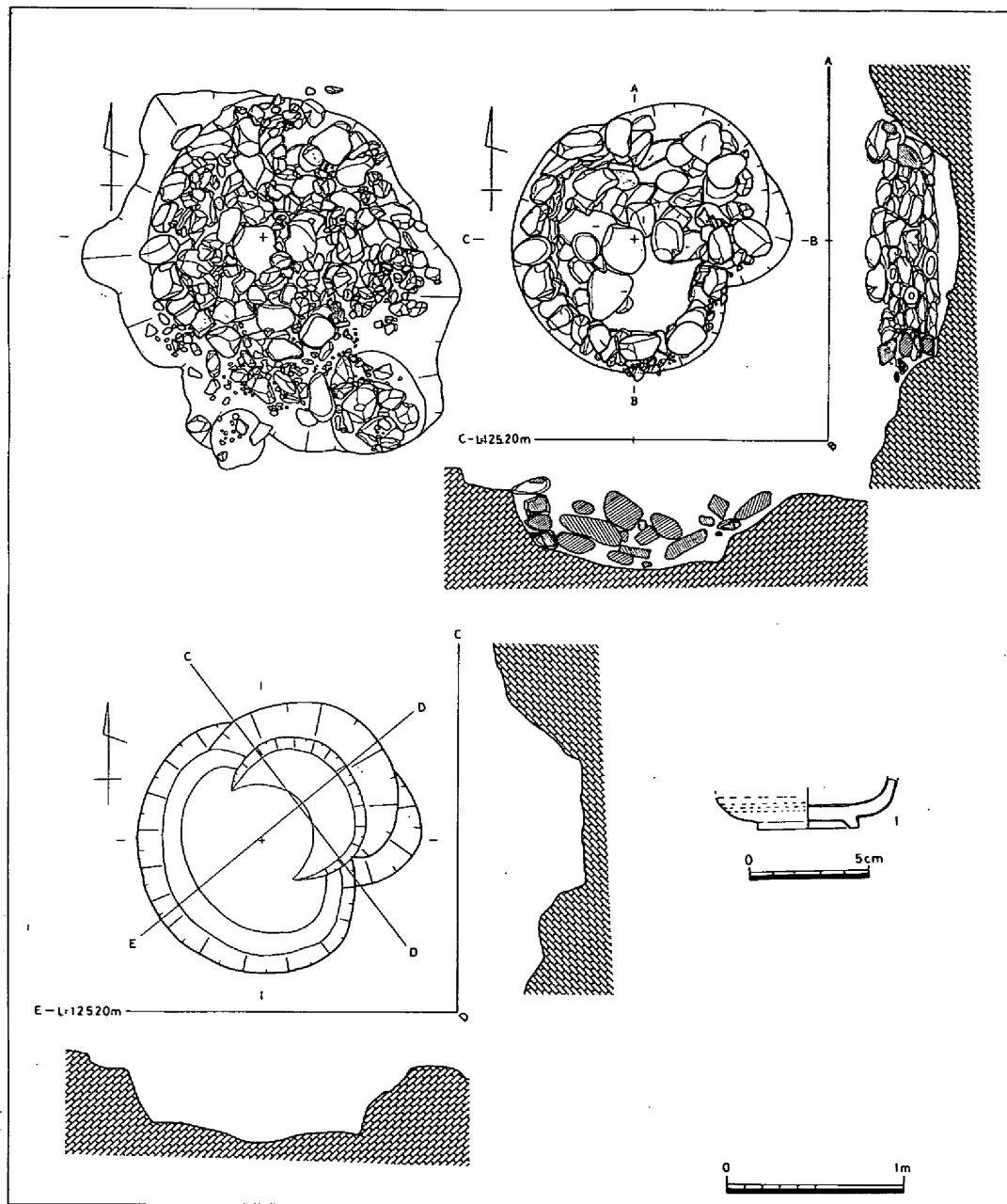
二宮遺跡

番号	地区	規模(cm)	形	遺物	石	備考
50	C	116×58×12	隅丸長方形	京焼、炭	○	
51	C	108×125×40	円形	丸瓦	○	木棺痕跡
52	C	108×122×42	"		○	墓標痕
53	C	146×120×45	長円形	唐津、備前焼、丸瓦、美濃焼	○	石組がみられ墓と切り合い
54	C	72×62×20	円形		△	
55	C	82×95×26	隅丸長方形		△	
56	C	50×82×20	"		○	
58	C	87×78×42	円形		△	
60	C	140×110×	隅丸長方形	備前焼、平瓦	—	Nº59と切り合い
61	D	76×62×22	円形	砥石	△	
62	D	—	—		—	—
64	E	116×105×25	円形		○	板状石材利用
66	E	92×80×38	隅丸長方形	唐津焼	—	
67	E	120×120×40	円形	備前焼、明代、青花皿	○	
68	E	55×75×18	長方形	備前焼	△	
69	E	90×92×18	円形	丸瓦	○	
70	D	100×170×25	隅丸長方形	唐津焼、美濃焼	○	
71	D	200×130×			—	
72	B	80×64×40			○	
73	B	76×99×34			△	
74	C	68×71×36	円形	酒杯	○	
75	C	90×97×19	"		△	
76	C	46×50×34	"		△	
77	C	86×54×22	隅丸長方形		○	
78	E	116×124×30	円形	伊万里焼	△	
79	E	71×69×20	"		○	
80	D	101×59×26	隅丸長方形	伊万里、備前焼、青磁	△	
81	D	87×105×16	円形	瓦	△	
101	B	40×40×—		平瓦、炭、不明鉄器	—	
108	B	130×90×—		唐津no47接着	—	
111	B	180×—		伊万里焼	—	

・規模の数字は縦・横・深さの順である

・○印は石の多く入っているのをあらわし、△は2~3石を示す

二宮遺跡



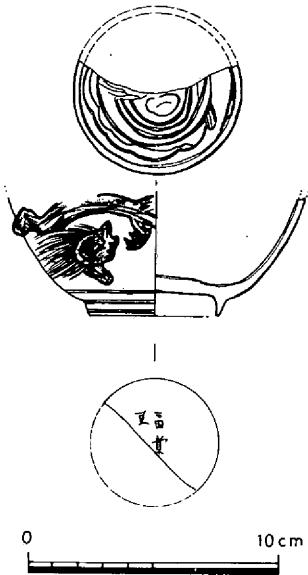
第141図 No.53 土壙 ($\frac{1}{40}$)

No.53 土壙 (第141図)

No.46建物北側平行線上に位置し、2基の土壙が切り合い関係にあると考えられるものである。2基の上面200cm×200cmの範囲に河原石が集中しており、それらの石材に混在して近世陶磁器片が散布し

二 宮 遺 跡

ている。



第142図 岡の此D地区造成土内
出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

よく観察すると約15～20cmの河原石が環状に巡り、北東隅にて石列が乱れ、それが連結していないのが確認できる。周辺に分布する小石を除去すると、環状に巡る石垣と環状内土壙に乱石積みの部分があらわれる。乱石積みの石材は南東隅空間に向かい全ての石が傾斜しており、中心部分で凹状になっている。環状に巡る石垣は、土壙底周縁に石の幅約15cmの平坦部を設け、4～5段の石積がおこなわれている。すべての石材を除去後に2土壙の掘り方があらわれる。しかし、前後関係は明確につかめなかったが、石列・遺物等の状況から、近世墓と考えられる北東部土壙が古く、その後に石垣をもつ土壙がつくられたと考えられる。

遺物は土壙内には存在せず、集石上面に散布している。唐津焼の鉢、美濃焼の茶碗等の小片が出土している。

近世墓関連遺物（第143図—145図、図版125～127）

伊万里系と考えられる磁器が最も多く、茶碗・皿・仏具の類が出土している。器内外面に呉須絵が描かれており、草花文・山水文・網目文様等がみられる。見込中央に五弁花文（第143図）、no47—4（第144図）は高台内面に「宣明年製」の紀年銘をものもの等がある。

no80・70土壙中より唐津焼の鉢（第145図1～4）、no25、C地区では完形に近い皿が2点出土している。

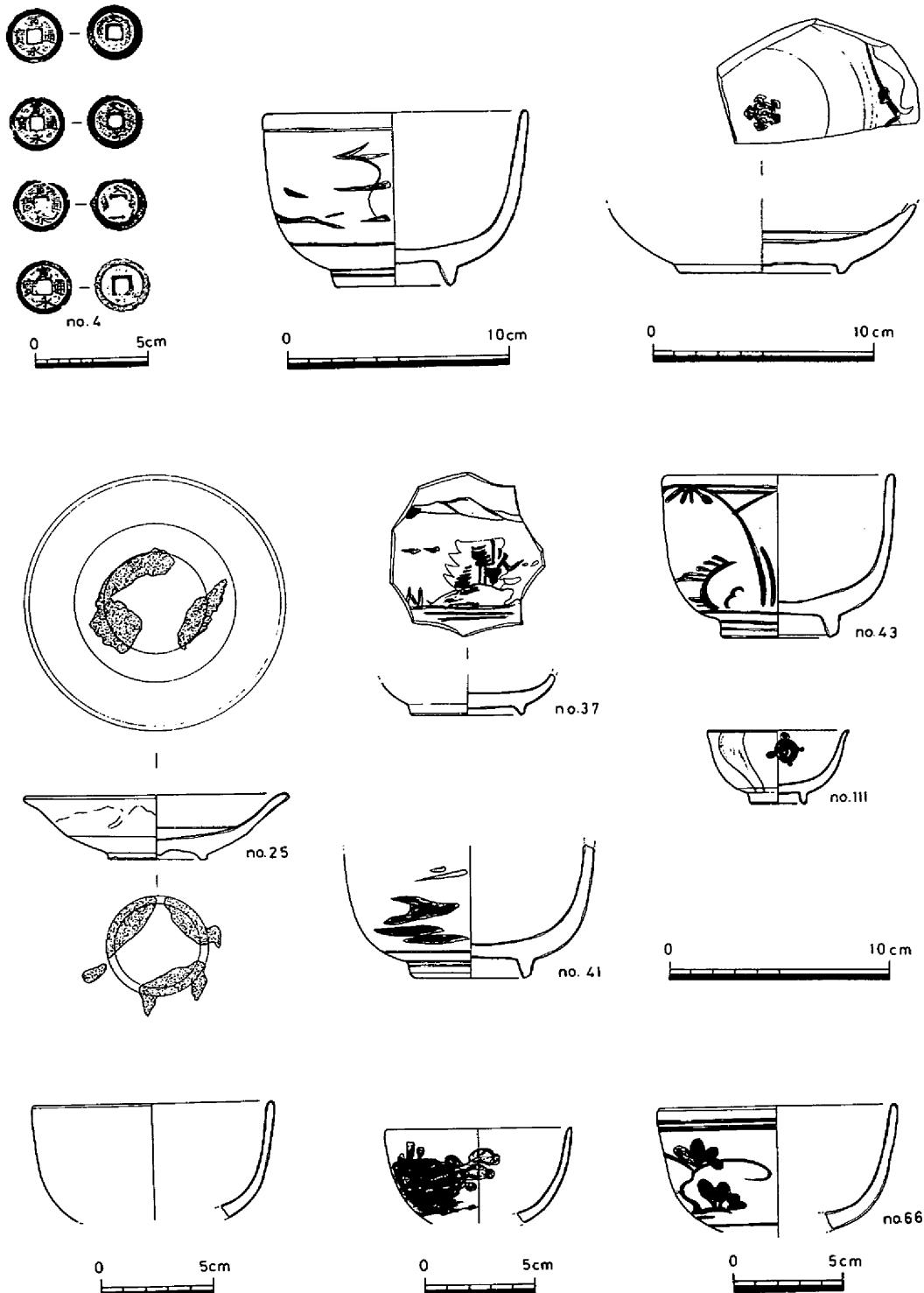
見込部分に3箇所の砂の目跡がみられ、同様の痕跡が高台畠付に3箇所みられる。釉薬は「ズブがけ」の形状を呈しており、体部下半は無釉である。見込には酸化鉄による3箇所の絵付が施されている。無釉部分の色調は明褐色を呈するものである。

次に磁器と陶器の中間胎土を示すものにno41・no70—1等のような形態をもつ茶碗が存在する。これらは木原窯（註11）のものと考えられるものであり、簡略化された草花文様がぼかしの呉須によって描かれている。全面に貫入のみられるものである。

備前焼は口縁部が垂直に立上がり2～3条の凹線文が施され、御し目には細筋が全面に描かれるものである。焼成・胎土とも良好であり、使用痕が著しい。

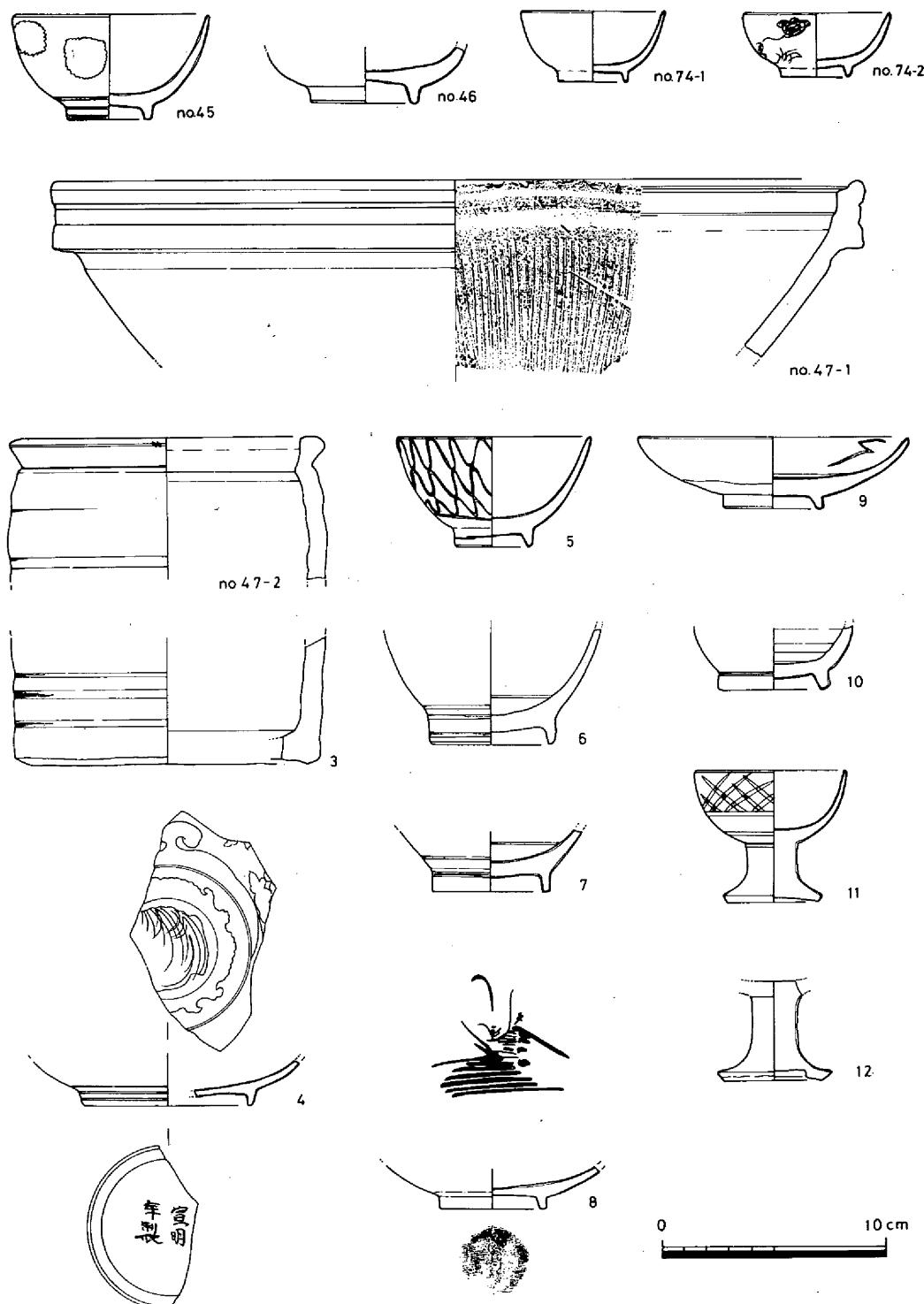
その他に美濃焼（第114図）、高台内面に草書体による印判の「清水」焼（第144図—8）がみられる。

二宮遺跡



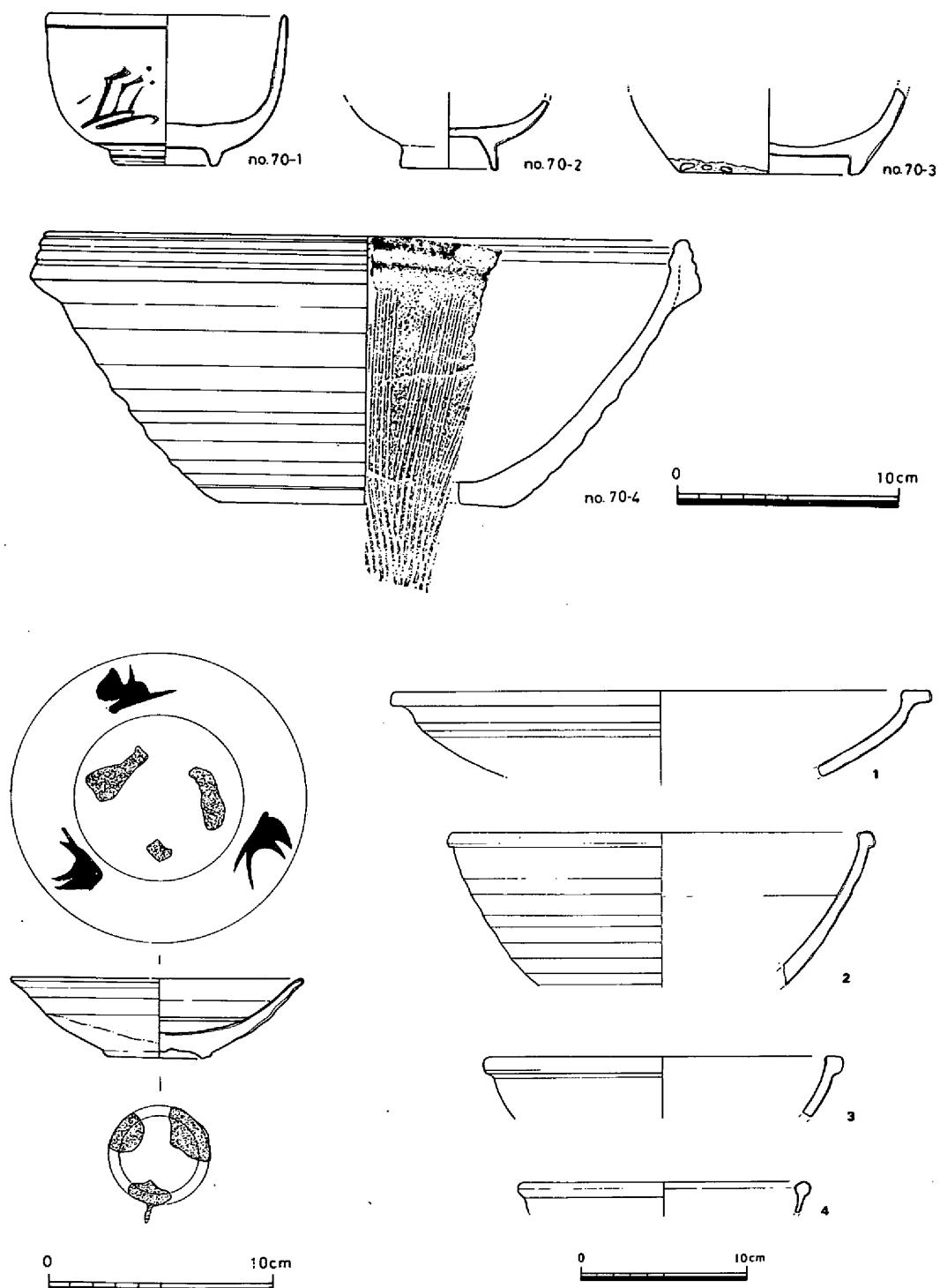
第143図 岡の山B・C・D地区近世墓出土遺物 (no. 4・25・37・41・43・66・111)($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡



第144図 岡の山 B・C 地区no.45・46・47・74 近世墓出土遺物 (1/3)

二宮遺跡



第145図 岡の此C・D・E地区近世墓出土遺物 ($\frac{1}{3}$ ・ $\frac{1}{4}$)

4. 小 結

岡の山地区は同一丘陵上に美作国最大の前方後円墳が存在するという事実に焦点が絞られる。

発掘調査において検出された遺構は、古いものではA地区を中心にして $20m \times 10m$ の範囲内に袋状ピットが16基検出されており、約160点以上の土器が出土している。これらの土器は器壁の薄く均一したシャープに仕上げられたものが主流を占め、津山市川辺天神原遺跡の集落を廻ると考えられる溝中より出土したものより新しい傾向を示すと考えられる。天神原では15号住居内覆土より類似する壺形土器が出土しており、袋状ピット出土土器同様に古墳時代初頭に位置づけられるものである。

これらの袋状ピットの存在は美和山3号墳、4号墳が築造される以前に、岡の山A地区を中心にして古墳時代初頭の居住地として利用されていたことを物語っている。しかし、袋状ピット群をつくり、使用した集団の住居址は検出されておらず、耳塚方向に延びる可能性も考えることができる。No.37住居址は袋状ピット出土遺物と比べて、若干古い様相が感取される。

つづいて、B地区においては美和山古墳群を構成する4号墳、埴輪円筒棺が新たに発見されており、古墳群の墓域を南に拡張している。二宮遺跡C丘陵は古墳群築造時に自然地形に大幅に手が加えられ、3号墳・4号墳間に自然地形を残す高まりがみられる。この高まりは3・4号墳築造時に両墳の盛土に使用する地山を削り取った結果出来たものと考えられる。他には古墳群の時期の遺構は検出できなかった。

次の時期では、美和山4号墳東側周溝部分を削平して、建物を囲む溝を中心とする中世の遺構がC丘陵東側を中心に多く検出されている。建物総数14棟中、12棟がC(No.67)、D(No.75)、E(No.65)溝による区画内におさまるものである。C溝区画内に6棟、D溝区画内に4棟、E溝区画内に2棟と並び、比高差はC・D・Eの順序で低くなっている。

まず、各区画の相互関係についてみると、C構No.49建物とD溝が切り合い関係にあり、D溝区画にベースをもつNo.58建物とE溝、及びNo.56、70建物が切り合い関係にあることなどより、各区画が時期を異にするものと考えられる。建物棟方向よりも大きく三方向にわけられ、それぞれの区画が異なるものと考える。その中でもD溝区画内でのNo.59建物のNo.53溝はD溝と性格を異なる。

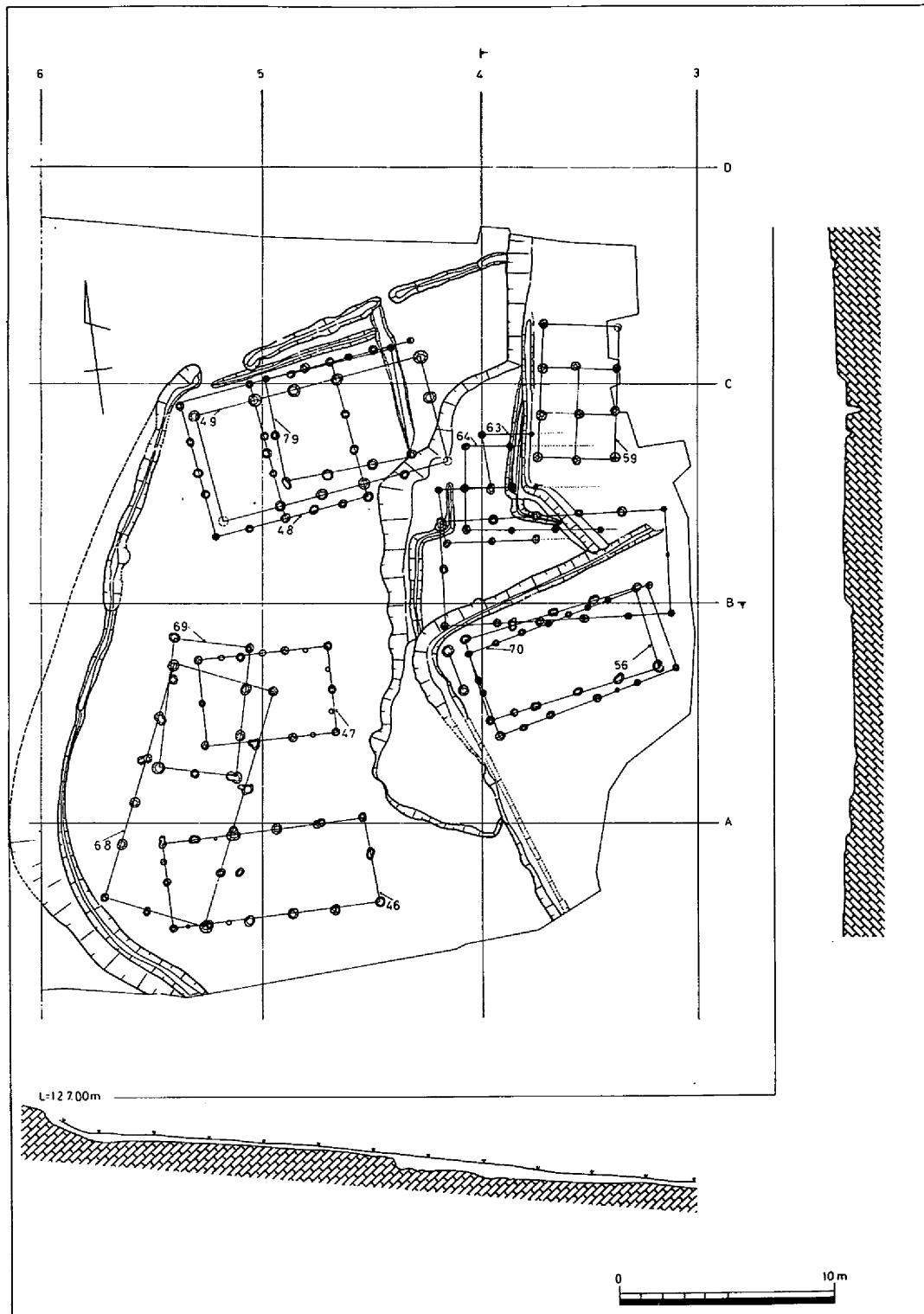
各区画内の建物についても同様に切り合い関係が著しく、同時期の建物構成を想定することが困難である。

とりあえず、C溝区画内6棟の構成を配置等よりみると、建物に伴う溝が少なくとも2本存在することがわかる。しかも、変形「コ」の字状の溝は西側長辺部分で3個所の接続部と思われる屈曲線をあらわしている。この屈曲線が溝内建物の拡張・延長等の配置に関連あるものと考えられる。

2(第147図)の配置はC溝区画内建物が、一応完成した時点での構成を示していると考えられるもので、それ以前に若干小規模ではあるが、1(第147図)の配置が存在したものと考えられる。少なくとも3~4時期の建替え、整備が行われたことを物語っている。

これらの建物のうち、No.69・47は同一規格によって作られており、No.46・47・69建物の桁行は約370cm、No.69・79・47建物の桁行は約620cmと同数値を示すものである。全建物においても、桁行のど

二宮遺跡



第146図 岡の山 建物全体図 ($\frac{1}{300}$)

二 宮 遺 跡

こかの部分に約 200 cm を基調とする柱間距離が使われており、共通尺度による構築がなされている。

D 溝区画内建物 4 棟の構成を配置等よりみると、建物に伴う溝が 4 本存在することがわかる。C 溝区画と異なり棟方向を東西、及び南北方向にとる建物が集中する部分である。各建物とも切り合い関係にあり、同時に存続した可能性をもつものはないようである。前述した №59 建物は D 溝と異なる独自の溝を有し、この溝はさらに北に延長するものであろう。

他の建物は、3・4・5（第 147 図）のようにほぼ同一場所にある溝を東西に梁行を移動しながら利用しているようである。

これらの建物のうち、№59・64 は同一規格によって作られており、№64・59 建物の梁行は約 370～390cm、№68・63 建物の梁行は約 470cm、№59・64 建物の桁行は 620 cm と同数値を示すものである。桁行部分に約 200 cm を基調とする柱間距離が使われており、C 溝区画同様に共通尺度による構築がなされている。

E 溝区画内 2 棟の建物は、D 溝区画より C 溝区画の建物棟方向に近いものである。D 溝区画内では建物 2～3 回の整備がなされていると考えられる。これらも C・D 溝区画内建物とほぼ同形態のものであり、梁行約 370～390cm の数値は №64・69・46・47 建物等と同数値を示すものである。№43 柱穴列も同数値である。

のことより、各区画溝内の建物 12 棟は、約 200 cm を前後する柱間を基調として構築されていることがわかる。さらに細かい単位では約 30cm（1 尺）で割り切れる桁行・梁行がほとんどをしめる。3×2 間、4×2 間、5×1 間、5×2 間の間取りの形態がみられ、3×2 間が 5 棟、4×2 間・5×2 間が 3 棟づつ、5×1 間の 1 棟が存在する。

梁行約 370～390cm と約 470cm をはかる建物数が多く、前者は №46・56・64・69・47・70 建物、№49・58・63・68・79 建物等が後者にあたる。これらは各区画に混在しており、前者は C・D・E 地区、後者は C・D 地区にみられ、E 地区に後者は存在しない。

つぎに桁行でみてみると、590～610cm をはかるものが多いようであり、№47・64・59・69・79 建物等がそれにあたる。これらも E 地区にはみられず、C・D 地区に存在するものである。

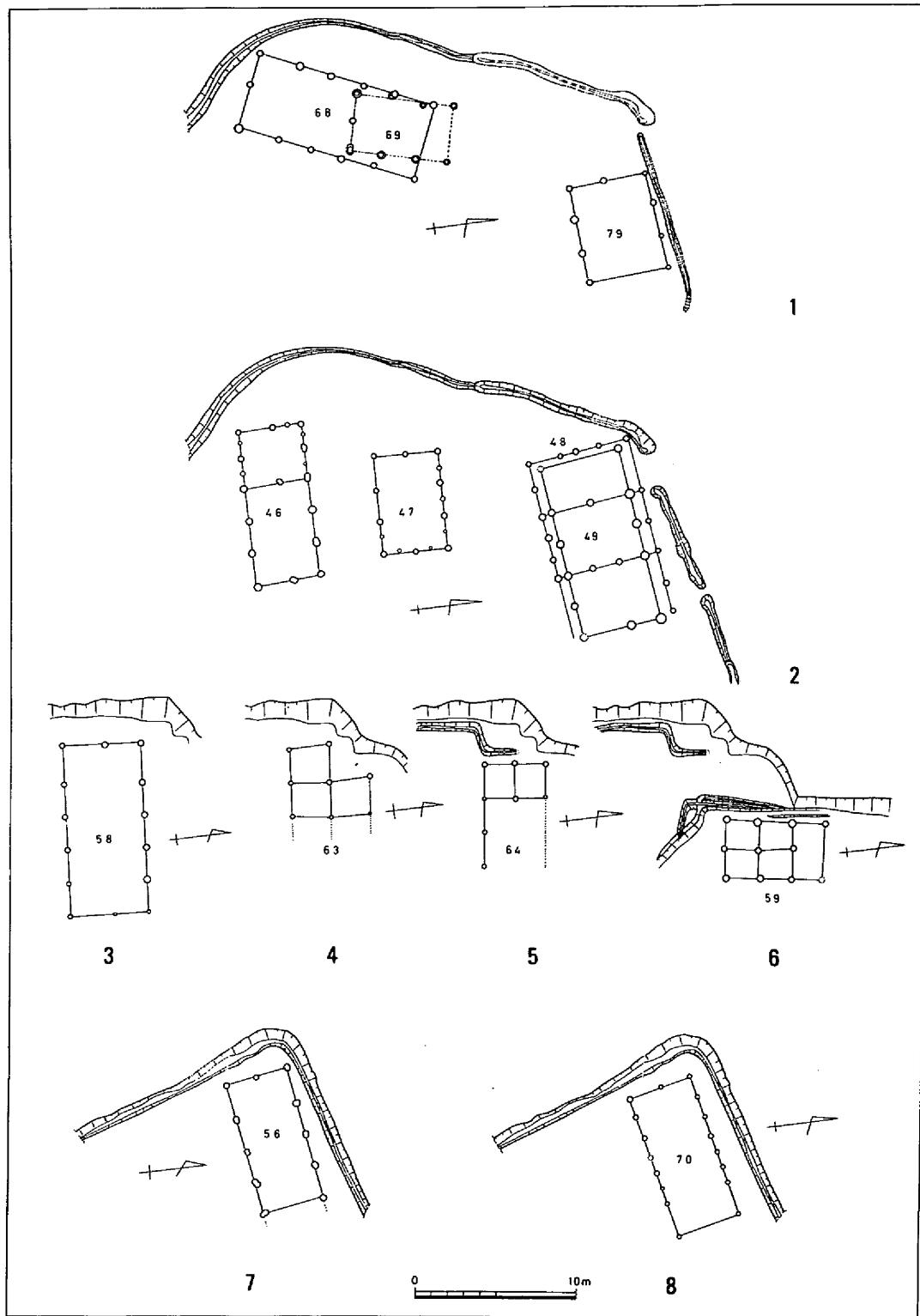
以上、建物の前後関係を明確にするために計測、諸々の形状等を比較検討したが、同数値、形状等に類似点が多く、建物の形態によって時期差を把握することは困難であると結論した。

今後の整理、および知見により改めて補充を加えることとしたい。ここでは建物の面積による相違点をのべる。大きく分けると、約 50～59.50m² をはかる №68・49・58 建物のグループ、35.50～38.50m² をはかる №46・56・63・70 建物のグループ、21.50～24.00m² をはかる №47・59・64 建物のグループの 3 タイプに分類できる。№79 建物が 29.50 m² をはかり、小・中型間にに入る 1 棟だけのものである。なかには、梁・桁行とも同数値を示すものが含まれること等より、サイズにより規格された同一機能を有する建物を想定することができる。

遺物より建物の時期を導き出すには資料的に乏しく、困難な状況である。

柱穴内出土遺物は B 地区 №39 建物より刀子、C 溝区画内 №46 建物より近世と考えられる磁器、№47 建物より砥石、№49 建物プラン内柱穴より中世と考えられる土師器皿、№79 建物より近世と考えられ

二宮遺跡



第147図 岡の此溝と建物 ($\frac{1}{400}$)

二宮遺跡

る染付の磁器、D溝区画内では建物に伴わない柱穴より元代の青磁碗、室町時代後半～末と考えられる備前焼の擂鉢等がみられる。これらは№47建物を除き、すべて柱穴内上位より出土したものである。

元代（1206～1368年）の青磁片からは13世紀初頭より14世紀後半の年代が得られるが、伝播・使用等の問題を含めば、さらに新しくなる可能性がある。備前焼については編年作業が進んでおり、室町時代後半に比定される不老山東口窯跡（註12）のものより、口縁部外面凹線、内面に鋭い角度の形状等から若干新しいものと考えられる。熱残留磁気測定値 1550 ± 30 年が値えられている不老山西口第2号窯の擂鉢に類似するものである。他には岡山市によって調査された富山城（註13）の1568年以後の浮田時代とされる擂鉢に同一形態を有するものがみられる。

このように擂鉢からは、16世紀後半に使用された可能性がうかがえる。

さらに文献（註14）より岡の山地区周辺をみると、本遺跡北部に所在する美和山廬塚を含む「美和山城」の存在が明らかにされており、「二宮村の中央に在り。東西三町南北一町三十間山上殆んど圓形にして現今松樹繁茂せり。立石左京亮高光此に築き拠る」と記載されている。

そして、山名・赤松氏直雄による美作国守護職の争奪が終盤戦におよんだと考えられるころ、明応7年（1498年）、文亀2年（1502年）に浦上氏に属する後藤勝国が美和山城の立石景泰を攻撃し、散退するが、勝国の子勝政が再び立石久朝を攻撃し、久朝は敗死したことが知れる。岡の山地区がこの範囲に入るか、否かは明らかではないが、この地域に15世紀末～16世紀初頭に他地域からの侵略に対応する勢力を有した立石氏が存在していたことが理解できる。

この立石氏についての記載は、県北を中心にして古い時期では天承元年（1131年）に美作国留守所下文に漆間氏の名がみえる。永治元年（1141年）にも法然の父、押預漆間時國の戦乱がみられ、応保2年（1162年）には造立された高野神社の隨身立像胎内銘に大勧進直司尋清等の名がみられ、他の一体には漆間尋清と記されている。嘉元3年（1305年）に漆間真時の名がみえる。建徳3年（1370年）に願主漆間時重の名が見える。そして前述した文亀2年に立石久朝が後藤に敗れる時点までみられる。

平安末より戦国時代にかけての漆間氏一族の関わりが考えられる地域であり、さらに現在の立石家が祭る墓碑名に永禄元年（1588年）立石弥惣次郎漆間久兼をみることができる。

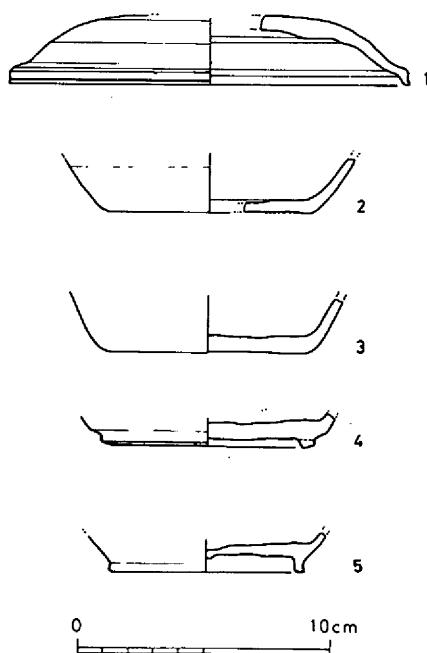
直接関連する遺物・文献等からは15世紀後半～16世紀後半の幅に岡の山地区の建物の使用時期が考えられるが、ここでは、平安末期ころよりその萌芽がみられ、16世紀後半～17世紀初頭にかけて存続した可能性を指摘し、建物の性格についてはに美和山城に関連する館址的なものとして把握しておきたい。

（高畠）

第6節 寺前地区

1. 寺前地区の概要

二宮遺跡C丘陵東斜面に始まり、龍沢寺南に位置する幅約50mの谷部が中心となる。現在もその南側に池が存在する。比高差により西側高所からA・B水田部分をC地区と呼称する。A・B地区は旧地権者との交渉が進展せず、簡単なトレンチ調査にとどまった。

第148図 寺前B地区出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

(1) 寺前A地区(第148図)

岡の此E地区東側にて比高差約70cm、幅25m × 7mをはかり、南北に狭長な部分である。B地区より延長した東西トレンチ西端において、大きい掘り方内に黒色土の堆積がみられ、古い時期の遺構の存在がうかがえる。

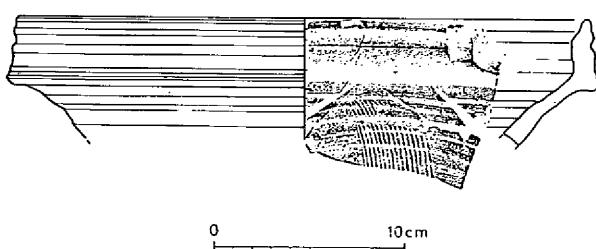
(2) 寺前B地区(149図)

東西トレンチ1、南北トレンチ2本設定掘開を行った。西端においては地山が検出されたが、東端参道部分では1.5mにて湧水がおこり地山は検出不可能であった。

(3) 寺前C地区(第150図)

近代の水田址であり、現在はガマの穂が繁茂する湿田部分にあたる。東西端に2ヶ所のグリッドを設けたが、やはり砂質面で湧水が著しく土崩れがあり、湿田面より2.5m下位にて地山を検出することなく作業を中止する。

遺物は下層においてもプラスチック製品が出士している。

第149図 寺前B地区出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

2. 寺前地区的遺構・遺物

(1) 寺前B地区(第148、149図)

1は口径15.8cm、器高2.7cmをはかる須恵器杯蓋である。2～5は須恵器杯身であり、付高台、無台の二種類がみられ、近似する数値を示す。焼成・胎土は良好なものであり、集石部分よ

二宮遺跡

りまとまって出土したものである。

擂鉢は口径約30cm、残存高6.6cmを測り、焼成・胎土の良好なものである。これらの遺物のうち、前者は奈良時代後半、後者は戦国時代と考えられる。
(高畠)

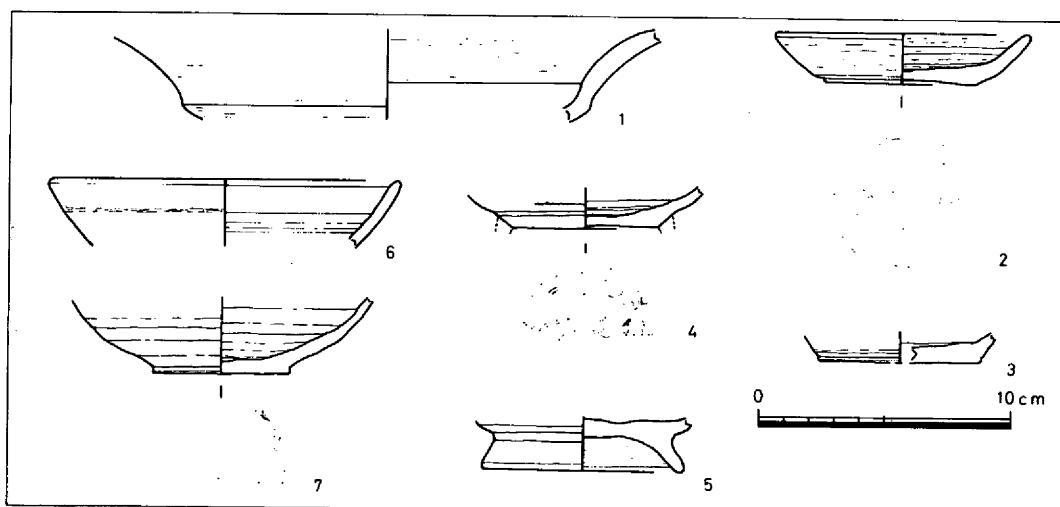
(2) 寺前C地区(第150図)

1は高杯の杯部破片で、脚部以下および杯底部と口縁端を欠損するものである。色調は白褐色を呈し、内外面は横ナデにて仕上げている。内外面には稜を持ち、器壁はほぼ一定している。胎土は細砂が多く、若干の粗砂を含む、焼成は良好。

2は須恵器小皿で、ほぼ完形品である。底部糸切り、口縁端部は丸く終る。内外面はナデ、胎土・焼成良好、3は土師器底部片で底部はヘラ削りが行われている。他は横ナデ、焼成良好。4は貼り付け高台の剥落したもので、底部は糸切り後周辺ヘラ削りで終り、内面は指ナデ、外面に櫛押文がみられる。胎土・焼成良好、5は「ハ」の字状に開く台部で裾端部は丸く終る須恵器碗形土器片である。胎土・焼成良好、7は若干の立ち上がりをもつ底部で糸切りが行われている。内外面はナデ、胎土・焼成良好。土師質のものである。以上これらの土器はすべて、流れ込みによるものである。

他に明代の青磁碗が出土している。

(二宮)



第150図 寺前C地区東グリッド出土遺物 (1/3)

二宮遺跡

第7節 西宮峪地区

1. 西宮峪地区の概要

二宮遺跡A丘陵とB丘陵に挟まれた水田部分がそれにあたる（約1,000m²）。水田の高低差によって、南西側の低い水田より順次A・B・Cの3地区に区分けをした。地形並びにトレント調査の結果、北より南に下がって行く、浅い谷部が存在していることが確認された。旧地形は、西側のA丘陵よりゆるやかな斜面となり、南北29線の位置で最も深い部分となり、東側B丘陵に向かって登って行くものである。さらに、グリッド調査において、谷部は傾斜にそい蛇行していたことが判明した。

(1) 西宮峪A地区

A地区は谷部で包含層が非常に厚く、遺構の確認はされなかった。グリッド調査の結果において、谷の東肩部が確認された。

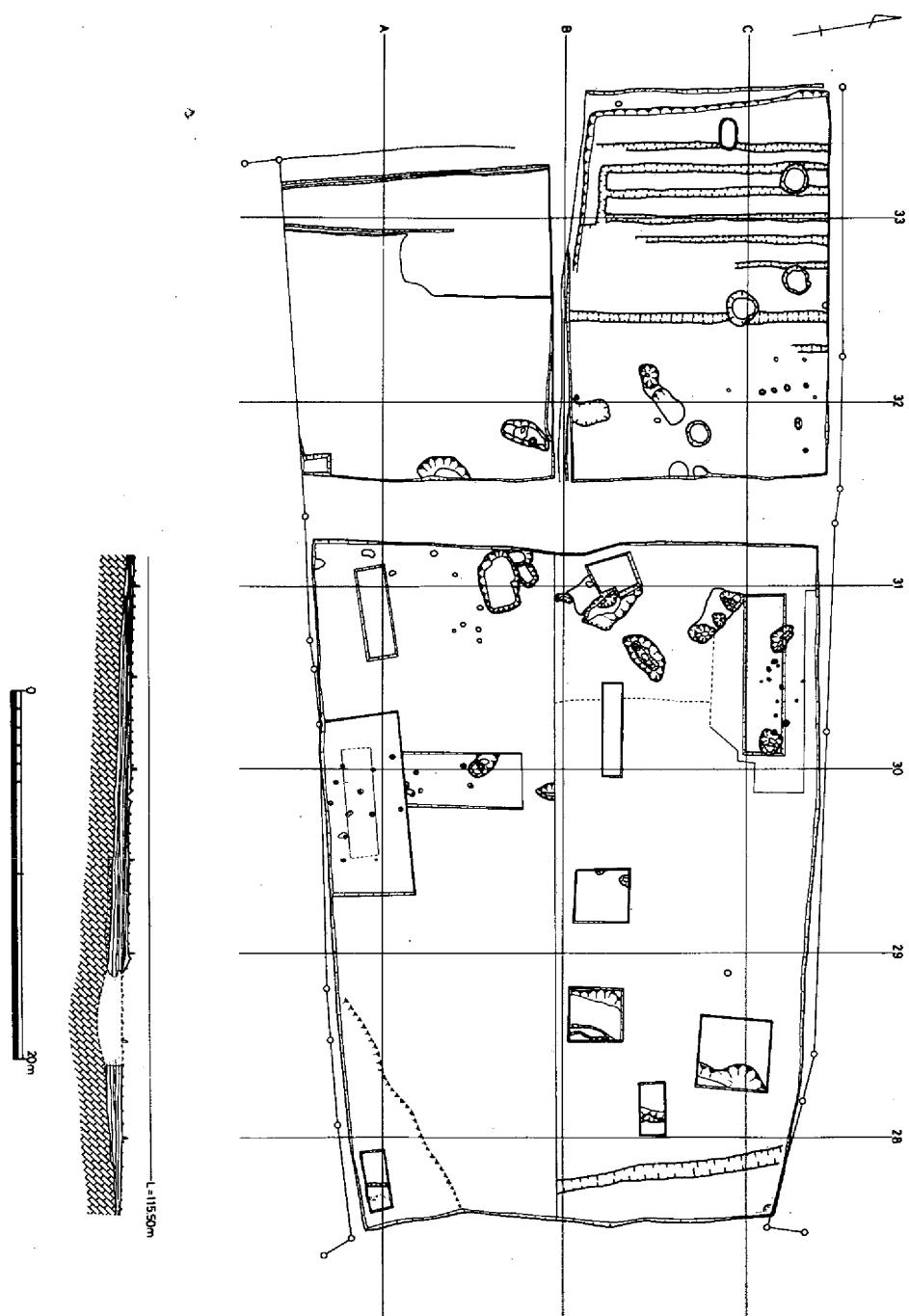
(2) 西宮峪B地区

B地区の、現在の水田面は数枚の水田の町倒しが行われて、南北・北東の横長のものとなったものである。また、このための土砂は天王地区を切り取って用いている。遺構は東側に南北に走った浅い溝が延びている。旧水田に伴うものと考えられる。遺物は、第158図18・19である。18は小型の浅い皿で底部は糸切りが行われているものである。19は底部貼り付け高台のつくもので、丸味を持ち、わずかにふくらむものである。また、若干の細片も含まれていた。さらに土壙が西端部において検出され、4基が重複して検出された。遺物は土壙内から数点の出土がみられた（第162図12）。周辺には数個のピットも確認されたが、建物となる可能性はないものである。No.6・7グリッド内においても数個のピットが確認されたものの、まとまりを持つものは認められなかった。しかし、No.7グリッド内のピットより第157図11～16の出土があった。これは別章にて紹介している。出土遺物は多量で、完形品はわずか数点あったのみである。石器は第152図の砥石3点、第153図2・3の石鎌がある。砥石はいずれも中世～近世のものと思われるものである。石鎌2は基辺が凹む「凹基無茎式」のもので、逆刺を有するが、端部を欠くものである。背面には剝離面をそのまま残し、周囲に細かい調整剝離を施している。3は基辺が若干凹みをもつ「凹基無茎式」の石鎌である。平面形からは「腸扶五角形」を示し、小型のものである。正・背面は2次加工を行った後に、周囲に調整剝離がみられる。現存長約1.3cmを測る。1は黒曜石製の厚味のあるもので、未完整品のようである。第158図9は底部糸切りが行われた土師器の小皿片で、底部内側はふくらみをもっている。第162図12は擂鉢底部片で数本を一単位とするカキ目を放射状に描いているものである。

(3) 西宮峪C地区

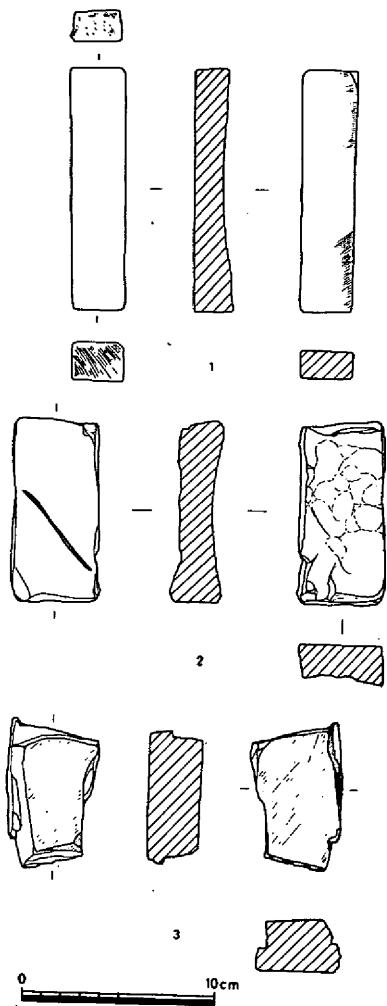
C地区においてもB地区と同様のことといえる。さらに遺構については、北西側に集中して検出された。遺構は不整形土壙、柱穴で、C地区南西端において検出された土壙は、電柱が建っているた

二 宮 遺 跡



第151図 西宮崎・天王A・B地区遺構分布図 (4)

二宮遺跡



第152図 西宮峪地区出土遺物 (1/4)

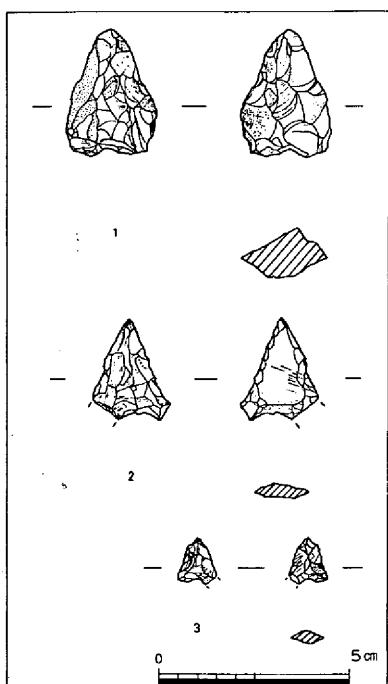
て多量に出土している遺物ではない。第155図1は長頸壺形土器の胴部片で、内外面はナデ仕上げ、厚手のもので、最大径16.1cm。2は小型壺で、胴部最大径は6.9cmを測り、厚手で均一なものである。頸部には指のナデ上げがなされている。他の内外面は横ナデにて仕上げている。胎土・焼成は良好で青灰色を呈す。5は高台が付き、内面底部にはヘラ記号が付けられているものである。胎土、焼成は良好。14は深鉢形のものであり、こね鉢と思われる。内面上位は横斜の刷毛ナデ、下位は横ナデ、外面は下半は指ナデ、上半は刷毛状工具による横ナデ、底部はヘラおこし後にナデ仕上げ、焼成不良。よって色調は灰色をおびた淡黄色を示し、瓦質に近いものである。15は口径17.8cm、台径12.1cm、器高3cmを測る浅い台付杯であり、底部の器肉は厚く、口縁部に向かって薄くなり端部は丸く終る。内外面はナデ仕上げ、胎土は砂っぽく、焼成は不良。第156図1は大甕口縁部片で、口縁部最大径は37.2cmを測り、黒味をおびた黄茶褐色を呈し、近世品と思われるものである。第157図1～10は、

め全容は明らかではない。南北30線より東は谷に向かって序々に下がっている。そのため遺構の検出はなかった。遺物は多量に出土している。第158図10は底部糸切りを行われる土師器の小皿で、約半分が存在するものである。底部の器壁は厚く、端部は丸く終る。

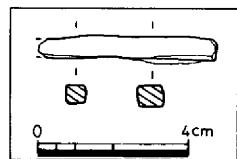
2. 西宮峪地区出土遺物 (第152図～第162図)

第154図の出土遺物はすべて包含層より出土した磁器である。1は白磁で、口縁端部が肥厚し丸味を持って終る。2は口縁部は外反し、肥厚し、下方へたれ下がって、丸味を持って終る。3は体部片で内面丁寧なヘラ削り、外面はナデ仕上げがなされているものである。4は高台部片で、台部径5cmを測り、内面底部はヘラ削り、上部は刷毛調整、外面下部台部、底部裏面はヘラ削りで仕上げている。台部は円盤の貼り付け後、内部を斜めにくりぬきを行ったため、中央部に高まりをもつものとなった。胎土、焼成共に良好である。5は4と同様の作り方を示すものであるが、外面全体をヘラ磨きの仕上げ、底部の器肉は厚い。高台は下端に向け狭まっている。胎土、焼成は良好。6は低い台部で、高台はヘラ削りによって逆三角形の頂点が接点となっている。胎土、焼成は良好。7は高台付きではあるが、台部の製作過程が若干異なる。なぜならば、底部糸切りの後、ヘラによる削り取りが行われていることである。4・7はゆるやかに内傾して開くが、5・6は底部より内傾して開いている。以上の遺物は西宮峪地区内において

二宮遺跡



第153図 西宮峪地区出土遺物 (1/2)



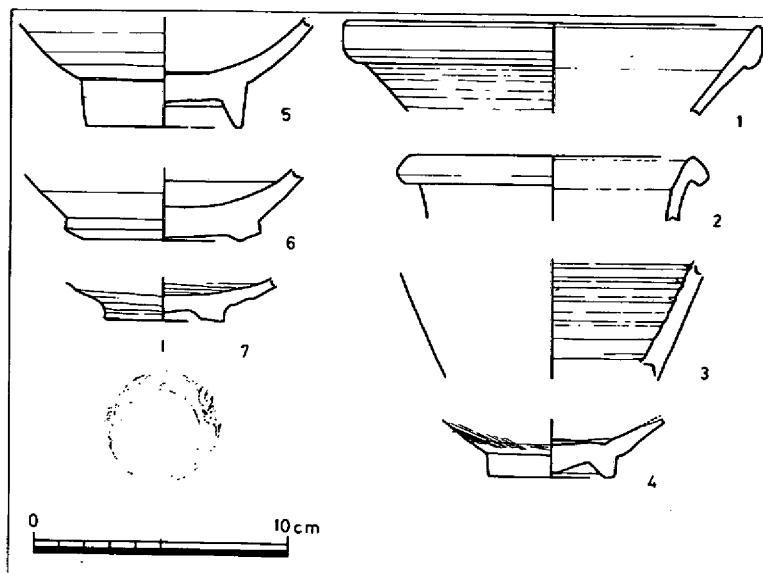
西宮峪地区出土遺物 (1/2)

B地区7層(黒色土層)内、11~16も同様。1は甕片で口径25.6cmを測り、頸部は厚手で、口縁端部は丸く終る。内面上位は指ナデ後に刷毛ナデ、頸部以下は横・斜の刷毛ナデ、外面の上位はナデ、下位は格子目のタタキ、のち横・斜位の刷毛ナデによって仕上げている。黒灰色を呈し胎土・焼成は良好。

第158図1~8は、No.5グリッド内において出土したものである。1・2・5・6は土師質のもので、1は口頸部が「く」の字状に開くもので口縁端部は丸く終るものである。頸部内面に稜を持つ。整形不明。胎土はもろく、焼成はやや不良。口径17.6cm。2は口縁部内面は丸味を持ちふくらみ、器肉も厚く、口径19.6cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁で、端部内面には横ナデによる凹みがみられる。口縁内面は荒いクシ・頸部以下はヘラ削り。外面は粗雑な指ナデ、頸部には縦の細かなクシによる調整が施されている。5は底部に丸味を持っている。内面は指のナデ上げによる仕上げ。軟質、焼成普通。6は小型壺形土器でほぼ完形のものである。「く」の字状に開き、端部は丸く終る。頸部内面には稜を持ち、内面全体はヘラ削り、後に口縁部は刷毛ナデ。外面は指ナデの後に、横・斜位の刷毛ナデ仕上げ。4は逆転しているが、杯蓋となるものである。ヘラ削りは肩部にまで達している。端部は先細りで丸味を持って終る。胎土・焼成は良好。7・8は長頸壺でいずれも破片であるため上部・下部の器形は不明。7の場合は、外反気味に開く頸部でシボリが行われている。さらに外面上位には2本の凹線がはいる。また肩部においても2本の凹線がはいり、その間には櫛押文が施されている。内面頸部以下は指ナデ、接合部の内面は下より上に向けてのナデ上げが行われている。外面胴最大部においてヘラ削り後にナデ。他はナデにより仕上げ。胎土は硬質で、焼成良好。最大径15.6cmを測る。8は肩部は鋭角に内傾し、稜を有する。ナデによる仕上げ、最大径14.7cm。胎土・焼成は良好。16は長頸壺の口頸部で、口径8.6cm。外反気味に開く頸部で、口縁部はさらに外反し、口縁端部は上部につまみ上げられ、丸く終る。器肉も上に向かって序々に薄くなっている。内外面は横ナデ、内面下方は接合部が残り、指ナデ上げがみられる。胎土・焼成良好。17も同様のもので、頸部に凹線文が1本施されている。20・21は後述の第159図8~18と同様のものである。26は口径9.5cm、器高3.55cm、台径7.4cmを測る低脚付小型杯である。杯部は内彎気味で端部は丸く仕上げている。脚部は「ハ」の字状に開き、鋸端部は丸く終る。底部は厚手に仕上げている。内外面はナデ、底部裏面にはヘラ先による刺突文がみられる。胎土・焼成は良好である。第159図1は甕口頸部で、頸部は若干外反気味で器肉も序々に薄くなり、口縁端部は立ち上がり、先細りで丸味を持って終わる。端部外面に

は2本の凹線がはいる。また肩部においても2本の凹線がはいり、その間には櫛押文が施されている。内面頸部以下は指ナデ、接合部の内面は下より上に向けてのナデ上げが行われている。外面胴最大部においてヘラ削り後にナデ。他はナデにより仕上げ。胎土は硬質で、焼成良好。最大径15.6cmを測る。8は肩部は鋭角に内傾し、稜を有する。ナデによる仕上げ、最大径14.7cm。胎土・焼成は良好。16は長頸壺の口頸部で、口径8.6cm。外反気味に開く頸部で、口縁部はさらに外反し、口縁端部は上部につまみ上げられ、丸く終る。器肉も上に向かって序々に薄くなっている。内外面は横ナデ、内面下方は接合部が残り、指ナデ上げがみられる。胎土・焼成良好。17も同様のもので、頸部に凹線文が1本施されている。20・21は後述の第159図8~18と同様のものである。26は口径9.5cm、器高3.55cm、台径7.4cmを測る低脚付小型杯である。杯部は内彎気味で端部は丸く仕上げている。脚部は「ハ」の字状に開き、鋸端部は丸く終る。底部は厚手に仕上げている。内外面はナデ、底部裏面にはヘラ先による刺突文がみられる。胎土・焼成は良好である。第159図1は甕口頸部で、頸部は若干外反気味で器肉も序々に薄くなり、口縁端部は立ち上がり、先細りで丸味を持って終わる。端部外面に

二宮遺跡

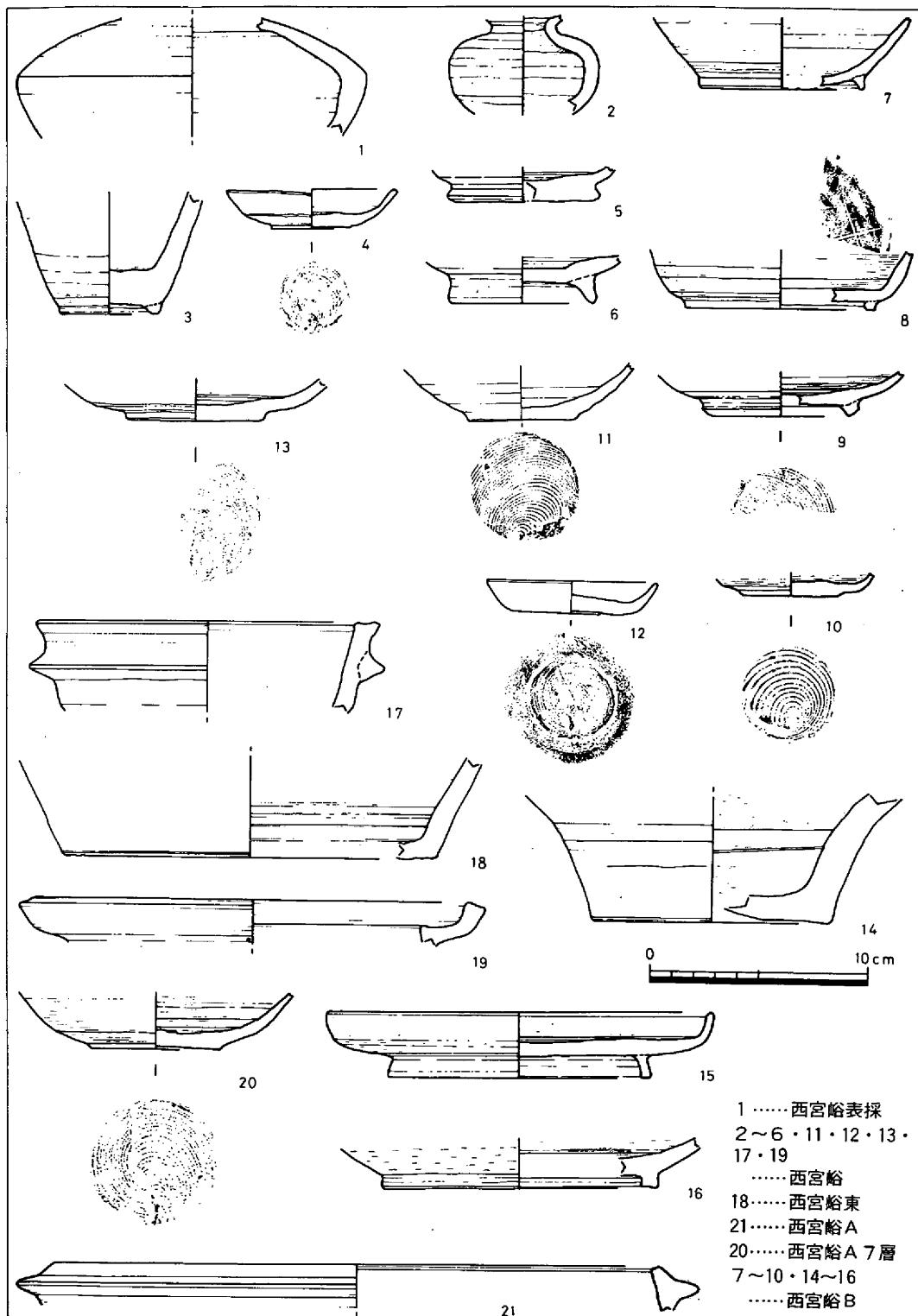


第154図 西宮峪地区出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

は浅い凹みが残っている。内外面はナデ仕上げ、頸部には6本のヘラ切りがみられ、さらに櫛の刺突がみられる。焼成良好で、口径20.4cmを測る。3は、「ハ」の字状に開く台付きの壺と思われる底部片である。台裾径10.8cmを測る。裾部には一本の凹線を有し、裾端部は厚手となり、底面は若干の凹みを持つ。台内面は指ナデにより凹みをなしている。内外面共にナデ仕上げである。胎土・焼成共に

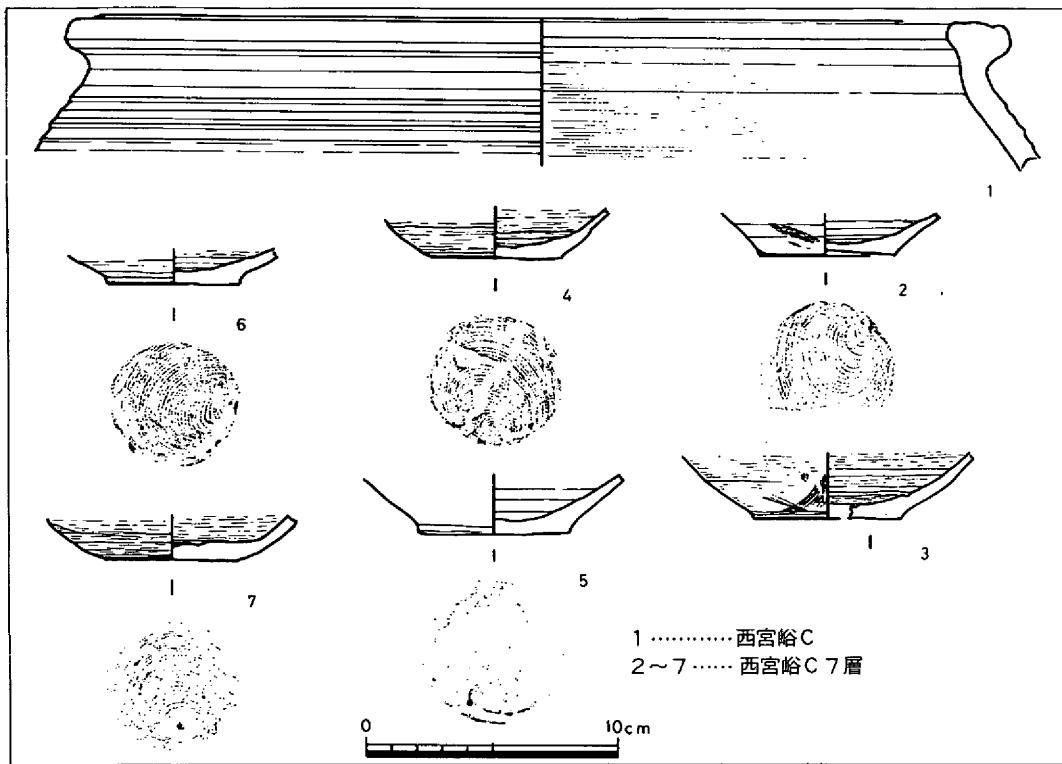
良好。6は糸切りで取り上げたのち、「ハ」の字状に開く高台の貼り付けが行われているものである。高台径6.4cm。8~18はN4井戸出土遺物と類似しているものである。8~10・16~18は底部糸切り、その他は底部を欠失する破片である。11は内彎気味に開き、口縁端部にかけてやや肥厚し、丸味を持って終る。内外面共に水引きによる仕上げが行われている。胎土硬質、焼成良好で、口径15.2cmを測る。12は内彎気味に開き、口縁端部は外反して丸味を持って終る。器肉はほぼ均一なもので、整形は内外面共に水引きによる。さらに外面には指痕が1つ残っている。色調は黒灰色を呈し、胎土、並びに焼成は良好なものである。口径14cm。14は内彎気味に立ち上り、口縁端部は丸く終る。内外面は刷毛ナデ調整が施され、胎土は砂っぽく、焼成やや不良。口径14.4cmを測る。15は内彎気味に開き、口縁部で若干外反気味になり、口縁端部は丸く終る。器肉はほぼ均一であるが、内外面にはかなりの凹凸がみられる土器である。水引きが施されている。胎土・焼成良好。口径14.7cm。19~25は須恵器小皿である。19は、底部糸切りで、器肉は厚く端部にかけて細まり若干丸味をもって終る。内外面ともナデ仕上げ、口径7.8cm、胎土・焼成共良好。20~25は22を除いて器肉はほぼ均一の土器である。底部はすべて糸切り、口径は20より順次、8.6cm、8.2cm、8.0cm、7.8cm、7.6cm、7.8cmを測り、器高は最低で23の1.2cm、最高は19の2.4cmを測る。また20において、下位にヘラ状の工具による削りが施されている。第160図の土錘は遺跡内出土のすべてではなく、おもに、西宮峪地区出土のものである。38・54・55は大型に属し、55については切り子玉を長くしたようなものである。また、66は一風変化したものであり、2個の穴が開口されているものであるが、端部を欠くものである。瓦質土器第161図4~9・11、第155図17・19・21は、二宮遺跡において多量に出土している遺物ではない。外面は瓦器特有の光沢のある灰黒色、または黒色を呈している。黒色になっているものは、黒色炭化物（スス）の付着である。種類についていえば、鉢形のものは4・5・6で、4は端

二宮遺跡



第155図 西宮峪地区出土遺物 (1/3)

二宮遺跡

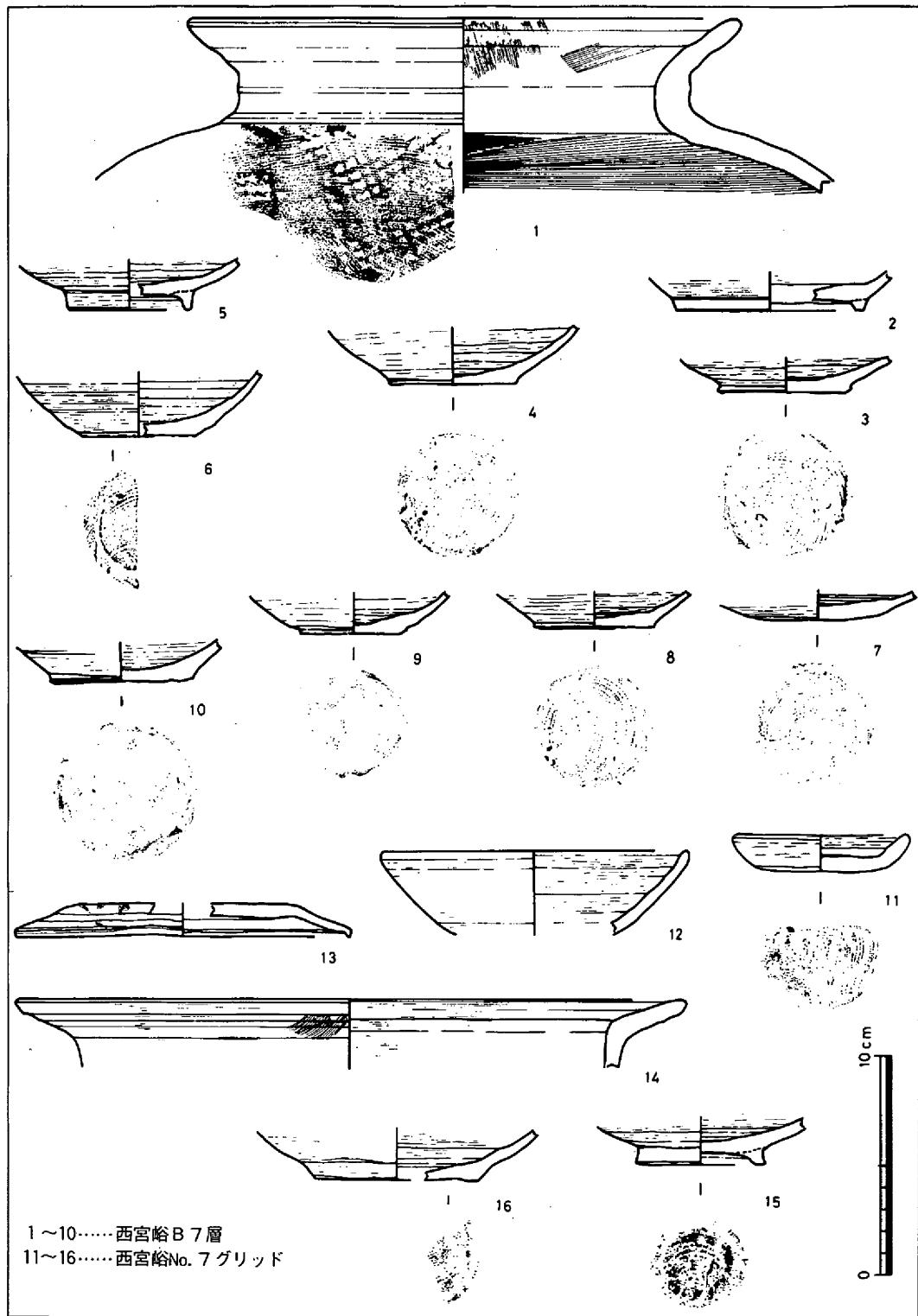


第156図 西宮嶽C地区出土遺物 (1/3)

部が外反し、丸く終る。外面横の指ナデ、内面横ナデ。5は端部内面に一本の浅い凹みを有する。内外面は横ナデ。6は口縁端部が肥厚し、端部外面は丸味を持ち、一本の浅い凹みを有している。外面指ナデ、内面刷毛ナデ。以上3点はこね鉢として用いられたものであろう。7・8・19の器形は異なっているが、頸部は「く」の字状に外反し、蓋受けを有する。さらに垂直、あるいは外反気味に立ち上がり、端部は肥厚し、口縁端部上面は浅い凹みを持っている。胴部内面は刷毛ナデ。7の場合は、ヘラ削りが施されている。外面は指ナデにて仕上げている。胴部にかけての器肉は薄くなっている。9・11・21は、口縁部外面にツバ状の貼り付け突帯がめぐっているものである。9は内傾気味で端部上面に浅い凹みを持つ。11は口縁にかけて肥厚し、端部は薄手である。以上3点はいずれも土鍋で、胴部にかけては薄手となっている。外面は指ナデのため凹凸がみられる。さらに黒色炭化物の付着もみられる。以上の瓦質土器は中世における日常雑器として普遍的に用いられたものであろう。

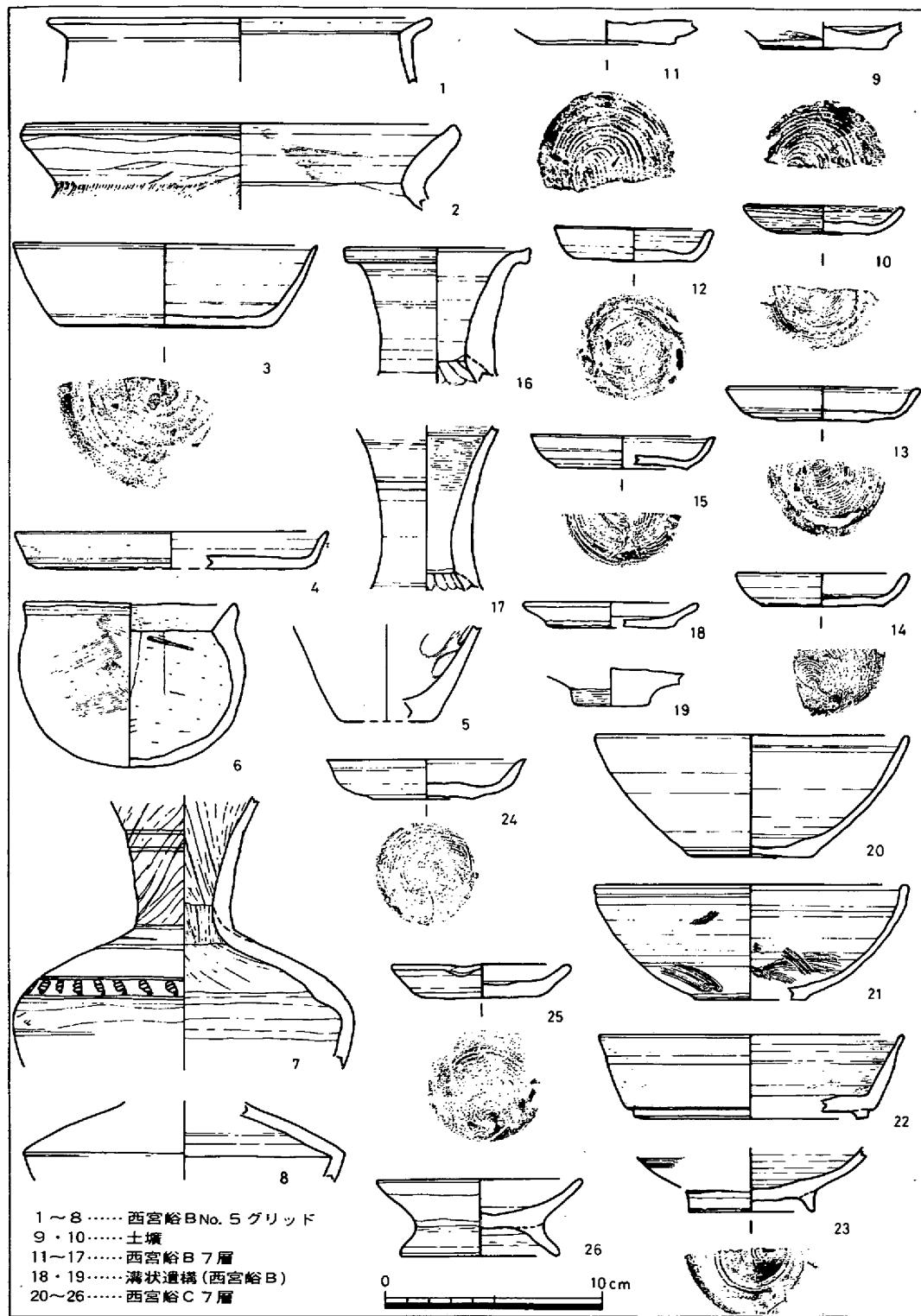
第161図3は備前焼と思われるもので、底部の外周にわずかの台らしきものがみられ、底はヘラ削りが行われている。器壁はほぼ均一なもので、口縁端部は丸味を持って終る。色調は外面が黒茶褐色、内面は赤味をおびた黒茶褐色を呈し、内面は指ナデの後刷毛による調整。外面は指ナデがなされ、下部にヘラの押えがみられる。第161図12の下部はくびれて段を有し肥厚し、底部は序々に薄くなりヘラ削りが行われている。内外面は指ナデ。内面は灰白色、外面は黒色を呈し、瓦質のこね鉢と思われる。第162図の擂鉢はすべて破片である。色調も赤味をおびた茶褐色、黒味をおびた褐色、灰色、あ

二宮遺跡



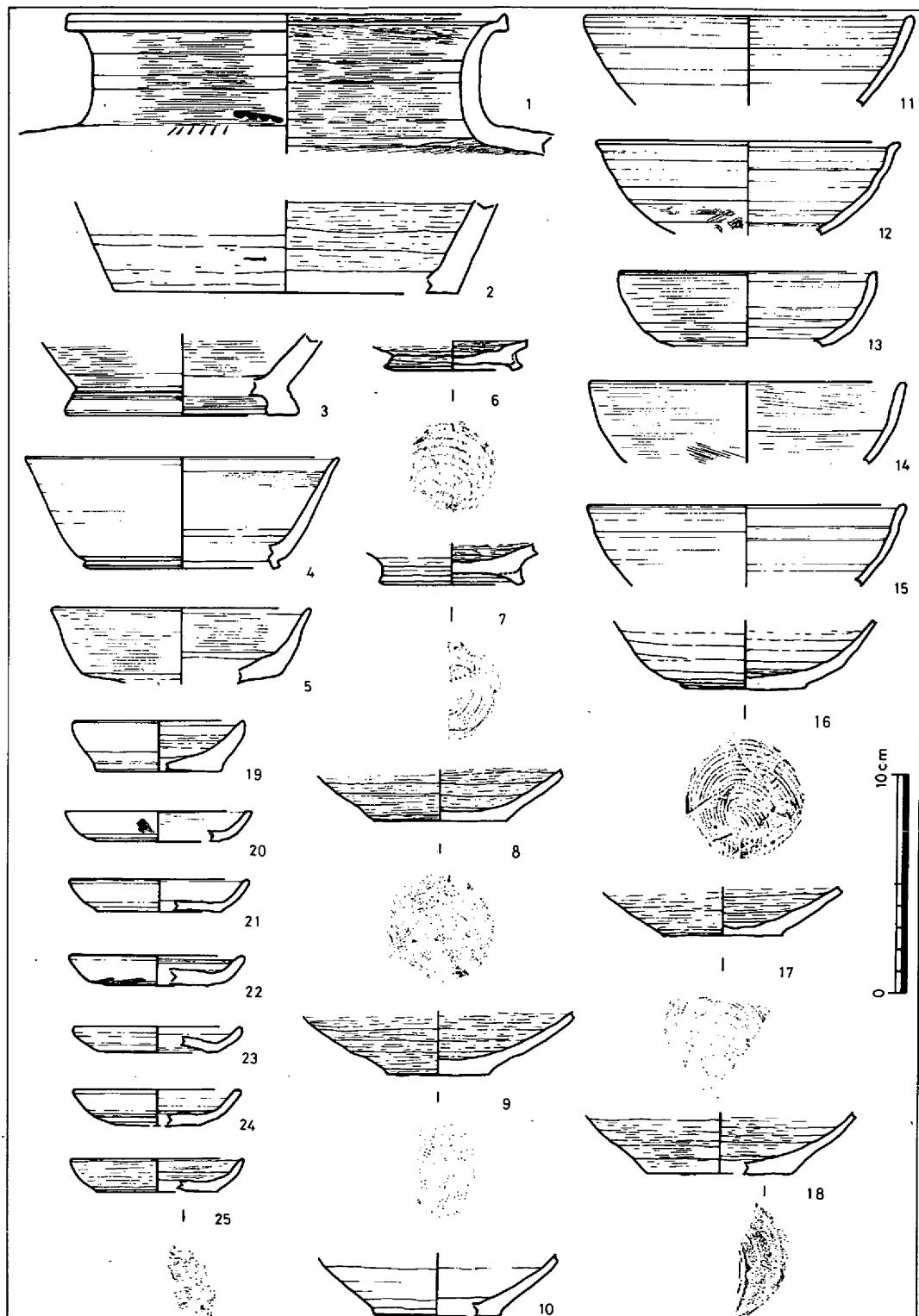
第157図 西宮峪B地区出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡



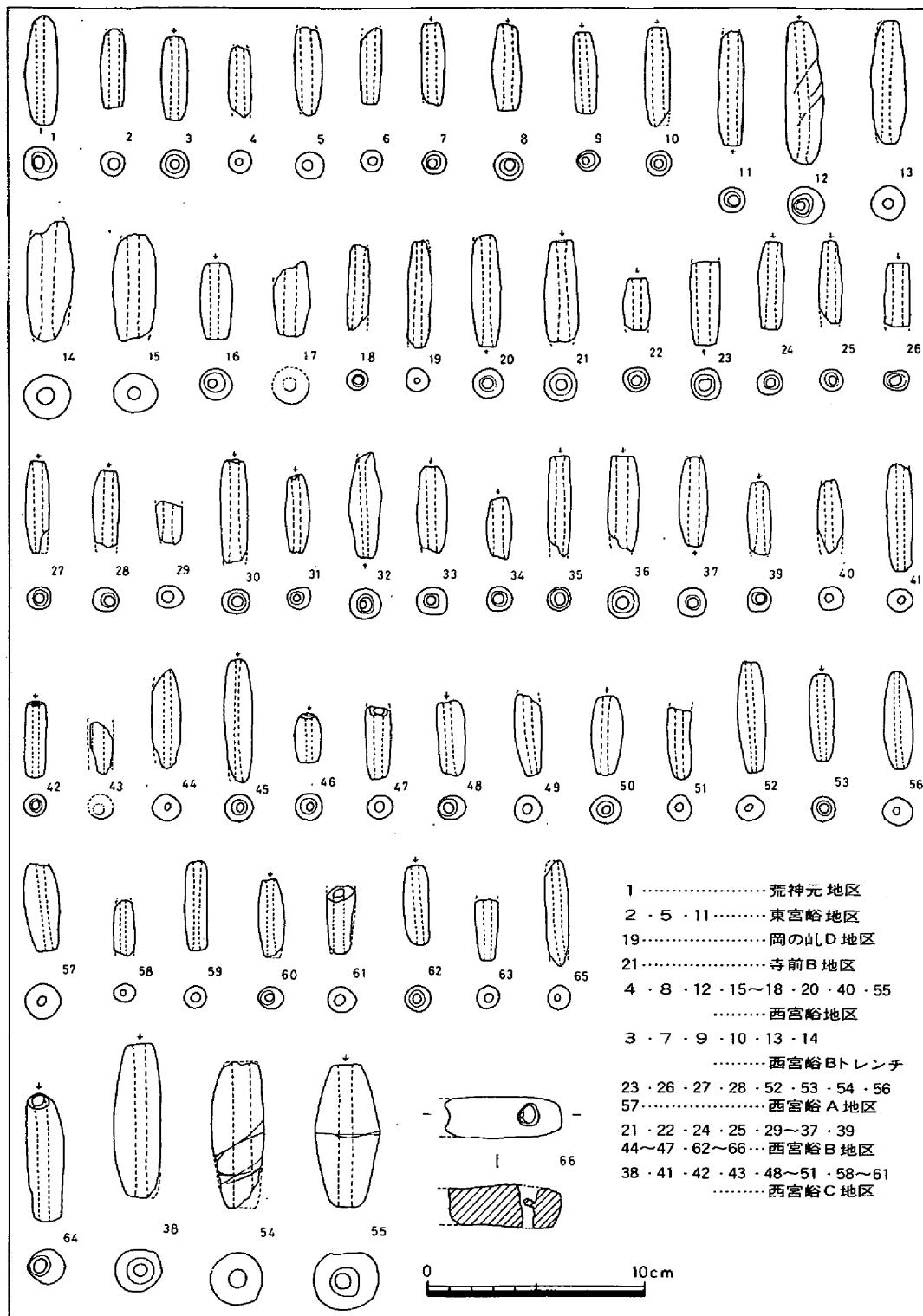
第158図 西宮峪B・C地区出土遺物 (1/3)

二宮遺跡



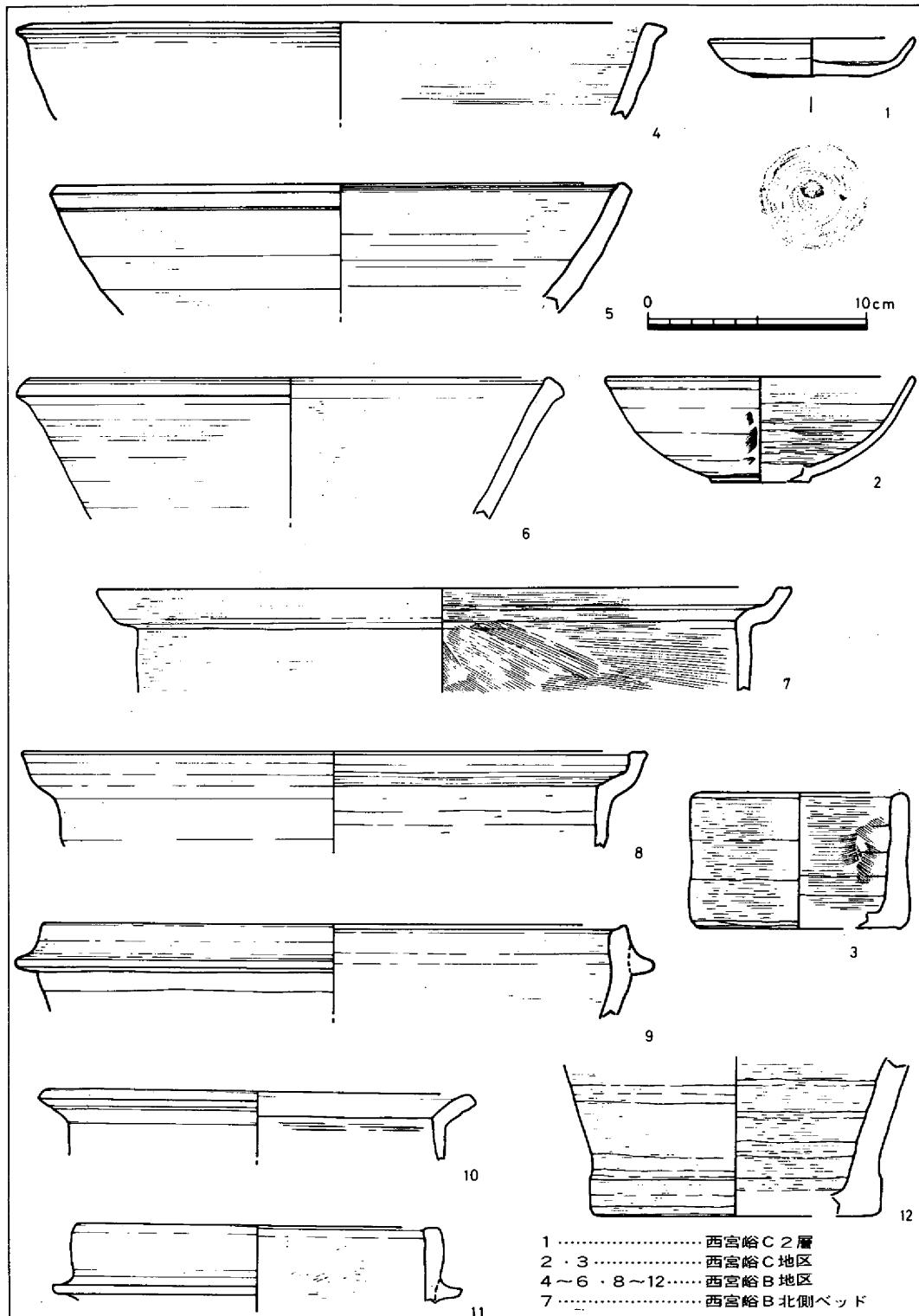
第159図 西宮峪C地区7層出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡



第160図 西宮峪・荒神元・東宮峪・岡の此・寺前地区出土土錘 (1/3)

二宮遺跡



第161図 西宮峪地区出土遺物 (1/3)

二宮遺跡

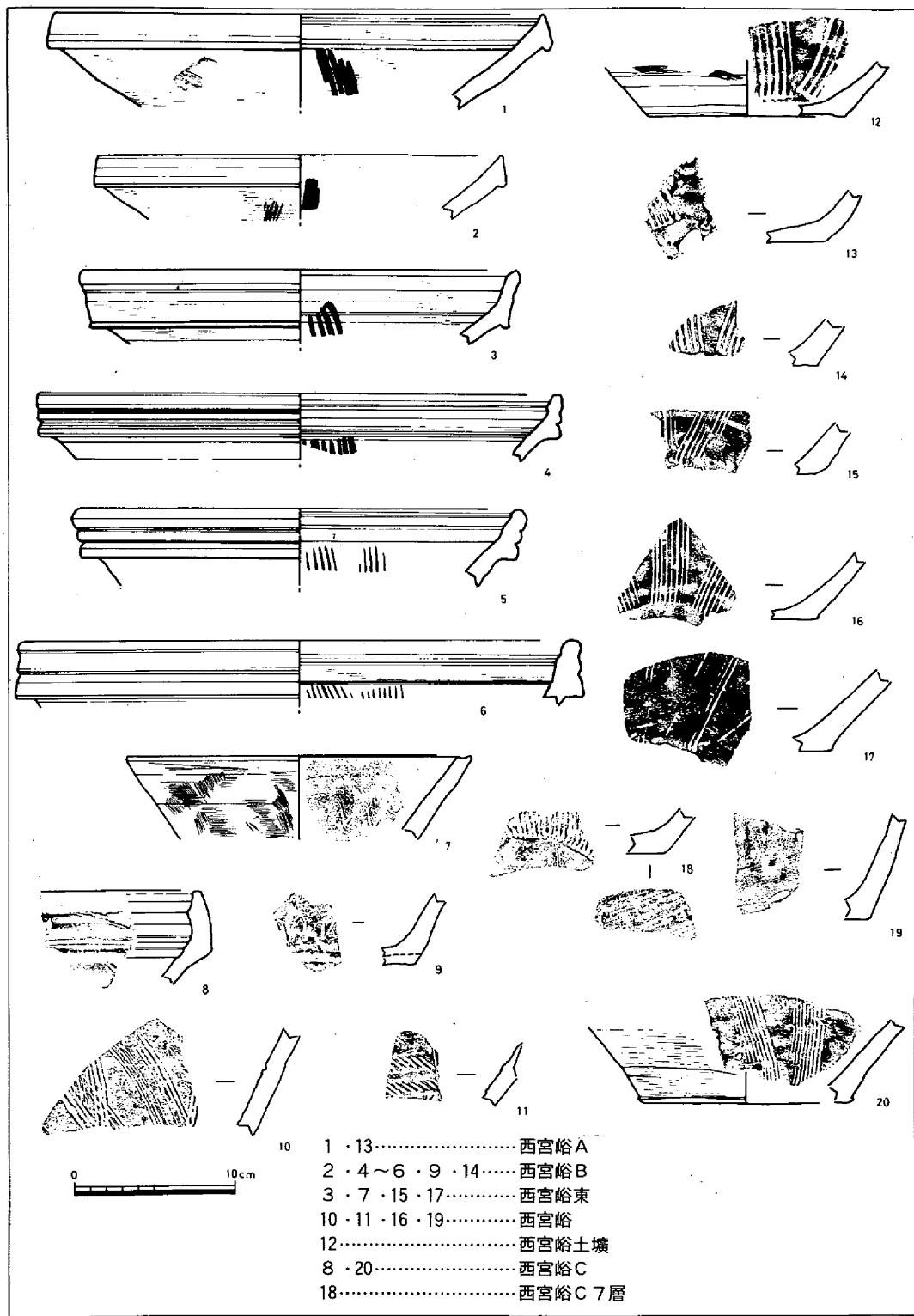
各地区出土計測値一覧表（表一 9）

出土地区	長さ	最大径	口径	重さ	備考	出土地区	長さ	最大径	口径	重さ	備考
1 荒神元地区	5.08	1.56	0.48	10.7		34 西宮峪B地区	2.82	1.11	0.36	2.7	
2 東宮峪A地区	3.57	1.13	0.49	3.5		35 西宮峪B地区	4.665	1.13	0.33	5.55	
3 西宮峪B地区	3.82	1.32	0.31	6.5		36 西宮峪B地区	4.35	1.44	0.42	9.05	
4 西宮峪地区	3.0	1.6	0.27	3.65	欠損	37 西宮峪B地区	4.12	1.27	0.37	6.55	
5 東宮峪D地区	4.0	1.24	0.51	5.5		38 西宮峪C地区	7.05	2.14	0.65	27.55	
6 西宮峪地区	3.43	0.93	0.30	3.9		39 西宮峪B地区	3.37	1.165	0.39	2.7	
7 西宮峪B地区	3.85	1.04	0.33	4.7		40 西宮峪地区	3.38	1.12	0.3	3.4	
8 西宮峪地区	3.83	1.33	0.45	6.0		41 西宮峪C地区	4.955	1.19	0.4	6.3	
9 西宮峪B地区	3.78	1.1	0.34	4.55		42 西宮峪C地区	3.47	1.04	0.34	3.7	
10 西宮峪B地区	4.6	1.2	0.39	6.05		43 西宮峪C地区	2.33	1.02	0.41	0.95	
11 東宮峪A地区	5.23	1.15	0.43	7.6		44 西宮峪B地区	4.59	1.25	0.4	6.4	
12 西宮峪地区	6.61	1.87	0.44	21.2		45 西宮峪B地区	5.7	1.32	0.34	9.65	
13 西宮峪B地区	5.54	1.55	0.41	12.5		46 西宮峪B地区	2.15	1.21	0.27	3.4	
14 西宮峪B地区	5.6	2.16	0.7	19.7	欠損	47 西宮峪B地区	3.25	1.19	0.43	3.55	
15 西宮峪地区	4.71	2.02	0.51	18.9		48 西宮峪C地区	3.5	1.26	0.45	4.95	
16 西宮峪地区	3.58	1.48	0.37	8.75		49 西宮峪地区	3.79	1.24	0.37	4.3	
17 西宮峪地区	3.54	1.75	0.36	6.0	両端欠損縦半分	50 西宮峪地区	3.6	1.37	0.33	6.5	
18 西宮峪地区	3.78	9.1	0.42	3.6		51 西宮峪地区	3.11	1.215	0.41	3.8	
19 岡の山D地区	4.94	1.18	0.26	4.2		52 西宮峪A地区	5.15	1.28	0.32	7.95	
20 西宮峪地区	5.05	1.127	0.46	8.4		53 西宮峪A地区	3.92	1.08	0.36	4.75	
21 寺前B地区	4.75	1.6	0.49	10.75	欠損	54 西宮峪A地区	6.62	2.42	0.58	30.05	
22 西宮峪B地区	2.44	1.28	0.39	3.7		55 西宮峪地区	6.53	2.81	0.57	41.2	
23 西宮峪A地区	3.85	1.46	0.53	7.75		56 西宮峪A地区	4.47	1.34	0.39	6.65	
24 西宮峪B地区	3.98	1.235	0.37	4.9		57 西宮峪A地区	4.18	1.64	0.4	10.75	
25 西宮峪B地区	3.77	1.07	0.32	3.95		58 西宮峪C地区	2.38	0.99	0.295	1.75	
26 西宮峪A地区	2.92	1.215	0.48	3.5		59 西宮峪C地区	4.16	1.04	0.32	4.65	
27 西宮峪A地区	4.3	1.095	0.385	4.45		60 西宮峪C地区	3.6	1.18	0.33	4.0	
28 西宮峪A地区	3.555	1.16	0.36	5.1		61 西宮峪C地区	3.11	1.35	0.4	3.4	
29 西宮峪B地区	1.94	1.22	0.42	2.2		62 西宮峪B地区	3.71	1.18	0.37	4.6	
30 西宮峪B地区	4.76	1.28	0.44	7.8		63 西宮峪B地区	2.76	1.05	0.36	2.7	
31 西宮峪B地区	3.61	1.195	0.24	4.2		64 西宮峪B地区	5.75	1.75	0.62	14.35	
32 西宮峪B地区	4.81	1.42	0.335	5.4		65 西宮峪B地区	4.84	1.11	0.4	4.55	
33 西宮峪B地区	3.93	1.4	0.33	7.25		66 西宮峪B地区	5.32	1.93	0.85	21.85	

るいは暗青灰色を呈するものと色々である。器形にしても変化に富んでいる。さらに内面カキ目施法も数種類がある。口縁部では(1) 7・9 (底部であるが波状文)、(2) 1・2、(3) 8、(4) 3、(5) 4~6の順序と思われる。二宮遺跡内の出土擂鉢では7・9のような波状文のカキ目を施すものは他に出土していない。7は逆「ハ」の字状に開くもので、口縁部は若干薄くなり、端部上面には浅いU字状の凹みを持っている。さらに、9のように2段が存在していることから、原形は数段の波状文が施されていたものと推察され、鎌倉時代に属するものと思われる。1・2は口縁部はわずかに上・下に拡張され、内面のカキ目は、5本単位の放射状を描くものである。室町時代中葉以降と考えられる。3~6・8は口縁部が上・下方への拡張が発達したものである。内面カキ目は放射状に4~8本単位で施されている。5・6はカキ目の施法が細かなもので、8は斜位方向で、かなり上部より施されている。口縁部外面の沈線の凹凸は、3・8で少なく、4~6では明瞭なものである。時代は桃山、或いはそれ以降と思われる。10は、カキ目が左下がり、右下がりとが、下部付近で交差しているものである。11は、内面整形時の凹みが残り、斜めのカキ目は凸部分にのみつくものである。

(二宮)

二宮遺跡



第162図 西宮峪A・B・C地区出土土遺物 (1/4)

第5章 第2次調査の概要（昭和52年度）

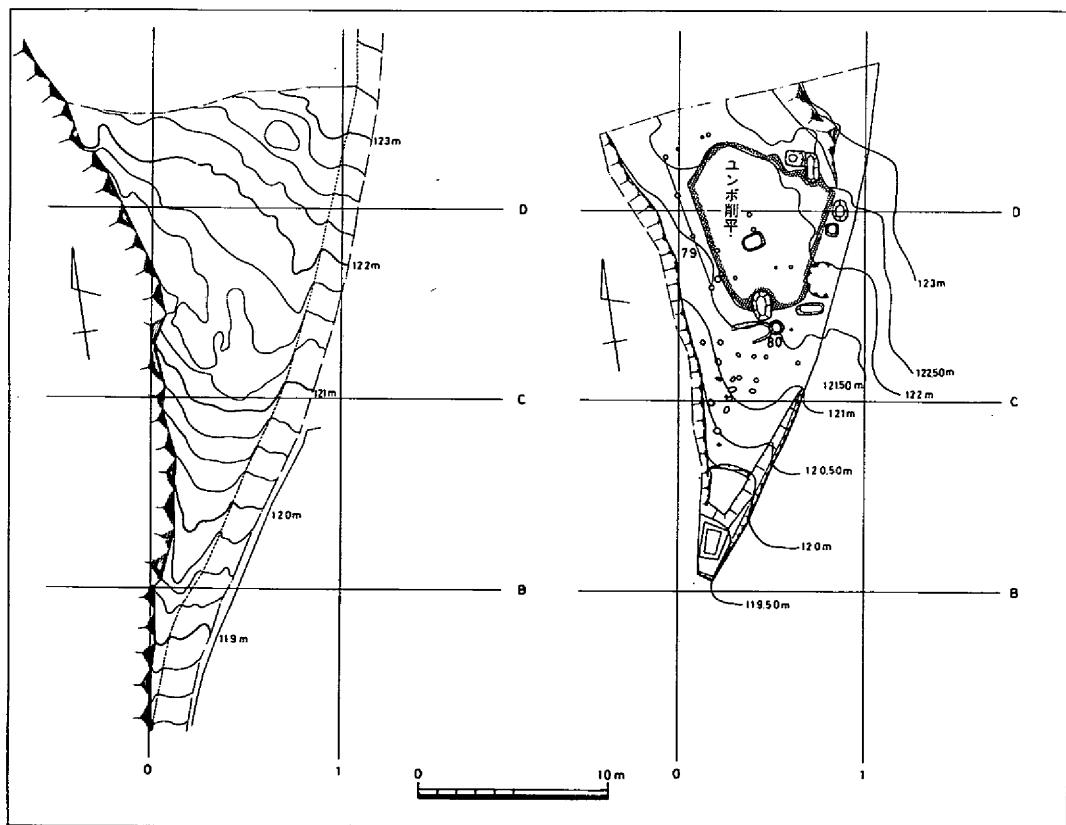
第1節 寺東地区

1. 寺東地区の概要

寺前と岡東地区の中間、二宮遺跡D丘陵西斜面にあたる。この斜面も他地区同様に手が加えられており、完全に削平を受けた宅地部分をA地区、高所の畠地部分をB地区と呼称し、調査を行った。A地区路線内の住宅は昭和52年度末になって立退きの話が続き、急拠岡の北側約470mが住宅代替え地として決定する。それに起因して岡の北地区の発掘調査が行われたものである。

（1）寺東B地区

海拔119～123m間の200m²の範囲がそれにあたる。丘陵は北より南に下降しており、東側丘陵をカットして約1.5m幅の南北山道がつくられている。地表面は、A地区宅地造成時にユンボによる削平



第163図 寺東B地区遺構分布図 (1/400)

二宮遺跡

を受けており、D線周辺は爪跡が著しく残っている。

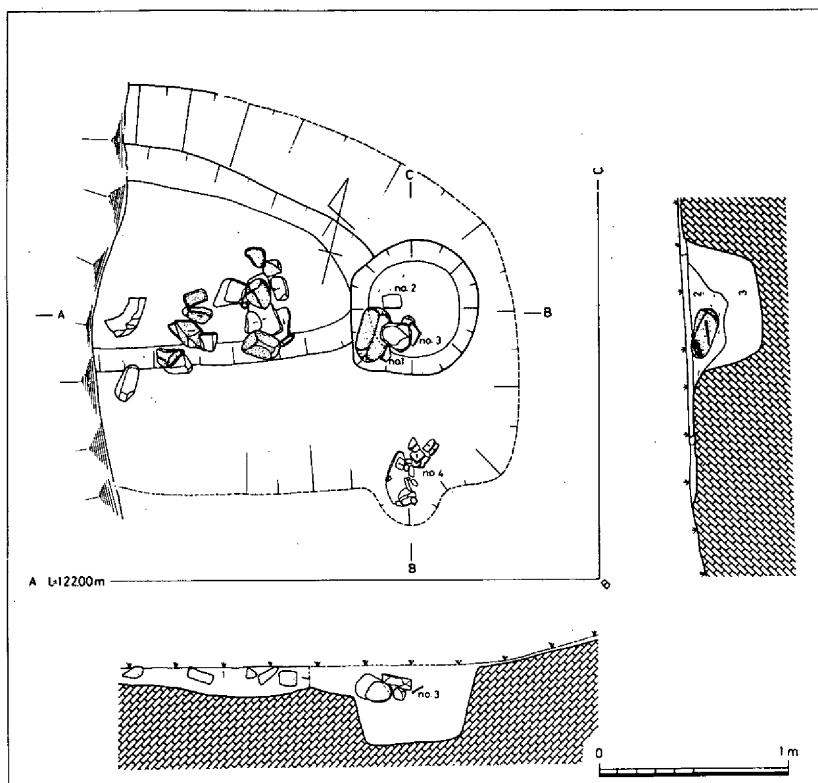
遺構は中世の土壙（墓）1、柱穴列1、その他の土壙（電柱支線穴）が検出されており、他に西側斜面黒色堆積土中より弥生時代中期の土器片が出土している。

2. 寺東地区の遺構・遺物

No. 80 土壙（第164図、図版61・132）

B地区のほぼ中央部分に位置し、直径約70cm、深さ40cmの円形土壙（墓）である。

第164図 No.80 土壙 ($\frac{1}{40}$)

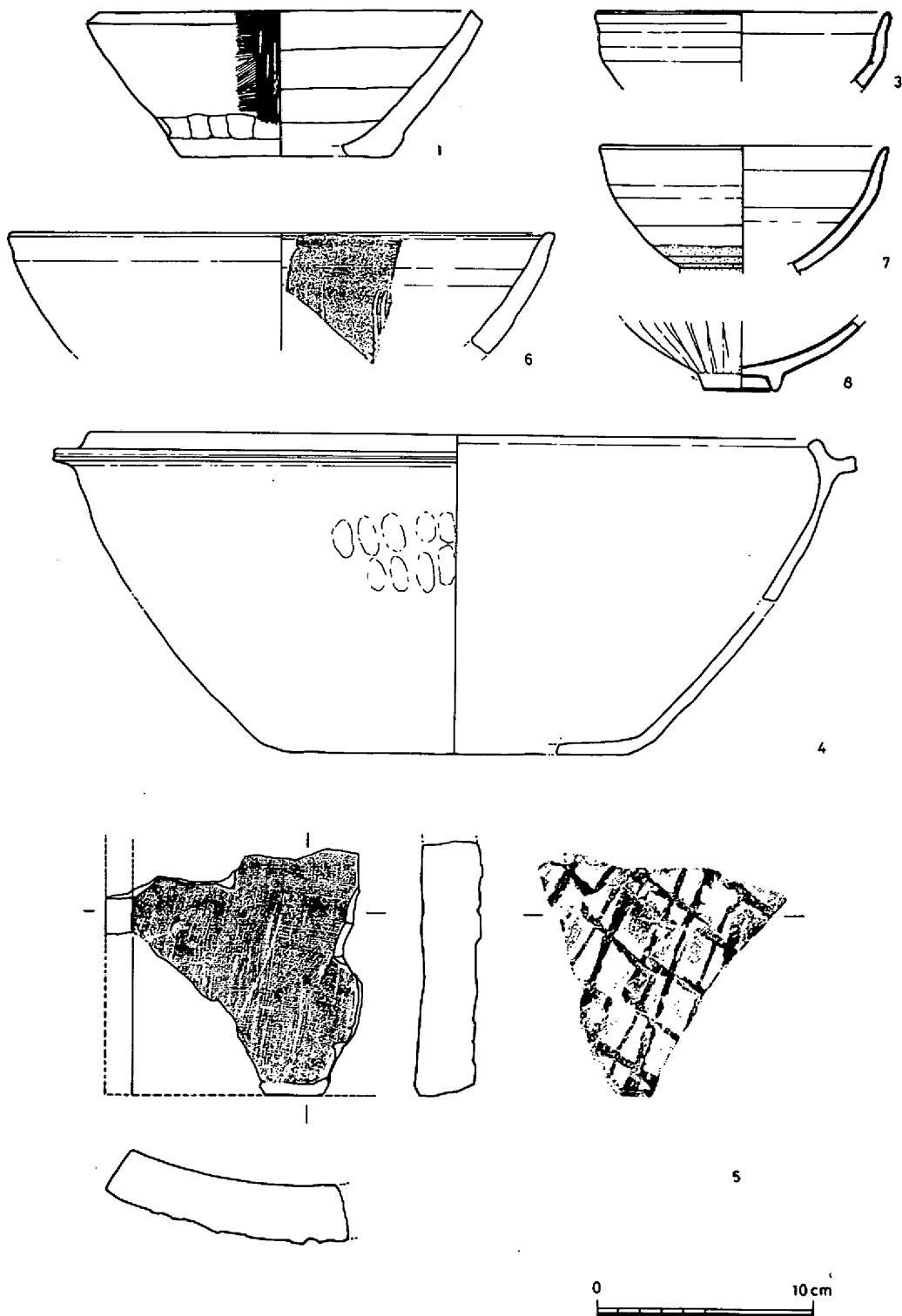


る。そこより西側に向かって幅約100cm、長さ140cmの溝が延び、約20個の石材が地山面より浮いて出土している。さらにその溝、土壙をとりまく同形態の幅200cm、長さ220cmの土壙が存在する。

同時期の所産と考えられ、土壙内覆土に瓦質土器の破片がみられ、墓と考えられる土壙内2層より瓦質土器片、および1・2・3等の遺物が石材間より出土している。その他の遺物はNo.80土壙周辺より出土したものであり、4・5・6・7・8がそれにあたる。

1は口径17.2cm、底径10cm、器高6.6cmをはかる「こね鉢」である。口縁部はまったく拡張する形態をとらず小振りのものである。ヨコナデ調整後、全面に不規則な細かいナデが施され、底部近くにハケ目による押えが一巡すると考えられる。内面はゴマハケがみられ、胎土は精製された粘土が使用されている。焼成は良好にて暗褐色を呈する。3・7は同形態を有する天目茶碗であり、内・外面上半に鉄釉が施され、外面下位は無釉である。胎土は淡黄毛色を呈し、吸水性が感取され、細かい間隙がみられる。6は口径24cm、残存高5.3cmをはかる備前焼の擂鉢である。口縁端部は丸くおさめられており、内面は使用痕が著しく、暗茶褐色を呈する。8は全面に青緑色で厚目の釉薬が記され、外面は退化鎧葉紋がみられる。4は瓦質土器にて外面全体にススが付着している。5は須恵質の平瓦である。

二宮遺跡



第165図 No. 80 土壌出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡

第2節 岡東地区

1. 岡東地区の概要 (第166、167図)

岡東地区は海拔112～125m間に所在し、南、および南東に延びる幅の広い丘陵である。これを二宮遺跡D丘陵と仮称している。

発掘調査対象地のうち西南端部は土取り場になっており、東南部は遊園地として利用掘開を受けておりその部分の遺構は破壊されたと考えられる。

調査は用地内の樹木の伐採、除草、後かたづけ等から入り、それだけで1ヶ月以上を費して行われた。そして、上面清掃後にあらわされた地形によりA～Eの5地区に区分けをおこなった。

A地区は前述した西南の土取り場跡、B地区は海拔約120.50～125.50m間、D地区は海拔115～119mの遊園地の西にあたる三角部分、それ以外をC地区とし、海拔112.50～115.50mの遊園地東端削平部分をE地区とした。これらは各地区的地形の変化によるものであり、B・C間には段状の遺構がみられ、C・D間には畠地の境が存在した。

発掘調査は業者による10m²グリッドの終了した時点より、B地区西端よりベルトコンベヤーを使用して表土剝ぎを開始し、A地区を土捨て場として利用した。そして、グリッド5線東側南北溝までの表土剝ぎ、遺構検出終了時点で作業進行の便宜上、遺構掘り下げを続行する班と、そこより以東の表土剝ぎを続行する班の二組に分けて、岡東地区以西、以東の調査を行った。

以東の部分は、以西と異なり桃園（俗称桃山）等の畠地として耕作を受けておらず、樹木が多く、根が深くて遺構面までの土量は相当なものであった。これらの地区の排土は遊園地跡に行った。

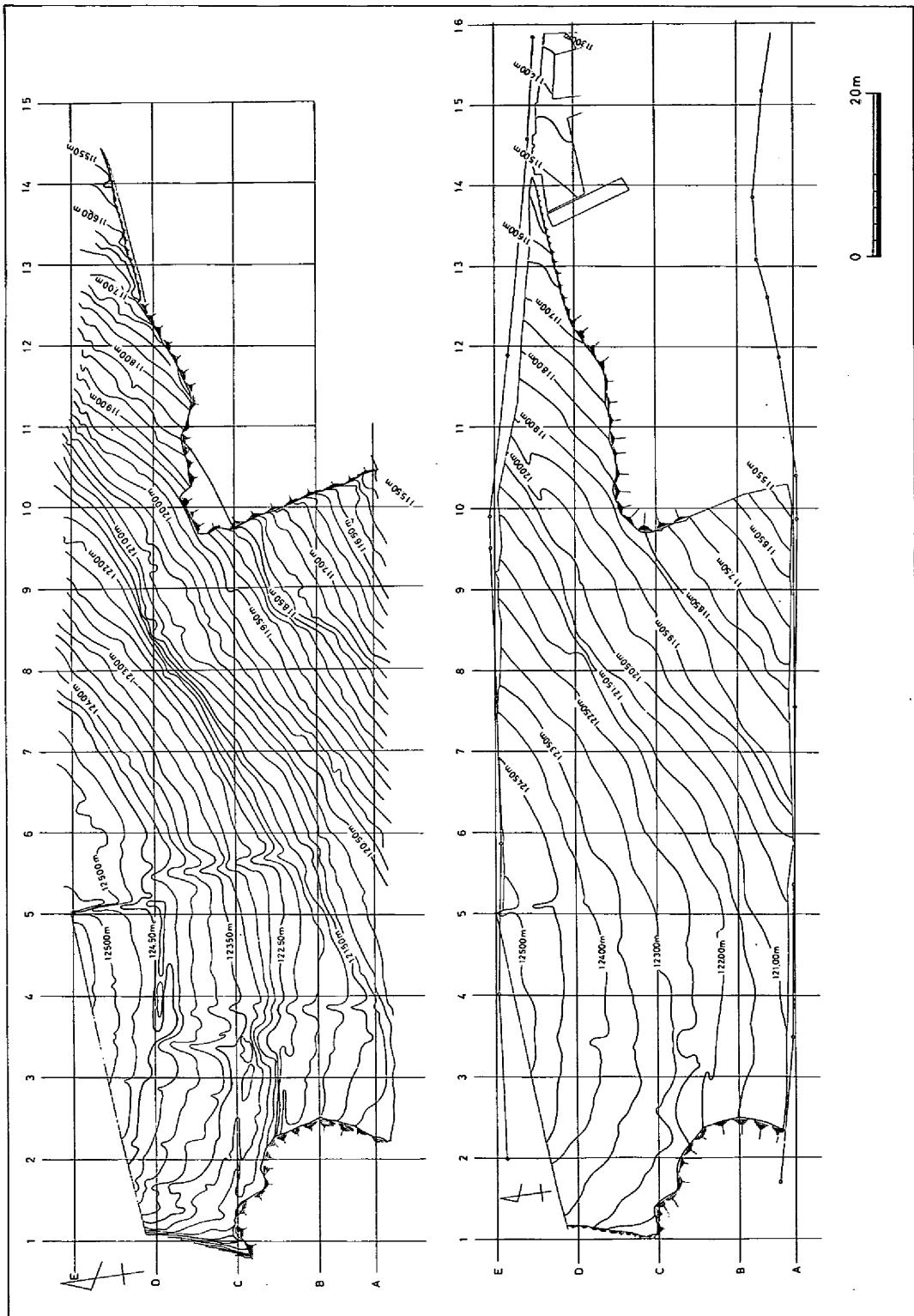
そして、以西の地区終了の班が№130建物より東のB・C地区に入り、再び樹木の伐採、除草、後かたづけを行い、E地区までの調査を行った。

発掘調査面積約3400m²、遺構検出総数62を数え、重複、切り合いによる住居地が7～8個所、建物10、柱穴列7、袋状ピット3、土壙5、鍛冶炉4、それに伴うと考えられる建物2、古道1、風倒木痕と考えられる土壙1、まとまらない柱穴多数を検出した。

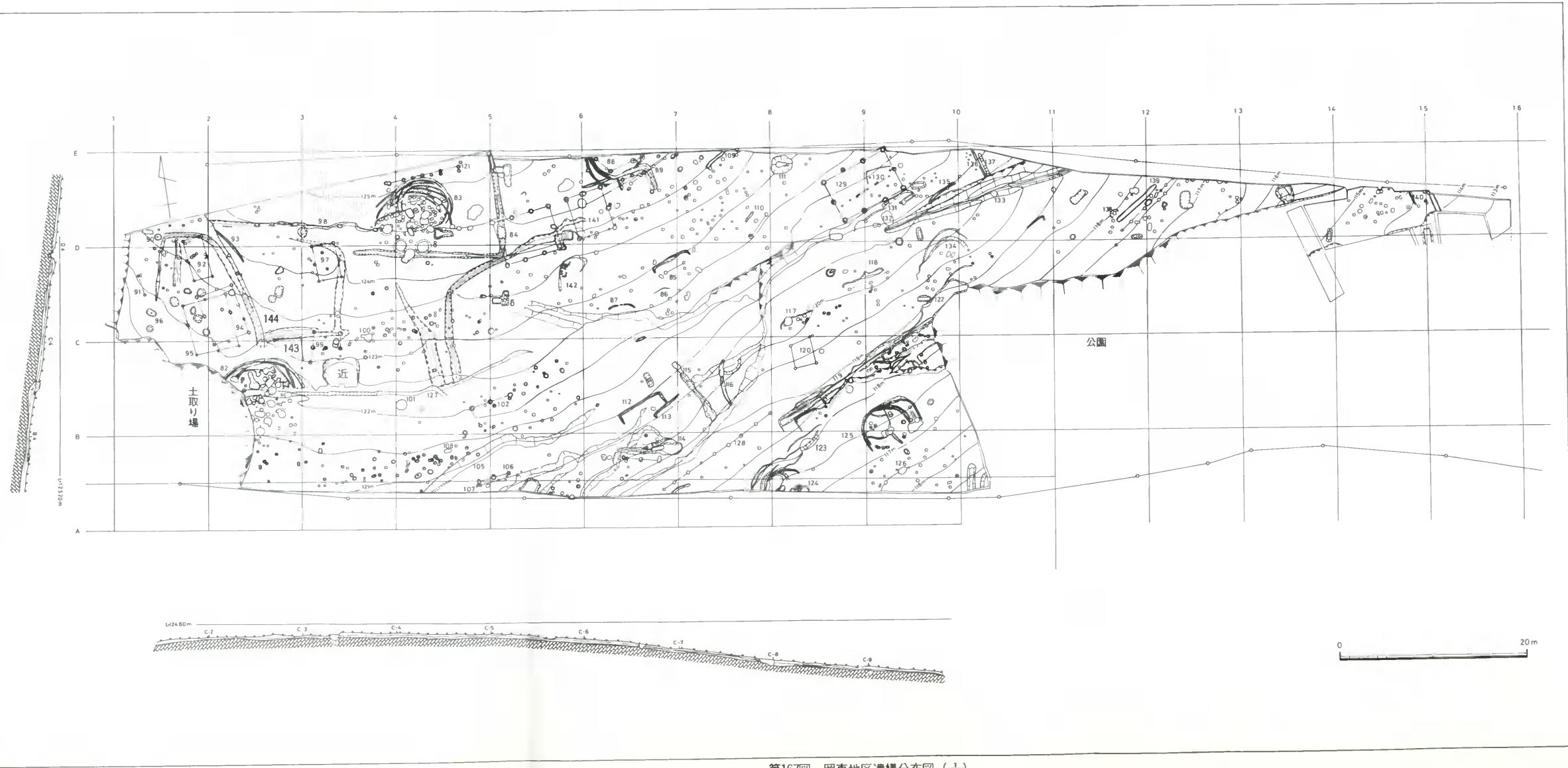
遺物では、弥生時代中期後半以後、後期前半、後半・古墳時代後期後半・奈良・平安時代・鎌倉・室町時代の土器等が出土しており、宗・明代の中国製陶磁器もみられる。

岡東地区は岡の山地区同様に展望のきくところであり、眼下に吉井川の沖積地を見わたせる場所である。

二宮遺跡

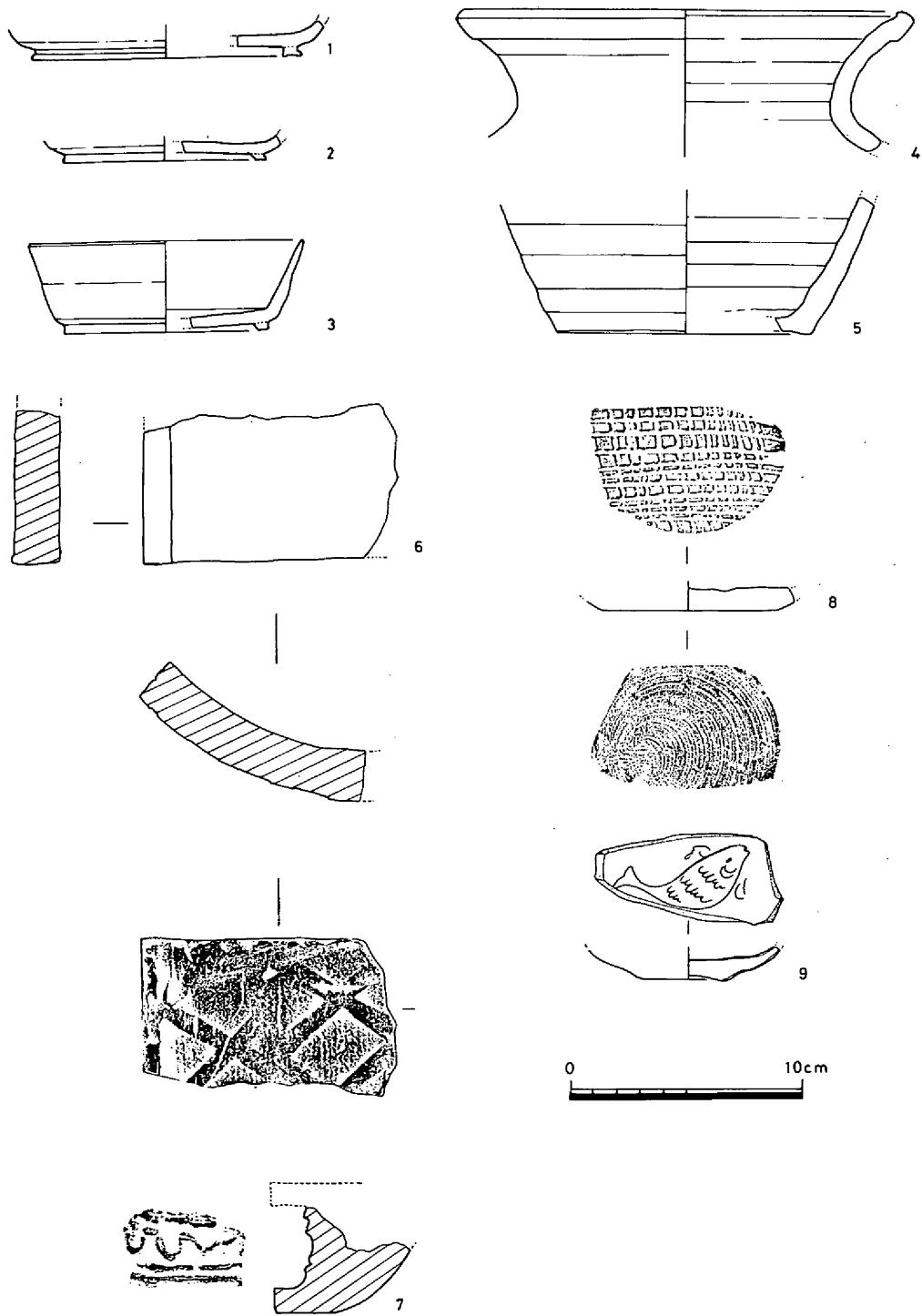


第166図 関東調査前・後地形図 ($\frac{1}{500}$)



第167図 岡東地区遺構分布図 ($\frac{1}{400}$)

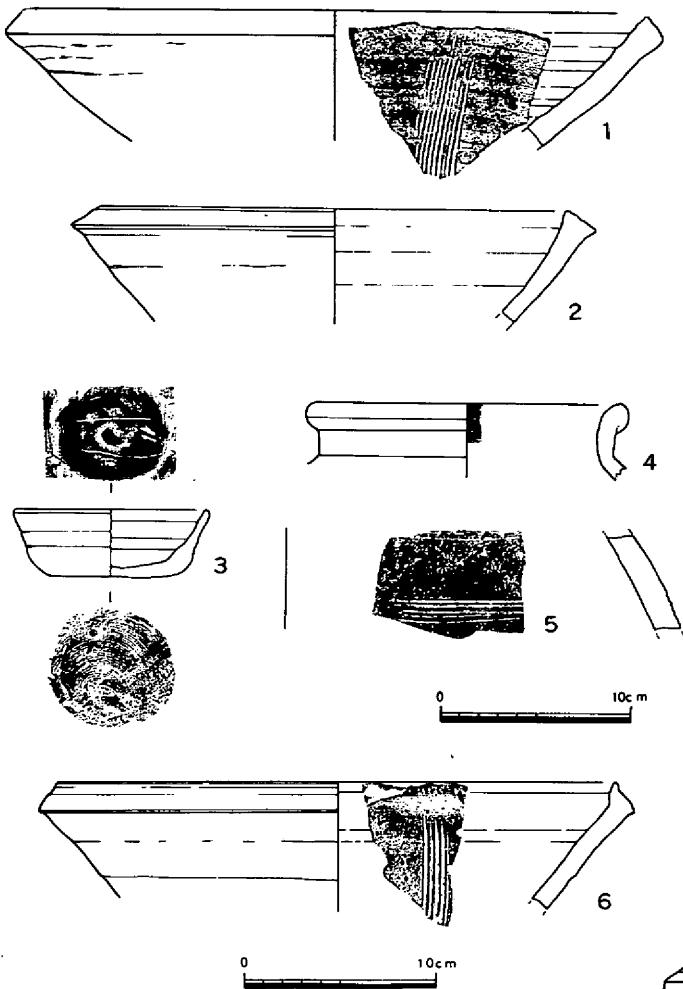
二宮遺跡



第168図 岡東B・C地区出土遺物 (1/3)

二宮遺跡

(1) 岡東以西A地区 (第167図)

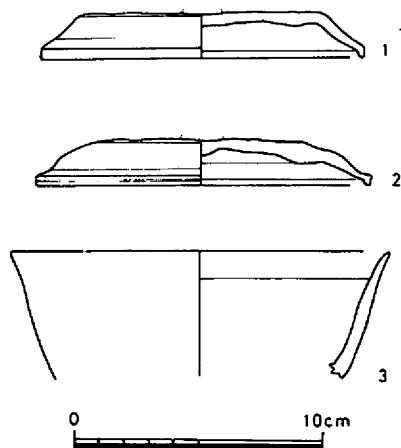


第169図 岡東B地区No.94ピット、柱穴出土遺物 ($\frac{1}{4}$ ・ $\frac{1}{3}$)

奈良・平安時代の土器、中世と考えられる瓦、瓦質土器、備前焼、勝田焼、瀬戸焼、青磁等がみられる。

1～3 (第168図) は須恵器の杯身であり、個々に若干の時期差がみられ、4・5も奈良時代に比定されるものと考える。6・7は須恵質の平瓦、軒平瓦の破片であり鎌倉時代と考えられる。8は内面に線刻による格子目、外面底に右回りの糸切りの痕跡をとどめる瀬戸糸の卸し皿である。9は内面見込中心部に魚文が描かれており、凹底部を除き、青緑色の釉薬が施され

前述した立石家墓参道東端より畠の溝にそって、南に延長した線上の西側部分がそれにあたる。丘陵は南北に7°～8°の傾斜をもち、以東に比べて若干なだらかな斜面である。地形図において表出する溝が南北に入り、後世の畠地として利用された痕跡が多くとどめ、その破壊は下部遺構に及んでいる (第166図)。住居址が3箇所、建物5、柱穴列4、袋状ピット2、土壙中央にピットをもつ土壙2、まとまらない柱穴多数が検出されている。表土より遺構面までの堆積土は40～50cmをはかり、層中より弥生時代中期後半～後期前半の土器・石器、6世紀末～7世紀初頭の須恵器、



岡東B地区柱穴出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡

る青磁皿である。これらの魚文は12世紀末～13世紀前半にかけての浙江省甌泉窯系等にみられるようである（註15）。

1～6（第169図）は備前焼であり、下段1～3は須恵器杯蓋・身である。1～2は口縁部が若干上下に拡張し、焼成胎土とも良好な擂鉢である。鎌倉時代末～室町時代初頭に比定できるものであろう。3は口径10.2cm、器高3.6cmをはかり、赤褐色を呈し重ね焼き痕跡をとどめる小皿である。内面クロロびきの凹凸をとどめる底には線刻による井印がみられ、外面底は右回りの糸切り痕をとどめる。4・5は壺・甕の口縁・肩部である。5～6条単位の櫛状工具による凹線が2段に一巡している。6は№94建物柱穴内上層より出土したものである。胎土・焼成・形態等から室町時代中頃、14世紀末～15世紀にかけての擂鉢と考えられる。

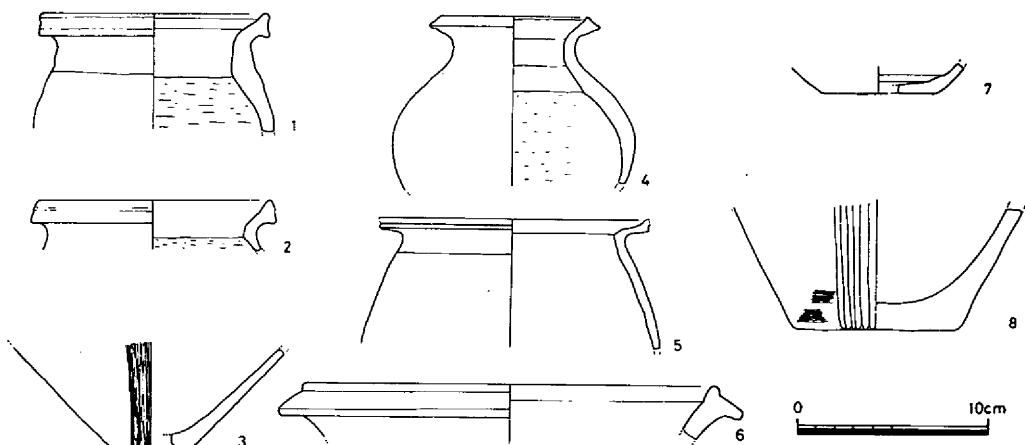
下図1～3はBトレーナー同柱穴内より出土したものであり、1・2はつまみのとれた痕跡をとどめる。焼成・胎土ともに良好にて薄手に仕上げられている。

1～8（第170図）は岡東地区B・C・E地区の柱穴内より出土したものである。弥生時代後期前半より後期後半にかけてのものが主流をしめており、遺構のまとまりとしては検出できなかったが、弥生時代の生活面が後世の削平・攪乱を受けたことを物語っている。

No.82 住居址（第171図、図版64・65—1・4）

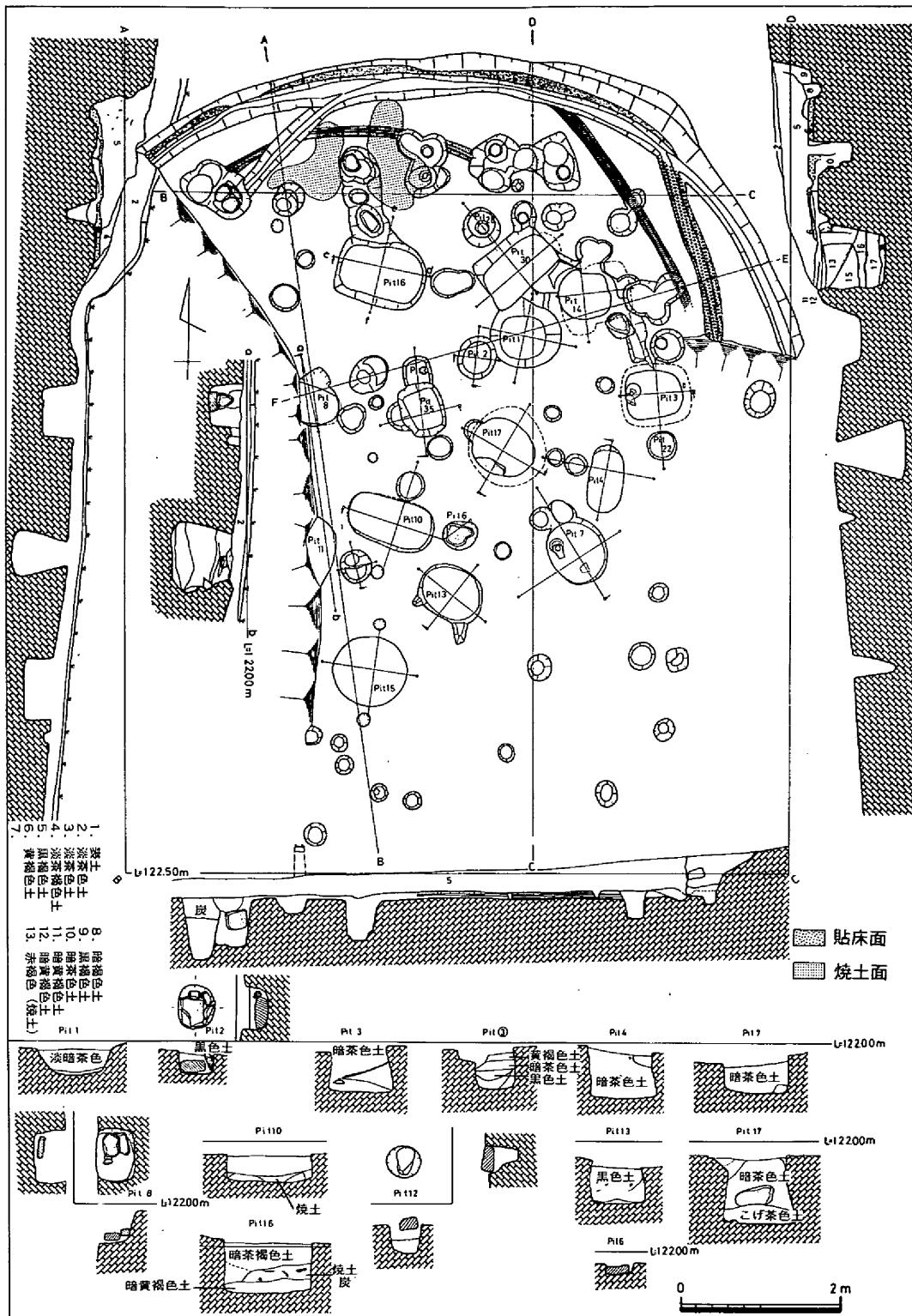
5～6軒の重複、切り合い関係が認められ床高は約10cmをはかり、もっとも新しい住居址面は火災を受けた痕跡をとどめる。これらは小型住居址より大型住居址に変化しているのが理解できる。住居址南側約1mが近代の畠地として利用されており、床面下20cmまでに削平がおよび壁体溝等は検出不可能であった。主柱穴はまとめることができなかつたが、4本等の簡単なものとは考えられず6～8本等の多柱穴のものが考えられる。なかには柱穴内に河原石の土台をもつものが4箇所みられた。

住居址内には直径40～100cmをはかる袋状ピット、土壙等約20個が存在し、焼土・炭等が充満す



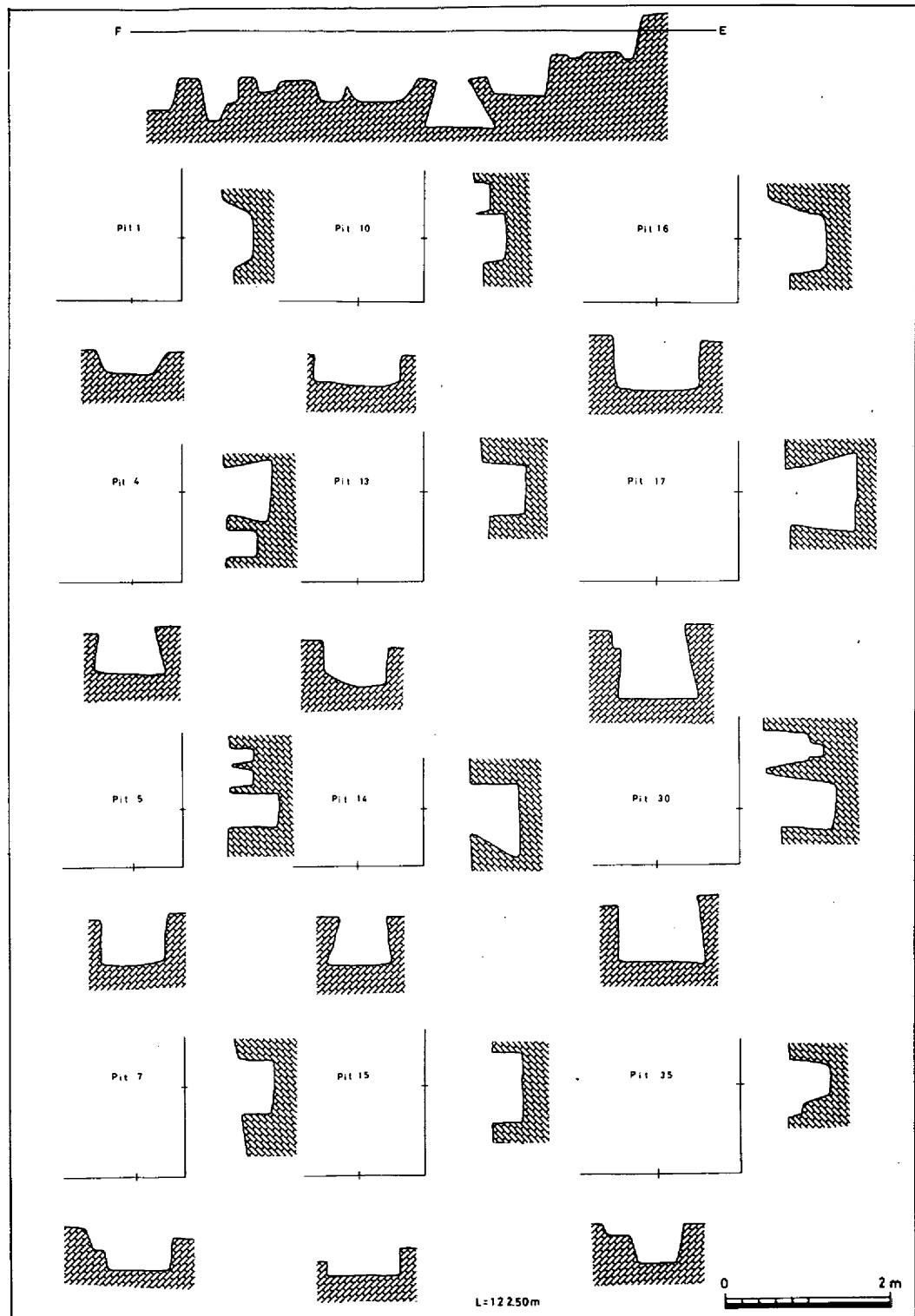
第170図 岡東B・C地区出土遺物（ $\frac{1}{4}$ ）

二宮遺跡



第171図 No.82住居址 (1/80)

二宮遺跡



第172図 No.82住居址内ピット (1/80)

二宮遺跡

るものから、小炭片のみのものまで各種がみられ、pit 3・11・14・15・17が袋状ピットであり、他に長方形で垂直に掘開されたもの、皿状に掘開されたものがある。これらはNo.83住居址内袋状ピットに比べて小規模のものである。

遺物は覆土・床面・土壙内より出土しており、pit 3のように土器とともに石包丁が検出された袋状ピットもある。住居址の時期は弥生時代後期を中心と考えられ、なかでも後半～末にかけての遺物が多く存在する。

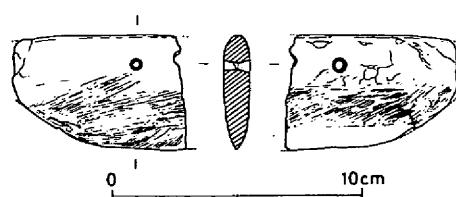
遺物（第174図、図版134・135）

1～14は住居址内堆積土中より検出されたものであり、15～17が最終床面、18～25がそれぞれの土壙内より出土したものである。

1・2・5・6は拡張する口縁部に2～3条の凹線文がみられ、胴部内面は横位のヘラ削りが施されるものである。3、4は拡張する口縁部に櫛状工具によるナデが施され、胴部内面に横位のヘラ削りがみられる。7～10は複合口縁を有する甕形土器であり、口縁部は回転整形の凹凸が目立つものが多い。9は丹塗りが施されている。11・12は器台形土器の筒部と考えられるものであり、わりと精製された粘土が使用されており、焼成は良好である。11はタガ状突起を境にして上位に4本の凹線文、下位に三重円形のスタンプが押されている。12もタガ状突起の剝落した痕跡を鋸歯文下位にみとめることができ、鋸歯文上位には長方形の透し孔が確認できる。この鋸歯文は線刻によるもので彎状に描かれている。13は高杯の脚部であり精製された粘土がつかわされており、暗赤灰褐色を呈する。14は甕形土器の底部であり、表面剝落が著しいが縦刷毛によるナデを確認することができる。16は台部であり、底部を除く器内外面に丹塗りが行われている。

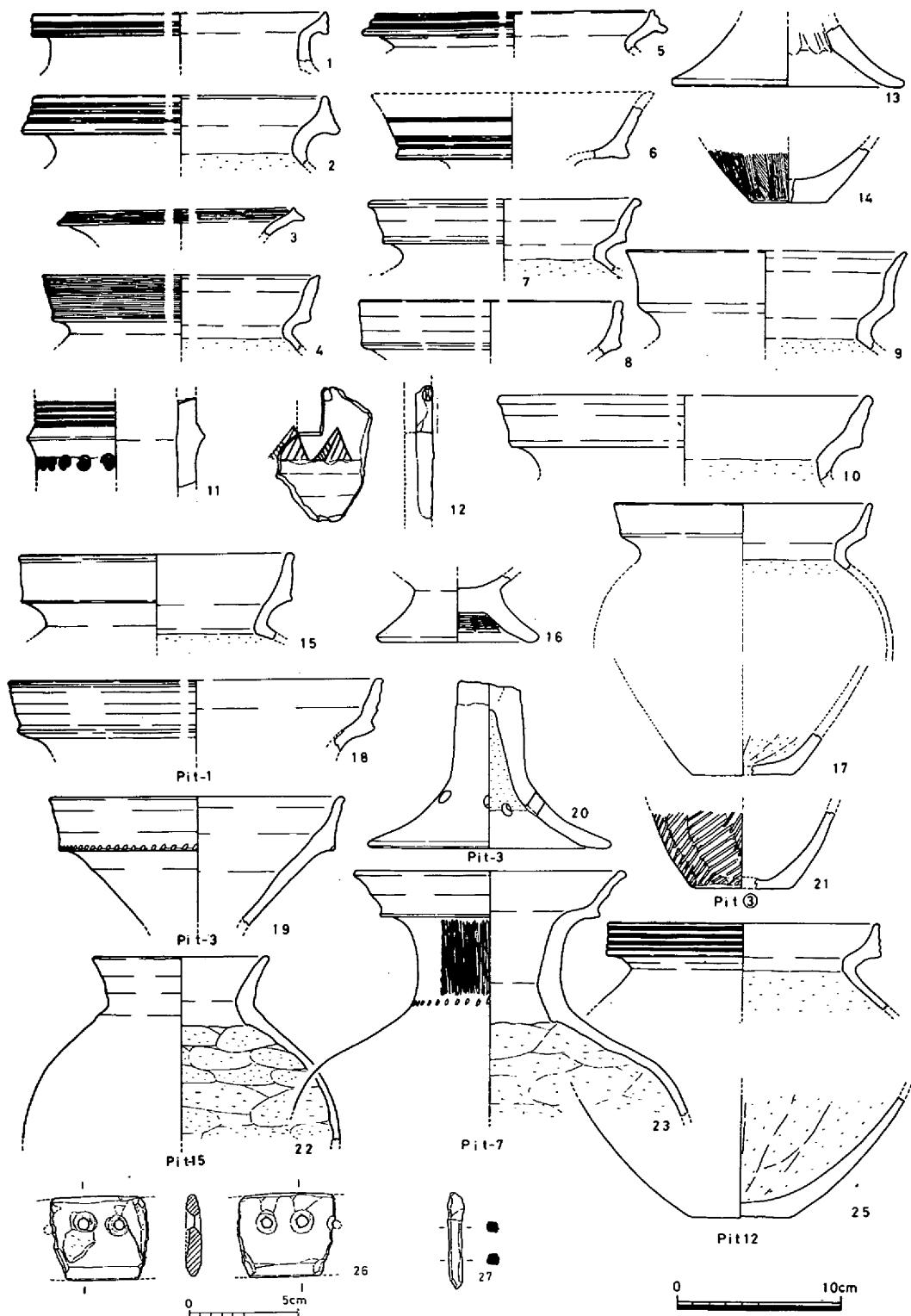
17・18は複合口縁を有する甕形土器であり、19は器台の可能性をもつものである。器面の剝落が著しく、整形はほとんど観察することができず、白色小砂粒を多量に含むのが目立つ。底部は平底になるものと考えられる。20は19と重なり合って出土したものであり、器壁の厚い中空の高杯脚にて外面からの貫通孔5穴がみられる。21は右上りの細筋タタキ目をもつ甕形土器である。淡黄灰褐色を呈し、底径6cmをはかる。内面の整形は不明である。22は直口の甕形土器であり、胴部内面に荒いヘラ削りが施されている。23は長頸壺であり、下方へ拡張しない筒状の頭部に縦ヘラ磨きが施され、下位に米粒状刺突が一巡する。25は土圧により破損していた甕形土器の口縁部と底部である。垂直に立上がる口縁部に4本の凹線文が施されており、胴部内面はヘラ削りがみられる。小型の底面積をもつものである。

総じて、器壁が厚く、大型の白色小砂粒を含むものが多い。甕では1・2・3・5等の器厚のあるものと、垂直及び外反しながら立上がる複合口縁の2形態に分かれる。前者は弥生時代後期前半に比定できるものであろう。21等のタタキ目を持つ土器は、美作地方では河辺天神原遺跡、太田十二社遺跡（註16）、小中遺跡（註17）等の弥生時代後期後半



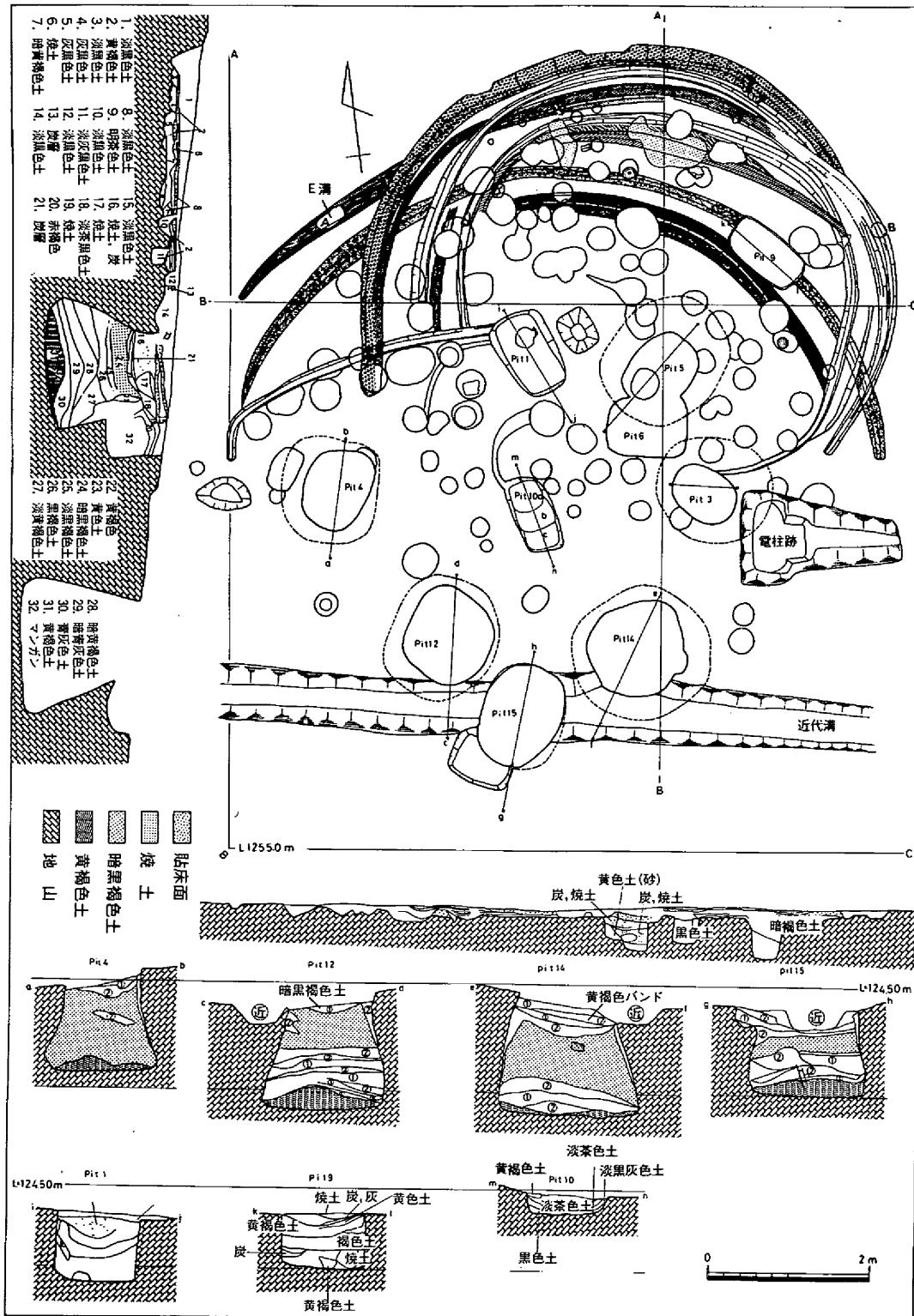
第173図 No.82住居址出土遺物（ $\frac{1}{2}$ ）

二宮遺跡



第174図 No.82住居址出土遺物 (1/4)

二宮遺跡



第175図 No.83住居址 ($\frac{1}{80}$)

二宮遺跡

の時期にまとまっての出土がみられる。

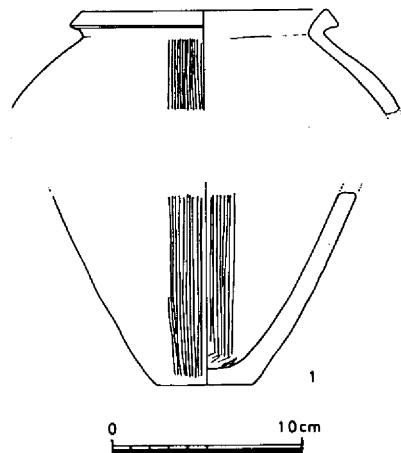
No.83 住居址 (第175図、図版66・67・68・69・70)

合計13軒の住居址が $10m \times 10m$ のほぼ $100m^2$ に限定された状態で、重複、切り合い関係をもって検出されたものである。

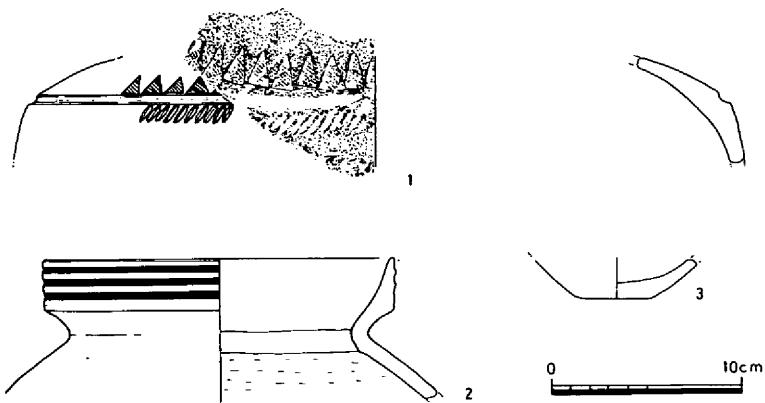
最も新しいと考えられる隅丸方形の一軒を除き、円形あるいは楕円プランのものが主流をしめており、規模、切り合い、重複関係等より、これらは大きく3つの意識にわけることができる。まず、pit 10 の中央ピットを中心として同心円状にとりまき、直径約8m前後をはかる4軒の大型住居址、それより北東のpit 1、5間を中心にして直径6.5m前後をはかる8軒の小型住居址、pit 1 を切る隅丸方形の1軒となり、築造使用順序もこの流れと考えられる。

大型住居址が同心円状に拡張され、その最終4軒目が小型住居址によって切られており、小型住居址貼床15cm下に大型住居址の壁体溝を検出できた。小型住居址についての重複、切り合いの具体性は明確にしえなかつたが、最も外側をまわる壁体溝が最終の貼床面をもっており規模が大型化していったことがうかがえる。この住居址は火災を受けていた。

他に4軒の大型住居址に伴うと考えられるものに5基の袋状ピットがある。これらはpit 10を中心にして環状に配置されており、pit 5・14のように大型のもの、pit 3・12のように中型のもの、pit 4・15のように小型と規模の相異がみられるが、個々の切り合い関係はみられない。pit 10は3回の拡張使用の痕跡をとどめる。袋状ピット内堆積は岡の山A地区の袋状ピットのように砂時計の砂山状の堆積がみられたが、堆積土は粘性をおびた硬質のものであり、若干の土器片、サヌカイト剝片等が各層で少量づつ確認できた。pit 1・9等のように隅丸方形を呈し、大型の住居址を切ってつくられているものもある。pit 1の底部には完形品が横転して出土している。これらはNo.82住居址にみられたpit 10等と同規模を有する土壌であり、時

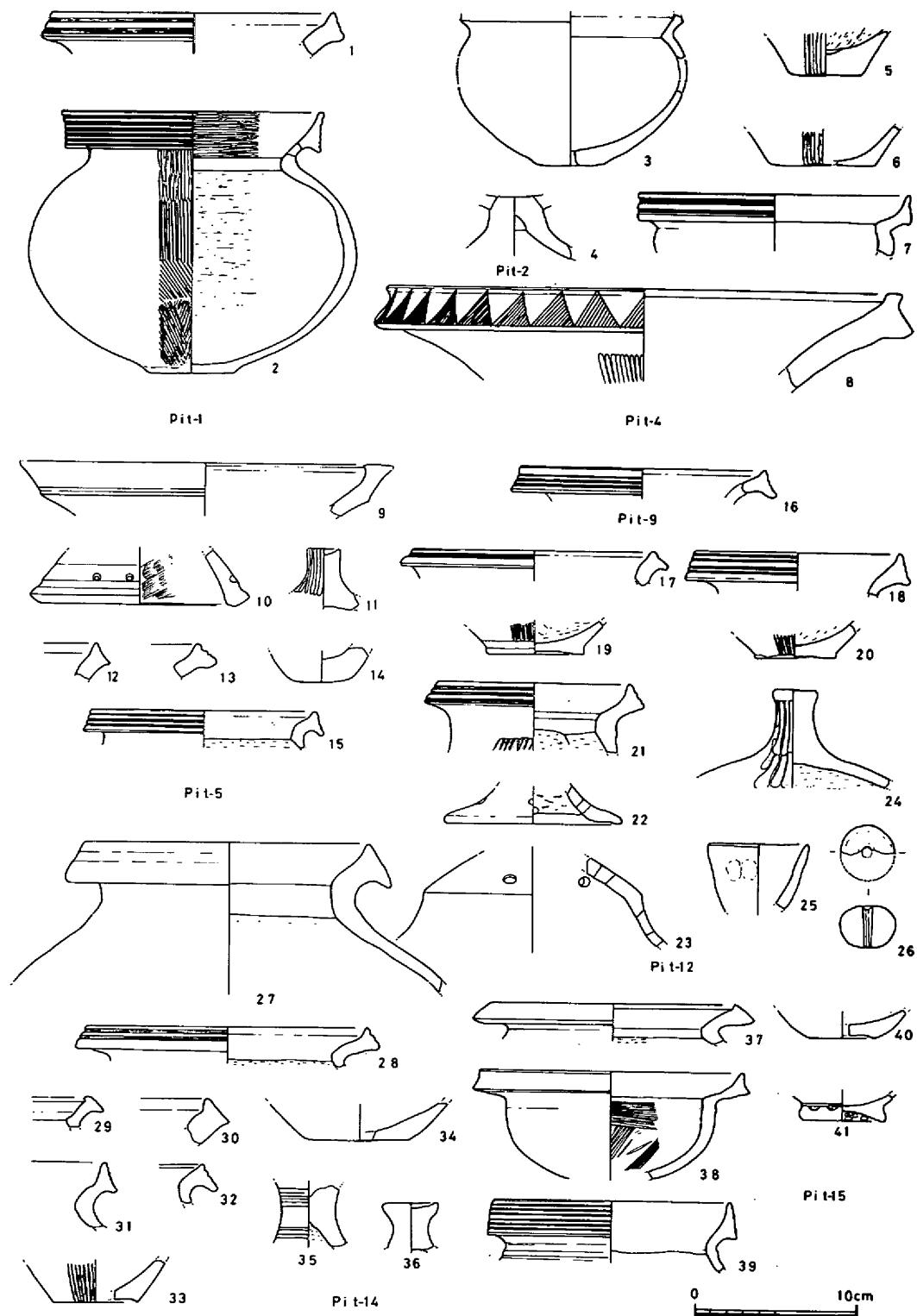


第176図 No.83 E溝出土遺物 (1/4)



第177図 No.83 住居址出土遺物 (1/4)

二 宮 遺 跡



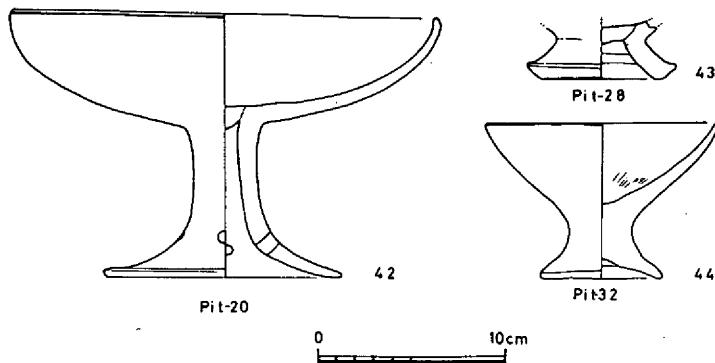
第178図 No.83住居址出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

二宮遺跡

期的に同じころのものと考えられる。

遺物

1 (第176図)は大型住居址周溝内床面上のA地点より出土したものである。口径12.5cm、残存高15cmをはかり暗褐色を呈する甕形土器である。器内外面に同一刷毛状工具による太目の縦ナデが施されており、器壁の厚い土器である。



第179図 No.83住居址出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

1 (第177図)は小型住居址B地点より出土したものである。大型甕形土器の胴部と考えられ、最大径39cmをはかり、肩部に凹線が一巡している。それを境にして上位にスタンプによる鋸歯文、下位に同一工具の側面使用と考えられる刺突文が同様に巡っている。胎土は特に精製粘土が使用されているというのではなく荒いものである。内面は指頭と思われるナデにより、口縁部に3本の凹線文が施されている甕形土器である。3は不安定な平底にて、胎土中に白色小砂粒を多く含む底部である。

各ピット内出土遺物 (第178・179図)

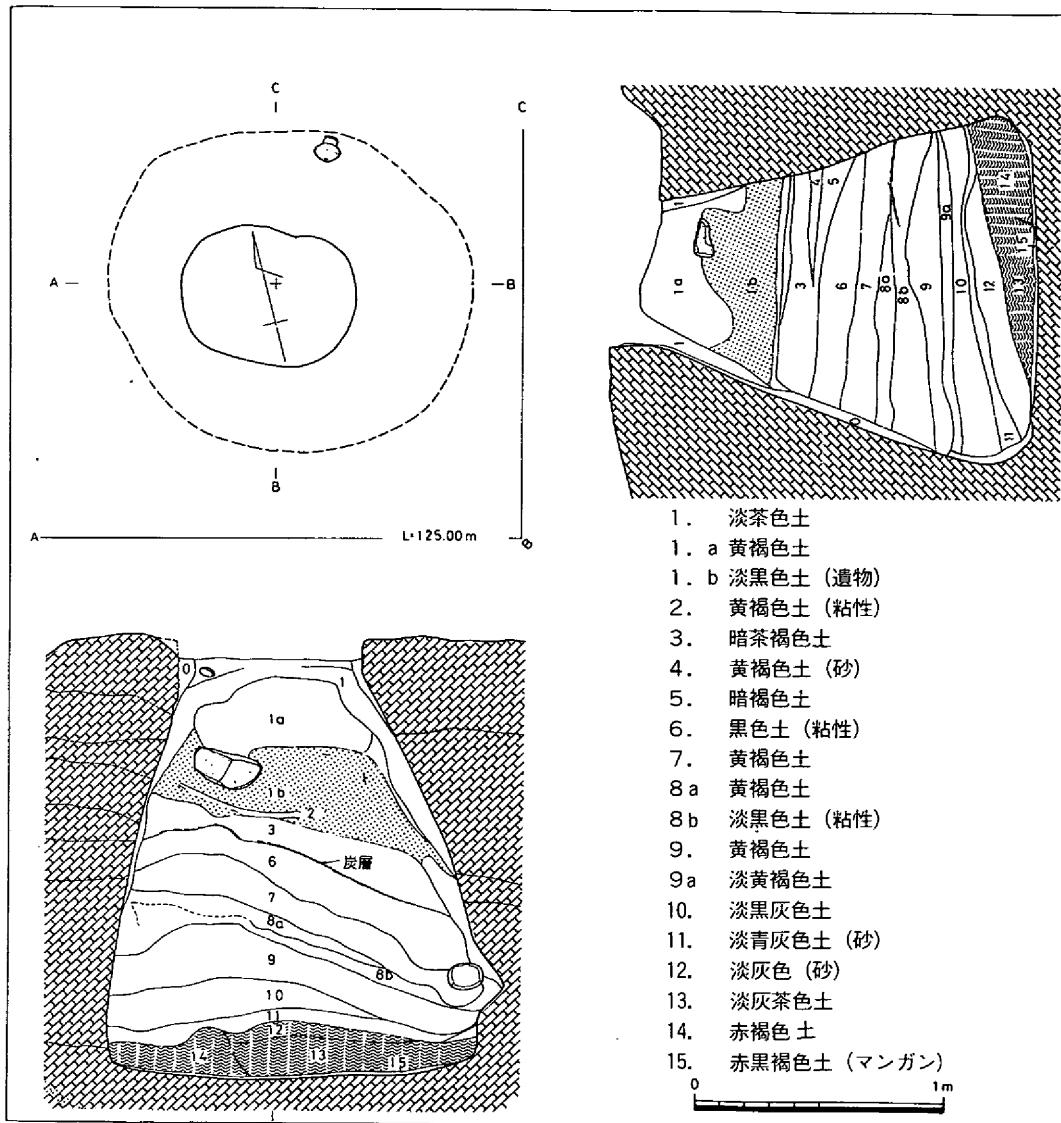
1～41は各袋状ピット内より検出されたものである。出土袋状ピット番号は図下に示してある。

2は口径15.8cm、器高16cm、胴部最大径20cm、底径5cmをはかり、色調暗黄褐色を呈する甕形土器である。口縁部外面はハイ貝等による二枚貝の腹縁利用の凹線文がみられ、内面は細かい横位のヘラ磨きが施されている。胴部外面はヘラ磨きが頸部より胴部上位までおよび、下位にしたがい太目の刷毛、細目の刷毛ナデと変化している。内面は左回りのヘラ削りがみられる。外面下半はススが付着している。

3は器内外面とも円滑に仕上げられた甕形土器である。精製粘土が使用されており、丸底化の進んだものである。4は高杯の短脚部分である。胎土中に白色小砂粒を多量に含んでいる。5・6・7はpit 5・6の上層にて混在して出土したものである。8はpit 4下層より出土した器台形土器である。口径30cmをはかり精製粘土が利用されたものである。口縁部上端を水平に造り出しており、下位に線刻による鋸歯文が一巡している。器内外面はヨコナデが中心に施されているが、外面はヨコナデ下位に縦位のヘラ磨きがみられる。

9は高杯の杯部である。器内外面はナデにより仕上げられており、白色小砂粒が目立つ。10は高杯の脚部であり、外面に2孔一対の貫通しない穴がみられる。内面は刷毛状工具による搔取り痕が存在する。11は精製粘土を使用してつくられた蓋である。器内外面ともヘラ磨きが施されている。12・13・15は甕形土器口縁部分であり、12・15は外面にススが付着している。

二宮遺跡



第180図 No.83住居址内袋状ピット3 (1/30)

16・17・18は口縁部に凹線文をもつ甕形土器であり、17は外面にススが付着している。19・20は底部である。内外面とも刷毛ナデが施されており、内面および底部外面はさらに細かいナデがみられる。21～26は下層出土のものであり、22は高杯脚部であり4孔が穿かれている。外面にヘラ磨き後、丹塗りが施され、内面は搔取りに近いヘラ削りがみられる。23も同じく脚部であり、稜線を境に上段に5穴、下段にも5穴が穿かれている。24は蓋であり、器外面は面取り状のヘラ磨きが行われ、内面は凹凸の著しいヘラ削りがみられる。25は口径6.2 cm、残存高4 cmをはかり、黄褐色を呈する手捏ねの鉢形土器である。指頭圧痕を残し、内外面指頭のナデによって付上げられている。26は直径3.4 cm、

二 宮 遺 跡

厚さ2.5cmをはかる土製の玉である。外面はよく研磨されており、貫通する孔は直径0.6cmをはかる。27~29は上層より出土したものであり、口縁部内外面はヨコナデにより、27・28の内面はヘラ削りが行われている。30~36は床面出土のものである。35は高杯柱部にてヘラ描き沈線が2段に施されている。36は蓋であろう。

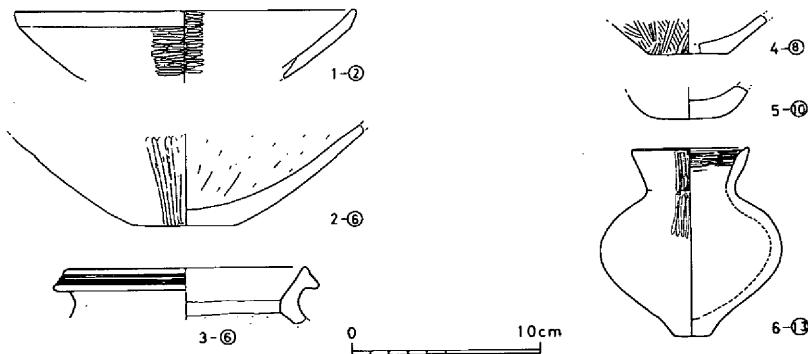
37は口縁部内外面ヨコナデにより、内面はヘラ削りが施されている。38は口径16cm、器高7cmをはかり、色調赤褐色を呈する鉢形土器である。口縁部内外面はヨコナデにより、脚部外面横位のヘラ磨き、内面は搔取り状の刷毛ナデが横・斜位に施されている。39は複合口縁に凹線文を施した甕形土器である。40は精製粘土を利用した赤褐色を呈する不安定な底部である。41は凸底の底部であり、底部外面は指頭圧痕が全面にみられる。

42はpit20内より立った状態で出土したものである。口径22.7cm、底径12.7cm、器高14cmをはかり、脚内面を除く全面に丹が施された高杯である。内彎する杯部と中空の脚部からなり、円盤充填により作製されており、脚には4小孔が穿たれている。精製粘土の使用されたものである。44は口径12.4cm、底径6.5cm、器高8.2cmをはかり、色調黒灰褐色を呈する台付鉢である。器外面は円滑に磨きあげられており、内面は丁寧な指頭ナデが施されている。脚台は蓋部のつまみ形状、及び製作に形態が類似する。

No.83 住居址袋状ピット3 (第180図、図版70)

上端径70cm×55m、底径140cm×130m、深さ170cmをはかり、形態は三角フラスコ状を呈する。底面は円形ではなく、若干東西に長く上端においても同様の形状を呈する。上端より約20cm垂直に下がり、そこより20°の角度でもって下方に拡がりながら底面より約15cm上部で最大径となる。そして、狭まりながらほぼ平坦な底部に向う。

ピット内は上部まで堆積土が充満しており、13~15層に色別することができる。この堆積状況は北より南に傾斜する自然地形に左右されていると考えられ、もっとも高い北北東部分より土が入り込



第181図 No.83住居址袋状ピット3出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

だ状態を示す。この状態は、一般的の土壤、溝等にみられるレンズ状の堆積ではなく、砂時計の砂が凸状に溜る土層断面を呈するものである。15層より3層上面まではその状態を観察できうるが、1b、1a層ではバランスが崩れて入為的に平坦面を形成している。どの層中にも多少の土器小片は混入してお

二宮遺跡

り、それらは比較的黒色系の土層中に多いようである。なかでも1b中に多くみられ、石の周辺を中心には分布しており、破片が目立つ。他に5~26cm位の芋状の河原石が層中に含まれており、大小とりませ100個以上を確認した。このうち11層中が48石と多く、サヌカイト小片等も含まれていた。重さにして29kgをはかる。

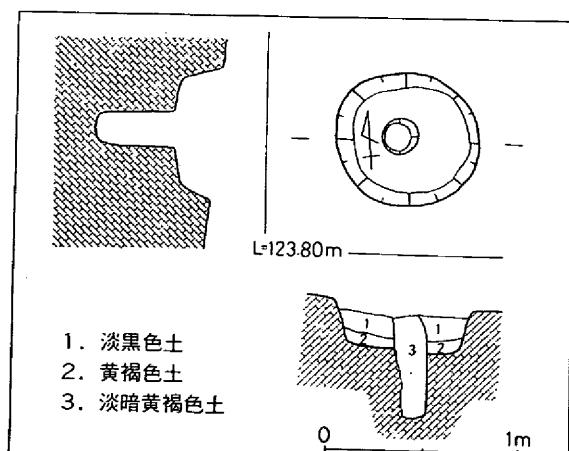
遺物（第181図、図版135）

実測可能なものの6点、他にサヌカイト片が若干出土している。1は口縁18cm、残存高3.5cmをはかり、色調赤褐色を呈する高杯である。精製粘土が使用されており、器内外面とも細かいヘラ磨きがみられ、その上面に、丹塗りが施されている。2層中より出土したものである。2は不安定な底部を有する壺形土器片である。器外面はヘラ磨き、あるいは丁寧なナデがみられ、上面は丹塗りが施されている。内面はヘラ削り後にナデが行われている。6層出土のものである。3は口径12.5cmをはかる壺形土器である。口縁部に3本の凹線がみられ、内面のヘラ削りは明瞭ではない。同じく6層より出土のものである。4は器外面に櫛状の刷毛ナデが施された底部である。暗褐色を呈し、焼成良好のものである。8層より出土したものである。5は丸底に近い底部であり、10層より出土している。6は12層下面より出土したものである。口径6.25cm、胴部最大径9.5cm、底径2cm、器高10cmをはかり、色調黄褐色を呈する小型壺形土器である。器外面は縦のヘラ磨きが、内面上位は横位のヘラ磨きが施されている。この土器により袋状ピットは弥生時代後期後半のものと考えることができる。また3の弥生時代後期前半のものを除き、他は同時期のものと考えられる。

No.90 土壙（第182図、図版72-1）

直径約70cm、深さ25cmをはかる円形土壙である。土壙底中央に径15~17cm、深さ35cmをはかる円形の柱穴がみられ、1層上部、淡黒色土の埋土に淡黄褐色の柱痕跡が確認できる。遺物は何ら検出することができなかった。

ほぼ同形態を有するNo.96土壙が、No.90土壙より南側8m下方に存在する。これらは他にみられず、岡東地区西端にかぎられているようである。



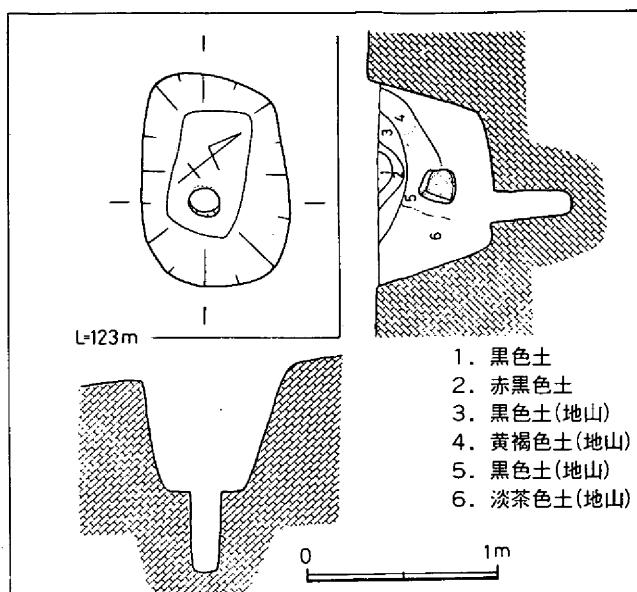
第182図 No.90 土壙 ($\frac{1}{40}$)

No.96 土壙（第183図、図版71-2・72-1）

長軸117cm、短軸74cm、深さ55~57cmをはかり、隅丸長方形を呈する土壙である。主軸が若干西に傾き、地形センターに並行して作られたものである。下端65cm×40cmをはかり、上端同様プランにて中心より南に小土壙がみられる。これは直径約15cm、深さ43cmをはかり、若干北に向かって斜位に掘り込まれている。柱痕は確認することができなかった。

検出時は上面に黒色土がみられたが、堆積状況はレンズ状に5層が確認できた。床面より上位約17cm、レンズ状堆積土層底部に石が

二宮遺跡



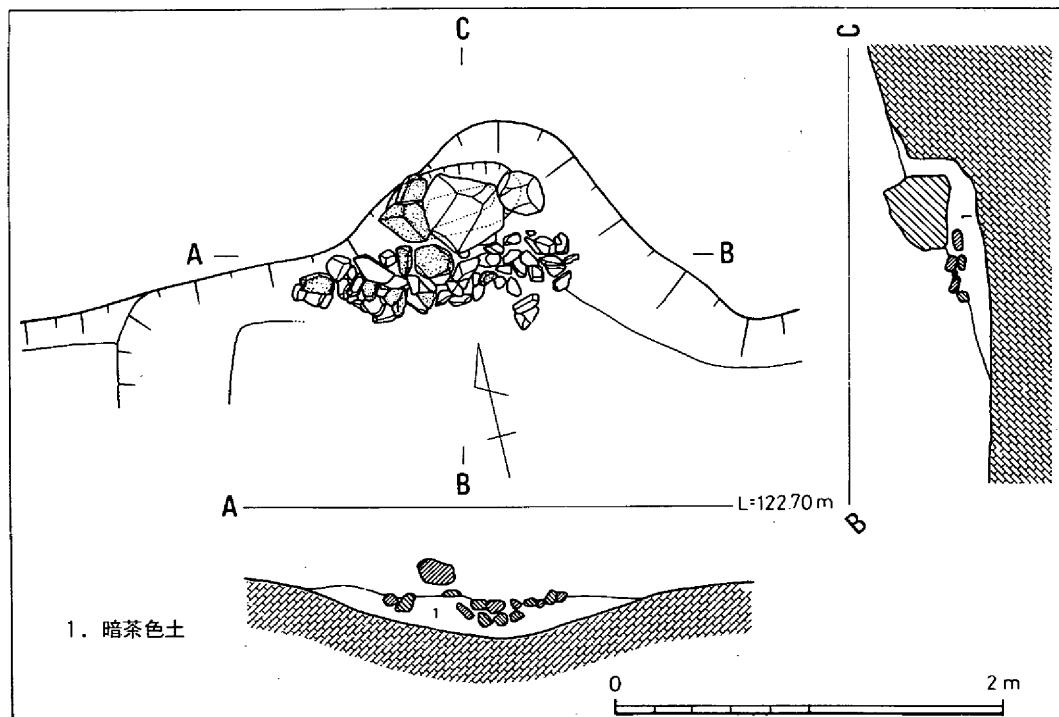
第183図 No.96土壤 ($\frac{1}{40}$)

みられ、埋没した感を受ける。1・
2層中は他の土層と異なり地山ブロ
ック礫の混入はみられず、黒色等の
粒子の細かい土である。美作地方で
はこのように形態の類似する土壌は
弥生時代中期後半～後期前半にかけ
ての集落に伴う可能性がある。

落合町旦原遺跡（註18）、山陽町
惣岡遺跡（註19）等があげられる。
近県では鳥取県米子市青木遺跡（註
20）等の縄文時代晚期「落し穴」と
断定されているものに形態が近いも
のである。

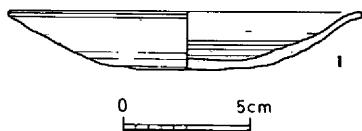
No.127 土壌（第184図、図版72
—2）

従来ならば、橢円形に掘り込まれ



第184図 No.127 土壌 ($\frac{1}{40}$)

二 宮 遺 跡



第185図 No.127配石土壙
出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

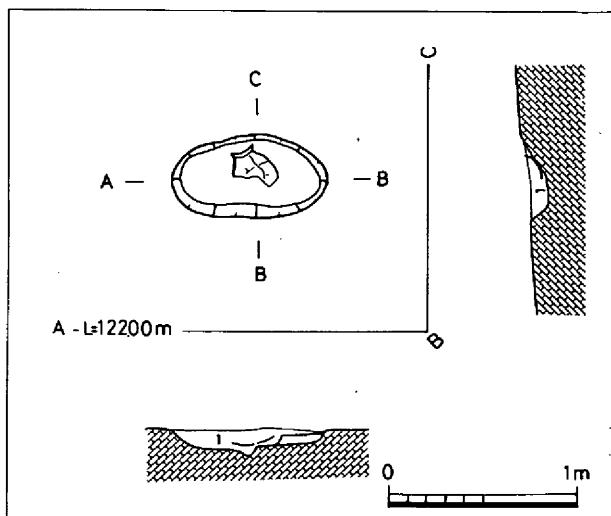
た土壙と考えられるが、近代の畑耕作により段状に削平を受けて南側半分が削り取られている。ゆえに、規模・範囲は明確にしえないが、石材が敷き詰められた $150\text{cm} \times 100\text{cm}$ の範囲にまとまりをみせ、その部分が若干凹部を形成している。石材は小石が中心であるが、北側部分に「一人持ち」の大石が配され、周辺に拳大が3石みられる。その下位に $70\text{cm} \times 35\text{cm}$ の楕円形の土壙が検出され、土師器皿形土器が破碎された状

態で出土している。これらの石材はどれも地山面には接しておらず、暗黄褐色土を間層にもち浮いた状態である。

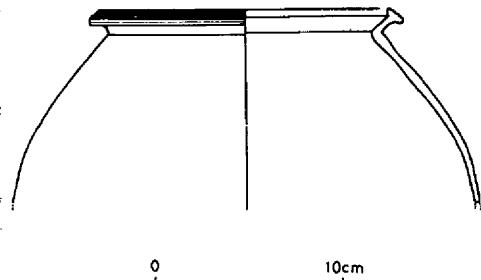
遺物（第185図）

「一人持ち」石の下位より出土したものである。口径 13.9cm 、底径 6.2cm 、器高 2.3cm をはかり色調乳黄褐色を呈する土師器皿である。丸みをもつ底部より 30° の角度をもって立上がり、口縁部付近にて外反の傾向を示す。器内外面にはロクロびきの凹凸が鮮明にみとめられ、器厚 $0.2\sim 0.4\text{cm}$ と非常に

薄くつくられており、内面底は不規則なナデが施されている。底部はヘラ削り状の痕跡をとどめるが明確ではなく、ロクロ回転は左回りである。



No.108 土壙 ($\frac{1}{40}$)



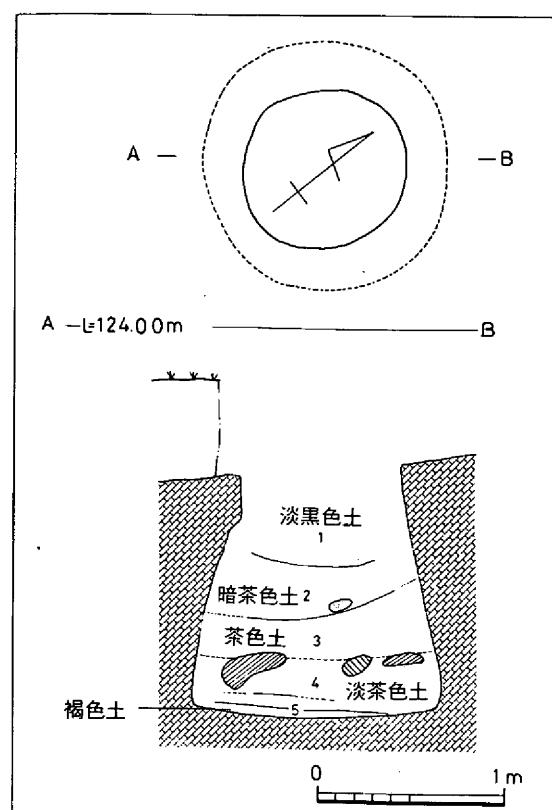
第186図 No.108 土壙出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

No.108 土壙（第186図）

この小土壙が存在するB—5線グリッド付近の海拔 $121\sim 121.50\text{m}$ 間は柱穴の密度が高く、帯状に幅 4m で分布している。すぐ上部にあたる海拔 $121.50\sim 122.50\text{m}$ 間は、前述のNo.82住居址、No.127土壙等が削り取られた畑の削平部分にあたり、遺構が消滅してしまった可能性が充分にうかがえる。

No.108 土壙は若干、削平を受けていると思われるが、現存状況では長径約 80cm 、短径約 45cm 、深さ $10\sim 15\text{cm}$ をはかる小判形の土壙である。土壙内ほぼ中央に甕形土器が口縁部を北方に向け、胴部は掘り方にあわせながら底部を床面につける状態で出土している。甕形土器は縦割り半分が削平により消

二宮遺跡



第187図 No.100袋状ピット ($\frac{1}{40}$)

滅している。

遺物 (第186図)

口径15cm、胴部最大径16.8cm、残存高10.5cmをはかり、色調暗茶色を呈する甕形土器である。胎土中に白色小砂粒を含み、器内外面の剝落が著しいものである。口縁部にみられる3本の凹線文がかろうじて確認できる程度で、他の調整は明らかでない。口縁端部も欠損が考えられ、若干上方に延びる可能性が考えられる。屈曲部分については明瞭な稜線が口縁部内面、くびれ部にみとめられる。

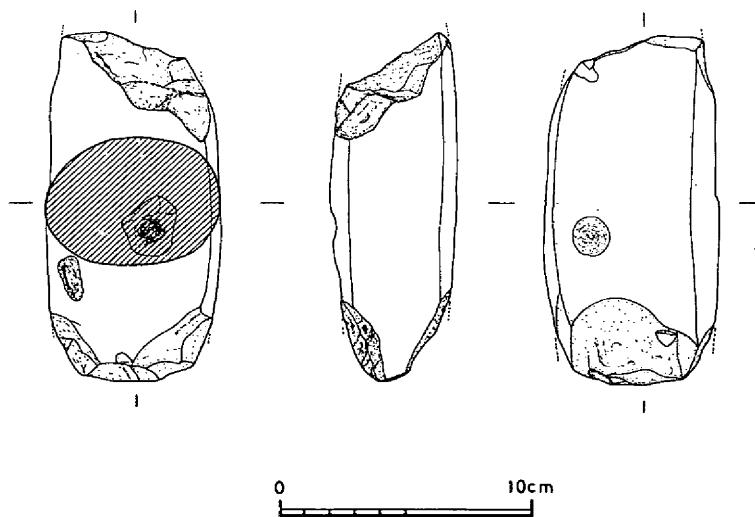
No.100 袋状ピット(第187図、図版73-1)

地表下約50cmより検出された円形プランの袋状ピットである。住居址内に併設されたものではなく単独出土のものである。上端部径85cm、下端部径130cm、深さ約130cmをはかり最大径は底部より約10cm上位にみられる。

堆積土は5層に分類することができ、第1・3・4層に土器が一括投棄された状況を呈し、第2層中からの遺物の出土はみられなか

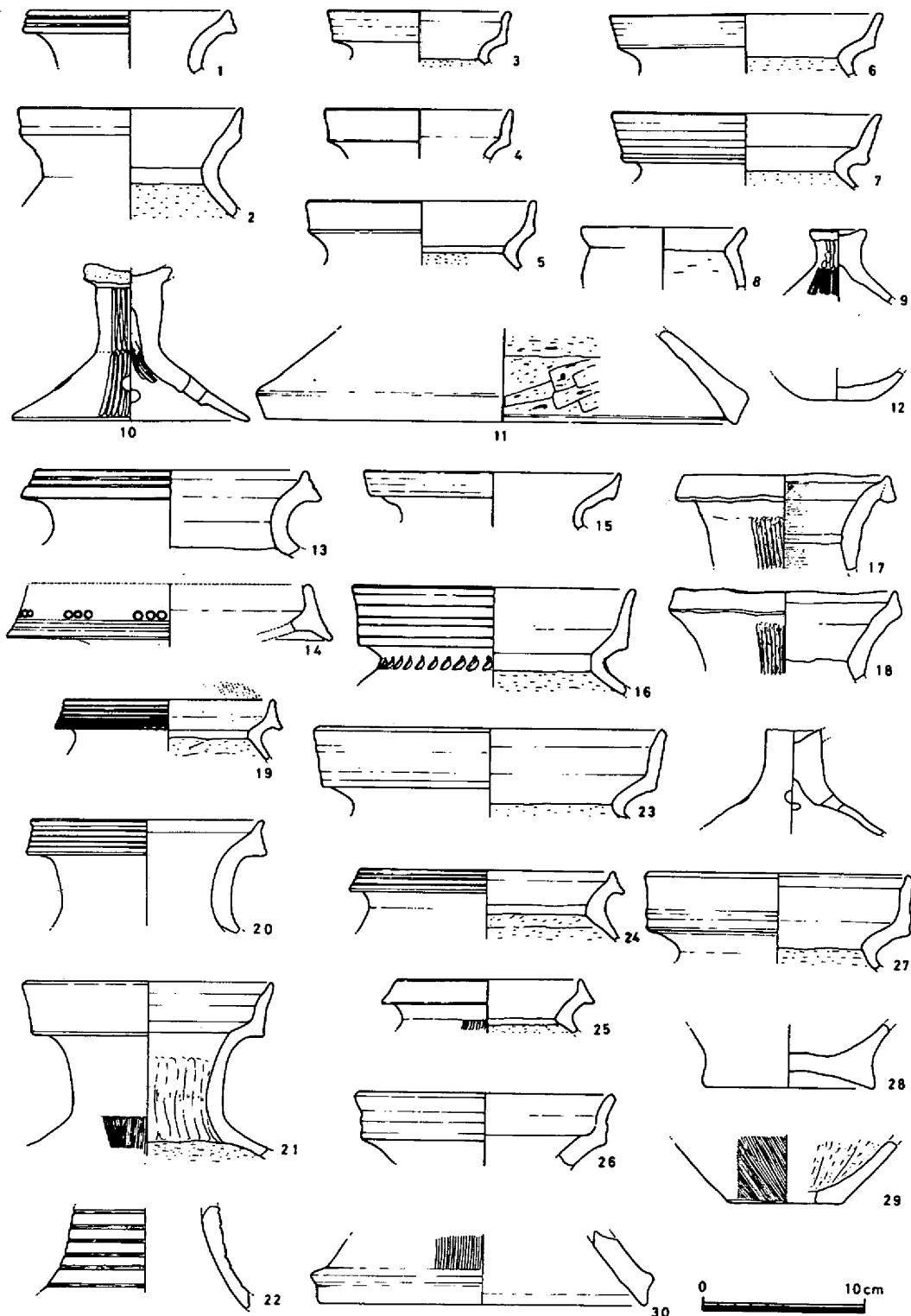
った。他に4層を中心にして、長さ10~15cm重さ約1kg前後の芋状の河原石が53個、砾石1個約44kgがまとまって出土している。この形状を有する河原石は住居址内床面によくみうけられるものである。

3層下位には大型甕形土器が1個体分破碎した状態で出土しており、その破片は他の層にも散逸的にみられ、3層上位に7点、4層集石部分に約



第188図 No.100袋状ピット出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡



第189図 No.100袋状ピット出土遺物 (1/4)

二 宮 遺 跡

10点、4層に3点が存在する。

1・3層の土器片は比較的大型にて口縁部が多く、ついで高杯、蓋の柱状部分がみられ、全体的に器内外の剥落が著しい状態を呈する。

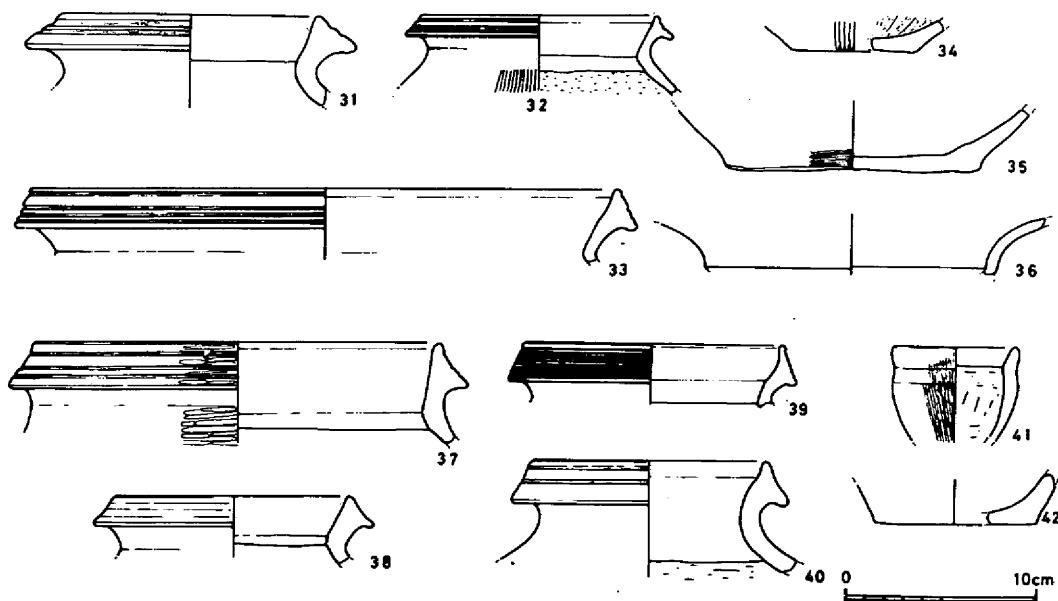
袋状ピットの形態はNo.83住居址のものに近く、なかでもpit 4袋状ピットと同規模でつくられているようである。また、袋状ピット内の芋状河原石はNo.83住居址pit 3・12等にも顕著にみられ、類似点を共有するものである。

これらは、使用痕と考えられる磨もう面が存在するものが大半である。

遺物（第189図・190図、図版136—1）

完形のものではなく、実測可能な土器42点、石器1点を掲載した。

1の口縁部はヨコナデにより2本の凹線文が巡り、色調暗褐色を呈する壺形土器である。2は口径13.5cm、残存高6.5cmをはかり、色調暗褐色を呈する壺形土器である。剥落が著しく胎土中に長石、石英砂粒を多量に含むのが目立っている。口縁部外面はヨコナデ、胴部内面はヘラ削りが施されている。3～7は複合口縁を有する壺形土器である。口縁部外面はヨコナデにより、胴部内面はヘラ削りが施されている。3～6はほぼ均一した壁厚、丸くおさめる口縁端部等の共通点を有する。7については、それらと若干異なり口縁部にロクロ整形によって生じる段状の凹線文が施されており、形態も少し異なる。類似形態を有する土器は、弥生時代後期末と考えられる津山市二宮大成遺跡1号住居址（註21）、同市太田十二社遺跡13号住居址（註16）等で出土している。8は口径10cm、残存高3.6cmをはかり色調暗褐色を呈する壺形土器である。やはり、剥落が著しいため白色小砂粒が器内外に目立つ整形の不明瞭なものである。9は蓋と考えられるものであるが、No.83住居址等でみられた外側ヘラ磨きの痕跡をとどめず、つまみ部分が指頭圧痕、他が櫛状工具による縦刷毛ナデが施されてお



第190図 No.100袋状ピット出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

二 宮 遺 跡

り、焼成は良好のものである。10は底形14cm、残存高9.5cmをはかる色調暗褐色の高杯脚部である。器外面は縦のヘラ磨きが施されており、他は剥落が著しいため整形は不明である。筒部内面はしばり目がみられ、裾部に4孔が穿かれている。11は器台、あるいは高杯の脚部と考えられ、器内外面にヘラ削りが施され、脚端部にはヨコナデが施されている。12は丸みをもつ底部であり、石英小砂粒が胎土中にみられ焼成、胎土とも良好なものであり、赤褐色を呈する。上記12点が第1層より出土したものであり、1・11が若干、古い様相を呈すると考えられる。

13は口径16.2cm、残存高5cmをはかり、褐色を呈する壺形土器である。口縁部内外面はヨコナデが施され、外面に2本の凹線文が巡り、焼成、胎土とも良好のものである。胴部内面整形は細かい横位のヘラ磨きが施されている。14は器台形土器の口縁部と考えられ、口径16cm、残存高3cmをはかる。口縁部内外面はヨコナデが施され、外面に二本の浅い凹線文が巡り、その上位に3個一対の円形竹管文が行われている。他の土器同様剥落が著しいが、さらに竹管文の上位に口縁部より細い櫛描きによる尖部に丸みをもつ鋸歯文一単位が認められる。15は剥落が著しく整形の観察が不可能な壺形土器である。16は口径16.8cm、残存高6.3cmをはかり、色調茶褐色を呈する複合口縁の壺形土器である。口縁部には7と同様段状の凹線文が施され、胴部との接合部には刺突文が一巡する。胴部内面はヘラ削りが施されている。17・18は2点とも造りの悪い壺形土器であり、器内外面とも凹凸が目立ち、手捏ねの感を受けるものである。17は口縁、頸部の内外面とも刷毛ナデにより調整されており、外面が縦、内面が横位のナデが施されている。口縁部は折返された形状を呈し、全体に丸みをおびた鈍い感じのものである。17・18の外面にはススの付着が認められる。19は口径13cm、残存高3.7cmをはかり色調赤褐色を呈する壺形土器である。従来のものとはうって変り、焼成・胎土とも非常に良好にて硬質に焼きあがり、剥落する面はみあたらない。口縁部内外面はヨコナデにより調整され端部に刻目が一巡しており、胴部内面はヘラ削りが施されている。ここまで7点が3層の上部より出土したものであり、13・19の2点が古い様相を呈すると考えられる。

20は口径14cm、残存高6.5cmをはかり色調黒褐色を呈する壺形土器である。口縁部内外面はヨコナデが施され、外面に細い5本の凹線文がみられる。胎土中には長石・石英粒を含み、焼成は良好のものである。21は口径15cm、残存高10.5cmをはかり、色調黄褐色を呈する長頸壺である。口縁部内外面はヨコナデ、頸部外面ヨコナデ、内面しばり目がみられ、胴部外面は櫛状工具による縦位の刷毛、内面荒いヘラ削りが施されている。22は長頸壺の頸部である。21とは筒部の開き具合が逆方向を示すものである。筒部外面には6本の凹線文が施され、内面はナデにより仕上げられている。23は口径21cm、残存高5cmをはかり、色調明褐色を呈する複合口縁の壺形土器である。口縁部内外面はヨコナデにより、胴部内面はヘラ削りが行われている。口縁端部に27と同様の形態的特徴を有する。24は口径15.2cm、残存高4cmをはかり、色調黄褐色を呈する壺形土器である。口縁部内外面はヨコナデが施され、外面に3本の凹線文がみられる。胴部内面はヘラ削りが施されており、胎土は精製粘土が使用されている。25は胴部外面に櫛状工具によるナデがみられる点で24と異なる。外面にススが付着している。26・27は複合口縁を有する壺、壺形土器である。7・16等にみられるほど顕著ではないが、口縁立上がり部に回転による凹凸面が認められる。胴部内面はヘラ削りが施されている。28は底径10.6cm、

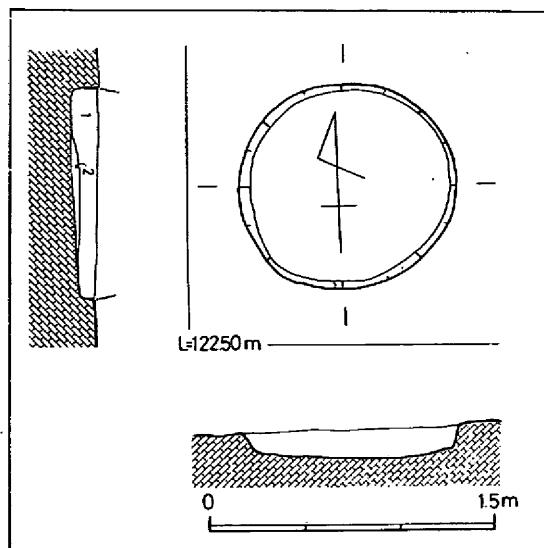
二 宮 遺 跡

残存高 4 cm をはかり、淡黄色を呈する大型の底部である。底部外面は不規則な刷毛ナデが施されており凸底を呈する。29は器外面斜位の刷毛ナデ、内面縦位のヘラ削りが行われている底部である。比較的器壁が均一し、焼成は良好のものである。30は底径 20.8 cm、残存高 4 cm をはかり、色調黄褐色を呈する高杯、あるいは器台形土器の脚部である。器外面は縦位の刷毛ナデ、内面はナデが施されている。胎土中に白色小砂粒を多量に含む。31は口径 13.4 cm、残存高 5 cm をはかり、色調赤褐色を呈する甕形土器である。口縁部内外面はヨコナデが施され、外面に太目の浅い凹線文が施されている。32は口径 12.2 cm、残存高 4 cm をはかる甕形土器である。口縁部外面はヨコナデが施され、外面は 3 本の凹線文がみられる。胴部外面には櫛状工具による縦位のナデ、内面はヘラ削りが行われており、外面はススが付着している。33は口径 31.2 cm、残存高 3.5 cm をはかり、色調淡黄色を呈する大型の甕形土器である。口縁部内外面はヨコナデが施され、外面に 4 本の鋭い凹線文がみられる。34・35は底部である。34は外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラ削りが施されており、スケによる黒色を呈する。35は大型の底部であり、底径 13.5 cm をはかる。剝落が著しいため整形は不明であるが、外面端部に横位の刷毛ナデが一巡するようである。36は精製粘土の使用された高杯形土器の杯部である。器外面に黒斑がみられる。これまでの 18 点が 3 層下部、4 層上面より出土したものである。やはり、1 層、3 層上部同様に 20・22・24・25・28・30・31・32・33・35 等のように古い様相をもつ土器が、新しいと考えられるものに混在している。

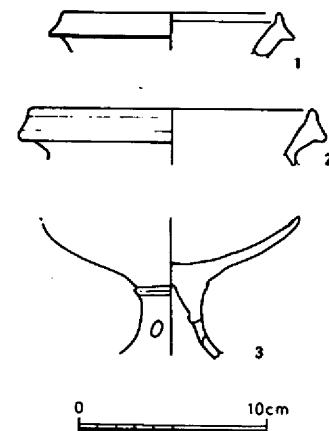
37は口径 21.2 cm、残存高 5 cm をはかり、色調赤黄褐色を呈する甕形土器である。器内外面はヨコナデ後、ヘラ磨きが行われており、その後 3 本の貝殻腹縁状の凹線文が施されている。胎土中には大型の砂粒を含まず、丁寧、優美に仕上げられたものである。38は口径 12 cm、残存高 3.5 cm をはかる甕形土器である。39は口径 13.5 cm、残存高 3.2 cm をはかり、色調褐色を呈する甕形土器である。口縁部内外面はヨコナデが施され、外面に 9 本の細い凹線文がみられる。外面は丹塗りがみられ、37・38 等とは口縁部の形態が異なるものである。40は口径 12.2 cm、残存高 6 cm をはかり、色調黄褐色を呈する甕形土器である。器内外面にヨコナデがみられ、胴部内面はヘラ削りが施されている。同形態のものに №83 住居址 pit14 出土のものがある。他に後期前半に比定される久米町領家遺跡 31 号住居址（註22）、津山市下道山遺跡土器棺等に類似するものがみられる。41は口径 6.6 cm、残存高 5.5 cm をはかり、色調黒茶色を呈する小型の鉢である。口縁部内外面はヨコナデが施され、胴部外面は縦位の刷毛、内面はヘラ削りがみられる。42は器外面に黒斑がみられる底部である。胎土中に白色小砂粒を含み、色調暗灰色を呈する。以上の 6 点が第 4 層中より出土したものである。

1 層より 4 層に向かうにしたがって弥生時代後期前半と考えられる土器片の量が増加する傾向を示す。どの層においても弥生時代後期後半～末と考えられる土器片と混在して出土している。この現象の理解については、今後の類例、および県北の弥生時代後期の土器編年の具体性を追求してゆく必要を感じる。

二宮遺跡



第191図 No.101袋状ピット ($\frac{1}{40}$)



第192図 No.101袋状ピット出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

No.101 袋状ピット (第191図、図版73
—2)

No. 100 袋状ピット同様に住居址内に併設されたものではなく、単独に設けられた状態で出土したものである。しかし、No.82住居址、No.127土壙等と同様に烟による削平を受けており、底部面より上位15cmのみが残存する状況であった。

プランは円形を呈し、直径100cmをはかる小型の袋状ピットである。土壙内には拳より小さい河原石、小土器片が多量に検出された。堆積土は砂時計の砂山状に堆積しており、No.83住居址の袋状ピット、岡の山A地区の袋状ピット等と同様の形状がみられる。

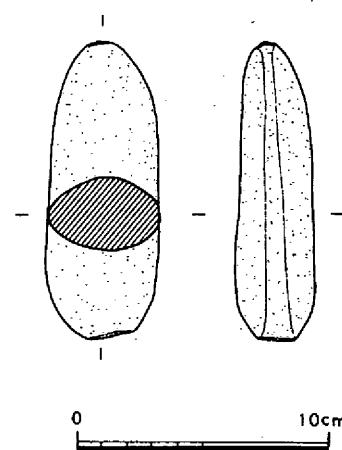
遺物 (第192図)

図示の可能なものは土器3点と石器1点のみである。

1は口径11cm、残存高2cmをはかり、色調茶褐色を呈する甕形土器である。2も同様の甕形土器であり、器面の剥落が著しいため甕形は不明である。3は口縁部、脚端部の欠損した高杯形土器であり、杯部と脚部の接合部分にタガ状小突起が一巡する。器壁は全体的に薄く作られており、精製粘土が使用されている。脚部に3孔が穿かれている。

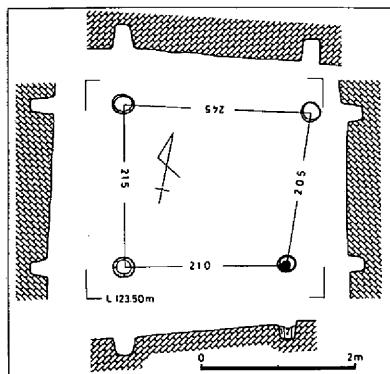
これらも1・2等の古い様相を呈するものと、3のように、若干新しい様相のものとが混在している。

石器は長さ12cm、最大幅4.5cm、厚さ3cmをはかり、断面楕円形を呈する砂岩質のものである。芋状の河原石にて両端部に打面痕がみられ、下端が主に使用されたと考えられ2cm×1.2cmの楕円形の平坦部がみられる。上端は1cm

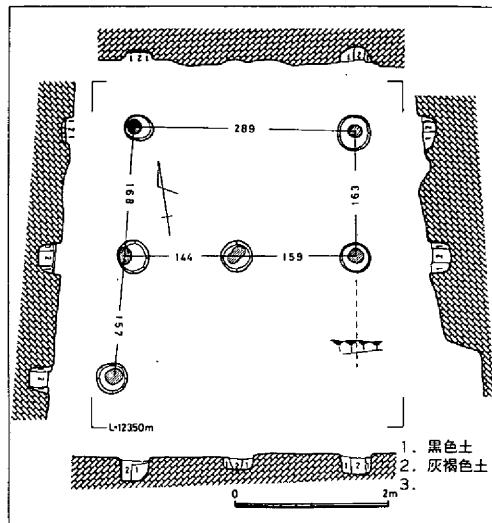


第193図 No.101袋状ピット
出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

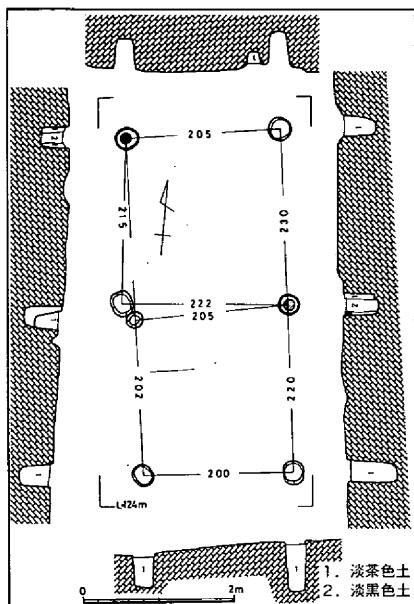
二宮遺跡



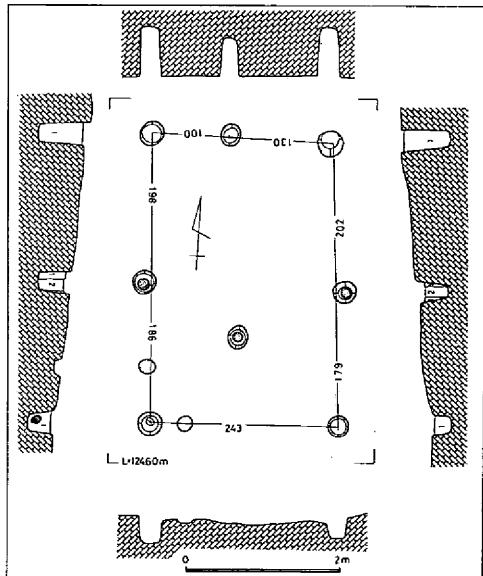
第194図 No.91建物 ($\frac{1}{100}$)



第196図 No.99建物 ($\frac{1}{100}$)



第195図 No.92建物 ($\frac{1}{100}$)



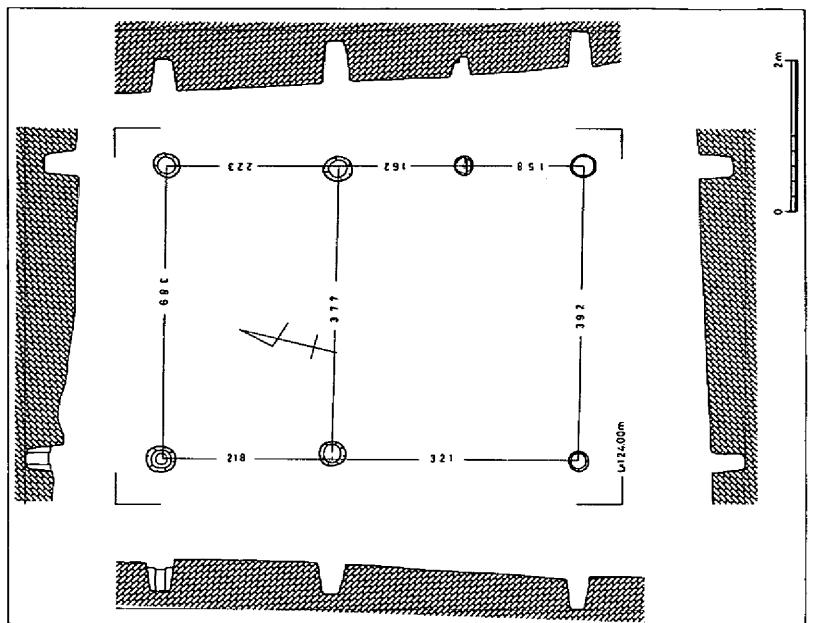
第197図 No.97建物 ($\frac{1}{100}$)

前後の平端部がみられ、柱状部分は使用等による磨もう痕がみられる。

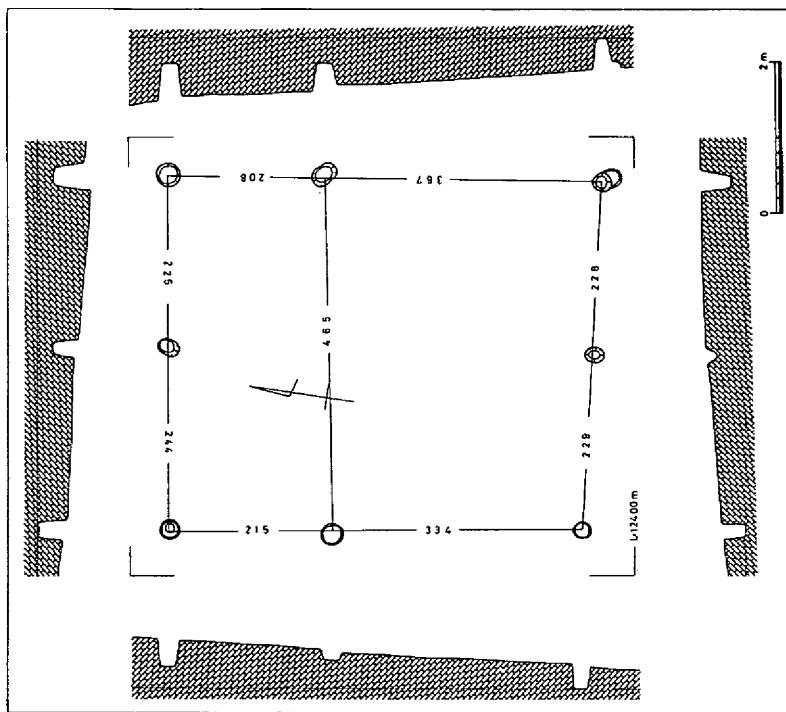
建物（第194図～第199図、図版100—2）

岡東地区検出の建物は荒神元C、岡の北地区等とくらべて比較的小規模のものが多く、No.91、92、97、99建物等がそれにあたる。これらは南北棟のものが多く、No.99建物を除いて柱穴掘り方は小型である。No.94、95建物は切り合い関係で検出されており、No.95建物柱穴内上位より室町時代中頃と考え

二 宮 遺 跡

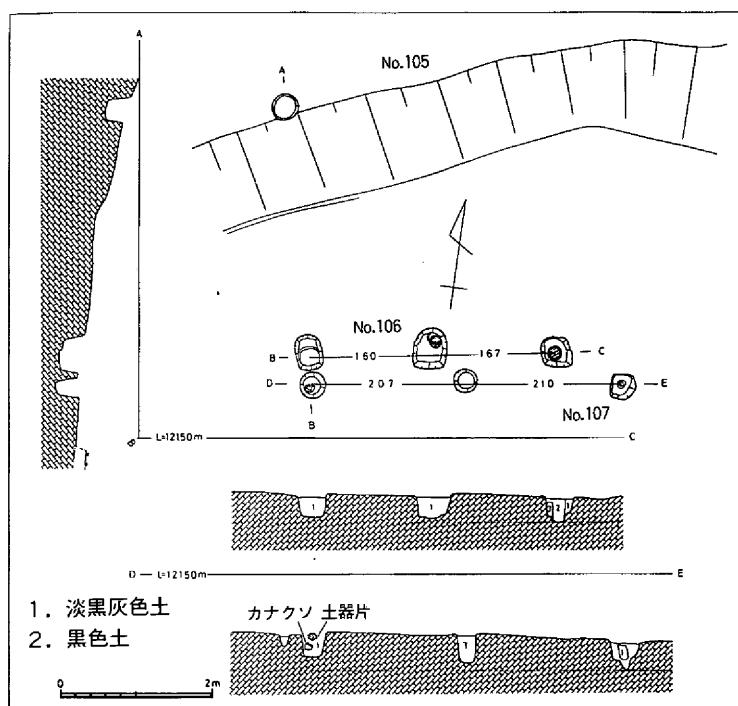


第198図 No.94建物 (1/100)



第199図 No.95建物 (1/100)

二宮遺跡

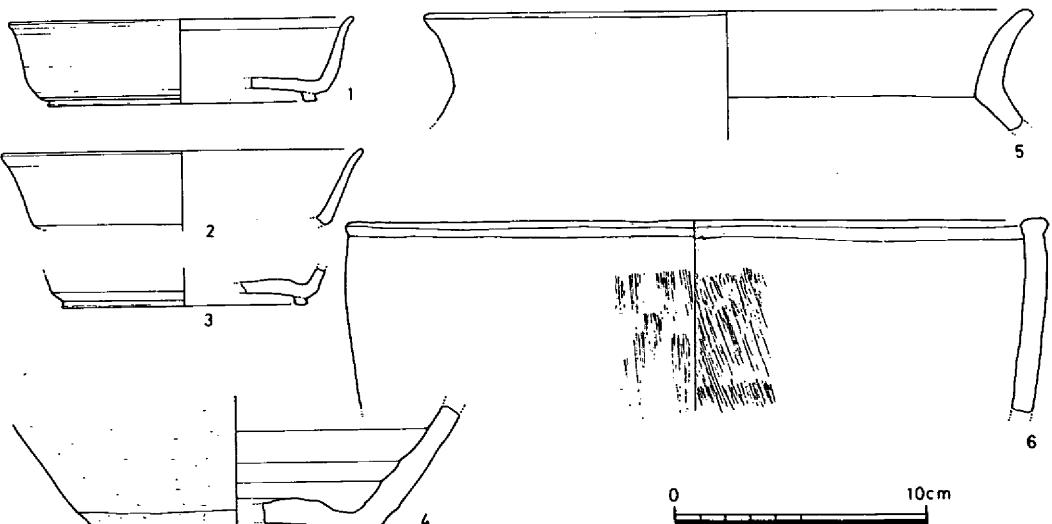


第200図 No.105・106・107遺構 ($\frac{1}{100}$)

らる備前焼鉢が出土している。No.92建物をも含めて、それらの東側にある段状の溝が圓状を呈する内側に存在したものと思われる。これらの建物と同様の桁行をもつものに荒神元C地区No.22建物が存在する。これらの柱穴内埋土は暗黄褐色系のものであり、No.84・99・129・141建物等にみられるものとは異なり、明るい土色である。

No.105・106・107遺構
(第200図)
No.105段状遺構はNo.106、107の建物をつくるために削平が行われたと考えられる区画溝であろう。No.10

6柱穴列は方形と円形の柱穴掘り方がみとめられ、円形プランのものが新しい。No.107柱穴列は柱間距離が7尺等間をはかり、円形のプランを呈する柱穴掘り方である。西端柱穴内上位より須恵器片4点、土師器片3点が折り重なって出土しており、さらに下層より鉄塊が1点浮いた状態で出土してい

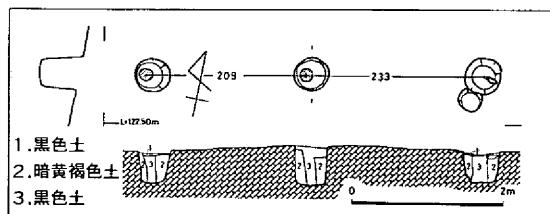
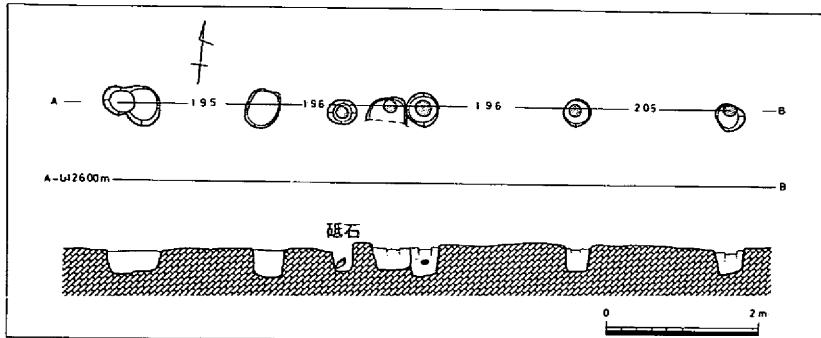


第201図 No.107柱穴列出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡

る。

遺物（第201図）



第202図 No.121・102柱穴列 ($\frac{1}{100}$)

がおこなわれている。2は口径14.5cm、残存高3cmをはかり、色調暗赤褐色を呈する杯身である。器内外面はヨコナデが施され、底部外面は不規則なナデにより仕上げられており付高台

がおこなわれている。3は底径9.8cm、残存高1.4cmをはかり、色調青灰色を呈する杯身である。1・

2同様の整形が施されており、付高台である。

4は底径11.3cm、残存高47cmをはか

り、色調青灰色を呈する底部である。器外面は軽いケズリが施され、内面は回転による凹凸が著しく残る。底部は凸底を呈し、外面は指頭圧痕による凹凸が目立つ。焼成は良好であるが、軽い感じを受ける。5は口径24cm、残存高4.7cmをはかり、色調茶褐色を呈する甕形土器である。口縁部内外面にヨコナデが施され、胎土中に多くの白色小砂粒を含むものである。焼成、胎土とも良好である。6は口径26cm、残存高7.5cmをはかり、色調暗黄褐色を呈する鉢形土器である。口縁端部は平坦に仕上げられ、胴部内外面はごく細の縦刷毛ナデが施されている。他に実測不可能ではあるが、カマドの鍋部分と考えられる小片が伴出している。これらの一括遺物は同時に投げ込まれたものと考えられ、奈良時代中頃より後半にかけてのものと思われる。

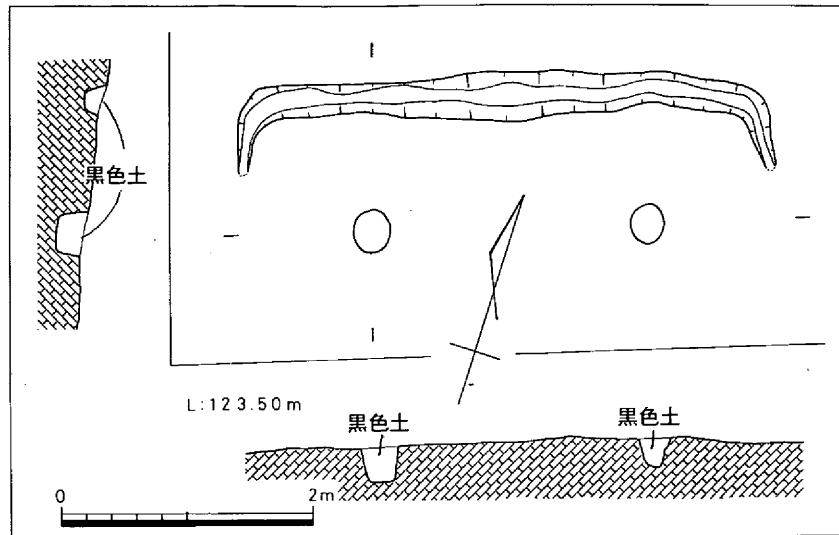
No.121 柱穴列（第202図）

No.83住居址北側に検出されたもので、東西に8本の柱穴が並び、その内の5本がまとまる柱穴列である。柱間距離200cm前後を基調とし、柱穴深さ30~35cmをはかる。建物桁行部分と考えられ、さらに北側に対応する。この桁行は岡の丸No.56、63建物等と同数値を示す

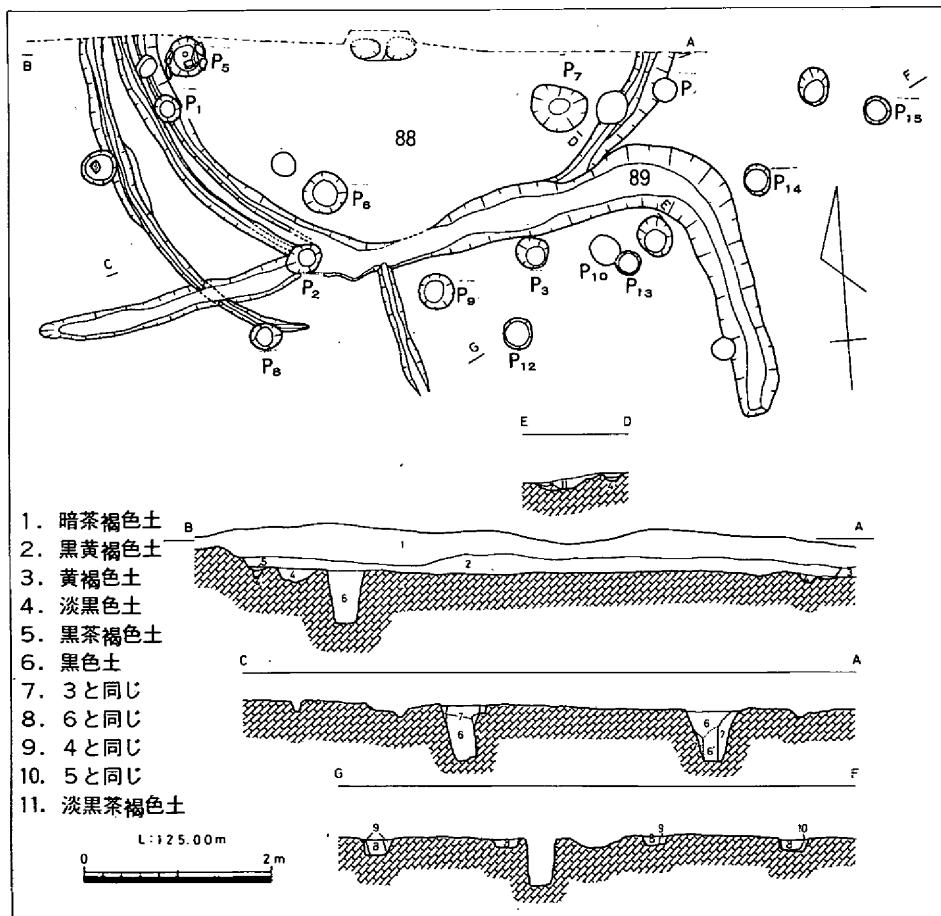
No.102 柱穴列（第202図）

海拔122m付近に位置し、比較的大型の柱穴掘り方である。東西に3穴が並び、北側、南側にはそれらに対応する柱穴は検出できなかった。柱穴深さ35~50cm、柱痕径15~20cmをはかり、安定感のあるものである。柱穴内よりの遺物は何ら検出することができなかった。
(高畠)

二宮遺跡

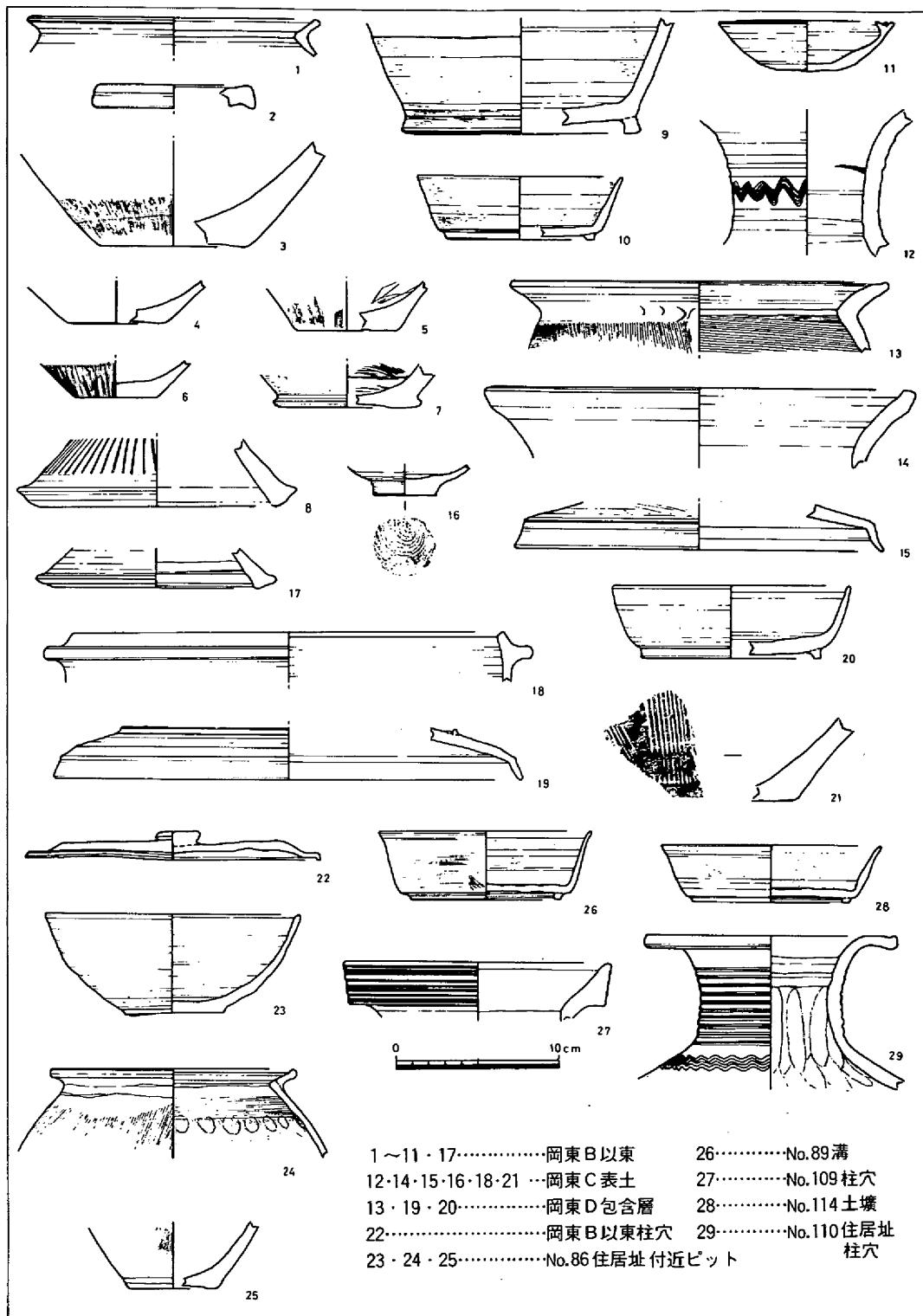


第203図 No.85住居址 ($\frac{1}{80}$)



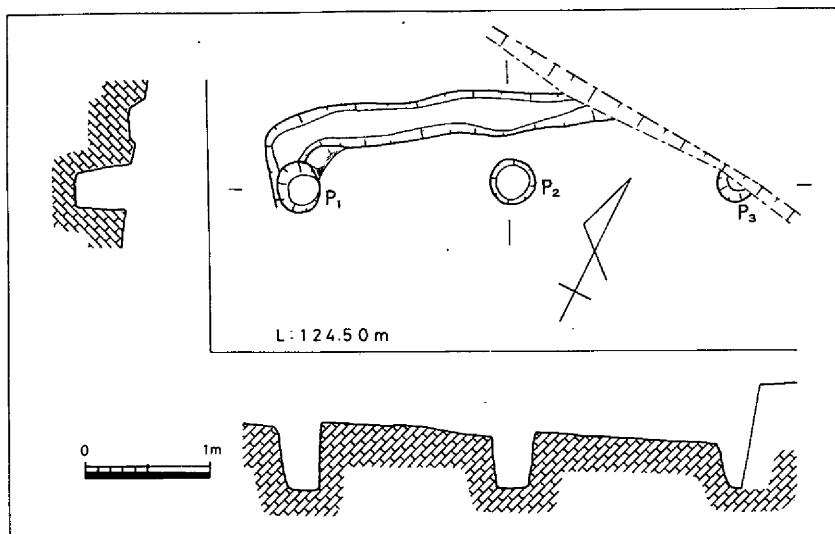
第204図 No.88住居址・No.89溝 ($\frac{1}{80}$)

二宮遺跡

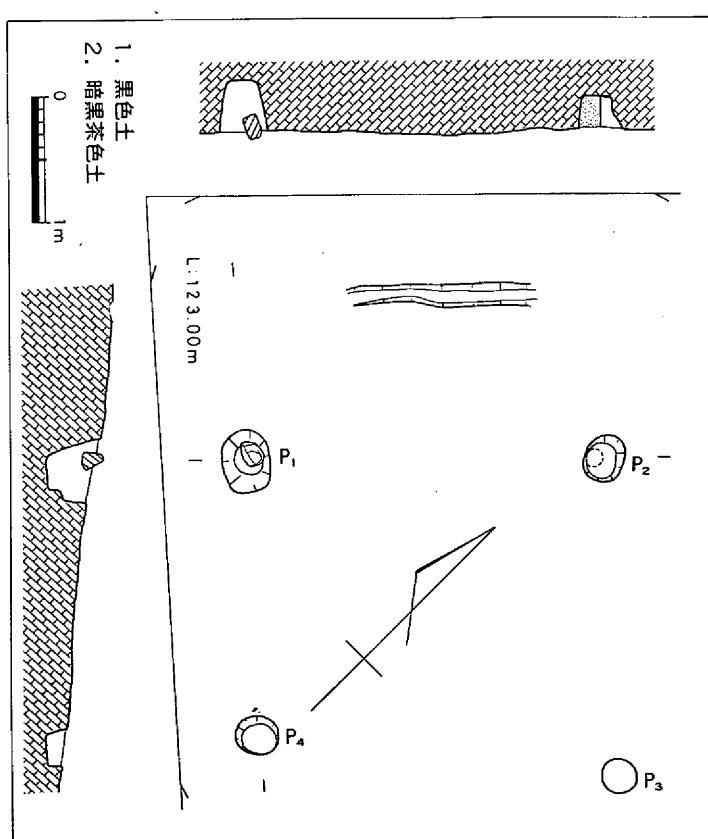


第205図 岡東地区以東出土遺物 (1/4)

二宮遺跡



第206図 No.109住居址 (1/60)



第207図 No.110住居址 (1/60)

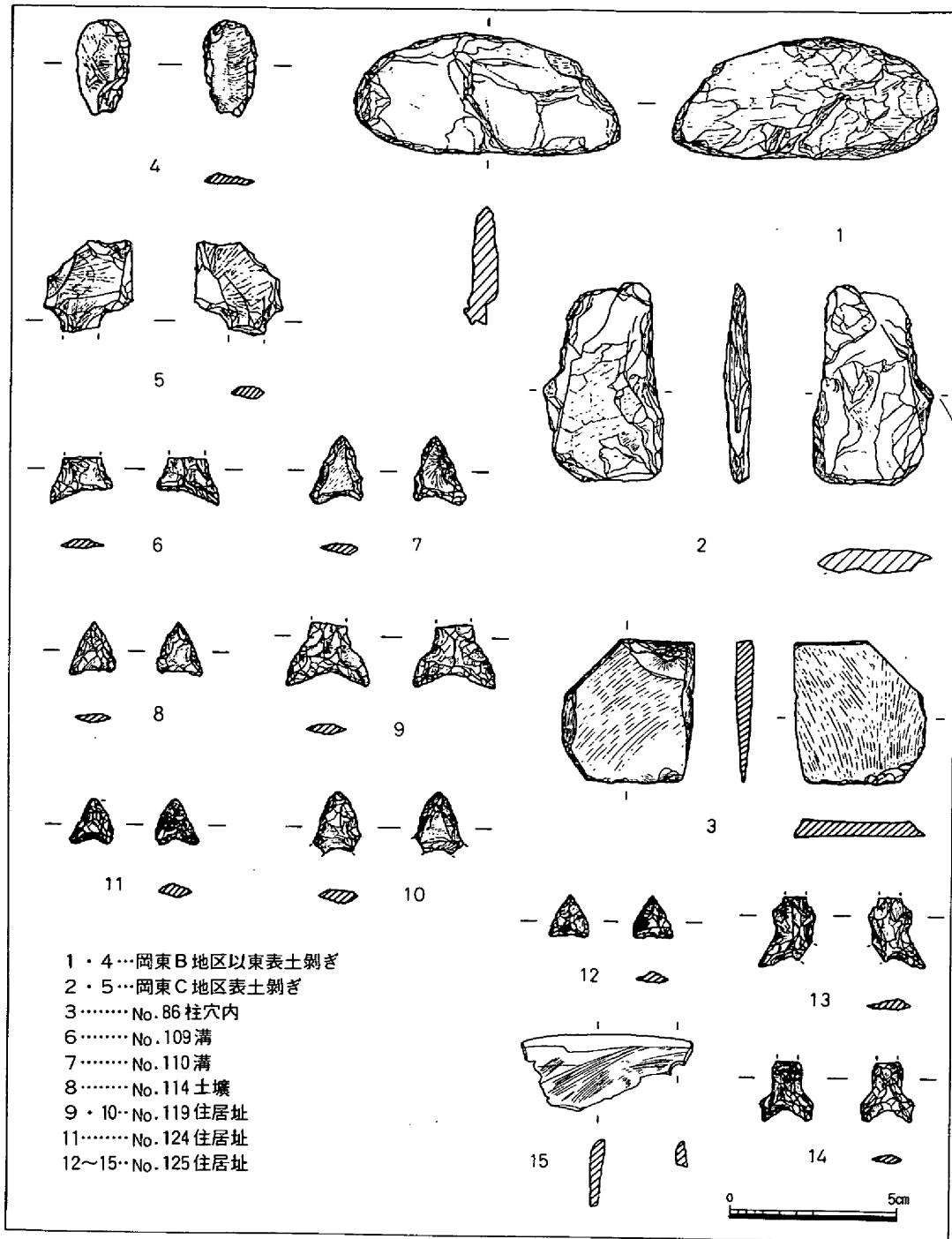
No.85 住居址 (第203図、図版74-2)

B地区以東中央部の南斜面に位置している。南にゆるやかに傾斜しているため、竪穴のほとんどが失われており、北西側の壁体溝、および柱穴2本が確認されたのみである。また、ピットおよび焼土面は認められなかった。平面形は方形で4本柱と思われる。北西辺で4.2m、柱間は2.2mを測る。遺物は細片が若干出土しているのみである。

No.86 住居址 (第167図)

B地区以東の南斜面わずかに平坦面をもった場所に位置し、No.85住居址の下方で、大部分が削平で消滅しているものである。北側にわずかの壁が存在している。壁高は約10cmのもので

二宮遺跡



第208図 岡東地区出土遺物 ($\frac{1}{2}$) (1・2・3は $\frac{1}{4}$)

二宮遺跡

ある。また埋土中には焼土、炭化物の混在したものが堆積していた。壁体溝は存在せず、柱穴も検出確認されなかった。しかし、南斜面において数回のピットが確認されたが、この住居址に伴うものであるか否かは不明。そのうちの数回のピット内より第205図24、25、第208図3が出土している。24、25は弥生式土器片である。24は頸部から口縁にかけて「く」の字状に外反し、口縁部分は若干上方に肥厚し丸味を持って終っている。頸部内面には稜を有し、外面は口縁部貼り付け後指ナデによる調整仕上げがなされている。さらに内面肩部には指頭圧痕が残っている。内面の頸部より肩部は横位、肩部より胴部は斜めの櫛状工具による調整。外面頸部以下は斜位の櫛状工具による仕上げ。色調は赤褐色を呈し、胎土には細砂粒を含み砂っぽい感じを受ける。焼成良好、口径14.9cm。25は底部がやや浮き上がっている。色調は白黄褐色を呈する。細砂粒を含むが硬質なものである。焼成普通、外面には黒色炭化物の付着部分がみられる。第208図3はサヌカイト製である。自然面を残すもので、四部および背の部分は調整剝離が施されている。欠損品である。

No.88 住居址（第204図、図版74—1、75）

B地区以東の中央上端に位置し、ゆるやかな南東向きの傾斜によって、西側で若干の壁が認められたのみである。さらに南側は№89溝によって壁体溝は切り取られている。

平面形態は円形を呈し、3度の建替えがおこなわれている。3期、4期の住居址は西側の2重の壁体溝を残し、同規模のものと推定されるものであるが、溝もこの部分のみで、その他では削平を受けているため検出されなかった。この溝に伴うと思われる柱穴P₁、P₂、P₃、P₄であろう。柱穴は重複させいずれも柱間はP₁～P₂ 2.16m、P₂～P₃ 2.44m、P₃～P₄ 2.24mを測り、その他は用地外である。時期は内側のものより新しいものである。内側の壁体溝もわずかに拡張されているが、床面には3本の柱穴がP₅、P₆、P₇が確認され柱間はP₅～P₆ 2.08m、P₆～P₇ 2.64mを測り、長短がみられる。柱穴は拡張前、後で同じものを使用したと考えられる。柱穴の数は推定で内側の1期、2期は6本柱、外側の3期、4期のものは7本柱と思われる。さらに、床面中央部で境界線にかかるて灰・炭を含んだ落ち込みP₈が検出されている。これは1期～4期の共通した中央ピットと思われる。遺物も若干含まれていた。その他にも、西側の溝内（1～4期）においても出土しているが、いずれも細片ばかりである。この住居址の時期は弥生後期後半と考えられる。

No.89 溝（第204図、図版74—1、75）

№88住居址を切り、東よりみて逆「L」字の溝であり、この溝の北辺に平行して3本の柱穴P₉、P₁₀、P₁₁が並んでいる。溝に伴うか否かは不明、柱間はP₉～P₁₀ 1.84m、P₁₀～P₁₁ 1.86mを測る。さらに北辺中央部より南に一本の溝が延びているが、これは新しいもので№89溝に伴うものではない。溝内において第205図26が出土している。内側に傾いた高台が付き、口縁にかけて先細り、端部は外反して丸味をもって終わる。内外面は水引き底部内外面は指ナデ仕上げ、胎土、焼成とも良好。口径13.0cm、器高4.2cm、高台径9.2cmを測るものである、さらに溝の内外より外に延びるP₁₂、P₁₃、P₁₄、P₁₅の柱列がある。柱間は、P₁₂～P₁₃ 1.40m、P₁₃～P₁₄ 1.60m、P₁₄～P₁₅ 1.44mを測り、対応するものは確認されなかった。建物となる可能性もあるが、遺物はP₉～P₁₅では出土しておらず時期は不明。

二 宮 遺 跡

No.109 住居址（第206図、図版76—2）

B地区以東で、№88、89の東側の南斜面に位置している。南東に傾斜しているため、竪穴のほとんどが失われている。北西壁体溝の一部と柱穴の3本が確認され、残りは用地外へと延びている。平面形態は長方形と推定される。柱穴は南西より、P₁、P₂、P₃で、P₁～P₂は1.65m、P₂～P₃は1.80mを測る。遺物は溝内より石鏃片（第208図6）が認められた。6は、基辺の凹む凹基無茎式のもので、中程より先を失ったもので基辺1.80mを測り、刃部には調整剝離が見られる。

No.110 住居址（第207図、図版76—2・77—1）

№109の南下の斜面に位置し、西東に傾斜しているため北西壁体溝の一部と柱穴4本が確認されたのみで、その他の遺構は検出されなかった。平面形は壁体溝より方形と推定できる。柱穴間はP₁～P₂ 2.75m、P₂～P₃ 2.50m、P₃～P₄ 2.90m、P₄～P₁ 2.20mを測り、間隔はまちまちである。遺物は壁体溝内より石鏃（第208図7）、柱穴P₄内より第205図29の出土をみた。7の石鏃は基辺の凹む凹基無茎式のもので、基辺1.60cm、長さ2.10cmを測り、大剝離面を残し、刃部には調整剝離がみられる。29は頸部に10条の凹線をもち、肩部には器面調整後、橋状工具による波状文をほどこしている。頸部の器肉は厚く、口縁部は外方によく発達し、端部でわずかに肥厚してたれ下がり気味、口唇部はわずかにつまみ上げがなされ、丸味をもって終るものである。頸部上半の内面は横位の指ナデ、下位はナデ仕上げ、肩部も同様の調整で凹凸のみられる器面をなしている。

No.111 不整形土壙（第209図）

B地区以東の南東斜面に位置し、№109住居址の南東側にある。南東に傾斜し、長軸約2.25m短軸約1.85mの不整橢円形の土壙である。土壙内の土層は、内側で黒色有機土、周囲はやゝ薄い黒褐色の土を含み、下層では地山土が多く若干の黒色有機土の混ざりのある土層である。従って、人工的に造られたもので、その用途は不明の遺構である。また、№109住居址の附属遺構か否かは不明、遺物の出土は検出時において黒色有機土層内上面にて若干の土器片が認められている。

No.112・113住居址（第210図、図版76—1・78—2）

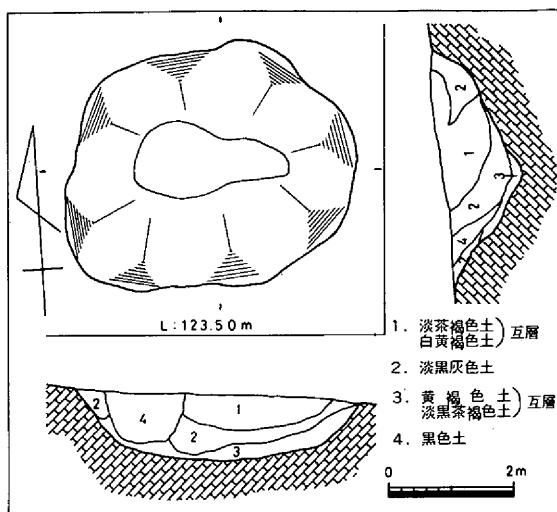
C地区で南斜面に位置し、№114住居址の北東側にある。南東に傾斜しているため大部分が失われている。さらに№112は№113によって切断されている。両者いずれも平面形は方形であると推定される。前者の南西一北東軸で5.10mを測り、後者は不明である。また柱穴焼土面はいずれも認められなかった。しかし、№112住居址の北東溝内には（35×20×15）cmの不整橢円形のピットが存在したが、柱穴とは別のものである。遺物は若干の細片が出土したにすぎなかった。

No.114 住居址（第211図、図版76—1・78）

C地区西側の南斜面に位置し、№112、113住居址の南西にある。南西に傾斜し、さらに南側は一段切り下げが行われているため、全容はつかめない。№114住居址は2遺構で、上段と下段で、上段は不整角形を示し、床面となる位置はほぼ水平に近く、その南東側はさらに二段で、中段にあたるものには東西に細長く、下段の床面は不整橢円形のプランを示すものとなっている。上段床面には3個のピットが検出されたが、これらのピットは柱穴であるか否かは判定できない。

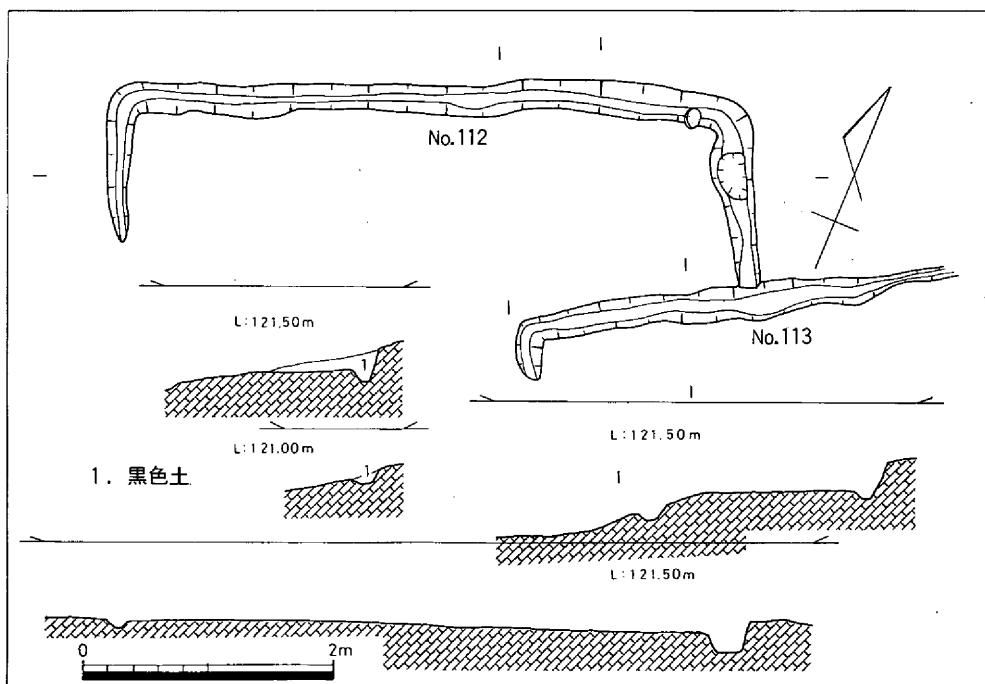
遺物は埋土中よりの出土で第205図28、第208図8、その他にも破片がかなり出土している。下段は

二宮遺跡



第209図 No.111土壤 ($\frac{1}{20}$)

溝がL字状に現存し、東に向かうにつれて下りながら深くなり、東側は電柱支線跡で切り取られ消滅している。また、これに伴うと見られる柱穴P₅—P₆が存在している。柱間は3.5m×5mを測る。壁体溝の北西コーナーに須恵器2片が検出され、28とあわせて古墳時代のものと思われる。西側壁体溝外で、楕円形のピットが検出され、P₁・P₂・P₃・P₄で柱穴列と思われる。柱穴内よりの出土遺物は認められなかった。時代は不明の遺物8は基辺がわずかに凹みを持つもので、基辺1.30cm、長さ1.60cmを測る。ほぼ二等辺三角形を呈する。刃部には調整剣離が施されてい



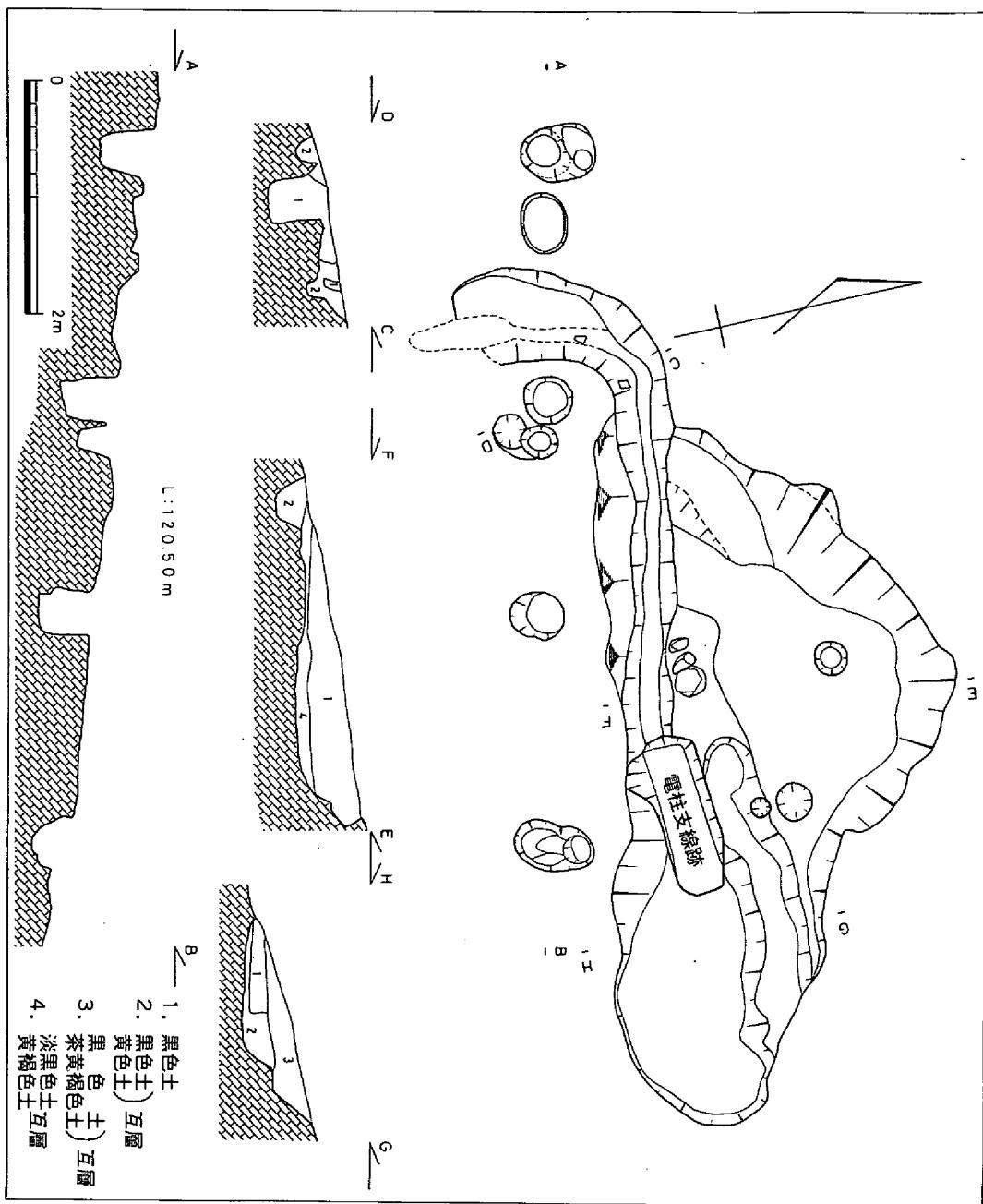
第210図 No.112・113住居址 ($\frac{1}{50}$)

る。28は貼付高台のもので、底部から口縁部にかけて外反して開くもので、全面を水びきで仕上げている。口径13.4cm、器高3.5cm、台径9.6cmを測る。

No. 117 住居址 (第212図、図版77—2)

C地区東部で南斜面に位置し、No. 119住居址の北側にある。ゆるやかな南向きに傾斜しているため、そのほとんどの部分が消滅している。北側の壁および柱穴から推測して平面形態は胴張りの隅丸

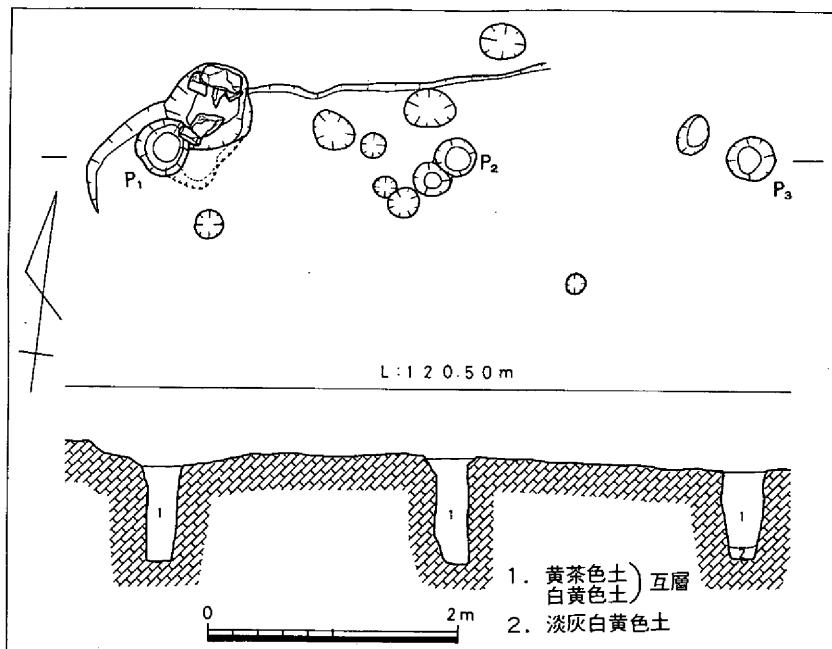
二宮遺跡



第211図 No.114住居址 ($\frac{1}{60}$)

長方形と思われる。規模は不明、残在部の壁高は約15cmを測り、壁体溝は存在していなかった。柱穴はP₁、P₂、P₃の3穴で、柱間はP₁～P₂で2.30m、P₂～P₃で2.30mを測る。柱穴はいずれも不整円形を呈し、深さはP₁で75.0cm、P₂で85.0cm、P₃で70.0cmを測り、P₃の場合は掘り上げ後下部に約10cmが埋めもどされていた。さらに周辺には数個のピットが確認されたが、No.117に伴うものであるか否か

二宮遺跡



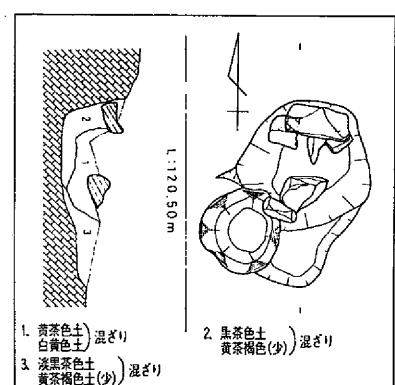
第212図 No.117住居址 (1/80)

は判定ができない。また、第213図の土壙はP₁を切って造られているもので、土壙自体も重複している。土層断面から見れば、石を有する方が新しく造られた土壙である。住居址の埋土中からは若干の出土遺物（細片）が確認されたが、土壙内からは全く認められなかった。いずれにしても土壙は中世において造られた

可能性があると思われる。

No.119住居址 (第214図、図版79・81—2・90—1)

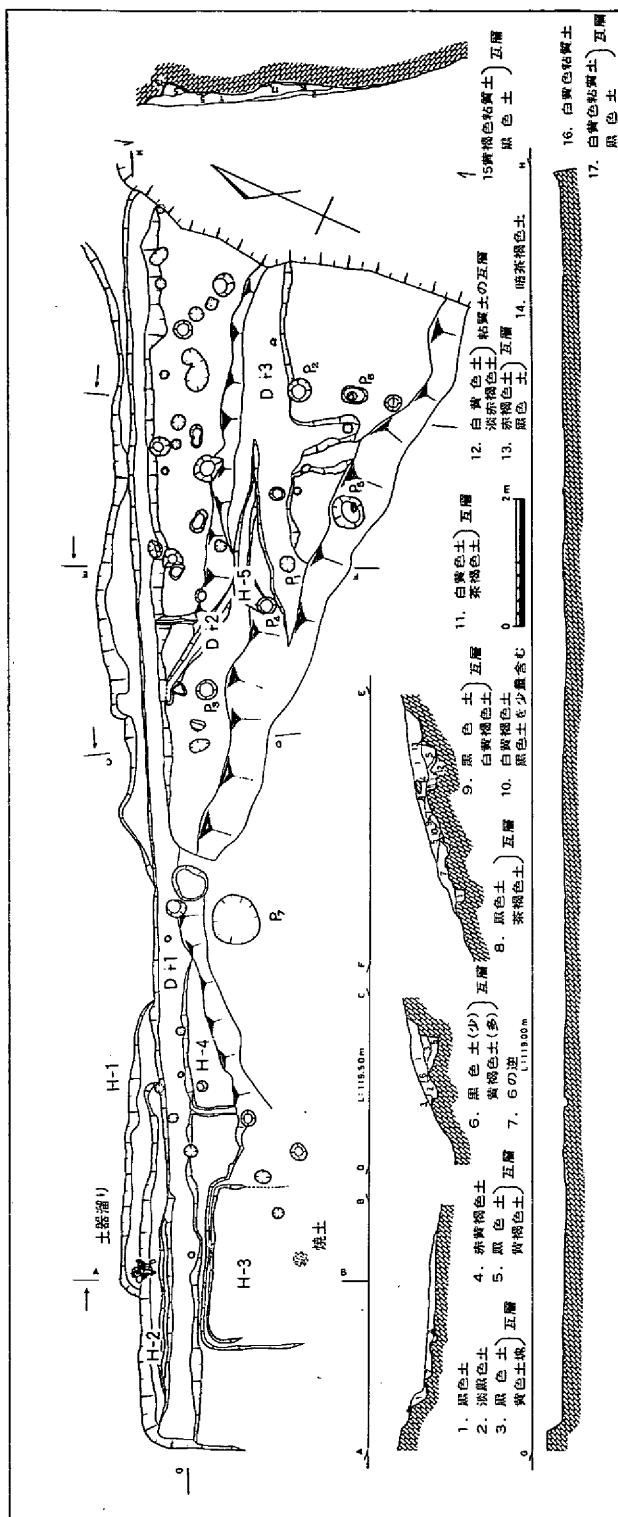
C地区南東端で南東斜面に位置し、中央部は開墾によって山形に大きく掘削されている。南東部は切り取られているが現存する長さは南西～南東で20.25mの溝D_i—1が走り、南西では行き止まりとなっている。おそらく南東側も同様であろう。D_i—1はほぼ直線に延び、底部はわずかの凹凸が認められる。H—1は、方形の住居址で北西辺が残存するのみである。一辺1.7mを測り、壁体溝をもたないものである。残り部分がわずかであるため、柱穴、pit遺物は住居址内西側隅において土器溜りが検出された。なお、埋土中よりも出土している（第215図）はH—1に伴うものである。H—2はD_i—1に切られて、北西辺のみが残存している。浅いU字溝で一辺が5.50mを測る方形の住居址である。遺物は溝内より土器片が数片出土している。



第213図 No.117西端・土壙 (1/80)

H—3は、D_i—1の南に位置し、南西側は消滅しているものの一辺2.70mを測る方形の住居址である。北西辺において、U字型の壁体溝を有している。床面のはば中央に焼土面が確認された。柱穴は存在していない。遺物の出土は認められなかった。H—4、H—3の北東で南西にU字溝が認められる。北西側はD_i—1によって切断される。一部床面を残すのみで、規模は不明。柱穴等も存在していない。H—5は、東西に延びるものでD_i—4によって切断されているため規模は不明、またP₁、P₂はこの溝に伴うと思われる柱穴で柱間は2.80mを測り、住居址は方形もしくは長方形である。D_i

二宮遺跡



第214図 No.119住居址 ($\frac{1}{120}$)

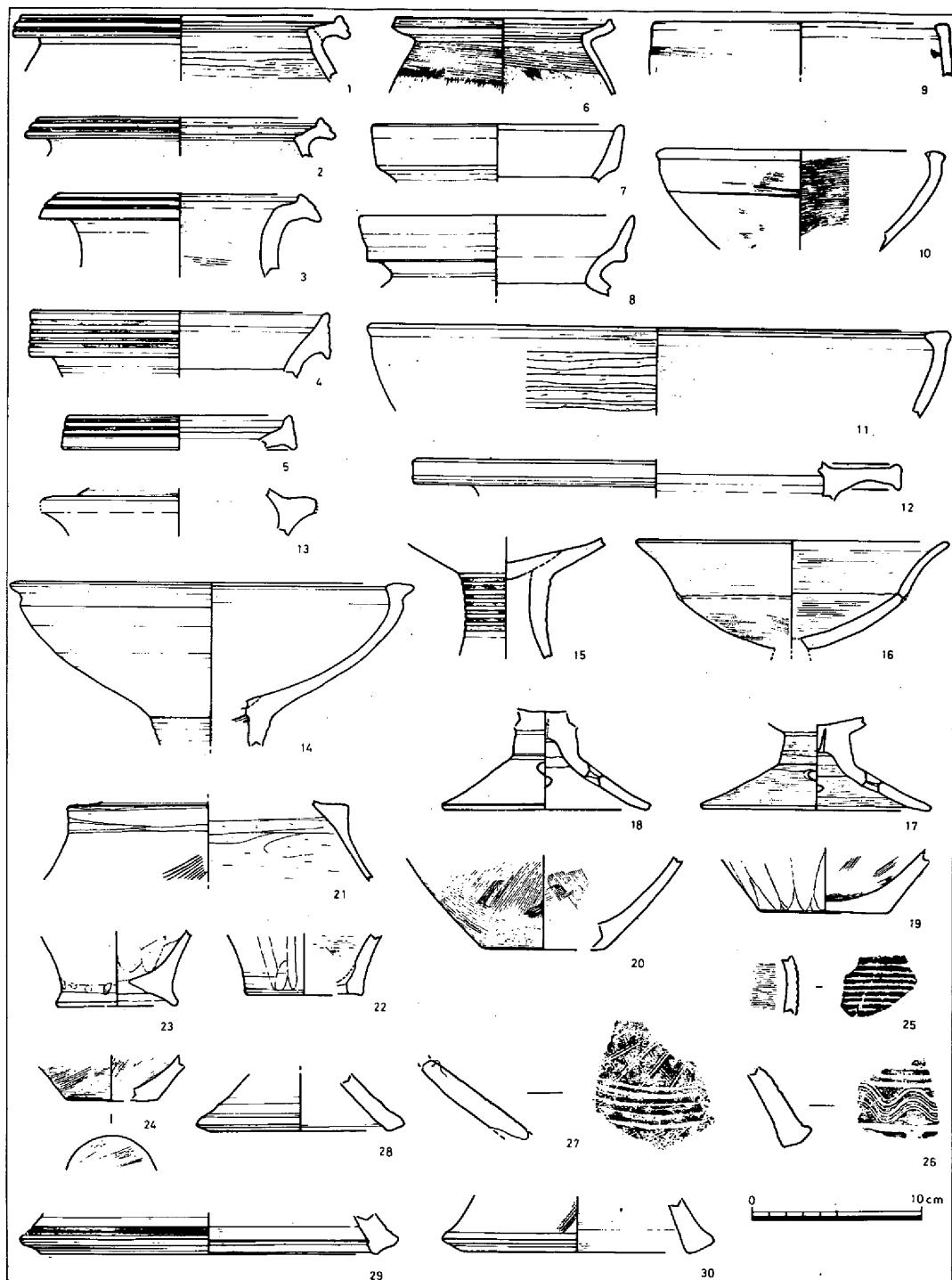
—2、No.119の中央より東側で、D_i—1よりH—5のコーナーにかけて東西方向に延びている深さのあるU字状の溝である。西はD_i—1、東はH—5によって、それぞれ切斷されている溝である。またこの溝を平行にして南側に柱穴P₃、P₄が並んでいる。またP₃、P₄より東、西側に続くものは確認されなかった。いずれにしてもD_i—2の住居址の壁体溝にしては深すぎる感じを受ける。また建物になるか否かは不明。

遺物は、D_i—2内より極く少量が出土している。Pit—3、南西—北東向きの浅く、幅広いものであり、中央部より南東に向かって溝が出でている。P₅、P₆は溝にそっているものと思われる。P₅～P_{6cm}は190を測り、これ以外続くものは検出されなかった。この溝内底部からは水晶、第215図—17の高杯の出土がみられ、埋土内においてもサヌカイト片並びに土器片が若干出土している。P₅の上層から第215図14も確認されている。

No.119住居址内の個々の遺構についてのべてみたが、これらのどの遺構にも伴わない数個のピットが検出されている。このピットはいずれにしてもD_i—1に関連するものと考えられる。またP₇は開墾後において作られたピットである。遺物は、ほとんどの埋土中の出土が大部分をしめている。

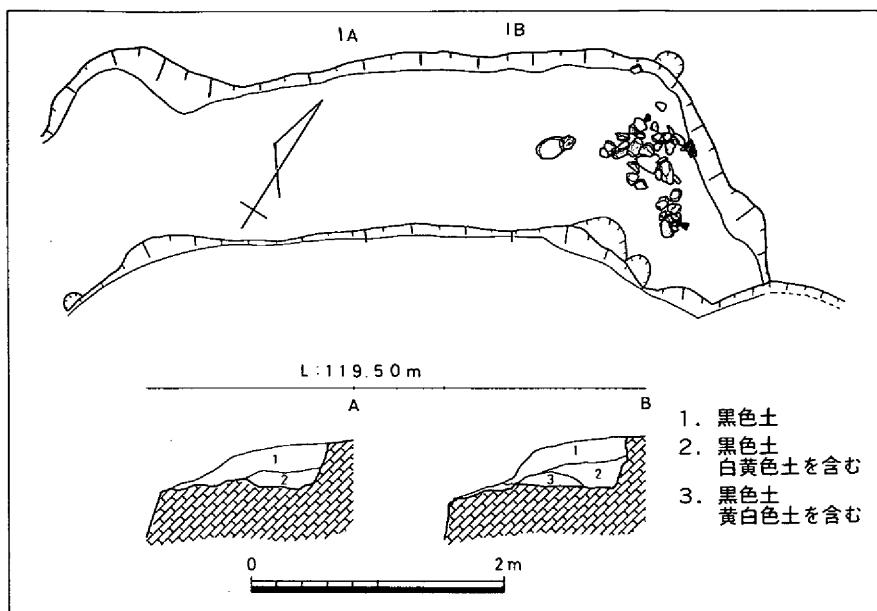
石鏸、土器 (第215図9・10)

二宮遺跡



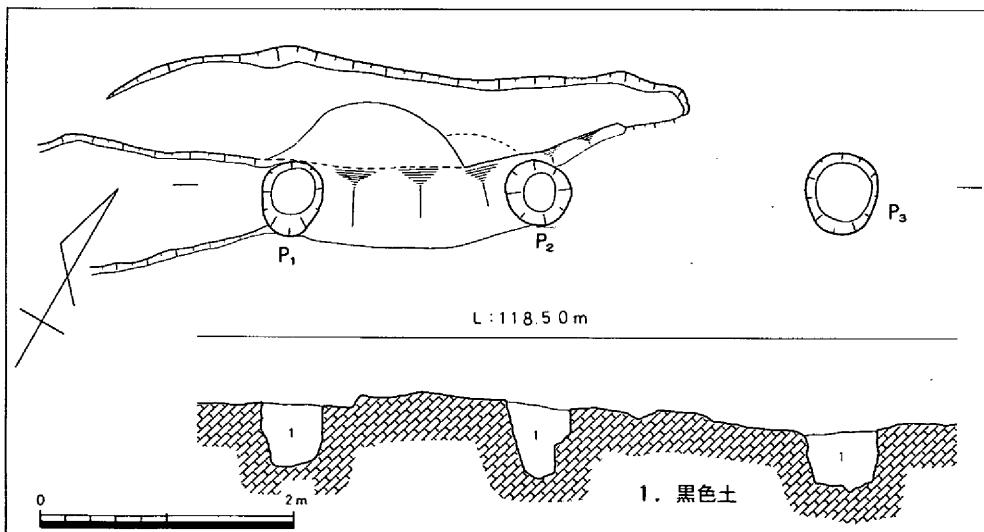
第215図 No.119住居址出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

二官遺跡



9は基辺の形状が凹む「凹基無茎式」の石鏃で、逆刺を有し、逆刺の上部は丸味を持っているものである。先端部を欠失している。基辺2.4cm。平面は2次剝離を行い、刃部は調整剝離を施している。10は凹基無茎式石鏃で逆刺を持つものであるが

第216図 No.122住居址 ($\frac{1}{80}$)



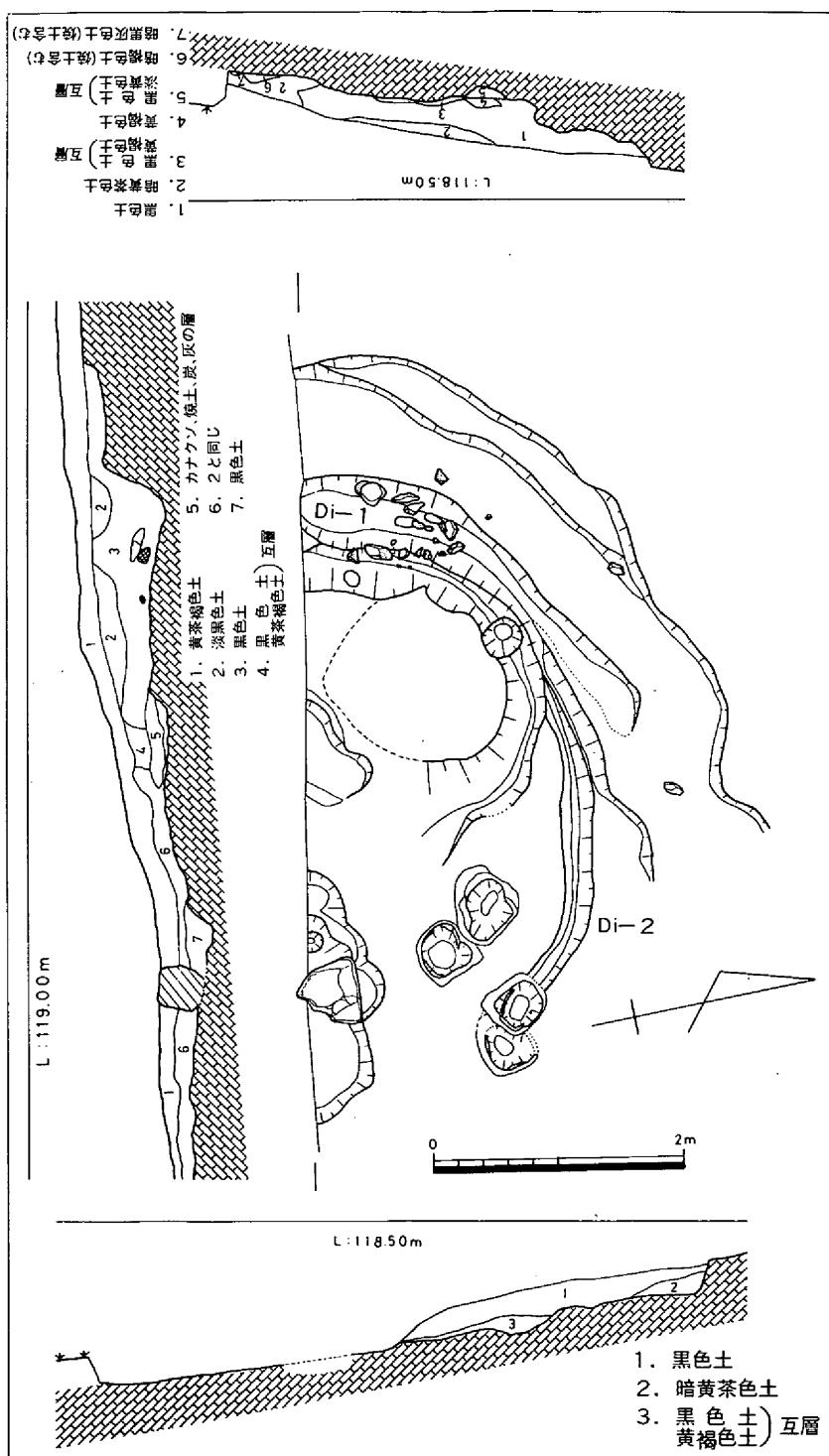
第217図 No.123住居址 ($\frac{1}{80}$)

欠損している。平面形態においては先端部が丸味を持っている。平面には一次剝離面を残し、刃部は調整剝離を施している。土器は第215図があげられる。

No.120 建物

C地区でNo.117の下方に位置するもので、規模は1×1間の建物で、柱穴の配置は歪み、深さもまちまちである。遺物は第205図23が南西柱穴の上層において出土している。23は底部は糸切りが行われ、低い立ち上がりを持つもので、器内は口縁に向けて薄く、端部は丸味をおびて終るものである。

二宮遺跡



第218図 No.124住居址 ($\frac{1}{60}$)

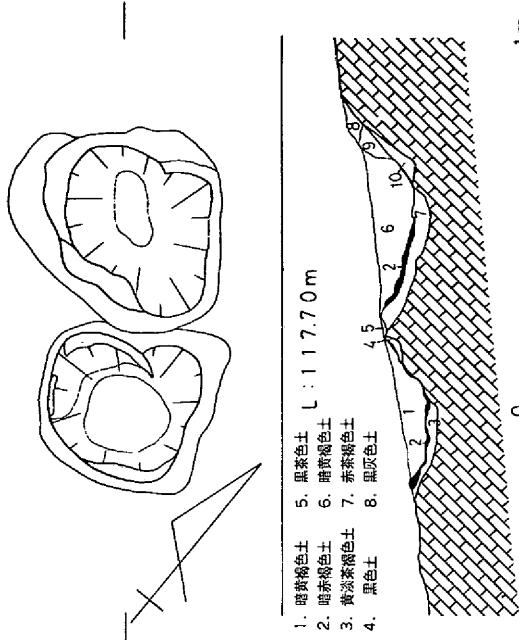
内外面は指による横ナデ調整。色調は若干灰色をおびた白黄色を呈し、胎土には粗砂粒を含みもらい、焼成不良。

No.122 住居址

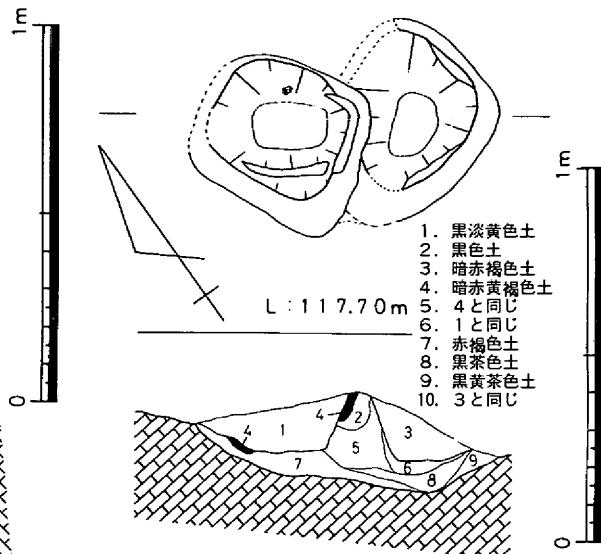
(第216図、図版81
—1)

C地区南東端で、No.119に接した南西斜面に置するもので、大部分を切り取りられ消滅している。平面形態は隅丸方形と推定されるものであり、壁体溝は有せず、柱穴も検出されなかった。深さは北西側で40cmを測ることができた。北東隅に床面より約20cm上位に土器片の混在する集石が確認され、これは埋没後に投入されたものであろう。遺物には第223図1～9、25～29である。1は頸部から口縁にかけ序々に肥厚し、大きく外反して開き、口縁部は水平に拡張するものと思われる。頸部の残存部で6本の凹線文

二宮遺跡



第219図 No.124 鍛冶炉2 ($\frac{1}{20}$)



第220図 No.124 鍛冶炉1 ($\frac{1}{20}$)

が施されている。口縁部内外面は横ナデ、上部内側には2本の凹線文を施し、端部は欠失し不明、胎土は砂粒を含み砂っぽく、焼成普通。2は壺形土器片の頸部で、凹線文が施され、上位は櫛目が残る整形である。内面上半は横、斜の刷毛、下半は斜めの刷毛調整。色調は黄褐色を呈し、細砂粒を含むが硬質。焼成良好。3は壺形土器の頸部断片で、外面には広めの凹線文が施されるものである。内面は横位のナデ調整、焼成良好、硬質。4は口縁部が「く」の字状に外彎し、頸部の器壁は厚い。口縁端部は上下にやゝ拡張する。端部外面には浅い凹線文が施されている。口縁内部は横ナデ、また屈曲部には面を持つ。頸部以下は櫛目が残る調整、外面は横ナデ。色調は黄茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成普通。5は高杯形土器の脚部であり、裾に向かってゆるやかに開き、端部には4本の凹線文が施され、上位には長方形の透しがはいるものである。外面は横位のナデ、内面は刷毛調整で一部に櫛目文が残っている。内面端部には指ナデによる浅い凹みがみられる。裾径19.9cm、胎土には多量の細砂、上半はヘラ削り、下半は指ナデ、外面はヘラ削り、後刷毛目が横、斜位に行われている。砂粒を含むが硬質、焼成良好。灰黑色を呈する。8は底径10.1cmを測る破片で、底部は平らではない。内面は横位の指ナデ。外面は横ナデ調整。砂粒を含んでいるが、かなり硬質。焼成良好、9は底径4.6cmを測る底部片で、底部は若干の丸味をおびている。内面は指ナデ、外面はヘラ削りの調整で仕上げ砂粒を含み、もろさを感じる。焼成や不良。黄褐色を呈している。6は高杯形土器の脚部である。裾に向かってゆるやかに開き、器肉も上から下に序々に厚くなっている。透しは無い。外面は剝離して不明、裾端部外面には浅い凹線がみられ、稜を有する。内面は横、斜位の刷毛ナデ調整。裾径13.6cm。胎土は砂っぽく、焼成普通。黒色を呈している。7は底径6.2cmを測る底部破片である。

二 宮 遺 跡

胎土は砂粒を多く含み粗雑。焼成やく不良。色調は内面黒色、外面は赤味をおびた黄褐色を呈している。25は頸部が垂直に近く立ち上がり、口縁部は外反し、端部は上下に肥厚している。端部外面には4本の凹線が施され、後円形浮文が3個一対で貼り付けが行われている。頸部下位の内外面には指頭痕がみられる。胎土には砂粒を含むが硬質で焼成良好。26は頸部が大きく外反し、口縁部は水平に拡張し、端部は下方に肥厚する。口縁端部にはヘラで斜めの押斜線文を施文する。口縁部上面には櫛描きの波状文と円形浮文が施されている。頸部中程には4本の凹線文を施し、上位には櫛目の残る調整。下位は剝離のため不明。内面はヘラ削りで仕上げている。胎土は良質、焼成やく不良。赤褐色を呈している。27は、口縁部が「く」の字状に彎曲するもので、器肉は厚く、端部は上方に拡張し、丸味をもって終わる。外面は2本の凹線を有し、若干ふくらんでいる。さらに肩部にも凹線文が施されている。これは櫛の縦ナデ後である。内面頸部には稜を持ち、以下は指ナデ、後刷毛調整で仕上げている。胎土は砂粒を含みもなく、焼成普通。赤味をおびた黄褐色を呈している。28は頸部が大きく外反し、上部を欠失しているものである。外面全体に縦の櫛で調整し、胴部、頸部に長方形の透しを施している。さらに透し穴の上位、下位には凹線文が施されている。上部の透しと透しの間には稜杉状の文様が施文されている。脚部内面は横ナデ、胴部より上方には指整形が行われ、指頭痕が残っている。胎土には粗砂の混入がある。焼成普通。29は器台形土器の脚部で、裾径32.6cmを測る。外面には凹線文が施され、裾部には櫛描き波状文がみられる。内面は横ナデ、最下部において浅い凹みが残る。色調は暗黄褐色を呈し、細砂粒が多く軟質。焼成普通。

No.123 住居址（第217図、図版81—2・82—2・90—1）

C地区中央部の南下部に位置し、No.124に接し、北東側にある住居址である。南、南東側は段状に削平を受け消滅している。柱穴は3穴で、P₁～P₂は2.00m、P₂～P₃は2.50mを測り、他には検出されていない。遺物はP₁内より第233図10の出土がみられた。甕の底部片で丸味を持ちわずかに上げ底の形態を呈している。他の柱穴からも若干の土器片の出土があった。

No.124 住居址（第218図、81—2、83・84・85・86・87—1・90—1）

C地区下段に位置し、No.123に接して西側にある。南側は削平を受けていること、用地外になっているため不明。この遺構とは2段になっている。上段は若干胴張りの隅丸方形と推定される。下段は中央部に不整円形の高まりを持ち、周囲には溝D_i—1がめぐっている。さらにD_i—1より東側に向かって残り溝D_i—2がのびている。D_i—2はD_i—1によって切られている。D_i—2に接続する形で鍛冶炉—1が、さらにこの南西側に鍛冶炉—2が検出された。鍛冶炉—1・2は、いずれも重複して計4基が確認された。また、鍛冶炉の南側で、用地外に入り込んで床石と考えられる石が不整形の掘り込み内に平らな面を上部にして置かれている。石の周辺には鉄粉、鉄滓が確認されている。床石の位置より西側の壁では用地外にまでおよぶ範囲で炭化物と鉄滓が多くみられた。遺物は第223図11、と若干の破片である。また、鍛冶炉—1の埋土中上層において第221図が出土した。

鍛冶炉の平面形態はいずれも歪で、不整方形、あるいは不整橢円形を示すものである。粘土でかたまられた部分の残りは良いとはいえない。しかし原形は方形、あるいは長方形であったと思われる。鍛冶炉—1の下方の炉においては、一部で途切れた部分がある。フィゴの羽口の位置か否かはさ

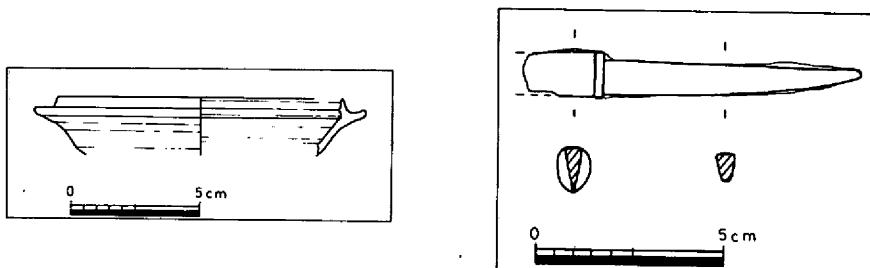
二宮遺跡

だかでない。鍛冶炉一1内出土の須恵器は6世紀末~7世紀初頭のものであり、鍛冶炉自体も同時期のものと考えたい。

11は甕の底部と考えられ、平底を呈している。内面は指ナデ、外面は横ナデの調整で仕上げている。刀子は先を欠失しているものである。銀製の留め金具有している。残存長8.9cmを測る。石鎌11は基辺の形態が凹む「凹基無茎式」のものである。先端部は丸味をもっている。石鎌はほぼ全面に二次剝離を行い、刃部は調整剝離を施している。基辺1.25cm、長さ1.35cmを測るものである。

No.125 住居址（第222図 図版87—2・88・89・90—1）

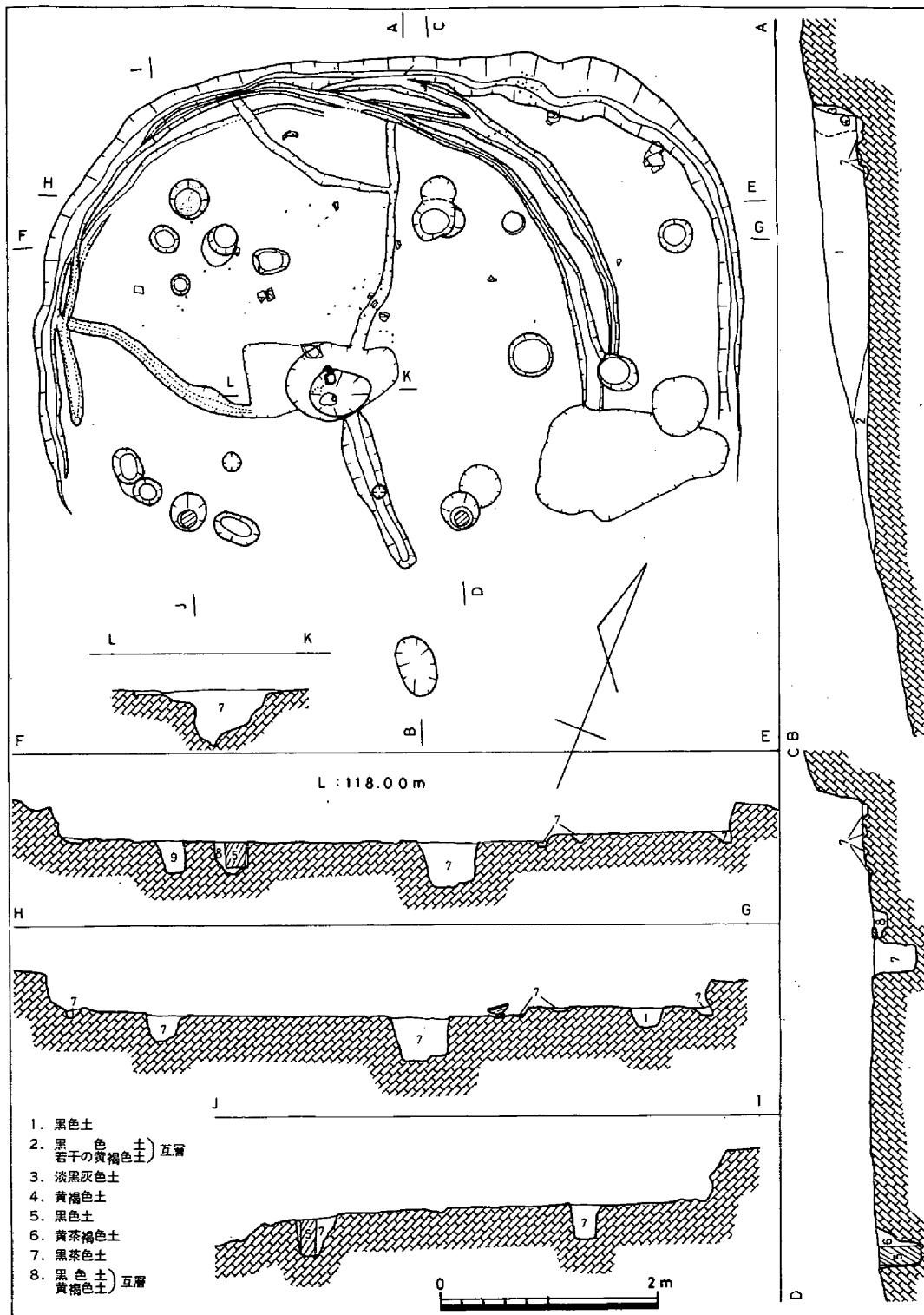
D地区の南斜面の中央部に位置し、No.119の南下にあたる。南西側が消失している。平面形態は内側がほど円形、外側は隅丸方形であろう。壁体溝は中央より西側で重複している。内側の3重の壁体溝の柱穴数は4個のため、住居を拡張したものである。床面の大きさは南西—北東で4.90mで次い



第221図 No.124 鍛冶炉1・No.124 住居址出土遺物 ($\frac{1}{3}$ ・ $\frac{1}{2}$)

で5.30mを測る。床面は平坦で壁体溝はいずれも浅いU字状で最も内側のものにおいては、北西側が溝となっていない。柱間はP₁~P₂ 2.50m、P₂~P₃ 2.75m、P₄~P₁ 2.55m、P₁~P₅ 2.60m、P₅~P₃ 2.75m、P₃~P₄ 2.50m、P₄~P₁ 2.55m、P₁₀~P₅ 2.60m、P₅~P₆ 2.45m、P₄~P₁₂ 2.55m、P₁₀~P₅ 2.05m、P₅~P₃ 2.77m、P₁₁~P₁₀ 2.70mを測る。外側住居址は、内側よりさらに北東に1m強拡張されている。柱穴は北西側に3本が確認されたのみで、南東側が消失している。柱間はP₇~P₈ 2.30m、P₈~P₉ 2.20mを測る。P₇~P₂ 2.25m、P₇~P₉ 4.45m、P₂~P₈ 2.20m。内側には中央には不整楕円形のピットがあり、そのピットから、南東、西、北方向に浅い溝が延びている。このピットはいずれの住居址においても重複に使用されたものであろう。床面北西側のP₁₀の上面に焼土面がみられた。この焼土面は外側の住居址に属するものと思われる。また床面には数個のピットが存在するが、いずれもどの壁体溝に伴うものとは思われない。さらに北東側のP₁₂、P₁₃は新しく掘られたもので、明らかに伴わないものである。出土遺物（第223図12~24）12は埋土中の上層部において出土したものである。13は平底の甕底部片で、内面は下から上にむけて、外面は上から下へのヘラ削りの調整で仕上げている。14は甕の底部片と考えられ指ナデ仕上げ、外面は不明、灰茶色（内）、赤褐色（外）でかなりの細砂粒を含んでいる。焼成や不良。15は椀形の杯部は内彎気味に開いて、序々に薄くなり、端部は丸味を持って終る。外面端部は指でおさえが行われ稜を持つ。脚部は外反して開き、端部は丸く終っている。内面は剝離している。外面は横位のヘラ磨きで、脚部は横ナデ。内面は剝離しているため不明。胎土は砂粒を含み砂っぽく軟質、焼成や不良。口径12.8cm器

二宮遺跡



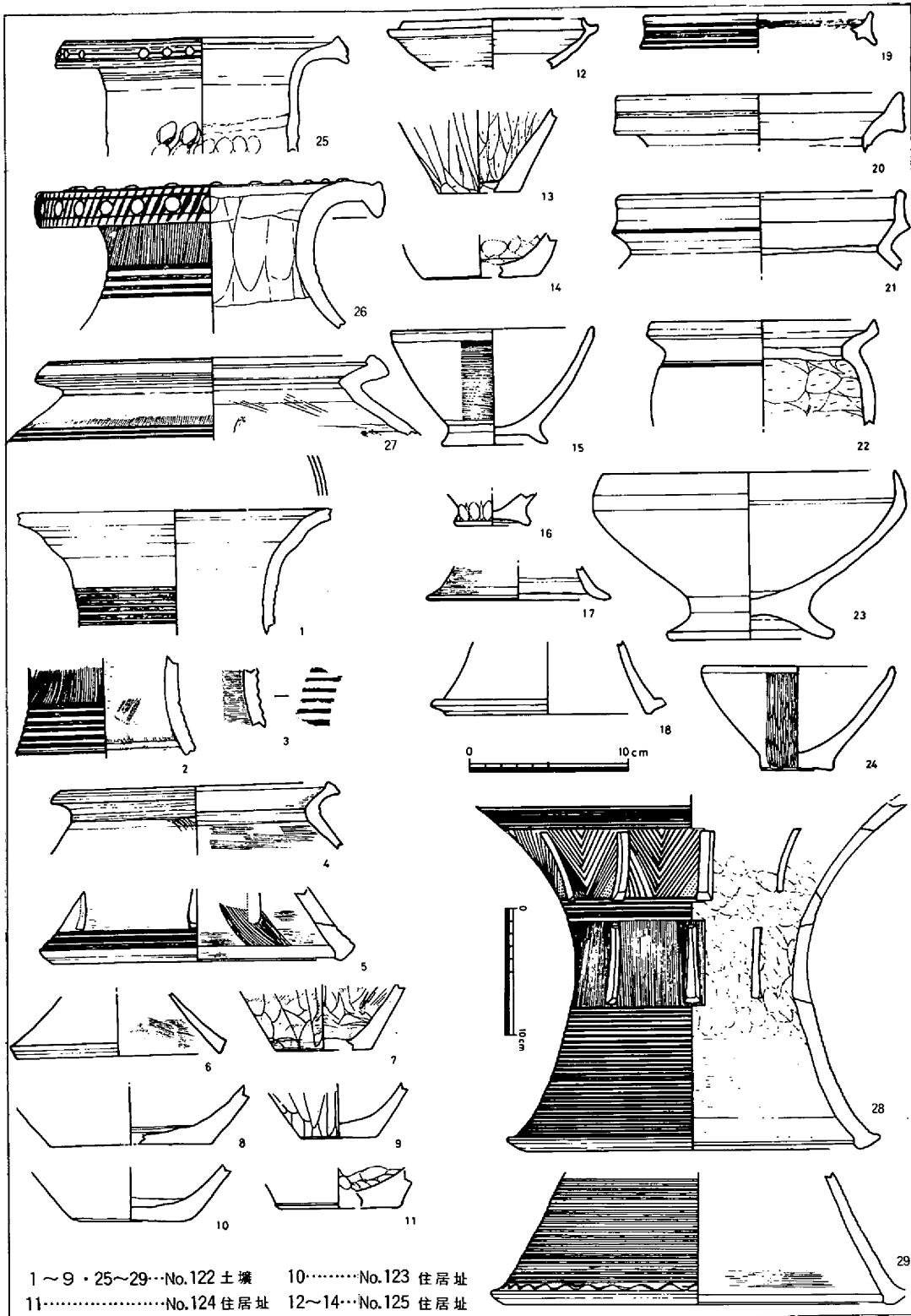
第222図 No.125住居址 (1/50)

二 宮 遺 跡

高7.2cm、脚部裾径6.7cm。16は15と同じものと思われるものであろうが、上部を欠損している。脚部はわずかに外反して開き、端部は丸く終っている。脚部外面には指痕が残っている。黄褐色をし、胎土は砂っぽく焼成は普通、脚部は裾径4.8cm。17は脚部より上部を欠く、裾部だけのものであり、先端は丸味を持って終る。外面は横ナデ、内面は横位の指ナデによる調整、胎土は砂っぽく、焼成は普通。裾部径11.6cm。18は高杯の脚部である。裾端部に行くにしたがって厚くなる。端部で斜め上方につまみ上げられ丸味を持って終っている。内外面は剝離しているため整形は不明。胎土中には細砂粒を含み、焼成は普通で褐色を呈している。19は口縁部片であり、壺形土器とも甕形土器とも決めがたいものである。端部の器肉は薄くなって斜め上下に張出している。内外面はともに横ナデを行い、外面には凹線状の浅い凹みを4条有している。内面はヘラ磨きが施されている。胎土は良質、焼成良好、白黄褐色を呈している。20は口縁部の器肉が比較的厚い甕形土器である。口縁端部は大きく上下に張り出している。口縁部の内外面は横ナデを行い、口縁の外面はゆるく彎曲し、中央部には凹線状の凹みを1条有する。内面は横ナデによってできた浅い凹みがみられる。内面頸部以下はヘラ削り。胎土中にはかなりの砂粒を含み、焼成は良好。色調は黄茶色（内）、赤褐色（外）を呈する。21の口縁部はわずかに外反気味で器壁は頸部から口縁にかけて「く」の字状に外反し、内面と口縁内部は横ナデ、内面の頸部下位はヘラ削りを施している。口縁の内外面には、横ナデによってできた凸凹が認められる。胎土中には若干の砂粒を含み、焼成は良好で黄茶褐色を呈する。口径18.0cm。22は「く」の字状に外反する口縁で、端部は先細りで尖り気味に終る。口縁内部は横ナデ、端部には横ナデによってできた凹みが残っている。内面の頸部には面を有し、下位は荒い指ナデの仕上げ、外面は横ナデ、頸部より肩部にかけての所には凹線が2条みられ、1条は細く浅いものである。器肉は厚く、胎土中には若干の砂粒を含み、焼成良好、黄茶褐色を呈している。口径13.9cm。23は低脚を有する鉢形の土器で、出土土器の中の唯一の完形品である。器肉は厚い方で、内彎し、底部の器肉はさらにも厚いものである。外反して開く脚部が接合され、端部には稜を有するが丸味を持って終っている。外面の端部より1.5cm下位には浅い凹みがみられる。内外面の整形は細かなヘラ磨きで全体を仕上げている。脚部裾内面はナデ。最後に裾内面をのぞいた全面は丹塗りが行われている。色調は内外面共に赤褐色を呈し、脚裾部内面は黄褐色で部分的に黒色をおびている。胎土は砂粒をかなり含んでいるため軟質。焼成は普通、口径18.3cm、器高10.4cm脚裾部径10.4cm、鉢部深く7.9cm。24は、低い台が付く碗形の土器で、器肉は端部になるにつれて序々に薄くなっている、端部外面には指のおさえで稜を有し、内面には浅い凹み状を残し、内面はナデ、外面は細い縦のヘラ磨きが施されている、底部はヘラ削りで仕上げ、わずかに浮き上っている。色調は赤褐色を呈し、胎土は精製された粘土を用い黒色でやゝ軟質。焼成は普通、口径11.9cm、器高6.5cm、底部径4.6cm。

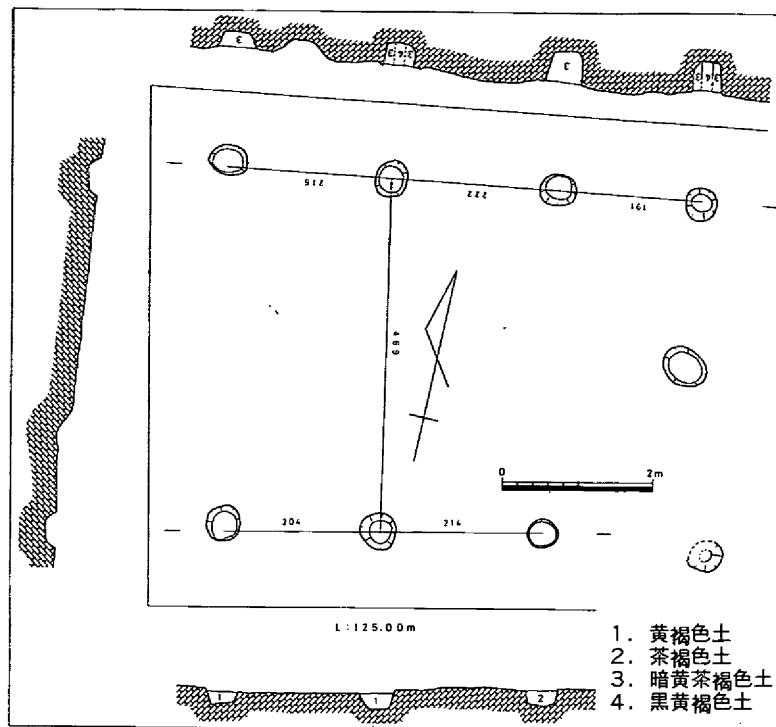
石器（第208図12～15）は石鎚3点、石庖丁片の出土がみられた。石鎚にいづれもサヌカイト製でうち1点12が完形品である。出土も13が床面から、その他の石器はいずれも埋土中からのものである。12はほど正三角形を呈し、基辺がわずかに凹んでいる。石鎚は全面に調整剝離がみられる。基辺12cm、長さ1.3cm、13は基辺の形状が凹む凹基無茎式石鎚で先端並びに一方の逆刺を欠損しているものである。胴部は角ぼり、四角張り出している。さらに先端は欠損しているもの、鑿頭式のものであ

二宮遺跡



第223図 No.122・123・124・125 住居址出土遺物 ($\frac{1}{4} \cdot \frac{1}{5}$)

二宮遺跡



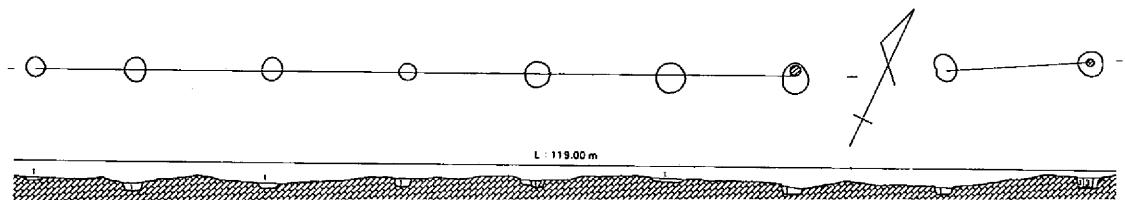
第224図 No.84 建物 ($\frac{1}{100}$)

ろう。石鏃の裏面に大剣離面を残すものゝ刃部は調整剣離を行っている。14は凹基無茎式石鏃で、逆刺を有するものである。これも13と同様に脣部がふくらんでいる。先端は欠損している。逆刺は左右に延びることなく、カットされ一風変った形態を呈している。基辺1.45cm。刃部には調整剣離が見られる。15は磨製石庖丁片で有孔のものである。

No.84 建物 (第224図)

図版75—2)

B地区の南斜面でNo.88・



第225図 No.128 柱穴列 ($\frac{1}{100}$)

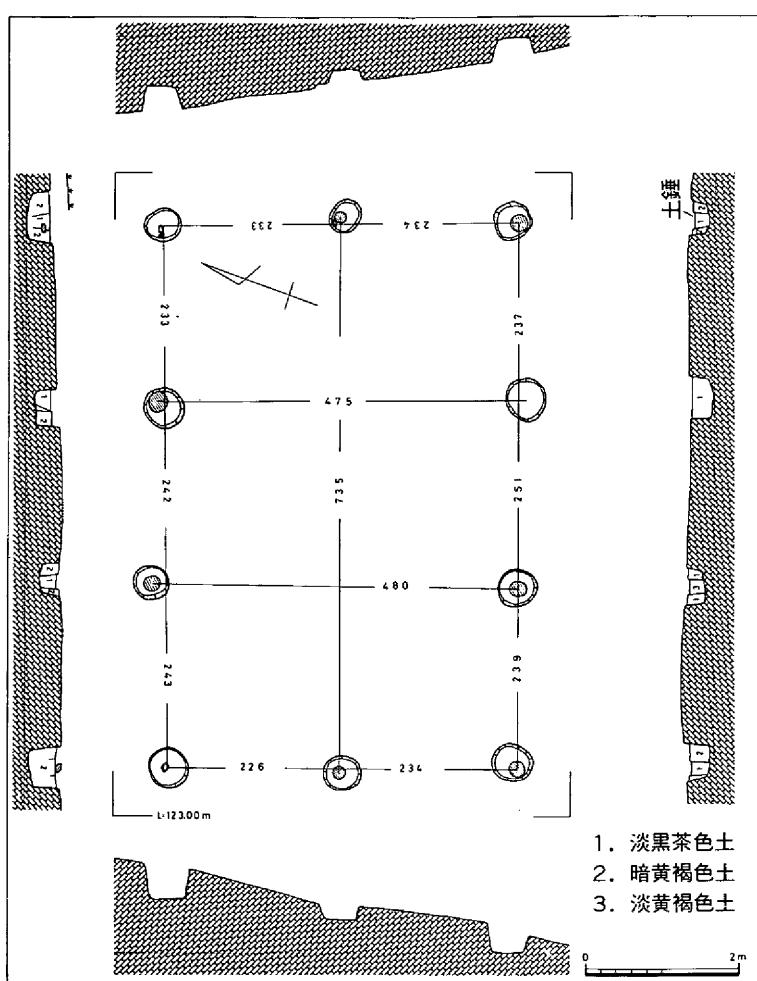
89の南西に位置している東西3間、南北間の建物であり南東隅の柱穴は電柱支線跡で消滅し残存していない。柱穴は35~45cm、深さ15~40cmを測る。遺物はまったく伴っていない。

No.128 柱穴列 (第225図)

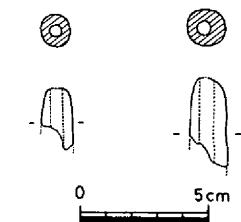
柱穴列はC地区の下段でNo.124住居址の北西に存在し、7本と2本の柱穴からなり、南西—北東方向に並んでいる。柱間は南西より1.30m、1.75m、1.70m、1.75m、1.70mと1.90mで柱穴径は20~30cm、深さ5~12cmを測る。この柱穴列は建物となる可能性はなく、むしろ柵となるものであろう。

(二宮)

二宮遺跡



第226図 No.129建物 ($\frac{1}{100}$)



第227図 No.129出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

No.129 建物 (第226図、
図版91—1)

地形図センターに並行してつくられている 3×2 間の掘立柱建物である。桁行 $718 \sim 727\text{cm}$ 、梁行 $460 \sim 467\text{cm}$ を測り、面積は約 34m^2 と岡東地区では最大のものである。桁間 240cm 、梁間 230cm を基調としており、柱間はほぼ等間隔の構成である。10柱穴中 9 個に柱痕跡を有し、柱痕径も $14 \sim 22\text{cm}$ と大形のものである。

柱穴規模、柱間距離等

の最も近いものに No.49 建物があり、梁行等は同数値を示す。梁行のほぼ同数値を示すものに岡の山地区 No.58・63・68・79 建物、岡東地区 No.84・95 建物等があげられる。桁行で同数値を示すものに荒神元 C 地区 No.19 建物が存在する。北西端柱穴、南東端柱穴内上位では土錐が各一個ずつ出土している。

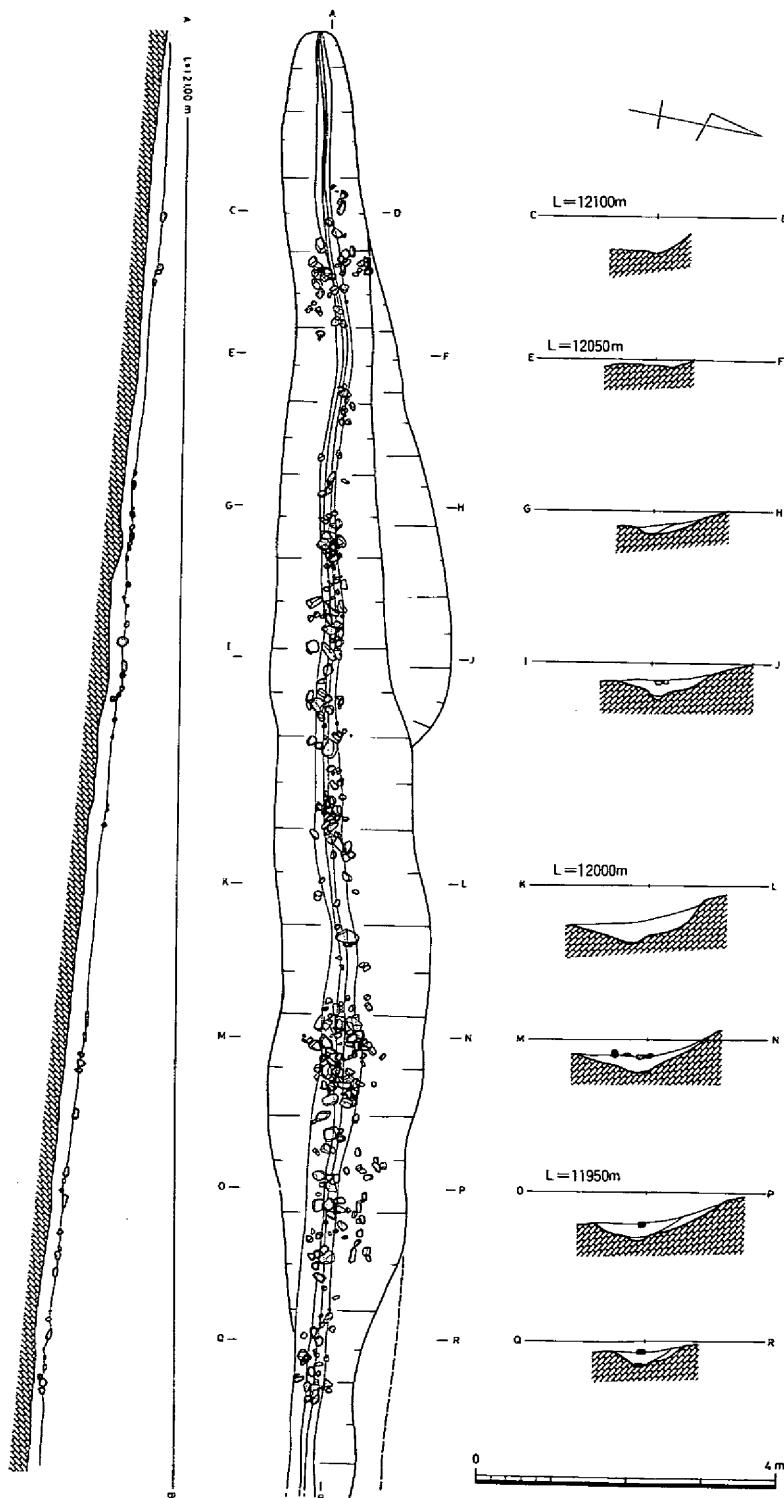
遺物 (第227図)

二点とも褐色を呈し、長軸にそって貫通穴を有する土錐である。半欠損しており全長は不明であるが、最大径 $1.35 \sim 1.45\text{cm}$ 、円孔径 $0.5 \sim 0.55\text{cm}$ をはかり、焼成良好のものである。他の地区では荒神元 C 地区 No.23 建物柱穴内より出土したものがあり、最大径、円孔径ともこれらよりさらに小型のものである。

No.133 古道 (第228図、図版91—2・92—2・93)

岡東地区東部にあたり、D—9 線より E—12 線にかけて延びる検出全長約 20m の古道である。調査

二宮遺跡

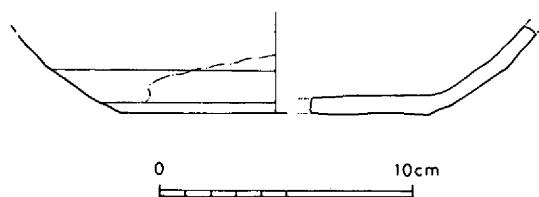


第228図 No.133古道 ($\frac{1}{100}$)

当初に比高差が認められたB・C地区変換点のC地区に等高線とほぼ並行に位置するものである。そして、この古道はA—4線とかE—3線方向に延長することが考えられる。

検出全長約20m、最大道路幅約2m、深いところで約60cmをはかり、ほぼ東西に走り、西より東に向かって傾斜している。西端部は削平、風化等により除々に細くなり消滅している状態である。古道中央部に20~30cm幅の細い溝が設けられており、Q・R線以東では溝内全面に砂利敷き部分がみられた。この古道の堆積状況は、その砂利敷き上面に厚いところで約25cmの淡黒色土が堆積し、さらにその中央凹部に拳大の角礫を中心とする石材が線状に集中し、約16cmの長さにおよんでいる。これらの石材、及び下層砂利敷きに混在して新旧とりまぜての遺物が出土している。

二宮遺跡



第229図 No.133古道出土遺物 (1/3)

遺物（第229図）

砂利敷き内よりは小片ではあるが、勝田焼の瓊形土器が出土をしており、平安時代末以後の古道を明らかにし、角礫間では瓦質土器、カナクソ、陶磁器等が散逸的にみられ、中世末の時期には放棄されたのではなかろうかという状況を呈している。ほとんどが小片であるため、掲載不可能であった。

た。第229図の陶器片は古道肩口より出土したものである。底径12cm、残存高4.5cmをはかる陶器底部である。下部より上位1.7cmまでに左回りのヘラ削りが施されており、器内面、外面ヘラ削り部まで黄褐色の釉薬がみられる。底部、及びヘラ削り部には筋状に垂れたものがみられる。器壁は均一して仕上げられており、胎土も黄色をおび、良好のものである。

No.134 遺構（230図、図版94）

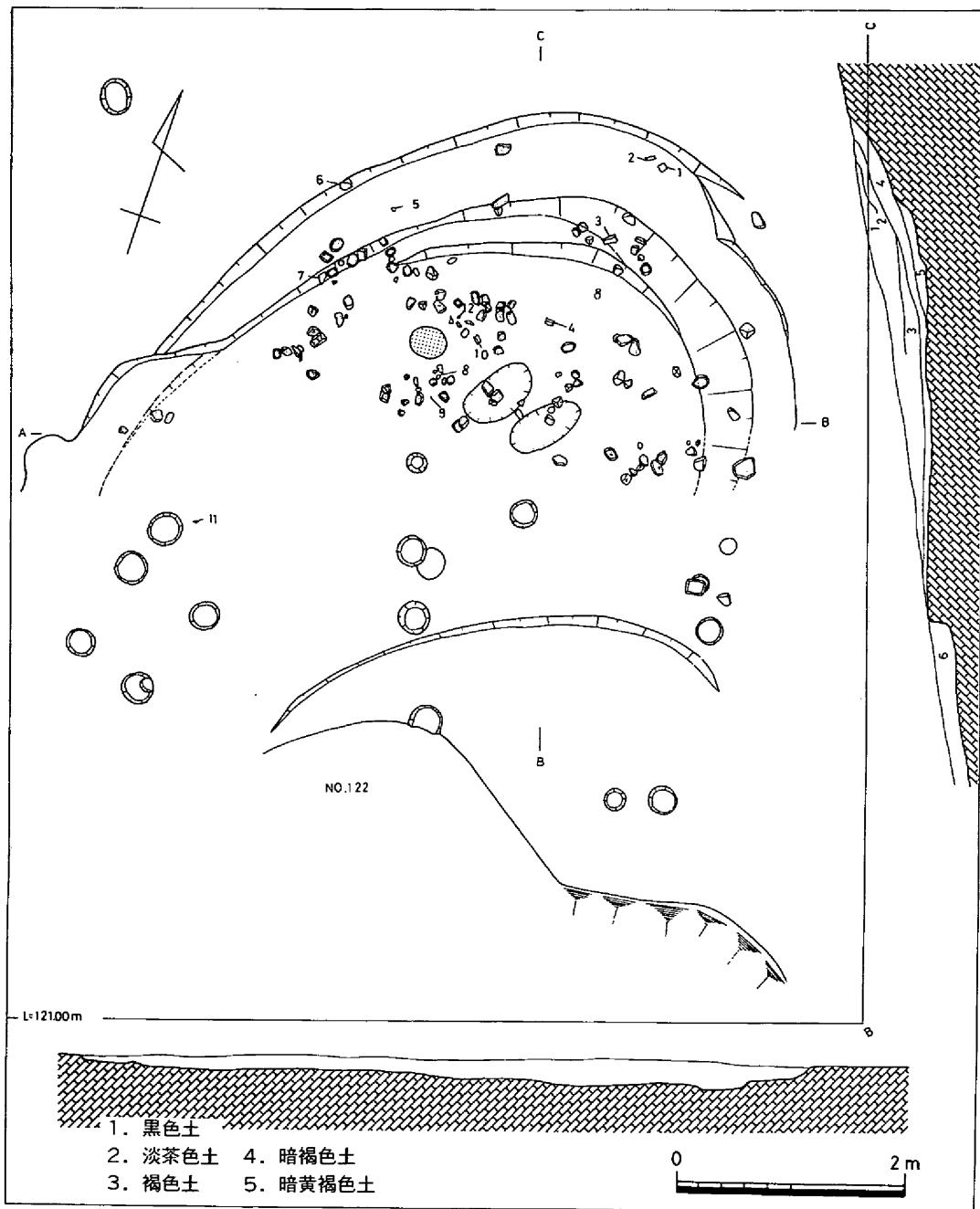
南側半分が失なわれている住居址状の土壙である。楕円形のプランを呈するものと考えられ、推定長軸7.5～8m、短軸4.5～5m、深さ65～70cmをはかり、掘り方は3段より成っている。土壙内にはまとまる柱穴は出土しておらず、北側にはみられず、南側に多くみられるが、伴うものか否かはさだかでない。第1層中にとくに河原石の拳状のものが多くみられ、これらも北側に集中して存在し、南側においては流出しているようである。その石材にまじって、カナクソ数点、須恵器片、土師器片等が出土している。床面には25cm×30cmの焼土塊が存在するが、永く使用された痕跡はとどめておらず、軟質の焼土面である。他に2基の小土壙が存在するが、遺構に伴うものか否かは明確にしえなかった。床面より須恵器片が出土をしている。

本土壙と類似構造を有する土壙に岡東地区のNo.124住居址としているものがある。この住居址内にもまとまった柱穴は確認されておらず、河原石の集石等がみられ形態、堆積状態においても類似点が多いようである。この住居址の場合は内部に新旧4基の炉を伴い、周辺より多量のカナクソを出土している。また鍛冶炉より口径約13cmをはかる須恵器杯身片が出土している。No.134遺構においても、ほぼ同時期、あるいは、若干新しいと考えられる須恵器杯蓋片を検出している。

遺物（第231図）

1は底径9.5cm、残存高3.8cmをはかり、暗黄褐色を呈する底部である。胎土中に白色砂粒大を多量に含んでおり、器内外面は剝落が著しいものである。弥生時代後期前半の土器であろう。3は口径13.2cm、残存高6cmをはかり、色調褐色を呈する瓊形土器である。器内外面とも剝落が著しく、整形不明な点が多く粗雑なつくりである。器内面は底部より胴部くびれ部に向かって荒い斜位のヘラ削りが施されているが、器壁の薄く仕上げられているものではない。4は口径16.6cm、残存高4.2cmをはかり、色調茶褐色を呈する瓊形土器である。「く」の字状に外面する口縁部内外面はヨコナデが施されており、胴部内面は横位の右ヘラ削りが施されている。10は口径13.3cm、残存高4.7cmをはかり、色調茶褐色を呈する瓊形土器である。造りはシャープに仕上げられており、硬質の焼成である。口縁部

二宮遺跡



第230図 No.134遺構 ($\frac{1}{60}$)

内外面はヨコナデが施され、脇部外面は指頭等によると考えられる凹凸がみられる。脇部内面は刷毛状工具により幅0.5~0.6cm内外の搔き取り痕をとどめる。外面にはススが付着している、他の2点の

二宮遺跡

須恵器は堆積土中より検出されたものであり、口径9.8~11cm、器高3.3~3.8cmをはかり、色調青灰色を呈する、これらに類似するものに表土剥ぎ段階で完形に近い杯身が出土しており、底部外面には従来のヘラ削り痕跡がみとめられない。

No.138 土壙 (232図)

岡東地区東斜面の海拔118m付近に位置し、長軸100cm、短軸75cm、深さ15cmをはかる楕円形の土壙である。さらに、その中央部分に37cm×42cm×5cmをはかる方形土壙が掘り込まれており、二段掘り形状を呈する。土壙内埋土は粒子の細かい柔かいものであり、方形土壙プラン内上面に土師器小皿が上向きの状態で3点出土している。それも焼土面内に限られており、土壙上部に配された可能性の強いものである。

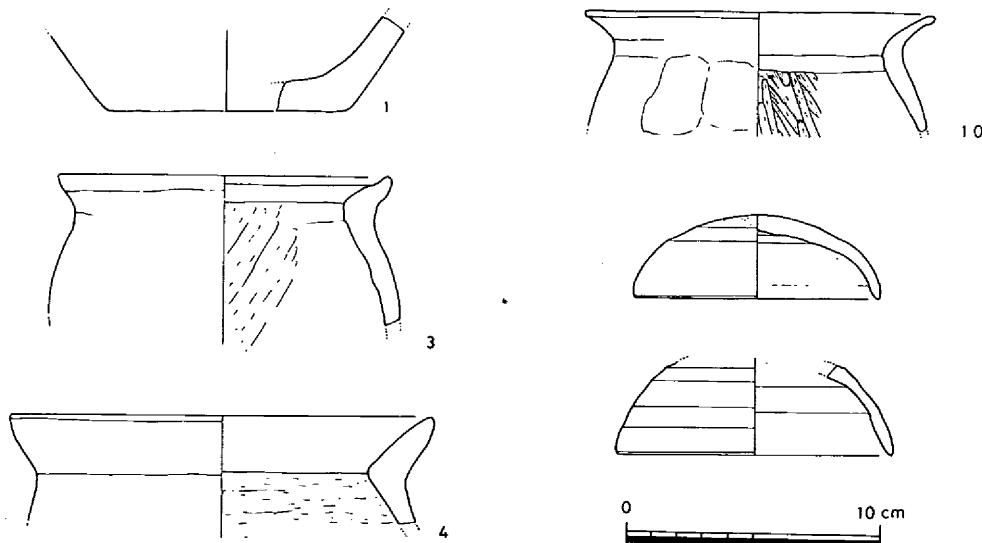
遺物 (232図)

1は口径7.5cm、底径6.4cm、器高1.3cmをはかり、色調黄褐色を呈する土師器小皿である。器内外とも剝落が著しく、調整は不明であり、底部のみがヘラ起しの感がするものである。

2は口径7.4cm、底径6.2cm、器高1.2cmをはかり、色調暗黄褐色を呈する土師器小皿である。

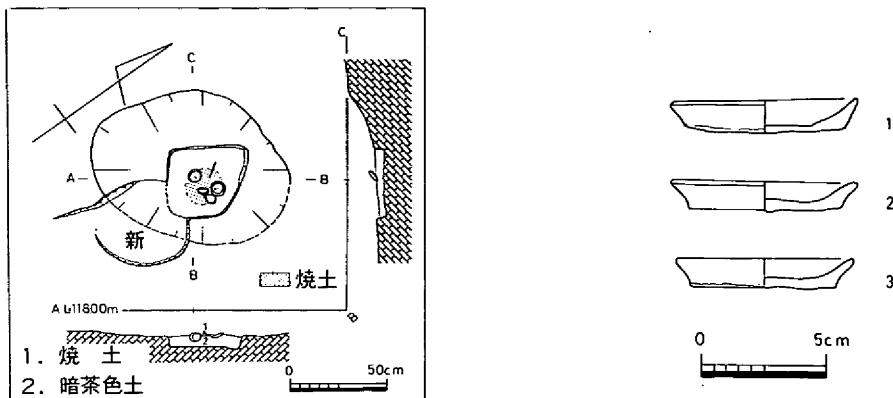
3は口径7.1cm、底径5.9cm、器高1.2cmをはかり、色調黄褐色を呈する土師器小皿である。1・2同様に器内外面の剝落が著しく、調整についても不明な点が多く、底部のヘラ起しが判明する程度である。

3点ともほぼ同数値を示しており、同一手による製作と考えられるものである。性格、時期については明確にしきれず、今後の資料の増加を待ちたいと考えている。



第231図 No.134住居址出土遺物 (1/3)

二宮遺跡



第232図 No.138 土壙及び出土遺物 ($\frac{1}{40} \cdot \frac{1}{3}$)

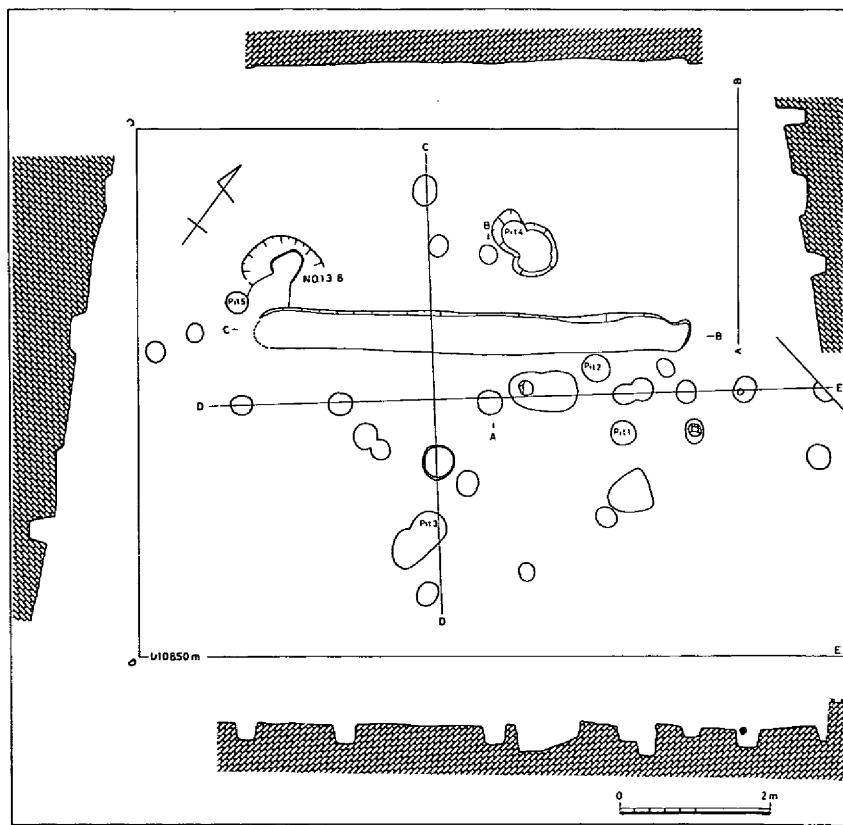
No.139 遺構 (第233図)

No.138土壙の東側に位置し、おおよそ東西に5.8m延び、幅55cmをはかる溝状の土壙である。

そして、この溝状土壙とほぼ並行する形で10穴からなる柱穴列が存在する。しかし、各柱穴内の土色はそれぞれ異なり同一時期のものとは考えがたいものである。西側より2・3・4柱穴間の距離は同数値を示すが、溝状土壙に伴うか否かは明らかではない。(高畠)

3. 小結

岡東地区の掘開調査面積は約3300m²において、多数の遺構を検出することができた。この傾斜地を余すことなく利用した痕跡が全面にみられ、弥生時代では中期後半～後期後半・末にかけての集落の一部、古墳時代後期における鍛冶



第233図 No.139 溝状土壙 ($\frac{1}{100}$)

二宮遺跡

関係の集落の一部、そして奈良時代後半期の建物、平安時代末の建物、室町時代中頃と考えられる中世建物群等がある。

弥生時代では中期後半、後期前半、後期後半の住居址が4個所に距離をおき、分散して検出されている。なかでも後期前半と後期後半・末期の住居址は約100m²の限定された範囲内においての切り合い、重複関係が顕著にみられ、少ないので3~4軒、多いもので6~13軒の住居址が、ほぼ同一の土地利用を行っているものである。これらの現象は№100袋状ピット内における一括出土土器に集約されるのではなかろうかと考える。すなわち、從来後期前半と後期後半と考られる土器が同一ピット内にみられ、各住居址の関係においても同様の土器が検出されるわけである。しかし、この事実の具体性追求は今後の課題として保留せざるを得ないのが現状である。

さて、鍛冶関係については№124住居内に存在する4基の炉と、その周辺より出土した多量のカナクソを中心にはなければいけない。この鍛冶炉1内堆積土中より須恵器杯身片が出土している。この須恵器片は最大径13.05cmをはかるもので、6世紀後半頃に比定できるものと考えられる。近隣の例では、津山市二宮大成遺跡横穴式石室墳（註21）、北房町上告部空古墳（註23）等における、比較的早い時期の埋葬に副葬されたものと共通性を見い出すことができる。また№125住居址内堆積土中にも同形態のものがみられる。表土剥ぎの段階では比較的小型のものが出土しており、最大径10.65cm、口径8.4cm、器高3cmをはかる。出土須恵器のタイプは、この二形態に限られており、二宮大成遺跡横穴式石室空間における第一次埋葬から最終追葬に及ぶ使用時間単位と共通点を有している。

現時点の美作地方で確認されている鍛冶炉では最も古い部類に入るものと考えられる。

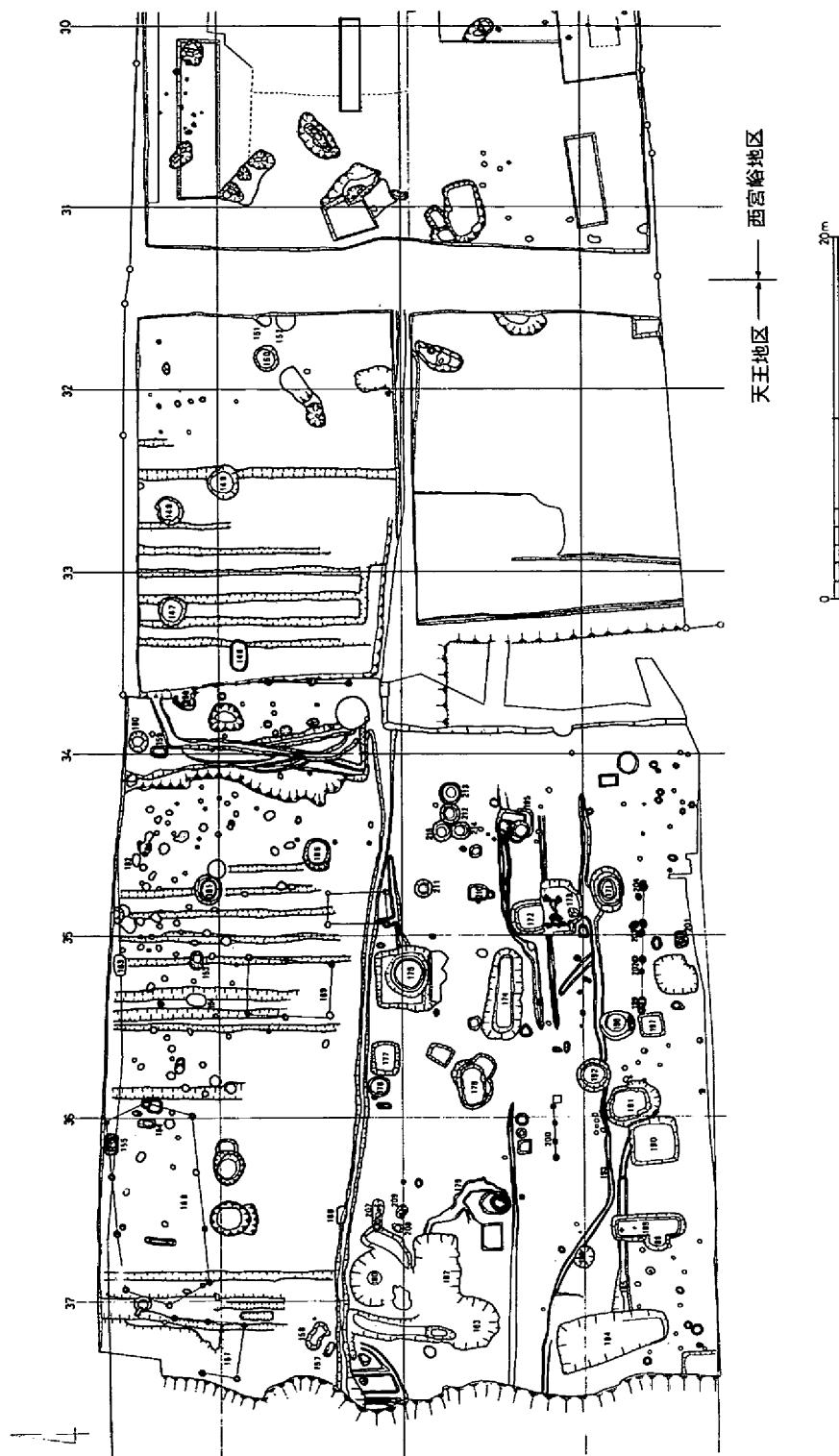
古墳時代後期より利用が薄れ、再び奈良時代後半期に建物が出現し、海拔120.50m付近の№107建物に鉄塊を含む柱穴が検出されている。平安時代全般のものは確認できず、平安末の遺構、遺物が若干みられる程度である。

室町時代中頃以後と考えられる中世建物群はほぼ西半分に集中しており、№92・94・95・97・121・128建物等がそれらにあたると考えられる。全体的にみて小型の建物が多く（表-10）、柱穴掘り方、桁行等も小規模なものである。岡の山地区の建物の性格とは趣を異にすると考えられ、規模の面からは荒神元C地区に近いものと考えられる。（高畠）

岡東地区建物計測値一覧（表-10）

建物	規模	柱間寸法(cm)		桁行(cm)	梁行(cm)	面積(m ²)	方向	掘り方	柱痕径(cm)	柱穴深(cm)	備考
		桁	梁								
84	3×1	204~222	469	629	469	29.5	東西	円形	12~15	15~50	
91	1×1	205~215	210~245	205~215	210~245	5.26	東西	円形	9~10	21.5~33	建物か？
92	2×1	202~230	200~222	417~450	200~222	9.99	南北	円形	13~16	18~67	
94	3×1	158~321	377~392	539~543	377~392	21.28	南北	円形	12~16	19~47.5	
95	2×2	208~367	225~244	549~575	457~469	27.06	南北	円形	—	13~50	
97	2×2	179~202	100~243	384~399	230~243	9.69	南北	円形	13~15.5	7~66	
99	2×2	157~168	144~289	163~325	289~303	9.84	南北	円形	9~20	10~34	
129	3×2	233~251	226~234	718~727	460~467	33.95	東西	円形	14~22	17~48	土錐出土

二 宮 遺 蹤



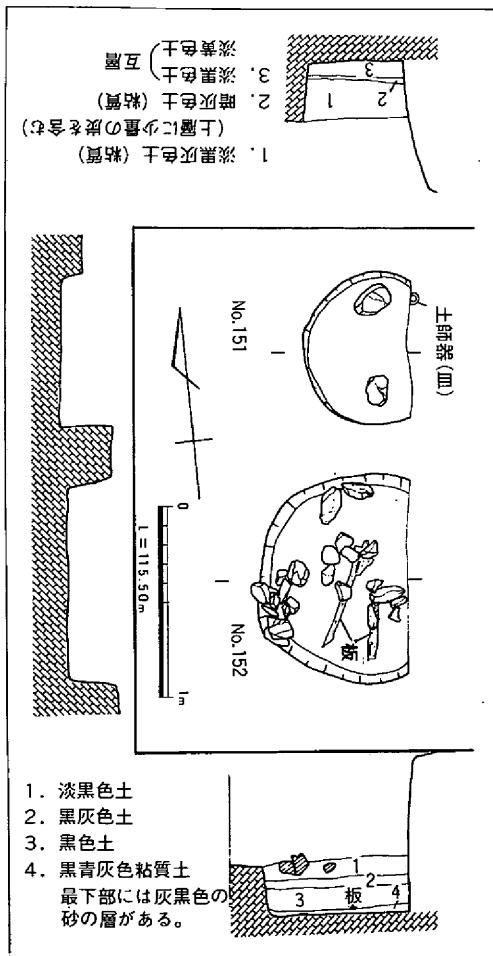
第234図 天王地区遺構分布図 (456)

第2節 天王地区

1. 天王地区の概要

二宮遺跡A丘陵と、その東側の低地がそれにあたり、海拔115~116.70m間に遺構の存在が確認された。調査順序に従って、東西Bラインを境界にしてそれより南側低地をA地区、北側をB地区、さらに西側丘陵部をC地区その西側谷部をD地区の4地区に分ける。A・B地区の東側は、西宮崎地区にゆるやかな傾斜を示している。

(1) 天王A地区



第235図 No.151・152 土壙墓 ($\frac{1}{40}$)

西宮崎地区の町倒しを行うための土取りがなされ、遺構の検出はされなかった。しかし同地区北東部に不整長楕円形の凹みが2箇所確認され、黒色有機土層で埋没している。遺物は全く出土していない。

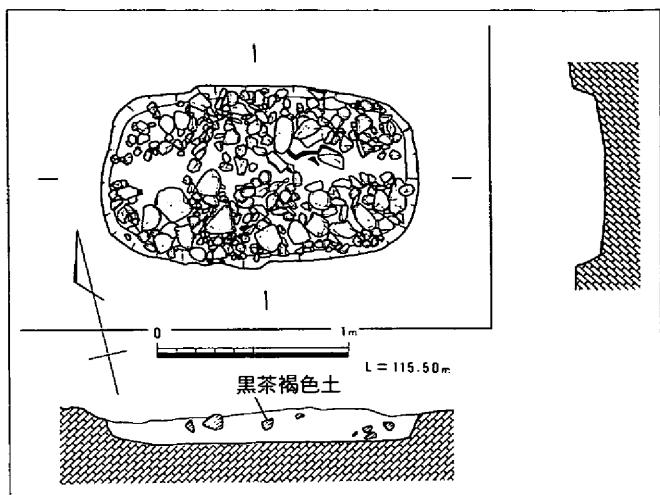
(2) 天王B地区

A地区と同様の事が行われているが、中央部より西側の掘削が比較的進んでいた。高低差において、A地区より高く、遺構も検出された。遺構は中世の土壙墓4、柱穴、近世土壙3、さらに近年（水田耕作以前）の南北に走った溝8、不明土壙2が同地区中央より北側に片寄って存在する。溝はC地区北側にも同様に存在するもので、一帯が桑畠となっていた。溝はこの桑畠の畝溝の残存するものである。No.147~149は、桑畠に関連するものと思われる土壙である。

(3) 天王C地区

東西に延びる溝で、同地区を南と北とに2分した。南側は宅地・墓地・荒地、北側は耕地・荒地・掘建小屋が調査時点まで存在していた。特に南側の後かたづけには手間取り、重機を用いて表土剥ぎも兼ねて施行した。南、北側において新旧の混在した遺構の存在が検出、確認された。遺構には、建物、井戸、溝、柱穴、礎石、土壙、土壙墓が存在する。土壙にも円形・方形・長方形がある。No.180井戸は古くから使用され、現在もなお使用しているものである。中央の東西に延びる溝は境界線にそって掘られているものである。

二宮遺跡



第236図 No.146 土壙墓 ($\frac{1}{40}$)

遺物にも時代差はかなりあるものである。中でも近世のものが大部分を占めている。

C区北東端 (第238図、図版109)

東に面して、段状をなしていた。浅い5本の溝が重複している。その東側はほぼ平らな面をなしている。またNo.156の近くに不整梢円形の土壙が検出された。さらに南西側には柱列が確認された。柱間はP₁～P₂は2.00m、P₂～P₃で2.41mを測るものであるが建物になるか否かは東側が掘削され消滅しているため不明

である。この区域においても溝の役割は、建物を囲むためのものと考えるのが妥当であろう。しかし、平坦面においての数個のピットは、建物としてのまとまりは持たない。現存面において建物の存在は確認されなかつた。

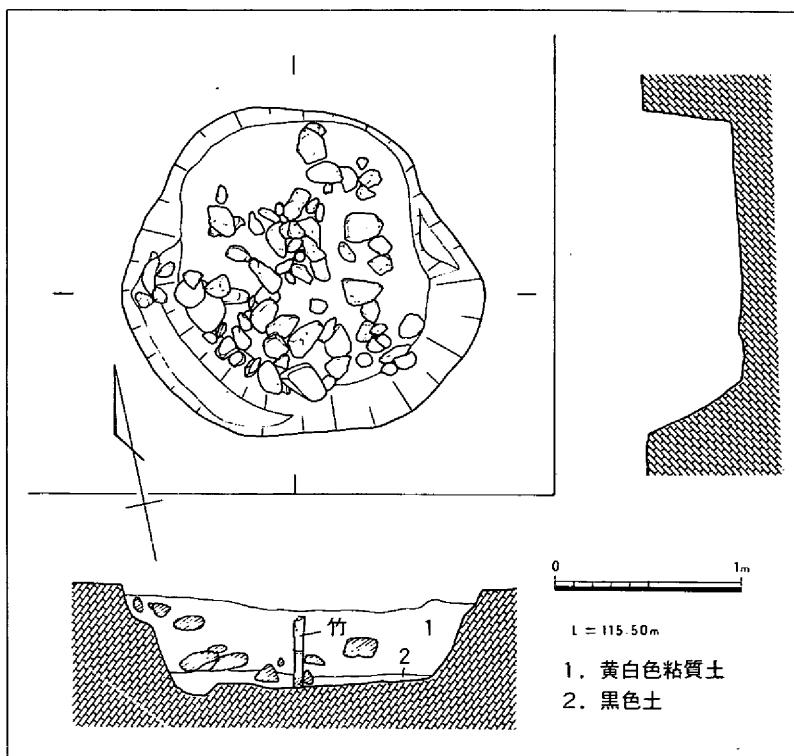
No.146 土壙墓(第236図、図版104—1)

B区西端に位置し、浅く、平面形は北西—南東に長い隅丸長方形を呈する土壙である。検出された土壙にはこぶし大の河原石から人頭大の山石でおおわれていた。土器

片、瓦片等の混入も若干ではあるがみられた。

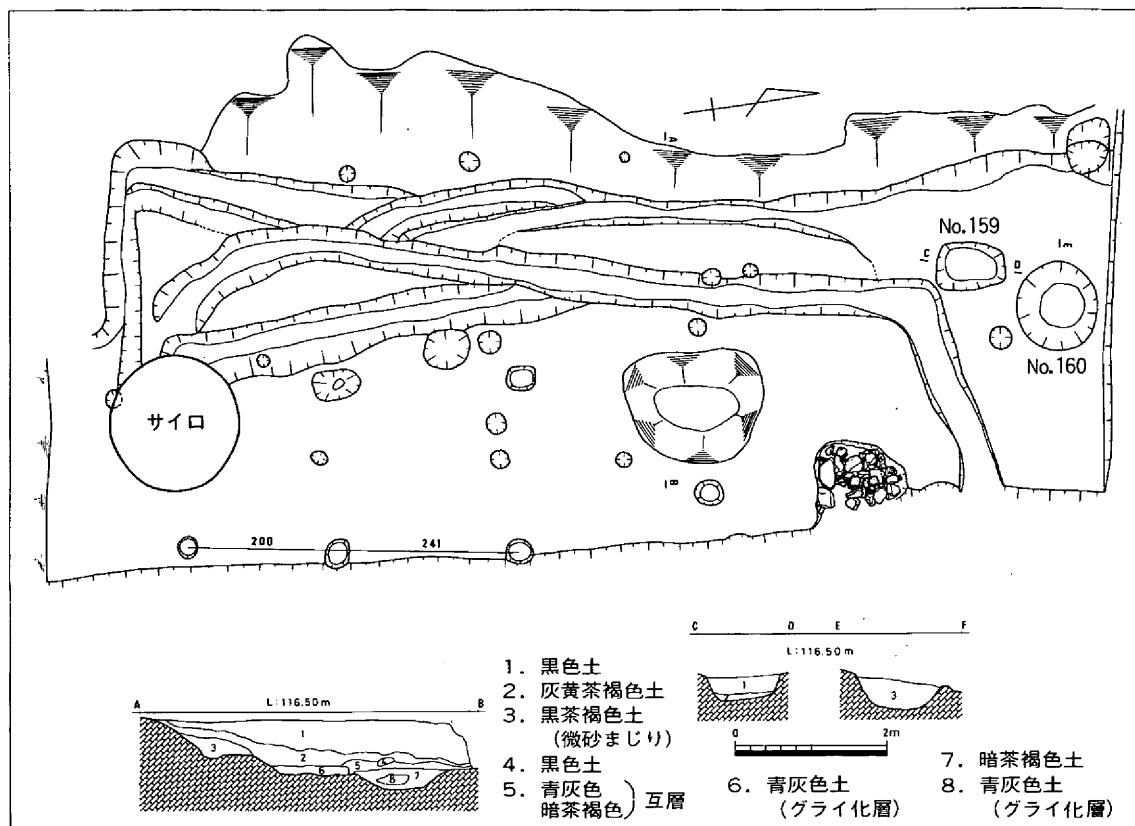
No.149 土壙 (第237図)

B区中央北側よりに存在し、No.147・148と同じく、河原石・山石を投入して埋めもどされていたも



第237図 No.149 土壙 ($\frac{1}{40}$)

二宮遺跡



第238図 天王C地区北東端 ($\frac{1}{100}$)

のである。さらにこのNo.149土壙は、中央に節貫きの竹を埋めている。この竹の用途は、土壙内部に充満するガスを抜くために用いたものと思われる。また、この3基の土壙は耕作時における肥料の貯蔵に用いたものであろう。なぜならば、この土地は水田となる前は桑畠となっていたからである。さらに、同区内の南北に延びる溝は桑畠の畝溝である。

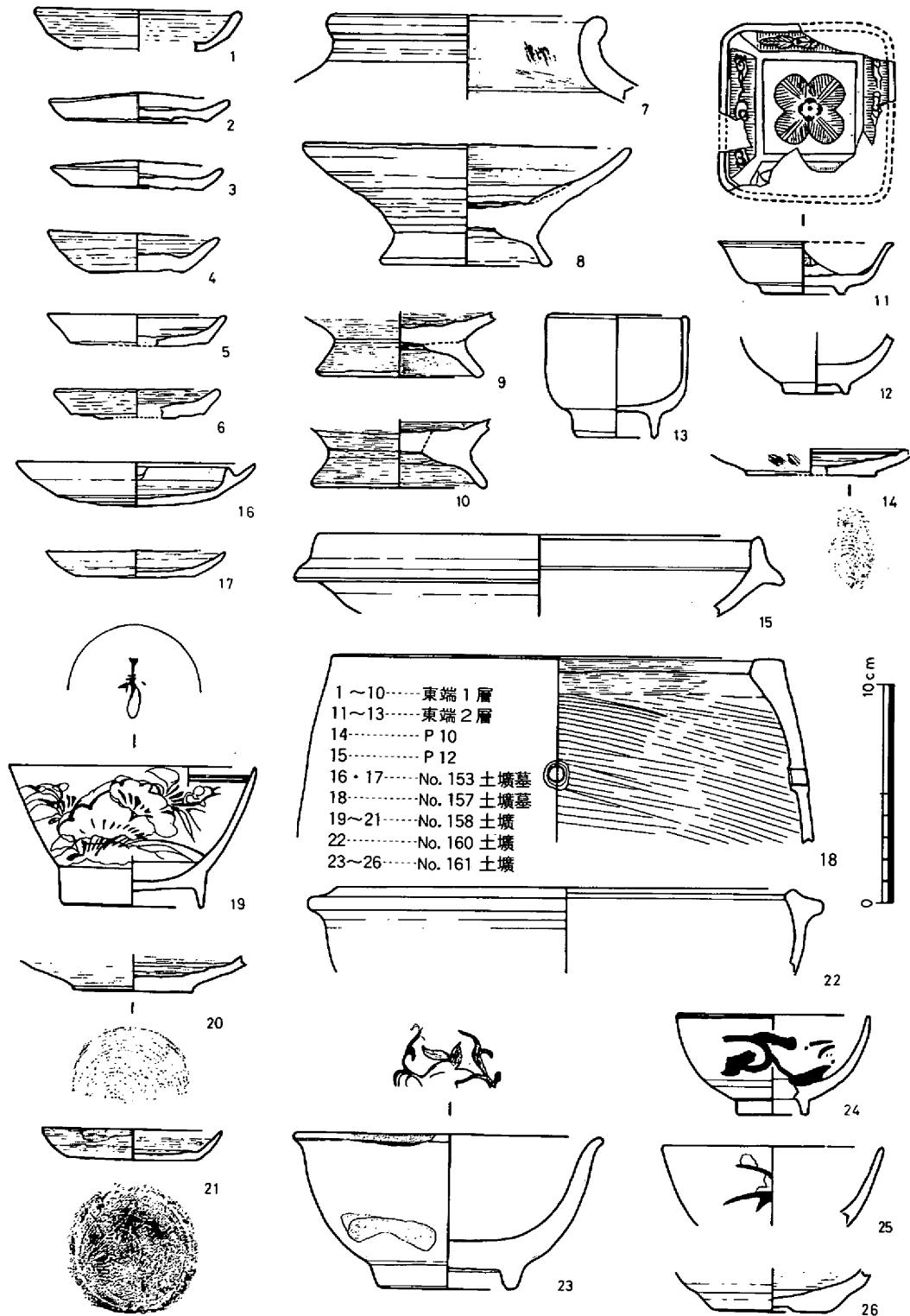
No.151・152 土壙墓 (第235図、図版105—1)

B区東端に存在し、農道に未掘部分を残している。平面形はほぼ円形を呈し、南と北に石がみられた。No.151土壙の東壁中層に第239図の皿が検出された。これは皿の縁に黒色炭化物が付着しているところから、灯明皿としと用いられていたものである。底部は糸切りがなされている。No.125土壙は、No.151土壙より大きめであり、床面には板材が確認され、上層には山石が埋め込まれている。遺物の出土はみられなかった。

No.153 土壙墓 (241図)

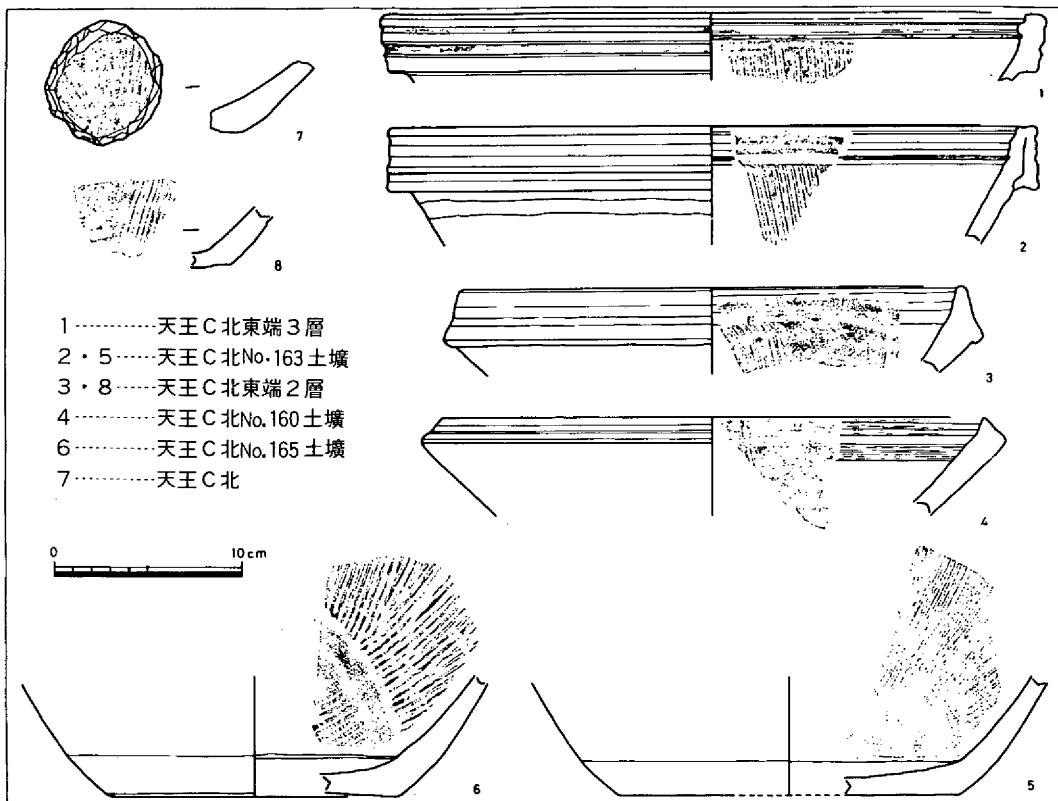
C区北側でNo.168建物内に存在する土壙墓である。平面形態は東西に長い隅丸長方形を呈する。掘り上げ後の形態では西側においてゆるやかに傾斜する。さらに石の埋没がある。よって上部構造は石積みが行われていたのであろう。出土遺物は第239図16・17がある。いずれも灯明皿である。

二宮遺跡



第239図 天王C北地区出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡



第240図 天王C北地区出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

No.154 土壙墓 (242図、図版105—2)

C区北側で、No.163土壙墓の西側に存在するものである。平面形態は南北に向いた長方形を呈している。断面形では、東西壁は垂直に近く、南北壁は底部が狭くなっている。土壙の床面は北側が下がる。出土遺物は認められなかったが、石が数個埋没していた。

No.155 土壙墓 (第243図)

C区北側の中央北壁に存在する土壙である。平面形態は不整長方形を呈する。床面はほぼ水平で、底部が狭くなっている。出土遺物は確認されなかったが、土壙内上層には石の埋没がみられた。

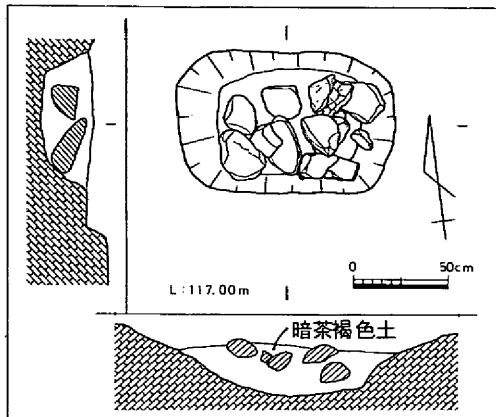
No.156 土壙 (第245図、図版107)

C区北側東端に存在し、東を切り取られているものである。平面形態は歪な方形を呈していたと思われ、約半分が存在するのみである。さらに石組を有するものである。

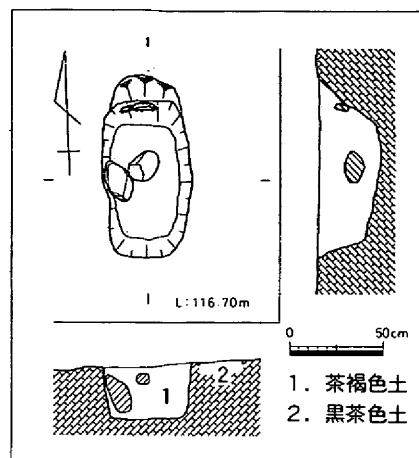
No.157 土壙墓 (第244図、図版108—1)

C区北側の南西端に存在するもので、平面形態は歪な長方形を呈している。底部も歪である。壁面は傾斜している。また南西隅に第239図18と2個の石が検出された。18は、口径18cmを測るもので、口縁にかけこの器肉は厚く、端部上面は若干のふくらみを有する面を持つ。内面端部も面を有し、稜

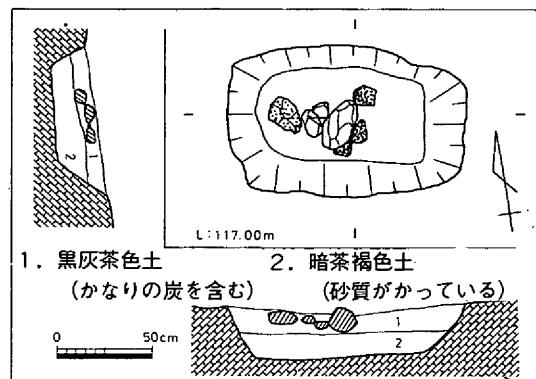
二宮遺跡



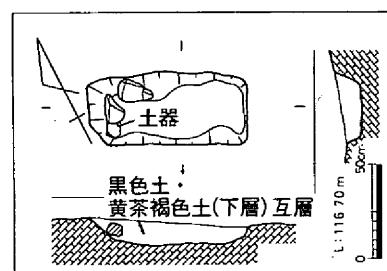
第241図 No.153 土壙墓 ($\frac{1}{40}$)



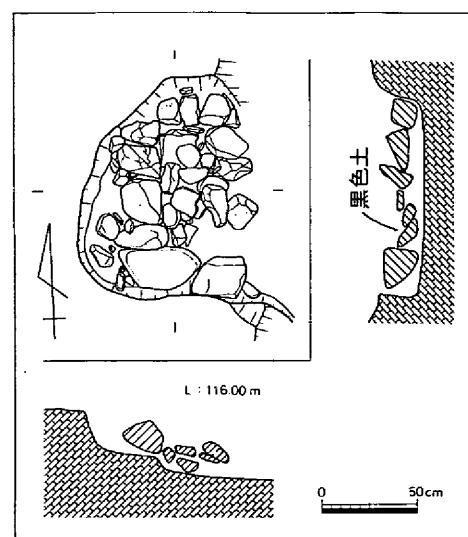
第242図 No.154 土壙墓 ($\frac{1}{40}$)



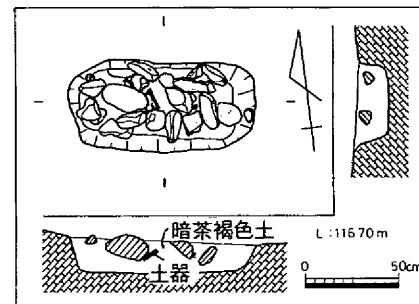
第243図 No.155 土壙墓 ($\frac{1}{40}$)



第244図 No.157 土壙墓 ($\frac{1}{40}$)

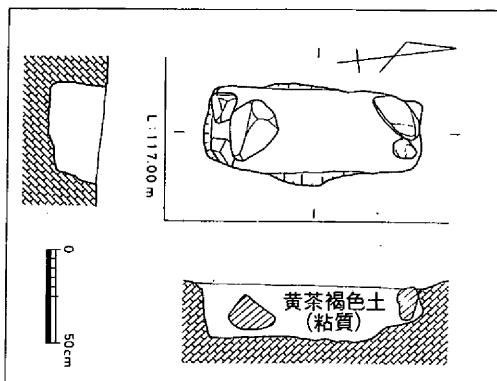


第245図 No.156 土壙墓 ($\frac{1}{40}$)

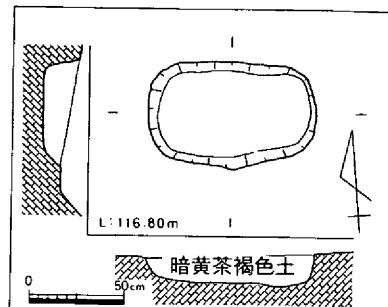


第246図 No.162 土壙墓 ($\frac{1}{40}$)

二宮遺跡



第247図 No.164 土壙墓 ($\frac{1}{40}$)



第248図 No.166 土壙墓 ($\frac{1}{40}$)

を持つ内面上部は横ナデ、以下は斜めの櫛目が施こされている。外面はナデ仕上げで、焼成前に穴が開けられている。外表面には二次焼成にする黒色炭化物の付着がみられた。この瓦質土器は日常雑器として用いていたものである。

No.162 土壙墓 (第246図、図版106—1)

C区北側で北境界に存在するものである。平面形態は正な隅丸長方形を呈するもので土壙墓内には石の埋没がみられ、瓦片、陶器片も含まれていた。

No.164 土壙墓 (第247図)

C区北側でNo.153の南東のNo.168建物内東側に存在し、南北方向のものである。平面形態は不整長方形を呈するもので、土壙墓内には北側に2個、南側に3個の石が検出された。北側底部は2段の構造を呈し、石は上段で北壁に接して組込まれていたが反対側の石はくずれ落ちた状態である。遺物の出土はみられなかった。

No.166 土壙墓 (第248図)

C区北側で南側との境に存在する東西向きの浅い土壙墓である。平面形態は若干胴の張った隅丸長方形を呈し南側は溝によって削られている。遺物の出土はみられなかった。

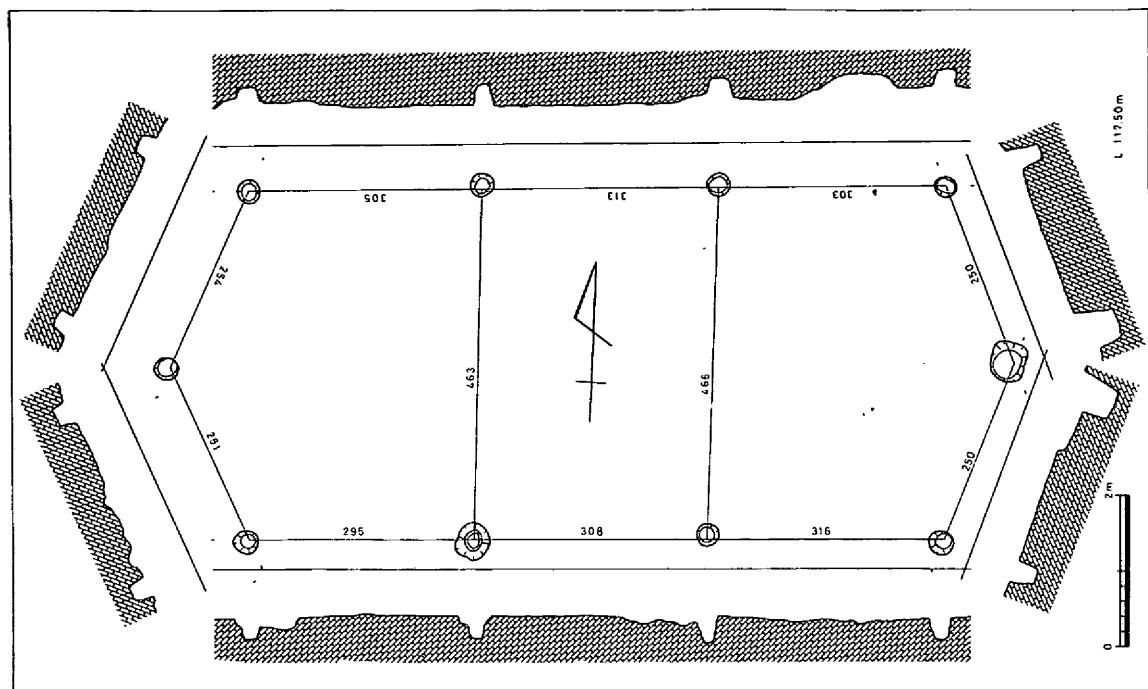
No.167 建物 (第250図)

C区北側西端でNo.168建物に直交するように存在する建物であり、現状では 3×1 間を測るもので北は用地外、西は掘削により規模が拡大するか否かは不明、柱穴の深さは $10 \sim 30cm$ とまちまちである。径は最小 $25cm$ 、最大 $30cm$ を測り大きなばらつきはなく、ほぼ均一した円形のものである。北西柱穴には根石が用いられていた。

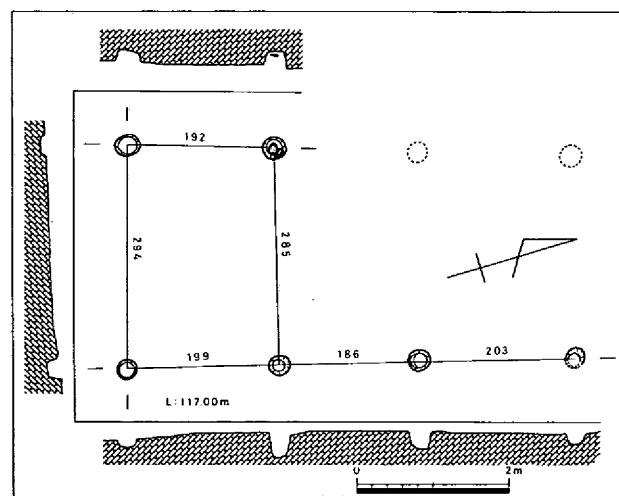
No.168 建物 (第249図)

C区北側西端でNo.110～167建物の東にし、建物に直交して浅い溝や耕作による攪乱がみられたが、 3×2 間の建物でほぼ東西方向の棟になっている。桁行は北側で $9.21m$ 、南側では $9.19m$ を測る。柱穴は $20 \sim 45cm$ の深さで、径は $30 \sim 45cm$ とばらつきがみられる。柱根痕跡は存在していなかった。この建物には、東西に棟持ち柱が外に張り出し、平面形態は6角形を示す建物である。

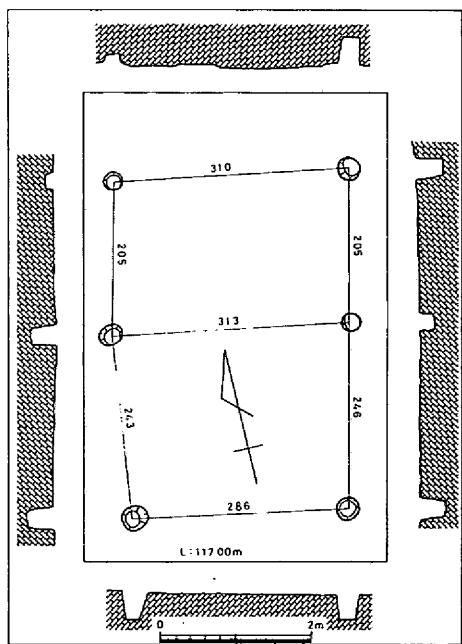
二宮 遺 跡



第249図 No.168 建物 ($\frac{1}{100}$)



第250図 No.167 建物 ($\frac{1}{100}$)



第251図 No.169 建物 ($\frac{1}{100}$)

二宮遺跡

No.169 建物（第251図）

C区北側中央南側に位置する 2×1 間の建物である。桁行は、 $4.51m$ と $4.48m$ 、梁行は $3.10m$ と $2.86m$ で南が若干狭まっている。柱穴の配置は西側中央が張り出して歪んだ形になっている。また、東側中央と西側北端の柱穴はやや小規模で深さもないものである。

天王C地区南側（第234図）

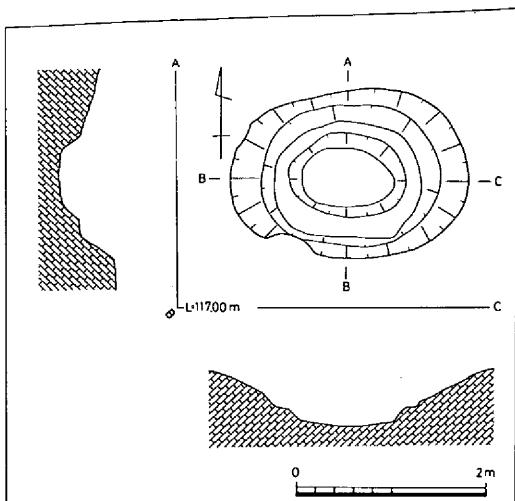
全体図のほぼ中央を横断する溝によりC地区を2分した。この地区は調査前に4軒の家屋が建っており、発掘調査直前まで現存していた。立退き後も基礎部分、井戸跡等が存在しており表土、残骸除去等をブルドーザーによって実施

した。そして削り出

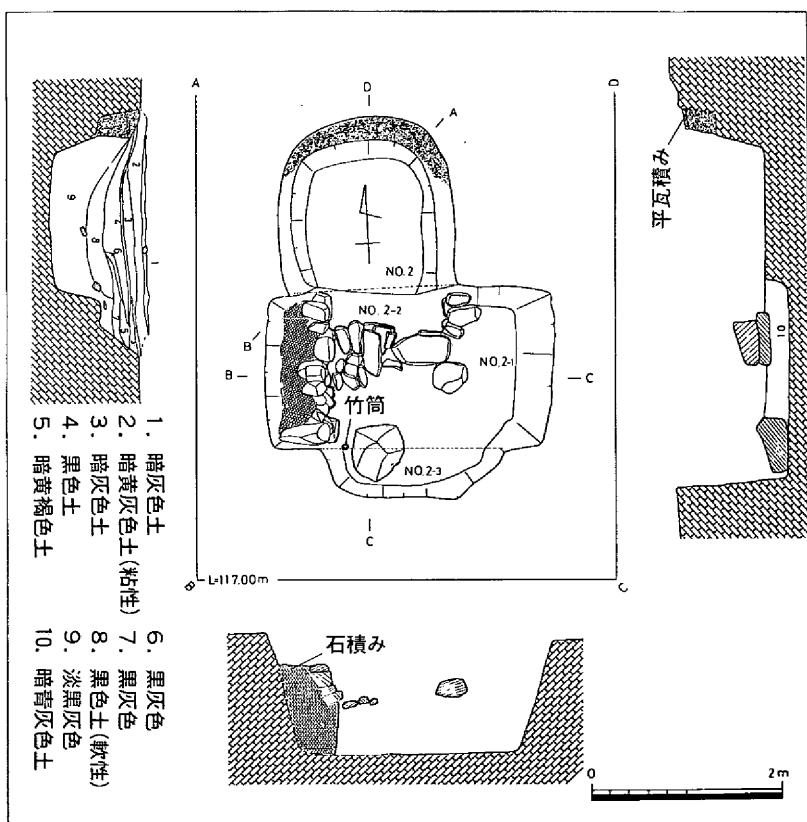
し後、約30基の土壙、柱穴列3、土壙墓9、溝7～8、井戸3、柱穴等を検出した。

これらの性格を考える場合、立退きした建物は二宮遺跡A丘陵尾根筋に並行、あるいは直交してつくられており、それらに合わせてつくられているものが多いことに気がつく、

No.188・189・190・191・179 土壙がそれらにあたり、近代の建物に併設されていたものではないかと考えられ、No.180井戸は現在も使用されているものである。他の土

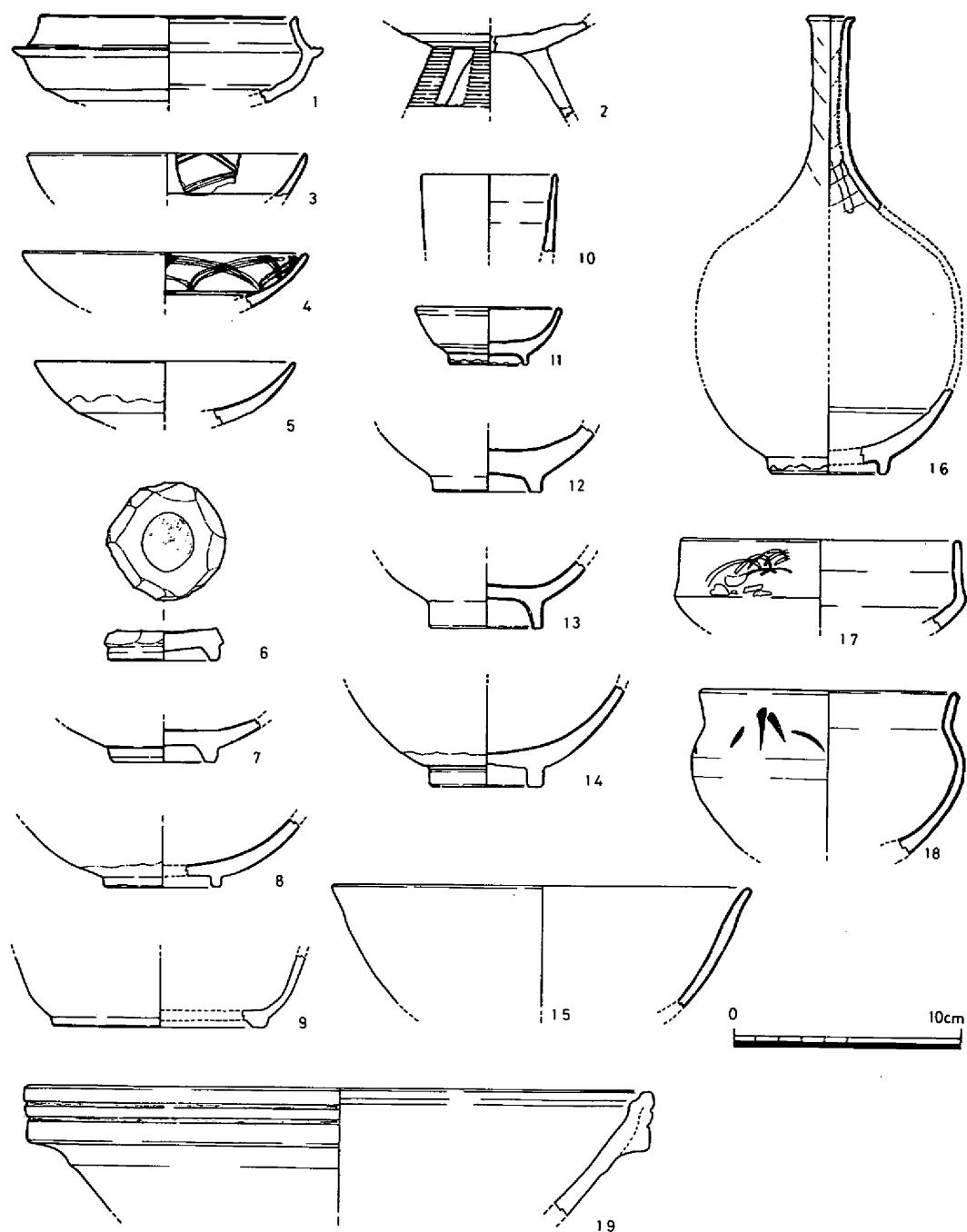


第252図 No.170 土壙 ($\frac{1}{80}$)



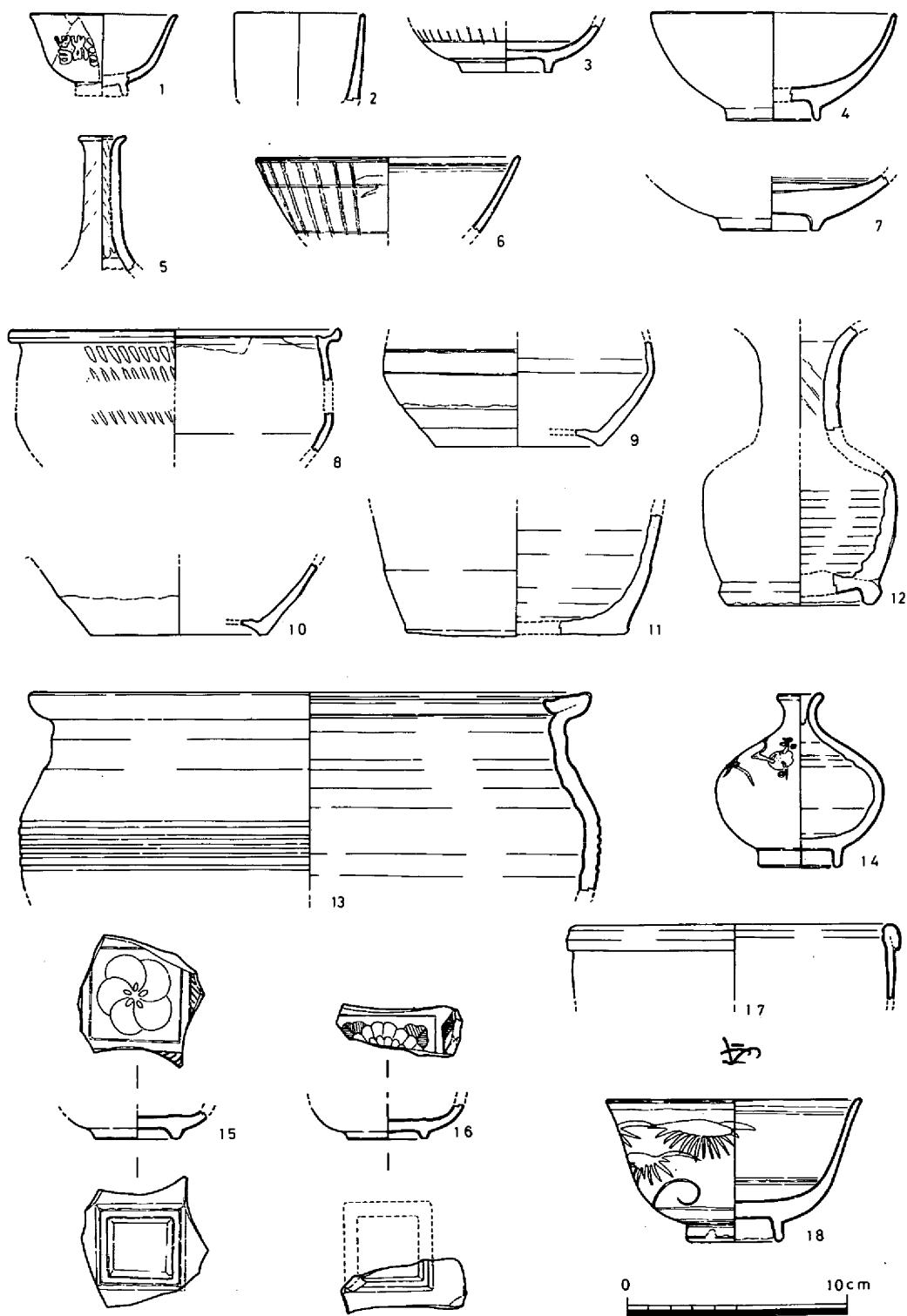
第253図 No. 171 土壙 ($\frac{1}{80}$)

二宮遺跡



第254図 No. 170 土壌出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡



第255図 No.170・171・172 土壌下層出土遺物 (1/3)

二 宮 遺 跡

壙も類似方向を呈するものが多く、土壙内には伊万里、唐津、備前焼が投げこまれており、瓦破片も多くみられた。

No.170 土壙（第252図）

長軸約2.5m、短軸1.8m、深さ約60cmをはかり、3段の掘り方をもつ楕円形の土壙である。埋土中に多くの遺物が混入しており、古いものでも6世紀前半の須恵器杯身、高杯片がみられ、他はすべて近世陶磁器である。

遺物（第254図）

1は最大径13.5cm、口径11.2cm、残在高3.8cmをはかり、色調淡青灰色を呈する杯身である。1・2ともロクロ回転方向は左回りである。3～16、のうち9・11を除く磁器が伊万里系のものと考えられ、17・18は唐津系の焼物であろう。19は備前焼である。

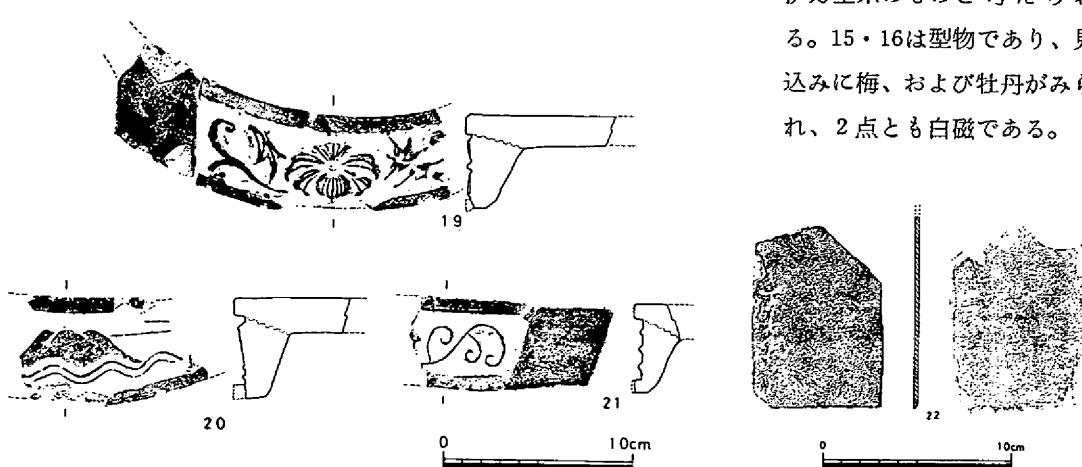
No.171・172・173 土壙（第252・253図・図版99—1）

合計4土壙の切り合い、拡張がみられる遺構である。図上のNo.2₁が最も古く、次にNo.2が作られ、ついでNo.2₃につなぎの石積みを行い4mの大型のものをつくりあげている。そして、最終の段階においてNo.2とNo.2₂を接合した形をつくりあげている。No.2₁では底ざらえを行ったと考えられ、南西隅部に長さ約15cmをはかる竹筒が立てられていた。No.2は最終的にゴミ溜めとして利用された痕跡をとどめ、近世陶磁器が多量に出土している。

遺物（第255・256図、図版99—1）

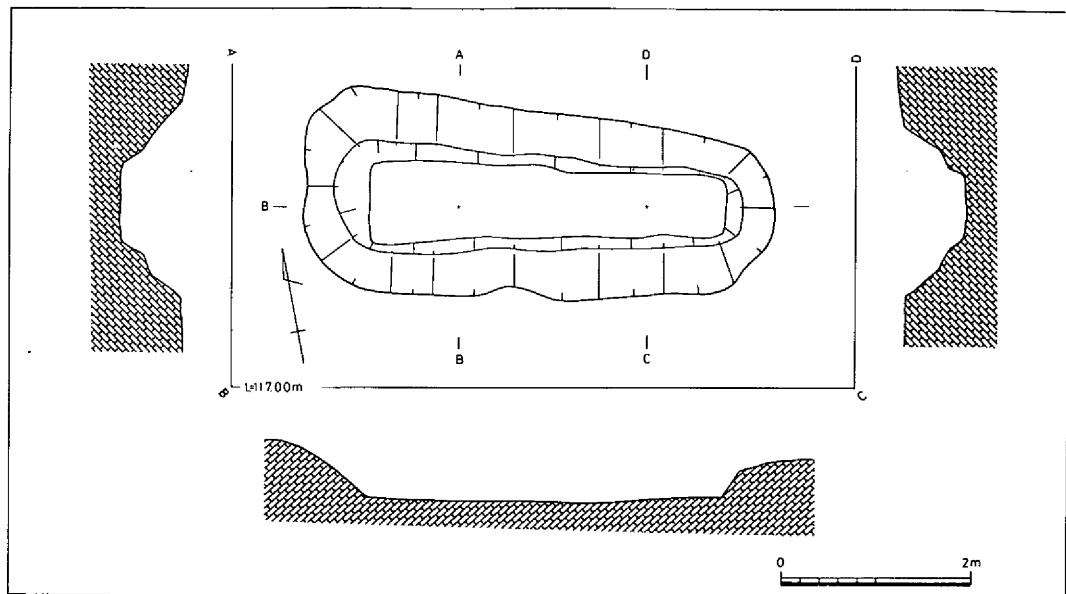
1～8は伊万里系の磁器と考えられるものであり、2はNo.170土壙でみられたものと同様の規模、色調を呈する。3・6等は呉須による直線文が描かれている。8・9・10は幾分胎土、焼成が異なり、胴部下半はヘラ削りが施され無釉のものである。この器形、整形等は酒津焼にもみることのできるものである。13は唐津系の焼物と考えられ瓈形土器である。17は陶器であり、それを除く17～18は

伊万里系のものと考えられる。15・16は型物であり、見込みに梅、および牡丹がみられ、2点とも白磁である。



第256図 No.171土壙出土遺物（ $\frac{1}{4}$ ）

二宮遺跡



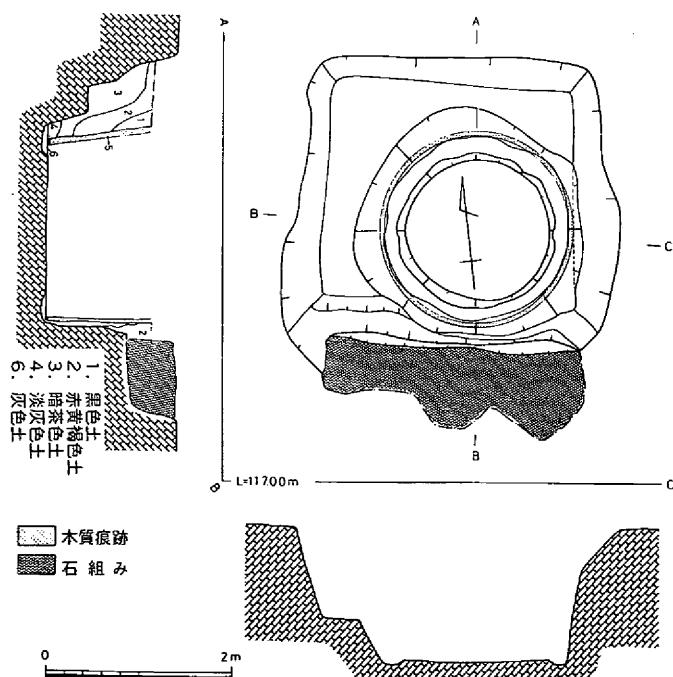
第257図 No.174 土壙 ($\frac{1}{80}$)

19～21は軒平瓦であり、文様は菊花、山、唐草がみられる。色調暗青色を呈し、断面は灰白色のものである。22は石板の破片であり、表裏に線刻が施されている。そこには「小原チエ」という人名、

他面に「先生」の字が2行描かれている。この小原は立退きの家すべてが同姓であり、直接問い合わせを行ったが、小原家の記録には存在がなく、小原千代という名が記載されていた。この記録に後述する小原家住宅の図がみられた。

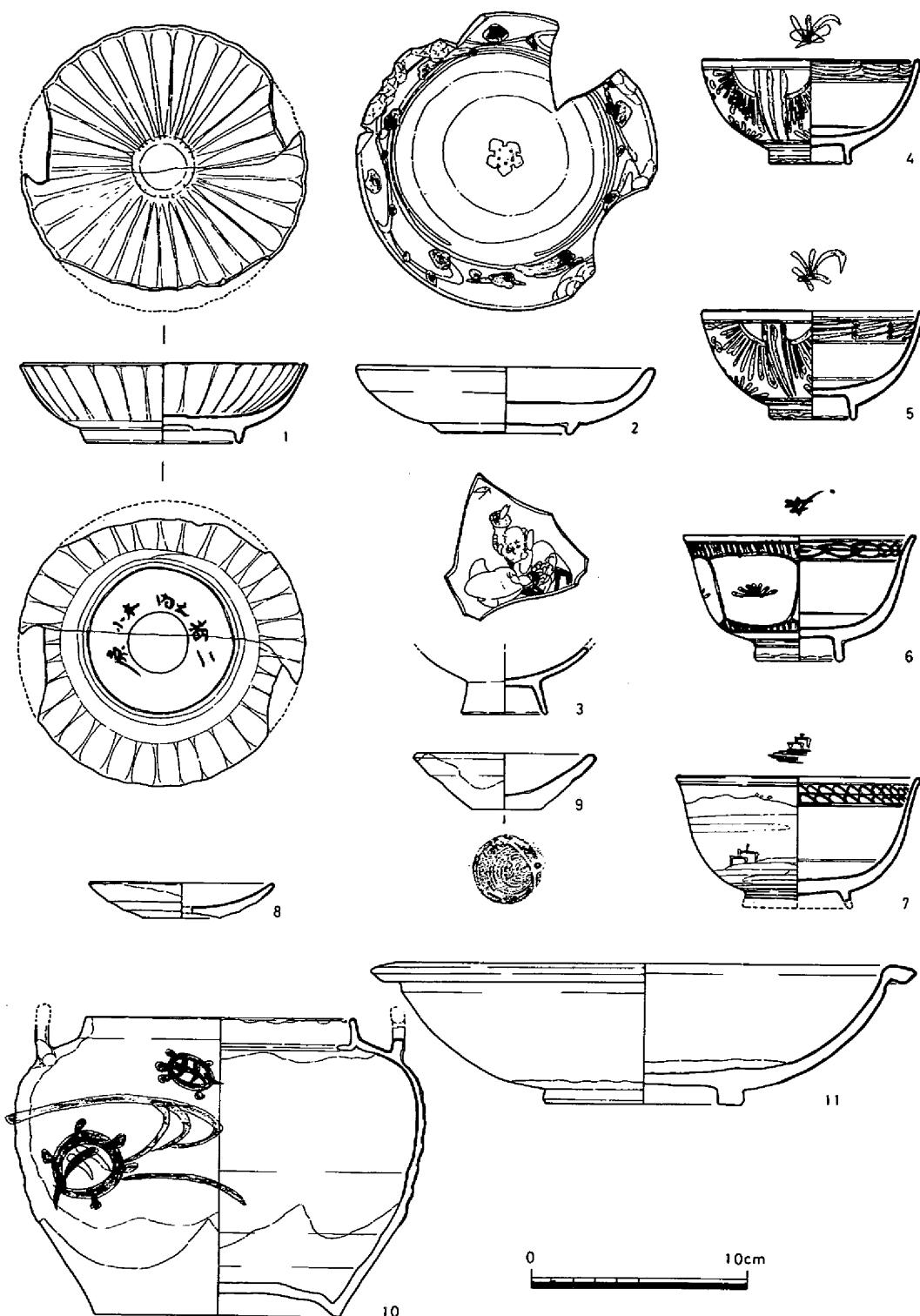
No.174 土壙 (第 257 図、図版 99-2)

ほぼ東西に主軸をもち、長軸 5m、西側短軸 2.2m、東側短軸 1.7m、深さ 70cm をはかり、西側が広い隅丸長方形土壙である。掘り方は2段に掘り込まれており、下端長軸 3.8m、短軸 62cm～82cm をはかり上端プランと同形を呈する。このような形状のものに直行する



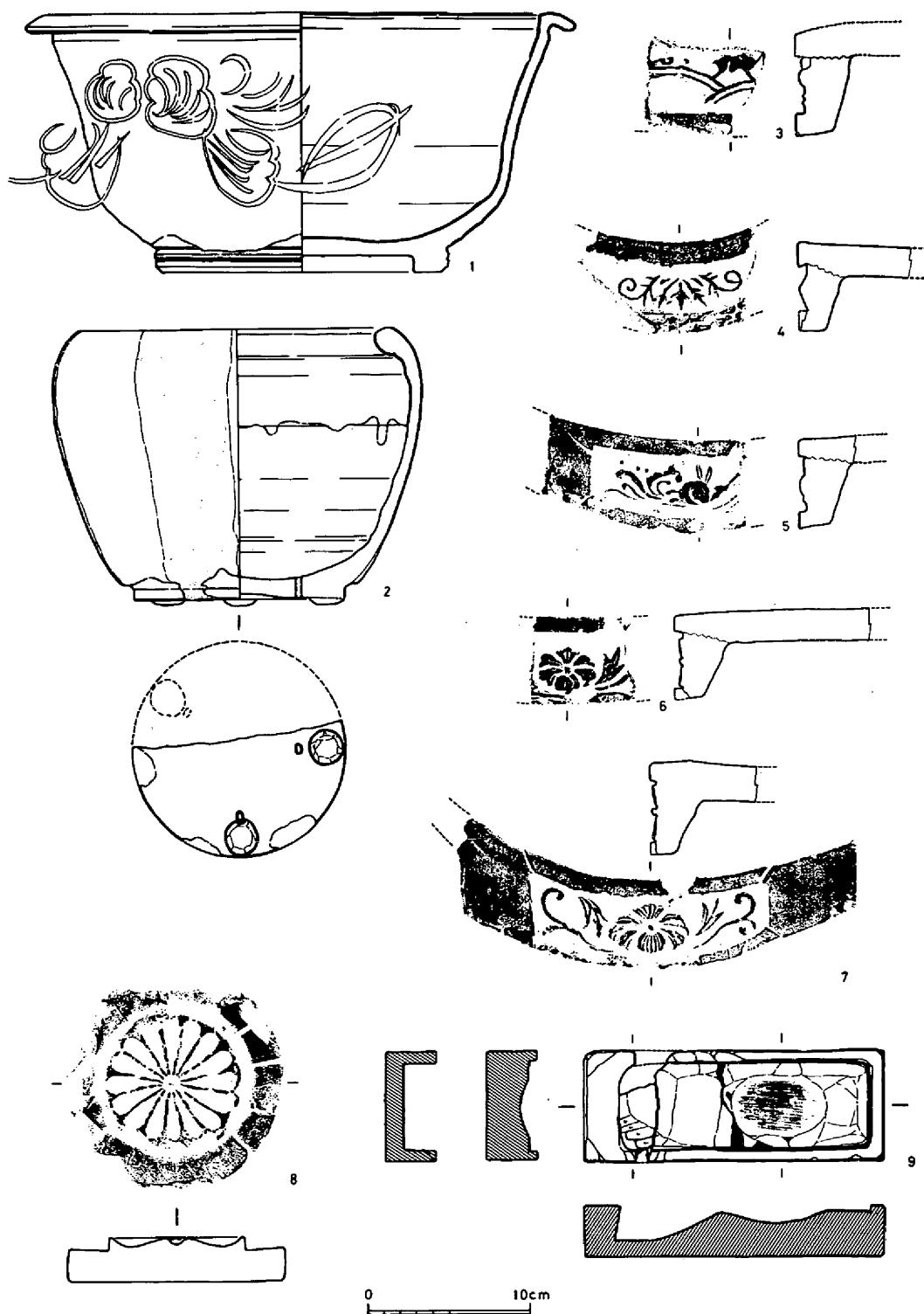
第258図 No.175 土壙 ($\frac{1}{80}$)

二宮遺跡



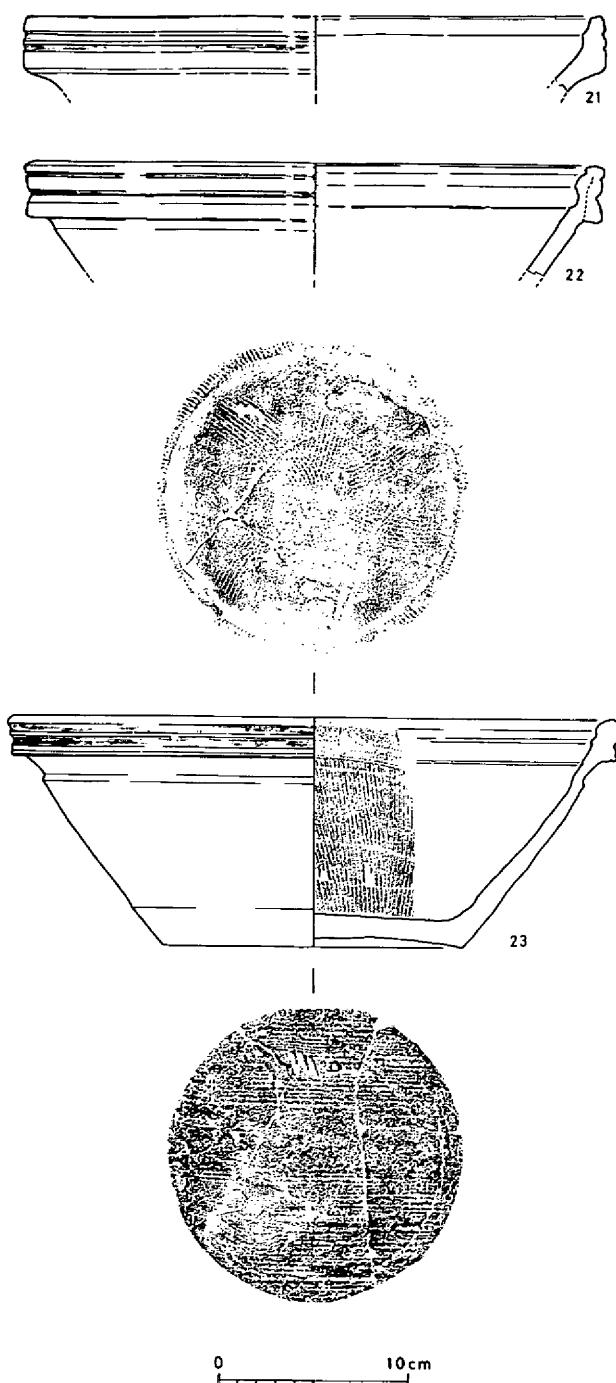
第259図 No.170・175 土壌出土遺物 (1/3)

二宮遺跡



第260図 No.175 土壌出土遺物 ($\frac{1}{4}$)

二宮遺跡



第261図 No.175 土壙出土遺物 (1/4)

方位でNo.189土壙が存在する。No.174土壙上面よりは同じく近世陶磁器(第266図)1・2が出土している。

No.175 土壙 (第258図、図版100—1)

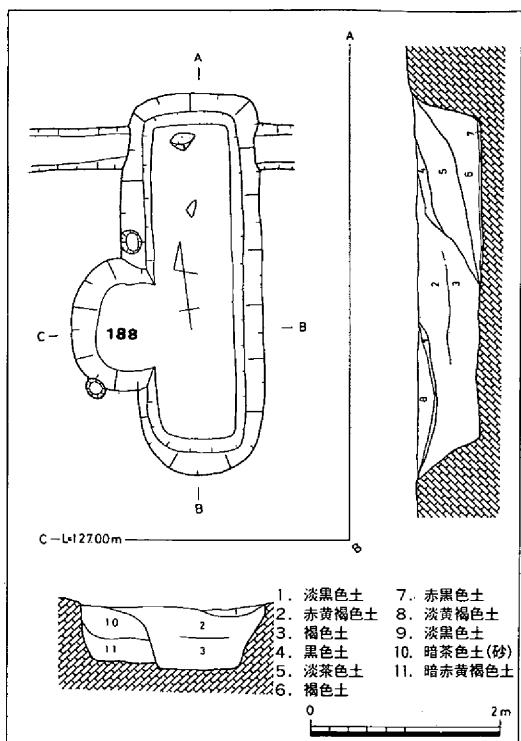
土壙は一辺約1.9cm、深さ1.4cmをはかる隅丸方形を呈し、その南東部に寄せて直径2.4mの円形掘り方が別に設けられている。その内に直径2mの井戸枠が入っていたと考えられる土層断面が観察できる。この井戸は主に南側方向より利用されたと考えられ、足場となる河原石の石組がみられ、その範囲は長さ1.8m、幅95cm、深さ50cmをはかる。非常に丁寧につくられたものと思われる掘り方、および形状を呈している。遺物は円形土壙を中心に大量に出土しており、やはり近世的陶磁器、瓦片が中心となっている。この井戸も最終的にゴミ溜めに転用された状況の遺物出土状態である。

遺物 (第259・260図)

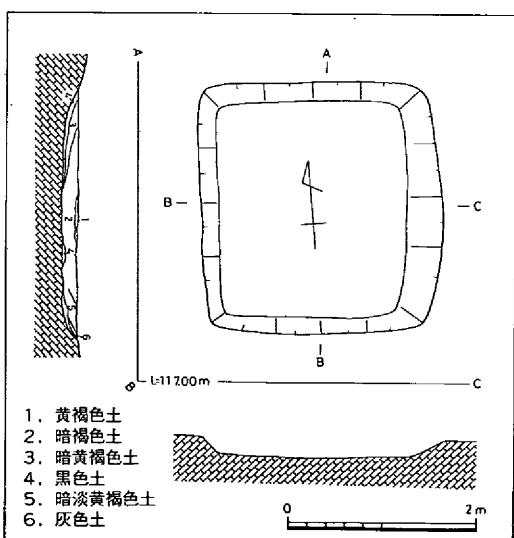
1～7は伊万里系の焼物と考えられ、皿および茶碗である。1は型物にて菊花状を呈し、波状の口縁を形成している。外面高台内は無釉であり、左回りに7文字が墨書きで記されている。「二拾之内本小原」と読むことができ、20枚揃いのうちの1枚であり、本家小原の所有を示すものであろうか。

2は内外面とも釉薬が施されている。見込み部分は呉須による草花状の植物文様が一巡し、そして内側に砂の目痕がみられ、見込み中央に5弁花文が呉須により描かれている。岡の山地区の近世土壙墓にも同様のものが存在す

二宮遺跡



第262図 No.188・189土壤 ($\frac{1}{80}$)



第263図 No.190土壤 ($\frac{1}{80}$)

る。3は多色により「布袋さん」が描かれているもので酒杯の類であろう。4・5は文様構成が類似し、5も同様見込み中央に吳須による同記号が描かれている。8・9・10・11等は陶器であり、11は唐津系の焼物と考えられる。1・2(第260図)も同様であろう。3～7は暗灰色を呈する軒平瓦であり、7は前述のNo.171土壤と同様の型物図柄である。8は直径13cm、厚さ3cmをはかる軒丸瓦の型物であろう菊花と唐草文をあしらっている。3～7同様暗灰色の瓦質のものである。9は石製硯であり、粗悪な砂岩質のものである。21・22・23は備前焼擂鉢である。口径約35cm、器高13cmをはかり、ほぼ同規模を有するものと考えられ、垂直に立上がる口縁が共通するものである。口径外面には2～3本の凹線文が施されており、胴部内面は細い櫛状工具による卸し目が縦位で全面に施されている。23等は内面底に同様の櫛状工具による左回りの卸し目がみられ、底部には横位の板目状の痕跡をとどめる。

No.188・189 土壙 (第262図)

円形を呈するNo.188土壤がNo.189土壤によってカットされている状況で出土したものである。No.189土壤は前述のNo.174土壤と類似形態をもち、掘り方、埋土等において共通点をみい出すことができる。

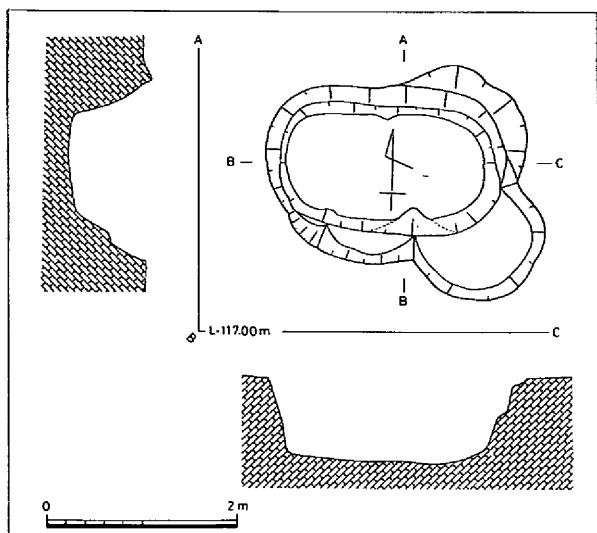
No.190 土壙 (第263図)

No.191土壤をカットしてつくられた隅丸方形を呈する浅い土壤であり、一边250cm、深さ23cmをはかる。遺物は何ら発見できなかった。

No.176 土壙 (第264図)

4～5基の土壤が同一場所で切りあつた状態を呈する遺構である。No.176土壤は長軸2.8m、短軸1.6m、深さ0.9mをはかる楕円形土壤である。しかし、2基の円形土壤が1つになった形

二宮遺跡



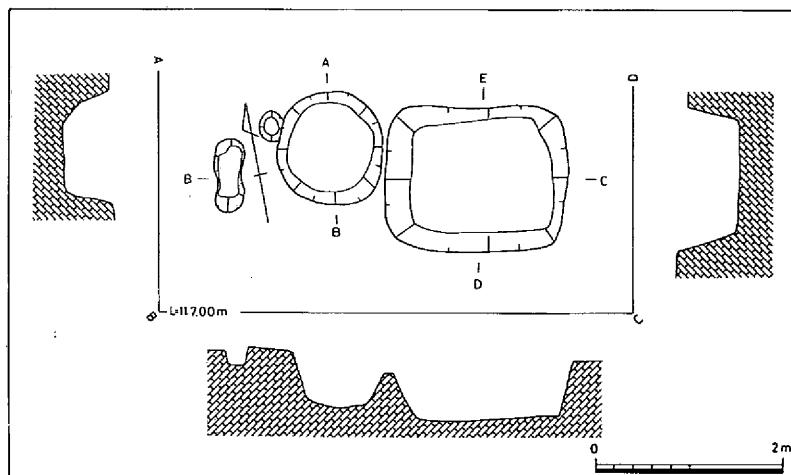
第264図 No.176 土壙 (1/80)

状を呈している。他の土壙は浅く、小型であり、No.176 土壙にカットされたものと考えられる。瓦片等が少し出土している。

No.177・178 土壙 (第265図)

円形と隅丸長方形を呈する土壙が東西に並んで検出されている。No.177 土壙は長軸約 2m、短軸 1.5m、深さ 0.7m をはかる土壙である。内部には石材、土が主に詰っており、若干の瓦質が混入している。No.178 土壙は直径 1.2m、深さ 0.6m をはかる円形土壙であり、No.177 同様石材が詰っている。ほぼ同時期に使用されたと考えられるものであり、近世より近代にかけての産物である。

遺物 (第266図)



第265図 No.206・178・177 土壙 (1/80)

2 は・No.147 1 土壙より出土したものである。1 は口径 9.2cm、底径 4.5cm、器高 5.3cm をはかり、色調淡青白色を呈する碗形土器である。白磁胎にて、外面は呉須による草花文、山水絵が描かれており、それらの絵図は径約 4.5cm をはかる「○文」内におさめられたものであり、それ以外

は直線によるヒビ破れ状の小三角形が描かれている。高台部分は 3 重の円圏文が巡る。釉薬は全面によよんしており、畳付部のみが剥がれている状態を示す。2 は口径 12cm、底部 5cm、器高 7.6cm をはかり、色調淡緑灰色を呈する碗形の土器である。器外面には、ばかり呉須による山水絵が描かれており、口縁部では斜格文、高台付近は 3 重の円圏文が巡る。釉薬は器内外面に施されており、やはり畠付部が磨滅している。胎土は磁器のものでも、陶器のものとも若干異なり青白磁胎まではいかず、陶器との中間を呈する。この形状のものは岡の山地区の近世土壙墓内において検出されており、伊万里

二宮遺跡

系の焼物について唐津系のものと、ほぼ同数に近い出土例をみている。山水絵の図柄においても同様のものが存在する。

1 (第266図中段) は胴部上半が欠損しており、最大径 11.8 cm、残存高 5.2 cm、高台径 4.8 cm をはかる碗形土器である。No.17 4 土壙の 2 と形状はほとんど変らず、色調淡灰緑色を呈し、外面高台部分に吳須による 2 重の円闇文が巡る。器内外面とも釉薬が施されており、1 と同様に細かい貫入が全面にみられる半磁器である。

1・2 (第226図下段) は No.195 土壙内より出土したものであり、荒神元 B 地区 No.14 遺構を中心に出土した陶器と同類のものである。

1 は口径 8.8 cm、器高 1.2 cm をはかり、色調赤褐色を呈する皿形土器である。口縁部内外面はヨコナデがみられ、底部外面は鋭い稜線が残るヘラ削りが行われている。精製粘土が使用されており、焼成良好にてロクロ回転左回りが観察できる。2 もほとんど同様のものであり、外面スス付着がみられる。

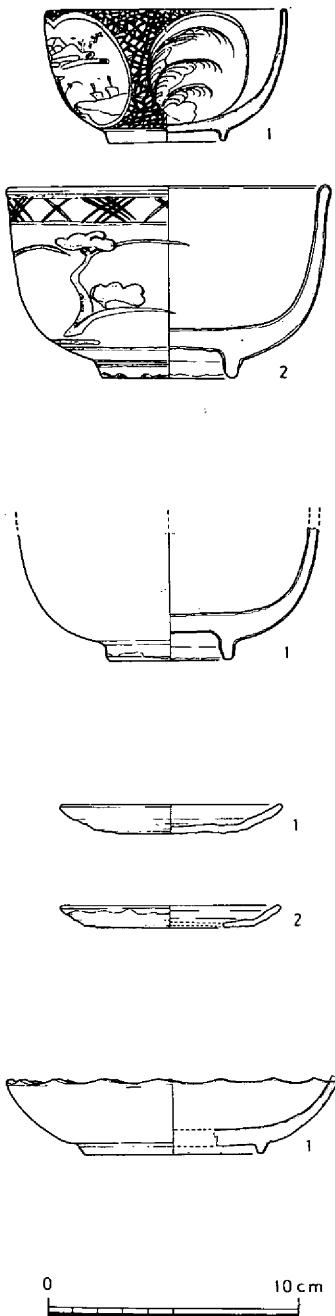
1 (第226図、最下段) は口径 13 cm、底径 7 cm、器高 3 cm をはかり、色調淡灰白色を呈する輪花状の皿である。高台内面を除く器内外面に釉薬が施されている半磁器系のものである。

この輪花状の皿は No.196 土壙と No.197 土壙の埋土中より検出したものが接合可能になったものであり、この 2 土壙はほぼ時期を同じくして埋められたことがよく理解できる。

No.191 土壙 (267図)

No.190 土壙により西端部分をカットされている楕円形を呈する土壙である。主軸をほぼ南北にとり、長軸 3.1 m、短軸 2.2 m、深さ 0.8 m をはかる。No.106 土壙と幅、深さ等においてほぼ同規模を有し、2 土壙が連結して最終的に 1 土壙を形成している形態である。下端長軸 1.9 m、短軸 1.4 m をはかる隅丸長方形を呈するものであり、北側土壙が若干幅広のものである。埋土中より伊万里系、唐津系の焼物、瓦片が出土しており、前述した遺物と比較してもあまり変化のあるものではないようである。

この土壙北側を東西に走る溝は No.191 土壙のプランに並行する形で曲線部を造り出しており、二者が同時性を示すと考えられる。



第266図 天王C地区出土遺物 (1/3)

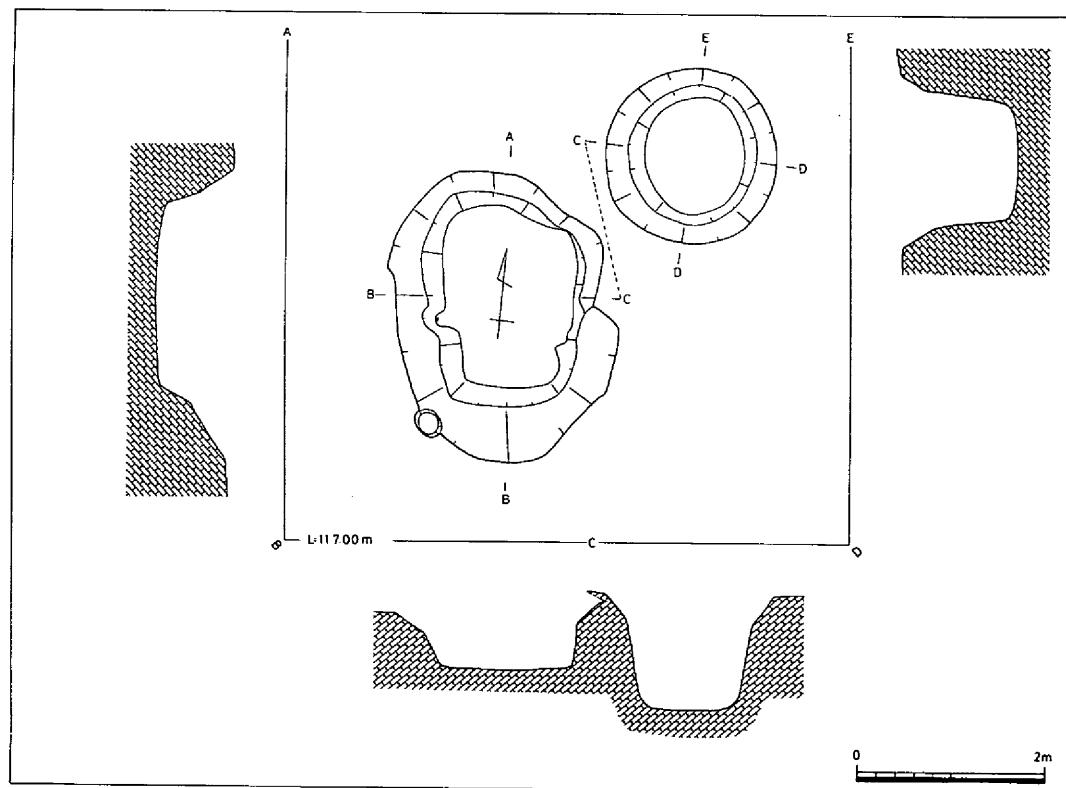
二宮遺跡

No.192 土壙（第267図）

No.191土壙北東部に位置し、円形を呈する井戸状の土壙である。直径1.8m、底径1.2m、深さ1.2mをはかり、2段に掘り込まれている。この土壙も最終的にはゴミ溜めとして利用されたと考えられる痕跡をとどめている。土壙内下半を中心にして、伊万里系、唐津系の焼物片、漆器、蹄鉄、樋受けの金具等が投げ込まれている。放棄された井戸と考えられるものである。

No.194・195 土壙（第268図、図版100—2）

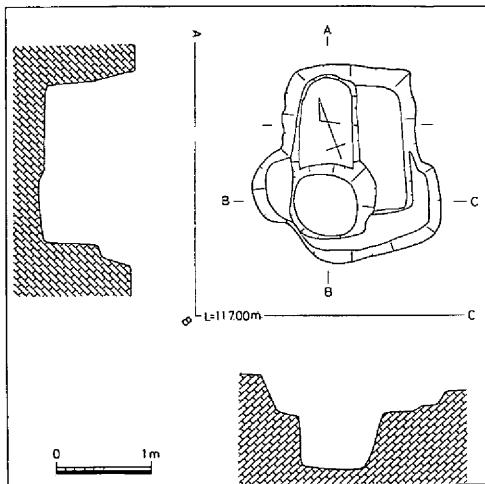
ほぼ南北に主軸をもつ土壙、2～3基が切り合い、重複関係にあるものである。長軸2m、短軸0.85m、深さ0.95mをはかる土壙が中心になっており、それに直交する長軸2m、短軸0.8m、深さ0.45mをはかる浅い土壙が存在する。切り合い関係は明確にしえなかつたが、南北に主軸をもつNo.194土壙が新しいものと考えられる。この上面よりは第266図下段に図示した2点の陶器小皿が出土しており、これらの小皿は荒神元B地区では寛永通宝等と伴出しているものであり、新しいものと考えられる。すぐ北側に位置する近世土壙墓とも形態が異なり、墓とは考えられないものである。またNo.172土壙の北側に並行して走る溝の東端部をカットして作られているようである。他の検出遺構等の方位と比較してNo.194土壙はそれらのまとまりからはずれる方向をとるものであり、建物関連遺構とも



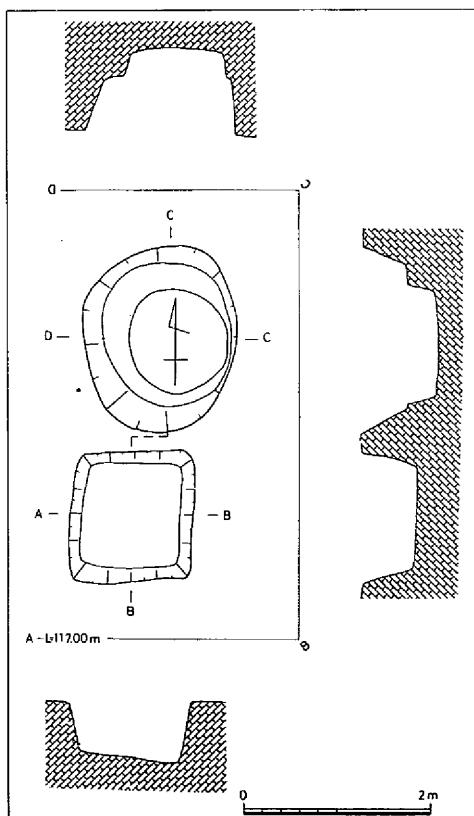
第267図 No.191・192 土壙 (1/20)

二 宮 遺 跡

若干異なる性格をもつものである。



第268図 No.194・195 土壙 ($\frac{1}{80}$)



第269図 No.196・197 土壙 ($\frac{1}{80}$)

No.196 土壙 (第269図)

ほぼ南北に主軸をもち、長軸 2m、短軸 1.6m、深さ 0.8m をはかる楕円形の土壙である。土壙内中央位に段を有する二段掘りの形状を呈し、埋土は一括しておこなわれたと考えられ、きれいな砂が全体にみられる。No.196 土壙に並行して走る溝は No.196 土壙の場合は切り合い関係にあり、少なくとも No.192 井戸の切り合いを含めれば 3 時期の切り合いが認められる。

No.197 土壙 (第269図)

No.196 土壙に接するようにして南側に併設されており、検出は No.196 土壙ともども黄褐色地山ブロック土でもって被われていた。すなわち、最も新しいと考えられる建物の整地面下に沈んだ状況を呈していたわけである。

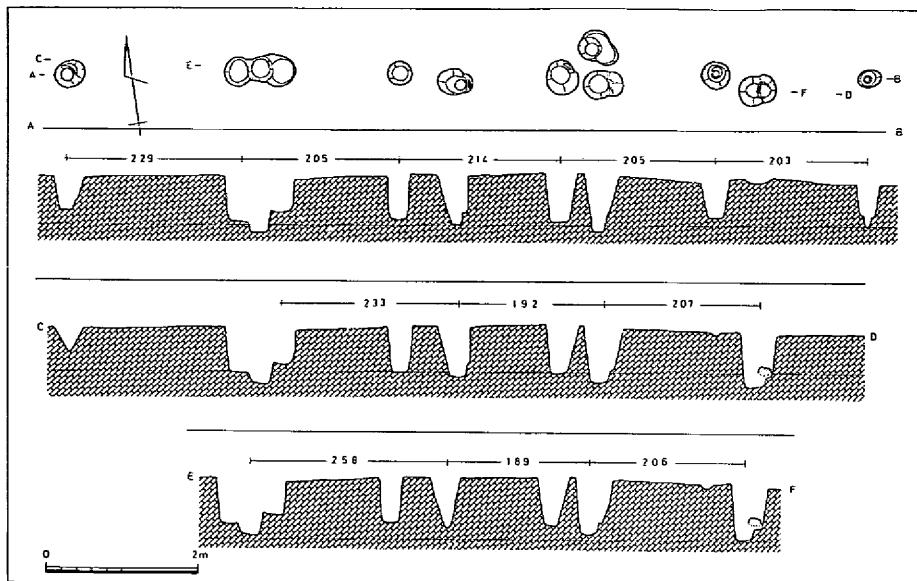
一边 1.4m、深さ 0.6m をはかる隅丸方形の土壙であり、No.196 土壙同様に砂で埋土されている。そして、その埋土中より陶磁器片 1 点 (第266図) が出土しており、その破片が No.196 土壙出土のものと同一個体であることが判明した。以上のことより、これらの 2 土壙はほぼ同時期に掘開利用が行われ、使用目的が終了した時点で内部がきれいにかたづけられ、そして、砂による埋土が行われたものと考えられる。

この No.196・197 土壙の形態、共存関係は、No.177・178 土壙との関係に非常な類似点があるようと思われる。両者の主軸方向は異なり直交はするものの方形と円形の組合せ、土壙底の高さ関係も一致する数値が認められた。両者は同一の機能を有するものと考えられ、少なくとも 2 時期が考えられ、異なる建物に併設されたものではなかろうか。

No.202・203・204 柱穴列 (第270図)

東西の方向に 18 柱穴がまとまりをみせながら並んでいる。これらの柱穴は天王 C 地区南側では古い時

二宮遺跡

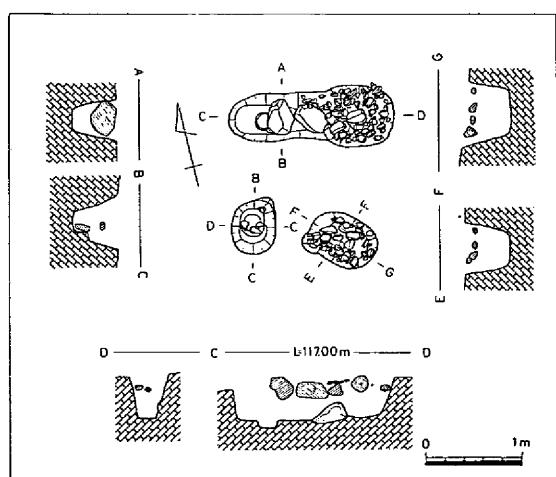


第270図 No.202・203・204柱穴列 ($\frac{1}{100}$)

期のものと考えられ、柱穴内覆土は淡黒色を呈する硬質のものである。これらの柱穴内からはほとんど遺物を検出することができず、年代を決定するには資料不足である。

柱穴径36~40cmをはかるものがほとんどであり、深さは40~80cm内にはば3種類のタイプがみられ、3柱穴の切り合い、2柱穴の重複等が存在する。

No.202柱穴列は柱間距離2m前後を基調としてつくられており、岡の堀地区のNo.58・49等の大型建物の桁行、および柱穴の深さ等も同数値を示すものである。桁行10.56m、柱穴深さ0.8m内外をはかるものである。



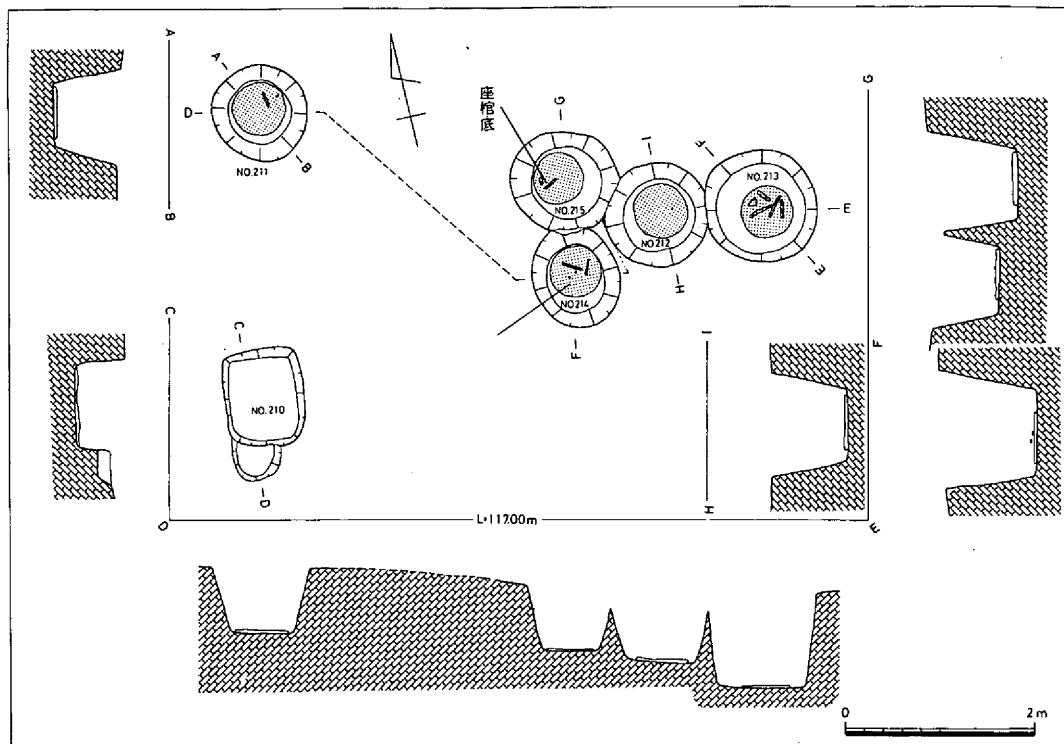
第271図 No.207~No.209土壤墓 ($\frac{1}{100}$)

No.203柱穴列は4柱穴からなる最も浅いものであり、No.204柱穴列とほとんど重複関係をもって存在する。桁行6.32mをはかり、岡の堀地区のNo.47・59・64・69・79建物等のように桁行6.1~6.3m間をはかり、最も建物数の多いグループに入る。

No.204柱穴同様のものであり、柱穴の深さは最も深いものである。

これら3柱穴列とも時期差はあまりないものと考えられ、南側に延びると思われる建物の桁行に対応する北側の桁行と考えられる。

二宮遺跡



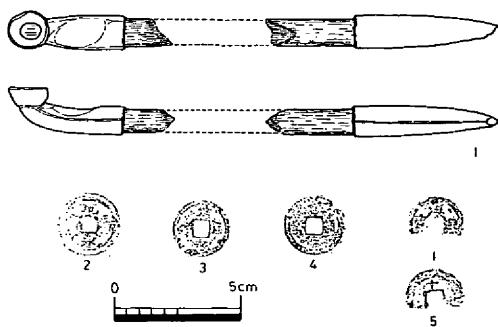
第272図 No.210～No.215近世土壙墓 ($\frac{1}{40}$)

$\frac{1}{2}$

No.207・208・209 土壙墓 (第271図、図版101—1)

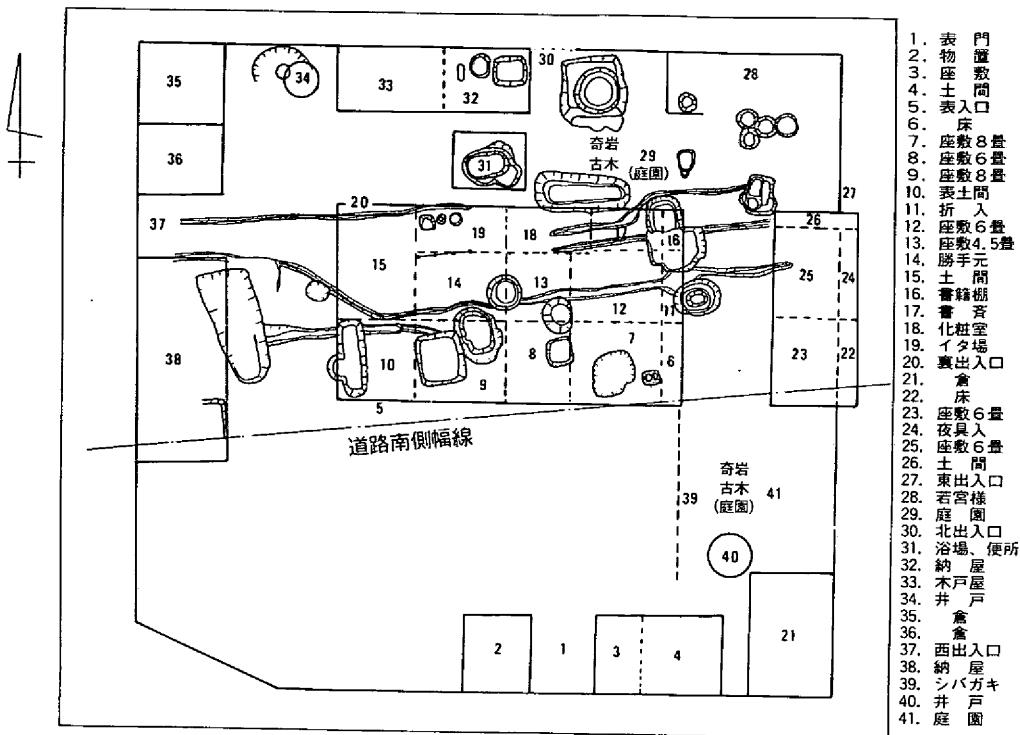
調査前まで使用されていたNo.180井戸の東側に位置する3基の土壙墓である。No.207土壙は長軸165cm、短軸60cm、深さ45cmをはかり、西側に狭くなる隅丸長方形の土壙である。2土壙を連結して1土壙にした形状のものである。粘性の強い暗茶灰色系の埋土がみられ、その上位に人頭大の角礫4石を配して土壙上面を被い、その間に栗石状に砂利が詰められており、砂利は東側土壙に集中している。No.208土壙は上端径55cm×45cm、深さ45cmをはかり柱穴状の掘り方であるが、粘性の強い暗茶灰色土がみられ上部に河原石がみられる。

No.209土壙墓はNo.208土壙東側にあり、形状はNo.207土壙墓の東側土壙に類似している。3土壙とも何ら遺物は検出されてあらず、時期は決めがたい。しかし、これらの周辺にNo.157・158・166等の土壙墓が存在し、No.166土壙墓は東西に走る長い溝よりカットされた形状をとどめて



第273図 No.214 土壙墓出土遺物 ($\frac{1}{3}$)

二宮遺跡



第274図 小原家宅地図

いる。また、№180・182・183等の井戸、および関連遺構によってこれらのグループに入る土塙墓が削平、破壊を受けた可能性が考えられる。

No.210~215近世土壤墓（第272図、図版101—2）

東斜面に6基がまとめて出土をしており№212～215の4基は各土壙を破壊しない程度に切り合い関係をもつ。直径100cm前後、深さ80～100cmの円形土壙が5基、隅丸長方形土壙が一基である。円形土壙底には50～60cmをはかる座棺底の土壤化した痕跡が認められ、人骨、銭、キセル等がそこに見られた。

遺物（第273図、図版102）

№214 土壙墓内より、全長約20cmをはかるキセル、寛永通寶3枚、淳熙元寶(1174年)等が出土している。淳熙元寶の裏面には「十」の字がみられる。

3. 小 結

本屋敷図は調査中に小原家の御好意により見せて頂いた「小原家屋敷跡」である。(第274図)

これによると小原家は享和参年（1803年）に「小原定治源之森長の別家建築セシ」と記されており、二宮村山西553番地に東西23間、南北18間の屋敷が存在している。その構造、配置は第274図の通りである。

二宮遺跡

号によって具体的に知ることができる。

この屋敷は明治30年に小原首太郎氏によって新築せられるまで存続していたものと考えられる。

ここでは発掘調査の結果検出された遺構を、現存する井戸を中心にして、旧宅と比較してみると数個所が一致することがわかる。

まず、屋敷北端部に東に向かって下降する長さ36m、幅約1mの溝が存在し、この溝が屋敷北辺の境界にあたる部分である。井戸、土壙等は、その溝にそって南側に造られており、北東端部に「若宮様」が鎮座する。この範囲内では計6基の土壙墓が検出されており、若宮を作るさいにその上部をある程度意識して、鬼の門に神仏を祭って災難をよけたものではなかろうかと考えられる。瓦片等を出土した№177・178土壙上には瓦葺きの納屋がみられ、№175井戸間に北の出入口が存在する。

№180井戸は地図にも記載されており、現在でも使用されているものであった。土壙、溝等が集中する南端中央には、東西棟の草葺きの本宅が存在し、検出土壙のほとんどが座敷下にみられる。しかし、それらは若干、方位が異ったり、間仕切り部分等にみられ併設されるか、否か不明である。

地図と遺構がまったく一致するものに、本宅と納屋にはさまれた№176土壙があり浴場、便所跡となっている。地図23~26で形成する瓦葺きの離れ座敷部分では遺構は何も検出されておらず、さらに後世に若干の削平がおよぶ。この建物東辺が屋敷の境界にあたると考えられる。

明治30年の新築時点では、本宅が西の低地部分に移動しており№184土壙が「堀」として記載されており、「若宮様」と浴場、便所が以前のまま踏襲されているようである。

以上のことより、天王C地区南側は近世末~近代前半にかけての小原家が存在した跡をたどることができます。各土壙内より出土する瓦、伊万里、唐津、備前焼等は別家(1803年)を前後する時期以降より明治末までの幅が考えられる。それ以前の遺構は中世の建物が6~7棟存在し、柱間、柱穴規模等は荒神元C地区№23建物に非常に類似するものである。さらに古いと考えられる遺構はほとんど検出されておらず、南東部の住穴内にサヌカイト片が出土したのみである。

二宮遺跡A丘陵は中世建物期に削平を受け、平坦部が造成されたと考えられ、以前の時期の遺構はその時点で消滅した可能性が強い。

第6章 まとめ

二宮遺跡は岡山県津山市二宮山西、桜町両地区にまたがり存在する。この地域は律令期の苦田郡布原郷内に入るるものと考えられ、現在の吉井川北東岸一帯地、二宮、山西、神戸、院庄、戸島の地区にあたる(註14)。

二宮地区内は吉井川に向かい、北より南に高さを減じながら延びる丘陵部と谷部からなっており、丘陵部からの展望は大きく開けた場所である。その展望域は津山市街地、津山市西南部、中央町北部、久米町北東部を含める非常に広大な範囲におよぶものである。

二宮遺跡

二宮遺跡内には南北に延びる4本の丘陵と3本の谷部が存在し、遺構は二宮遺跡A、B、C、D丘陵部分と西宮峪の深い谷部より検出されている。検出遺構総数約350を数える。

さて、発掘調査地域内出土の遺構、遺物を通しての考察を加えるには、周辺遺跡の存在を確認、対比してのべる必要がある。

古い時期では吉井川北東岸にみられ、条里の痕跡をとどめる「院庄圃」の西縁辺部に弥生時代中期前半の院庄遺跡（註24）が存在する。二宮遺跡ではこの時期に対比できる遺構、遺物は存在しておらず、弥生時代中期後半から後期前半の住居址、それに伴う遺物が出土している。この時期は美作地方において、丘陵部の集落が爆発的に増加する傾向と一致するものがある。そして、№82住居址にみられるように後期中葉と考えられるものが存在せず、後期前半の住居地が後期後半、末に再び利用された状況を呈している。この時期の住居址は津山市二宮大成遺跡においても検出されており、土器の形態、袋状ピットの屋内併設等の共通性をみいだせる。山陰地方の土器形態、整形手法の製作類似点が多く見出せるのも後期後半からであろう。たとえば、甕口縁部に施される太筋の貝殻腹縁による凹線文、口縁部に厚身を有する形態等があげられる。

古墳時代前半では岡の峠地区の16基からなる袋状ピット群が存在している。この袋状ピット内より約160個体分の土器が出土しており、従来、この地域であまり発見されていなかった一括土器を提供している。厚手の土器、薄手の土器と分けることができ、厚手の土器に細片が多く、薄手の土器に完形に近い形をしたものが多いようである。しかし、これらの土器は土壤底に存在するものが少なく、ほとんどが中層部より出土しており、その使用の時間的差をよく表わしたものに№33袋状ピットがある。2点の高杯が出土しており、精製粘土が多く使用され、器壁の均一性に欠ける半中空の厚手の高杯25（第72図）と、砂質の多い粘土が使用され、均一した器壁にて脚部中空の薄手の高杯26（第72図）がある。25が下層より散逸した状態で出土しており、その上層より脚端部を欠損した26が逆位置で出土している。このように同一袋状ピット内において、形態的には県南の酒津式土器（註25）の系譜をもつと考えられる高杯と、山陰地方、なかでも鳥取県の秋里墳跡（註3）等に見られる高杯が共存している点は興味深い。№29袋状ピット内では両者の高杯が同一層中より出土している。各ピットとも器壁の均一した薄手のものが主体をなしていると考えられる。まさに、平底を呈する甕形土器7（第77図）は秋里遺跡に近似するものである。

これらの袋状ピット内出土土器に類似するものに、美作地方では津山市天神原遺跡10号住居内覆土中のもの、津山市太田十二社遺跡袋状ピット内、落合町中山遺跡（註26）の墓地に供献されたもの等があげられる。同落合町一色宮の前遺跡（註27）においても刷毛ナデを基調とする調整の土器が多くみられるが、さらに丸底化が進んでいる形態である。

備中北部では北房町上水田谷尻遺跡（註28）IV期の№191住居址を廻る№192溝中より複合口縁を有する甕形土器がみられ、非常に細かい横位の刷毛ナデが観察できる。№42袋状ピットの4（第77図）に近似しているものである。他に同様の袋状ピット中より出土したものに阿哲郡大佐町田治部遺跡（註29）の袋状ピットが存在する。総数5基までが確認されており、炭化米を出土するものもみられる。一応、これらの土器は酒津式土器より新しい様相を含む一群と考えられる。

二宮遺跡

次の時期には、5世紀中葉と考えられている美和山古墳群の一角を構成する4号墳と、№37住居址を掘り込んでつくられた埴輪円筒棺が存在する。前方後円墳の胴塚を中心とする美和山古墳群の立地は、津山市西端部、鏡野町東端部に位置している。両地区の前方後円墳総数約50基中最大規模を有し、それらを統合した姿で出現したものと考えられる。美和山3号墳は前述の袋状ピット群に非常に近接して造られており、両者間の意識、年代の差に興味がもたれる位置、および出土遺物である。埴輪円筒棺に使用された埴輪は非常に細かい刷毛ナデを中心に調整が行われており、4号墳周溝内出土の埴輪の荒い調整とは大きく異なる調整が施されている。埴輪円筒棺に使用された埴輪と類似するのが美和山2号墳（蛇塚）より表採されており、近い時期を示すものと考えられる。4号墳の埴輪の器形、調整、胎土等に関するかぎり5世紀末より6世紀に移ってゆく過程のものと考えられる。美和山古墳群の時期と考えられるものは前述の4号墳と埴輪円筒棺しかなく、遺構のプランクが存在する。しかし、遺物では6世紀前半と考えられる須恵器片が天王C地区より2点ほど出土している。

つづいて、岡東地区に古墳時代後期後半に鍛冶炉を有する製鉄関係の住居址等がみられる。これは前述した岡東地区の小結を参考にしていただきたい。

ついで、全地区に多くみられる遺物に勝田焼があげられる。天王地区をのぞく地区に遺構が検出されており、全体的な遺構の広がりをもつ二宮地区は平安時代後半、末頃には非常に栄えた地域と考えられる。まず、貞觀6年（864年）に叙位を受けた美作二宮である高野神社が存在し、その門神像胎内には応保二年（1162年）の墨書がみられる。天王D地区において単独に検出された石製鎧帶に関しても、銅鎧帶を廃して石製鎧帶に移る延暦15年（796年）以降の所産と考えられ、平安末～鎌倉時代にみられる巡方のみの公式帶や、丸鞆のみの略式常用帶（註30）の存在を考えた場合は単独出土も不自然ではなく、大きな意味を含むものが存在する。

このような丸鞆の単独出土例をもつ遺跡が二宮遺跡を含め、県北に計4個所存在している。二宮遺跡の西部にあたる久米町領家遺跡（註22）、久米郡家と想定されている宮尾遺跡（註31）の西に併設する久米廢寺（註32）、勝田郡家閔連遺跡と想定されている勝田郡勝央町平遺跡（註6）等があげられ、領家遺跡の幾分大型のもの以外はほぼ類似する規格品である。

また、勝田焼については荒神元地区の小結を参考にしていただき、一応ここでは碗形土器の変化は、口径の大型化、器高の高いものから低いものへの推移を考えている。これらの年代観は中国製陶磁器を伴う津山市院庄館址の井戸周辺出土の碗を、元暦1年（1184年）の梶原景時が美作国守護職に任命された時点以後のものと考え、12世紀後半～13世紀に比定している。それに先行すると考えられる二宮遺跡出土の碗を11世紀後半～12世紀前半にかけてのものと比定しておきたい。現在、その生産地と考えられている勝田郡勝央町を中心とする約10基を数える窯跡では、東吉田にある進上谷窯跡出土の碗に形態、焼成等近似しているものがある（註32）。県南部では和氣郡備前町伊部太明神窯跡出土の碗に類似しているようである。時期をほぼ同じくして、県南北に生産窯の集中地域が存在することは一体何を意味するのであろうか。今後に残された課題である。

他に西宮峪地区の谷内堆積土中よりの遺物に多量の勝田焼、および宋、明代の中国製陶磁器がみられ、美作国府、平遺跡等の出土量に共通性がみい出せる。以上のことを総合して、西宮峪、天王地区

二宮遺跡

を含む北西部の台地のスペース、すなわち、中国縦貫道路の通過する南北地域に平安時代末より鎌倉時代前半期の大規模な施設を想定することが可能ではなかろうか。

これら勝田焼との共伴関係の明らかなものはないが、非常に多くの備前焼が全地区より検出されており、美作地方における鎌倉時代より江戸時代全般に至るまでの備前焼の利用価値、商品流通を物語っている。

近世末より近代前半にかけての遺物は岡の山地区の墓地、天王地区の土壙内より出土しており、小型品は伊万里系、唐津系の焼物を主流としており、擂鉢等の大型品に備前焼が使用されたようである。

(註)

- (註1) 河本 清「吉備の辺境」『歴史手帖』6 1976
- (註2) 橋本惣司・河本 清・柳瀬昭彦・下澤公明「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7、岡山県教育委員会、1975
- (註3) 加藤利晴・杉谷愛家・辻本 武・平川 誠「秋里遺跡I」『鳥取市文化財報告書IV』鳥取市教育委員会、1976
- (註4) 泉本知秀・栗野克己・山磨康平「二宮大成遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』6、岡山県教育委員会 1973
- (註5) 岡山県北の作東町より広島県境までの約115km間の調査を昭和49年より昭和52年まで行う。
- (註6) 田中満雄・井上 弘「平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8、岡山県教育委員会、1975
- (註7) 岡田 博他「美作国府跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』24、岡山県教育委員会、1978
- (註8) 河本 清他「史跡院庄館跡発掘調査報告」津山市教育委員会、1974
- (註9) 前島己基・松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器」『考古学雑誌』第62巻第3号、1977
- (註10) 楠崎彰一氏御教示による。
- (註11) 井上 弘他「宗金遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』21、岡山県教育委員会、1977
- (註12) 河本 清・葛原克人「不老山古備前窯址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1、岡山県教育委員会、1971
- (註13) 富山城跡発掘調査団「富山城跡第2次調査報告」岡山県教育委員会、1969
- (註14) 苫田郡教育会編集『苫田郡誌』苫田郡教育会、1927
- (註15) 杉村彰一他「蓮花寺跡・相良頼景館址」『熊本県文化財調査報告書』22、熊本県教育委員会、1977
- (註16) 河本 清・中山後紀「太田十二社遺跡」発掘調査略報、津山市教育委員会、1976
- (註17) 栗野克己・高畠知功「小中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7、岡山県教育委員会、1975
- (註18) 高畠知功・山磨康平他「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11、岡山県教育委員会、1976年
- (註19) 神原英郎「惣岡遺跡発掘調査概報」岡山県曾山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報2 岡山県山陽町教育委員会、1971
- (註20) 青木遺跡発掘調査団「鳥取県米子市青木遺跡発掘調査報告書II」鳥取県教育委員会、1977
- (註21) 栗野克己・山磨康平・泉本知秀「二宮大成遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』6、岡山県教育委員会 1973年
- (註22) 栗野克己・山磨康平・竹田 勝「領家遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8、岡山県教育委員会、1975年
- (註23) 田仲満雄「空古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11、岡山県教育委員会、1976
- (註24) 河本 清「津山市院庄発見の土器」『津山市文化財年報I』津山市教育委員会、1975
- (註25) 鎌木義昌「岡山県倉敷市酒津遺跡の土器」『弥生式土器集成』資料編、1968
- (註26) 奥 和之・山磨康平「西河内中山遺跡」近刊予定
- (註27) 橋本惣司・二宮治夫・浅倉秀昭「宮の前遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」12、岡山県教育委員会1976年
- (註28) 高畠・山磨・栗野・井上「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11、岡山県教育委員会、1976
- (註29) 橋本惣司「阿哲郡大佐町田治部発見のピット群」『岡山県埋蔵文化財報告』1、岡山県教育委員会、1971
- (註30) 「平城宮発掘調査報告VI」『奈良国立文化財研究所学報第26冊』奈良国立文化財研究所
- (註31) 橋本・山磨・岡田「官尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』5、岡山県教育委員会、1974
- (註32) 栗野克己他「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4、岡山県教育委員会、1973
- (註33) 長船忠夫氏の御厚意により実見させて頂いた。

二 宮 遺 跡

時 期	主 要 事 項
713 和 銅 6	備前 6 郡割いて美作国をたてる。上毛野堅身が国司となる
728 神 龜 5	4月 大庭、真島 2 郡の庸米を綿、鉄にかえる
766 天平神護 2	12月 白猪大足に大庭臣の賜姓
775 宝 龜 6	3月 美作国に大少目員を置く
781 天 応 1	3月 苛田郡の兵庫が鳴動する
809 大 同 4	4月 美作國が大嘗会の主基國となる
863 貞 觀 5	5月26日 苛田郡を分って苦東、苦西郡とする 5月28日 天石門別神、大佐々神、奈美神に叙位
864 " 6	8月15日 高野神等に叙位
865 " 7	7月 中山神に叙位
866 " 8	9月 苛田郡の兵庫が鳴動する
867 " 9	8月 苦東、苦西両郡に大領、少領を加え置く
875 " 17	3月 高野、御鴨神に叙位 4月 中山神に叙位
935 承 平 5	2月 承平、天慶の乱がはじまる
1131 天 承 1	漆門氏の名、美作国留守所下文に見える
1133 長 承 2	4月 法然、稻岡南庄で誕生
1141 保 延 1	久米郡押領使漆門時国と稻岡庄預所明石定明との間に戦乱がある
1162 応 保 2	潤2月 高野神社隨身立像が作成される
1165 永 万 1	6月 美作国中山社、高野社に神祇官の年貢が注文される
1184 元 曆 (寿永3)	4月24日 源頼朝が賀茂別雷社領美作国倭文庄、河内庄、便補保における武士の狼籍を禁ずる
1200 正 治 2	1月 幕府、梶原景時らの所領美作国守護職を没収する
1221 承 久 3	3月 この頃、行覚法印二宮庄地領になる
1274 文 永 11	10月 蒙古軍、日本を侵す
1279 弘 安 2	12月 美作国等に、異国降伏祈禱の命令出される
1305 嘉 元 3	11月 備中臍帶寺石塔婆、造立される。願主漆間真時の名が見える
1332 元 弘 (正慶元) 2	3月 後醍醐天皇、隠岐に配流される。児島高徳、院庄に潜行する

二宮遺跡

1335 建武 2	12月 後醍醐天皇、足利尊氏の田邑庄地領職を没収し、熊野速玉大社に寄進する
1336 延元 1) 3)	4月 児島高徳、備前熊山にて挙兵
1338 厉応 1	1月 足利尊氏、小早川景宗に打穴庄等の地頭職を与える 2月 小早川景宗、打穴庄等の所領を孫の万福丸に譲る
1360 15) 5)	8月 美作守護赤松貞範、山名時氏を攻撃し、篠葺、高田、院庄、神楽尾の諸城を落とす
1362 貞治 17) 1)	6月 山名時氏、院庄から備前、備中へ進出する
1370 建徳 1) 3)	12月 摩賀多神社文殊大明神像、造立される。願主漆間時重の名が見える
1441 嘉吉 1	山名教清、岩屋城を、山名忠政、鶴山城を築く
1467 応仁 1	5月 応仁の乱越こる、細川勝元方の赤松政秀、美作へ討ち入る
1498 明応 7	後藤勝国、美和山城の立石景泰を攻撃する。勝国、敗退する
1502 文亀 2	3月 後藤勝国の子、勝政、立石久朝を攻撃する
1538 天文 7	5月 原田忠長、尼子方に属し、山名氏兼の神尾山城を落とす
1544 天文 13	11月 尼子勝久、浦上方の岩屋城、小田草城、岩尾山城、井の内城を攻める
1552 天文 21	尼子晴久、美作等7箇国の大守護になる
1565 永禄 8	5月 毛利方の三村家親浦上方の三星城主後藤勝基を攻撃する
1569 永禄 12	4月 毛利元就、一宮、二宮、惣社等の修造、祭礼を申し付ける 吉川元春ら、中山神社に大刀、馬などを献げる
1571 元亀 2	11月 後藤勝基、江見家を再興し、江見秀道に出仕を命ずる 12月 浦上宗景、高田の三浦貞広に殷錢を催促する 花房職秀、篠山城を落とし、院庄に入る
1572 元亀 3	3月 毛利輝元、三星城に、足立十郎右衛門尉を派遣する 後藤勝基、江見清秀に倉敷城存番を命ずる 4月 後藤勝基、安東佐丞に大吉庄内円尾分を与える 9月 毛利輝元、三星城の後藤勝基に銀子を贈る 10月 毛利輝元幕府の命により浦上宗景、宇喜多直家と和する
1579 天正 7	3月 宇喜多直家、鷺山城、鷺巣城、三星城を攻める 5月 宇喜多直家、三星城を攻め、後藤勝基を滅ぼす
1583 天正 11	6月 毛利氏、沖構城を攻め落とす。

本年表は津山市史より美作、二宮遺跡、周辺関連記事を抜粋したものである。



1. 津山市西部・二宮遺跡周辺航空写真（東より）

図版2



1. 二宮遺跡(岡の山、寺前、寺東、岡東地区)航空写真(南々東より)



2. 二宮遺跡全景 (南より)

図版3



1. 二宮遺跡全景（西より）



2. 二宮遺跡全景（東より）

図版4



1. 東宮峠、宮峠、荒神元、西宮峠、天王地区全景（岡の此時地区より西を望む）



1. 東宮峪、岡の峠地区遠景（南西より）



2. 東宮峪、宮峪、荒神元、西宮峪、天王地区遠景（東より）

図版6



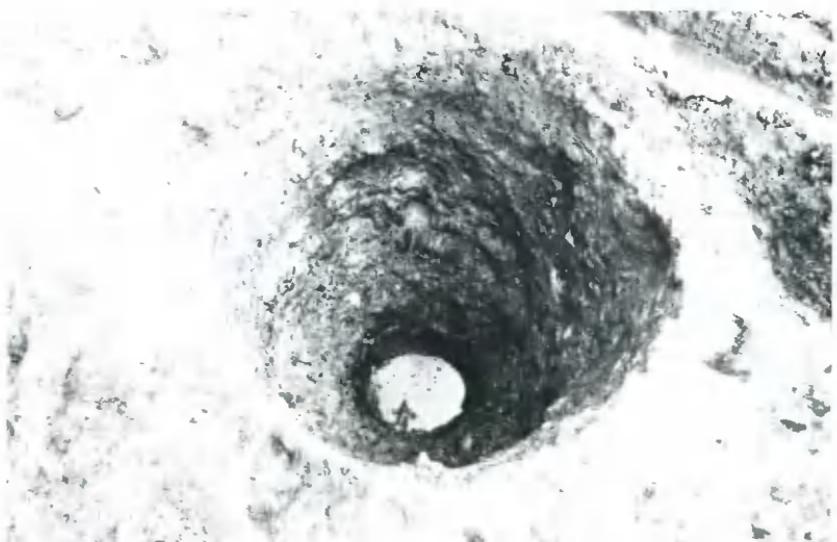
1. 蔵屋敷・荒神元A地区全景（東より）



2. 蔵屋敷・荒神元A地区No. 2溝（東より）



1. 荒神元A地区No. 4井戸検出状況 (南東より)



2. 荒神元A地区No. 4井戸掘り上げ (東より)

図版8



1. 荒神元A地区No. 5井戸上面 (北西より)



1. 荒神元A地区No. 5井戸石組(南西より)



2. 荒神元A地区No. 5井戸掘り方(南西より)

図版10



1. 荒神元B地区調査前全景（東より）



2. 荒神元B地区掘り上げ全景（西より）



1. 荒神元B地区西側土層断面（南々西より）



2. 荒神元B地区東側土層断面（南東より）



3. 荒神元B地区北側土層断面（西南西より）

図版12



1. No. 9 土壌 (南より)



2. No. 10 土壌 (北より)



3. No. 11 袋状ヒット (西より)



4. No. 12 土壌墓 (南より)



5. No. 13 土壌 (北より)



6. No. 14 土壌 (西より)



7. No. 16 土壌 (南より)



8. No. 17 土壌 (南より)



1. 荒神元B地区No.12土壤墓（東より）



2. 荒神元B地区No.12土壤墓出土遺物（東より）

図版14



1. 荒神元B地区No.18鳥居（西より）



2. 荒神元B地区軟質地山掘開（西より）



1. 荒神元C地区土層断面（南々東より）

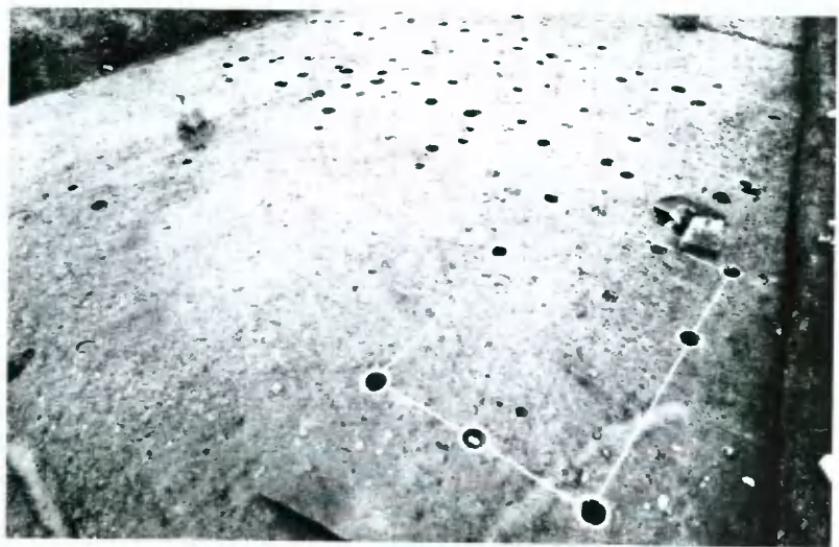


2. 荒神元C地区トレンチ（北より）

図版16



1. 荒神元C地区柱穴検出状況（東より）



2. 荒神元C地区建物全景（東より）



1. 荒神元C地区建物全景（北西より）



2. 宮峪地区掘り上げ全景（北より）

図版18



1. 東宮峪 A 地区トレンチ



2. 東宮峪 A 地区土層断面



1. 岡の辻A地区袋状ヒット全景（西南西より）



2. 岡の辻A地区袋状ヒット全景（南より）

図版20



1. 岡の丸A地区袋状ピット（西より）



2. 岡の丸A地区No.29 袋状ピット（西より）



1. 岡の山A地区No.30 袋状ピット（西より）

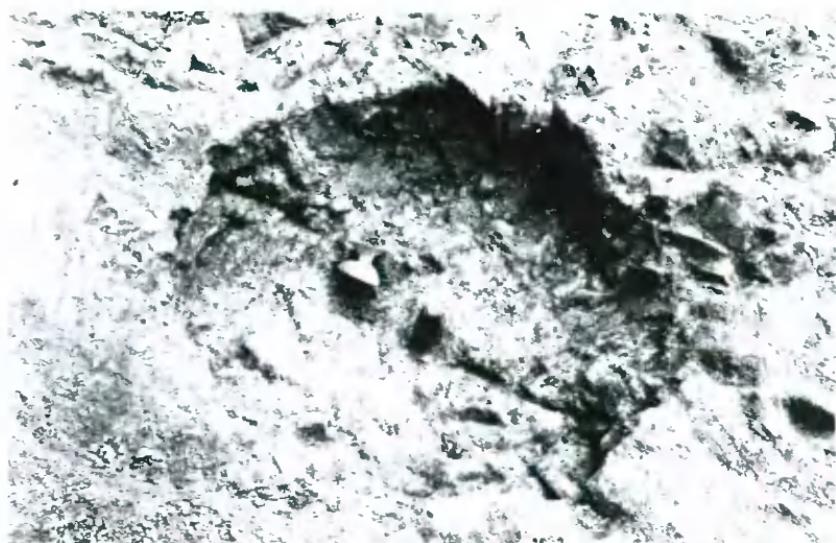


2. 岡の山A地区No.31 袋状ピット（南西より）

図版22



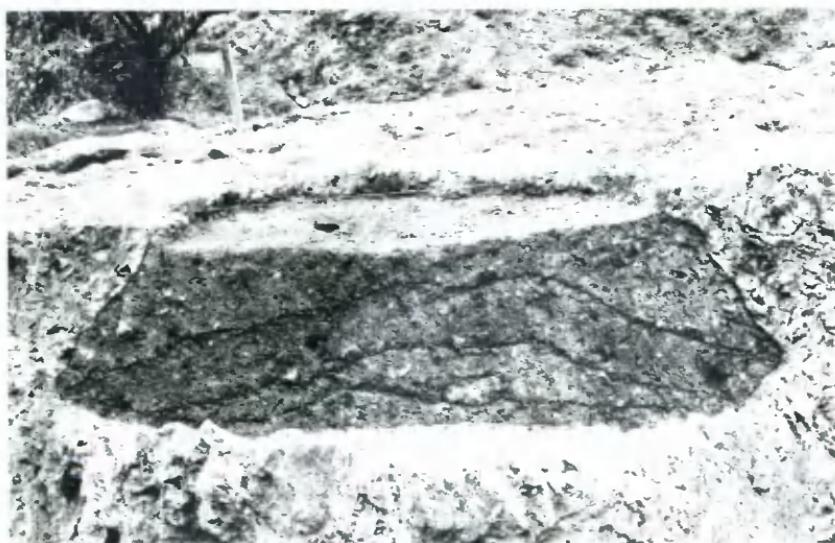
1. 岡の峠A地区No.32 袋状ピット（南より）



2. 岡の峠A地区No.32 袋状ピット遺物（北より）



1. 岡の峠A地区No.33 袋状ピット（南より）



2. 岡の峠A地区No.34 袋状ピット（西より）

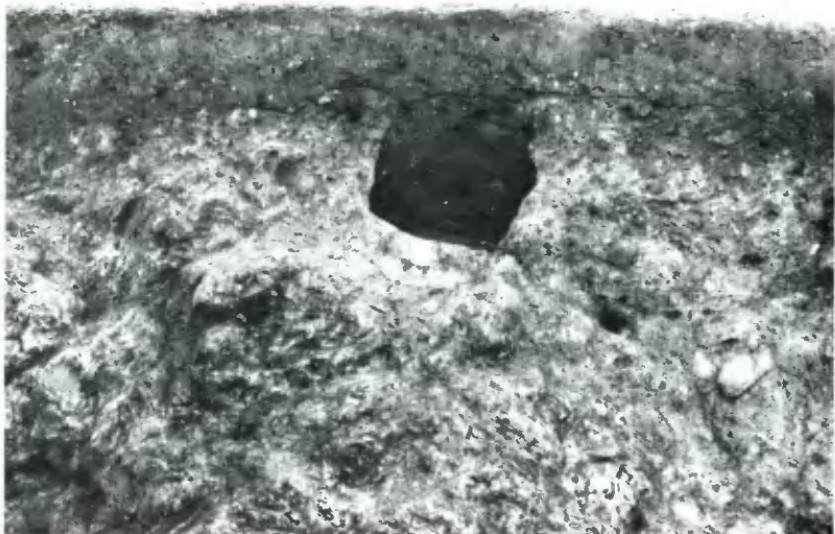
図版24



1. 岡の山A地区No.35 袋状ピット断面（南より）



2. 岡の山A地区No.35 袋状ピット（南より）



1. 岡の山A地区No.42袋状ピット（西より）



2. 岡の山A地区No.42袋状ピット（西より）

図版26



1. 岡の辻A地区No.42 袋状ピット遺物出土状況（西より）



2. 岡の辻A地区No.45 袋状ピット土層断面（西より）



1. 岡の山A地区No.145住居址（北北東より）



2. 岡の山A地区No.36土壤（東より）

図版28



1. 岡の此A北地区袋状ヒット土層断面（北北西より）



2. 岡の此A北地区No.217・218・219袋状ヒット、No.224住居址・土壤（北北西上より）



1. 岡の山A北地区No.217袋状ピット遺物出土状況（北北西上より）



2. 岡の山A北地区No.219袋状ピット（西より）

図版30



1. 岡の山A北地区No.219袋状ヒット $\frac{1}{2}$ 壁除去（西より）



2. 岡の山A北地区No.219袋状ヒット $\frac{1}{2}$ 掘り下け（西より）



1. 岡の此時A北地区No.220袋状ヒット $\frac{1}{2}$ 地山除去（南南西より）



2. 岡の此時A地区No.220袋状ヒット遺物出土状況

図版32



1. 岡の堀A北地区No.220袋状ピット $\frac{1}{2}$ 埋土地山除去後（南々西より）



2. 岡の堀A北地区No.220袋状ピット遺物出土状況



1. 岡の山A北地区No.220袋状ピット全掘（南々西より）



2. 岡の山A北地区No.223袋状ピット遺物出土状況（北東より）

図版34



1. 岡の山A北地区No.225 地下式横穴（南々西より）



2. 岡の山A北地区No.225 地下式横穴近景（南々西より）



1. 岡の山A北地区全景（南々西より）



2. 岡の山A北地区北西部及び北壁土層断面（南々西より）

図版36



1. 岡の山B地区削り出し全景（北より）



2. 岡の山B・C地区削り出し全景（東より）



1. 岡の畝C・D・E地区削り出し全景（北西より）



2. 岡の畝C・D・E地区削り出し全景（東北東より）

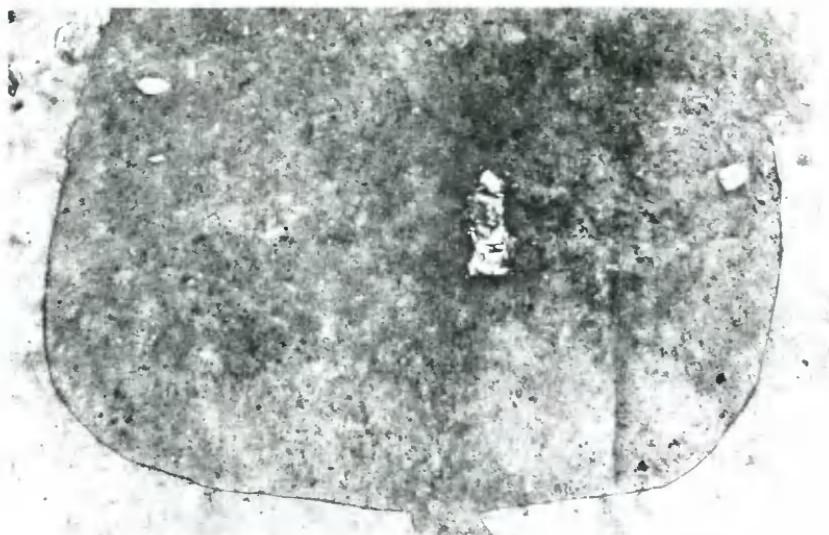
図版38



1. 岡の山B・C地区近世墓検出状況（北東より）



2. 岡の山B地区近世墓検出状況（南より）



1. 岡の辻B地区No.37住居址（北より）



2. 岡の辻B地区埴輪棺出土状況（西より）

図版40



1. 岡の堀B地区No.37 住居址炭化材（西より）



2. 岡の堀B地区No.37 住居址完掘（東より）



1. 北東柱痕（北西より）



5. 南東柱痕



2. 炭化材組合せ（北より）



6. 南東柱痕・石（南より）



3. 遺物出土状況（西より）



7. 袋状ピット内炭化材（南より）



4. 中央ピット・土壤（西より）



8. 袋状ピット（南より）

図版42



1. 岡の堀B地区No.40 耳塚関連遺構（南東より）



2. 岡の堀B地区No.40 遺構（南西より）



1. 岡の峠B地区No.41古墳（北東より）



2. 岡の峠B地区No.41古墳周溝（北より）

図版44



1. 岡の山C・D・E地区建物全景（西より）



2. 岡の山C・E地区建物全景（北西より）



1. 岡のぬC 地区No.51 土壌（東より）



2. 岡のぬC 地区No.78 土壌（南より）

図版46



1. 岡の辻C地区no.53石組み土壤（東より）



2. 岡の辻C地区no.53石組み土壤（東より）



1. 岡の山D地区No.54 土壌 (南より)



2. 岡の山D地区No.55 地下式横穴 (北東より)

図版48



1. 岡の山D地区完掘全景（西より）



2. 岡の山D地区No.59建物（南より）



1. 岡の山E地区削り出し全景（北西より）



2. 岡の山E地区完掘全景（北西より）

図版50



1. 岡の山D地区No.50井戸（東より）



2. 岡の山D地区No.50井戸完掘（東より）



1. 岡の堀D地区No.57土壤（南より）



2. 岡の堀E地区No.61土壤（西南西より）

図版52



1. 岡の山B地区no.4近世墓



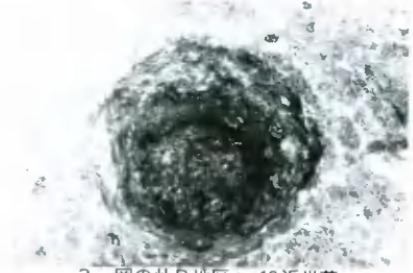
5. 岡の山B地区no.18近世墓



2. 岡の山B地区no.11近世墓



6. 岡の山B地区no.20～21近世墓



3. 岡の山B地区no.13近世墓



7. 岡の山B地区no.22～23近世墓



4. 岡の山B地区no.14近世墓



8. 岡の山B地区no.24近世墓



1. 岡の山B地区no.31近世墓



5. 岡の山B地区no.44近世墓



2. 岡の山B地区no.38近世墓



6. 岡の山D地区no.45近世墓



3. 岡の山D地区no.43近世墓



7. 岡の山E地区no.46近世墓



4. 岡の山E地区no.49近世墓



8. 岡の山E地区no.47～48近世墓

図版54



1. 岡の山 E 地区no.50近世墓



5. 岡の山 E 地区no.77近世墓



2. 岡の山 E 地区no.52近世墓



6. 岡の山 E 地区no.70近世墓



3. 岡の山 E 地区no.58～59～60近世墓



7. 岡の山 E 地区no.66～67近世墓



4. 岡の山 C 地区no.74近世墓



8. 岡の山 C 地区no.68近世墓



1. 寺前B地区南北トレンチ遺物出土状況（北より）



2. 寺前C地区グリッド（南より）

図版56



1. 西宮峪地区全景（西より）



2. 西宮峪C地区境界土層断面（南より）



1. 西宮駅C地区境界土層断面（南より）



2. 西宮駅B・C地区グリッド・土壤(東より)

図版58



1. 西宮峪A地区グリッド1(左上)・2(北より)



2. 西宮峪B地区グリッド3(北より)



1. 西宮峪B地区グリッド4（南より）



2. 西宮峪B地区グリッド5（南より）

図版60



1. 寺東B地区調査前全景（北より）



2. 寺東B地区完掘状況（北東より）



1. 寺東B地区No. 80土壤 (北より)



2. 寺東B地区No. 80土壤遺物出土状況 (東より)

図版62



1. 国東地区調査前全量（西より）



1. 岡東地区調査前全景（東より）



2. 岡東B地区削り出し全景（北東より）

図版64



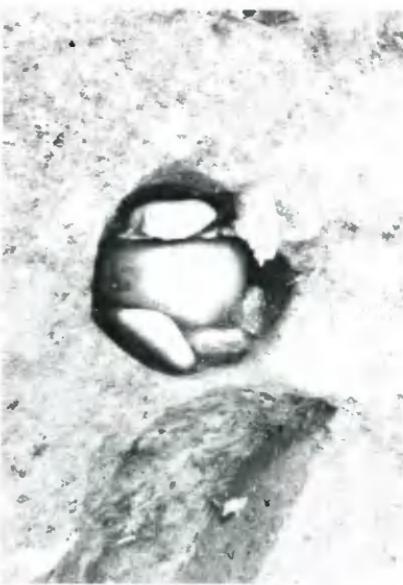
1. 岡東B地区No. 82住居址（東北東より）



2. 岡東B地区No. 82住居址（東北東より）



1. Pit 2 (南より)



3. Pit 10 (南より)



2. Pit 7 (北東より)



4. Pit 15 (東より)

図版66



1. 岡東B地区No. 83住居址検出状況（南東より）



2. 岡東B地区No. 83住居址完掘状況（南東より）



1. 岡東B地区No. 83住居址（東より）



2. 岡東B地区No. 83住居址（東より）

図版68



1. 岡東B地区No. 83住居址南北土層断面（西より）



2. 岡東B地区No. 83住居址遺物出土状況（西南西より）

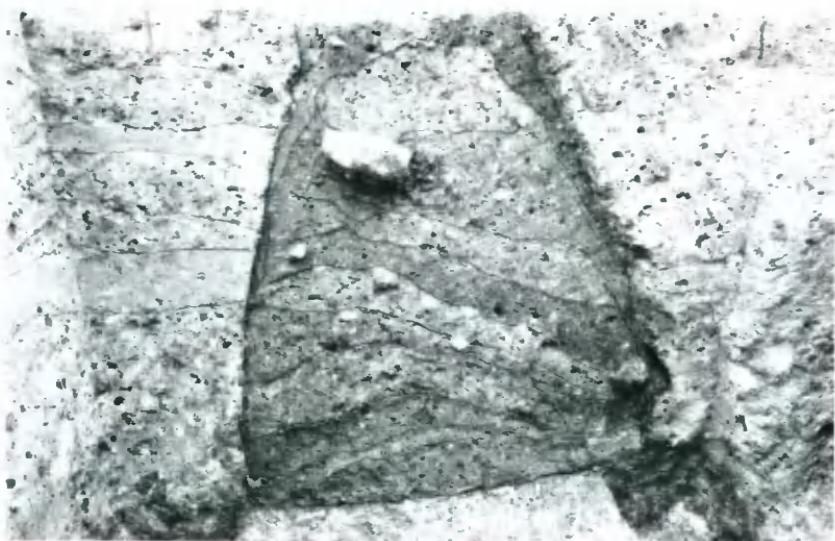


1. 岡東B地区No. 83住居址袋状ビット14（東より）



2. 岡東B地区No. 83住居址袋状ビット10土層断面(西より)

図版70



1. 岡東B地区No. 83住居址袋状ヒット3土層断面（南より）



2. 岡東B地区No. 83住居址袋状ヒット3完掘状況（南より）



1. 岡東B地区No. 91・92・94・95建物（東より）



2. 岡東B地区No. 94・95・96・97建物（西南西より）

図版72



1. 岡東B地区No. 96土壤（北西より）



2. 岡東B地区No. 127配石土壤（南より）



1. 岡東B地区No. 100袋状ピット（南より）



2. 岡東B地区No. 101袋状ピット（南南東より）

図版74



1. 岡東B地区No. 88住居址・89溝(南より)



2. 岡東B地区No. 85(上)・86(下)住居址(南西より)



1. 岡東B地区No. 88住居址・89溝全景（南より）



2. 岡東B地区No. 88住居址・89溝・141建物（南より）

図版76



1. 岡東C地区No. 112住居址(上)・113住居址(右)・114土壤(下)(南々西より)



2. 岡東B地区No. 109溝(上の中央)・110住居址(中央)・111土壤(上の右)(南より)



1. 岡東B地区No. 110住居址（南西より）



2. 岡東C地区No. 117住居址（南より）

図版78



1. 岡東C地区No. 114土壤西側土層断面（東より）



2. 岡東C地区No. 112住居址・113住居址・114土壤（上より）（南西より）



1. 岡東C地区No. 119住居址土層断面(西側) (東より)



2. 岡東C地区No. 119住居址土器出土状況

図版80



1. 岡東C地区全景（南東より）



2. 岡東C・D地区全景（東より）



1. 岡東C地区No. 122土壤全景（南より）



2. 岡東C地区No. 124・123鍛冶炉・119住居址（左より）（南より）

図版82



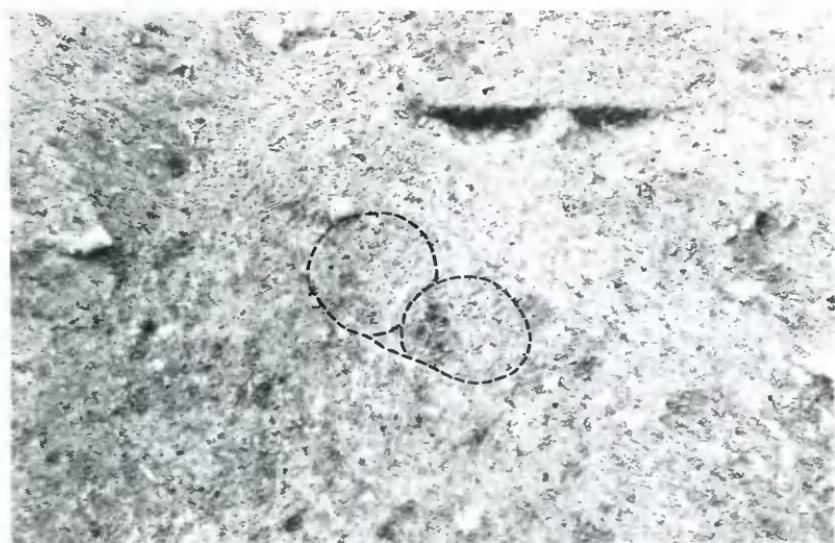
1. 岡東C地区No. 124鋳冶炉出土遺物（南東より）



2. 岡東C地区No. 123・124鋳冶炉全景（南東より）



1. 岡東C地区No.124鍛冶炉-1 (南西より)



2. 岡東C地区No.124鍛冶炉-1(右上)・2(中央)

図版84



1. 岡東C地区No.124鍛冶炉中心（南東より）



2. 岡東C地区No.124鍛冶炉・床石



1. 岡東C地区No.124鍛冶炉—1(右)・2(左)(南より)



2. 岡東C地区No.124鍛冶炉・床石(北東より)

図版86



1. 岡東C地区No.124鍛冶炉・床石（西より）



2. 岡東C地区No.124鍛冶炉-2



1. 岡東C地区No.124南側境界土層断面（北東より）



2. 岡東D地区No.125住居址（南より）

図版88



1. 岡東D地区No. 125住居址遺物出土状況



2. 岡東D地区No. 125住居址遺物出土状況



1. 岡東D地区No. 125住居址 (no. 12) 遺物出土状況



2. 岡東D地区No. 125住居址全景 (南より)

図版90



1. 岡東C・D地区No. 119住居址(右)・125住居址(左)・123・124鍛冶炉(上部中央)(東より)



2. 岡東D・C・B地区(左より)(東より)



1. 岡東B地区No.129建物（南西より）



2. 岡東B地区No.133道状遺構完掘状況（西より）

図版92



1. 岡東C地区No.133道状遺構(西より)



2. 岡東C地区No.139土壤(東より)



1. 岡東C地区No. 133道状遺構横断面（東北東より）

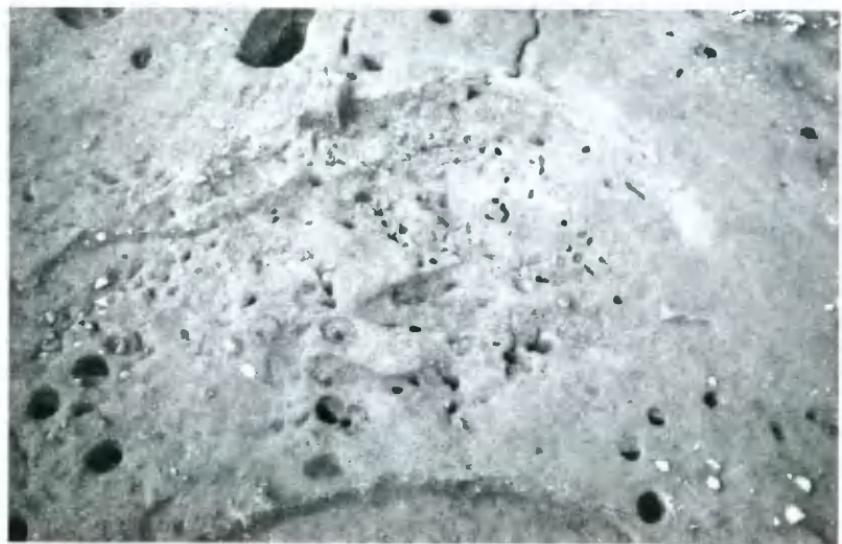


2. 岡東C地区No. 133道状遺構砂利敷（南東より）

図版94



1. 岡東C地区No. 134遺構（南南西より）



2. 岡東C地区No. 134遺構完掘状況（南南西より）



1. 岡東B・C・E地区調査前全景（東より）



2. 岡東E地区No. 140住居址（南より）

図版96



1. 岡東E地区(公園跡)柱穴 (西より)



2. 岡東E地区造成土状況 (北東より)



1. 天王C地区完掘全景(西より)

図版98



1. 天王C地区南東部遺構（北西より）



2. 天王C地区南西部遺構（北より）



1. 天王C地区No. 171・172・173土壤（北より）



2. 天王C地区No. 174土壤（西より）

図版100



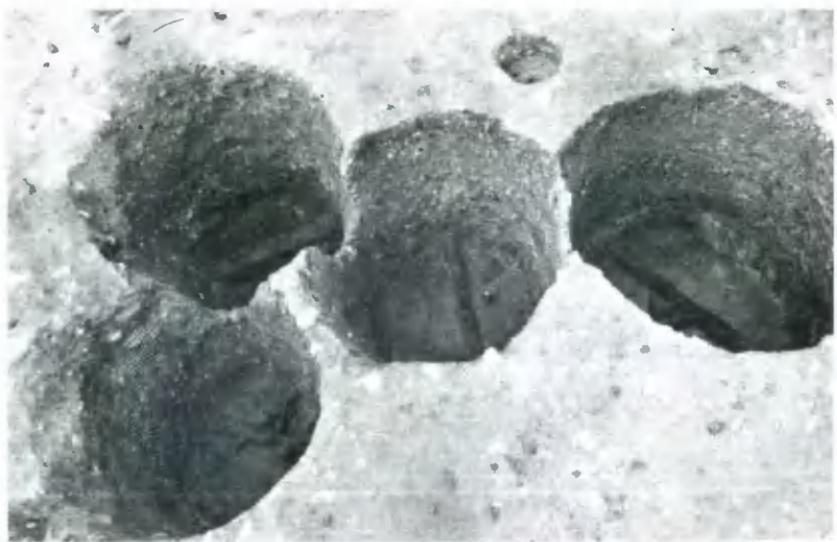
1. 天王C地区No. 175井戸状土壤（西より）



2. 天王C地区No. 194・195土壤（北東より）



1. 天王C地区No. 207・208・209土壤墓（西より）



2. 天王C地区No. 212・213・214・215土壤墓（南より）

図版102



1. 天王C地区No.213土壤墓（東より）



2. 天王C地区No.214土壤墓（南より）

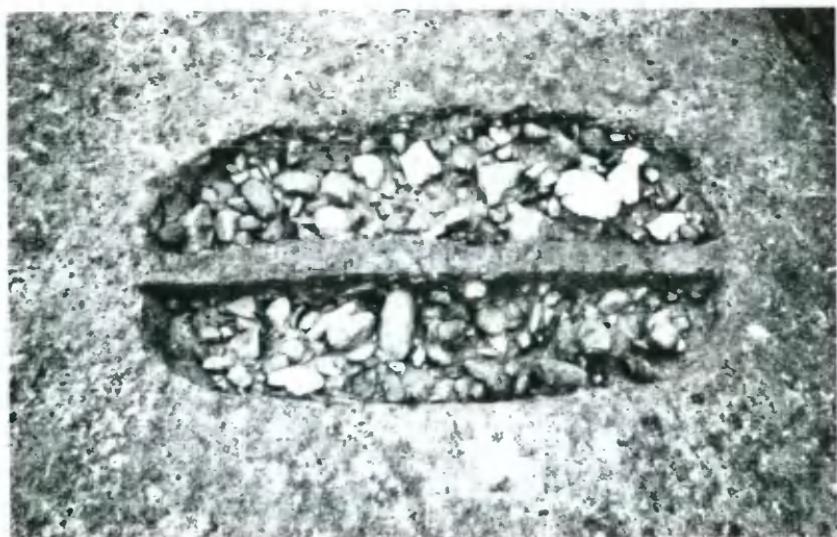


1. 天王B地区全景（西より）



2. 天王B地区全景（南より）

図版104



1. 天王B地区No. 146土壤（南より）



2. 天王B地区No. 148土壤（北より）



1. 天王B地区No. 151土壤（西より）



2. 天王C地区北No. 154土壤墓（北より）

図版106



1. 天王C地区北No. 162土壤墓（北より）



2. 天王C地区北No. 156土壤墓（東より）



1. 天王C地区北No. 156土壤墓（南より）



2. 天王C地区北No. 156(石組) 土壙墓（東より）

図版108



1. 天王C地区北No. 157土壤墓（南西より）



2. 天王C地区北No. 165土壤（南より）



1. 天王C地区北東端土層断面（南より）



2. 天王C地区北東端全景（東より）

図版110



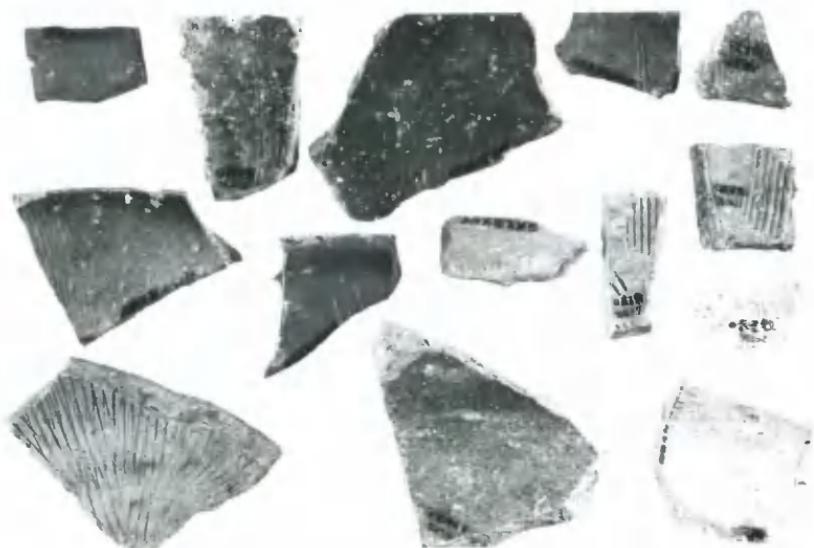
1. 天王C地区北全景（東より）



2. 天王C地区北全景（西より）



1. 蔵屋敷地区出土備前焼（表）



2. 蔵屋敷地区出土備前焼（裏）

図版112



1. 藏屋敷・荒神元地区出土遺物



2. 荒神元A地区No. 4井戸出土遺物



1. 荒神元A地区No.5井戸出土遺物

図版114



18



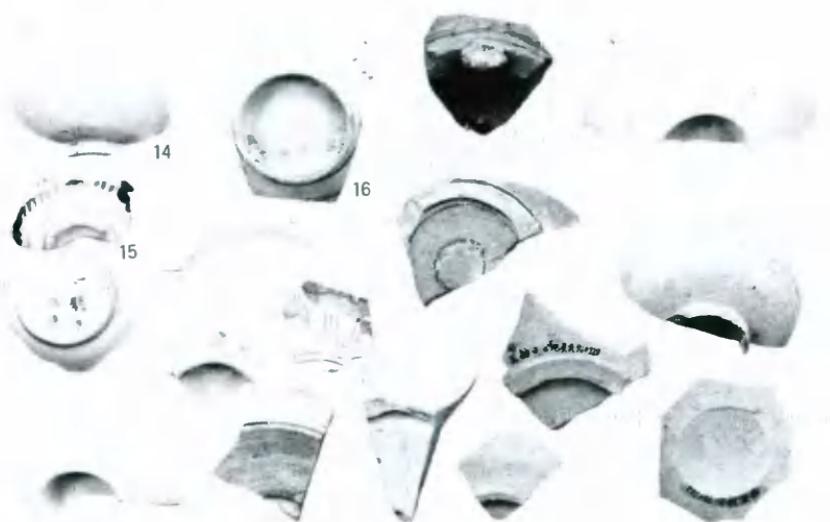
19

20

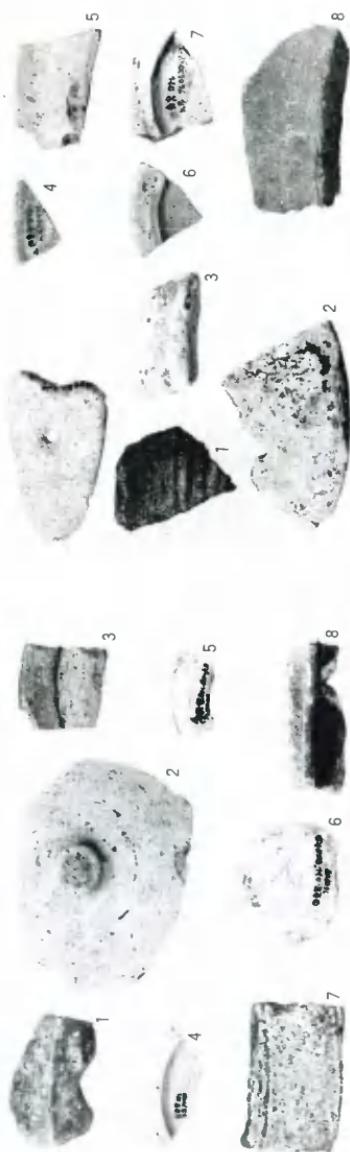
21



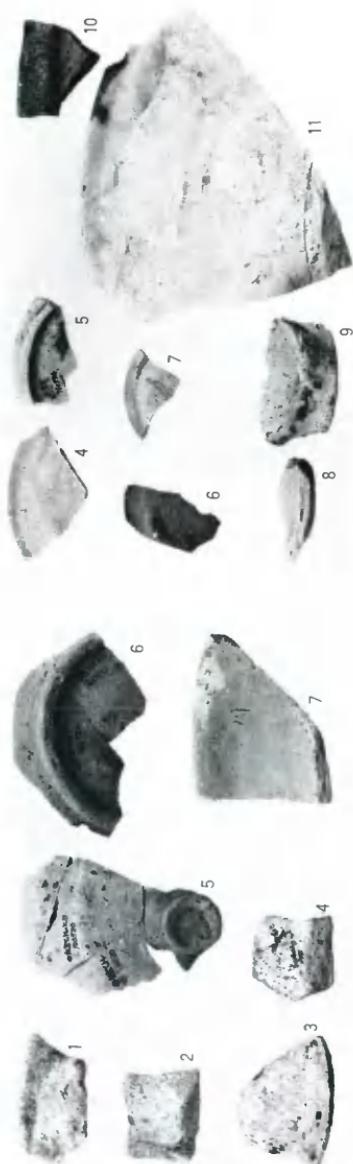
36



1. 荒神元B・C地区出土遺物



1. B レンチ
2. C レンチ
3. D レンチ
4. E レンチ



1. 東宮跡地区レンチ出土遺物

図版116



2



1



16



9



3



12



27



24

1. 岡の山A地区No. 29袋状ピット出土遺物



5



1



2



6



7



3



8



4

1. 岡の山No. 29・30・31袋状ピット出土遺物

図版118



1・2.....No. 32
3・4・5・6・No. 33
7.....No. 29

1. 岡の峠A地区No. 29・32・33袋状ピット出土遺物



1. 岡の山A地区No. 35袋状ピット出土遺物

図版120



4



1



5



2



6



3

1. 岡の山A地区No. 42袋状ピット出土遺物



5



1



6



2



7



8



3



9



4

1. 岡の辻A地区No. 42袋状ピット出土遺物

図版122



5



1



6



2

1 ~ 5 No. 42

6 No. 217

7 + 8 No. 218



7



3



8



4

1. 岡の山A北地区No. 42・217・218袋状ピット出土遺物



5



1



6



2



7



3



8



4

1 No. 219

2 ~ 6 No. 220

7 ~ 8 No. 222

1. 岡の山A北地区No. 219・220・222袋状ビット出土遺物

図版124

1. No. 37住居址上面埴輪円筒棺



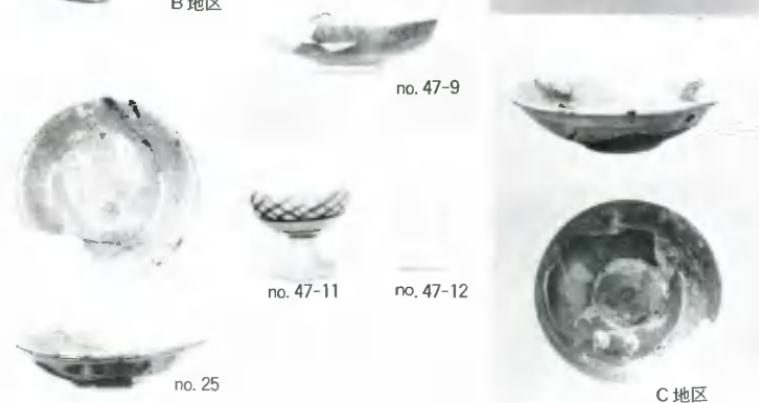
岡の山B地区出土遺物

3. 塗輪裏面



2. 塗輪表面





C 地区



1. 岡の山地区近世墓出土遺物

図版126



no. 70-2



no. 70-3



no. 70-4



no. 4



1. 岡の山地区近世墓・井戸・造成土内出土遺物



1. 岡の此地区近世墓・井戸・造成土出土遺物（表面）



2. 岡の此地区近世墓・井戸・造成土出土遺物（裏面）

図版128

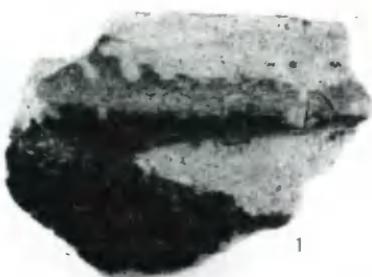


1. No. 41 (美和山4号古墳) 周溝内出土遺物

2. 岡の此・寺前出土遺物



8



1



9



2

1・2……No. 232

8・9……No. 29



10

10……寺前C地区東グリッド



3



5



6

3～6……No. 224



11

No. 89

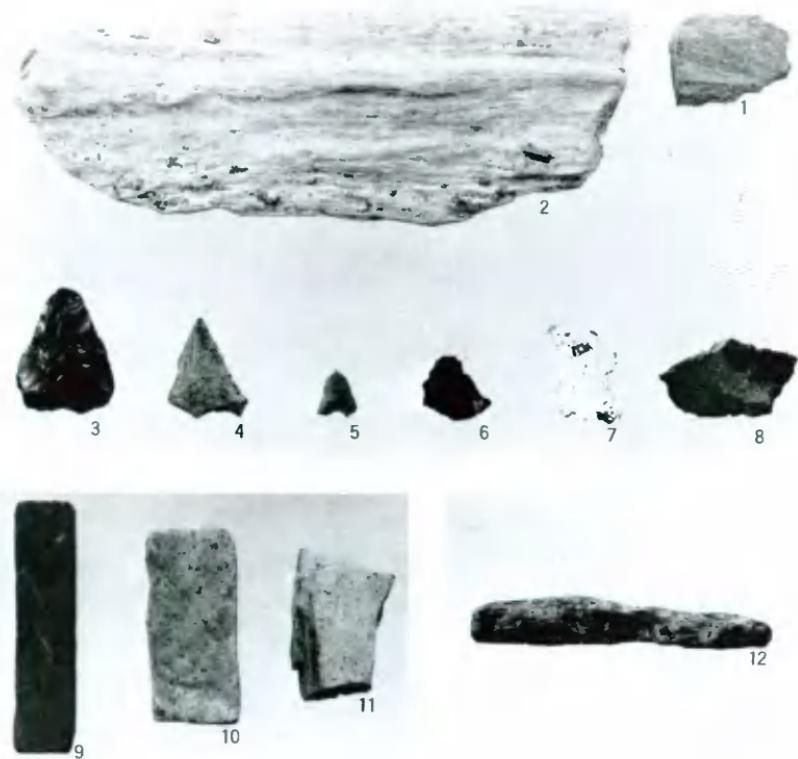


7

7……no. 21

1. no.21・No.29・224・232・89寺前出土遺物

図版130



- 1・2・6・8・13…西宮峪地区
3……………西宮峪A地区ベッド1層
4……………西宮峪6層
5……………西宮峪B地区7層表採
7……………No. 119
9……………西宮峪B地区
10……………西宮峪A地区
11……………No. 7クリッド
12……………西宮峪B地区7層
14……………西宮峪東



1. No. 119西宮峪地区出土遺物



1 西宮峯 C 5層

2・3 西宮峯 B

4・5・6 西宮峯

7 西宮峯 B No. 5 グリッド

8 西宮峯 C

9 西宮峯 C 土壌

1. 西宮峯地区出土遺物

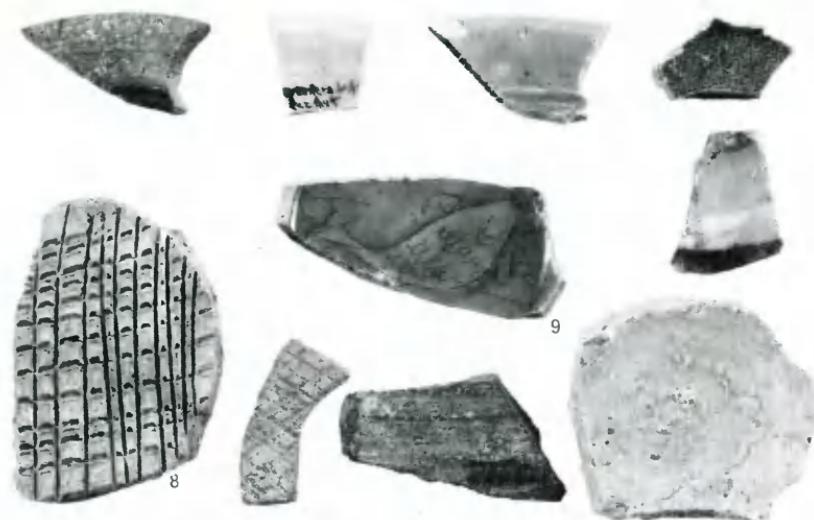
図版132



1. 寺東B地区No. 80土壤出土遺物



2. 岡東C地区No. 116柱穴列出土遺物



1. 岡東地区出土遺物

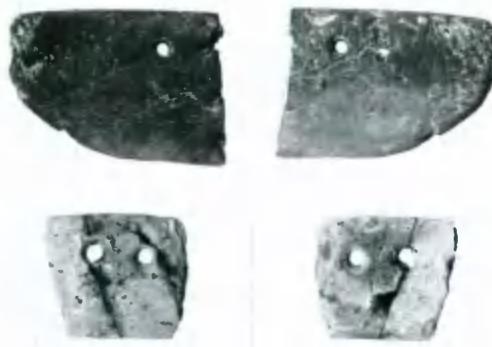


2. 岡東地区出土遺物

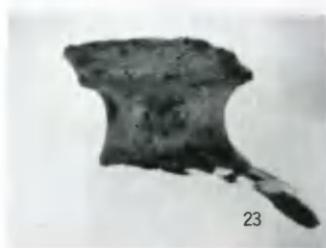
図版134



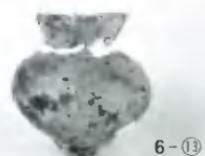
1. 岡東B地区No. 82住居址出土遺物



2. 岡東B地区No. 82住居址出土遺物

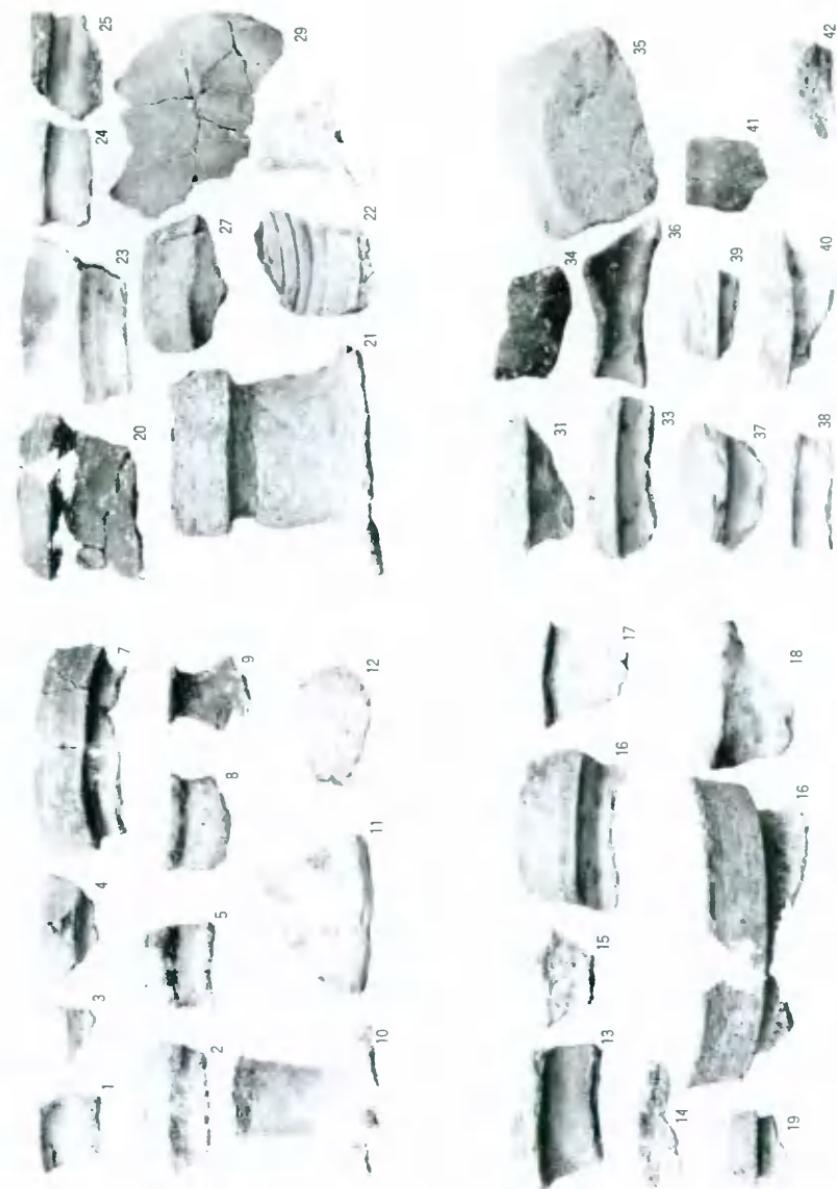


Pit 3	Pit 15
Pit 7	Pit 12
床面	Pit 32
Pit 1	Pit 3
Pit 20	



1. 岡東B地区No. 82・83住居址出土遺物

図版136



1. 岡東B地区No.100袋状ビット出土遺物



4



1

No. 110柱穴内出土



5



2



6

2・3………No. 122

4・5・6………No. 119
(5はピット内出土)



3

1. 岡東C・D地区No. 110・119・122住居址 出土遺物

図版138



1・2・3……岡東B表土剥ぎ
4……………No. 86柱穴
5……………No. 109
6……………No. 110
7……………岡東C表土剥ぎ

8……………No. 114
9・10・13・14・15……No. 119
11……………No. 124
12・16・17・18……No. 125



19……………岡東B表土剥ぎ



21



20……………No. 124
21・22……No. 125



22

1. 岡東地区出土遺物



6



2



7



3



4

- 1 岡東B以東柱穴
2 No. 120柱穴
3・4 No. 124
5・6・7 No. 125床面

1. 岡東地区No. 120・124・125出土遺物

図版140



- 1 No. 161
2 + 3 天王C 東端2層
4 No. 158
5 岡東B 地区表採
6 No. 151
7~10 天王C 東端1層

1. 岡東B・天王C北地区No. 151・161出土遺物



No. 170 - 18

No. 170 土壌	No. 172 土壌
No. 171 土壌	No. 175 土壌
No. 171 土壌	No. 175 土壌
No. 171 土壌	No. 214 土壌
No. 172 土壌	



No. 172~2



No. 171



No. 171-18



No. 171



No. 172~1



8



9

No. 175



3



4



5



6



7

No. 175



1



5



3



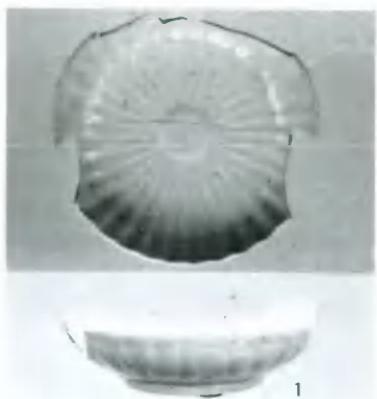
4



2

No. 214

図版142



1



2



3



7



10



4



5



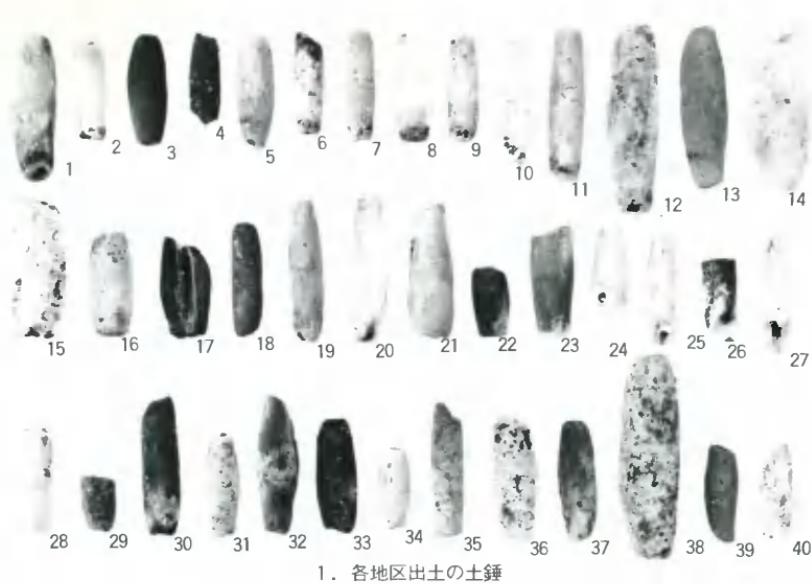
9



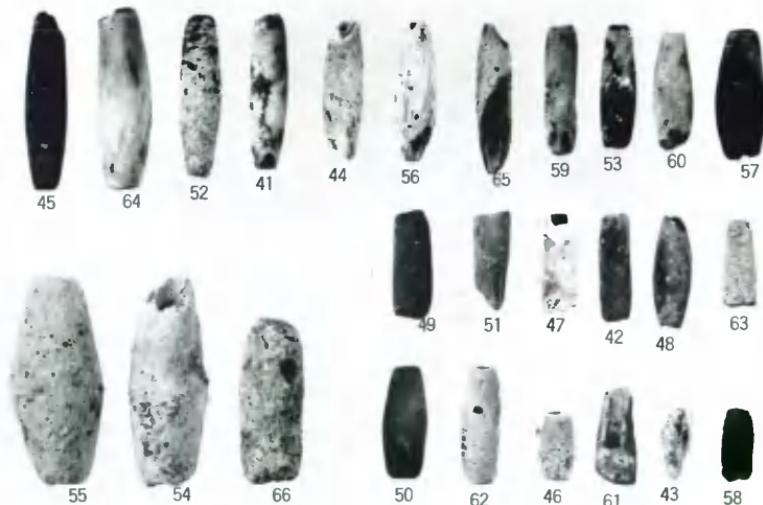
8



1. 天王C南地区No. 175土壤出土遺物



1. 各地区出土の土錘

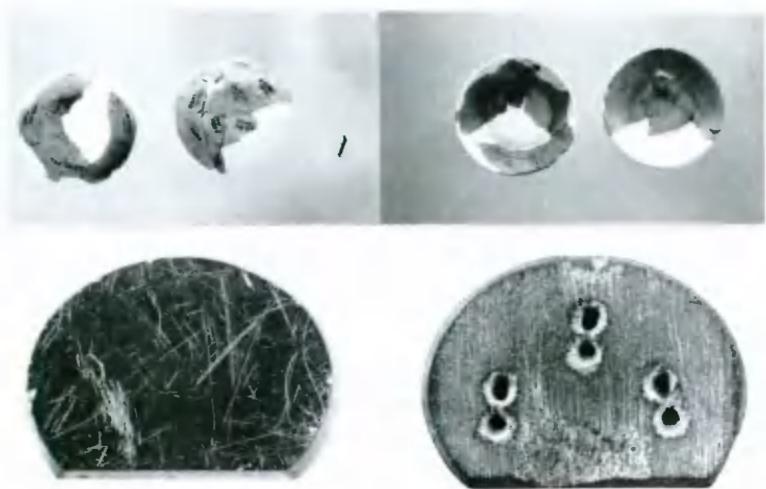


2. 各地区出土の土錘

図版144



西宮峪Pit	No. 4 井戸
No. 6 柱穴	No. 13 土壙墓
荒神元B地区	
天王D地区石帶	



1. 各地区出土遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（28）

二 宮 遺 跡

昭和 53 年 9 月 印 刷

昭和 53 年 9 月 発 行

発 行 岡山県教育委員会

印 刷 岡山県出納局用度課